
零崎夕識の人間生活

一条ツカサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎夕識の人間生活

【Nコード】

N4565K

【作者名】

一条ツカサ

【あらすじ】

人類最強の請負人哀川さ……潤さんの命により、僕は不戦の約定が結ばれた古いアパート『五月雨荘』にやってきた。そこで待っていたのは、とある揉め事処理屋と一人の少女が織り成す事件。つまり、我が親愛なる戯言遣いの周りに起きる事件クラスの、素晴らしき厄介事だった！零崎一賊の出来損ない、零崎夕識が奏でる、戯言x紅・kure-naiのクロスオーバー！モバゲーにあった小説をこちらに移動させたものです。

プロローグ（前書き）

今回は戯言&人間シリーズ×紅・kure-naiシリーズのコラボです。

注意事項。

- ・両シリーズにおいて、原作での死亡者が生きている場合があります。
- ・時系列はクビシメロマンチスト終了直後。
- ・オリジナル展開あり。

及ばぬ所はあるかも知れませんが、少しでも楽しんで貰えれば幸いですm (_) m

プロローグ

「それじゃあ、みいこさん。お世話になりました」

「ああ、たまには遊びに来いよ」

鉄扇を弄びながらみいこさんが言う。

「他の奴等には挨拶したのか？」

「えっと、萌太君、崩子ちゃん、荒唐丸さん、七々見さんにはあいさつしたんですけど……、いー兄だけいませんでした」

「何？ まったくあいつは。別れのあいさつくらいすりゃあいいものを」

「あはは、いいですよ。いー兄はいつもそんな感じでしょう」

「つーか、さっき哀川さんに拉致されてたし。多分、また面倒事に巻き込まれてるんだらう。」

去り際に哀川さんが言ってたけど、確か澄百合高校に行くって言うてたな。

「まあ、あいつには帰って来たら、よろしく言うておくよ」

「わかりました、お願いしますね。では、またいつか」

「ああ、またいつかな。夕介」

手を振りながら、みいさんと別れる。

感傷に浸るのは柄じゃないが、まあ悪い気分じゃない。

僕は荷物を片手に、骨董アパートを後にした。

目指すは新たな住まい、五月雨荘。

僕こと、緋色夕介の急な引っ越しが決まったのは、骨董アパートにある僕の部屋を、人類最強の請負人、哀川潤さんが来たところから始まる。

「よお、夕ちゃん。お前、引っ越す気ねえか？」

訪ねて来て早々、哀川さんはそんな事を言った。

「引っ越し、ですか」

「そ。引っ越し」

「何でまた急に、引っ越しなんですか？」

「まあ、引っ越しっつーのは建前だな。正確には、その引っ越し先にいられてーんだ」

「つまり、哀川さんの仕事に関係した事なんですね」

次の瞬間、僕の頬を鉄拳が掠め、後ろにある壁に、風穴が開きました。

「あたしのごとは名字で呼ぶなって言っただよな？」

「は……、はい。潤さん」

僕はひきつった顔で詫げる。気を取り直してもう一度。

「えっと、潤さんの仕事からみなんですね？」

「ああ、あたしの知り合いからの依頼でな。とにかくそこにもいらいたいんだそうだ」

「だから、潤さんの代わりとして僕ですか」

「そ。あたしもこう見えて多忙だからな。引き受けてくれるか？」

「……聞くまでもないでしょう?」

僕は苦笑しながら言う。

「引き受けますよ」

僕は哀川さんとある取り決めをしている。その《契約》が有る限り、僕にとって哀川さんの依頼は絶対なのだ。

「助かるよ。夕ちゃん」

「契約ですから それにしても、中々普通の生活ってのは出来な
いもんですね」

「お前がそれを言うかよ。殺し名序列三位、ナイトメアドリーム深淵夢想、零崎夕識」

そうやって、二人で笑いあったのが数日前の事。
そして現在に至るわけだ。

電車に揺られて数時間。

僕は目的地である場所、《五月雨荘》の前にいた。
んで、第一印象。

あんま骨董アパートと変わんねえ。

いや、造形はあまり似てない。骨董アパートほどボロくないし。似てるのは雰囲気。此所はただの住まいじゃねえぜ気を付けなあって感じのオーラが漂っている。

哀川さんに聞いた話だと、《不戦の約定》とかいう如何わしい決まりもあるらしい。

これで住人まで変わり者だったらパーフェクトだ。少し畏縮しながら、僕は石造りの門をくぐり抜けた、

時だった。

「おや、見慣れない顔だな」

頭上から声が聞こえてきた。

肩を振るわせて、上を見ると、近くの木の枝に、女性が座っていた。

（はい、変わり者キター）

僕がそう思うのも無理はないだろう。
何せ、その女性の格好ときたら、上から下まで黒ずくめ。首には下
ク口の飾り。極めつけは膝に座らせた黒猫。
いわゆる魔女の格好だったのだ。

「一体、何の用かな？」

「あ、新規入居者です」

その格好に引きつつ、僕は言う。

「ほづ。名前は？」

「ぜ……、いや、緋色夕介です」

本名言おうとしちった。

「そうか。私は闇絵。この猫はダビデだ。よろしくな、少年」

「あ、はい。こちらこそ」軽く会釈して、僕は五月雨荘にある自分の部屋へと向かった。

僕の部屋は二号室。

管理人とは哀川さんが話をつけてくれたはずだから、そのまま入居が認められる手筈だ。

部屋の中は六畳の床に台所。トイレは確か共同だった。

今はまだ何も無いが、必要最低限の物は、今後買い足そう。

僕は背負ってきたバッグを手放し、床に寝転がった。

「……初っぱなから、怪しい人に会っちゃったなあ」

他の住人がどんな人なのか、想像できない。

例の《不戦の約定》に加え、入居条件に『他の部屋で何が起ころうと干渉するな』なんていうのがあったから、覚悟はしていた。

だが、あくまでも哀川さんの依頼はここに居る事。

だからそこまで面倒にはならないと思っていたのだ。

しかし実際は。

「哀川さん、予想以上に面倒臭い事になりそうです」

まあよく考えれば、あの人がからむ所に、アブノーマルじゃない所

なんてないけどさ。

ここに来るきっかけとなった人物に、愚痴をこぼし、僕は長旅で疲れた眼を閉じた。

他の住人がなるべく、普通の人であることを願いつつ。

コンコン。

ドアのノック音で、僕の意識は覚醒した。

「…………ふぁーい」

重い頭に鞭打って、体を玄関まで引きずる。

ゆっくりドアを開けると、そこにはジャージ姿の女性がいた。

大学生くらいの年代で、髪を僕同様に後ろで縛っている。

さっきの闇絵さんとは対称的に、快活なイメージだ。

突然の来訪に顔をしかめる僕に対し、その人はにこやかな表情を浮かべる。

「君が緋色夕介君？」

僕がそうです、と答えた次の瞬間。

「可っ愛いー！」

「ッ！」

抱きつかれました。

「もー！ 闇絵さんに聞いた通り、可愛い過ぎ！ 顔も綺麗だし、声も細いし！」

「ちよっ！ 痛いです！痛いです！離してください！」

僕の抗議も空しく、その人は三分くらい離してくれなかった。息も絶え絶えな僕に対して、この女性は呑気な笑顔を浮かべ続けている。

「あたしは、六号室の武藤環。これからよろしくっ！」

「はあ……、よろしくお願ひします……」

未だに心臓が鳴り止まない。

闇絵さんに引き続き、すげえ人がいるもんだ。

「さ、行きましょうか！」

「は？」

何処に？ と聞く前に、環さんに腕を引っ付かまれた。ぐいぐいと僕の腕を引っ張りながら、環さんは、建物の二階に上がっていく。

「ちょっと！ 何処連れてくんですか！」

「んー？ 決まってるじゃない。夕介君の歓迎会よ」

そう言つて、環さんは五号室と書かれた部屋の扉を開けた。僕の部屋と変わらないスペースの部屋。中央に、鍋一式の置かれたテーブルがあり、その前に闇絵さんがいた。

「やあ、夕介」

「あ……、どうも」

「ほらほら、ぼさつとしないで、座った座った座った！」

いつの間にか机に鎮座している環さんに促され、僕も机の前に座っ

た。

「環さん。もう少し普通に連れて来られないんですか。叫び声の上まで響いてましたよ」

台所の方から、エプロンを着けた少年が出てきた。

歳は僕と同じくらい。温和そうな顔立ちに、平均的な体格。あまり目立たなそうな印象だ。

恐らく、この部屋の持ち主なのだろう。

「大丈夫よ。任意同行だからさ」

環さんはいけしゃあしゃあと言う。あれのどこが任意同行だ。

僕の心の声を知ってか知らずか、少年は僕を気遣うように言う。

「ごめんね。大丈夫だった？」

「うん。まあ、ビックリしたけど大丈夫」

感謝の意をこめつつ、少年に笑いかける。

少年も、優しいな笑みを浮かべた。

「俺は、紅真九郎。よろしく。夕介君」

「僕は、緋色夕介。よろしくね。真九郎君」

それから先は随分と騒がしい食卓だった（と言っても環さんが、一人でハジケまくってたと言う見方もできるが）。

「でね、その時円ちゃんがさあ」

何か真九郎君は、半分酔いの回った環さんに絡まれてるし、闇絵さんはマイペースに食事してるし、何だかみんながみんな、好きな事をしている感じだった。

その様子に苦笑しながら、僕は闇絵さんの黒猫、ダビデに豆腐を食べさせていた。

ゴロゴロと喉を鳴らす姿が何とも愛らしい。

「そう言えば、夕介君は高校は行くの？」

環さんが聞いてくる。

「はい、もう明日から通い出すと思います」

哀川さんが「せっかくなんだし青春を満喫しておけ」と、あの人に
しては珍しい計らいをしてくれたためである。

「へえ、何処に通うの？」

「えつと……、確か星領学園だったかな」

「あら！ 真九郎君と一緒にじゃん！」

「えつ、そうなの？ 真九郎君」

「うん。その星領学園の一年」

おお、身近に同じ高校の人がいた。

「そっかあ。じゃあ同じクラスになれるといいね」

そうだね、にこやかに返す真九郎君。

それに合わせて、僕の隣のダビデがニヤーと鳴いた。

いや、最初こそ不安だったけど、案外楽しく暮らせるかもしれない。と、その時の僕は思っていた。しかし、その時点で気付くべきだった。

《零崎》である僕の人生が、波乱万丈で無い筈がないと。

学校は出会いの場

「えっと、京都から来ました、緋色夕介です。これからよろしくお願ひします」

星領学園一年一組にて。

テンプレートな自己紹介をし、僕のクラス編入は滞りなく終了。
その後、クラスメイトのみんなに、例によって例の如く、質問攻めにあい、
それらに答えている内に、いつの間やら昼休みになってしまった。

購買で適当に昼食を買って、今僕は真九郎君と、生徒さん方の声でざわめく廊下を歩いている。

「クラスはどう？ 馴染めそうかい？」

真九郎君が口火を切る。

なんやかんやで、真九郎君とは同クラスになりました。

「うん、どうにかな。可もなく不可もなくってと」

「五月雨荘の人達に比べたら、全然普通だし」と言ったら、真九郎君に苦笑された。

その笑みを見て、ふと思った。

真九郎君はこうして、普通に高校へと通っている。

立ち振舞いも、《表》の人間のそれだ。見た感じ、あんな異常な雰囲気の漂う場所に住むような人には見えない。

(何か、理由があるのかな……)

そうこう考えている間に、目的地に着いたようだ。

真九郎君は、一つの部屋の前で立ち止まっている。ドアのプレートには新聞部の文字。

僕は首を傾げた。

「あのお、昼飯食うのに何でわざわざ、新聞部に来たの？」

「うん、昼飯がてら報告しなきゃいけない事があったさ」

「何の報告？」と聞く前に、真九郎君は扉を開けていた。

「ノックくらいして」

中から聞こえてきたのは、不機嫌そうな、女の人の声。

「自分の部屋みたいだな」

「ここは、あたしの部屋よ。知らなかった？」

そんなやり取りの後、真九郎は扉を閉め、律儀にも扉をノックした。中から「どうぞ」との声がして、僕らはようやく中に入れた。

何と云うか、殺風景な場所だった。機材は、本棚と、机が幾つかあるだけ。その上には、今日の新聞がほぼ全紙、揃っておかれている。僕が辺りを見回していると、奥のパソコンの前にいた人影が此方を振り向いた。

「……誰？」

度の強そうな眼鏡の奥にある瞳が、怪訝そうに揺れた。

「緋色夕介君。今朝見ただろ？」

真九郎君が言ってようやく、その子は「……ああ、転校生の」と呟

く。

「村上銀子よ。よろしく」

「あ……、うん。よろしく」

剣呑な感じの子だなあと、心の中で呟き、真九郎君に習って手近にあつた机に座る。

「あんたにしちゃあ珍しいわね。殆んど初対面の人間と、もう仲良くなるなんて」

「いや、初対面じゃないよ。夕介君、五月雨荘に引っ越してきたから」

「……成る程ね」

そう言つて、銀子ちゃんは、菓子パンを頬張つた。

「それで？ 昨日の件は片付いたの？」

「ああ」

真九郎君は何か言おうとしたようだが、僕の方を見て、口をつぐむ。

何か聞かれたくないことなんだろうか。

「あはは、だいじょーぶ。誰にも言わないからさ。それに、僕だって、そう言う話と無縁じゃないから」

無縁どころか、めっちゃくちゃ関わり深いんだけどさ。

……あの《人類最悪》の狐には及ぶべくも無いけれど。

そこから真九郎君の語った内容は、確かに一般人には聞かれな
い方がいい事だった。

どうやら真九郎君は、揉め事処理屋なる職業を営んでいるらしい。

揉め事処理屋、簡単に言えば何でも屋。

様々な依頼を引き受け、それをこなしていく仕事。請負人と似たよ
うな感じだ。

まあ、真九郎君は哀川さんほど、手広くやっているわけじゃないよ
うだが。

事実、今回の仕事内容は引ったくり犯の捕縛。

銀子ちゃんには、情報を提供してくれた相手への義務として、報告をしに来たらしい。何でも、銀子ちゃんは、裏社会で有名な（僕は知らなかったけど）情報屋のお孫さんなんだそうだ。

幼なじみという事もあってか、真九郎君のサポートをしているとの事。

「仲良しなんだね。銀子ちゃんと」

一通り聞いて、僕は真九郎君に言う。

「……………」

「……………いや、ごめん」

真九郎君と銀子ちゃんの間には、気まずい空気が流れたのを感じとり、僕は慌てて謝罪し、昼食に戻る。

しかし。

（揉め事処理屋ね……………）

また因果な商売やってるな、真九郎君も。
近くにあった新聞を読みながら、僕は思う。

そういう何でも屋みたいな仕事は、得てして、誰かの代わりに何かをやる職業だ。

真九郎君みたいに、狭い範囲ならまだマシだろう。

だが あの《人類最強の請負人》であれば、
それはどれだけの負担を要するのだろう。

……なんて。

「 戯言かな。いー兄」

人兄がいれば、「傑作だろ」と言われるだろうが。
そんな事を考えながら、昼休みは過ぎていった。

昼食後、僕達は教室に戻ろうと、廊下を歩き、階段を降りていた。

そして、踊り場に差し掛かった時、一人の女生徒が目に入った。

ロングヘアーに柔らかな顔立ち。謹み深い印象を受ける。
僕に、女性の良し悪しはわからないが、多分美人に入るんじゃないかな
らうか。

「あら。真九郎さん」

「タ乃さん」

どうやら知り合いらしかった。

いや、どうでもいいけど真九郎君。君、周りの生徒から、嫉妬目線
向けられてるけど気付いてますか？

「奇遇ですね。これから真九郎さんに会いに行こうと思ってたんで
すよ」

そう言っつて、何やら紙袋を真九郎君に渡した。

「これ、お母さんから。差し入れです」

「……わざわざ、すみません」

「何言ってるんですか。真九郎さんは私達の家族同然でしょう。困
った事があつたらだんだん頼ってください」

いちゃつくんなら外でやれよこの場にいる僕が息苦しいわと、僕は思ったと言わなかった。

ここでようやく、夕乃さんという人がこちらを向く。

「あら？　こちらの方は？」

「あ、転校生の……」

「緋色夕介です」

真九郎君の言葉に続かせる形で、僕が言う。

夕乃さんが優しいな笑みを浮かべる。

「初めまして、夕介さん。私は崩月夕乃です」

ふーん。無駄に名前が被つとるな。

キャラ立ちには興味無いけれど。

って。

「崩月？」

つい、口から声が漏れた。慌てて口を閉じるが、時既に遅し。夕乃さんは、僕の反応から、不審さを感じ取ったらしく、顔に先ほどの笑みとは打って変わった、警戒の表情を浮かべている。

「……あなた、何者ですか？」

怖い、空気が張り詰めている。

こんな空気、《表》の人間に出せるわけない。

これで同姓って線は消えたな。誤魔化そうにも、僕は戯言遣いでは無い。

それ以前に、この人。戯言殺しみみたいな雰囲気漂わせてるし。

僕は抵抗を諦め、話し出す。

「失礼しました。《崩月》の人だったんですね」

「……どの《家》の方ですか？」

随分と遠回しな言い方だなあ。周りに一般人いるし、当たり前前ちゃあ当たり前だけだ。

ま、どちらにしろ、僕は《裏十三家》じゃないけどね。

「……《零崎》。零崎夕識ですよ」

「《零崎》……、殺し名ですか」

その後、真九郎君を先に教室へと（夕乃さんが強制的に）向かわせ、僕は人気の無い所へ移動した。

あんな場所で話すべき事では無いし、夕乃さんが真九郎君を連れてこなかったのを見ると、彼にこの話を聞かれないらしい。

一応理由を聞くと「まだ話すべき時ではありません」とのこと。今は、と言うことは、《いつか》は話すつもりなのか。

となると、やはり彼も崩月の人間なのだろう。門弟、というのが妥当な線か。

（ それにしても ）

なんとも奇怪な光景だ。

殺し名に名を連ねる《零崎》と裏十三家に名を連ねる《崩月》が顔を合わせるとは。

裏十三家、それらは九鳳院、麒麟塚、皇牙宮、これら表御三家と対を為す、かつて裏社会に絶大な影響力を持った、歪空、墮花、斬島、円堂、崩月、虚村、豪我、師水、戒園、御巫、病葉、亜城、星啖の十三家の総称だ。

僕らの概念でいくと表御三家は、《財力の世界》にあたり、裏十三家は殺し名と同じ、《暴力の世界》にあたる。

裏十三家は殺し名と違い、今はその半数が廃棄、または断絶しているらしいが、その戦闘能力は殺し名に匹敵するらしい。

そして、目の前にいる女性が、裏十三家が一角、崩月の人間であるのは、もはや疑いようのない事実だった。

「それで」

夕乃さんが剣呑な表情のまま言う。

「一体何が目的なんです？ 《零崎》を始める事ですか？」

「目的と言われても……」

無いよなあ。哀川さんに頼まれて来たただけだし。僕が言いよどむと、夕乃さんがふっと息をつく。

「まあ、零崎の方に、理由はありませんか　殺し名の中でも異端中の異端　理由無く人を殺す。家族のようにある《殺人鬼》」

「家族じゃありません。家賊ですよ」

そこだけは履き違えてもらっては困る。

零崎は血縁では無く、流血によって繋がっているのだから。

「それに、僕は《零崎》をする気はないですよ」

「は？」

夕乃さんは、訳がわからないようだった。

ま、当たり前か。零崎の殺人は性さがだからね。殺す殺さないの選択は無く、ただ殺すだけ。

だが、僕の場合、それは少し形を変える。

「僕はね。《零崎》の衝動を抑えられる零崎なんですよ」

「そんな方が、いるものなんですか？」

「いませんよ、僕以外はね」

「一番僕に近いのは、曲兄なんだろうけど、抑えられるっていうのは、少し違うだろう。」

「だから、僕は零崎の中でも異端なんですよ。《殺さない》の選択が出来る零崎なんて前代未聞です。おっと、勘違いしないで下さいよ。それでも僕は確かに零崎です」

双兄、あの自殺志願マインドレンデルの理屈で言うなら、《殺せる人間》という奴か。いや、違うな。《殺せるけど、殺さない人間》か。

「ま、とにかく安心して下さいよ。少なくとも貴女も含めた、真九郎君の周りにいる人間には、手を出しません」

「少なくとも、と言う事は、《零崎》をしないわけじゃないという事ですか？」

「そりゃそうですよ。《零崎》ですもん。しかし、それをするにも条件があるんですよ」

「条件？」

「xxxxxxxxをxxxxxxxxとした人間以外殺さない」

夕乃さんはそれを聞いて、驚愕に近い表情をした。

「真九郎君とは会ったばかりですが、見た感じ、彼らとその周りにいる人達は、その範囲にはいりっこなさそうですし」

「その話、信じられるだけの根拠はありますか？」

「そこはもう、信じてもらうしかありませんが、そもそも、僕がマトモな零崎なら、とっくに貴女を殺してると思いますよ」

「……わかりました」

そう言っつて夕乃さんは、警戒を解いた。

「今のところは、貴方の言葉を信じてみましょう」

「助かります」

僕も裏十三家とのいざこざは避けたい。

《崩月の戦鬼》の力は怖いらしいし。

いや、勝ち負け以前に、ここで騒ぎを起こそうものなら、哀川さんにボコられる。

「ただし、あなたがその禁以外で、誰かに《零崎》をしたら」

僕はその夕乃さんの声音に、「特に真九郎さんに」という言葉がダブった気がした。

「わかってますよね？」

「……はい」

怖い。そのブラックな笑みが、滅茶苦茶怖いんですけど。

そんな僕をよそに、夕乃さんは打って変わって、優しげな笑みを浮かべる。

そして「それでは、また」とだけ言って、去っていった。

俺は溜め息をつく。

何か、こっちに来てから、真九郎君くらいしか、まともな人間に会った記憶がないんだけど……。てかみんなキャラ濃いんだよ。全員、スピノフで主役張れるって。

哀川さん、貴女は誰に、どんな依頼を受けて、僕をここによこしたんですか？

こんな、何か起こるとしか思えないような場所に。

「最初から最後までクライマックスってか……」

ぽつりと言ったパロディネタも、風の音に流されていく。

ツッコミすらないのは嫌だな。このネタ知ってる奴が、この高校に何人いるか知らないけど。

そこまでで、僕は考えるのを止めた。

起こるものはどうやっても起こる。考えるのはそれからでも遅くないだろう。

「戯言、か……」

時計を見ると、休み時間終了が近づいていた。

僕は教室に向かって歩き出す。

「何も起こらなきゃ、それが一番だけどね……」

そして、一人の少女により、僕の予感は的中する事になる。

帰宅道中はイベントいっぱい

静かな河原を一人歩く僕。

あの後、真九郎君には悪いが、僕は一人で帰らせてもらう事にした。多分、《零崎》や《崩月》の事、聞かれちゃうだろうし。

もっとも、真九郎君の仕事があるらしいから、どのみち一緒には帰れなかったのだが。

確か、夕子の悪いストーカー被害にあっている女性を助けに行くとか。

「しっかし、真九郎君、妙に女性に縁があるんだなあ」

銀子ちゃんといい、夕乃さんといい。

そのくせ、恋愛には興味が無い、というか疎いみたいだから、いざって時に、変な勘違いしそうだな。

言ってみれば女難の相が出てる感じ。

一番面倒くさいよな、恋愛運はあるのに、それに気付かないのは。

銀子ちゃんも夕乃さんも大変だ。あの手のタイプは、急に出てきたダークホースにかっさらわれる事があるからな。

頑張ってくれたまえ、お二人さん。

「……って、掛け値無しに戯言だろ、これ……」

柄にもなく、何で僕は他人の恋愛事情に首突っ込んでんだ。早く帰ろう。そして今考えてた事を思い出の1ページにして焼却処分しよう。

しかし、歩く足を早めようとした矢先、ポケットの携帯電話から軽快なリズムが聞こえてきた。

誰だろ。とディスプレイを見る。

そこにあっただ名前は、

「……うっわ」

《零崎双識》。

ニアイコール、《変態》。

切るか切らないか本気で迷ったが、結局僕は通話ボタンを押した。急ぎの用だったらアレだし。

「……もしもし」

『やあ、夕識君！　うふふ、元気そうだね！』

「双兄もね」

聞こえてきたのは、最後に聞いた時と、なんら変わらぬ兄の声。
てか、無駄にテンション高いな。あ！　ひよっとして、電話の用件
ってあれか。

以前知り合ってたっていう、澄百合の女の子と進展があったかなんか
して、その自慢話の類いか。
それはまずい。実にまずいぞ。その手の話を双兄に語らせれば、五
時間は解放してもらえない。

早期決着！

「んで、何の用？　下らない用件なら切るよ」

『やや！　久しぶりに聞いたお兄ちゃんの声を前にして、その冷たい
態度！　ああ、そうか！　今流行りのツン』

「早く用件言いやがれ」

電話先の人間を、音で操る方法はないものか。今度曲兄に聞いてみ
よう。

『ふう……、わかったわかった。じゃあ手短に言っよ』

「助かるよ」

『実はね……』

変に含みを持たせて、双兄が言った。

『妹が出来ました!』

うん、切ろう。

携帯を軋んだが、僕は寛容な心を持ってして、電話を切るのを必死に抑えた。

《零崎》抑えるくらい難しいんじゃないかなろうか。

双兄の話は、何というか、報告に近かった。

人兄こと、生まれながらの殺人鬼、零崎人識を探す傍ら、無桐伊織という、新たな零崎に出会った事（零崎舞織だったか）。

その際、殺し名一位、《匂宮》の分家、早蕨と戦闘になった事。

それらが全て、《匂宮》の対極である呪い名一位、時宮の計画であった事。

その戦闘後、その舞織ちゃんを、人兄に預けた事等々。

「へえ……大変だったんだね。双兄」

『全くだよ。未だに右脇腹が痛いし、血が足りなくてフラフラだ』

「肉を食せ肉を。ただでさえひよろっちい体つきなんだから」

『そう言つた識君もやせ形だろう。ちゃんとバランスよく食事はしないかね』

「ははは、違うない　そいで？電話の用件は報告だけ？」

『いや、まだあるぞ。まあ、私としては、可愛い妹である、舞織ちゃんの自慢話をしたところなんだがね』

やっぱりかい。まあ、前から妹が欲しいとか言ってたけどさ。

『　　時宮と手を組んでいた早蕨が、まだいるらしいんだよ』

「え？つまり、その早蕨の二人以外にも、兄弟の復讐企んでる早蕨がいるって事？」

『ああ、私達が兄弟を殺したとも知らずに、今尚、零崎を殺そうとしている　それが妹の復讐かどうかは知らないがね』

ふうん、律儀なもんだ。気持ちには分からなくもないけどさ。

『その早蕨は、一人で行動していたらしいんだが、《空繰人形》も何人が連れている。《操想術》自体は時宮が死んでも、数週間は有効らしいから、まだアクションを続けているとみて間違いないだろう』

「……その言い方だと、ひょっとしてその早蕨、僕のいる方に来てるって事？」

双兄は、僕が哀川さんの依頼でここにいるのを知っている。心配してくれたのかな。

『ああ。だから警戒するようにと電話を掛けたわけさ』

成る程、報告じゃなくて忠告か。

本当、頭が下がるよ双兄。貴方の家賊思いにはさ。

「ありがと双兄。わざわざごめんね」

『うふふ、何を今更。いつも言ってるだろう。《零崎は家賊を見捨てない》んだよ』

「だね」

いいな、家賊って。僕は至極当たり前の事を、とても愛しく思った。

「じゃあ、そろそろ切るよ。今度会ったら聞いてあげるよ。舞織ちやんとやらの自慢話」

『うふふ、それは楽しみだ。それじゃあ、またね』

またね。と返して電話を切る。

妙にいい気分だ。

夕乃さんに、僕達は家族ではなく家賊だと言った。

それは、正しいことだろう。血縁ではなく、流血によって繋がる殺人鬼の集まり。

けれど……。

「家族つてのも 悪くない」

なんて、曲兄風に言ってみたり。

そんな自分が可笑しくて、口からは堪えきれなかった笑い声が漏れた。

「さあて」

気を取り直して、僕は言う。これからどうするか。

双兄に聞いた限りでは、僕はそいつらに《零崎》を始められない。だから確実にハンディキャップを強いられる。

まして、相手は曲がりなりにも、殺し名の分家だ。しかも、殺し名一位の《匂宮》の、である。

「勝てるかなあ……」

正直自信が無いな。哀川さんに無断で、この街出るわけにもいかんし。

かなり前、人兄が中学の頃、匂宮の秘蔵っ子と何度か殺し合った事があり、僕もそのとぼちりを受けた。

初戦の結果は勝利だったらしいが、二回目以降はボロ負けだったよ。うだ。

二回目の戦いを終えて帰宅した人兄が、「匂宮はやバイ」とぼやいていたのを思い出す。ちなみにその時、人兄は『唇』を、妙に押さえていたのだが……。

……うん。これは触れちゃいかん部分だろう。

とにかく、人兄をそこまでにする《匂宮》の分家。それに対しての

ハンディキャップは正直辛いのだ。

「まあ、それでも」

やるしかないけどな。そう心の中で呟き、僕は河辺の橋の下で、立ち止まった。

くるりと振り向くと、そこには死んだ魚のような目をした、重大の男女グループがいた。ざっと二十人つてとこか。

そいつら《全員》が口を揃えて言う。

「零崎一賊の者だな？」と。

「噂をすれば影、か。冗談じゃないな」

しゃーない。諦め半分に、僕は学生バツクの中に手を突っ込み、中敷きの下から、折り畳まれた深淵^{ナイトメアドリーム}夢想を取り出す。

瞬時にそれを鎌の状態に組み換え、ブレス部分を口に当てた。

「さあて、僕は君達を殺せないからな。加減はするけど、腕や足の一、二本は覚悟しときなよ」

《零崎》は始められないから、そうだな。

「どう言っとくか。」

「さて、それでは、一曲。間奏曲を、奏でよう。」

「ああ、しんど……」

ぐったりと河原に寝転がる僕の周りには、気絶させた空繰人形の山。

真面目な話キツかった。

弱りかけとは言えど、操想術がかかってるから、音で操りづらいし。二十人の攻撃かわしながら、それをしなきゃいけないし。加えてプレス無しでの演奏だ。酸欠にもなりますよ。

「……ま、とりあえず戦闘不能にはしたし。いいでしょ。」

次に目覚めた時、操想術が解けているかどうかは運次第ってことで。ようやく息苦しさが無くなった僕は、気だるげな足取りで帰路に付いた。

このまま、その早蕨を探しに行くのもいいが、面倒くさい。

待ってれば向こうからやって来るだろう。

(全く、あんな人形に頼りなつての。《零崎》出来ないじゃん)

本当に、我ながら面倒な枷を着けられたものだ。

いや、曲兄のように、衝動と戦わないだけマシか。曲兄、遊園地と
かに行くと、周りの光景が目の毒らしいし。

僕の場合、殺しは嫌いじゃないが、しかしてそれは娯楽と同じだ。

やれば楽しいし、やらなくても別にいい。

(娯楽と殺しを秤にかける事自体、根本的に間違ってるよな……)

零崎だから仕方がないで済ますのも悲しい話だけれど。

実際、このうざい枷だって、本当は外したい。前述の通り、零崎を
抑えられるからって、零崎をしたくないわけじゃないのだから。

とは言つても、それは不可抗力であり、何をしようがどうにもなら
ない話ではあるのだけれど。

「…………アホくさ」

今更何を考えているんだ。

こんな考える必要も、意味も無いことを。

「さくつと、帰ろう。早蕨、来るなら早く来てくれよ」

だが、そう言いつつも、僕の足が進む事は無かった。

歩き出す直前、気配を感じたからだ。同じ零崎特有の、濃く、淀んだ気配。

勘みたいものだから、詳しい場所は分からないが、そう遠くはない。この街のどこかだ。

「おいおい……、何でここにいるのさ……」

つたく、タイミング悪いな。

しかも、僅かにピリピリした威圧感がある。

戦ってるのか。

相手は、言うまでもないな。

「……あー、もう！」

そう言うのが早いか、僕は、人気のない河原を、全速力で駆け出していた。

んでもって、着いた先は町外れにあった廃ビル。

構造的に言って、ちょっと騒いだくらいじゃ、中で何をやっても分らないだろう。

しかし、僕には三階からの威圧感のはつきりとわかっていた。僅かだが、武器がぶつかる音もする。

「行くか」

僕は足を早め、廃ビルの中に入っていった。当然、深淵夢想は持ったまま。

階段を上がるにつれ、反響しながら聞こえてくる音が大きくなる。そして、三階にたどり着いた時、一番最初に目に入ったのは、十数人の空繰人形の死体。

よれた着物に、双剣を携えた青年。恐らく、こいつが例の早蕨だろう。

そして田舎っぽい服装に、麦わら帽子、そして右手には鉛製の釘バットを手にした。

「軋兄っ！」

僕の声に反応し、軋兄こと、零崎軋識と早蕨が此方を向く。

「夕識!？」

軋兄は本気で驚いた顔だ。

軋兄は僕がこの街にいるの知らなかったから、当然か。

「やつほー、久しぶり!」

そう言いながら、軋兄と早蕨の間に割って入り、早蕨へと深淵夢想を降り下ろす。

しかし、早蕨はそれを一本目の刀で軽々受け止め、二本目で僕に切りかかるようにする。

慌て、バックステップでそれをかわし、軋兄と並び立つ。

「うひゃー、危ない危ない。こりゃ軋兄が苦戦するわけだね」

「苦戦はしてねーっちゃ。互いに攻めきれないだけっちゃよ」

ああ、そう言えばこんなだったな。軋兄の口調。

「接戦ってトコ?」

「ああ、しかし夕識。お前何でここにいるっちゃ？」

「それはこっちのセリフだよ。とにかく、説明は後、ひとまずここを切り抜け」

そこまで言っつて、僕は軋兄の頬に目を留めた。

「……軋兄。それ、あいつにやられたの」

「は？」

「それだよ」

僕が指差す先には、真一文の傷があり、そこからちろちろと血が流れていた。

「ああ、大したことねーっちゃよ」

そう言っつて、血を拭う軋兄。

しかし、僕は逆に、体が冷めていく感覚に襲われた。

「あいつにやられたんだね」

僕は軋兄の傷から目を離し、早蕨へと目を向ける。何も言葉を発さず、ただ覗むように見る。

やがて早蕨が口を開く。

「……ぜ、ろ、ぎ、き、か」

言葉を区切り区切りに出しながらそいつは言う。

「さ、わ、ら、び、つ、る、ぎ、だ」

聞いてもいないのに、名を名乗られた。
早蕨、ね。

「ぜ、ろ、ぎ、き、が、ふ、た、り、か、ま、あ、い、い」

そう言って、刀を構え直す早蕨。

「ぜ、ろ、ぎ、き、は、こ、ろ、す。ゆ、み、や、の、か、た、き」

弓矢。ああ、確か双兄に聞いたな。時宮が人兄の姿使って殺した早蕨兄弟の妹。戦う目的は、双兄の言う通り、妹の敵討ちだったか。

でも、まあ。

「《どーでもいいよ。そんなこと》」

冷めた口調で僕は言う。

本気でどうでもいい。こいつの戦う理由が、妹のためでも、早蕨の名を上げることでも、どっちでもいい。

どころか、こいつへの興味自体失せた。

早蕨が怪訝そうに顔をしかめる。

「軋兄。下がってて。僕が殺るよ」

「夕識……けどお前」

さっきまで黙ってた軋兄が、慌てたように言う。

僕は淡々と言う。

「安心しなよ、負けないから。それに、知ってるでしょ。《僕が殺す条件》」

言って、軋兄は苦虫を噛み潰したような表情になりながらも、「わかった」と言って一歩下がる。

それを確認した後、僕は早蕨に向き直る。

「さて、殺るかい？」

鎌を構えて言う。

「最初は一応、事のあらましを説明して、交渉しようかと思ってたんだけどね……。残念ながら、君はもう手遅れらしい。わかる？君はもう《手遅れ》なのさ」

「な、に、を、いつ、て、い、る？」

「てめえは僕の《殺す条件》を満たしたって言うてんだよ、このボンクラ」

僕の言葉を聞いて、早蕨は、一歩後ろに下がった。気圧されたか、警戒したのか、それはあいつにしか分からないが。

「ははは、何だよ。急に弱腰になっちゃって。言っとくけど、今更何をやっても、僕の決断は変わらないよ？ 僕は双兄と違って、君達に同意もしてあげませんので」

僕は鎌をぶおんぶおんと振り回しながら、心を踊らせていた。

さあ、お集まりの諸君！ 久々の《零崎》だ！ 老若男女、容赦無し！ 殺して解して並べて揃えて晒してやろう！

何せあいつは 。

「さて、それでは、一曲」

僕はにたりと、口元に笑みを浮かべる。

「零崎を、奏でよう」

その一言を火種に、僕は奴に向かっていった。

何せあいつは。

《僕の大切な人を傷つけようとした人間》だから。

「あはははは！」

「ッ！」

口から哄笑を漏らしながら、鎌バーサス双剣の戦いは続く。

「あはははは！ どーしたどーした！ 双剣自慢の対応力は何処吹く風か！？ 宝の持ち腐れだなあ、人兄の方がまだうまく使えるよ！」

部屋に絶えること無く、がきん、がきんという鎌と双剣の衝突音が響いている。

全く、蓋を開ければこの程度か。

早蕨は見事に僕の攻撃を受け切っているが、顔に焦りの色がある。

「ほらほら、このままだと、会ったばかりでさよならで……」

とそこで、僕は口を閉じざるを得なかった。

「ッ！」

「な、め、る、な！」

急に足に激痛が走ったからである。

見ると、左足が撃ち抜かれていた。血がどくどくと流れ続けている。早蕨の方を見ると、二本あったはずの剣は柄の部分で繋がりに、両刃の薙刀となって、奴の左手に。

そして右手には。

「銃……！？」

そう、早蕨の右手には、リボルバータイプの拳銃があったのである。

「ちょっとちょっと……、和服着てるくせに銃はないだろ……」

だが、これはかなりの有効打だ。今時、零崎を銃で殺せるなんて思っている馬鹿はいない。

そう、《いるわけない》という心理を利用したい作戦だ。

まあ、一度限りのビックリトリックだが。

「は、は、は。ど、う、し、た、ぜ、ろ、さ、き」

「笑い声くらいは、繋げた方がいいと思うよ　しかし」

僕は痛む足に鞭打って、立ち上がる。

「確かに、少しなめてたな　悪かったね、早蕨劔　しかし、もう終わりだ」

「な、ん、だ、と?」

リボルバーを向けたまま、早蕨が言う。

「ま、け、お、し、み、か?そ、の、あ、し、で、は」

「動けない　確かに。さっきみたいにソニック・ザ・ヘッジホッグもビックリのスピードは無理だね」

「な、ら、ば」

「何故かって?　そりゃあアレだよ　《動く必要がない》からさ。
《武器を落とせ》」

僕がそう言った途端、早蕨は、リボルバーと薙刀を地面に落とした。

「な、に!？」

早蕨は瞠目していた。だが何をしようと、彼は何も出来ない彼の体の指揮権は、僕にあるのだから。

「き、さ、ま、な、に、を」

「何って、決まってるだろう? 聞かせてあげたんだよ 僕の音をね」

僕はここで、してやったりの表情を浮かべてやった。

「お、と、だ、と? で、は、き、さ、ま。お、と、つ、か、い、か!」

「そう、僕の深淵^{ナイトメアドリーム}夢想。見た目は鎌なんだけどね。実際には横笛に刃が付いた形状なんだよ」

そう言って、僕はブレス部分と、柄についた穴を見せる。

「これで音を出すんだよ。楽器だと分からないのが利点なんだけど
武器の形状から《石皿》の人間と間違えられるんだよね 困
ったもんだよ。僕は髪の毛の三本線がコンプレックスの死神でもなければ、
退屈しのぎで死のノートを落とす死神でもないのに」

「ま、て！お、か、し、い、ぞ！」

突っ込み無しかい。軋兄くらいは突っ込み入れてくれると思ったの
だが、軋兄はこちらを静観するだけ、つまらん。

「き、さ、ま、は、そ、の、ふ、え、を、ふ、い、て、い、な、か
つ、た、は、ず、だ！」

「あれれ？ 知らないの？ 《横笛はブレス部分が風に当たっただ
けでも鳴るんだよ？》」

「！」

「そう、キミは僕の攻撃をさばくのに夢中で、気が付かなかっただ
ろうけど、ちゃんとキミの耳には届いてたようだね いやいや、
何分音が小さいからさ。操るのに苦労したよ」

万が一、音が届かなくとも、声で操作は出来ただけけれど、これは
内緒。

死に行く人間に教えても無駄だし。

足を引きずりながら、早蕨の前に行き、鎌を振り被った。

早蕨の顔は、恐怖と憤怒と悔恨が入り交じっている。

「あ、一つだけ言ってあげよう」

そうして僕は、最上級の嫌みを言った。

「ご兄弟、お気の毒に」

その言葉と、早蕨の体が二つに別れるのが同時だった。

「痛たたた……」

「ほら、しゃんとするっちゃ」

帰り道、軋兄に手当してもらった足の痛みに悶えながら、僕らは並んで歩いていた。

軋兄は、釘バット、シームレスパイアス愚神礼賛の入った鞆を背負っている。

「……まあ、自業自得か。軋兄なら、一人で何とかしただろうし。ごめんね、ちょっかいかけて」

「いやいや、結構助かったっちゃよ？ 接戦だったのは事実だったっちゃからな」

「嘘つかないですよ……シームレスバイアス 愚神礼贖零崎軋識。明らかに動き鈍かったじやん」

それを聞いて、軋兄はばつの悪そうに笑った。

「レンの事後処理の帰り道だったっちゃよ」

「双兄の？《報復》かい？」

「ああ、しかし、思ったより手こずったっちゃからな……、気を抜いてた所を襲われたんだっちゃ」

……双兄のしわ寄せが来たって見方も出来るな。
じゃあ軋兄がここに来たのは偶然か。

「さっき電話で双兄にも言ったんだけどさあ……大変だったね」

「ん？レンと話してたっちゃか。まあ、今回は仕方ねーっちゃよ。夕識。レンから聞いたっちゃか？」

「うん、新しい零崎の話でしょ？」

「そうっちゃ、その時のいざいざで、レンは今動けないっちゃから

な。事後処理はきっちりしとかないといけねーっちゃ」

「じゃあ、早蕨の事も知ってたんだ」

「ああ。まさか、こんな場所で襲われるとは思わなかったっちゃが
あ、そう言えば、結局夕識は何でこんな所にいたっちゃか？制
服まで着て。レンの指示っちゃ？」

「うんにゃ、死色の真紅の命令だよ」

軋兄は露骨に顔をひきつらせる。

「そうっっちゃか……夕識。まだ言えないっっちゃか？」

「……ごめん。まだ駄目なんだ」

居心地が悪くなり、僕は俯いた。

双兄と軋兄は、僕が哀川さんを手伝っているのは知っている。だが
何故、僕が哀川さんを手伝っているかは知らない。
言えない。まだ、言うてはいけない。

「……ま、いいっっちゃ」

俯いた僕を、軋兄はポンポンと労るように叩く。

「夕識が必要だと思っからしてる事っちゃ。間違いは無いつて信じてるっちゃよ」

「……………ありがとう、軋兄」

本当、優し過ぎるよ。双兄も、軋兄もさ。

「いいっちゃ さて、俺は行くっちゃよ」

「あ、待って！ 軋兄」

立ち去ろうとした軋兄を、引き留める。

「……………《狐》は何かやらかすよ」

「狐？砂漠の狐の事デザートフォックスっちゃか？」

「うん……………今は、これしか言えない」

情報がどこから漏れるか、わからないから。軋兄は、しばらく僕を見て、きひひ、と笑った。

「わかったっちゃ　ありがとな。夕識」

素の口調で、軋兄が言う。

「あはは、いって　じゃあ、またね。軋兄。くなぎーに宜しく」

「ああ、またな」

それを最後に軋兄は去っていった。

その姿が、夕暮れの中に消えたのを見届けて、僕は五月雨荘への帰路についた。

子供をあしらえる技術は結構大事

なんやかんやあって、五月雨荘に帰ってこれたのは、日がほとんど沈みかけた頃だった。

僕はというと、本気で疲れていた。

本日は色々な事がありすぎた。端的に言って早く休みたい。先程撃ち抜かれた左足も明日には塞がっているだろうが　痛いのはやっぱりヤダし。

足を引きずりながら、僕はようやく石造りの門を潜った。

「……………ありゃ？」

何？　この雰囲気。知らない女性と、闇絵さんが睨みあって、その傍らで、真紅郎君がおろおろしてるんですが。

これ以上の面倒は嫌だったので、さっさと無視したかったのだが、あの二人が入り口前で睨みあっているため、入るに入れない。

そうこうしている内に、その知らない女性の方が此方に歩いてきた。必然的に目が合う形になる。

歳は二十代後半という所。
ワインレッドのスーツに、肩に羽織ったトレンチコート。
五月雨荘に来ている時点で、少なくとも一般人では無いと思っ
た。

だが、この人から感じる威圧感は、常軌を逸していた。

そして、《赤色》……。

どことなく、哀川さんを彷彿させる。

しかし、その考えを即座に打ち消す。

無い無い。有り得ない。あの人類最強と似ている人間など、それこ
そどこにもいはしない。

「 零崎か」

その女性が話し掛けてきた。

「よく、分かりましたね」

「そんだけ独創的な警戒心を抱かれれば、誰でも分かるよ し
かし、またとんでもない奴を送ってきたな」

「え?」

「ん、何でもない。独り言さ　じゃあな、零崎夕識」

そう言つて、肩を叩きながら、その女性は去つていった。

「……なんで、名前まで知ってるのさ」

しかも零崎名。

僕は溜め息をつき、五月雨荘の共同玄関。つまり、真紅郎君が突っ立ってる所まで歩いていく。

「ただいま！真紅郎君」

「うん。お帰り、夕介君」

「……何か疲れたような顔してるよ。仕事で、何かあった？」

真紅郎君は困つた顔をし、「ちよつとね」とだけ言った。

「ふーん、まあ真紅郎君がそう言うならいいけど　で、さっきの人、誰？」

「ああ、柔沢紅香さんだよ」

「……成る程ね。あれが柔沢紅香か」

柔沢紅香。噂だけは良く聞いている。

凄腕の揉め事処理屋で、裏社会で絶大な影響力を持つ人物。実力はわからないが、経歴や功績を見るなら、哀川さんと肩を並べる人物だ。

(…たく、五月雨荘に崩月、とどめは柔沢紅香か……)

本当にどうなってるんだ、この街は。デタラメ人間の万国ビックリショーか。

(……零崎の僕が言えた義理じゃないけどね)

真紅郎君と、二階への階段付近で別れ、共同玄関で靴を脱ぎ、自分の部屋で大の字になった。

マジメな話動きたくねえ。

服着替えただけで、残りの体力全部持っていかれた。精神的疲労が人を殺す事ってあるんだな。

頭を働かせるのを止め、僕は眠りの世界に、意識を明け渡した。

だ、
ある。

微睡みから、僕を覚醒させたのは、そんな小さな声だった。
時計を見ると、あれから一時間ちょっと。
体は固まっていたものの、疲労はいくらか回復した気がする。

ぐいっと伸びをして、声の出所を探した。

勿論、この部屋に、僕以外の人間はいない。だから必然的に、他の
部屋から漏れた声という事になる。

しの
いぞ

ふむ、上の階からか。位置から見て、真紅郎君の部屋だ。

「 干渉するな、とは言われたけど……」

ぶっちゃけ気になる。

何故なら、どうも聞こえてくるのが、女の子の声っぽいからだ。しかも小さな。

「真紅郎君に限って、そういう《間違い》は無いだろっけど」

結構迷ったが、僕は結局、真紅郎君の部屋へと行く事にした。そこで、今回の事件の発端となる人物に、出会うともしらずに。

「……………（絶句）」

真紅郎君の部屋を開けた瞬間、僕は言葉を無くした。

何故か。真紅郎君が知らない女の子の、着替えを手伝っている所だったから。

その女の子は多分、小学校に入るか入らないかくらい歳の。華奢な体躯に、色白の肌。一本不自然に立った髪の毛（アホ毛って言うのか？）。

あまりに整い過ぎた可憐さだ。

真紅郎君と無言で見合って、約数分。

「真紅郎君……それはまずいんじゃない？」

半ば同情、半ば呆れをこめて、僕はそう言った。

「いや！違うから！これは紅香さ」

「真紅郎。誰だこいつは」

真紅郎君の弁明を遮って、その女の子が言う。

僕を指差し、どう見ても年上であるはずの真紅郎に、タメ口を聞く姿は、なんか可愛げがない。

だから少しムツとして（今考えると大人げない）僕は口を開いた。

「人に名前を尋ねる時は、まず自分からだよ。ちみっこちゃん」

「ちみっこちゃんではない！」

えらく気分を害したご様子。

「無礼者め！私を誰だと思っておる！九鳳院紫だぞ！」

「……………」

待て待て待て、いくらなんでもそれは有り得ないって。

今日1日は確かに色々あった。だが、これだけは無いって。
表御三家は確かに裏社会と繋がりあるけども、基本的には世界に名
だたる大財閥だぞ。

その一角、九鳳院の人間が、こんな身近にいるわけ
いや、身近
に玖渚機関の知り合いいるけども。くなぎーは例外。

真紅郎君の方に視線を戻す。

「説明、してくれるよね」

有無は言わさん。というオーラをみなぎらせながら。

「……………」

真紅郎が頷く一方で、僕は心の中でシャウトしていた。

(本気でどうなってんだこの街は！)

「なる。つまり、柔沢紅香に頼まれて、この九鳳院のちみっこの護衛を頼まれたと」

紫ちゃんがまた「ちみっこではない！」と叫んだが、無視した。

「……なんで、裏十三家に預けるかな」

「え？」

「い、いや。何でもない！」

危ねえ。口が滑った。

喋ったからといって、どうにかなるものでも無いが、余計な事は言わぬが花だ。

夕乃さんとかにはキレられる気がする。

「おい！ 一般庶民！」

ちみっこちゃんが怒鳴る。ひでー代名詞だ。

「私は名乗ったぞ！ お前も名乗れ！」

「……緋色夕介。よろしく、ちみっこちゃん」

「ちみっこではないと言っているだろう！」

迷った拳げ句、零崎名は名乗らない事にした。

この子がどこまで、自分の家を理解しているかはわからないが、零崎を名乗れば、最悪、表御三家を敵に回す可能性もある。ただでさえ、《狐》の心配があるのだから、敵は増やしたくない。

が、言われ放題は癪なので、この態度で。

「はいはい。それじゃあ、僕の肩くらいの身長になったら、止めてあげるよ。ちみっこちゃん」

そう言つて、僕は立ち上がり、部屋から出ていこうとした。ちみっこちゃんはまだ喚き散らしていたが、再び無視。

「あ、そうそう」

忘れる所だった。僕は真紅郎君の方を振り返る。

「真紅郎君。君、他人に誤解されやすいだろうから、人付き合いに注意した方がいいよ。特に夕乃さんと銀子ちゃん」

今日一日、真紅郎君を見て思った感想。

多分、これは的確なアドバイスだったろう。

真紅郎君は理解してなかったっばいけど。

「夕介君は、子供って嫌いなのか？」

翌日、登校途中に真紅郎君から聞かれた疑問。
ちみつこちゃんは、家に置いてきたらしい。

《不戦の約定》がある五月雨荘だからこそ、出来る芸当だ。

「は？何でさ」

「いや、だって昨日、紫への態度、凄く嫌そうじゃなかった？」

さりげなく、紫と呼び捨てなのに気付く。

ちみつこちゃんが許したのか、はたまた本人がいないからか。

僕は苦笑いを浮かべる。

「別に嫌いなわけじゃないよ。ただ」

「ただ？」

「他人への礼儀を知らない子供が嫌いなだけ」

「礼儀？ でも小さな子は、みんな多かれ少なかれ、礼儀はまだ知らないんじゃない？」

「確かにね。でもあの子はちょっと行き過ぎだよ」

あれがあの子の全て、とは言わない。むしろ素の所では、聡明な子だと僕は見ている。

しかし、それはそれ、これはこれ。

「……僕、兄さんがいるんだけどさ」

急な話の転換に真紅郎君は瞠目した。

「兄さんって言うてもたくさんいるんだけど……、まあとにかく、その中に、音楽家の兄さんがいるんだ。僕にとっては、師匠と言ってもいいかな」

当然、音使いとしての師匠なのだが、真紅郎君は音楽家としての師匠と、とったようだ。

「その人にさ、よく怒られたんだよ。《お前は礼儀がなってないな》って。その度に、地面に這いつくばらされた」

しかもわざわざ、僕の使う楽器である横笛による操作で。

抵抗しようにも、あの人の腕は呪い名以上だから、したくてもできなかつたし。

僕は昔を思い出し、ふっと息を吐く。

「だから、ひよっとすると兄さんの影響かもね……。家族内じゃあ、変人扱いだけど、僕にとっては自慢の兄さんなんだ……。よ？」

僕は、そこまで言つて、言葉に詰まつた。《家族》という単語を口にした途端、真紅郎君の顔が曇つたからだ。零崎の僕でも引くくらいのも、悲しく、見ているだけで絶望を誘発するような表情。

「真紅郎君？」

僕に声をかけられ、真紅郎君は我に返る。

「あつ……。ごめん」

「謝る事じゃないけど……。何か気に障つた？」

「ううん、大丈夫。何でもないよ」

そう言つた真紅郎君の笑顔は、とても痛々しかった。まるで何も無かつたように、真紅郎君は続ける。

「それにしても、いい人だね。夕介君のお兄さん。俺も会ってみたいよ」

「……あー、それはやめといた方がいいよ。ちみつこちゃん連れてる時は特に」

「？」

真紅郎君は首を傾げたが、彼は知らない。自分が今どれだけ命知らずな事を言ったのか。

零崎曲識。ポルトキープ少女趣味、一族でも変わり種と称されるヘジタリアン菜食主義者。

その名の由来は、『少女以外殺さない』。

そんな人間の所に、少女を絵に描いたような、あのちみつこちゃんを放り込んだら……。

何が起きるか考えたくもねえ。

朝一で僕は、今頃日本の北端にあるピアノバーで、演奏をしているであろう、兄を想像し、背筋が凍った。

教室に着くと、既に銀子ちゃんがいて、真紅郎君は、昨日処理した一件の報告をしていた。

だが、真紅郎君の話聞き終えての銀子ちゃん第一声。

「バツカじゃないの、あんた」

手厳しい。本当に幼なじみなのか疑うような、容赦の無い一撃だった。

真紅郎君が、依頼人からの報酬を値下げしたらしく、それが銀子ちゃんの逆鱗に触れたらしい。

安易に報酬を値下げするようなプロは、誰からも信用されないわよ、との事。

言い方はキツイが、間違っではないなかった。

何だかんだ言っつて、やっぱり真紅郎君が心配なのかな。

ひとしきり、叱咤を受けたところで、真紅郎君が口を開いた。

「銀子、ちょっと頼みがあるんだけど、いいか？」

「仕事の依頼？」

「情報を集めて欲しいんだ、九鳳院の。真偽の不確かなものを含めて、集められるだけ」

銀子ちゃんは、パソコンのキーを打つ手を止めた。

「……九鳳院？」

疑問に思うのも当然だろう。真紅郎君と大財閥の九鳳院とでは、どうやっても結び付かないだろうし。

真紅郎君が、九鳳院の人間の護衛を頼まれるかもと、曖昧な言い方に留めた説明をする。

「変ね、それ」

銀子ちゃんは、まるで信じていない口調で言った。

「そんなの、近衛隊の仕事じゃない」

銀子ちゃんが言うには、近衛隊は九鳳院直属の護衛を取り仕切っている部隊らしい。

公にされていないから、真紅郎君は半信半疑だったようだが、僕に

とっては別に不思議じゃない。
《闇口》の事もあるし、姿を見せないからこそ、力を発揮する集団もあるのだ。

銀子ちゃんは、その依頼が柔沢紅香からだとなり、かなり不本意ながらも、九鳳院の情報入手を承諾した。

僕はと言うと、少し考えを巡らせていた。

(どうも引つ掛かるんだよな　この依頼)

仕方がない。真紅郎君には悪いけど、銀子ちゃんよりも、さらに期待できる人に、頼み込むとしよう。

『おーっす！　夕ちゃん、ひっさしぶりーっ！』

「うん！久しぶり、くなぎー」

昼休み、僕はくなぎーに電話をかけていた。
青色サヴァン、死線の蒼、デットフル玖渚友は相も変わらずハイテンション。

『どしたの、どしたのっ？ タちゃんが僕様ちゃんに電話かけてくるなんて、いーちゃんよりも珍しいんだよっ！』

「うん。頼みたい事があるんだけど」

『うにー、引き受けたんだよ』

「いいの？」

『タちゃんの頼みだもん』

「ははは　じゃあ、ちよっと《九鳳院》の情報を集めて欲しいんだ　これ、玖渚機関の管轄外だから、無理強いはしないんだけど」

『ぶいぶい、問題なしなし！ ノープロブレム！ 別にそれくらいじゃ、四つの世界のバランスは壊れないし。じゃあ、調べ終わったら連絡するね！』

「うん、ありがと。くなぎー　ところで、後ろから、色々雑音聞こえてきてるけど、何してんの？」

『うにー、今度いーちゃんと行く、旅行の準備だよ』

「旅行？」

インドア派なくなぎーには珍しい。

「どこ行くのさ?」

『卿吉郎博士んト』

「……ああ、兎吊木さんか」

『そ、さっちゃん』

大変だな、いー兄。確実にいじめられるぞ。
僕だって二度と会いたくないもん。あの害悪細菌グリーングリーンには。

「わかった。健闘を祈るぜ」

『うん。それじゃあまたね。大好きだよん。夕ちゃん』

「ははは。ありがと、またね」

そう言って、電話を切る。

「全く、あーいう事はいー兄だけに言えばいいのに」

どうしてあの子は、誰かれ構わず、大好きと言えるのか。
それは凄いと思う反面、恐ろしい事だとも思う。
いや、青色サヴァンだからこそ、出来る事なのかも知れない。

「さて、どうするかな」

「いー兄とくなぎーの前途も気になるが、当面は真紅郎君とちみつこちゃんだ。」

僕が、くなぎーに九鳳院の調査を依頼した理由。それは、銀子ちゃんに危惧していたのと同じだ。

なぜ、柔沢紅香が、表御三家に名を連ねる大財閥の人間を、（こう言うては失礼だが）崩月の力を持つとは言え、まだ駆け出しの揉め事処理屋である真紅郎君に任せたのか。

柔沢紅香の実力はわからない。だが、哀川さん程でないにしても（哀川さんは別格だし）相当の実力者のはずだ。経験も豊富らしいし、自分で守るのが、一番確実だろう。

真紅郎君には「私は子供が苦手だ」で通したようだが、そんなレベルの私情を挟むなら、プロとは言えない。何か裏があると思うのは自然な発想だ。

何にせよ、くなぎーの情報が頼りか。

そこでふと気付いた。

「あれ？ 何か僕、墓穴掘ってない？」

九鳳院の事、調べようとしたり、何で僕、こんな事に首突っ込んでるんだ？

ただでさえ、周りにアブノーマルな人ばっかなのに、これ以上、悩みの種を増やしてどうする。

「まあ、いいか」

この街に来るだって、大して変わらない生活をしていたのだ。

「小さな戦争」然り。

鴉の濡れ羽島の事件然り。

京都で、いー兄のクラスメイトが起こした事件然り。

何を今更、後悔する必要があるのだ。

いー兄ほどでは無いにしろ、僕の歩いてきた道のりだって、死体の山なんだから。

それは、零崎みんなに言える事だけれど。

「傑作　または、戯言だけどね」

自嘲気味に笑い、僕は教室へと戻っていった。

「おう、零崎夕識」

「……零崎名はなるべく名乗らない事にしてるんです。緋色夕介でお願いしますよ。柔沢紅香」

「紅香でいい」

「……分かりました。紅香さん」

気軽な感じで挨拶をしてくる凄腕揉め事処理屋。場所は、都内某所にある喫茶店。

あの後、連絡があり、僕はこの場所に呼び出された。
何で僕のメイドを知っているかとかは……まあ、この際気にしない
方向で。

紅香さんに促され、テーブルにつき、アイステイーを注文。

「……で？僕になんの用です？」

「わかってるんだろ？」

紅香さんは不適に笑い、手元のコーヒーを一口。優雅な飲みっぷりが妙にキマっていた。

「仕事の確認さ」

「やっぱり……貴女でしたか」

「ああ、潤に依頼したのは私だ」

潤……ね。哀川さんの知り合いにしては、珍しく呼び捨てか。前言撤回。やっぱり、少し似てるな。哀川さんに。

この器の知れなさとか。

「あいつとは　まあちょっとした知り合いでな……今回の一件、ひよつとすると、真紅郎には荷が重いかも知れないから、まあ、保険みたいなものさ」

「それなら、なんで真紅郎君に頼んだんですか」

「あいつしか適任がいなかったんでな」

「 適任? 」

僕はあからさまに不快感を剥き出しにする。

「何が適任なんですか。子供嫌いだけじゃ通りませんよ 家族を、子供を持つ人間が、子供嫌いなわけではないでしょう」

これには少し、紅香さんは驚いたようだが、すぐにフツと笑う。

「よく調べたな。色々と情報操作はしてるんだが」

「調査が得意な友人が多いので」

自然と得意になったのだ。九鳳院クラスになると難しいが。

息子の名は確か、柔沢ジユウ君だったかな。

そこで、紅香さんは煙草の紫煙を吐き出す。

「……少し事情があつてね。真紅郎でなければならぬのさ」

「深くは追求しませんけど ちみつこちゃんが関係してるんです」

か？」

「ちみっこちゃん？」

「紫ちゃんの事です」

「ああ、成る程　その通り。あいつに関係してる」

ふうん。まあ、これは興味本意の質問だからな。

閑話休題。

「で、哀川さんに　いや、この場合は僕ですか。頼みたい事って、真紅郎君のサポートですか？」

「ああ　だが、あくまでサポートだ。お前が目の届く範囲でいい。真紅郎をきっちり守れというわけじゃないんだ」

「はあ？」

なんじゃそりゃ。気合いを入れるなって事か？
混乱する僕を横目に、紅香さんがぼつりと呟く。

「出来るなら、あいつ一人でこなして欲しいんだがな」

「……………」

僕には、紅香さんの意図が分からなかった。
真紅郎君が、この一件を処理することが、一体どんな意味を持つのだろう。

(……てか、うまくはぐらかされたな)

そこは、僕の干渉する範囲では無いという事だろうか。
ようやく来たアイステイーを飲みながら思う。
そして、諦め半分にため息をついて、紅香さんに向き直る。

「わかりました。僕の目の届く範囲でいいなら」

「ああ、よろしく頼むぞ。私も目を光らせるようにはするが……あまり期待はしないでくれ」

「大丈夫ですよ。それに、真紅郎君だっているじゃないですか」

「……そうだな」

フツと口元を緩め、紅香さんは席を立とうとした。

「まあ、ゆっくりしていけ。ここくらいは奢ってやる」

「……あ、待って下さい。一つ聞きたい事があったんですけど」

「なんだ？」

「真紅郎君、ご家族っていますか？」

それを口にした途端、紅香さんの顔色が曇った。数秒置いて、紅香さんは口を開く。

「……いや、いない。どうした。藪から棒に」

別に何となく。とでもはぐらかせばよかった。しかし紅香さんの目が異彩を放っているのに気付き、僕は今朝方、真紅郎君に『家族』のワードを口にしてしまった時の事を話す。

大まかにしゃべり終わった後、紅香さんは「……そうか」と呟いた。

「真紅郎君。何かあったんです？あんな表情。並大抵の事じゃありませんよ。何か知ってるなら……」

「それは、興味本意からの質問か？」

未だに、紅香さんの目は鋭かった。

「……家族がいるから、大切な人を失う辛さがわかるから、ですかね」

それに臆せず、僕は言う。

僕が経験してきた大切な人の死は、一度や二度じゃない。その痛みは、いやと言う程知っている。

紅香さんは僕を真っ直ぐに見据えた後、肩を竦めて、再び席についた。

「いいだろう。話してやる。ただし　あまりいい話じゃないぞ」

人を助けることはフラグを立てることと同義

「何をもたつておる。早くいくぞ」

ちみっこちゃんはずんずん歩いていく。

その姿を見て、真紅郎君に一言。

「真紅郎君、良いことあるって」

「変な同情の仕方しないで……」

その後、銭湯に行こうとした時、共同玄関口で真紅郎君とちみっこちゃんに会った（ちみっこちゃんは渋い顔をしたが）。

この五月雨荘に風呂は無いため、必然的に近場の銭湯を利用する形になる。

まして、日が暮れかけたこの時間。

真紅郎とちみっこちゃんと鉢合わせるのは、当然っちゃあ当然。

しかし。

（あーいう話、聞かされた後じゃあな……）

正直気まずい。

八年前、アメリカの飛行場で起こった、無差別爆弾テロ。僕は知らなかったが、当時はかなりの大事件だったらしい。

そして、仕事の都合でアメリカに来ていた真紅郎君の家族は、そこで死んだ。父、母、姉、全員。

真紅郎君は無事生還したが、その後は廃人同然となってしまうた。

真紅郎君を変えるキツカケとなったのは、紅香さんとの出会い。

事故直後、銀子ちゃんの家に残された真紅郎君は、ある日行つた児童館で、海外の人身売買組織に拐われ、殺されかけ、そこを紅香さんが助けた。

真紅郎君はその強さにみいられ、紅香さんの紹介で崩月家の門弟となった。

なんと重く、暗い人生だろう。

少なくとも、裏社会と何の関わりもない子供が背負うには重すぎる。ちらりと横目で、真紅郎君を見る。

今朝見せた暗い瞳は無い。だが、彼は今でも、家族の事を引きずっている。

そして、独りぼっちの自分でも、この残酷な世界を生き抜けるように、力を求めた。

その生き方は余りにも、つらい選択である。

(……戯言だ)

僕はこの時、紅香さんが、ちみつこちゃんを真紅郎君に預けた理由がなんとなくわかっていた。

紅香さんの取った行動。それが実を結ぶかどうかは、二人次第だが。

(ここは、いー兄よろしく、傍観者であるとするか)

そうこう考えてる内に、銭湯についた。

「ほう、庶民はここで風呂に入るのか。わざわざ外出せねばならんとは、難儀なことだな」

「……いや、みんながみんな利用するわけじゃないぞ」

ちみつこちゃんの箱入り意見に、真紅郎君がきつちり訂正を入れたところで、三人纏めて男湯へ(番台さん曰く、十歳までは一緒に構わないらしい)。真紅郎君は二人分、僕は一人分出し、脱衣場へと入った。

紫ちゃんは、真紅郎君が渡すタオルを「不要だ」と突っぱね、風呂場へと入っていく。僕と真紅郎君が、一步風呂場へ入ると、紫ちゃんは感心したように中を見回していた。

子供の好奇心、か。

僕は取り敢えず、さくつと体を洗い、風呂に浸かった。

「うに〜」

つい口調がくなぎーっぽくなつたが、とにかくいい湯だった。こここのところ、メンタル的に疲れまくってたから、それもあるのだろう。湯船から、真紅郎君達の方を見ると、ちみっこちゃんが、髪の毛を洗うのに苦戦していた。

「な、何だこれは！目に染みるぞ！」

当たり前じゃ。

心の中で突っ込みを入れる。その後、ようやく髪を洗い終えた二人が、湯船に入ってきた。

真紅郎君は気分良さげに入っていたが、ちみっこちゃんは、顔が真っ赤だ。

多分、暑さに耐えられないのだろう。この辺はまだ子供だな。

結局、ちみつこちゃんはものの三十秒で、湯船から上がった。鴉の行水を体現したような行動の後、真紅郎君もやれやれと言わんばかりに湯船から上がった。

「僕も出るかな……」

少なくとも真紅郎君よりは浸かったし。そう思って、僕も水を滴らせながら、風呂場を後にした。

「やっぱり、風呂上がりは牛乳だね」

つて、我ながら爺臭い事を言ってるな。ふと、ちみつこちゃんを見ると、マッサージチェアに座った老人から、コーヒー牛乳を貰っていた。

良い御仁がいるものだ。しかし、ちみつこちゃんは、それを怪訝そうに見た後、真紅郎君のところへと走り去ってしまった。気になつて、二人の会話に耳を傾ける。

「どうしたんだ、それ？」

「あの男から貰った」

そう言って、さっきの年配の男性を指差す。

「ちゃんとお礼は言ったのか？」

「礼？ なぜだ？ くれるというものを、私は貰った。それだけだぞ」

突然、ゴンという鈍い音と共に、ちみっこちゃんの頭が揺れた。

見ると、真紅郎君が握り拳を作っていた。ちみっこちゃんは、今自分にされたことが信じられないという表情だ。例によって、抗議の嵐。

「お、お前、私を叩いたな！ しかもグーで！ しかもグーで！」

グーである事が、そんなに重要だろうか。あ、また叩かれた。

「……ま、また叩いたな！」

「紫」

真紅郎君は諭すような口調で続ける。

「誰かに良くしてもらったら、ちゃんとお礼を言え。それは当たり前
前のルールで、子供でも守らなきゃダメだ」

おお、真紅郎君が輝いている。

ちみつこちゃんはいしばらく無言だったが、やがて冷静さを取り戻すと、数秒目を閉じ、やがて頷いた。

「……成る程、お前の言うことは正しい。間違っていたのは私の方
だ」

余りにも素直な態度に、真紅郎君は面食らったようだった。

「すまなかった、許せ」

「あ、いや……」

戸惑う真紅郎君をよそに、ちみつこちゃんは先程の老人に、お礼を

言っていた。

「うん　それでいい」

僕は表情を緩めて、牛乳をもう一口飲む。

「そこで謝れるなら　君は変わるよ、ちみっこちゃん」

部屋に帰って来ると、パソコンにデータが送られて来ていた。

「さっすが、くなぎーだね」

多分、くなぎーが本気を出せば、二時間もあれば調査は終わっていた。

だが、今は旅行の準備中。くなぎーの言う《準備》は多分、卿吉郎博士への手土産か何かだろう。

しかも生半可な手土産ではない。何せ、兎吊木垓輔を取り返そうとしているのだ。それこそ、《チーム》も手伝って作り上げた物でなければ釣り合わない。

そんな忙しい中、これだけの時間で仕事を済ませてくれたのだ。感謝せねばなるまい。

データを吟味していると、様々な情報の中で、一つの項目に目が止まる。

それは、九鳳院家の家系図。九鳳院家の現党首、九鳳院蓮丈。その隣に、夫人の名があつて、下には子供が二人。

「……あれ？」

ちみっこちゃんの名が無い？

おかしいな、と思うも、何度探そうと、紫なんて名は無かった。

「どゆこと？」

くなぎーの情報にミスなんて有り得ないし。ちみっこちゃんは、九鳳院じゃないのか？

引っ掛かる物を感じ、さらにデータを見ていく。しかし再び、一つの項目に目が行き、合点がいく。

「成る程。そついう事ね……」

そこに書かれていたのは《奥ノ院》という施設についてだった。外界から隔絶され、九鳳院で生まれた女が一生を過ごす場所。

（九鳳院の遺传的欠陥と、男尊女卑の風潮。奥ノ院。話の筋は通るな）

これで、答えは出た。

今のところ警戒すべきは、このちみっこちゃんの兄、竜士だろう。

パーソナルデータからして、この男はちみっこちゃんを探り当てようとする。そこが勝負の分かれ目だ。

デスクトップを閉じ、僕は部屋に寝転がり、笑い声を漏らす。

「さあて、面白くなってきた」

さて、真紅郎君。君はちみっこちゃんを守れるかな？

翌日の学校からの帰り道。僕は両手にスーパーのレジ袋を下げてい

た。

今夜、環さんの提案でちみっこちゃんの歓迎会をやるらしいので、その買い出しである。

てかあの人は、入居者が来る度に歓迎会をしているか。否、恐らく騒いで酒が飲めればそれでいいのだろう。

正直なところ、参加は断りたかった。環さんに絡まれるのは目に見えていたし。

しかし僕が祝って貰いながら、ちみっこちゃんを祝わないわけにもいかず、僕もこうして材料の買い出しに来ているわけなのだ。

真紅郎君との分担作業なので、出費は僕と真紅郎君のハーフ&am p・ハーフ。今頃真紅郎君も、ちみっこちゃんを連れて買い出しに行っているだろう。

「そいじゃま、早いとこ帰りましょうか」

そう呟き、近道のため、路地裏に入った。

地面に、マント姿の少女が倒れていた。

「……………」

フリーズ。

「え…………、何。これって、俗に言う、もしかしてもしかしなくても、行き倒れってヤツ？」

有り得ねえ。しかも見た目、十代半ばくらいの女の子が。

「放つとくのは…………マズイよな……………」

その行動をとったが最後、人として何か大切な物を失う気がする。ひとまず、近づいてしゃがみこみ、ペチペチと頬を叩く。

「モシモーシ」

「……………」

返事がない、ただの屍のようだ。
弱ったな、僕はザオリクもレイズも転生忍術も使えないぞ。
あ、転生忍術は僕が死んでしまう。

「いやいや、そうじゃなくて」

危ない。パニックの余り、電波っぽい思考に走ってしまった。

「てか、マジで死んでないよな……」

そう思い、少女のマントを下から掬い上げるようにする。

いや、やましい考えとかじゃないぞ！ただ脈を測るとなると、マントが邪魔なわけで……。

その下にあったのは拘束衣だった。

「……………」

嗚呼、果たしてー兄ですら、こんなわけの分からない状況に陥った事があつたらうか。

もうギブアップです。こんな謎、コナン君や脳嚙ネウロさんしか解けねえよ。

「……ひとまず、五月雨荘連れてくか……ん？」

粗方混乱して、冷静な判断力を多少取り戻した僕の目に、落ちていた紙切れが飛び込んできた。

名刺サイズの紙で、事実それは名刺だった。この子の物だろうか。

「『名探偵 匂宮理澄 NEONOMIYA RHYTHM』……
英語表記で、におうのみやりずむ……におうのみや？」

五月雨荘五号室、つまり真紅郎君の部屋にたどり着いたのは、日が暮れてからだった。

女の子担いで、さらには決して重くはないレジ袋。この時間にたどり着けたのは奇跡に近い。

みんなはもう、鍋をつつき初めていた時だったが、女の子を担いで入ってきた僕を見て、多種多様な反応を見せて下さいました。

まず、真紅郎君、絶句。

ちみつこちゃん、よく状況が飲み込めず首を傾げる。

闇絵さん、マイペースに酒と鍋を食べる。

環さん、ニヤニヤ笑い。

ダビデ、にゃー。

「ゆ、夕介君……その子は……？」

声をギクシャクさせながら話す真紅郎君。

「……拾った？」

そうとしか言いようがなく、真紅郎君に材料を手渡し、担いできた少女。理澄ちゃんを畳の上に。

「うっわ！ 何々、夕介君。大人しそうな顔して、女の子お持ち帰り？」

「それは僕の存在全てを持って否定させて頂きます」

「まったー、謙遜しちゃって！ わっ、しかもこの子の格好！ 新
手のプ」

「その妄想をブチ殺してやろうか」

あんたが言つと洒落にならねえんだよ。

「でも、本当にどうしたの、この子」

真紅郎君が聞く。

「だから、拾ったの。近くの路地裏で。端的に言って、行き倒れ」

そう言いながら、真紅郎君に、鍋をよそってもらい、理澄ちゃんの前まへに置いた。

「何やってんだい、夕介君」

「いや、さつきっから起きないんですよ、この子。ここまで来たら、食欲で起きてもらうしかないと……」

思おもって。と続けようとした矢先、理澄ちゃんが目を覚ました。

「……ん。にゃ」

むくりと、拘束衣を着ながら、器用に体を起こす。そしてきよとんと、辺りを見回した。

大きな瞳に困惑や、疑念、その他色々な感情を孕ませる。

そして。

「う
」

溜めに入った。

「う、うきゃあああああああああ！」

ガラス瓶百本はブチ割ろうかという大声。
その場にいた、闇絵さんとダビデを除く、全員が目を剥いた。

その後、理澄ちゃんの一言。

「な、な、鍋料理だあつ！」

「……は？」

僕、真紅郎君、環さんの声が綺麗にユニゾンし、理澄ちゃんは、獲物に飛びかかる飢えた野獣よろしく、目の前の皿にむしゃぶりついた。

この五月雨荘で数少ない、ツッコミ役であるはずの、僕と真紅郎君ですら、沈黙せざるを得ない食いつぶりだった。

てか、本当に食欲で起きやがった……。

こんなんで大丈夫なのか？《匂宮雑技団》。

「あたし、匂宮理澄だもん、十六歳。名探偵だねっ！」

「ああ、僕は緋色夕介」

殺し名一位の前で、零崎名を名乗るのは自殺行為だ。

「俺は、紅真紅郎」

「武藤環よん」

「闇絵だ」

「私は九鳳院紫である」

「おや？ くほーいん？」

表御三家とバレないかと心配したが、理澄ちゃんは首を傾げるだけで、何も言わなかった。

ちみつこちゃんも、何の反応も無い所を見ると、殺し名の事は知ら

なかったようだ。

「それで、あの」

理澄ちゃんは話題を切り替える。

「どうしてあたし、こんなところにいるのかな？」

「夕介君が拉致つてきたのである」

「嘘教えんじゃねえ！」

環さんの爆弾発言に、間髪入れずに突っ込む僕。

「え？ え？ あたし、今危険状態なのかな？」

「だっ！違う違う！行き倒れてたの！」

「行き倒れてた！ど、どこに？あたし、今回はどこに行き倒れてたの？」

今回は？

って事は前にもあったのか？

「いや、近くの路地裏」

「あ、なるほどなるほど。それはどうもありがとだねっ！ お兄さん、大好きっ！」

随分と馴れ馴れしい言い方だが、悪い気分じゃない。世の中には、つい先日まで、礼を言う事も知らない子がいたし。そして、その本人が言う。

「お前、名探偵とは、どういうものなのだ？」

興味深い、と言った風に、ちみっこちゃんが聞く。すると、理澄ちゃんは「ふふん」と得意げに笑う。

「名探偵はね、一言で言えば頭脳労働、だねっ。ただね、お嬢ちゃん。名探偵とは職業じゃないんだよ。名探偵とは、生き様なんだねっ！」

にやりと笑う理澄ちゃんに、「それは凄い」と本気で感心するちみっこちゃん。

多分、意味分かってねえな。

「世の中には凄い人物が多いな。闇絵の悪女といい、本当に凄い」

ちらりと、闇絵さんを見ると、不適に笑いやがった。

あんた、子供に何を教えてんだ。

「それで？ その名探偵ちゃんが、何でぶっ倒れてたの？」

環さんが面白い玩具を見つけたように、目を光らせた。

「どうしてかと問われると、やっぱりお腹が減ってたからかな、あ
たし、集中していると食事するの忘れちゃうんだ。そんなこんなで、
もう三日も何も食べてなかったからふらふらだったんだね」

ちなみに理澄ちゃんは、あの後五杯ほどおかわりしました。

「えと、じゃあ、今も仕事中的なのかい？」

真紅郎君が躊躇いがちに聞く。

「うんっ、人探しなんだねっ！」

人探しね。まあ、近代の探偵のイメージには近いか。

「誰を探してるの？　もしかしたら、俺達が知ってるかも」

真紅郎君が言うと、理澄ちゃんは、しばらく「うーん」と唸り、やがて言った。

「うんっ！　折角だし、聞いてみようかなっ！」

しかし、次の瞬間、僕は凍り付く事になる。

「零崎人識という男を探しているんだね」

「私は聞いたことが無いな……環、君は？」

「うんにゃ、私も。真紅郎君は？」

「俺も……無いですけど……」

ちらりと僕の方を見る真紅郎君。

一度、真紅郎君の前で、僕は零崎名を名乗った。それを覚えていたのだろう。

僕は僕で、かなり混乱していた。

一時期、人兄がしつこく付きまとわれたという、匂宮の秘蔵っ子、人喰い《マンイーター》匂宮出夢さん。彼女 いや彼が、この匂宮理澄ちゃんの双子の兄だというのは知っている。

だが、今更、人兄とは何の繋がりもない人物。二人が出会ってから数年後、決定的な決別をしたと聞いている。

これで、個人的に探してる線は消えた。

もし、名探偵としての仕事なら、つまりは依頼人がいるということ。零崎一賊を探そうなんて考える奴はそういない。探す意味が見当たらない。

もし、別の殺し名の復讐か何かなら、殺し名一位の《匂宮》に頼もうとはしないだろう。ましてや人兄は、零崎の中でも、秘蔵っ子であるがゆえに知名度が低い。

尚更、探される事なんてないはずだ。

やっぱいな。嫌な予感しかしない。

零崎についてはしゃべらないで、と真紅郎君に目で訴え、結局僕は沈黙を守る。

「……ごめん、僕も知らないな」

「そっかあ……」

残念そうに俯く理澄ちゃん。なんか良心が痛い。

「うんっ！ でも、あたしはめげないんだねっ！」

理澄ちゃんはぐっと拳を天高く振り上げる。ポジティブだなあ。

「それじゃあ、あたし、そろそろ行かないと。鍋料理、ありがとうなんだねっ！」

「ああ、いーのいーの。真紅郎君と夕介君の出費だし」

けらけら笑う環さん。何であんたが偉そうなんだよ。

「では、これで失礼させていただきます。お兄さんもお姉さんもお嬢ちゃんも、おさらばですっ！」

理澄ちゃんはきつちり頭を下げ、玄関口から出ていった。僕はしばらく考えて、後を追うように玄関口へ。

「僕、見送ってきますね」

環さんの「押し倒しちゃだめよ」という声が聞こえたが、これは無視。

「理澄ちゃん！」

理澄ちゃんは、まだ近くにいた。通りを歩く後ろ姿に声をかける。

「おやつ！ さっき別れたばかりで再開なんだねっ！ どうしたの？ お兄さんっ」

「あ、いや、少し聞きたい事があってさ」

「？」

こてんと首を傾げる理澄ちゃん。

「その、零崎人識って人。誰に依頼されて探してるの？」

理澄ちゃんは困ったような表情になった。

「えっと……、ごめんなんだねっ、それは教えられないよ」

「……そっか」

「個人情報反故法なんだねっ」

「発音の上では、見落としそうだけど、間違ってるよそれ」

反故は約束を解約する事だ。それはさておき。

(やっぱり教えてくれないか)

まあ、駄目元だ。

理澄ちゃんがプロかどうかはともかくとして、顧客情報をばらす程
ような真似はしないか。

「悪かったね、理澄ちゃん。変な事聞いて」

「うーん、別にいいよっ」

「あ……そうだ。理澄ちゃん。もしよければ京都に行ってみらん」

「京都？舞子さんが我が物顔で闊歩している京都かなっ？」

「その見解には偏見があるけど、そう。その京都」

「何でまた京都？」

「あ、そこには生粋のトラブルメーカーがいてね。多分、その零崎人識って人、あまり普通とは言えない人なんだろ？」

「うーん、まあそうなんだけど……、どうしてわかったのかな？」

「いや、名探偵が探す人なんて、大抵はそんな感じだろ？」

「む、お兄さんの方こそ偏見があるんだねっ」

怒られた……。とっさについた言い逃れが逆効果に。

「まあとにかく、そのトラブルメーカーは、そういうアブノーマルな人を集めるスキルが、デフォルトで備わってるからさ。その人の近くにいれば、零崎人識って人も来るかもよ」

実際、一度来たしな、京都に。

「ふむふむ、わかったんだね。一度行ってみる！ ありがとうなんだねっ！お兄さん！」

「ああ、それじゃあ、今度こそサヨナラだ」

「うん、それじゃあこれにて！」

手を振る理澄ちゃんに、曖昧な笑みを返し、僕は来た道を戻り出した。

何故理澄ちゃんに、あんな事を言ったのかは、自分でも分からない。この結果が、吉と出るか凶と出るかもだ。

だが、あの《狐》風に言うなら、そんなのはどちらでも同じ事。

「……………戯言か」

過ぎた事を言っても仕方ない。どんな事も起こる時には起こる。

それに。

僕がこれ以降、匂宮理澄に会う事は無かったのだから。

「やらしい」

「何が？」

「それ、崩月先輩から貰ったんでしょう」

「……す」

素直に感嘆する僕。

と、これは数日後、昼休みに銀子ちゃんの所で昼食をとりに来た時の会話。

銀子ちゃんの予想はズバリ正解で、真紅郎君が今、膝の上で開いた弁当は、踊り場で偶然出会った夕乃さんに貰った代物。
恐るべし、女の勘。

ちなみに、夕乃さんと会った時、ちみつこちゃんが真紅郎君の部屋にいる事がばれそうになったりした。

うん。確実に何かのフラグだね。

「あたし、あの人嫌い」

苛々した口調で銀子ちゃんが言った。

そりゃそうか。

崩月に真紅郎君が行かなければ、極論から言っつて紅香さんに出会わなければ、真紅郎君は揉め事処理屋なんて危険な仕事につかなかつたのだから。幼馴染みとしては、色々思う所もあるだろう。

真紅郎君と銀子ちゃんが言い合ってる（正確には銀子ちゃんが一方的に）間、僕は新聞をパラ読みしていた。すると、一つの記事に目が止まった。

（…………へえ）

そこには、澄百合高校の教員全てと生徒の一部が殺され、事実上、澄百合高校が廃校となった事が書かれていた。

（子菰さんも、玉藻ちゃんも死んじゃったか……。とすれば、やっぱり犯人は姫ちゃんかな）

死亡報告が無いのを見ると、いー兄か、哀川さん辺りが預かってるのかな。

やれやれ、いー兄も相変わらずトラブルメーカーだ。理澄ちゃん、大丈夫かな？

「それと、あんた、気をつけた方がいいわよ」

銀子ちゃんの言葉で、追想から引つ張り出された。

「何を？」

「悪宇商会って、聞いたことあるでしょ？」

「ああ、例の……」

悪宇商会。裏世界に拠点を置く、人材派遣会社。金次第でどんな犯罪にも手を貸すヤバ気な会社。

以前、哀川さんが「うざってえんだよな、こいつら。あーあ潰しちやおっかな」とぼやいてたな。

真紅郎君は、そんなヤバいのと関わる気は無いと言っていたが、その見解は甘い。

裏社会では、衝突が常。悪宇商会を一流企業とするなら、真紅郎君は下請けみたいなものだが、紅香さんを目指すなら、いずれぶつかる相手だ。

遅いか、早いかの違いだけ。

「俺のことはいいとして、おまえの方こそ気をつけるよ。情報屋が消されるなんてのは、そう珍しいことでもないんだ」

しかし、真紅郎君は他人の心配。

とことん甘いなあ。まあ銀子ちゃん、体育会系じゃなさそうだから、心配になるのはわかるけど。

「もし何かトラブルがあったら俺に言ってくれ。最優先で引き受ける」

「何割引き？」

「タダでいい、銀子なら」

銀子ちゃんのパソコンを打つ手が止まる。……真紅郎君、わざと言っていないか？

「……あんた、やっぱりバカよ」

そう言って、また銀子ちゃんは背を向ける。ちらりと見ると、その横顔は満更でもなさそうだった。

「……シンデレレ」

誰にも聞こえないよう、僕はボソッと書いた。

その日の帰り道。

僕と真紅郎君は並んで、五月雨荘への帰路へついていた。
真紅郎君が濁った空を見上げる。

「これは降るかな……」

「降水確率は、結構高かったよ」

「うむ、天気予報でも夕方から雨だったぞ」

聞き覚えのある声があった。

ふと隣を見ると、変装のためか、野球帽を被ったちみっこちゃん
がいた。

「あらま。ちみっこちゃん」

「……お、お前、どうやってここまで来た!」

「環に送ってもらった」

焦った真紅郎の口調にも、淡々と応じるちみっこちゃん。
学校に興味があったらしく、環さんにそう言ったら、連れてきてもらったらしい。

「お前、五月雨荘からは出るなってあれほど……」

「一人で出るな、とは言われたな。だから、同行者がいればよいのだろ？」

「それは……」

「いっちょまえに契約の穴をつきやがった。」

「環は信頼できる女だと思うが違うのか？」

「いや、違わないけど……」

「真紅郎君。むしろ、この点では信用できなくない？」

「……」

真紅郎君沈黙。否定出来ないようだ。

「真紅郎、早速中を案内しろ、教室を見たい」

「……ダメに決まってるだろ」

何か保護者が板に付いてきたな、真紅郎君。
辺りを見回すと、幸いにも、人気が少なくなってきた。

「……んで、ちみっこちゃん、当の環さんは？」

「映画に行くと言っていた。ぼるの映画、とかいつのを見るそうだ」

(あのエロ女……)

真紅郎君と僕の思考は、恐らくシンクロしただろう。私用のついでに、ちみっこちゃんをここに置いていくな。
その後、尚も学校が見たいというちみっこちゃんを二人がかりで説き伏せ、僕らは五月雨荘への帰路についた。

以降は、ちみっこちゃんの後ろで、交わされた、僕と真紅郎君の会話。

「夕介君」

「何？」

「しばらく環さんに米貸さないでね」

「うん。言われるまでもない」

奇妙な同盟が結ばれた。

場所は移って帰りの電車内。

「電車は便利だが、椅子の座り心地がイマイチだな」

「それには同意だね。でもちみつこちゃん。昔は椅子の無い列車もあつたらしいよ」

「ふむ、それは不便だな。昔の人間は足腰が強かったのか？」

「今よりは結構体力があつたらしいよ。最近の子供の身体能力の低下が嘆かれてるからね」

僕は暇なので、ちみつこちゃんとトーク。

うん、別に知らないけどね。昔の電車のしくみとか。

真剣に耳を傾けてくるちみつこちゃんに、ちよっぴり苦笑。

真紅郎君も笑みを溢していた。

しかし、そんなフリートークタイムは、突然聞こえてきた騒がしい声によって、終わりを迎えた。

声の発生源に耳をやると、柄の悪い若者三人が、シルバーシートにいる老婆に絡んでいるところだった。

「バアちゃんさ、俺ら疲れてるわけよ！座りたいわけよ！」

「早く立てよ、ババア！ てめえ、思いやりつてもんがね のか！」

「あんまり鈍いと、どうなるかわかってるよなあ？」

見ている不愉快になる光景だった。

青ざめたお婆さんは、慌て席を立とうとするも、腰が弱いらしく、うまく立てない。

焦れた若者Aが、老婆の服を掴み、床に叩き伏せる。

乗客の中に、助けようとする人間は皆無だった。非難の目を向ける者もいるが、若者に睨み付けられただけで、視線を外す。

若者が老婆の杖を蹴り上げた所で、僕はやれやれと首を振って、

「おい」

「恥を知れ！」

しかし、僕が席を立つよりも早く、ちみっこちゃんが動いていた。落ちていた空き缶を若者達に投げ、手を堂々と若者に向ける。

「貴様ら、その歳まで何を学んできた！ 集団で弱者を痛め付けるなど、人として下の下、最低の行為だぞ！」

真っ直ぐ、偽りの無い意見だった。

ある意味、ここでちみっこちゃんが僕より早く動いたのは幸運だった。

あのままだと、恐らく僕は零崎をしていたから。

だが、その代償は大きかった。

「ギャーギャーうるせえガキだな」

「おい、このガキの保護者はいるか！ 出てこい！」

隣で沈黙していた真紅郎君が、立ち上がる。

「俺が保護者です、すみませんでした！」

真紅郎君はちみつこちゃんの後頭部に手をやり、頭を下げさせた。確かに、これは最良の解決策ではある。プロの人間は仕事以外でその力を行使しない。原則にして鉄則だ。

だが。

(いや、違うでしょーよ)

そこは、《そう》じゃないだろ。

「本当に、すみません。俺からきつく言い聞かせておきますから、勘弁してください」

おいおい、何で謝ってる？ ちみつこちゃんは間違っていないでしょうに。

そんな真紅郎君を軽蔑するように、若者は言う。

「腰抜け」

言いながら、若者の一人が、真紅郎君を蹴った。
他の連中も、似たり寄つたりの事をする。

「……ったく」

真紅郎君。そこは謝る所じゃない。ちみっこちゃんみたいに、体張って止める所だ。

僕はバツクの中敷きから、深淵夢想を取り出した。もちろん鎌の刃は取り外し、ただの横笛にして。

口をプレス部分につけ、若者の前に立つ。

横笛を持った姿に、若者は一瞬瞠目したが、やがて苛々したように叫ぶ。

「なんだ、テメ」

「作曲 零崎曲識。作品NO.6 『雲梯』」

次の瞬間、曲とも呼べないような、大量の火薬が爆ぜたような音が、車両内に響く。

そして男の一人は隣の車両にまで吹っ飛ばされた 否、僕の奏でた曲が吹っ飛ばした。

曲兄作曲、『雲梯』。その旋律が奏でるのは 音による衝撃波。

繊細さにも、精密さにも欠けた、物体としての音。

音は意図的に遮断している。だから、真紅郎君とちみつこちゃん。そして残りの若者二人以外には、若者が突然吹き飛とんだように見えただろう。

いや、この四人にも、何が起こったのかは分からないだろうな。

僕は深淵夢想から口を離し、隣の車両にいる男の襟首をひつつかむ。幸いにも気絶しているだけのようだ。まあ手加減はしたしな。

と、ちょうど電車が駅につき、ドアが開いた。

僕は元の車両に戻り、未だに怯えが伺える若者二人を、外に思い切り蹴飛ばし、その上に気絶した男を放り投げた。

「見逃したげるよ。とつとと消えろ」

僕が冷淡に言い放つと、若者達は、悲鳴を上げて去っていく。気絶した一人は置き去りで。

やがて扉が閉まり、駅の景色は遠ざかる。

「はあ」

溜め息を一つし、僕はへたりこむ真紅郎君に手を伸ばす。

「大丈夫？」

「う……うん」

「ちみつこちゃんも、怪我はない？」

「う、うむ」

「ならいいんだ。さて、そろそろ座ろう」

二人とも、まだ興奮冷め遣らぬと言う顔だったが、僕が促すとようやく席についた。

乗客は、僕達を意図的に見ないようにしていたがどうでもよかった。ただ静観していたモブキャラ風情など、気にするのも面倒くさい。

「おまえさ、あんまり無茶しないでくれよ、夕介君がいなかったら……」

と、これは真紅郎君。やれやれ、まだそんな事いつてんのか。

「正しい事を行うのに、何を考える必要がある！ あんな卑怯者どもにへいこらしおって！ えーい腹立だしー！」

「そんな単純なもんじゃ……」

「それに、さっきのあれは何だ！」

「あれ？」

「君の最高にカッコ悪い作り笑顔だよ」

「そうだろ？」とちみつこちゃんを見ると「そうだ」と頷いた。
冷やかな眼差しと無然とした表情を浮かべ、ちみつこちゃんは続ける。

「お前なりの処世術なのかも知れんが、私はそういうのは嫌いだ。
相手の機嫌を取るために笑うなど、グノコツチョーである。いいか、
真紅郎？ 楽しいから笑うのだ。嬉しいから笑うのだ。お前の不細
工な笑顔は、物事に真剣に向き合っていない証拠。逃げている証拠
だ」

正確かつ正しい指摘だった。

真紅郎君が何も言わないのは、ああは言いつつも、ちみつこちゃん
の行動に感銘を受けている自分がいるからだろう。

「使え」

ちみつこちゃんは真紅郎君に、白い刺繍の施されたハンカチを手渡

した。

「使用人が汚いと、私の品位まで疑われるではないか」

真紅郎君は礼を言ってハンカチを受け取る。

今といい、銭湯での事といい、互いの欠落した物を補い合えるそれは人間関係において当たり前であり、一番難しい。

(だから、本当にこの二人次第なんだよな)

お互いがお互いの、心の闇を晴らせるかどうかは。

僕が二人の様子を横目で見てみると、ちみっこちゃんがこちらを振り向いた。

「……ありがとう」

何が、と聞きかけたが、それが自分を助けた事への礼だと気付く。言いづらそうなのは……やっぱりあれが原因だろう。

なほほ。

「礼はいいよ、《紫ちゃん》。僕が勝手にした事だ」

紫ちゃんが目を見開く。本当に驚いたようだった。

だが、これは僕なりの敬意だ。

偽りの無い、真っ直ぐな行動を見せてもらった事への敬意。

「さつき真紅郎君に言った事、忘れないようにしなよ。誰かのために、本当に何かができる人間って、少なくなっちゃったからね」

そう言って、紫ちゃんの頭を軽く撫でた。

不思議と、紫ちゃんは嫌がらず、満更でもない顔をする。

笑みをこぼし、僕は目を閉じる。

(互いを補い合う、か)

僕には必要無い物だ。

補い合いは、言ってみれば他人に負荷をかける事なのだから。

気分はダンジョン突入前

最初に言っておく。

僕は今かーなーり、機嫌が悪い。

ゆらありゆらあり。西条玉藻。

そんな足取りのまま、僕は5号室。つまりは真九郎君の部屋を訪ねた。

ノックくらいするべきだったかも知れない。

だが、今の僕にそんな余裕は無かった。

目が据わった状態で、ゆっくりと扉を開ける。

「……………」

絶句した。

「あ」

「あ」

「む」

上から順に、真九郎君、夕乃さん、紫ちゃん。

「いろいろお、言いたい事はあるけどお」

ついに口調までも西条玉藻風に。

確かに突っ込み所は多々あった。

何で夕乃さんがいるのかとか、紫ちゃんがなんで素っ裸で、真九郎君の布団にいるのかとか。

しかし、それよりもまず。

「あんみん、ぼおがいだよお」

額に怒りマークを浮かべた。

只今の時刻、早朝6時也。

例によって例のごとく、事の真相は至極ありふれた誤解。

真九郎君が紫ちゃんを預かっているのを知らなかった夕乃さんが、差し入れを持って家を訪問。

そこで日頃から、一糸纏わぬ状態で寝る癖のあった紫ちゃんと鉢合わせ。

なんやかんやで、紫ちゃんと夕乃さんが、お互いが表御三家と裏十

三家である事を知っちゃって。

結果、真九郎君に説教をしていた夕乃さんの声や、紫ちゃんが裏三家である夕乃さんを罵倒する声が下まで響いちゃったわけである以上、Q.E.D。

「成る程。つまりは真九郎君が、紫ちゃんを護衛していたのを秘密にしていたのと、紫ちゃんにしっかりと教育指導しなかったせいで、僕の安眠が邪魔されたと」

「う、うん。まあ……そう、なる、かな」

真九郎君は思いつきり畏縮していた。

後で夕乃さんに聞いたら、この時の僕は、まさしく鬼の形相だったらしい。

そして、僕は鬼の形相のまま、夕乃さんを見る。

「……もう少し、静かにできなかつたんですか？」

「すみません……、声を荒げてでも、真九郎さんを正しい道へと導かなくてはと思ったので」

「……それは僕に対する挑戦と取りますよ？」

近所迷惑よりも、説教を取るって、どういう神経だ。

夕乃さんは僕から、布団の上で正座させられている真九郎君へと目

を移す。

「真九郎さん。今日は学校が終わったら、道場で待ってます」

「えっ、道場？」

「不健康な衝動は、運動で発散するのが一番ですから」

にこりと笑う夕乃さん。しかし、それとは裏腹に、目が全然笑っていない。

「いや、不健康って、俺は別に……」

「お返事は？」

「……はい、わかりました」

黒いな、夕乃さん。

呑気にそんな事を考えていると、夕乃さんがこんな提案をしてきた。

「紫ちゃんと夕介君も、一緒にどうぞ。夕飯をごちそうします」

「はい？」

「あ、ご用事がありましたか？」

「いや、無いですけど……」

無いけれど。夕乃さん、わかってるのか？僕と紫ちゃんが貴女の家

に行くのがどういう意味になるか。

「いいんですか？僕は殺し名三位の《零崎》ですよ？」

「正気か？わたしは表御三家の九鳳院だぞ？」

隣にいた紫ちゃん（さすがにもう服は着ている）と綺麗にユニゾン。

真九郎君は訳が分からないといった風に困惑している。

「ええ、構いません。それに」

僕の方を見ながら夕乃さんは言う。

「今が話すべき時のようですから」

「……左様で」

つまりあれか。

いい機会だから、真九郎君に表御三家や裏十三家の話にからめて、殺し名や呪い名辺りの説明をしまおうというわけか。

「でもそんなの、夕乃さんか、現崩月の党首とかがしてくれればいいんじゃないですか？」

わざわざ殺し名現物と呼ばなくても。

「私はあまり殺し名や呪い名に詳しくないんです。お祖父ちゃんなら知ってるでしょうけど……、何分いい加減な人なので、真面目に

答えてくれないかも知れないんです」

「……はあ、わかりました。行きますよ。夕飯も食べたいですしね」
ちらりと紫ちゃんを見ると、しばらく夕乃さんを胡散臭げに見ていたが、やがて諦めたように息を吐く。

「……良からう。裏の連中の棲家、どんなものか興味はある」

「では、お待ちしています」

微笑んだまま会話を終えた夕乃さんは、鞆の中からエプロンを取り出して身につけた。

そしてそのまま慣れた手付きで部屋の掃除を開始。

「さあ三人とも、お布団を畳んで下さい。良い子には、美味しい朝食が待っていますよ」

「って、僕もですか」

「夕介君は、自分の部屋を片付けてきて下さい。あとで点検に行きますから」

うわ、しっかりしてんなあ。

感心しながら、僕は真九郎君の部屋を後にした。

「それにしても……」

表御三家、裏十三家、殺し名が一つ屋根の下に揃い踏みか。

なんというか。こう改めて考えてみると。

「……僕の縁ってどんだけ捻れまくってんだろ」

出来るならあなたと代わってやりてえよ《人類最悪》。

その後、授業を滞りなく終え、真九郎 & a m p ・紫ちゃんと共に、夕乃さんの家へ直行となった。

それなりに距離はあるらしく、電車での移動。

紫ちゃんは最初こそ、景色を楽しんでいたが、崩月の屋敷が近づくとつれ、口数が減ってきた。

顔も段々と余裕が無くなっていく。

真九郎君が心配になったのか、紫ちゃんに声をかけた。

「大丈夫か？体調が悪いなら……」

「確認しておきたい事がある　私を守ると誓えるか？」

「……今更何言ってるんだよ。守るに決まってるだろ」

「《崩月》の人間が、例えばあの夕乃という女が、私に牙を剥いてきてもか？」

「そんなこと……」

「紅真九郎は、私の味方になるのか？」

真剣な眼差しだった。

崩月は、裏十三家の中でもかなり温和な方だと聞いている。

表御三家だからといって、危害を加えるようなマネはしないと僕はふんでいた。

しかし、紫ちゃんは、まるで一世一代の大勝負に出るかのような口ぶりだ。

「俺は、お前の味方になる。誰からも、お前を守ると誓う。これでいいか？」

真九郎君がハッキリと力強く言う。

その自信が、自分の力からくるものか。それとも崩月家を信じているからかは分からなかったが。

そんな真九郎君を数秒間見つめ、紫ちゃんは一言。

「……頼むぞ」

「あのさ、そんなに嫌なら、別に無理に行かなくても……」

「私は逃げない。嫌なことから逃げて、それが消えて無くなるわ

けではない。だから受けて立つ」

……本当に七歳かどうか疑うよな。

「……うう台詞聞くと。」

「ははは」

そう笑いながら紫ちゃんの肩を叩く。

「ま、気楽に行こうよ。固くなりすぎるのも良くないからね」

「……気楽すぎるのも良くないと思うぞ」

紫ちゃんは渋い顔。

「そうかな？まあ取り敢えず、僕は自分の身は自分で守るから、紫ちゃんは思いつきり真九郎君に守られればいいじゃん。《大船に乗った気で。ただしタイタニック》みたいなの！」

「……その言い方もどうかね」

「真九郎君、突っ込みが冷たい」

それじゃあ巫女子ちゃんも浮かばれない。

「でもさ、真九郎君はちゃんとしなきゃダメだよ。僕は気にしないでいいから、紫ちゃんをしっかりと見てなよ」

「確かに夕介君、昨日凄かったよね　ねえ夕介君。あの時は聞け

なかったけど　夕介君って、何者なの？」

うぐ、しまった。昨日あの後、かなりの戯言公使で誤魔化したのに。見れば紫ちゃんも、興味津々の眼差しで、僕を見ていた。

「横笛を吹いただけで人を吹っ飛ばすなんて事、普通の人には出来るわけないよね？それに、零崎って……」

「はいはい。ストップストップ」

真九郎君を手で制し、僕は言う。

強制終了。

「落ち着きなつて。人間、一つや二つ秘密にしなきゃならない事もあるだろ？それに、僕の場合、それが死に直結するんだ」

音使いは、音使いである事を相手に知られない事で、初めて成立する技術。

曲兄くらいの実力者なら話は別だが、僕の場合は、結構なアドバンテージとなってしまう。

曲兄と違って、僕は人体操作や人心操作に時間が掛かるからな。

「いや、それじゃ納得できないよ」

「しつこい。ダメだったらダメ」

ピシヤリと言う僕。真九郎君が少し怯んだ。

「大体、真九郎君だつてあるだろ？言いたくない事。例えば 《角》とかね」

僕は真九郎君の右腕を指差した。

それだけで何の事を言っているのか悟つたらしく、真九郎君は反射的に右腕を掴んだ。

「な、なんで……!?!」

「……もう少しポーカーフェイス気取りなよ」

バレバレだ。

「《戦鬼》の力は裏世界じゃ、有名な話だよ。ただ希少つてだけで知ってる奴なんてゴロゴロいるだろうさ」

「でも、いくらなんでも見ただけで……」

「判断なんか出来るわけが無いって？ ま、そりゃそうだな」

真紅郎君が《角》を移植しているのに気付いたのは、真紅郎君が崩月の人間であると知った後だが、それでも崩月の格闘術を習っただけで、移植していない可能性だつてあったし。

紫ちゃんはきよとんとしている。

好都合。この子にとって、この話は毒だ。

「小難しい理屈は無いよ。これは勘だからね。さしあたり、超直感をイメージしてくれればいい」

「勘って……、どんな勘なのさ」

「殺人鬼としての勘」

空気が一瞬凍った。

「……それって」

真紅郎君は、顔色を少し青くして僕に聞いてくる。

紫ちゃんには、聞こえなかったようだ。

「どつという意味？」

「焦らない焦らない」

悪戯っぽく、口の端を吊り上げる。

「タ乃さんの家に着いたら教えてあげるよ、昨日の能力については教えられないけど、零崎の事なら教えてあげる」

それが、君にとって良い事がどうかは、保証しかねるけどね。

「うわ、すごい」

崩月家の門前に到着した僕の率直な感想だ。

古めしい日本屋敷。広い敷地を囲む高い塀。そして立派な門構え。こつこつ家は、よくヤクザか政治家の物と勘違いされる事が多いが、そんな生易しくはないだろう。

なんといつても崩月家だ。

真九郎君と紫ちゃんに続き、僕も屋敷内に入っていった。

その間、紫ちゃんは一言も話さない。緊張が顔に出ている。

そんなに気負わなくてもいいと思うけどなあ。

「お邪魔します」

「お邪魔します」

真九郎君が玄関口で挨拶したのを見て、僕もそれに習う。

裏十三家でも、人様の家。

と、その声が屋敷内に反響してすぐ、廊下の奥から軽やかな足音が聞こえてきた。

軽快なリズムを鳴らしながら、その小さな人影は、真九郎君の足にしがみつく。

「お、久しぶり」

自分の足に抱きつく幼い少女を、真九郎君は見下ろした。

紫ちゃんと、そんなに年の瀬は変わらないが、髪は紫ちゃんよりも短く、印象は活発というよりも、物静かな感じだ。

「……いらっしやいませ」

ペコリと頭を下げながら、顔を赤くする。

人見知りが激しいようだ。

「真九郎、何だこの子供は」

靴を脱ぎ終えた紫ちゃんが、自分よりも小さな女の子を指差した。

「夕乃さんの妹の、散鶴ちゃんだよ。ちーちゃん、この子は九鳳院紫、あのお兄さんは、緋色夕介君。仲良くしてあげて」

「……お兄ちゃんがそういうなら、仲良く、する」

「声が小さくてよく聞こえんぞ」

堂々とした不満の言葉に、散鶴ちゃんは泣きそうになりながら、真九郎君の足の陰に隠れてしまう。

年の頃は同じなのに、対称的な二人だな。

僕は真九郎君の側にしゃがみこみ、僅かに見える散鶴ちゃんの髪に向かつて語りかける。

「初めまして、散鶴ちゃん。僕は緋色夕介。よろしくね」

刺激しないように、出来る限りの明るい笑みを浮かべる。

すると、散鶴ちゃんは真九郎君の足の陰から、恐る恐る此方を見た。

「よ、よろしく、おねがい、します……」

かなり途切れ途切れだが、確かにそう言った。

「凄いな、夕介君。ちーちゃんが初対面の人にここまで話すのって、滅多に無いのに」

真九郎君は本当に意外そうだ。

「まあ、子供は嫌いじゃないから」

例外もあるけど（第五話参照）。

「あ……お兄ちゃん」

ちーちゃんが真九郎君を見上げる。

「お姉ちゃんがね……、一人で道場に来てほしいって」

「……ちーちゃん」

真九郎君は僅かに青ざめながら言う。

「紫を居間に連れてってあげて……」

「ッ！？おい！」

だが、紫ちゃんは突如不安げに瞳を揺らす。

「おい、どこに行くのだ真九郎！私を一人にするな！」

「……」

僕も一応いるんだけど、と言えるような雰囲気では無かった。

「だめ……」

慌てる紫ちゃんを、散鶴ちゃんが必死に抑える。

「お兄ちゃんの邪魔しちゃ……」

「はっ……話せ無礼者！私を誰だと……」

そこまで言って、紫ちゃんは口をつぐむ。

紫ちゃんが怒鳴った途端、散鶴ちゃんが大粒の涙を溢し出したからだ。

「コ…コラ、泣くな！わかった…一緒に行つてやるから……」

紫ちゃんはしどろもどろにそう言った。

こつこつところは素直だね。

「信じられん。これが本当に裏の崩月なのか……」

「人づての噂なんてそんなもんさ。突き詰めれば同じ人間ダモノ」

僕は殺人《鬼》だけだ。

「さて、じゃあ僕らは居間で真九郎君を待つて……」

チャチャチャチャツ、チャツチャ、チャツチャチャ〜

どっかで聞いたことのある、というか僕の着信メロディが鳴った。

何の音かは各自考えてください。

つて、誰に対するボケだこれ。

「ちよつと待つて」

僕と紫ちゃんを、居間に案内しようとしていた散鶴ちゃんに待ったをかけ、通話ボタンを押した。

「はいはい。どちら様ですか？」

『世界征服を企む男』

おや？この声、この輪をかけたような戯言は……。

「いー兄じゃねーですか」

電話の相手は、戯言遣い、いー兄こと、いーちゃんだった。

『うん、久しぶり、夕介君。僕のいない間に引っ越しちゃうもんだから吃驚したよ』

「ははは、ごめんよ。でも、しょうがないじゃん。哀川さんの指示なんだから」

『え？そうだったの？』

「そーだよ、ある意味そつちと同じくらい大変なんだから　で、何か頼み事？」

『うん。まあ、頼み事って程じゃないかもしれないんだけど』

「そか、じゃあ、ちよっと待ってね」

保留ボタンを押し、散鶴ちゃんに向き直る。

「ごめんね、散鶴ちゃん。僕、ちよっと用事が出来たから、紫ちゃんを連れて、先に行っていてくれるかな？僕も後からすぐ行くから」

居間とかの場所なら、初めてでも見当はつく。

散鶴ちゃんは、しばらく考えるような仕草をし、やがてこくりと頷

き、紫ちゃんと共に、屋敷の奥へと消えていった。

「そいで用事とやらは？」

紫ちゃんと散鶴ちゃんの後ろ姿を見送って、僕は再び携帯電話を耳に。

『えっと、実は今、結構しんどい状況でさ。もしかしたら無事に帰れない可能性があるんだ』

「へえ。いー兄ってさ、今、卿吉郎博士んとこにいるの？」

『あれ、何で知ってるの？ 玖渚から聞いた？』

「うん。ちょっと前に聞いた。くなぎーは変わらずハイテンション？」

『あいつはいつもハイテンションだよ、場所は選ばないさ』

「その含みのある言い方は、もしかしなくてもくなぎーピンチ？」

『あいつがどう思ってるかはわからないけど、客観的に見るならピンチ。ついでに僕と鈴無さんもピンチ』

ありゃりゃ、鈴無さん巻き添えじゃんか。

「ふむ、じゃあいー兄はピンチ打破のために行動中なわけね。それ？」

『うん。もし僕が帰ってこなかった場合、紫木一姫って娘から、夕

介君に連絡が行くと思うから、アパートの引き払い手続きとか、難しい事を手伝ってあげてくれない？』

いー兄、やっぱり預かってたか、紫木一姫。

よく預かる気になれたな。あんな天上天下唯我独尊の天然娘。

いや、良い子なんだけどさ。

随分昔、哀川さんに連れられて、数回だけ会った事がある。その程度の関係だが、それくらいはわかる。

話す時には無駄に疲れた覚えがあるな。

「わかった。そんならいなら別にいいよ　　そういや、いー兄。兎吊木さんには会った？」

途端、いー兄が沈黙した。

「ややあつて』会ったよ』とだけ言う声が聞こえてきた。

ああ、これはいじめられたんだな。

お気の毒に。

「兎吊木さん、どうしてた？相変わらず、エレベーターぶっ壊してたかな？」

『うん。エレベーターはぶっ壊してた』

「……なんか歯切れが悪いな、いー兄。マジでどうしたの？」

『どうしたと言われても、まあ起こった事を簡単に言うと　　兔
吊木さんが死んだ』

「……………ふうん」

僕は感情のこもらない声でそう呟いた。

「何で？」

『礫にされて、眼球にはハサミがぶつすり。口にはナイフ、胸は腹
まで抉られて、身体器官が垂れ流し。両の足は原形無いくらいに、
べきべきに折られて、両腕は行方不明。これで死なないって方がど
うかしてる』

「随分とあっさりしてるね。さすがは人兄の向こう側」

『それ、言われても全然嬉しくないからやめて。夕介君。自分があ
いつの弟だって言った時も、同じ事言ってたよね』

「あれ？そうだったけ。　　まあ、誠心誠意傑作だな」

後半は人兄の声帯模写である。

『戯言だろ　　って何言わせるのね』

いー兄のノリツツコミ。久々に聞くと新鮮だ。

と、いけない。話が逸れた。

閑話休題。

「まあ何となくわかったよ、つまりいー兄達が、兎吊木さん殺しの犯人にされちゃったと。そしていー兄は見事に一人だけ動く事ができ、探偵学園Qの後半みたいに、仲間の無実を証明すべく奔走中と」

『そう。その通り。イグザクトリイ』

「今って、時間余ってる？よければ、兎吊木さんの死の状況、教えてほしいんだけど」

『あー、ごめん。そこまでの時間はちょっとないかな』

「何とかかなりそう？」

『真相は、正直わからない けど終わらせる事はできる』

「そっか、わかった。頑張ってるね。また骨董アパートに遊びに行くから」

『うん、待ってるよ。崩子ちゃんも萌太君も会いたがってたから』

「オッケイ」

そう言って、僕は電話を切るうとした。

しかし、そこでふと思いつまる。

「あ、そうだ。いー兄、一つ聞いてもいい？」

『？』

僕は、声色を兎吊木さんに変える。

そして恐らく、いや確実に彼が、いー兄に言ったであろう台詞を口にした。

《きみは、玖渚友のことが本当は嫌いなんじゃないのかな？》

『……分からねえよ』

相変わらず感情の読めない声でいー兄は言う。

「あっそ」とだけ僕は言う。

「わかった。それじゃ」

『うん。それじゃ』

通話終了と同時に、僕は深い溜め息をついた。

「分からねえよ、か」

当人に分からないなら、僕に分かるけがないな。

いーちゃん。

戯言遣い。

何人も傷つけ、何人も陥れ、何人も騙して何人も謀り、何人も裏切
つて何人も利用して何人も売り渡し、余りに滑稽で余りに無様で、
とうの昔に手遅れな、人間不信の欠陥製品にして、鏡の向こうは人
間失格の殺人鬼。

だけどいい人。

すげーいい人。

そして玖渚友。

青色サヴァン。

《チーム》のリーダー。

特異中の特異。変則の中の変則。冗談としか思えないくらいにとび
つきのりの、冗談と思えないくらいにタチの悪い、類型の特別変異。

彼女の前では世界さえも、使い捨ての玩具。飽きられるまでの存在。

完全であり、それゆえに決定的に間違いである少女。

完全な存在と、欠陥だらけの存在。

互いに噛み合うようで、これら二つは絶対に噛み合わない。

真九郎君と紫ちゃんのように、すっきりした関係とはまるで逆。

それは余りに歪つて、不安定で、荒唐無稽な関係。

いつか、確実に破綻する関係。

それはきつとそう遠い未来じゃない。

あの絶海の孤島で会った占い師は、「あと二年ちよい」と言っていた。

しかし、僕はそうは思わない。

きつと、もつともつと早い。

いー兄が、欠陥だらけのいー兄が。

あんな重すぎる愛を、受け入れ続けるわけがない。

例え、いー兄しかくなぎーの隣には居られなくても。

くなぎーの身体の事を差し引いても。

どれだけくなぎーが、いー兄を呪いの言葉で縛っても。

……破綻しない方法も無くはない。

しかし、それは余りに有り得ず、まさに奇跡としか呼びようがないやり方だ。

あの二人が、自分自身の在り方を変えなければ、成り立たない方法。

『いーちゃんは変わらないよ。永遠にね』

いつか、蒼モードのくなぎーが言っていた言葉。

これはくなぎーにも言える理屈だが、僕は全くもって同意見。

正直、あの二人が変わる様なんて想像がつかない。

いー兄が変わる。それは、自らの内を晒すのと同義。

くなぎーが変わる。それは、自らの才能を全て捨て去るのと同義。

無茶苦茶な話だ。

「ハッピーエンド以外認めない……か」

あの二人に、それは適応されるんですかね、哀川さん。

「……まあ、いいさ」

とりとめの無い考えにピリオドを打ち、僕は散鶴ちゃんと紫ちゃんの後を追った。

いずれにせよ、僕はまた必ず、いー兄の物語に巻き込まれる。

それこそ、四月や五月のように。

いー兄とくなぎーの関係は、その時に確かめよう。

、数ヶ月後、僕の予想はしつかり的中する。

《人類最悪》と、《橙なる種》の事を除けば、だが。

真九郎君を待つ間の時間は、何事もなく平和に過ぎていった。

正直、拍子抜けした感は否めなかった。

いくら崩月が、裏十三家の中でも温和だと言っても、僕も丸つきり警戒をしていなかったわけじゃない。

だが、その小さな警戒心ですら不要に思う程、崩月家は普通の家庭と変わりなかった。

いきすから真九郎君に聞いたが、崩月家は夕乃さんの祖父。つまりは現党首の法泉の代で裏家業から足を洗ったらしい。

だがそれにしただって、である。

紫ちゃんさえ、今は散鶴ちゃんと微妙な距離さえあるものの、一緒にテレビアニメを見ている。

百聞より一見とはよく言ったものだな。

「あ、夕介君」

呼ばれて振り向くと、夕乃さんの母、冥理さんがいた。

さつき少し話したただだが、年齢よりずっと若く見える印象の女性、ほがらかに話す姿には、かなりの好感を持てる。

「夕乃と真九郎君の稽古、もうそろそろ終わると思うから、お茶を持っていってあげてくれない？」

「ああ、はい。わかりました」

お茶とみかんの乗ったトレイを受け取り、冥理さんに一礼して、僕は居間を後にした。

木造の床をペタペタと踏み鳴らしながら、廊下を進み、それらしい引き戸の前に立つ。「真九郎くん、夕乃さん。お茶が入りましたよ……って、うわあ！」

手が使えないので、足を使い、器用に戸を開けた僕の目の前に、真九郎君の身体が飛んできた。

やば、かわせない。

でも、このまま激突して、お茶を辺りに撒き散らすなんてペタな展開になるのも嫌だな。

コンマ一秒の思考の後、僕は扉の角を掴んでいた足を瞬時に離し、

タイミングを合わせて真九郎君の背中を蹴った。

足にビリビリ響く痛みと、真九郎君の「げほっ」といううめき声が重なる。

衝突スピードと同じくらいの威力で蹴ったから、真九郎君と僕はのけ反りも吹っ飛びもしなかったが、それでも足の痛みだけはいかんともし難い。

「あ……、ごめん夕介君」

「それはいきなり飛んできた事への謝罪？それとも足の痛みに対する謝罪？」

僕らは互いに苦笑いを浮かべるしかなかった。

「しかし、凄いですね、夕乃さん。さすがは崩月というか」

「いいえ。私なんてまだまだ未熟です」

にこやかに言う夕乃さん。

しかし、あの子の稽古を見ていた俺としてはとてもそうは思えない。

事実、真九郎君は未だ起き上がれず、疲労困憊して、夕乃さんに膝枕されたままだし。

「大分体に馴染んできましたね」

数分後、床に手を付いてヨロヨロと立ち上がった真九郎君に、夕乃さんが言う。

右腕を抑えているのをみると、馴染んだというのは崩月の《角》の事か。

「……まあ、何とか」

「ですが、まだ、実戦で使える段階ではないでしょう。今のままで、どれだけ肉体を傷めるかわかりません。最悪の場合、寿命を縮めてしまうかもしれない。ですから、お祖父ちゃんの許しがあるまでは使用を禁じます」

「別に、そんなに長生きしたいわけでもないけどね」

「そんな事を言っではいけません」

「そんな事を軽々しく言うな」

夕乃さんが言うと同時に、僕も口を開いていた。

「真九郎君。世の中、生きようと思っても、理不尽な死を迎えてしまった人は星の数程いるんだ」

僕の周りに存在した人間も、また然り。

「折角拾った命をむざむざ捨てるような真似は止めた方がいい」

夕乃さんも頷く。

「夕介君の言う通りですよ。人間の体は脆いのです。簡単に壊れます。でも、大事にすれば一生使えます。だから大事にしてください。私はこれからもずっと、あなたと一緒に生きたいと思っていますよ」

「……なんか、それ、プロポーズみたいだね」

それを聞き、夕乃さんは顔を耳まで赤く染めあげた。

「そ、そういうことは、やはり殿方の方から言っていたかないと……」

完ツ全に好意を示す行為だったが、超鈍感な真九郎君はまるで気付いた様子がない。

こうなると呆れを通り越して賞賛物だ。

夕乃さんがはつきりと言わないのも問題だろうが。

「らぶらぶですなー」

ふざけ半分で茶化してみた。

「な、なな、何言ってるんですか！べ、別にそんなわけじゃありません！」

慌てて夕乃さんは弁明するが、かなり噛んだ。

やれやれ、押しに強いのか弱いのか……。

「はあ……、もういいです。それで、真九郎君には話したんですか？」

「な、何をです？」

「表御三家と裏十三家の事です。いい加減、マイワールドから帰ってきて下さい」

話が進まねえ。

「い、いえ、まだです。夕介君がいる時に話した方がいいと思ったので」

そこで真九郎君は、ようやく落ち着きを取り戻した夕乃さんを、真剣な眼差しで見る。

紫ちゃんの事もあるし、知っておきたいんだろう。

夕乃さんはそれを見やると、ふっと息をつく。

「わかりました。それでは、お話ししましょう」

「まず、表御三家とは表世界で今も絶大な権力を握る三つの家系のことです。《麒麟塚》、《九鳳院》、《皇牙宮》と言って……」

「はい、俺も名前だけは……」

「そして裏十三家とはかつて裏の世界で力を誇った、《歪空》《墮

花》《斬島》《円堂》《崩月》《虚村》《豪我》《師水》《戒園》
《御巫》《病葉》《亞城》《星嚙》の十三の家系を指します。もっ
とも、今では裏の多くは断絶。もしくは廃業してしまっていますが
……、表は今でも裏の事を警戒し、接触を禁じています」

「表御三家と裏十三家ね……」

真九郎君と夕乃さんがいくらか冷めたお茶を飲むのを見ながら、僕
はみかんをついばむ。

そこで真九郎君が何かに気付いたような表情を浮かべる。

「あの、夕乃さん」

「はい、何ですか？出席番号八番。紅真九郎君」

何だ出席番号って。

僕の心の突っ込みはさておき、真九郎君は続ける。

「今の表御三家や裏十三家の家系に、《零崎》ってありますか？」

「……ああ、そう言えば真九郎さんは、一度学校で、夕介君の本名
を聞いていましたね」

一瞬、怪訝そうに顔をしかめた夕乃さんだったが、納得したように
頷く。

「夕介君の《零崎》は、表御三家や裏十三家とは、少し違う話にな
るんですよ……、夕介君。説明してあげてくれませんか？」

「はいはい」

知ってる知識教え直されるのにも、飽きてきたしね。

「まずは四つの世界から話した方がいいかな　えっとこの世には四つの安定した世界があり、それぞれが少しずつ重なりあっていきます」

「はい？」

「夕介君。もう少し簡単な言い方でお願いできませんか？真九郎さんがついていけてません」

むう。いつも思っけど説明って難しいな。

「わかりました。えっとだね、真九郎君。要は、一概に表世界とか裏世界って言っても、それぞれ《種類》があると考えて」

多分これが一番わかりやすいだろう。

「んで、四つの世界。まず一つ目。今の、ここ。普通の世界」

ダンダンと、道場の床を踏む。

「どれくらいを基準にするかって言うと……真九郎君。ER3シス

テムって知ってるかな？」

「えっと……《學術の最果て》っていうあれ？」

「そうそう」

真九郎君の見解はちょっと甘い、説明する分には十分だろう。

ま、僕もそんなに知らないけど。

実際にそこにいた、いー兄が一番知ってるんだらうけど。

「あれがギリギリ普通の世界。要はボトムだね」

すらすらと僕は続ける。

「更に二つ目。政治力の世界。七つの部署を束ねる《玖渚機関》。一種の結社みたいなもんらしいから、そんなに有名じゃないけれど、他の三つの世界と比べると、その力はかなり広いよ」

それでも限界はあるけれど、と僕はつけ加える。

「んで、三つ目。財力の世界。赤神、謂神、氏神、絵鏡、檻神ら四神一鏡を核とする世界。表御三家はこの世界に入る。まあ、表御三家は普通の世界や、政治力の世界にも顔が広いから、表世界のイメージが強いけどね」

「そっか……表御三家って言うくらいだから、表世界だけに影響力があるかと思ってたけど」

「どんな物にも表裏があるっていい見本だね　そして、表御三家、四神一鏡、玖渚機関でさえ忌避し、滅多に手を出さないのが　四つ目、僕や真紅郎君、夕乃さんがどっぷりと浸かっている暴力の世界だ」

夕乃さんの顔が少し曇った。

んな顔しないでよ。自分のいる世界を再認識されるのが好きじゃないのはわかるけどさ。
話しづらいじゃん。

咳払いをしつつ、話を続ける。

「要するに秩序だった無秩序な世界かな。裏十三家はここにカテゴライズされる。荒唐無稽、奇妙奇天烈。人外魔境ここにありって感じ　裏社会で最後に物をいうのが力って事ぐらい、揉め事処理屋の君ならわかるだろ？」

「……うん。それは、わかる」

「ま、その理屈を具現化したような世界だよ。以上の四つの世界が互いに睨み合い、パワーバランスを保ってるのが現状　ここまでいいかな？」

「……えっと、それ本当の話？」

信じがたいという顔をする真九郎君。

「……夕乃さん」

「全部本当ですよ。真九郎さん」

助け船を出すように促すと、夕乃さんは微笑を浮かべながら、真九郎君をたしなめる。

「今の話を聞いた上で、真九郎さん。これだけは忘れないで下さい。あなたは《崩月》の人間。いえ、《崩月》の戦鬼として、既に裏十三家に組み込まれている」

真摯な眼差しで、夕乃さんは真九郎君を見る。

もはや他人事ではないと、夕乃さんは言っているようだった。

僕は頭を掻いて、補足説明をする。

「紫ちゃんが、崩月を警戒していたのも、それが理由さ。以前から、表御三家を清流。裏十三家を濁流とする風習があるらしいからね」

「夕介君、そんな言い方……」

「いいんです。真九郎さん。事実ですから」

「……それにね、真九郎君。それを言えば、僕だって似たようなもんだよ」

いや、殺し名や呪い名は、裏十三家と違って、今も断絶してないから、余計に夕チが悪い。

「それじゃあ話を戻すよ 《殺し名》は、《匂宮》《閻口》《零崎》《薄野》《墓森》《天吹》《石皿》から成る七つの殺人集団。

そしてその中で《零崎》は、ひらたく言えば殺人鬼の集団さ」

「殺人鬼の……集団？」

真九郎君が息を呑む音が聞こえた。

「まあ、殺人鬼って言っても、他の家と変わらないんだけどね。やつてる事は殺人だから。違うのは 殺す理由」

「……殺す、理由」

「そう。《匂宮》は誰にだって頼まれれば殺す。だから 殺し屋。《闇口》はある特定の他人のためにのみ殺す。だから 暗殺者。《零崎》は理由なく殺す。だから 殺人鬼。《薄野》は正義のために殺す。だから 始末番。《墓森》はみんなのために殺す。だから 虐殺師。《天吹》は綺麗にするために殺す。だから 掃除人。《石皿》は生きていくべきでない者を殺す。だから 死神。さらに、それに対応する形で《時宮》《罪口》《奇野》《拭森》《死吹》《咎風》。六つの非戦闘集団が存在する。 零崎にだけは 何故か対応する名がないけどね」

なんか、悪戯を白状する子供の気分だ。

「そして零崎は 殺し名の中でも、忌み嫌われる、血の繋がりはなく、流血によってのみ繋がる、生粹にして後天的な殺人鬼の集まりだ。理由もなく、ただ何となく人を殺し、そこに罪悪感を抱かない、《殺せる人間》。家賊のようにある殺人鬼達」

いつの間にか、空気が重く、沈んだものになった。

そりゃそうか。

零崎は猟奇的さ加減で言えば、それこそ崩月とは正反対の家系。

夕乃さんは、自分の人殺しの血を忌避しているようだが、そんなのはまだマシだ。

何せ、一族で一番まともであるはずの、《零崎》の殺人衝動を抑えられる零崎である僕でさえ、こんなろくでなしなんだから。

「真九郎君は、人を殺した事、あるかい？」

「え……？」

「僕はあるよ」

なんの感慨も無く、僕は言葉をつむぐ。

「何人も、何人も。老若男女容赦無しに、殺して解して並べて揃えて晒してきた。君からすれば、最も嫌いな人種じゃないかな？」

真九郎君は黙ったままだ。

僕は畳み掛けるように話す。

「軽蔑するなら早くにしてくれ。ここで僕の素性を話させたのは、零崎と一緒にいる事への、危険さを理解して欲しかったんでしょ。夕乃さん」

夕乃さんは沈黙、つまり肯定だ。

「すみません……夕介君。なんか騙してたみたいで。でも私……」

「別に責めてるわけじゃないです。夕乃さんの判断は正しいですから」

謝る夕乃さんを制して、僕は続ける。

「僕は《零崎》の特徴とも言える殺人衝動を抑えられる特殊な零崎だ。だから理由無く人を殺す事は無い」

これは、哀川さんとの契約の内。

大切な人間を傷つけた人間しか殺さない。

それだけは遵守する。

「ただ、それでも僕が殺人鬼である事には変わらない。僕は人を殺すのに何の感慨も無い。仮に、僕が君を殺したとしても、僕はどうとも思わない。次の日もただ朝食食べて学校に行く。猟奇的もいところだ。ねえ、真九郎君。もし僕が人を殺す場所にいたとして、その一部始終を見たとして……」

君は僕と今まで通りでいられるの？

真九郎君はただ黙って、僕の話聞いていた。

僕は目配せで夕乃さんに話のバトンを渡す。

夕乃さんはこくりと頷く。

今の彼には酷なようだが、今の事を知った以上、自分のいる場所を理解してもらわなければ。

「真九郎さん。こう言う事なんです。裏の世界で生きるというのは、夕介君のように、その世界にいるという事を逃げずに、認めなければなければならないんです。真九郎さん。我が家も零崎程ではありませんが、人殺しの家系です。紫ちゃんに嫌われても、当然なくらいに」

僕は夕乃さんの言葉を吟味していた。

祖父の代で引退、と言うことは、夕乃さんは人を殺した事は無いだろう。

だが、《崩月》の殺しの力と技は絶えていない。さっきの稽古でも、それは顕著に出ている。

そして夕乃さんや散鶴ちゃんも、これから先、その人殺しの力と技を伝えていく。

「血に穢れが宿るなら、私や夕介君の血は穢れています。それはもう酷いものでしょう。世の中には霊視能力、というものがあるらしいですが、私、そういう力が無くて本当によかったと思っています。もしもそんなものがあつたら、我が家の穢れを目の当たりにして生

きていかなければなりません」

「……僕も願ひ下げだね。そんな力」

ただでさえ狂人揃いの家賊だつてのに。

これ以上、精神負荷を掛けられたら、しまいにや過勞死する。

俯き気味の真九郎君の顔を覗き込むようにして夕乃さんは言った。

「……怖いですか？」

後悔していますか？と僕には聞こえた。

きつと、真九郎君にも伝わつただろう。

「俺、夕乃さんのこと好きだよ。崩月家の人たちのことは、みんな大好きだ。それに夕介君も、まだ会つて間もないけど、悪い人じゃないのはわかる。今まで何人の人を殺したとしても、俺の知つてる夕介君は今の夕介君だから」

嘘も偽りもない真九郎君の答え。

その言葉に、僕は少し驚いて、夕乃さんは少し頬を染める。

僕にとっては意外だった。

絶対、白い目で見られると思つたのに。

「殺人鬼に言う言葉じゃないな。それは」

そうして苦笑いを返し、真九郎君も顔を綻ばせる。

「あの、真九郎さん。一つお願いがあるのですが……」

夕乃さんが顔を染めたまま、おずおずとした口調で言う。

「ん、何？」

「もう一度言ってもらえませんか？今の言葉」

「えっ、今のって？」

「真九郎さんが、わたしのことを、その……」

……ああ、好きだっていうセリフか。

多分真九郎君に他意は無かったと思うが、端から見れば告白セリフに聞こえなくもない。

声帯模写で出してあげようかと一瞬思ったが止めた。

さすがにそれは悪趣味だ。

結局、この後、真九郎君がああセリフをリピートして、夕乃さんが卒倒しそうになったのは、また別の話。

「稽古とやらは楽しかったか？」

三人で居間に戻って来て、夕食を食べ終えた後、紫ちゃん不機嫌そうに言う。

「え？ああ……」

「あまりに長かったので、私の存在など、もう忘れられたのかと思っただぞ」

「悪かったよ　で、崩月家の感想は？」

「恐るるに足らんな。書物や人から聞いただけでは、事實はわからんものだ」

そこに、今までの警戒心は無かった。

「そうか」

真九郎君が頭を撫でると、紫ちゃんは珍しく嫌がらない。

大きな欠伸をしている所からして、眠気のせいではな
いだろう。

年相応の姿を見せる紫ちゃんを、真九郎君は背中に背負う。

「じゃあ、そろそろ帰る？真九郎君」

「そうだね。じゃあ夕乃さん。俺達そろそろ……」

「あ、真九郎さん。これを」

紙袋を手渡す夕乃さん。真九郎君が持てないので、僕が代わりに受けとる。

「私が昔使ってたやつです。紫ちゃんにあげてください」

「ありがとうございます。夕乃さん」

「今度訪ねた時に彼女が裸だったら、私、本気で起こりますからね？」

「……必ず着させます」

「夕介君も注意してて下さいね」

「あ、はい」

ぶつちやけ面倒だが、抵抗が無意味なのは何となくわかっていた。

僕の返事を聞いた後、夕乃さんは真九郎君の背中で眠る紫ちゃんを見て、クスリと笑う。

「そうしていると、真九郎さん、お兄さんみたい」

「ああ、確かにそう見えるね」

「そうかな……」

真九郎君は複雑そうな顔をしながらも、まんざらでもなさそう。

微笑ましいよな。

門の前でもう一度、夕乃さんにお礼を言って、僕達は夜道を歩き出した。

まだ少し肌寒い道は、頭が冷えて嫌いじゃない。

「真九郎君」

「何？」

「さっきのあれは……少しだけ嬉しかった」

《あれ》が指すものが何かは言わなかった。

しかし真九郎君はそれを正しく察してくれたらしく、僕に笑いかけてくれた。

これは戯言じゃない。

本当に嬉しかった。

例えば真九郎君が、《零崎夕識》。本当の僕をまだ知らないだけだとわかっていても。

しかし、それは嬉しいと同時に、悲しい。

こういう時、自覚させられる。

僕は半端者だと。

とうの昔に、《零崎夕識》になった時に捨てたはずの、甘い幻想、《人》としての運命。

自分からそうなるように、選んで捨てた筈の選択肢。

だが、僕はまだそれを後悔しているのかもしれない。

《鬼》としての運命を選んだ今でも。

《零崎》を抑えられる特異な零崎。

それ故に、《人》と《鬼》どちらにも依存できない、ダブルバインド。

要するに、どちらも捨てられないのだ。

《人》としての自分も、《鬼》としての自分も。

どちらを選ぶか、それは永遠の問題だ。

その間ずっと、《人》の時は《鬼》が、《鬼》の時は《人》が、僕を責め立てる。

どちらを選ぶのかと。

まさに無限地獄だ。

道場で、真九郎君にはああいった。

だから僕は、真九郎君に聞こえないように、弱音を吐いた。

「死にてえな」

零崎として、人として、僕は笑って死ねるのかな。

ツンデレの定義がよく分からない

放課後　屋上に、軽やかな音が響き渡る。

いつものように遮断などしていない生の音。

作曲　零崎夕識。作品NO15　『黒の常闇』。

三十分という演奏時間を終え、深淵夢想から口を放した。

息はわずかに途切れ、体は少し震えている。

自分の事ながら情けない。

曲冗なら、百四十四時間二十四分十三秒の曲でも演奏仕切れるのに、ただか三十分の演奏でこのザマだ。

今の僕の、演奏可能時間の最大は、三時間弱。

比べるのもおこがましい。

酸素運動が激しい吹奏楽器だから、なんて言い訳は通じない。

曲冗なら、楽器は関係無い、オールラウンドプレイヤーであるあの
人に、全ての楽器を使いこなすあの人に、それは挑戦とすら言えぬ
議題だ。

『楽器は、ただの楽器だよ。それだけで素晴らしい存在だが、しか
し突き詰めれば音を出すための道具に過ぎない』

昔、曲兄が言っていた言葉。

《音》でさえあれば音使いにとってはそれでいいという意味。

感服の一言だ。

「僕なんて」

横笛しか吹けないのに。

昨日、夜道で考えていた事をふと思い出した。

自分が中途半端である事。

それは、《零崎》に限ったことじゃない。

音楽にしたって そうだ。 僕が深淵夢想、つまり吹奏楽器を武器として使う理由。

それは吹奏楽器しか使えないからだ。

それ以外の楽器は全て駄目。

まるで扱えない。

努力すれば曲兄のように、とまではいかずとも、ある程度、少なくとも実戦で使えるくらいにはなれると思ひ、必死に使いこなそうとした。

だが無理。

向き不向きとかそういう問題じゃなく、《吹奏楽器以外の楽器が使えない》。

音使いの 出来損ない。

結局、何処まで言っても、僕は半端者。

だから、楽器に武器としての機能を組み込んだ。

音だけでは、戦えないから。

楽器を武器にする音使いは、いる。

だが僕は、曲兄のようになりたかった。

音を支配するあの姿に、憧れた。

だから、そうなれなかった僕は出来損ないだ。

この事実がわかった時、曲兄は感情の読めない口調で言った。

悪くない、夕識。吹奏楽器しか吹けなくとも、何の問題もない。

むしろ、僕のようなタイプの方が珍しいんだ。

節操がない、とも言える。

だから夕識。お前は、僕を指すな。

お前は。

あれ？

あの時、曲兄はなんて言ったんだっけ？

「……………え、真九郎君が？」

「ええ、依頼先でハマやらかしたらしいわ。今は治療中みたい」

ネガティブな考えの後、真九郎君と一緒に帰ろうと彼を探す傍ら、廊下で銀子ちゃんと出会った。

彼女に聞かされたのは素直に驚く話題。

仕事で赴いた暴力団の事務所で、真九郎君が負傷したとの知らせ。

それは、《崩月》がたかだか、一般の武力構成員に手傷を負わされたという事。

一応、その暴力団は大手の系列らしいが、それでも末端に過ぎないのだ。

昨日の真九郎君の稽古を見る限り、彼が遅れをとるとは思えない。

「背中に銃弾十数発ってそれ、大丈夫なの？」

「それは大丈夫だと思う。第一、この連絡してきたのだって、あいつなんだから。身体だけは、頑丈な奴だしね」

「そう、そりゃよかった。で、何でその話を僕にすんの？」

「……別に。ただ、あなたがあいつの知り合いだから、言っておこうと思っただけよ」

「……もっと直接的に言やいいのに」

「？」

「心配なんですよ？真九郎君が」

「ッー」

顔を真っ赤にして仰け反る銀子ちゃん。

図星か。

「だよな。頑丈な奴だとわかってはいても、万が一、という事もあるしねー。だから、僕にそれとなく、真九郎君の見舞いに行ってもらえるように、今の情報を話したんだよね。いや、優しいね、銀子ちゃんは」

さっきの暗い思考の反動か、思いつきり意地悪な口調になる。

銀子ちゃんは、目で見える全ての部分を真っ赤にして必死に反論。

「ち、違う！違うわよ！ た、ただ、あいつが頼りなさ過ぎるから、幼なじみとして放っておけないっただけ！」

多分、銀子ちゃん、自覚は無いんだろうな。

今のセリフがツで始まって、レで終わる属性を含んでいるのに。

やべ。反応見るのが滅茶苦茶楽しい。

からかいはさらに続く。

「じゃあ、好きじゃないんだ」

「すっ……！ と、とにかく、私は真九郎の事なんてどうとも……」

「あれ？ 今の質問、僕は別に真九郎君の名前は出さなかったけど？」

「!?!」

計画通り！

いー兄、僕は戯言遣いであるあなたに出会えて本当によかったと思います。

完全にパニック状態の銀子ちゃん（「うわあああ！」と奇声を発しながら廊下の柱を叩いている）を見て、笑わないようにするのは、かなりの忍耐力を要した。

だが、その反面、さっきまで沈みがちだった気分は幾分か晴れた。

「全く分かりやすいよね、夕乃さんも銀子ちゃんも。わかった。見舞いには行くよ……心配しなくても、真九郎君には何も言わないよ」

銀子ちゃんの恨みがましい目付きに、僕は顔をひきつらせた。

「じゃあ、これ。真九郎のいる病院の住所。そんなに遠くはないから、歩いて行けるでしょ」

「はいはい。あ、銀子ちゃん」

僕にメモを渡して、去ろうとした銀子ちゃんを呼び止めた。

「……何？」

「真九郎君、頑張ったんだから、今度は銀子ちゃんが頑張りなよ。……九鳳院の情報網が手強いのはわかるけどね」

「……言われるまでもないわ」

銀子ちゃんは呟くように答え、そのまま振り返らずに、廊下の角を曲がり、僕の視界から消えた。

「ははは。余計な心配だったか　さて」

手元のメモを見て、住所を確認。

銀子ちゃんの言う通り、ここからさして距離はない。

書いてある地図も正確なので、迷いはしないだろう。

メモをしまい、歩きながら僕は別な事に思考を巡らす。

こと戦闘において、なんの問題もない真九郎君が、怪我を負ったわけ。

確かに色々と不確定要素はあるが、その中で最も可能性があるのは……。

「……やっぱり、連れてっちゃったんだろうな」

やれやれ。

しょうがない。行きがてらお菓子でも買っていくかな。

あの子も、さすがにしょげかえってるだろうしね。

下町の一角に診療所を構える山浦医院。

規模は小さく、銃弾の治療をするにとしては、頼りない印象を受ける。

しかし、銀子ちゃんのメモに書いてある走り書きによると、院長である山浦先生は、大戦において、ゲリラ治療をやったのけた大ベテランの医師らしく、現在も表裏問わず、数々の人間を治療しているらしい。

実際、待合室にいる人々は、杖つく老人から、派手な刺青を入れた者まで多種多様。

そして、そんな魑魅魍魎の集まる待合室に、九鳳院紫はいた。

彼女自身、外傷は無い。

普段と違つのは、いつもの勝ち気な態度は微塵も無く、今にも泣き出しそうな表情をしている事。

その儂げな姿から、僕は予想が的中した事を悟った。

「紫ちゃん」

僕が話し掛けると、紫ちゃんは、俯き加減だった顔をゆっくりと上げる。

「ゆづ……すけ」

「やあ。元気……じゃあ無いな。大丈夫？」

「……私の事はいい。それよりも真九郎が……」

またしよげかえる紫ちゃん。

こりゃあ、相当ショックな体験したんだな。

「あ、まあ、元気だしなよ」

変に言葉足らずな言い方になる。

子供の扱いには手慣れてるつもりだったのだが、この子は普段がそんな態度だから、調子が狂うのだ。

ひょいと、隣に座って途中で買ってきた菓子類を紫ちゃんに差し出す。

「いる？ 待ってるの、疲れただろ？」

しかし、紫ちゃんは首を振る。

「いらぬ 真九郎が苦しんでいる時に、そんなもの食べられない」

「……………」

内心、かなり驚きながら、差し出した菓子を引っ込める。

ええ、別人に見えましたよ、紫ちゃんが。

なんだよ。このサプライズイベントの数々。

「大丈夫だって。真九郎君なら、銃弾くらいじゃ死なないよ」
怪我の様子は見ていないが、この前の、真九郎君の稽古を見る限り、銃弾撃ち込まれたくらいで死ぬような鍛え方はしていなかった。

それに、命に関わる怪我なら、銀子ちゃんに連絡する余裕はない。
だが、紫ちゃんの様子は好転しない。ただ俯きながら、真九郎君の身を案じ続けるだけだ。

「……ねえ、紫ちゃん。少し休ん」

「私が……悪いのだ」

慰めようとした矢先、紫ちゃんが急に話し出した。

「私がつ……真九郎の言うことを聞かずに、着いて行って、余計な口出しをしてしまったからつ……！ 真九郎は怪我をしてしまった……っ！」

涙を溢しながら話す紫ちゃんは、僕ではなく、自分自身に話し掛けているように見えた。

自分への、責任。

「だからつ……、私だけ休むなんて出来ない……！ 真九郎が戻るまで、待ってなくてはいけないのだっ……っ！」

微塵の揺らぎもない言葉だった。

「………そっか　それなら、何も言わないよ」

短くそう言っつて僕は、せきを切つたように泣き出した紫ちゃんの頭を軽く撫でた。

………つたく、こんな小さい子、泣かせるなよ。

小さな声で、この場にいらない、この子のボディガードに軽く毒づいた。

それから真九郎君が戻つてきたのは二時間後だった。

「やあ、真九郎君。大変だったね」

「あれ？　夕介君、何でここに？」

「銀子ちゃんに言われて、様子を見にね」

「銀子から？」

「心配してたよ。口には出さなかったけど。………それと、静かにね」

僕は口に指を当てる。

隣には紫ちゃんが、静かな寝息を立てている。

あの後、やはり疲れていたのだろう。途中で眠ってしまったのだ。

しかし、寝顔は今も不安気なままで、涙の跡も見受けられる。

「怪我の具合は？」

「致命傷になるようなものは無かったよ。傷痕は少し残るみたいだけど」

「そう、そりゃよかった。それにしてもさあ、真九郎君も罪な男だよねえ」

「は？」

訳がわからないという様子で、真九郎君は首を傾げた。

「紫ちゃん、ずっと真九郎君待ってたんだよ。僕が持ってきたお菓子にも手を付けずに、『真九郎が苦しんでいる時に、そんなもの食べられない（声帯模写）』ってさ」

「声真似上手いね、夕介君……。疲れてただけだよ。きっと」

「いや、それだけじゃないと思うよ。どちらかというと、恋人を待つ女って感じ？」

「……………何か今の夕介君、環さんみたいだよ」

……………。

ガーン。

がくりと診療所の床に、膝をついた。

「ひでえ…。未だかつてここまで人を侮辱した言葉があつたらうか……………、清廉潔白な僕が、あの万年発情女の環さんと同列に扱われる日が来ようとは…！ ああ、駄目だ。もはや何も見えない……………。絶望した……………。暴言が平然と扱われる世の中に絶望した……………」

へこみました。ああ、へこみましたとも

鴉の濡れ羽島で、三つ子メイドに見とれるいー兄を見て、こういう軟派キャラにだけはなるまいと固く誓ったはずなのに……………。

環さんと同列に扱われたら、僕のレベルはいー兄以下だ……………。

「いや、夕介君。そんなにへこまなくても……………。それに、環さんだつていつもあんなキャラなわけじゃ……………」

「じゃあ真九郎君。環さんがあのキャラじゃない時って、十割を全体としてどのくらい？」

「……………」

言葉に詰まる真九郎君。

必死にフォローしようとしているようだが、出た答えは、

「……0、2割」

という厳しいジャッジ。

そら見たことか。

結局、僕が復活したのは、20分後だった。

五月雨荘への帰り道。今回の依頼のあらましを真九郎君に話してもらった。

依頼内容は、とある幼稚園の、土地の権利書を奪還する事。

その幼稚園は、真九郎君と銀子ちゃんの通っていた所らしく、夕子の悪い地上げにあっつてしまい、園長が真九郎君に泣き付いてきたそ
うだ。

そんなバックグラウンドもあつてか、真九郎君はこれを受諾

しかしここで想定外の出来事。

紫ちゃんが、自分を連れていけと言い出したのだ。

当然、真九郎はこれを拒否。

相手は有名所のマフィアの流れを組む暴力団。

そんな場所に紫ちゃんを連れていけるわけがない。

しかし紫ちゃんは、頑として言うことを聞かず、結局、余計な事は喋らないと約束させ、真九郎君に着いてきてしまった。

結果的には、この判断は幸いした。

「銀子の調べてくれた不正な地上げの証拠で、交渉はスムーズにいったんだ。権利書もすぐ返してもらえた。でも、そこで俺がドジ踏んじゃってさ」

自嘲気味に笑う真九郎君の背中には、紫ちゃんが静かに眠っている。

「交渉相手の久能正って男が、俺を騙してたのに気が付けなかったんだ」

「騙す？」

「権利書が偽物だったんだよ。俺がまだ新米だからって理由でなめられたらしくてさ。取り敢えず偽物を掴ましてから、院長を殺すつもりだったみたいだ」

「ああ、なるほど。依頼人が死んでからも、依頼を続ける人間は少ないからね　で、なんで騙されたのに気付いたわけ？」

「紫のおかげだよ」

偽の権利書に騙され、帰りかけた真九郎君に、紫ちゃんが言ったらしい。

久能正を指さして「こいつはウソをついている」と。

「紫ちゃんが？ 読心術でも使えたの？」

「『この世には、ウソと真実がある。たった二種類だ。わたしは七歳だが、七年も生きていればその区別くらいできる』ってさ」

「いや、てさ。とか言われても……」

「俺もよく分からないよ。でも、紫が嘘を見破ったのは事実だからね」

確かに、実際問題そうなのだろう。

そうでなくては、この一件はバットエンドのはずだから。

「んで、真実を見破られて、口封じに殺されかけた紫ちゃんを庇って、銃弾をくらっちゃったと」

「うん。一応脅しもかけたから、あいつらももうあの幼稚園に手出しはしないよ」

ふうん、真九郎君が脅しねえ……。

「真九郎君。相当怒ってたんだ」

「え？」

「だって、真九郎君ってさ、どちらかというと、物事は穏便に済ませるタイプでしょ。この間の電車の時みたいにさ」

「いや、だって今日は本当に紫が危なかったから、無我夢中で……」

「でも、襲ってきたのは君から見れば一構成員だろう。暴力団みたいな奴らは、部下が一人二人やられても、退いたりはしない。にも関わらず、相手方が脅しに屈したのは、そうとう相手を痛め付けたからだろ？」

「違うかな？」と聞くと、真九郎君は無言で頷く。

「紫ちゃんに 子供に銃をぶっぱなした奴らが許せなかったんだろ？」

「うん」

「そう。それだよ、真九郎君」

「……それ？」

「君が強さを手に入れる方法」

真九郎君は首を傾げる。

急な話題転換についていけないんだろう。

「俺が、強くなる方法？」

「うん。この間の稽古見てて気付いたんだけどさ…。真九郎君って、

《戦うの怖がってるよね》」

「！」

真九郎君の顔が本当に引きつった。

知られてはいけない事を知られた。

そんな感じの表情。

「ゆ、夕介君！ それは……………」

「言わねえよ」

真九郎君の言わんとする事を察し、即座に切り返す。

「他の人にはしゃべらないでってんでしょ？特に崩月家の人には」

「……………うん」

「安心しなよ。そこまで悪趣味じゃあない……………ただ、僕の意見を言わせてもらうと、君が戦いに臆病である事を話しても、あの家の人は君を責めないと思うけどね」

みんな良い人だし。

「そんなわけ…ないよ」

しかし、真九郎君は首を横に振る。

「崩月の人は、本当の家族みたいに扱ってくれて…。ただ強くなりたかった俺に、赤の他人の俺に…。八年間も協力してくれた。本当に…。何度頭を下げても足りないくらいに感謝してる…。なのに、それが無駄だったって知ったら…。師匠から戦鬼の力を貰っても、俺の弱虫って本質が変わらないって知ったら…。皆も、きっと俺を軽蔑する…。っ！」

嫌なんだよ…。そんなの…。！

そう言いながら、真九郎君は、唇をきつく噛み締め、そこから鮮血が流れ落ちた。

まるで自らを戒めるように。

(全く、卑屈な考え方だよな)

物事は考え方一つで変わるのに。

それが、家族を失った辛さから来ているのなら、まあ当然かもしれない。

だが、一人で生き抜いていく《強さ》。

そんな物は獲得すべきではない。

手に入れたが最後、人間とはもう呼べなくなる。

人兄、人間失格 零崎人識のように。

「家の都合上、僕は殺意とか、闘争本能みたいなのに敏感でね。稽古の時、君は戦えるだけの強さはあったけど、それを使う意思の強さがない。凄いマシンでも、エンジンが無きゃただのポンコツだ。夕乃さんみたいに見知った人が相手でも、逃げ腰になるのは致命的だよ。そんなんじゃない、実戦でなんかお話にならない。三下ならともかく、プロの殺し屋 そう、殺し名なら《匂宮》。裏十三家なら《斬島》とかね。今の君じゃ、そいつらとは勝負にすらならない」

道の真ん中で、僕らは睨みあう形になっていた。

真九郎君は何も返してこない。

さっきの話を聞く限り、自分の弱さは、自分でよくわかっているんだろう。

溜め息混じりに僕は呟く。

「……もう一度、よく考えな。君が強くなる方法を。本当はここで教えてあげようかと思っただけど、やめとこう。これは君が気付かないとダメだ」

甘やかしはよくないし。

そうして、僕は肩をすくめ、この話題は終わりだという意味表示をする。

所詮はこれも、戯言だ。

タイミングよく、真九郎君の背中で眠っていた紫ちゃんが、もぞもぞと動いた。

「…う、ん」

「ほら、起きたよ。眠り姫が」

僕がけらけらと笑い、紫ちゃんが大きな瞳をしばたかせた。

「しん、くろっ」

「……おはよう。紫」

真九郎君が優しく笑いかけると、紫ちゃんは寝ぼけ声を発し、目を擦る。

「眠いなら、まだ寝ててもいいぞ。もうすぐ五月雨荘に着くし」

紫ちゃんはその質問には答えず、ただ、真九郎君の背中に顔を押し付けている。

その不安げな表情は、真九郎君には見えないだろうが、僕の角度からだとはっきり見えてしまう。

返答をしない紫ちゃんに、真九郎君が心配そうに、顔をしかめた。

「紫、どうした？」

「……怒っているか？」

真九郎君が言い終わるか言い終わらない内に、紫ちゃんが口を開く。

「何を？」

「私が、お前の言い付けを守らなかったせいで、お前が、怪我をして……」

鈍感な真九郎君も、紫ちゃんが責任を感じているのに気付いたようだった。

顔を綻ばせ、背中に背負っていた紫ちゃんを、自分の目の前に。

つまりはだっこの体制。

「怒るわけないだろ。お前には、むしろ感謝してる。ありがとう」
そりゃそうだろう。

紫ちゃんがいなかったら、本当に取り返しがつかなくなっていたんだから。

だが、紫ちゃんは納得いかないようだった。

今回の出来事は、紫ちゃんに深い傷痕を残したらしい。

「で、でも、お前は私を庇って怪我を……」

「紫、こっちを見る」

恐る恐るという風に、紫ちゃんは俯き加減だった顔を上げる。

「俺が嘘をついてると思うか？」

真九郎君の話を聞く限り、紫ちゃんは嘘を見抜ける。

それが本当であるうがなかるうが、真九郎君は怒っていないんだろ
う。

それくらいは僕にも判断がつく。

「どうだ、俺は嘘をついてるか？ 本当は怒ってるのに、無理して
るだけか？」

しばらくして、紫ちゃんは首を横に振った。

「だろ？ 俺は、全然怒ってない」

真九郎君が紫ちゃんを抱きしめ、背中を軽く叩いた。

「お前が無事でよかったよ」

その行為に対し、紫ちゃんは嫌がらず、どころか、真九郎君の肩に
頭を乗せ、微笑んだ。

「真九郎の笑った顔はとてもいいな」

「えっ？」

「ありがとう、真九郎。お前は悪い奴らを、やっつけてくれた」

「いや、あんなのは……」

「真九郎は、強い。強いし、温かい……」

紫ちゃんからは、いつもの固い表情は消えて、その代わりに、柔らかな笑みが浮かんでいた。

真九郎君はというと、紫ちゃんのいつもと違う態度に戸惑っているようだ。

さらには、紫ちゃんの発言。

『真九郎は、強い』

その言葉が、真九郎君に、更なる動揺を与えているようだ。

いー兄とは、また違う意味で自己評価が低いからな。真九郎君は。

急に強いと言われても混乱するだろう。

例え、それが真実であっても。

自分の求める強さが目の前にあっても。

(…今の僕は邪魔だな)

僕は真九郎君に背を向け、五月雨荘とは逆方向に歩き出した。

真九郎君と紫ちゃんに気付かれないように、こっそりと。

「さあて」

真九郎君と紫ちゃんから十分離れた所で、僕は携帯を取り出した。

調べものならパソコンが望ましいのだが、これくらいの情報なら、携帯でも事足りる。

わざわざ、くなぎーが手を加えてくれた携帯だしな。

「……幼稚園から手を引いたって言っても、二人から手を引く保障は無いからね。真九郎君だけならともかく、紫ちゃんをピンポイントで狙われるのは、ちょっと面倒かな」

せつかく紅香さんの思惑通りに行きそうだからな。

早くに芽は潰しとこつ。

行き先の位置を確認し、携帯をしまつ。

ケータイのディスプレイには《極宝会事務所》の文字。

目標は多いだろうけど、ここに来てからは、まだ一人しか殺してないし。

それもいいでしょ。

そう考えると、口から哄笑が漏れた。

「ははは。僕も面倒だよなあ。見知った土地でもない、来たば

つかのここで、もう新しい大切な人が出来てる」

双兄は『惚れっばいよね、夕識君は』とか言ってたけど。

いやいや、全くその通りだよ。

だから面倒なんだよな。僕の殺す条件。

大切な人が多いのも、考え物だ。

これじゃあ、何のために哀川さんと一緒にいるのか。

夜道を走り、深淵夢を取り出しながら言う。

「んじゃあ、一曲 零崎を奏でよう」

「てなわけで、見せしめやら、情報処理やら頼みたいんだけど
いいかな？」

場所は変わって極宝会事務所。

応接室らしき部屋の机に座り、携帯を片手に通話中。

辺りには、首と胴体が綺麗にわかれた肉塊がたーくさん。

結果として、約数十分で零崎終了。

まあ、予想はしてたけど、手応えナツシング。

むしろここに来るまでに時間がかかったくらいだ（所要時間一時間

弱)。

下請けにしちゃあ、頭数はそろってたけど、クリボーは所詮クリボーだ。

クツパクラスの奴が一人くらいはいればよかったのに。

まあ、とにもかくにも、これであの二人にふりかかりそうだった火の粉は払ったわけだ。

僕は事後処理を頼むべく、軋兄に通話中。

くなぎーでもよかったけど、帰ってきてるか分かんないし。

哀川さんに至っては論外だ。

むしろ一番頼んじゃいけない。

これ以上面倒起こしたのがバレたら、マジで殺される。

『ったくお前は。電話してきたと思ったら厄介事っちゃか』

電話向こうの軋兄の声は呆れ調。

「いや、本ツツ当にゴメン。今回はマジ頭下げるからお願い！」

『まあ、そこまで言われて断る理由はないっちゃが……、何をどうしたら、そんな平穩極まりない土地で『極宝会』なんて大御所と関わるんだっちゃ？ 零崎をした理由に関しては……お前の性格上予想はつくっっちゃが』

「色々あんだよ。こっちにも」

『……お前も難儀な奴っっちゃね　いい加減、誰彼構わず好きになる癖、直したらどうっっちゃ？』

「ははは　自覚してるよ。でも、生まれながらの性分だから、止めるに止められないんだよ、これが」

『その皺寄せを受ける俺の身にもなれっっちゃ　ま、わかったっっちゃ。レンの尻拭いに比べりゃ軽いもんっっちゃからな』

「ありがとう。本当に助かったよ、軋兄。じゃあ、また」

『あ、待つつちゃ。レンからお前に伝言があったっっちゃよ』

「双兄から？」

何だろう。ノロケ話なら、あの人は電話で直接言っただろうし。

『俺に夕識から連絡があったら、伝えてくれて言われたんだっっちゃ。一字と違わず言っつから、よく聞くんっっちゃよ』

「……何か随分改まってるね。簡潔に頼むよ」

『じゃあ、いくっっちゃよ。』

《ごめん、夕識君。君が死色の深紅の所にいるのが

蝕織ちゃんにバレちゃった』
はみおり

以上つちや」

……。

軋兄の言葉をじつくり、何度も何度も反芻し、青ざめたり、体を振るわせる。そして、

「なあにいいいいいい!?!」

窓をぶち割らんばかりの大音量で、僕は叫んだ。

『うるさいつちや。俺の鼓膜を破る気つちやか?』

軋兄のぼやきが聞こえたが、今の僕にとってはさっきの発言の方が重要だった。

蝕織、よりによってあのクソガキにバレちゃった! くそう、何でだ!?! 唯一知ってる双兄にも軋兄にもしっかり口止めしといたのにつ!

「あーもう! 誰!?! どっちが口を滑らしたの!?!」

『おいおい、言いがかりっちゃよ。俺もレンもバラしてねーっちゃ』

「じゃあ誰っ!?!」

『人識っちゃ。あいつがこの前、舞織と一回帰って来たっちゃよ。その時、お前が話題に出て、その時、人識が蝕織に教えちまったっちゃ』

「はあ!?! なんで人兄が知って……」

言いかけて、僕は口をつぐんだ。

しまった! 京都に人兄が来た時、いー兄が僕が哀川さんのところにいるの、喋ってた!

そいでもって口止めもした覚えがない!

畜生、いー兄め! 遠く離れても、そのトラブルメーカー気質は留まらずか!

「……軋兄」

『嫌だ』

僕の言わんとする事がわかったのか、にべもなく断る軋兄。

てか、口調も素に戻ってる。

『お前の事になると、蝕織は暴走しだすからな。ああなったら俺でも止まらない。聞いた感じ、お前のミスなんだろ。お前が何とかし

な、《お兄様》』

手厳しい。

しかも《お兄様》の辺りに悪意がこもってやがりましたよ。

「軋兄、お兄様はヤメテ」

『？ 何でだ、事実お前は蝕織の《お兄様》だろう。二重の意味で確かにそうだ。だが、言葉の響きつてもんがある。』

「…そう呼ぶのは、蝕織だけで十分なんだよ」

『そうか？ レンはむしろ、羨ましがる一人称だと思っが』

「あの変態と僕を一緒にすんな」

『きひひひ、悪かった悪かった。まあ、事後処理の方は任せろ。んじゃ、気楽にやれよ』

軋兄は電話が切って、携帯をポケットに入れた所で、僕は開かれた窓から下に飛び降りる。

ゆるやかに地面へ着地し、何事も無かったかのように、事務所を後にした。

「気楽に、か。そう出来りゃベストだけどね」

表御三家、裏十三家、そして零崎蝕織。

こんだけのファクターが揃って、気楽に生きられるかどうか。

「……やれやれ」

憂いを帯びたその言葉は、夜の闇に溶けていった。

芽吹いた心と救いの夜

翌日、真九郎君には悪かったが、早めに五月雨荘を出た。

学校に行く前による所があり、真九郎君と一緒にだと色々と問題の発生しそうな用事だったのである。

ちなみに、五月雨荘を出た時に、またしても上の階がやかましかった。

夕乃さんの声も聞こえたから、また真九郎君が紫ちゃんに関して誤解を受けているんだなと自己完結。

僕も真九郎君と紫ちゃんの面倒ばかり見ているのは疲れるのでね。

「紫ちゃんと夕乃さん……恋敵ってことになるのかな」

昨日のあの態度からして、紫ちゃんも真九郎君に、恋愛感情は抱いただろう。

夕乃さんについては言わずもがな。

果たして丸くおさまるのかどうか。

昼ドラマみたいな感じにならないのを祈ろう。

嗚呼、真九郎君の人間関係がさらに複雑化していく。

(…と、僕も他人の事言えないけどさ)

そうこうしている内に、目的地の喫茶店に着いた。

必然か偶然か（いや、多分偶然なんだろうけど）、以前、紅香さんとの待ち合わせに使われた喫茶店だった（早い開店時間と、渋めのコーヒーがウリ）。

なんだかここが、待ち合わせの定位置になりそうで怖い。

からんからんという、ドアの鈴が奏でる音に出迎えられ、店内へ。手近かなテーブルにつき、たまにはいいかなと思いつながら、コーヒーを注文する。

（待ち合わせより…ちょっと早いくらいかな）

できるだけ早く済ませたいもんだ。

学校もあるし。

連絡が来たのは早朝。寝起きにいきなり電話がかかってきて、近くに来たので、今から会えないかと言う話だった。

あの性悪にケータイの番号を教えた覚えはないが、多分くなぎー辺りが教えたんだろう。

余計なマネを！（心の声）

用事……と言ってもあの人の事だ。

僕への嫌がらせかなにかだろう。

あーあ、鬱だ。

結果によっちゃあ、僕は最悪のコンディションで授業にのぞまなくてはならない。

「てか、あの人、ちゃんと来るのかな……。待ち合わせしといて放置、なんてベタな嫌がらせをするつもりかも知れない……。やっぱ、今の内に帰っちゃった方がいいかなあ」

「おいおい、随分と失礼な物言いだな。この歳になって、そんな悪戯をして喜ぶ趣味はないよ」

後ろから見知った声がして振り替える。

「……髪、随分大胆なイメチェンですね。でも、スキンヘッドも中々お似合いですよ。害悪細菌兎吊木塚輔グリーングリーン」

「お褒めの言葉、ありがたく受けとるよ」

「……………」

嫌味のつもりで言ったのだが、この人には自分の見てくれに関心が無いらしい。

正直、髪があつた頃の兎吊木さんは、かなり格好良かったんだけどな。

中身は別にして。

「ひとまず、おめでとうと言えはいいんですか？ 卿き郎博士
んところから脱出できて」

兎吊木さんはニヤニヤした笑みを返す。

ああ、嫌な笑みだ。真九郎君の偽りの笑みとはまた別の意味で。

「全く、あなたも忙しい人ですね。死んだり死ななかつたり」

「ああ、めでたく復活リ・ボーンというわけだ」

「…読むんですか、少年漫画」

意外。

「まあ、それはそれとして、だ。いつから気付いていたのかな
？ 恐らく《彼》あたりから、事の顛末は聞いていたんだろう？」

この場合、彼というのはいー兄だろう。

「別に。あなたが死んでいないと確信したのは、今朝の連絡です
よ。そもそもいー兄からは、あなたのいいえ、あなたの死体だ
と思われていた物の状態しか聞いてません」

「だが、疑心は持っていたんだろう？」

「それはもう。疑いまくってました。憎まれっ子世に憚る。あなた
みたいな生粋の憎まれっ子が、死ぬなんてとても信じられませんよ

ま、腕が無くなってるって時点で、指紋判別が出来ないようにするためだって推測はつきましたけど」

いや、それ以前の問題だ。

いー兄が兎吊木さんと話した（正確にはいじめられた）という事は、くなぎーも当然、彼と話している。

くなぎー至上主義のこの人が、くなぎーを差し置いて、先にいー兄と話すとは思えない。

そしてその話の内容は、自分と一緒に来てくれ、という事のはず。

その後いー兄と会話したなら、兎吊木さんは、その誘い出を断った可能性が高い。

この時点で、矛盾が生じる。

兎吊木さんが、《チーム》の一人であったグリーングリーン害悪細菌が、くなぎーの誘い出を断るわけがない。

結局の所は感情論。

そもそも兎吊木さんが死のうが生きようが、知ったこっちゃ無かったから、マトモに考えなかった。

いー兄からの情報が少なかつたのもあるけど。

「んで？ いー兄はどうでしたか？」

「ああ、実に興味深かつたよ。以前君から聞いていた通りだ。興味深く腐敗し、素晴らしいまでに逸脱している」

「そりゃ重畳なことって。そう言えば、いー兄は、見抜いたんですか？ あなたの死の真相」

「ああ、気付いていただろうね。でなければ、あんな無茶苦茶な推理は立てないだろう」

「何点くらいだったんですか？ いー兄の推理は」

「あの場を切り抜けるだけなら60点。推理としては一点だな」

「どつちにせよ赤点ですね」

「おや、俺のいた学校で60点はセーフだったかな」

「僕んところはアウトですよ」

最近はや平均点の半分が赤点つてのもあるらしいけど。

この人の青春時代、知りたいような知りたくないような。

「……そっぴや兎吊木さん。マジで何しに来たんです？ まさか真面目に近くに来たから会いたかったという理由だったんですか？」

「まさか」

「ですよね」

「届け物さ。《踊る月影》からのね」

「……………」

蝕織のプロフィールに追加筆記。

あいつは軋兄や兎吊木さんと同じく、チーム元の一員だ。

《踊る月影》、フォーマルアウト欠、緋色美織として。

僕がくなぎーと知り合ったのも、あいつが《チーム》内で僕の噂を広めまくり、くなぎーが会いたくなかったというバックグラウンドがあったからこそ話である。

僕とあいつが兄弟であるのは《チーム》の皆さんの中では周知の事実であり（さすがに軋兄との関係はバラしていないけれど）、しょっちゅう僕は蝕織に連れ出されていた。

「数日前、彼女が俺の所へ来てな。君の行き先を聞いた後、君にあつたら渡してくれと言われたんだよ」

簡素なデザインの封筒がテーブルに置かれた。

ちなみに色は赤。

某魔法使い童話の手紙をリスペクトしてんのか？

「興味本意で聞くんだが、一体何をしたんだ？俺を頼ってくるなど、いつもの《踊る月影》では考えられないが。兄弟喧嘩かな？」

蝕織のヤロウ。本気で僕を探し出すつもりらしいな。

『もう！本ツ当に苛々しますわ！さっさと名前らしく首を吊ってしまえばいいのに！』とか言っつて罵倒してた兎吊木さんを頼るんなぎ、よっぼどだ。

「…そんなところですかね。てか兎吊木さん。あいつが来た時にはもう、僕の居場所は知ってたんでしょ？」

「ああ、《死線の蒼》から聞いていたよ」

「何であいつに教えなかったんですか？」

「おや、言った方が良かったかな？」

「いえ。でもてつきり、教えちゃうもんかと」

「やれやれ、酷い扱いだな。理由もなく疑うのは止めてくれよ」

理由？

簡単だよ。

あんたの日頃の行いだよ。どう考えても。

「さて、用も済んだし、俺はそろそろ失礼させてもらおうよ」

「あらら？ もうですか。もっとゆっくりしていけばいいのに。この出すメニュー、意外にいけますよ」

「ありがたい申し出だが、こう見えても社会的には死んだ人間なのでね。こうして出歩くのも実は結構危ないんだよ。うっかり知り合いにばったり、なんて事もあり得る」

言い方が恩着せがましい。

出歩くきっかけを作ったのは僕ではなく蝕織なのに。

だが、あいつなりに気は使っているのかも知れない。

僕が哀川さんの所にいる理由は、恐らくあいつにも想像がついてい
るだろう。

死んだはずの人である兎吊木さんならば、足が付かないから、人柄
さえ気にしなければ、安心して任せられるわけだ。

兎吊木さんはああ言ったが、知り合いにばったりなんて心配も
ないだろう。

兎吊木さんの友達は少ない。

「さりげなく失礼な事を考えられている気がするんだが、気のせい
かな？」

「気のせいですよ」

「ならばよろしい。 ああ、そうだ。最後に一つアドバイスだ。
《お兄様》」

お兄様って言うな。

軋兄といい、それは蝕織以外の奴が使うと、悪意の塊にしかならない。

店の扉に手を掛けながら、兎吊木さんはいつものニヤニヤ笑いを浮かべた。

苦しいなら、どちらかを選んでしまえ。

兎吊木さんが去った後、僕は冷めたコーヒーをヤケクソ気味に飲み干した。

絶妙の苦さが、ぐらついた僕の精神を繋ぎ止めた。

「……最ッ低の捨て台詞だ、この野郎」

選んでしまえだあ？ 選べねえから困ってたんだよ。

普通の日常も、殺人鬼の日常も。

褒めてやるよ、兎吊木垓輔。グリーンケグリーン 害悪細菌。《裁く罪人》。

僕をここまで不快にさせやがる奴はそういないぜ。

脱力感漂う手を無理矢理動かし、テーブルの上におきっさらしだった手紙を取る。

って、ロウで封してやがる。

無意味にヨーロッパ人気取りやがって。

中身は、ペラい便箋一枚。

四つ折のそれを開き、数行構成の文に目を通す。

途端、疲労が三割増した。

全く、頭が痛いよ。

お兄様。最近はや道の通り魔が増えているそうですよ。お気お
付けになって下さいね 蝕織

悪意たっぷりの手紙で含みを持たせたあいつが、この町に来るのは数週間後。

戦鬼とギロチンの戦い。そのボックスステージにてのお楽しみだ。

「あ、おはよう。お二人さん」

喫茶店で適当に朝食を済ませた後の、学校への登校途中。

曲がり角で真九郎君 & タ乃さんとばったり遭遇した。

「あ…、タ介君。おはよう」

「おはようございます。タ介君」

「…タ乃さん。なんか怒ってませんか？」

「そう見えますか？」

「い、いえ」

この質問は何か地雷っぽい。

朝とはいえ、まるで覇気が無い真九郎君に対し、タ乃さんは口調こそ穏やかだが、どこか不機嫌そうである。

やっぱり今朝、何かやらかしたんだな。真九郎君。

事実、学校に着くまでの間、僕は真九郎君の巻き添えをくう形で、夕乃さんから小言、具体的には人としての在り方、正しい恋愛観、都の条例や法律や倫理等を切々と説かれるはめになった。

「……というわけで、姉さん女房をもらった方が、殿方は幸せになれるのです」

「はあ、なるほど」

曖昧に頷く真九郎君。そこで変に納得するもどうかと思うが。

「夕介君も、そう思いますよね」

今の僕に恋愛の話を振るんじゃないやねえよただでさえこっちはストーカー気質の妹にビクビクしてるってのに。

僕の頭の中にはズラリと次のような言葉が浮かんだが言わなかった。

その対応は余りにガキ過ぎる。

モロ八つ当たりじゃんか。

「さあ。僕にはそういう経験がありませんからね……、まあ、どこか抜けていておっとりした人とかには、お姉さんっぽい嫁さんはいいんじゃないですか？」

「夕介君、偉い！ ちゃんと正しい恋愛観をわかってます」

満足気に頷く夕乃さんに対し、こんな場所で恋愛観なんて複雑な物

を説かないで頂きたいというのが本音だったが、これも言わなかった。

最近、妙に人づきあいが上手くなってきた気がするのだが、殺人鬼としてそれはどうなのか。

「大体、紫ちゃんはズルイですよ。私なんて学校でしか真九郎さんと会えないし、それだって節度を守ってるのに。ああ夕乃さんはうぜーなー、とか真九郎さんに言われたら悲しいですし」

「いや、そんなことは思わないけどね……」

ああ、やっぱり不機嫌の原因は紫ちゃんがらみかよ。

あとちなみに夕乃さん。学校での出会いに節度を設けるあまり、その他の場所で暴走気味になってるのには気付いた方がいいですよ。

「ところで真九郎さん」

「はい」

「あなた、不覚を取りましたね？」

夕乃さんは真剣な眼差しで真九郎君を凝視した。

片や真九郎君は、バレたか。といった風に顔を曇らせる。

いや真九郎君。君は隠してるつもりかも知れないけど、戦い慣れしてる人間にとつちやかなり分かりやすいぜ。

真九郎君が紫ちゃんを連れてった事を除いて洗いざらい白状した後、夕乃さんは夕乃さんで、崩月家の弟子が拳銃ごときに遅れを取るとは何たる無様な。と真九郎君を叱る。

論点のズレは今更気にはすまい。

「明日、傷薬を持ってきます。銃創に良く効くものを、お祖父ちゃんが持っていますから」

「てことは、師匠も銃で撃たれた経験があるんだ」

「それはありますよ。でも、怪我はしませんでしたけどね。その種の傷薬は、未熟な弟子用にわざわざ作ったものです」

未熟、という部分を強調する夕乃さん。

あからさまに棘がありますな。

校門を通り、下駄箱が見えてきたところで、「それでは、真九郎さん。夕介君。今日も一日健やかに」と手を振りながら夕乃さんは去っていった。

曖昧に手を振り返し、「で」と真九郎君へと向き直る。

「何やらかしたんだよ。真九郎君」

「いや、やらかしたって…、ちょっと誤解を受けた。ただそれだけだよ」

「一応聞くけど紫ちゃん絡みだよな？」

「うぐ……」

はい。予感的中。

「…何で夕介君は俺の考える事をばんばん当てられるんだよ。ホントに心読めるんじゃない？」

「ほう。僕に軽口を叩けるようになるとは、真九郎君も僕との付き合いに慣れてきたようだね」

意地悪く笑って、右手を天高く挙げる。

「お祖母ちゃんは言っていた。人には必ずしも得意である事と、得意でないことが存在する。一番大切なのは、克服する努力を怠らない事。一番愚かなのは、何の努力もせず、諦めた自分を正当化する事だ」

「え？」

急な人生論に、ポカンとした顔をする真九郎君。

ちっ、できれば元ネタに突っ込んでもらいたかったんだがなあ。

まあこの年代で平成ライダー見てる奴も少ないか。

「まあ、あれだ。君は顔に出やすいんだよ。とどのつまり、先天的に嘘は不得意な人間なわけ」

「ああ、何となく心当たりある」

真九郎君にげんなりした表情が浮かんだ。

心当たりというのは紫ちゃんの観察眼の事だろうか。

でも真九郎君わかってるかなあ。

俺は何もそれだけを指してるわけじゃないんだけどねえ。

ま、いいけどさ。

「んで、話戻すけど何があったわけ？」

「朝、紫が俺の布団に潜りこんでた。それを夕乃さんに見られた」

「…つくづく不幸体質だな。君は」

一体どんな星の下に生まれたんだ。

アレか。死兆星か？

「全くだよ…、こここの所トラブル続きだったし、紫の態度もおかしかつたんだよ」

「紫ちゃんが？」

「そう。昨日の帰り道、夕介君いつの間にかいなくなっちゃったでしょ？」

「ああ、悪かったね。急な用事が出来ちゃったのだよ」

主に真九郎君達のための労働だったが、それを彼らを知る必要はない。

「俺が消えた後、何かあったの？」

「うん。機嫌がいいとか言うのとはちょっと違うんだけど……、何て言うか、言い方悪いけど、急に馴れ馴れしくなっちゃって言うのかな。俺が触れた時も嫌がらなかったし、俺に恋人がいるかって執拗に聞いてくるし」

「……………」

通常の何倍もの三点リーダーを使用し、沈黙。

本当に、君って奴は本当に。

どこまで恋愛音痴なんだ！

そんなんでキャラクター通そうなんて甘いんだよ！

恋愛下手もここまでくると、もはや神の領域だ。

錬金術師でも錬成できない。

告白とかされても、さらっとジョークで流してしまいそうだ。

「まあ、相手が子供だから、深い意味は無いとは思っただけだよ」

「いや、真九郎君。それは……」

「それは？」

「……いや、何でも無いッス」

「？」

疑問符を浮かべる真九郎君。

片や僕はあうあう唸りつつも、結局はこの発言へのコメントは控える事にした。

ダメだ。この子の性質はもはや直しようがないレベルにまで達している。

万一他人から教えられても、「ないない。有り得ないよ」とか言っ
てスルーしてしまうだろう。

（天然が時として残酷であることを知った僕であった、まる）

「おお、夕介！ おかえり！」

「ん、ただいま。紫ちゃん。

どしたのそれ」

その日の帰宅時の話。真九郎君はいつも通り、銀子ちゃんに昨日の

事を報告に行ったため、一人の帰り道となった。

帰って見たら帰って見たで、エプロンをつけた紫ちゃんが、竹箒を片手に掃除をやってるし。

以前なら絶対やらなかっただろうな。

変わるもんだ。恋路一つで。

「環から貰った。ぱちんこ、とやらのお土産だそうだ」

ああ、やってそうだな。あの人。

「夕介、真九郎はムラムラしてくれると思うか？」

「いや、うん。それは……」

どこで聞いたんだ、そんな卑猥表現。

「まあ、分かんないけど、可愛いとは思っよ」

「そうか！」

嗚呼、笑顔が眩しい。

微妙な言い回しをしてしまった事に罪悪感を覚えるほどに。

当初あった表情の固さが無くなったって意味だから、良いことなんだけどさ。

「あつ、そつだ。夕介、お前の部屋に客が来ていたぞ」

「は？ 客？」

「いや、客と呼ぶのかどうか分からないのだが…」

煮え切らない口調で紫ちゃんと言う。

客ねえ…。

誰だろ。

ん、ちよつと待てよ。

「部屋にいる？僕、鍵かけていったんだけど」

「うむ…。ついさっき私に、『ここに緋色夕介って奴いる？』と聞いてきて、いないと言ったら、『知り合いだから、来るまで待たせてもらつぞ』と言ったのだ。だから取り敢えず、部屋の前まで案内したのだが、そうしたら…」

「したら？」

「あつという間に鍵をこじ開けてしまったのだ…」

ピッキングかよ。

いや、確かにこのセキュリティ管理甘そつだけども。

そりゃ紫ちゃんも判断に困るわ。

「やっぱり……、いけなかったか？」

「いや別に。仮に泥棒とかだったとしても、盗られて困るもん無いし」

パソコンとかはそうでもないかも知れないが、くなぎー制作のセキユリティロックかけてるから、その辺に関してはノープロブレム。

パソコン自体をぶっ壊されても、データは全て頭の中だ。

「で、紫ちゃん。そのお客さんって、どんな人？」

紫ちゃんはうーん、と腕組みをし、考える仕草をした。

あんまり似合わない行動である。

「　　凄い奴だった」

「凄い？」

またアバウトな。

「うむ。女だったのだが、とにかく凄い感じだったぞ。今までに会った女性の中で…紅香も含めてだ。一番凄い。……言葉足らずかも知れんが、凄かったと言うのが一番近い《いめえじ》だったのだ」

「ふむ」

まあ、人を見る目がある紫ちゃんが言うのだからそうなんだろう。

七歳のボキャブラリーの少なさとは思つまい。

「他に特徴は？」

「特徴、と言えるのかどうかはわからんが」

紫ちゃんが五月雨荘の庭を指差す。

「あれに乗ってきたぞ」

門の柱からひょいと中をのぞきこんだ。

「……………」

見なきゃよかった。

そこにあつたのは、こんな庭にどうやって駐車したんだと思つくりいに巨大な超弩級マシン。

目も眩むように真っ赤なコブラだった。

「うわぁ…………、本気で帰りたくねえ…………」

エスケープしてしまいたいが、それを許さないのが、あの赤色だ。

「よっ。夕ちゃん」

部屋の戸を開けると、シニカルな笑みを浮かべた哀川さんが、畳の上に鎮座していた。

「……ども、哀川さん」

「名字で呼ぶなっつってんだろぅがよ……、お前、いーたんの影響受けすぎじゃねえのか？」

「失礼、噛みました」

「哀川と潤をどうやったら噛むのか聞きたいとこだな」

「かみまひた」

「わざとじゃねえのか？　しかし、流行りそうなフレーズだな、それ」

あたしも今度やってみっかな、と哀川さんが苦笑混じりに言う。

いいもん。笑われたって。マイブームなんだよ。

「まあ。何にせよ、久しぶり……ってほどでもねえか。まだ数週間だしな」

「いいえ。僕にとっちゃ久しぶりですよ。数週間とはいえ、こっち来てから色んな事がありましたから。もうしっちゃんかめっちゃんかですよ」

「ぶっつん？」

哀川さんが邪悪な笑みを浮かべる。

心底楽しいといった風に。

「そりゃあいい。紅香の依頼である時点で、普通じゃ終わらないのは目に見えてたが……、いやいや、なかなかどうして楽しい事になつてるっばいじゃんか」

「哀川さんは知ってたんですか？ 依頼内容」

「いんや、あたしが聞いた依頼内容は、夕ちゃんに話したので全部だよ。ただ」

「ただ？」

「あいつからの依頼があったのと、ちょーど同時期に九鳳院から依頼が来てな。小さな女の子の写真出して、【この娘を探してもらいたい】ってな」

うわ、タイミングがいいのか悪いのか…。

「さつき、玄関で出迎えてくれた子が、九鳳院紫だろ？ いやー、お姉さんビックリしちゃったよ。あんなに純粋な子はそういない。いい女になるな」

「その依頼、引き受けたんですか？」

「…そう怖い顔すんなって。引き受けてないよ。 なんとなく紅香の依頼と関係があるのはわかったしな。あたし以外に、九鳳院なんて大御所に喧嘩売るバカは、紅香くらいのもんだ」

その言い方からは、絶対的な信頼が見てとれた。

人類最強を謳うこの人にしては、かなり珍しい反応だ。

「哀川さんって、紅香さんとどういう関係なんですか？」

「別にどういう関係ってほど深い仲じゃねえよ。そうだな……。小唄の奴との関係に似てるかな」

成る程、要は腐れ縁か。

紅香さんは、小唄さんほど哀川さんを嫌ってないっぽかったけど。

「そついや、石丸さんって、今どうしてるんですかね」

「元気に大泥棒やってるよ。ついこの前も会ったしな」

「そつなんですか？ 仕事関連ですよね」

「ああ」

珍しい。あの人が哀川さんに頼み事とは。

「どんな仕事引き受けたんです？」

「そりゃ言えないよ。いくら相手が小唄でも、守秘義務つてのがあるし。まあ、少しくらいなら、いいか」

赤い髪をかき上げ、哀川さんは続ける。

「依頼は泥棒稼業の請け負いでな。小唄のやつに変装して、斜道卿
吉郎研究施設にお邪魔してきた」

えっ、と声が漏れた。

「 哀川さん。いー兄やくなぎーに会いましたよね？」

「あらら？何で知って……、ああ、成る程。あん時いーたんが電話
してたのって夕ちゃんだったのか」

離れてなお、いーたんとの付き合いは終わりそうにないな。

哀川さんにそう言われたが、僕としては微妙な話だった。

あの人の付き合いが続くのは、意外にリスクیだったりもするの
だ。

根っからのトラブルメーカー気質だもん。いー兄。

いや、いー兄がそういう人間だからこそ、僕はいー兄に出会えたん
だろうか。

ただでさえ、あのアパートには、石凧と闇口の人間がいたのだから。

「どーなんですかね。実際」

「ん？ 何がだ？」

「いー兄ですよ。あのトラブルメーカーと付き合いが続くのって、

良いことなんでしょうかね」

「さあな。それは夕ちゃんの感性の問題だからな。でもあたしは少なくとも、会って後悔はしてないぜ」

哀川さん超かっけー。

いー兄の前で言ってあげなよそれ。

「大体な、あたしから見れば、お前も結構なトラブルメーカー気質だぞ」

「はい？ 何言ってるんですか。慎ましやかな生活をしている僕にトラブルメーカーな要素なん、て……」

無い、と言い切れない自分がいた。

ある。こっちに来てからは特に。

哀川さんはしてやったり、とでも言いたげな表情を浮かべた。

楽しい玩具を見つけた、みたいな感じ。

「聞きたいな、夕ちゃんの武勇伝」

「……」

いや、武勇伝って程活躍もしてないが。

しかし、そんな事を思っても、哀川さんには無力なわけで。

結局僕は、ここ最近の出来事を、零崎をしたことだけは隠して、事細かに話した。

全て聞き終えて、哀川さんはしばらくした後、盛大に溜め息をつく。

「夕ちゃんって面倒事嫌いだとか言う割には、こういう話に首突っ込むよな。そのためにあたしがどれだけ根回ししてる事か」

あう。

痛いところ突かれた。

「仕方ないでしょうよ。もうこれは癖なんです。デフォルトのアビリティなんです。だからこそその哀川さんとの約束なんですから」

【僕が哀川さんの手伝いをする代わりに、哀川さんは全力で僕が動いた痕跡を消す】

それが僕と哀川さんとの間に結ばれている契りだ。

この人は零崎が嫌いな節が（いや、実際嫌いなんだろうけど）あるが、僕の場合、殺す条件が条件だし、【大切な人を傷つけようとした人間以外殺さない】という前提条件の元、締結された話である。

最大のトップシークレットである【僕の本名と出生】を知る人間は、今のところ哀川さんと蝕織しかない。

家賊の人間でも、だ。

だからその辺の心配はいらないのだが、僕が零崎、つまり暴力の世界の人間である以上、普通の世界、政治力の世界、財政力の世界で活動し、全く痕跡を残さないでいられる、なんてマネは不可能だ。

くなぎー、青色サヴァンでさえ、それは出来ない。

しかし、例外が一人だけ。

僕の目の前におわします、四つの世界全てに通じる人類最強の請負人、哀川潤さんです。

この人ならば、大概の事は隠蔽ないし隠蔽の手助けはしてくれる。

万が一の場合でも、くなぎーや軋兄もいる。

そんなわけで、完璧なバックアップ体制の元、僕は四つの世界を縦横無尽に動き回れるのだ。

当然、そうするのにもわけがある。

端的に言ってしまうと、《狐》に見つからないようにするためだ。

いずれ、必ず何か零崎に害をもたらすであろう《人類最悪》。

その事態に備えるため。

顔が割れていなければ、行動範囲はぐつと広くなる。

相手に足取りを悟られず、自由に動き回れるのなら、こちら側の被害を最小限に抑える事ができる。

これが 僕の選んだ家族を守る方法。

自分を守る事が、結果として家族全員を守る事に直結する。

敵を《狐》だけに絞っているわけじゃない。

ただ《狐》が一番、何かを企んでいる可能性がある、というだけの話なのかも知れない。

僕は昔、《狐》と会った事がある。

その頃はまだ、零崎にすらなっておらず、僕は【どこにでもいるちよっとひねたガキ】だった。

会った時の記憶さえ、途切れ途切れ。

まあ、そもそも俺とあいつの【縁】は会うまでもなく切れてい

た筈だったのだが。

残念な事に、哀川さん、あの《狐》の娘さんとの出会いにより、僕は会いたくもない《狐》と再び【縁】が出来たのだ。

「ああ？ そりゃ遠回しにあたしを非難してんのか？」

今、声に出してましたか！？

以下、弁明タイム。

「ち、違います違います。非難なんて有り得ません！ 哀川さんから聞かない限り、西東天は死んだと思ってたんですからむしろ感謝感激です！」

「ふーん。ホントかなあ？ ゆ・う・ちゃん？」

怖い。哀川さんの滅多に無い猫なで声が怖い。現在、足の震え二倍速。

「本当です。真実です。TRUTH」

哀川さんの放つオーラがどす黒い。

何一つ嘘は言って無いのに、どこか後ろめたさを感じてしまう。

「じゃ、しっかりと言葉に出してみよう」

「会ってよかったです」

あまりの息苦しさに顔を反らせず、数分が経過したが、急に哀川さんに頭を撫でられた。

「そーそー。やっぱりそういうしおらしい態度が夕ちゃんの良いところだよな」

……なんか色々と釈然としない思いがあったが、何か許してくれたっぽいのでそこは安心した。

「そう言えば、何のご用です？哀川さん。西東天の続報ですか？」

「いんや、違う。相変わらずあのクソ親父は行方知れずのまんまだよ……チツ、本当に雲隠れすんのがうまい奴だよ」

「じゃあ、何ですか」

「届け物。玖渚ちゃんから」

デカ目の封筒を手渡され、ようやく思い出す。

ああ、そうだそうだ。くなぎーが旅行の時に調べ物のメール入れていたんだった。

「くなぎー、わざわざ哀川さんに届けて貰わなくてもよかったのに……」

封筒を受け取りながら、少し遠慮がちな声をだす。

「いやいや、あたしが届けてやるって言ったんだよ。この近くで仕

事があつたからさ」

「多忙ですねえ」

「ああ。なんか知らねえけど、最近はずっと多忙だな。あつちこつちでトラブル続発。《嵐の前の静けさ、ただし皆シエルター避難済み》みたいなの」

「わ、懐かし」

このネタには、巫女子ちゃんから哀川さんが勝手に盗み、更にそれを僕が勝手に盗んだというどうでもいい経緯がある。

もつとも、僕は哀川さんや巫女子ちゃん程多用しないが。

正直、いいネタが無い。

意外に燃費が悪いギャグなのだ。

巫女子ちゃんは脊髄反射に近い速度でネタを言ってたけど。

「ま、つまりはついでだよ。夕ちゃんがすっかり森の住人として溶け込んでいるかどうかも見なかったし」

「僕の見解では、この近辺に家を貸してくれる商人タヌキは住んでいないと思いますが」

のんびり気ままなスローライフには程遠い毎日だし。

「でもま、楽しくはありますけどね。高校生ってのもまんざらじゃ

ないですし」

「あはは、そりゃあ結構。…さて夕ちゃんの元気な姿も見たし、お姉さんもがんばっちゃうかな」

「あれ、もう行っちゃうんですか？ ゆっくりしてればいいのに」

「ああ、せっかくの誘い出だがな」

「そうですね…、じゃあ送っていきますよ。ちょうど銭湯行くこと思っていましたし」

哀川さんと並んで共同玄関前まで行くと、真九郎君と紫ちゃんがいた。出で立ちから察するに、二人も銭湯に行くっぽい。

「やつほー。真九郎君、紫ちゃん、銭湯かな？」

「あ、夕介君」

手を振り返す真九郎君。となりにいた紫ちゃんは哀川さんを見て「あ」と口を開く。

「やっぱり夕介の知り合いだったのだな」

「おう、美少女。さっきは助かったよ」

哀川さんはなんの躊躇もなく紫ちゃんに話し掛けた。

突然出てきた見知らぬ人に、真九郎君は戸惑いを隠せないようだった。

「えつと…」

「ん、ああ。お前が紅真九郎か」

どう説明しようか迷っていた矢先に、哀川さんがパチンと指を鳴らす。

「え？ 何で俺の名前……」

「紅香から聞いてるぜ。面白そうなガキを拾った、とか自慢話してきやがったからよく覚えてる。そうか。お前がその子のボディガードしてたのか」

「ストップ。哀川さん。初対面でそんな畳み掛けるように話さないで下さい」

真九郎君がついていけない。

「真九郎君。こちらは哀川潤さんだよ」

「哀川潤……つて、ええ!？」

明け透けな驚き方だな。

リアクションとしては素晴らしいが。

「あなたが、哀川潤さん？」

「そつ。ああ、呼ぶときは潤でいいぜ。名字で呼ぶのは敵だけだ」

「…女性とは思ってませんでした」

「ありがとう。最高の誉め言葉だ」

薄笑いを浮かべつつ、真九郎君に顔を寄せた。

ただじつと見ているだけなのだが、見られてる真九郎君からすればたまったものじゃないだろう。

その容姿もさることながら、色々な意味で哀川さんの存在感は絶大なのだ。

それこそ目線だけでも人が殺せるんじゃないかってくらい。

「今、女性に言うには結構失礼な事考えなかったか？」

「いいえ。何も」

「そつか」

哀川さんも特に追及はせず、真九郎君から目を離した。

「んー。確かに面白い奴だな、お前。上っ面の下に何かを隠し持ってるって点じゃあ、いーたんと似た感じか」

びくり、と真九郎君が肩を震わせた。

さっすが。

真九郎君が抱えてるもんも一発で見抜きやがった。

そう。案外いー兄と真九郎君って共通点多いんだよな。

人に本心隠すところか。

《戯言》は本来、自分を隠すためのものだ。

そついう意味じゃ、真九郎君もまたいー兄ほどでは無いにせよ、戯言遣いなのかも知れない。

しかし、残念ながら真九郎君。

この人にそんな薄っぺらな防御膜は通じないよ。

「強いようで弱い、いや、違うな。強いけどその力が空回りしてるつてのが一番近い表現か。お前も自覚はあるんだろ？ 自分の弱さ」

「……それは」

「おい、お前！」

突然、隣にいた紫ちゃんが怒鳴った。

「真九郎をいじめんな！ 真九郎は強い！ 私が言うのだ！ 弱く

などあるものか！」

紫ちゃんの激昂に、何も返さない哀川さん。

ひよいと横顔を見ると、びっくり仰天と言わんばかりに目を見開いていた。

かなり珍しい。

「……ふ、くつ、あははははは！」

急に笑い出した哀川さんに、今後は僕を含む三人がびっくりした。

今度はさらに珍しい一面だ。

哀川さんの爆笑など、初めて見た。

一頻り笑い終えた哀川さんは、紫ちゃんを見ながら一言。

「あはは　　いやあ、うん、そうだな。人をいじめるのはよくないよな。　　悪かったね、紫ちゃん。お姉さんが間違ってた」

僕は思いっきり引いた。

うわあ……哀川さんが普通に謝ってる……。

いー兄も見たこと無いんじゃないか？　こんな哀川さん。

「う、うむ。わかればよいのだ」

紫ちゃんも思いつきり戸惑ってる。

「さ、さあ。真九郎君、紫ちゃん。銭湯行くんだろ？早くしないと閉まっちゃうよ」

きまぐれい雰囲気打破するための一手。

「あ、うん。そうだね…」

「じゃあ哀川さん、僕らはこれで」

「ああ。またな。紅君。その子大事にしるよ。おねーさんからのアドバイス」

ふいに付け足された助言に真九郎は曖昧な返事を返し、紫ちゃんと一緒に門の外へ。

追いかけてよとした僕に、背中から哀川さんが声をかけた。

「あ、そうそう。夕ちゃん。一つ言っときたい事があった」

「何ですか？」

哀川さんは意地悪く笑って一言。

蝕織の声で。

「兄妹喧嘩はよくありませんよ。お兄様」

ほっとけや。

「背中の傷は、もう痛くないか？」

「ああ、平気だよ。紫が薬を塗ってくれてるおかげで」

「えへへ」

銭湯からの帰り道。

二人の掛け合いを聞きながら、僕は五月雨荘への道を歩いていた。哀川さんの事があったから、変にギクシャクするかと思っていたが、案外そうでも無かった。

やっぱり、紫ちゃんによる所が大きいんだろう。

最近、本当によく笑うようになったからな。紫ちゃん。

「おい、あんまりくつつくなよ」

「らっぶらっぶ」

「夕介君も悪乗りしない！」

「えへ、別にいいじゃんか。哀川さんも大切にしろって言ってたし」

「あれはただ単純に、小さな子を一人にするなって意味でしょ？」

「わかってないなあ、真九郎君。まるでわかってない。哀川さんがあんな事言うなんて超珍しいんだよ？ そんな当たり前の意味なわけないじゃん。てなわけで紫ちゃん！ 緋色夕介が命じる！ 全力で真九郎君にくつつきまくれ！」

「何でっ！」

「うむ！ わかったぞ夕介！」

「お前も真に受けるな！」

ぎゃいぎゃい騒ぎながら、歩く三人組。

意外に近所迷惑。

そんな中、紫ちゃんが真九郎君の腕にしがみつきながら一言。

「なあ真九郎」

「…今度は何だよ？」

「真九郎はどうして揉め事処理屋になったのだ？」

沈黙。

(……地雷だな。これは)

真九郎君が揉め事処理屋になったわけ。

それは彼の抱える闇に深く起因するもの。

触れてはならない、部分。

「……………真九郎？」

口を開かない真九郎君に、紫ちゃんは首をこてんと傾げた。

「あ、ああ……………、ごめん。そうだな……………。やっぱり紅香さんに憧れて、かな……………」

……………あーあ。

真九郎君。

僕の忠告まるで聞いてないね。

君は ……。

「……………どうしたのだ？」

「何が？」

「なぜそんなウソをつくのだ？」

ウソがつけないんだよ。

「う……うそなんてついてないぞ」

「……………」

いつもの薄っぺらな笑みを浮かべる真九郎君、片や、未だに疑問符を浮かばせている紫ちゃん。

確かにウソは言ってない。

最初は確かに真九郎君は紅香さんを目指した。

けどそれは本当の意味じゃあない。

「変なこと言うなよ。行くぞ、紫」

再び帰路につこうとする真九郎君を追いかける紫ちゃんに続き、僕

め後に付いていく。

だが。

「……………！」

ぴくり。

殺人鬼としての勘、だろうか。

僅かな殺意に気が付く。

横目でちらりと、真九郎君と紫ちゃんが四つ辻を曲がったのを確認し、頭を切り替える。

「……………出てきなよ。バレバレだぜ」

すると、物陰から、黒スーツの男が四人出てきた。

S Pの服装を絵に描いたような感じ。

「誰かな？ 僕に用かい？ それともあの二人に、かな？」

「……………一緒に来てもらおうか」

リーダー格っぽい男がそう言うと、残り三人が僕を取り囲んだ。

「……………ふーん。どうやらカタギの人間では無さそうだね。あ、ひよっとして、九鳳院の近衛隊の人かな？」

「無駄口を叩くな。大人しくしていれば、まだ手荒なマネはしない」
まだ、か。

じゃあいつかは殺されちゃうのかな。

きゃー、怖い。

「……九鳳院も命知らずだね。いや、運が悪いのかな。まさか零崎に喧嘩売るなんてさ」

「なっ！ ぜ、零崎だと!？」

お、知ってたか。

曲がりなりにも武装集団。

「ははは。心配せずとも殺しはしません。ちょーっと聞きたい事があるだけです。ただ本日は深淵夢想を忘れちゃったので、少々暴力に片寄った実力行使になります、ね」

徒手空拳になるのは正直めんどいが、問題無いだろう。

半殺しは得意だ。

「それでは一曲 間奏曲を奏でよう」

一瞬で黒服の一人との間合いを詰め、内臓付近に抜き手を叩き込む。

ガボツという耳障りなうめき声を出し、男は沈黙。

そのまま気絶したそいつの体を背負い投げて、虚をつかれた残りの二人の内の一人へと叩きつける。

足が頭に当たったのが見えたので、気絶はしただろう。

「きつ、貴様あ！」

リーダー格の男が銃を抜き、引き金を引こうとする。

が、それよりも早く、その男の腕を、僕の腕で絡めとり、力一杯捻り上げる。

ポキッポキッと響く綺麗な骨折音。

リーダー格は悲鳴を上げながら、銃を取り落としてうずくまる。

それを拾って、残った黒服の足元目掛けて打つ。

そいつは血を滲ませ、うめきながら悶えうつ。

口笛で音も相殺したので、ご近所様に迷惑は掛かっていない。

住民の鏡だよ、僕。

「つつても、拳銃ってあんま好きじゃないんだけどね。当たり所を相当良くしないと殺しちゃうつし」

拳銃を捨てながら、リーダー格の男の髪を引っ張りあげ、目線を合

わす。

「さて、どーして僕らを狙ってたのかな？」

「……………」

反応ナシ。

沈黙を守るのはさすがはプロか。

「んじゃ、質問チェンジ。あんたのバックは九鳳院竜士か？」

びくり、とわずかな反応を見せる。

「貴様、何故……………」

「そこまで知ってるかって？ 企業秘密です」

男を解放し、一応の警戒を込めて、リーダー格の男の頭をぶん殴り、返す手で足を撃ち抜かれた方もぶん殴る。

あえなく、先に気絶した二人と同じ運命を辿った。

足撃ち抜かれた奴には一応手当てをしておいた。とりあえず大事には至るまい。

僕やっさしー。

(ちて)

ついに近衛隊が動き出したか。

しかも二人をピンポイントで狙いやがった。

ここまでくると間違いない。

九鳳院竜士が、紫ちゃんを見つけた。

「うーん。紅香さんに報告した方がいいかな……」

「その必要はありません。緋色夕介」

「ッ！」

突然した声に振り替えると、そこには見知らぬ女性が立っていた。

十代前半くらいの年格好。黒っぽいスーツに身を包み、髪は一纏めにされている。

細い目が、ただ僕を無機質に見つめていた。

「誰、ですか」

「犬です」

「は？」

何言っただこの人は。

「犬塚弥生と申します」

次は普通に名乗った。

そのセリフは通過儀礼なんですか？

はっきり言って物凄く怪しいが、只者じゃ無い。

何せ、先ほど話し掛けられるまで、僕はこの人の気配を感じられなかったのだ。

「えっと、弥生、さん？ 紅香さんに連絡する必要があるってどういう事ですか？」

「私が連絡するからです」

「え？ じゃあ、もしかして貴女、紅香さんの部下か何かですか？」

「はい」

……… 会話が续かん。

「………では、弥生さんはどうしてここに？」

「あの二人の監視です。そして二人に近づく者があれば排除しろとの命令を仰せつかっておりました。そこにいる連中は、私が数日前から注意を払っていた輩です。今日辺りに始末をつけようとした所、あなたが始末してくれた、というわけです」

事務的に自分の行動を説明する弥生さん。

苦手だ、こういう感情が読めない人。

「えー、じゃあ紅香さんへの報告は貴女がするとして、僕はどうすりゃいいんです?」

「私からそれを言う権利はございません。貴方のお好きなように」

……好きなように、か。

まあ、当面は二人に近づく奴らの始末になるのかな?

「……わかりました。紅香さんは、こちらに来られるんですか?」

「明日の夕方頃には来られるご予定です」

「了解です。こいつらの始末は任せてもいいですか?」

「はい」

「……では」

徹頭徹尾、無表情だった弥生さんを残し、僕はその場を後にした。

一度だけ後ろを振り返ってみたが、もうそこには弥生さんも、黒服達もいなかった。

イリユージョン。

（なんなんだろ。あの人。闇口に似てるけど……、なんつーか、忍者みたいな感じだな。真九郎君にでも聞いてみるか……）

今日はどうせ会えないだろうけどさ。

部屋に戻った僕が手に取ったのは、くなぎーが調べ、哀川さんが持ってきてくれたファイル。

内容は、匂宮兄妹について。

理澄ちゃんに会った後、くなぎーにこっそり頼んでおいた依頼。

くなぎーが旅行に行った時に送ったメールだから返信に時間がかかったが、やはり精密さ加減は半端じゃない。

しかし。

「やつぱ、さしものくなぎーでも、最近の動向はわかんねーか」

あつた情報は大抵がプロフィールやらの表面情報。

くなぎーは政治の世界の人間だから、暴力の世界の深い位置に存在する匂宮兄妹の事など、もはや別次元だ。

哀川さんに頼めばよかったかも知れないが、未だに確証の無い話だから、まだ話すには至らない。

匂宮兄妹が、《狐》繋がっている可能性。

いくつかつかかりはある。

零崎は狙われてはならない集団であり、最も忌避される殺し名だ。

それを自ら進んで、しかもよりによって殺し名一位の匂宮を使って探そうとするバカ。

その検索ワードでヒットする輩を、僕は《狐》のヤローしか知らない。

プラスして、零崎の秘蔵っ子である人兄は存在自体があまり知られていない。

だが理澄ちゃんの兄である匂宮出夢は人兄を知っている。

出夢さんが《狐》に人兄の事を話し、人兄に興味を持った《狐》が匂宮兄妹に探索を依頼した　というのが妥当な仮説か。

いや、あくまで仮説に過ぎない。

確たる証拠もまるでない机上の空論。

だからこそその調査願ひ。

(しかしくなぎーも哀川さんもアウトとなると、後は小唄さんくらいだよなー。調べ物が得意なのって)

小唄さんの連絡先聞いとけば良かったわ。

「まあこっちの仕事はこんなもんか。 さて、今日はもう一仕事だな」

時計を見ると深夜二時。

いい案配だな。

今日の経験から、深淵夢想は忘れずに、僕は部屋を後にした。

向かったのは二階の五号室。

真九郎君の部屋だ。

紫ちゃんの居場所がばれた以上、いつ襲われるかわからない。

不戦の約定こそあれど油断は禁物。

明日になれば紅香さんが来る。

今日限定の見張りのつもりだった。

「…暇だな。本とか持ってきてくりやよかったかな」

小声で愚痴る。

しかし戻ってる間に襲撃に合ったら敵わない。

読みかけの本があったんだけどな（十二本の奇妙な刀を集めるとか

いうコンセプトのやつ)。

「添い寝とかすりゃ一番楽なんだがな……。ん？」

さらりと問題発言をした(自覚はある)僕の耳が、音使いとしての耳がノイズ音をとらえた。

微かだが、人の声。

途切れたり、掠れたり。

まるで泣いているような。

音の発信源を探すと、どうやら目の前の部屋かららしい。

まさか、窓から誰か入ったか？

何故侵入者が泣くかはさておいて、僕は慎重に目の前のドアに近づき、ノブを捻る。

気配も音も消し、中をゆっくりと覗きこむ。

泣いていたのは。

(真九郎君？)

布団の上にいる真九郎君は、泣きながら、うめき声を上げていた。

目を閉じているのを見ると、悪夢につながれているらしい。

どんな夢見てるんだと思っていたが、一つ心当たりがあった。

(家族の 夢)

そうだ。忘れていた。

彼は元々僕らの世界とは縁も所縁もない、ただの子供だったのだ。

そんなごく【普通】の人間が、家族の死を気にせず、生きていられるわけがない。

それにつけて、彼の巻き込まれた爆弾テロ。あれは紅香さんから聞く限り、凄惨な状況だったと言う。

精神崩壊しても可笑しくないものだ。

トラウマにもなるだろう。

その恐怖が、彼の場合は悪夢として現れたのか。

戸を開けたまま、様子を見てみると、窓から強い夜風が吹いた。

その寒さに耐えられなかったのか、真九郎君がたまらず目を開ける。

息を切らしながら、彼がふと横に目をやった。

紫ちゃんがまっすぐに真九郎君を見ていた。

(ヤバっ！)

紫ちゃん。見ちゃいけない。

今の真九郎君を見ちゃいけない！

それは真九郎君の心の闇だ。

彼は事故があつてから強くなろうとした。

一人で生き抜く強さを求めて。

でも彼は心までは鍛えられず、それを自分の弱さだと悔いている。

だから彼は崩月の家を出て、ここに来た。

弱い自分を、大切な人に見られないように。

彼は元々、暗い部分が多かった。

もし信頼している人達から距離を置いてまで知られたくない事を知られて。

しかも恐怖にかられてパニックになっていたのなら。

（ 見た人間を殺してもおかしくないんだ！ ）

ゆっくりと、真九郎君の手が紫ちゃんの首にかかった。

その顔に、表情らしい表情は無く、ただただ深い虚無があるだけ。

理性など、欠片もない。

（ 待て、真九郎君！ ）

心の中で叫び声を上げた。

君が殺人鬼になってどうすんだ！

僕みたいになってどうすんだよ！

ほぼ一瞬で深淵夢想を口に添え、息を吹き込もうとした。

「……………どうして泣くのだ？」

紫ちゃんの声が、した。

いや、実際は聞こえてなかったのかも知れない。

真九郎君にだけ、向けられた言葉。

そんな風に僕は感じた。

「話してくれ、真九郎。私は、お前のことが知りたい」

未だに、真九郎君の手には力がかかっていた。

しかし真九郎君は紫ちゃんの目になんの迷いも恐怖も無いとわかる
と、震えながら手を放した。

真九郎君の顔から虚無は消えたが、逆に言い知れぬ恐怖があった。

「大丈夫。私はちゃんと聞くぞ。だから話してくれ。真九郎」

ただ真つ直ぐに、紡がれた言葉。

それは真九郎君の心に深く染み渡っただろう。

彼の、心の闇まで。

「家族が……死んだんだ」

震え、怯えながら、少年は口を開く。

少女はそれを、ただ黙って聞いている。

「もう誰もいないんだ。一人で生きていかなきゃいけないんだ……
！ 強くならなきゃいけないかったんだ！」

心の底からの叫び、いや懺悔だろうか。

いつの間にか、僕は深淵夢想を口から外していた。

「でも、だめだった……。どれだけ体を鍛えても、心は弱虫のまま
だった……。実戦になれば足が震える……。夜になれば悪夢に怯える
……」

弱さ。それは人の利点でもあり、欠点でもある。

彼の場合、それはどちらでもなく、ただ自分につきまとう呪詛。

「家族を思い出して、泣いてばかりで……。一人で生きる寂しさにも、耐えられない……。生きる勇気も、死ぬ勇気も……。もう何も
ないのに……！」

紫ちゃんは何も言わず、終始、ただそれを聞いていた。

背伸びしていても、彼女は七歳の子供。

どこまで理解し、伝わったのかはわからない。

しかし彼女は聞いていた。

彼の闇を受け入れ、包み込むかのように。

「偉いぞ。よく頑張ったな」

優しい微笑みを向けながら、紫ちゃんは小さな手を伸ばして、真九郎君の頭を撫でた。

すう、と真九郎君の表情が柔らかくなっていく。

「死んでしまった人間は、もうこの世のどこにもいない。どんなに泣いても、いないものはいないのだ。どんなに求めても、会えないのだ。でもな、真九郎。お前は、私に会えた。私は、お前に会えた。私は一人で、お前も一人。でも一緒にいれば、ほら二人だぞ？ もう寂しくないじゃないか」

そんなに、単純なものでも無い。

人の孤独は言い得て辛いもの。

だがそれは間違いではない。

二人、ふたり、フタリ。

それは支えあふ事。

完璧な少女が、欠陥だらけの少年を求めたように。

紫ちゃんはそのままゆつくりと、ぎこちない動きのまま、真九郎君の唇に自分の唇を重ねた。

（　　ッー）

突然の出来事に驚愕した僕。

それは真九郎君も同じだったようで、呆然とした顔を紫ちゃんに向けていた。

紫ちゃんはふつと微笑む。

「昔、お母様は、私にたくさんキスをしてくれた。なぜかと尋ねたら、大切なものにはキスをするのだと教えてくれた。いつか、私が大切なものを見つけたら、キスをしてあげなさい、と」

紫ちゃんはそつと、真九郎君の頭を自分の胸によせ、小さな手で抱き締めた。

「私は、みつけた。安心しろ、真九郎。お前は一人じゃない」

果たして真九郎君が、どう思ったのかはわからない。

僕はただ黙って、五号室の扉を閉めた。

彼らの領域を、侵さないように。

せめて、今だけは。

ややあつて、寄りかかった扉から、真九郎君の声が聞こえた。

何の遠慮も躊躇もなく、全ての思いを吐き出すような、心の底から

の泣き声だ。

ただそれは、他の誰よりも、ひょっとしたら曲兄の歌よりも、僕の心を揺さぶった。

「傑作だよ」

いや、どうなのだろうか。

戯言、でもない。

一つ言えるのは。

今、僕は猛烈に気分が良いらしい。

幸福は続かない。ようやく掴んだものならなおのこと

「何それ？」

翌日の昼休み、教室にての銀子ちゃんの一声。

《それ》というのは、真九郎君の弁当。

否、弁当らしきもの。

納豆やら豆腐やらキャベツやらその他様々な食材の混ぜた奇抜ア
ート料理。

「それ、食べ物なの？」

「俺の弁当」

そう言いながら、黒焦げのソーセージを口に運ぶ。

その苦渋の表情から、味は容易に想像できた。

(真九郎君……、あんた男だわ)

というのも、あれは紫ちゃんが朝早くに作り上げ(今朝真九郎君を
部屋まで迎えに行った時作ってた)、さあ、遠慮せずにとってい
くがいい」と輝かしい笑顔で真九郎君に手渡した代物なのだ。

もし受け取らなかった場合、罪悪感に襲われるのは必死だろう。

「銀子と夕介君も一口どうだ？」

「いらぬ。体に悪いわよ、そんなの食べたら」

「僕はまだ長生きしたいからな」

真九郎君には同情するが、健康状態まで乱したくはない。

「ほら、口直し」

せめてもの賛辞として、おにぎりを一つ真九郎君に放り投げる。

「……ありがとう」

またアート弁当へと向かう真九郎君。

捨てるとかすりゃあいいのに。

それが一番利口なのだろうが、それをしないとところを見ると、紫ちやんの努力を無駄にしたくないのだろう。

昨日の事には、当然触れていない。

見た感じ、真九郎君の状態に陰りはない。

どちらかと言えば晴れ晴れした表情だ（今は奇怪料理に歪んでいるけれど）。

やっぱり紫ちやんの出来事は、真九郎君にとってプラスのようだった。

完全にトラウマを克服したわけでは無いだろうが、それも感化されていくだろう。

（ 紅香さんは、予想してたんだろうかな。こうなるの）
きつと予想していただろう。

真九郎君の闇を見抜いていたから、紫ちゃんを預けた。

確証は無いが、それが一番、理にかなっている。

その点じゃ、今回の依頼は大成功だろう。

このまま紫ちゃんを相手方から守り抜ければ、だが。

奇抜極まりない食材をいそいそと口に運ぶ真九郎君を見て、銀子ちゃんは「物好きな奴」と小さく呟いてから、机に少し大きめの封筒を置いた。

「これは？」

「……あんだ、自分の依頼忘れた？」

中身は九鳳院に関する調査結果。

ああ、そついや真九郎君頼んでたな。

「英文は翻訳してくれてもいいんじゃない……」

「それ別料金」

「あー、真九郎君。僕がやるよ」

曲がりなりにも青色サヴァンとつるんでんだ。

英語くらいなんのそのだ（いー兄は……わかんないらしいけど）。

英語部分を翻訳しながら、僕もそれに目を通す。

かなり核心にせまった情報だった。

奥ノ院の事もおぼろげながらもつかんでいたし、近衛隊の構成まで書かれていた。

高校生でありながら、常軌を逸したサーチ能力である。

一介の情報屋とのグレードの差はさすが伝説の情報屋の孫という所か。

さすがにくなぎー程ではないけれど、いやあの青色サヴァンと誰かを比べるって方がそもそも間違いか。

真九郎君がページをめくっては翻訳、のサイクルを繰り返し、いよいよ最後のページになった。

そこにあつたのは九鳳院の家系図。

以前僕がくなぎーに見せてもらったのと同じ物だ。

上には現代党首の九鳳院蓮丈。

その横に夫人の名があり、下には子供が二人。

(……………あ)

やべ。

「…………ん？ 銀子。ここ間違ってるぞ」

目ざとく真九郎君はそれを見つける。

ちっ。

普段は鈍感のくせに都合の悪いところで勘がいい。

「どっ？」

「九鳳院家の子供の欄、男が二人になってるよ。娘が抜けてる」

「娘なんていないわよ」

「えっ？」

「九鳳院家に、娘なんていないわよ」

あーあ、知っちゃったか。

「……………」

「……………」

空気が重い。

下校時間になっても、真九郎君の表情は鬱気だった。

紫ちゃんが九鳳院でないかもしれない。

その言い知れぬもやもやが原因だろう。

「真九郎君」

下駄箱まで来た時、隣にいる真九郎君に声をかけた。

「あんまり深く考えるなよ」

「え？」

「紫ちゃんが九鳳院で無くて、彼女を九鳳院と言った紅香さんが何を考えていても、君はその依頼を引き受けた。余計な詮索をせず、ただ依頼を完璧にこなしていく。それがプロってやつなんじゃない？」

ま、戯言かも知れないけど。と付け足す僕。

「……そうだね」

「ああ、世の中なるようにしかならないんだ。あんま考えずにいた方が楽しいさ」

「うん。ありがとう、夕介君。ちょっと気が晴れたよ」

「いえいえ、恐悦至極」

おどけながら靴を履き替えて校庭へ。

紫ちゃんの出事はすでに知っていた。

銀子ちゃんの情報は凄いいけど、青色サヴァンの情報とは比べるべくもない。

しかしこれは知らなくともよい事。

と言うか、どちらにせよ、今日の夕方辺りに来るといふ紅香さんから聞かされるだろう。

もしかしたら、紫ちゃんと会えるのは今日が最後かもな。

そんな事を考えながら、校門へと歩いていくと何やらおかしい。

みんながみんな、校門の柱の辺りを奇異の目で見ていた。

何だろうと思っていた矢先、その謎は解けた。

「ああ、来た来た！ うふふ、実に久しぶりだ！夕識くん！」

……………。

僕は何も聞かなかった。

だから踵を返して教室で籠城を決め込もう、と僕はかなり本気でそう思った。

しかし、残念ながらそれを行動に移すより早く、そいつは僕ら目掛けて歩いて来たのだ。

痩せ気味の体格に長身。背広とネクタイ。オールバックに銀縁眼鏡。

僕にとってはあまりに見飽きた、そして見たくなかった姿。

逃げるタイミングは完全に失った。

訳が分からない様子の真九郎君を放置し、僕はため息混じりに肩を落とした。

「……久しぶり、双兄」

僕の目の前には誰であろう。

自殺志願【マインドレンデル】、零崎双識が立っていた。

「おやおや元気がないな夕識君！ トキの下にいた以上、クールさを持つのは仕方ないが、元気が無いのは頂けない！ 何か悩みがあるのかい？ お兄ちゃんが何でも聞こう！」

「……何しにきやがったんですか。双兄？」

「ん？ 何って、可愛い弟がきちんと一人暮らしを送れているか心配になったからに決まってるじゃないか」

「だからって学校にまで乗り込んでくんなや！」

周りから奇異の目で見られちゃってるじゃねえか！

「おや？　こちらはお友達かな？」

「あ、はい。紅真九郎です。初めまして。えっと、夕識君のお兄さん、ですか？」

「うふふ、名前をちゃんと名乗るのはいいね。その通り。夕識君の兄、名前は零崎双識。初めまして、紅真九郎君。いや、ウチの弟がお世話になって」

「井戸端会議みたいな会話に持ち込むな！　そして真九郎君も挨拶とかいいから！」

「つか真九郎君だから許されるけども、勝手に零崎名で呼ぶんじゃねえよ！」

何のために僕が哀川さんのトコにいると思ってんだ！

ダメだ！

やっぱこの人は物事を引つ掻き回すことしかしてねえ！

これ以上、双兄と真九郎君との話が進む前に、僕は双兄の首根っこを引つ付かんだ。

「ごめん、真九郎君。僕はこれにて失礼するよ、悪いね」

「え？　あ、俺やっぱり邪魔だった？」

「違います」

むしろ、あなたを思つての行動でございませう。

「じゃあ、紫ちゃんによろしく。……あ。あと、真九郎君」

気をつけてね。

真九郎君の返事が聞こえるか聞こえない内に、僕は双兄を引きずりながら、校門の外に消えていた。

「いやいや、驚いたよ！ アスから夕識君がここにいるのは、死色の真紅の命令だというのは聞いていたが、正直こんなにも楽しげに暮らしているとは思わなかった！ お兄ちゃんは嬉しいよ！」

そうか。

情報の出所は軋兄か、コンチクショウ。

あれか。

この前情報処理頼んだ時の当て付けか。

「しかし、あの真九郎君 彼も普通では無いね。実に分かりにく

いが、私達の世界の人間だ」

「……………うん」

さすがは【二十人目の地獄】。

僅かな戦禍の臭いも見逃さない。

「揉め事処理屋。あと崩月の戦鬼だよ」

「崩月……………、ああ。裏十三家か。うふふ、成る程。死色の真紅の命令と言っただけあって、中々スリリングな生活も送っているようだね」

「言わないで。こちとら濃いイベントばかりで参ってんだよ。平穩なだけってのもつまないけどさ」

「こらこら。そんなことを言うものじゃないよ。平穩とは普通に起因するのだから」

……………まあ、双兄からすればそうだろうけど。

「そう言えば双兄。早蕨にやられた傷はもう大丈夫なワケ？」

「ああ。まだ万全とはいかないけどね。鈍った体のリハビリも兼ねて、夕識君の様子見をと思ったんだよ」

「そっか」

「けど心配いらなかったみたいだね」

「え？」

「本音を言うと、夕識君が周りとのズレに苦しんでるようだったら、連れて帰ってしまおうかとも思っていたんだよ。前に、京都へ行くと言った時と違って、何も言ってくれなかったからね」

……言えない。

予め報告しなかった理由が、双兄と蝕織の訪問を逃れるためだった、などと。

「それに　ただでさえ夕識君は零崎としても【違って】しまっていたから、余計に心配だったんだ」

「……………」

「でもよかったよ。夕識君が学校に行つて、友達もいて、普通に笑つていられて」

死色の真紅には感謝しなきゃいけないな。

そう言つて、冗談めかしく笑う双兄。

(本当に、この人は)

かっこよすぎだ。

人兄が、「俺は兄貴以外を家族とは認めない」って言う理由がなんとなくわかった。

これで愛情のさじ加減さえ間違えなければ、理想の兄貴なのに。

それが行き過ぎちゃうから、変態呼ばわりされるんだよ。

「……ありがとう」

「家族だろう？ 当然だよ」

だよね。

当然だから　それが当然である家族が大事なんだ。

「双兄、まだ時間ある？」

「ん？」

「前に電話で言っただろ？ 聞かせてよ。舞織ちゃんの自慢話」

一瞬、双兄は虚を突かれた顔をしたが、すぐに普段の表情を取り戻した。

「　うふふ、そうだね。それもいい」

「んじゃ、五月雨荘に行こうか。」近所さんがまた個性的でさ。案外双兄と気が合うかもよ」

「おお、それは楽しみだ。漫画に詳しいと尚よい」

漫画か。環さんとかは、十八禁専門だろうしなあ。

あ、闇絵さんとかは案外読んでもるかも。

前に「私は労働というものをしたことが無い」とか言ってたから、年中暇だろうから。

それからの道中は、双兄と他愛の無い話をしていた。

最近の政界についてとか、地球温暖化ストップのアイデアとか、流っている漫画とか（これが一番盛り上がった）。

そして、五月雨荘まですぐそこ、という所で、僕と双兄の足が止まった。

目の前の道を、昨日見た黒服　九鳳院の近衛隊五名が塞いでいたから。

「……双兄」

「やあ、君達。我々はその先に行きたいのだが、その身体を1メートルばかり、動かして貰えないかな？」

あまりに場違いなセリフ。

向こう方はそれを意に返さず、ただそこに突っ立っているだけ。

「……むう。誠心誠意のお願いも聞き届けられないとは。世知辛い

世の中になつたものだ」

やれやれと、肩をすくめる双兄。

しかし僕はというと、それどころでは無かつた。

近衛隊は、この辺り一体　恐らくは五月雨荘を中心にバリケードを敷いている。

その予想が導きだすのは　只一つだ。

九鳳院竜士が、来た。

不味いな……。もしあつちがプロの殺し屋を雇っていたら、真九郎君じゃ対処しきれんかも。

真九郎君のトラウマは、一朝一夕では克服出来ない。

紫ちゃんの言葉で多少の区切りがついても、急に実戦での力量が上がるわけじゃない。

「……ごめんよ双兄。少し事情が変わつた。早く五月雨荘に行かないといけない」

「早く？　そうしないと何か不味いのかい？」

「真九郎君が危ない、とだけ言つとく」

「　　そうか」

双兄はそれ以上言及せず、黒服達を見た。

双兄の鋭い眼差しだけで、双兄を敵と判断したのだろう。

黒服達は明らかな臨戦体勢に入った。

「悪いねえ、君達。私の弟の友達がピンチなのだ。 なので、試験は早めに済ませてもらおうよ」

そう言つて双兄は、背広の内側から、その通り名の由来にもなった大鍔、自殺志願【マインドレンデル】を……。

「あれ？」

出さなかった。

出てきたのは、そこら辺の雑貨屋でも売っていきそうな普通の鍔。

大きさが、自殺志願と同じだった。

「双兄、自殺志願は？」

「ああ、舞織ちゃんにあげちゃった。だからこれは二代目が見つかるまでの代理」

「はあ!？」

何考えてんだこの人。

「女の子の旅路には色々入り用だろう？」

だからってトレードマークを譲っちゃうか？普通。

ずっと欲しいって言い張ってた人兄の立場がない。

双兄の優先順位がイマイチわからないよ。

「それよりも夕識君。彼は君の友達なんだね？」

「？ うん。友達かどうかは分からないけど、仲は良いかな？」

「ふむ。ならば、彼は試験するまでもなく合格だな。夕識君と

仲良くしてくれている。それだけで飛び級物だ。

うふふ。私が動く理由は十分にある」

マインドレンデル（仮）を黒服に向けて構える双兄。

「私に構わず、隙が出来たらさっさと行きなさい」

「オツケイ」

僕が頷くと、双兄の顔から、笑みが消える。

「それでは零崎を始めよう」

「大丈夫かな？」

もちろん双兄ではなく真九郎君 & a m p ・紫ちゃんが。

取り敢えず双兄に言われるまま、隙を見つけて走り抜けちゃったけど。

まあ双兄が自殺志願無しであんなモブキャラに負けるとは思わないし（どころか、あの人は武器を使わない方がずっと強い。だからあんな普通のハサミは持たない方がいいのだ）。

今為すべきは、少しでも早く五月雨荘に辿り着く事だ。

「間に合うといいんだけどな……」

だが、人生はそんなに都合主義でないことを、僕は嫌というほど知っていたので、ぶっちゃけ期待はしていなかった。

「あ、見えた見えた」

見慣れた木造のアーチ。

普段と違ったのは、その前に黒塗りの高級車が止まっている事。

そして、今まさにその車へ乗り込もうとしている人影は。

（紫ちゃん！）

何かを堪えるような顔で、紫ちゃんは五月雨荘の方を向きながら、震える声で話していた。

遠くからで聞き取りづらかったが、確かに聞こえた。

「いろいろありがとう。楽しかったぞ。本当に、楽しかった……ぞ……」

さよなら、真九郎。

最後に聞こえた、消え入りそうな単語を、僕は聞き逃さなかった。

そのまま紫ちゃんは車の中に消える。

別のドアから、僕とそう歳は離れていない少年　恐らく、九鳳院
竜士が車の中に乗る前に、何者かに命令を下していた。

「そいつ殺すなよ。約束だからな」

「じゃあ、どうするんです？」

「命以外の全てを奪え」

「へーい」

竜士が乗り込み、車が動き出した。

「ちっ！」

間に合わなかったか！

舌打ち一つ、僕は五月雨荘の入り口まで走り出す。

一瞬だけ、車を追いかけてようかとも思ったが止めた。

紫ちゃんを助け出せて、真九郎君が死ぬないし再起不能になっては割に合わない。

ほぼ一瞬でバッグの中の深淵夢想を組み立て、ズシャアアツと派手な滑り止め音を響かせながら、僕は五月雨荘の玄関口に入る。

そこでは、スタボロの真九郎が、アロハシャツに筋肉質の黒人にきよーれつなタックルを喰らわされたところだった。

真九郎君の身体はスリーバウンドしながら、門柱にぶつかり、共同玄関前まで転がった。

ありゃ肋骨イったな。

真九郎君は立ち上がるうとしたが、足が震えている。

やはり、まだ怖いのか。

真九郎君は自分が震えているのに気が付いたのか、涙を滲ませている。

それは紛れもない、自分の無力さを嘆く涙だった。

「さーて、どう壊してやるかな。手足は潰すとして……」

「おい、黒アロハ」

「……何だ、ガキ。俺は今忙しいんだ。聞き逃してやるからさっさと消えろ」

「いやいや、そうもいかないのです。その子は僕のだーいじなオトモダチなんで……ね」

深淵夢想をアロハシャツに向ける。

「本来なら、あんたは僕のブツ殺す条件に入ってる……が、ここでそれをやっちゃうと真九郎君の立つ瀬が無いからな。今、とつとエスケープするなら見逃してやるよ。

それでも戦るってんなら、こっちも容赦しない。

きつちりかつちり、完膚無きまでに、殺して解して並べて揃えて晒してやるよ」

ケタケタケタ。

僕が三日月のようにつり上がった笑みを浮かべてやると、アロハシヤツはようやく危機感を持ったらしかった。

臨戦体勢に入るその動作には、一片の乱れも無い。

だが、わかってない。

この場の支配者はあんたじゃない。

僕だ。

「小僧……何者だ！」

「うん？ ただのしがないう歴社会の虜だよん」

「うわ、なんか派手な事になってるねえ」

アロハシャツの後ろからした軽い声に、僕とアロハシャツはそちらに目を向けた。

「環さん」

「や、夕介君。また変な鎌ねえ うわ、真九郎君痛そう」

あまりに能天気な口調。

てか、深淵夢想にそんな反応しかせんのか。

「その義手の人。仕事なのはわかるけど、このへんで勘弁してくれませんか？ その子、あたしの弟分みたいなもんでして。こういうのは、さすがに見逃せないんですよ」

「聞けんな」

「いや、そこを何とか」

「邪魔するなら、貴様ごと潰してやるっ」

「参ったなあ……しゃあないか」

環さんが拳を構えようとした時、その間に一匹の黒猫が割って入る。

闇絵さんの飼い猫、ダビデだ。

「やめておきたまえ」

門の側に生えている大木の枝に、いつの間にもやら闇絵さんが腰かけていた。

「環、夕介。君たちらしくないな」

「いやー、やっぱりお隣さんですから。いつもお世話になってるし」

「僕もクラスメイトですんで。それに、ウチってクラス目標が二人三脚なんですよ」

意味は、互いに助け合おう。

「二人とも。元気なのはいいが、協定違反はまずかろう」

闇絵さんはアロハシャツに勧告。

「その男。ここは五月雨荘。不戦の約定が結ばれた土地だ。争いを望む者は、去れ」

「……不戦の約定か。そうだったな」

大袈裟に肩をすくめるアロハシャツ。

「ルールでは仕方ない。その小僧を壊すのは、敷地の外に引きずり出してからにしよう」

「できっこないよ」

「黒アロハ。あんたもプロのプレイヤーなら状況を読もうよ。三対一だよ?」

アロハシャツはしばらく、僕や環さん達を睨み付けていたが、やがて踵を返す。

門の前に立つ僕と、すれ違い様に目を合わせてきた。

警戒心に彩られたその目は、多分、自分に恐怖を抱かせた僕に対するものか。

「……さっさと行きなよ。せつかく見逃してあげるって言うてんだからさあ。まあ、またお邪魔するかも知れないけどね」

それは真九郎君が決める事だけれど。

「……小僧。貴様、何者だ?」

「その質問はさっきも聞いたね。けど残念。君みたいなエセ観光客みたいな人に名乗る名前は無いよ。 【口を閉じる】」

途端、アロハシャツが無口になった。

いや、正確には口が開かなくなったのだ。

(チヨロいな)

声で縛るのは意外にムズいのだが。

「ほれほれ。さっさと行きなつてば」

アロハシャツは今度こそ、五月雨荘の敷居から出ていった。

と同時に、鼻に当たる水滴。

雨だ。

気分が沈んだ時には雨が降りやすいと言いますが、この場合は真九郎君の気分を表しているのか。

(戯言だけどね)

結局のところ、雨が降ろうが降るまいが、事実是不変。

真九郎君は紫ちゃんを守れなかった。

ただそれだけ。

動くも止まるも彼次第。

「ねえ、真九郎君、やっぱり5号室に運ぶべきよね？」

真九郎君を背中におぶった環さんが言う。

「そりゃそうですね。環さんの部屋なんか布団の敷き場無いでしょうが」

主に散乱している目のやり場に困るような本やDVDのせいで。

「夕介君ったらシツレイな。ちゃんと整理整頓はしてるわよ」

「真九郎君が手伝ってくれる時だけね」

「人とは常に助け合うべき。世界とは一つの村なのです」

「自らのだらしなさに世界を巻き込まないで下さい」

どんな独裁者だあんたは。

「今、山浦に連絡した。じきに来るだろう」

五月雨荘に入っていく環さんを見送りながら、真九郎君の携帯（いつの間に）を片手に話す闇絵さん。

そのまま木から飛び降り、闇絵さんも五月雨荘内に消える。

「夕識君」

屋内に入ろうとした僕を呼び止める声。

「お、双兄。ごくろーさん」

「いやいや、可愛い弟のためだ。骨身は惜しまないよ」

おどけながら、しゃきんと自殺志願（仮）を背広にしまう。

「一応聞くけど、結果は？」

「もれなく全員不合格」

「だよな」

「それより、夕識君の用事とやらには間に合ったのかい？」

「うんにゃ。残念ながら。まあ、この場で失敗しようがしまいが、僕はやれる事をやるだけだよ」

大体、真九郎君が動いてくれなきゃ、僕がこの件に関して出来る事は何も無いしね。

「なら夕識君は、まだやる事があるのかな？」

「うん。それは真九郎君の決断によるけど」

「……うふふ。やっぱり優しいんだねえ。夕識君は」

そう呟くと、僕が疑問符を浮かべるよりも早く、双兄は踵を返した。

「ならば、部外者の私はささっと退散するとしようかな」

「悪いね。せつかく来てくれたのに」

「いやいや。夕識君が元気でやってるのが分かっただけでも収穫さ。自慢話が出来なかったのは残念だけだね」

「またいつでも聞いてあげるよ。時間はいくらでもあるんだから」

嫌と言っほど、ね。

「うふふ、違くない。 では、また」

「またね、双兄。雨だし、風邪ひかないでよ」

背広姿が見えなくなるまで、僕は双兄の姿を見ていた。

そのまま、泣いている空へと視線を移して、溜め息を一つ。

「さて。ここからが大変なんだよねえ」

恐らく、あのアロハシャツは悪宇商会の殺し屋だろう。

近衛隊なら、あんな格好はしないし、この辺りであれだけの人材を派遣できるのは、九鳳院以外ではあそこしかない。

やれやれ。

真九郎君の決断次第では、崩月、九鳳院、零崎、悪宇商会、柔沢紅香、それらが一同に会することになる。

オールスター戦だ。

「どちらかと言えば、そっちの方が僕としては面白いんだけど」

そうなるそうならないは、僕が決める事じゃないってのが歯痒い所だ。

要は彼がどちらの選択肢を選ぶかだ。

紫ちゃんを助けるか、否か。

真実は理不尽である

薄暗い部屋に響く、透き通るように響く音。

儂げな音調だが、心を落ち着ける事に関しては中々の出来映えだ。

悪くない。

とは曲兄の評価。

「あー、耳障りの良い曲ね。あたし、音楽はよくわかんないけど、こういう曲調好きだな。ねえ。これなんて曲？」

深淵夢想を口から離し、一息つく僕に、環さんが聞いてくる。

意外だな。

環さんはもっとこう、豪快なトーンの曲が好きだと思ったのだが。

闇絵さんも聞けばよかったのに。

そう呟く環さんに少し苦笑した。

買いかぶりだ。

本物の音楽家を知っている僕としては、その評価は毒にしかならない。

「【青の涼風】って曲です。総演奏時間、四分二十三秒。披露回復、鎮静効果があるんですよ」

「あ。だから真九郎君に聞かせてあげてたんだ」

気休めですけどね。と僕は肩を竦める。

僕らの目の前には、布団で眠り続ける真九郎君がいる。

すでに治療は終わり、山浦先生の話によると、人体を動かす気管にはなんの支障も無いとのこと。

崩月の修行の恩恵だ。

……まあ守れたのは、あくまで真九郎君の命だけ、だが。

「でも上手いわね、夕介君。オケ部とか入ってたの？」

「いいえ。兄貴に教わったんです」

「へえー、お兄さん音楽家なんだ」

「はい。凄い人なんですよ」

あの人は、双兄や軋兄とはまた違う意味で自慢の兄だ。

「ま、僕はそう凄くもありませんが」

「え？」

ぼつりと言った声に、環さんが反応する。

「何でもないですよ」と軽く笑い返した。

タイミングよく、真九郎君の閉じられっぱなしだった瞼が開いた。

「……夕介君、環さん」

「や、真九郎君。さすがだね。数時間で復活か」

「真九郎君、水でも飲む？ 桃缶でも開けよっか？」

「……電話、取って下さい」

僕が闇絵さんから返してもらった携帯電話を手渡すと、真九郎君は痛みに震える手でそれを操作。

何度となくボタンを押し間違え、挙げ句落としてしまう。

「無理しない方がいいよ。常人なら全治1ヶ月だ。崩月の君でも、完治には短くても一週間はいる」

さらに、環さんが携帯電話を拾いながら聞く。

「どこにかけるの？」

「……銀子の、ところですよ」

「銀子ちゃん？」

「……あいつに、調べてもらわないと」

「何を？」

言葉につまる真九郎君。

当たり前か。事前に九鳳院の事情を知っていた僕と違い、彼は何も知らないのだ。

と、そこへ真九郎君の沈黙を破る形で、五号室のドアが開けられた。

「生きてるか？」

立っていたのは紅香さんだった。

前に会った時と同様、トレンチコートを羽織り、口にはくわえ煙草。

その場を支配する存在感も相変わらずだ。

「……紅香さん」

「大丈夫そうだな。おお、夕介と環も一緒か」

「ちわっす」

「どーも」

と軽く頭を下げた僕と環さんに片手を振り、紅香さんは言う。

「一足遅かったらしい。ここを突き止められるとはね。迷惑かけたな、真九郎。しばらく養生しろ。依頼料には色をつけとく」

次に紅香さんは僕を見た。

「夕介にも手間をかけさせたな。潤のヤツにはあたしから話をつけとくよ」

言うだけ言っつて、紅香さんは背を向けた。

まあ当然真九郎君が納得するわけもなく。

「待ってください！」

ふらつく足で、ドアまで走る。

「せ、説明してください！ 何がどうなって、どうして、あんな…」

「お前は知らなくていい」

「ふざけるな！」

激昂し、紅香さんの胸倉を掴む真九郎君。

おお。意外な一面だ。

とか、僕が思った次の瞬間、真九郎君はいつの間にか現れた弥生さんに組み伏せられ、手裏剣の刃を首筋に押し当てられていた。

むう。またいつ現れたのか分からなかった。

てか、手裏剣持ってるけど本当に忍者だったんだ。

「いいよ、弥生。離してやれ」

紅香さんに言われて、弥生さんは静かに真九郎君を解放。

「ったく、しょうがないなあ」

床に転がったままの真九郎君を担ぎ上げ、布団に戻そうとする。が、真九郎君は僕の手を渾身の力ではね除けた。

「あらら」

ビックリする僕をよそに、真九郎君はふらふらと立ち上がる。

「……説明、してください。どういうことなのか、全部教えてください」

「聞いてどうする？」

「それは……」

「お前、立ち向かえるのか？」

真九郎君は答えない。

だが、少しだけ震えた足を僕は見逃さなかった。

「その傷、プロの戦闘屋にやられたな？ この件に深く関われば、そんなもんじゃ済まんぞ？ 確実に殺される」

真九郎君はただ沈黙する。

彼の心の中では、壮絶な葛藤が繰り広げられているだろう。

あのアロハシャツと対峙し、怖気づいた弱虫と、自分を助けようとした紫ちゃんを救いたいと願う強さの卵が。

そして勝ったのは後者だった。

「……あいつ、俺を、助けてくれたんです。俺を、守ってくれたんです。守るのは、俺の役目なのに、それを、あいつ……」

悔しさに目には涙を浮かべていたが、懸命にそれを堪えているようだ。

「紅香さん、教えてください。どういうことなのか……」

「知ったところで、どうにもならんぞ？」

「……それは、あなたが決めることじゃない」

彼の目には、ちょっとやさっとじゃ退かない意志があった。

紅香さんはやれやれと肩をすくめ、部屋の入り口を顎でしゃくった。

すると、独りでにドアが閉まった。

多分、弥生さんが部屋を出て、ドアの前で控えているのだろう。

あの人の気配をさぐるのが徒労なのは、もはや目に見えていた。

紅香さんが床にあぐらをかき、真九郎君、僕、環さんも腰を下ろす。

「あたし、席外しましょうか？」

環さんが紅香さんに聞く。

変なところで空気を読む人だ。

「いや、別にいいよ。そんなの今更だしな。夕介も残っていいぞ」

「うーん、粗方事情は知っちゃってるんですけどね」

「何？」

紅香さんが怪訝そうな顔をする。

「九鳳院のシステムは大体聞いちゃってるんです。前言ったように、情報収集が得意な知り合いが多いんですよ。青色サヴァンとか」

「……そうか」

青色サヴァン、くなぎーの異名を口にした途端、紅香さんは納得したようだった。

「元気にしてるのか？ 友のヤツは」

「え？ くなぎーに会ったことあるんですか？」

「ああ。前に仕事関係で数回な。そうか。あいつと知り合いだ

ったのか」

じゃあ知っててもおかしくないか。

と紅香さんは苦笑する。

「でも、分からなかった部分もあるんですよ。だから、そこんところは詳しく聞きたいです」

ま、体のいいネタバレタイムだな。

さて、どう転ぶことやら。

「何から知りたい？」

「あなたの目的」

「直球だな。悪くない」

部屋の灰皿に、煙草の灰を落しながら紅香さんは言う。

「私の目的は、約束を果たす事だ」

「約束？」

「古い約束でね……」

紅香さんの目には、彼女らしくない憂いが見て取れた。

「誰との約束なんですか？」

「紫の母親だ」

「あいつの、母親？」

「確か 蒼樹さんでしたっけ？」

「本当によく調べられてるな……。ああ、その通りだ」

紫煙を吐き、これは重要機密だ。と前置きし、紅香さんは語り出す。

「九鳳院の人間は、同族同士でしか子供を作れない」

九鳳院の後天性でなく、先天性にして遺伝的な特徴であり欠陥。

「昔なら、まあ一族内の近親相姦なんて、別に珍しいことでもなかったわけだがな」

「でも、今の社会でそんなことを……」

「裏世界において、今更倫理観を説くって方が間違ってると思うよ」

「その通り。やらなきゃ、一族が存続できないんじゃないや尚更だ」

紅香さんも同意する。

だが、僕がこう言えるのも身近にそんなヤツを知っているからなのかも知れないが。

人兄、零崎人識、生まれながらの殺人鬼。

零崎一族において、究極、そして絶対と呼ばれた二人の殺人鬼。零崎零識と零識機織の近親相姦によって生まれた者。

九鳳院と違い、遺伝的欠陥は無いけれど、それもまた一つのケースだ。

ぼんやりする僕をよそに、紅香さんの話は続いていく。

もつとも、大概が聞いた話だったが。

九鳳院家で生まれたの女は全て、奥ノ院と呼ばれる俗世から隔離された施設に入れられ、そこで一生を過ごす。

九鳳院の男はやがて正妻を迎えるが、子供は同族でしか作れない。

よって子供は奥ノ院で得て、その子供を正妻の子として育てる。

「無茶苦茶だ、そんなの……」

「そお？ そんな特異体質を持つ一族なら、むしろ生まれて自然なシステムだと思うけどなあ。大体、向こうには向こうの常識があるんだよ？ こっちの常識は通じないさ」

「真九郎。私もな、最初は無茶苦茶だと思ったよ。そんなシステムに順じる女達の気持ちも。でも、なんていうか、あそこは一種の異会みたいなもんでね。夕介の言う通り、こちらの常識は通じなかったよ……」

紅香さんの話によると、奥ノ院で暮らす女達は誰一人として疑問を持たないらしい。

そう教育されたからだ。

何事にも関心を寄せず、穏やかに過ごし、子供を産み、やがて死んでいく。

女がそうなるように作らせた施設なのだから。

「……紫も、そこで？」

「あの子は、九鳳院蓮丈が実の妹に産ませた子供だ。奥ノ院でも最年少の女。産まれも育ちも奥ノ院。これから死ぬまで奥ノ院で過ごす」

「でも、その命だつてこのままじゃあつという間に消えますよ。九鳳院の女つて短命なんでしょう？」

「ああ、近親相姦を続けた弊害だろうが、子供を産むとたいいてい早死にする。多くても、二人も産めば死ぬ」

紫ちゃんの母親、九鳳院蒼樹も、彼女が七歳の時に死亡。

残る二人の九鳳院蓮丈の妹も、一人ずつ子供を産んですでに他界済み。

さらに付け加え、九鳳院家は完全な男尊女卑であり、九鳳院の女は九鳳院に生まれた男に奉仕するのが当然になっている。

一般的な兄妹とは違い、兄は、妹を子供を産ませるための女としか見ないし、妹も兄を自分が奉仕すべき男としか見ない。

(……ふざけた一族だ)

九鳳院のシステムを否定するつもりは無いが、賛同する気も無い。顔にこそ出さぬよう努力はしたが、正直吐き気がする。

零崎である以上、その理念は全力をもって否定しなくてはならない。人間試験をするなら、文句無しに【失格】な連中の作った制度など、認めるものか。

真九郎君も僕と似たり寄つたりの心境らしく、拳を握り締めている。

「ムカつくか？ でもそのムカつく場所に、奥ノ院に、私の友人がいた」

以前紅香さんは、奥ノ院の警護をしていたことがあり、そんな折、紫ちゃんの母親、蒼樹さんと知り合ったのだという。

二人は正反対の性格だったらしいが、不思議と馬が合い、暇さえあれば話し合っていたそうだ。

何をしても楽しそうで、紅香さんもそんな蒼樹さんの反応が楽しかった。

そして彼女が一生を奥ノ院で終えるのを不憫に思った紅香さんは、蒼樹さんと離れることになった際に、出たいならここから出してやると言った。

しかし、彼女は首を縦に振らなかった。

例え九鳳院の掟に従っていたとしても、自分は兄を、九鳳院蓮丈を愛しているからと。

その代わり、蒼樹さんは紅香さんに一つお願いをした。

いつか自分は子供を産む、それが男の子か女の子かはわからないけれど、もし女の子が産まれたら、その子の願いを一つだけ叶えて欲しい。

紅香さんは彼女と約束した。

多分、蒼樹さんは、やがて産まれるであろう子供　紫ちゃんを哀れに思ったのだろう。

自分がこの地で死ぬことを受け入れたとしても、その子はそうでないかも知れないから。

そして恐らく、その時自分はその子の側にはいられないから。

やがて紅香さんは、蒼樹さんが、紫ちゃんを産んで死んだ事を知り、

約束を果たすことにした。

もともと、九鳳院の内部事情を知るのは容易ではなく、紅香さんがそれを知ったのはつい最近になってしまったが。

奥ノ院に侵入し、紫ちゃんと出会った。

紫ちゃんは持ち前の賢さから、それが真実だとすぐに理解する。

おまえの願いを一つ、叶えてやる。何がいい？

紅香さんは紫ちゃんにそう尋ねた。

紅香さんはどんな願いでも叶えてやるつもりだった。

しかし、紫ちゃんの願いは紅香さんすら想像せず、また面食らうような願い。

『私は、恋というのをしてみたい』

「……………」

「……………ふわー」

真九郎は無反応。

僕は奇声を発した。

確かにそら驚くわ。

外に出してくれ、ではなく恋をしたいなどと。

だが、これで僕が一番わからなかった疑問が氷解した。

柔沢紅香が、奥ノ院から紫ちゃんを連れ出した動機。

奥ノ院は世間から隠されているし、紫ちゃんを連れ出せ。などと依頼する人間がいるはずない。

だが違った。頼んだのは紫ちゃん自身だったのだ。

(しかし恋、ねえ…)

しかしある意味自然な願いかも知れない。

奥ノ院は恋愛とは無縁な場所。

ただ子孫を残すための施設なのだから、そこに愛など存在しえない。

だからこそ、紫ちゃんは恋がしたかった。

「……それで、俺の所に？」

「まあ、勝手な判断で悪いとは思ったが、他に適当な相手がいない

てな。紫のやつには、紅真九郎という男と一緒にいれば、もしかしたら恋ができるかもと言ったんだ。ここなら安全だろうしな。念のために、潤から誰か護衛をよこしてくれと頼んで、来たのがタ介だ」

真九郎君はただひたすら無言で、紅香さんの話は届いていないらしかった。

ひょい、と俯き加減だった顔を覗き込む。

うわ。

誰だよこれ。

真九郎君の表情は、僕が今まで一度も目にしたことのないものだった。

あの脆弱で、臆病な真九郎君は影も形もなく、代わりに刻まれているのは、覚悟を決め、どうなるうとも退かぬ強さを秘めた鋼の信念。

火が、ついた。

僕は自然とそう思った。

真九郎君はいきなり立ち上がり、紅香さんと環さんが怪訝そうに彼を見る。

「おい、どつする気だ？」

「行きます。あいつのところへ」

「状況わかってるか？ 九鳳院家は、お前一人でどうにかなる相手じゃ……」

「紅香さん」

上着を取りだして羽織り、真九郎君は紅香さんを真正面に見据える。

「ここは悩むところでも、迷うところでもありません。進むところ
です」

「死ぬ気か？」

「その前に、あいつに会います」

「仮に会えても、あの子は向こう側に留まるかもしれんぞ？」

「それは、あいつが決めることです。だから、あいつにもう一度会
つて、それから訊きます。どうしたいのか」

「助けを求めたら？」

「助けます」

「なんとまあ……女一人のために、表御三家の一角を敵に回すとは
な」

紅香さんは愉快げに笑う。

「これだから面白い。人生は面白い。この流れは読めなかった。私
の人は、大当たりってことか」

紅香さんの表情を見て、僕も自分が笑っていることに気が付いた。

ああ、そうか。

僕も楽しいのか。このイリーガルな状況が。

「真九郎。私が、この柔沢紅香が道案内をしてやる」

「いいんですか？」

「これも、約束の続きみたいなものだろ」

「僕も行くよ」

二人が笑みを交換しあったのを見て、僕も立ち上がる。

「依頼の延長のつもりなら、もう付き合わなくてもいいんだぞ？」

「そんなんじゃないやありませんよ。ただ」

そう言いながら、僕は真九郎君と目を合わせる。

「この結末、真九郎君と紫ちゃんの結末に興味があった。それだけです」

結局は僕のため、になるのだけれど。

「真九郎君、君はこの選択に後悔してない？」

「してないよ」

「仮にこの先にある結末が、救いようのないバッドエンドだとしても？」

「うん。そうなくても、俺は絶対に後悔したりしない。これは俺が選んで、絶対に戻らないと決めた選択だから」

「そう」

なら十分だ。

物語の終演に携わるには文句なし。

「……真九郎君。君の選んだ選択肢は、愚かで馬鹿げたものかもしれない。

たった一人の女の子に会うために、巨大な力とその掟に立ち向かおうっていうんだから、大抵の人はバカと思うだろうさ。

でもね、真九郎君。

歴史上、そういう巨大な力や掟をブチ破ってきた連中は、圧倒的にそういうバカが多いんだよ。

そして」

フツと微笑み、真九郎君に言う。

「僕はそんなバカが嫌いじゃない」

真九郎君も紫ちゃんも友達だしねー、と付け加える。

「ありがとう。……でも、あんまりバカバカ言わないでよ」

「僕の方が成績は上々」

苦笑する真九郎君に、ケタケタ笑う僕。

「私に、崩月に、零崎。ははは、実にユニークなパーティーだな」
紅香さん、マジで楽しそうだ。

こういう土壇場の余裕は、やっぱり潤さんを思い出す。

「暇だし、あたしも付き合おうか？」

僕らを見て、缶ビールを床に置いて環さんも立候補。

「酔っ払いはダメ（です）」

真九郎君と僕のユニゾンがそれを阻止。

「えーっ」

「環さんは、その桃缶でも食べていて下さい」

「そう？ じゃあそうする」

即答かよ。

異議を申し立てた割にはあっさり引いたよこの人。

あ、しかも本当に桃缶食い出した。

缶切りもどこから出したのやら。

その様子に、真九郎君と一緒に苦笑しつつ、ぐいっと伸びをした。

零崎らしくないとは思わない。

殺人鬼と言えど、純粹に楽しむ時間は必要だしね。

それに、殺人鬼だからって、友達助けちゃいけないなんてルールはないし。

(んじゃま、一丁気合いを入れて)

零崎を奏でに行きますか 。

展開の先取りは戸惑う

「どの程度まで予想がついてたんですか？」

助手席から、運転席の紅香さんに話しかける。

あの後、弥生さんが五分ほどで必要な情報を調べ上げ、即座に行動開始。

午後10時を回ろうかという時間帯に、風をぶつちぎり、神がかかったドライビングテクニクで夜の首都圏を走る、紅香さん専用のカスタムスポーツカー。

都市伝説でも作るつもりなのか。

この人ならやりかねない。

【衝撃！ 夜の首都圏に現れる謎の怪奇自動車！】

笑えねえ。

「何がだ？」

答えながらも、紅香さんはスピードを落とさない。

あ。今下げるところかさらにアクセル踏み込んだ。

あれだろうか？ この車にはデロリアンをリスペクトした機能でもついているのか？

すげえ。ドラえもんが出来るのもそう遠くないかも。

「真九郎君と、紫ちゃんの間柄の事ですよ」

後ろにいる真九郎君を見ながら、僕は言う。

真九郎君は車に乗り込んだ後、紅香さんに一言二言質問をして、眠りこけてしまった。

正確には、僕が音で強制的に寝かしたのだが。

彼の体に刺さっている針は、回復力を促進させるもの。

当然、肉体への負担も大きい。軋む体に鞭打って、無理矢理動かそうとしているのだから。

そのダメージを和らげるための【青の涼風】。

回復力二倍、とまではいかないが、何もしないよりは格段に治癒力は上がる。

真九郎君が寝ているのを確認し、僕は続ける。

「真九郎君の心には深い絶望があった。

トラウマ、といった方がいいですかね。

あなたはそれを見抜いていたから、紫ちゃんを彼のところによこしたんじゃないですか？僕に、あまり真九郎君を助け過ぎるなど言ったのも、彼が自らの力で立ち上がるのを期待していたんでしょ？」

「……お前、案外請負人や、揉め事処理屋に向いてるかもな」

「買いかぶりです。僕はあくまで零崎であり、そして……音楽家です」

「そうか、そりゃ残念」

特に気にした風もなく、ニヤついた笑みを浮かべて、紅香さんはタバコを新しいのと取り替えた。

「別に全部が全部、予定の範囲内ってわけじゃないよ。そのザマが今の状況だろうが」

紅香さんは言葉に僅かな苛々を含む。

「ましてや恋愛沙汰だからな。真九郎にも言った通り、こればかりはどうなるかわからなかった。

こうなればいいな、くらいにしか思ってなかったよ。

結局はあの二人次第だったわけだからな」

「計画性もなにもあつたもんじゃありませんね。舞台設定だけしてあとはノープランですか」

「人を黒幕みたいに言うな。……ま、実際はそんな役所なんだから」
けどさ」

あつさり認め、新しいタバコをくわえる。

僕は古いタバコを受け取り、灰皿に放り込む。

「……でも、別に真九郎君も紫ちゃんも、あなたを恨んではないですよ。」

むしろ、感謝してると思います。」

二人の縁を作ったのはあなたなんですから」

「それを切ったのも私だよ。今回の件は準備不足の積み重ねが招いた結果だ」

「違いますよ。」

この結果を招いたのは真九郎君です。」

紫ちゃんを守れなかった真九郎君の責任。」

それ以上でも以下でもない」

紅香さんは驚いたように目をしばたかせた。

「意外だな。お前は真九郎に入れ込んでると思ってたんだが」

「入れ込んでるからこそ、ですよ。獅子は子を千尋の谷に突き落とすと言いますから」

「竜士達を追い掛けなかったのも、そのせいかな？」

今度は僕が吃驚する番だった。

しばらく沈黙してからニヤリと笑う。

「……わかっちゃいますか」

「当たり前だ。零崎のお前だったら、車追いかけて紫を救い出すく

らいわけないだろう。大体お前、真九郎を襲ったっていう殺し屋見逃したらしいじゃないか。

真九郎の顔が立たない、とかいう理由で」

あれ？　なんであの時の会話内容知ってるんだ？

紅香さんはあの時いなかったのに。

聞いてみると、あの近くにいた弥生さんからの情報だと言う。

最も、弥生さんが来たのは僕より後だったらしいが。

「私としてはどちらでもいい話なんだがな。一つ聞かせるよ、零崎夕識」

「何ですか？」

「何だってお前は真九郎に入れ込んでるんだ？」

「……………」

さて、どう答えようか。

少し言おうか言つまいか迷ったが、別に隠し立てするほどでもないので、あっさりと白状する。

「滅茶苦茶ムカつくんですよね」

ぼつりぼつりと言葉をつむぐ。

「何にだよ？」

「真九郎君みたいだな、トラウマかかえてウジウジ生きる中途半端な人間を見るのが」

まるで自分を見ているようで。

自分自身の本質を自覚させられるから。

「だから、あーいう態度見てるとね。

ついぶん殴つてでも強制してやりたくなるんですよ。ま、要はただの自己満足です」

「ふうん。難儀な奴だな。お前も」

「否定はしません」

肩を竦めて、紅香さんから視線を反らす。

しかし、紅香さんの話は続く。

「これは私の勝手な持論だから、ただの独り言だと思え。嫌なら適当に聞き流してもいい」

紅香さんは紫煙を吐き出した。

空調設備がそれを瞬時に換気。

「生きてる奴の大部分は、自分を中途半端だと思ってる奴らだ。最高でもないし、また最悪でもない。」

だからこそ、ある人間は最高に憧れ、ある人間は最悪に憧れる。
どうなるうとも、そいつらの勝手だ。

でもな、夕介。実際に最高や最悪になれる人間なんていないんだよ。
本物など無く、それこそ紛い物、半端者だらけだ。
ただ、ただな。

唯一、それこそが本物だと言える者があるんだよ」

「……なんです、それ？」

「独り言だと言っただろう？」

自分で考えろ、そう紅香さんの目は語っていた。

本物と紛い物。

それは、あまりにはっきりしている。

かつて僕も目指した。

あの音楽家を。

一つの【最高】を。

だが、結局生まれたのは、紛い物の音使いだけ。

しかも、未練がましく、未だにその叶わぬ夢を見続けている。

紛い物から本物、そうなれる方法があつたともいうのか。

(……馬鹿馬鹿しい)

本物は本物。

紛い物は紛い物。

それだけのこと。

動物どうしの違いと同じだ。

鯨は鼠になれないし、蛇は鳥になれない。

いかに望もうと、それは深淵の泡沫に見る、夢想に過ぎない。

(……全く)

「……誠心誠意、掛け値なしに戯言だよねえ」

ぽつりと、我が親愛なる戯言遣いに呟いた。

ビルが高層ビル街に入ったところで、真九郎君が目を覚ました。

「……俺、寝てた？」

寝ていたことを少し後悔しているらしい。

「うん寝てた。でも身体軽くなったでしょ？」

その言葉で、真九郎君は僕が自分を眠らせたのを察したらしく、礼を言いながら、身体に刺していた針を抜いた。

やがてスポーツカーが辿り着いた先は、地上35階、財界などの会合や、諸外国の政治家や王族も利用するという、国内屈指の高級ホテル。

紫ちゃんはここにいるのだそうだ。

「弥生」

紅香さんが呼ぶと、さっきまで誰もいなかったはずの場所に弥生さんが現れた。

真九郎君と共に肩をびくりと震わせたが、三回目となると、何だか慣れてきた。

いやな慣れだけれど。

「ここで間違いないな？」

「はい」

「どうして、奥ノ院じゃなくてホテルなんですかね」

「変態だからな（ね）」

「は？」

僕と紅香さんの返答に、虚をつかれたような顔をする真九郎君。

「あの竜士って奴はね……。表世界ではかなり評判がいいらしいんだけど、裏じゃあかなりの悪趣味な奴なんだよ。子供をなぶるのが大好きらしくてね。九鳳院と金の力に物を言わせて犯りまくってるらしいよ。」

モロ犯罪だけど国家勢力だって、九鳳院が相手じゃ手も足も出ないからね」

「正義や倫理は、辞書でしか拝めない綺麗事に成り下がっちゃまったこの御時世だ。力を持つ者が偉い。それが悲しいが現実だよ」

「ちょっと待ってください。じゃあ、まさか、紫を……」

「犯るつもりだろ（でしょ）」

あっさりとその倫理観の欠片もない答えを口にする。

まずプロの殺し屋を雇った時点でおかしかった。

奥ノ院のトラブルなら近衛隊を使えばいい。

だが実際にはしたっぱの兵しか使われなかった。

つまり、今回の一件は本家には内密の、竜士の独壇場というわけだ。

この機に乗じて、その願望を果たす気なのだろう。

九鳳院において、女は貴重。

性の捌け口とはできない。

誘拐された妹の救出。

その大義名分を盾に、紫ちゃんを奥ノ院に戻す代わりに、竜土は己の欲望を満たす。

「そんな……」

「……紫ちゃん。随分竜土には手痛く接しられてたらしいよ。紫ちゃんに手を出せないストレスを、暴力で発散してたんだろうな。」

全く、不愉快な話だよ」

真九郎君はまた、顔に僅かな迷いと後悔を浮かべる。

紫ちゃんを守れたなら、こんなことにはならなかったのだから。

そして、例え紫ちゃんに会えたとしても、それは無意味かも知れないのだ。

「真九郎君」

ぼつりと、隣に立つ真九郎君に語りかける。

「世の中にな。後悔することなんて吐いて捨てるほどある。いちいち気にしてもキリがないんだ。

多少の後悔は見てみぬフリ。

真に消化したい後悔に全力を注ぐ。

これが上手い世渡りだよ」

「……前向き、だね」

「後ろ振り替えて何になる？ 過去はアルバムくらいに思っときなよ」

振り替えてみて後悔しかないなら、進むしかないのだ。

道は一本、後ろに道無し。

選択の余地など無い。

「……ありがとう。夕介君」

「礼を言うくらいなら、最初から迷わないの。君は紫ちゃんに会う。」

それだけを考えてればいいのさ」

「気合いの入れ直しは済んだか？」

紅香さんが、真九郎君の肩を叩く。

「はい」

「よし。行くか」

紅香さん、真九郎君に続き、僕も二人の後に着いていく。

だが。

「……あ。僕、車に忘れ物しちゃった」

あまりに唐突過ぎる話題転換に、真九郎君のみならず、紅香さんも怪訝そうに眉をひそめる。

「僕取りに行ってくるんで、二人は先に行つててよ」

「え、いや。夕介君、今それどころじゃ……」

「大丈夫。ちゃんとすぐ追い付くから、ね」

含みを持たせた笑みを紅香さんへ向けた。

少し不可解そうに目を細めた紅香さんだったが、僕の後ろに視線を向け「ああ」と呟いた。

「そうか。忘れ物なら仕方が無いな。　《ちゃんと戻って来るんだな?》」

「ええ。勿論」

「ならいい」

紅香さんは車のキーを放り投げ、僕はそれをキャッチ。

「あの車は気に入ってるんだ。勝手にキーを無くすなよ」

紅香さんはそのまま振り返らずに、戸惑う真九郎君を連れてホテルに入っていく。

その姿を見送って、手渡されたキーを見る。

「傑作だよ」

あの人、スポーツカー人質に取りやがった。

困ったなあ。

あのカッコいい車がスペアキーを作る間とは言え、しばらく動かなくなるなど耐えられない。

これじゃあ意地でも生き残らないとなあ。

「さて」

精神武装終わり。

くるりと身体を後ろに向ける。

「出てきなよ。寒い中立たされる僕の身にもなってくれ」

無機質な声が、静かな駐車場を支配した時だった。

「へえ、やっぱりわかったちゃうんだ」

車の影から、一人の少女が現れた。

いや、少女と言っても、僕と年齢はあまり変わらない。

紅蓮を思わせる髪に、鋭くも不思議な魅力のある眼。

身に纏うのはシャツとネクタイ、黒いロングジャケットとミリタリーパンツ。

右手にだけ皮の手袋。

容姿も着こなしも、感嘆の一言だ。

「なんで分かつちゃったのかしら？　一応気配絶ちはしてたんだけど」

「そのくらい造作もないよ。何を隠そう！　僕は隠れんぼ（探す側）の達人だッ！」

「あはは。出会って早々面白いわね、キミ」

なんかさりげなくネタを流された。

初対面の相手に突っ込みを期待したわけではないが、それでもなんか虚しい。

「一応、自己紹介した方がいいかしら」

「そうしてもらえると助かるけどね。呼ぶ時困るし」

「同感ね。呼ぶ機会が少ないなら尚更だわ」

お、言うねえ。

だが、その自信に裏付けされるかのように、彼女の立ち振舞いからは、油断も隙も無く、ただ膨大な威圧感が漂っている。

強いな、これは。

僕は直感でそれを理解した。

「星嚙絶奈」

「……ほしがみ？」

首を傾げた俺を見ながら、彼女はニンマリと笑う。

「わたしは、星嚙絶奈。ピチピチの十七歳。好物は酒と納豆。彼氏

は募集中。よろしくね?」

「そう」

多少、意表をつかれたが、僕も【殺し名】らしく、戦う者の笑みを浮かべる。

「僕は零崎夕識。青春真っ盛りの十六歳。好物はラーメンとミネストローネ。そして好きでも嫌いでもない物は消しゴム。よろしく、絶奈さん」

「へー。君、零崎一賊だったんだ」

成る程、【鉄腕】には荷が重いわね。

と、納得するように頷く。

鉄腕とは確か、あのアロハシャツの殺し屋だったか。

「貴女こそ、星嚙の人間だったんですね。で、なんでこんなところに裏十三家がいるんですか?」

「ん? そりゃあお仕事に決まってるじゃない」

「僕の始末、ですか?」

「そ。本当ならこれ、【鉄腕】の仕事なんだけどね。ヤバそうな奴がいるから応援に来て下さいって泣きつかれちゃってさ。

他に動ける奴が今いなくて、仕方無く私が出てきたの。

本当ならシカトするところだけど、クライアントが九鳳院なんて大御所だし、鉄腕をビビらせた奴にもちよつと興味あったからね」

「さいで。ところで、話を聞く限り、中々高い立場の人みたいですが」

「ええ。こう見えて、悪宇商会の最高顧問よ」

「……そりゃー、随分と高く、評価して貰ってるみたいで」

余裕を保とうとはしたが、内心は舌打ちしたい気分だった。

「しかし、参りましたね。まさか悪宇商会のトップが出てくるとは思わなかった」

しかも星嚙の人間とはね。

「私も吃驚よ。零崎と柔沢紅香がつるんでるなんてさ。

あなた　夕識君だっけ。あなた、弟子か何かなわけ？」

「まさか」

僕は即座に返答する。

僕が師匠と仰ぐのは、この世でただ一人だけだ。

それよりも、この流れからして、紅香さんや真九郎君もターゲットっぽいな。

こりゃあ意地でも殺されるわけにはいかないね。

まあ、紅香さんに気を取られて、真九郎君に目がいかなかったのは幸いか。

ここで彼女を殺せば、後腐れはない。

だが、人間常に和平の努力を。

「……一応言つときたいんですけど、お互い平和的に済ませませんか？ 僕、怖い保護者がいるんで、なるべく零崎したくないんですよ」

「んー。残念だけど、私としても譲歩は出来ないのよね。こっちの信頼や、評判が下がっちゃうし」

うーむ。まあそうだよな。

お互いに譲れない事情があるわけだし。

「それより何より、私は早くこの件片付けて、お酒が飲みたいのよッ！」

前言撤回。

そこは譲ってもいいでしょうよ。

「せっかく今日はオフだったのにッ！ 潰れるまで飲んで飲んで飲みまくろう計画が台無しよッ！」

「……さつき十七歳って言ってませんでした？」

未成年の飲酒は法律で完膚無きまでに禁止されています。

決して真似をしてはいけません。

「関係無いわよそんな事！ 私のアルコールへの思いは法なんかじゃ縛れないの！」

知るかよ。

酒飲んだ事無いし。

なんだか年上の筈なのに、年上の気がしない。

あの駄々っ子のような振舞いが原因だろう。

何にせよ、これで交渉決裂。

これ以上話す必要は無い。

「んじゃあ、貴女のためにも僕のためにも、早いとこ始めますか？
僕はさつさと先に行かないと行けないので」

「あれ？ あの二人追いかける気？ 随分評判と違うのね。零崎一
賊って。もつと家族以外の人にドライな連中だと思ってたけど」

「どんな評判か知りませんが、貴女ごときに僕の家族を語ってもら
いたくはありませんね。星嚙絶奈」

深淵夢想を絶奈さんに向ける。

「血の繋がりで無く、流血によってのみ繋がる、生粹にして後天的な殺人鬼の集まり。例え僕がどうであろうと、僕が零崎であるのに変わりは無いし、貴女を殺すのにもなんら変わりはありません」

「
いいわね」

絶奈さんはニヤリと笑う。

先程までのちゃらけた態度は影を潜め、その代わりに漂うのは、ただの戦意と殺意。

「私ね。基本的に管理者って立場だから、なるべく無意味な戦いはしないようにしてるのよ。

利益が無ければ戦う意味無いしね。

だから戦うのは大抵が仕事とか敵対組織の粛清とかなの。

でもね」

話しながら、絶奈はジャケットの右袖を捲る。

現れたのは、銀色に輝く硬質な腕。

どう考えても、生身の腕には見えない。

戦闘用の義手だ。

「貴方の事、気に入ったわ、零崎夕識君。

抹殺対象としても、私個人としてもブツ潰してあげるわよ」

「困りますねえ」

頬を引つ掻く。

何だって僕の出逢いはこつても変人ばかりなんだろう？

「……いや、別にいいでしょう。今さら変な知り合いが増えてしまつても。」

どちらにせよ、殺して解して並べて揃えて晒すだけです」

互いに目を離さない。いや、離せない。

周りに漂う空気、殺意の渦がそれを許さない。

それらが僕に告げる言葉はただひとつ。

「行きますよ。星嚙絶奈」

「いつでもどつぞ。夕識君」

「では一曲、」

零崎を奏でよう」

演奏開始。

刹那。

間合いを詰め、深淵夢想を振るう。

その凶刃は煌めき、星嚙絶奈の首を刈り取りにかかる。

が、やはりそううまくはいかない。

彼女は鋼の右腕でそれをきつちりと防御していた。

「いいわね。まるで容赦無く、敵の命を奪うのに何のためらいも見せない。さすがは零崎かしら」

「貴女こそ、真っ向から受け止めちゃいますか」

避ける事もできたはずだった。

こちらとしてもあくまで様子見のつもりだったし、彼女も気付いていただろう。

しかし星嚙絶奈はあえて受け止めた。

それが体現するのは、相手の暴力を受けきり、更なる暴力で蹂躪する彼女の戦闘スタイル。

自分の力にかなりの自信がある証拠だ。

(全く、うらやましいです……っね！)

瞬時に、受け止められている深淵夢想の先端部分を取り外す。

本体が、柄と刃に分離。

刃の方は柄が短くなり、さながら草刈り鎌のようになってしまったが、意表をつくには十分だ。

ひゅおん。

奇妙な風切り音と共に、鎌が空を切った。

先ほどまでそこにあっただはずの頭部が消えている。

見ると彼女は、身体を後ろに仰け反らせてそれを回避したようだった。

「女性の顔に傷をつけようとするのは、ちょっと乱暴じゃないかな？　夕識君？」

仰け反ったまんまの体勢で、彼女は腰のベルト　そこにあるホルスターに手を伸ばした。

指に摘ままれているのは、口径七ミリの薬莖。

慣れた手付きで、それを右腕へと瞬時に装填、カシャンという乾いた金属音を立てて、薬莖は義手の中に消える。

「じゃ、次は私の番ね。……いきなり死なないですよ。夕識君？」

「ッ！」

咄嗟の判断で、深淵夢想を元に戻し、口に当てる。

だが、その一連の動作を終えた時には既に、星嚙絶奈は体勢を立て直し、右腕を振りかぶっていた。

(作曲 零崎夕識 NO・15【黒の常闇】！)

発される重低音。

それと鋼の右腕が、深淵夢想とぶつかったのが同時だった。

すぐに口を離れたから、歯こそ折れなかったものの、深淵夢想を伝える衝撃は、僕を軽々と後ろに吹き飛ばした。

宙を舞い、アスファルトの上に叩きつけられる。

「あーぶーなー……」

ふらふらと立ち上がりながら呟いた。

何て破壊力だ。

どういう仕組みか知らないが、あれはヤバい。

一撃でも喰らえば、骨が砕けるだけじゃ済まない。

罪口製の深淵夢想で防御してもこの威力。さっきのアロハシャツの義手が、オモチャに見えてくる。

それに、不自然な点は他にもある。

さっきの無駄話の中、僕は既に布石を打っていた。

音楽ではなく、言葉による操作。

だが、あれだけの時間喋っていたにも関わらず、彼女の動きには微塵の乱れもない。

さっきの【黒の常闇】にしたってそうだ。

あれは視覚神経に作用し、相手の視力をシャットダウンする効果がある。

だが、それも効かなかった。

だからこそ、深淵夢想で直接ガードするしか手が無かったのだ。

「……………？」

絶奈さんは、怪訝そうに目をこじこじと擦り、「あー、成る程」と呟く。

「貴方、音使いね？ よく見れば、その鎌横笛だし」

「……」名答

音使いにとって、音使いであるとバレるのは致命的なのだが、隠した所で無駄なのは目に見えていた。

目を擦っていた仕草から察するに、まるで効いていないわけはなかったようだ、その中途半端な攻撃のせいで、音使いだと言うことが明らかにされてしまった。

状況はまるで好転していない。

「変わってるわね。音使いなんて殺し名じゃなくて呪い名の領分じゃない」

「変わり種でしてね、僕は。それに、貴女だって十分変わってますよ。生身で音が聞かないなんて、どういう身体してんですか」

「んー、私の身体って半分以上星嚙製だから、かな？」

「星嚙製？」

「そ。だから貴方のその鎌、大したもんよ。普通ならそれくらいじゃ済まないもの」

それはこの鎌でなければ死んでいたという意味だろうか。

グッジョブ、積雪さん。

まあ、この深淵夢想を造って貰った時に払った、思い出すだに

戦慄ものの【代金】を考えると、それぐらいじゃないと釣り合わないが。

いらんトラウマも掘り起こしてしまったが、大事な事も思い出した。

(そう言えば積雪さんに聞いたことあったな。星嚙について)

星嚙の生業　積雪さんからすれば、同業にあたるそれは、人体のあらゆる箇所の代替品を造り出すこと。

義手、義足、内臓、骨、筋肉、何でもござれだ。

そのクオリティの高さは、相場が同質量の宝石という価値からも伺い知れる。

そして星嚙の人間は、代々身体の生身を、敢えて人工の物に替える。

だから、絶奈さんの身体のほとんどは人工物。

音が効かないわけだ。

音は繊細かつ精密な物。操作において、少しでも障害物があればその音は違うように聞こえ、効力を失ってしまう。

つまり、僕の音は、彼女の身体内で変化し、本来の役割を果たせなかったのだ。

「さて、どうするの？　ギブアップ？」

「なわけないでしょ。腐っても僕は零崎です」

音が効かない。

それならそれで やりようはある！

リスタートだ。

絶奈さんは格闘術とあの義手による攻撃。

元々の戦闘力が、あの義手のせいでさらに凶悪になっている。

僕は音が効かない以上、深淵夢想でのガードと斬撃を繰り返す、防御主体。

しかも、人工物満載のあの義手の前では、斬撃はノーダメージに等しい。

深淵夢想のリーチを活かして、絶奈さんの間合いに入らないようにしなければ。

「ほらほら！ 考え事なんてしてるヒマ無いわよ！」

「余裕の表れです、よっ！」

深淵夢想の柄を床に付け、それを軸にしながら身体ごと回転。

遠心力が追加された蹴りは、絶奈さんの足を払い、バランスを崩させる。

もちろん、ダメージは無いだろうし、戦闘復帰に三秒と掛からない

だろうが、僕にはその一瞬があればいい。

「終わりだよ 【孤人要塞】」

笛を口にくわえ、息を吹き込む。

「作曲 零崎曲識 作品NO9 『雲梯』」

大量の火薬が爆ぜるような暴音。

それは衝撃波となって、彼女の身体を貫く。

「ッ！」

悲鳴のような声を上げ、絶奈さんは地面に倒れこんだ。

「さすがの貴女でも、これは効くでしょう」

操作が出来ないなら、外部からの衝撃波。

音が彼女の中で屈折されるなら、その影響がなければいい。

曲兄がかなり前、遊園地での戦いの際、総角三姉妹の一人に使った手だ。

少々呆気ないが、詰み（チェックメイト）だ。

「さあて……真九郎君と紅香さん追いかけないと……」

まさか殺られてないよね、と思ったが、ホテルの方からベレッタの

銃声＋手榴弾の爆発音。

いらん心配だったか。

鎌を引き、僕はホテルの方に走り出した。

思えば油断だらけの行動だったと言わざるを得ない。

「あ、吃驚した！」

「！」

気付いた時には遅かった。

絶奈さんは深淵夢想を弾き飛ばし、僕がやったように足を払う。

地面に倒れた僕の両手を押さえつけ、端から見りゃ倫理的に問題のある状態だった。

「……出会って間もない男を押し倒すのは、どうなんでしょうかね」

「恋に待った無し、でしょ？」

僕の軽口にも余裕の笑み。

……本当に人間かよ。

衝撃波が身体を通り過ぎたんだぞ？ 常人なら死んでもおかしくない。

「貴方って本ツ当に素敵ね。最高だわ」

「貴女は最悪ですよ。まさか衝撃波で倒れないなんて」

深淵夢想は……ダメだ。

拾うまでの距離が有りすぎる。

それ以前に、絶奈さんの力が凄い。

一ミリだって腕が持ち上がらない。

「衝撃波喰らってまだ一分も経ってないでしょう。本当にタフですね」

「いいえ。かなり効いたわよ、今の。未だに身体中ギシギシするし、一瞬意識飛んじやったから。ま、気合いよ気合い」

「そんなもので片付けられたら立つ瀬が無いですよ」

主に作曲者である曲兄の。

「立つ瀬が無いなんてとんでもないわ。凄い技術よ。精神感応と衝撃波って、まるでベクトルの違う物なんでしょう？ それを両方会得してるなんて、野球とサッカー両方出来るようなもんじゃない」

「……その例えはいささかニュアンスが違いますが　まあ悪くありませんね」

皮肉めいた笑みを浮かべる一方、半ば諦めに近い声が出てしまう。

星嚙絶奈。

恐ろしい子。

「久しぶりに滅茶苦茶充実したわ。酒よりもこっちに来たのは大正解だったみたいね」

そう言いながら、絶奈さんは顔を近づけてきた。

そのままキスされた。

「……………」

いや、別にファーストってわけじゃないよ？

でもやっぱり普通に驚いた。

「楽しませてくれたお礼」

ニカッと笑い、左手を離す。

だが左手がそのままなので、僕は動けないまま。

左手だけで、器用に薬莢を装填し、絶奈さんは右手を振り被る。

「じゃ、バイバイ。零崎夕識君」

あーあ、結局こうなるしかないのか。

ひゅおん、と風を切る音が木霊した。

多分、運がよかったんだろう。

まず、一つ目の幸運。

出発準備の際、【糸】を見つけた事。

これに関しては、何の脈絡もない事なので、まさしく幸運だ。

二つ目。

右腕が自由だった事。

三つ目。

絶奈さんがほぼ零距离にいた事。

四つ目。

「……君、何したの？」

絶奈さんはうめくように言っ。

その拳は僕の顔の前で、寸止めされている。

月明かりに照らされ、その周囲はキラキラと光っている。

それが写し出すのは 【糸】。

「カッコいいでしょっ？」 【曲絃糸】 って言っんですよ

四つ目。

僕がジグザグ

市井遊馬と紫木一姫に会っていた事だ。

「曲、絃系……？」

「ええ。糸を暗器にした殺人術　とでもいいでしょうか」

なんか安直な表現だが、大体そんなもんだ。

「世の中、本当に何かがあるかわかりませんね……。あの時【糸】を見つけなかったら、僕は死んでた　いや、【狐】に言わせれば、そんなものはどちらでも同じこと　か」

バツクノズル。

僕はその場で糸を見つけずとも、別の場所で糸を見つけていた。

起こる事は必ず起きる。

(……………はっ)

便利な言葉だな、西東天。

あなたはいつも変わらない。

変わらず、人類最悪の魂であり続ける。

そんなだから、十年前、僕を殺し損ねたんだよ。

「ふっ、と」

ひうんひうんと風が切れる。

と同時に、絶奈さんの義手がぶつん、と切れた。

まるで、接合さえも成されていないかのように、呆気なく。

絶奈さんが驚いた隙に、身体をつまぐ捻らせて、絶奈さんの拘束から抜け出した。

が、曲絃系の有効範囲はキープしなくてはならないため、ほとんど立ち位置は変わらなかったが。

「そんな……、こんな細い糸で、この義手が切られるなんて……、君、一体どれだけの力で糸を引いたのよ……」

「力は問題じゃありません。摩擦力、圧力引力重力磁力、張力応力抵抗弾性力遠心力向心力、作用反作用、滑車の原理に振動原理、跳ね返り係数と摩擦係数　この世界は、力で満ちています。わざわざ僕自身が《力》なんか持たなくても　人を殺すくらいのこと

はできるですよ、BY姫ちゃん」

最も、僕の曲絃系有効範囲は、姫ちゃんの足元にも及ばないが。

「知り合いから盗んだ技術でしてね。でも、数年経つても有効範囲は2、3メートル。これだったら深淵夢想を使った方がいいですね……」

独白のように、僕は呟く。

「で、まだやりますか？　持久戦になれば貴方に分があるかも知れませんか？　さっき貴女が押さえ付けたせいで、僕の左腕折れちゃいましたし」

「さりげなく首にまで糸回してる奴が何言ってるのよ　こーさん」

「重畳、悪くありません」

曲絃糸をほどき、深淵夢想を拾いにいく。

「ねえ、貴方。何で最初からそれ使わなかったの？ チャンスはいくらでもあったのに」

「使わなかったんじゃない。使いたくなかったんです」

「え？」

「僕は 零崎で、殺人鬼です。それは変わらない。ですが、それ以上に」

僕は音楽家なんですよ。

何の迷いも無い。

僕の本音だ。

「だから、この戦いは僕の負けなんでしょうね。音で戦わず、それ以外を使ってしまいましたが。戦いに勝って、勝負に負けた　ま、戯言ですが」

「ふーん、戦いの美学ってヤツ？」

「プレイヤー音楽家としてのルールです」

深淵夢想を片手で分解しようとするが出来ない。

仕方なく鎌のまま、肩に担いだ。

「……まさか私に、そんなリミッターつけて挑む奴がいるなんてね……」

絶奈さんは呆れ半分、感心半分といった風に笑う。

「貴方、音楽使わない方が強いじゃない」

「それは言っちゃいけません。悩みの種なんですよ。それ」

「あら、ごめんなさい。でも、さっきの気に入ったっていうのは、取り消さないわよ」

「ご自由に」

また変な人と知り合っちゃいました。

「ああ、そうそう。僕を殺さなくても、貴女方の会社には不利益はありませんよ。」

僕は世間的には、存在を確認されてない零崎なんで」

哀川さんがすっかり隠蔽をしてくれていれば、だけど。

「あら、それは助かるわね。貴方見逃して、一番不安な事がそれだったから」

「責任者はツライですね」

「本当にね。大変よ。ほら、友達が待ってるんでしょ？」

「ありがとうございます。では」

縁が《合ったら》、また会いましょう。

願おう、ささやかな幸せのために

「紅香さん！」

「よう、夕介。意外に時間掛かったな」

「むしろこれくらいで済んで良かったと思ってるくらいですがね……。で、何ですかこの状況。『手札ワイルドカード四枚、ただし隣がスキップカード四連続使用』みたいなの」

久々の巫女子ちゃんネタも、この状況じゃ虚しいだけだ。

裏口から入ってきてみてりゃ、周囲にはパトカーのサイレン音やら、銃撃音やらが鳴り響いてるんだもんなあ。

紅香さんは紅香さんで、涼しい顔のまま、ベレッタ撃ちまくってるし。

「紅香さん。これじゃテロリストと大差ありませんよ」

多分、遊馬さんが哀川さんを手伝ってた時も、こんなやるせない気持ちだったんだろう。

「真九郎にも言われたが、死人は出しちゃいけない。私も最低限のモラルはあるぞ」

「それは実行する意志があつて、初めて成立する言い訳ですよ……」

「それを実行する意味が無い世界に、私はいるんだよ。お前もそう
だろ」

「……ごもつとも」

非常識な人に常識的な事言われるのって、なんか腹立つよね。

「三十五階のスイートルームで真九郎がドンパチやってる。ここは
私一人で十分だから、行ってやれ」

「僕が行つていいんですか？」

「観客は多い方が、あいつも気合い入るだろう」

「僕はどう考えても蛇足な気がしますけどね。 最高の観客がい
るわけですし」

「かもな。じゃあその試合の安全確保には誰が行く？」

「成る程。りょーかいです。後始末はお任せしますよ」

「ああ。【円堂】と話をつけねばいいし、万が一には潤もいるしな。
ほら、さっさと行け」

【円堂】ともパイプがあるのか、紅香さん。

いや、その疑問は後回しだ。
テロリストまがいの活動を続ける紅香さんを横目に、僕はエレベーターへと乗り込んだ。

「うわ、広いねー」

さすがスイートルーム。ワンフロア全部使ってやがる。

「さて、真九郎君は」

探すまでもなかった。

いくつかの扉。その中に一際騒がしい【音】を放つ扉がある。
金属特有の音。あのアロハシャツの義手だ。

ドアノブを開こうとするが、ロックされている。

面倒。そう思い、ドアを片足で蹴破った。

部屋の中にいた人間、全ての視線が僕に向けられた。
真九郎君、紫ちゃん、竜士、アロハシャツの視線だ。

「僕、参上」

場違いな程明るい声で、僕はその場に乱入した。

「な、貴様！ 何故……」

「何故？ あー、おたくんトコの上司の事ならもう帰ったよん。ま、かなり大変な戦闘だったけどねー」

「夕介！」

紫ちゃんは天蓋つきのベッドに繋がれ、その近く椅子に竜士が座っている。

「やあ紫ちゃん。ちょっと見ない内にやつれちゃったねえ。大丈夫？」

「私の事などいい！ それよりも真九郎を……！」

「ん、ああ。予想はしてたけど結構劣勢だね」

真九郎君とアロハシャツの力の差は、どう鼻肩目に見ても圧倒的だ。反撃をものともせず、アロハシャツは真九郎君へ鉄槌を下す。

「何、君？ 急に現れてくれちゃって。そいつの仲間かなんか？」

不愉快そうに竜士は言う。

「ふーん、君が九鳳院竜士か。君みたいなのを放任してるなんて、九鳳院も落ちぶれたね」

「……あーあー、また馬鹿なヤツが来たよ。おい鉄腕。そいつ片付けたら次コイツな」

アロハシャツが顔を曇らせるのがわかった。

自分の上司の手から生還した相手を始末するなど、到底無理な話だからな。

雇われの身はツライよね。

「やれやれ。同情するよ、アロハシャツ。こんなボンクラにつかなきゃいけないんだからねえ。安心しなよ。僕は手を出さないからさ」

「タ介！ どうして……」

「なーんだ。安い友情だねえ。助けに来たかと思えば、見捨てられ

「ちゃってさ」

「……分かってないね。アンタも紫ちゃんもまるで分かってない」

「やれやれと首を振る。」

「僕が手を出すまでも無いって言ってんの」

「……は？ お前馬鹿かよ。この状況見てさ」

「紫ちゃん」

竜士を無視して紫ちゃんに語り掛ける。

「紫ちゃん。君自身が言ったのに、彼の強さを信じられないのか？」

「え……？」

「哀川さんの前であれだけ言ってたじゃん。真九郎君は【強い】って」

「それは……」

「なら信じてあげなよ。君を守り続けて。君を助けるために九鳳院に喧嘩まで売って。君が　そんな屑に従ってまで、大切に想っている揉め事処理屋をさ」

なあ！ 紅真九郎！

倒れていた真九郎君の身体が、ゆらりと立ち上がる。

「真九郎君、僕はハッピーエンド以外認めねーぜ」

「……うん」

さあ、見せてみる。

物語の終演を。

君の強さを。

「……紫、答える」

もはや限界を越えているのは明らか。彼を動かすのは信念。

一人の少女を守る。それのみだ。

「……お前、俺が負けると思うか？ 俺が、こんなアロハシャツ着たデカイだけの奴に、負けると思うか？」

彼の恐怖心は消えていない。

しかし彼は懸命に震える足を、両手で押さえ込む。

「……思わない」

紫ちゃんは大きな瞳で真九郎君を見つめ、呟くように言う。

彼女はまだ信じている。真九郎君が強いと。

「だったら、さ……」

真九郎君は不敵に笑う。
紅香さんのように。

「俺のことは気にしなくていいから。大丈夫だから。言ってみるよ、紫。お前は本当に、それでいいのか？」

紫ちゃんの瞳から、涙が一筋こぼれ落ちた。

今まで溜め込んできた感情を、全て吐き出すように、彼女は自分の気持ち进行を言う。

「……嫌だ」

「よくできました」

ぽつりと僕は呟く。

ケタケタと笑いながら。

「私は、本当は、本当は、こんなの、嫌だ、嫌なんだ……」

「このクソガキ！」

紫ちゃんを竜士は血走った目で睨み付け、胸倉を掴みあげる。

「素直に、俺のオモチャになつてりゃいいんだよ!」

「嫌だ!」

「俺に逆らつてののか!」

「お前なんか、お前なんか嫌いだ!」

「クソガキ!」

竜士に殴り飛ばされて、ベッドに転がりながらも、その痛みと悔しさに涙で顔をグシャグシャにしながらも、彼女は嗚咽混じりに、自分の大切な人だけを見ていた。

「…こんなの……やだ……やだよお……助けて……真九郎……」

「わかった」

いつの間にか、真九郎君の足の震えが止まっていた。

迷いも恐怖も弱さも無く、代わりにあるのは《強さ》。

彼が求めた真の《強さ》。

「戯言でも……傑作でもないね。これは」

ニヤニヤ笑いを隠そうともせず、僕は真九郎君に近づき、背中合わせの体勢になる。

それと同時に、部屋の中に数人の男が入ってきた。

スーツを着こんでないとところを見ると、悪宇商会の末端か。

恐らく、竜士がアロハシャツ以外にも雇っていたのだろう。

「邪魔なヤツは僕がやる。君は自分のやるべき事をやりな」

「でも、夕介君。大丈夫？ その腕……」

「ノープロブレム。僕の心配する余裕があるなら、大丈夫だな」

深淵夢想を片手でぐるぐる回す。

音は使えないが、コイツら程度なら白兵戦でも十分だ。

「紫、少し待てるか？」

真九郎が言つと、紫ちゃんはコクンと頷いた。

「ごめんな。すぐ片付けるよ」

「ひゅーう！ かつくいいね、真九郎君！」

片や、鉄腕は訝しむように真九郎君を見下ろした。

「殴られ過ぎて、頭がイカれたか、小僧？」

「……かもな」

真九郎君は尚も余裕の口調。

「可笑的いよね。夕介君」

「ん？」

「俺、さっきまで足が震えて、悲鳴挙げそうで、涙も出そうだったのに、」

真九郎君は右腕を構える。

「今は 全然コイツに負ける気がしないんだ」

真九郎君の右肘、その皮膚を何か突き破った。
血を滴らせるそれは、鈍い輝きを放つ鋭い刃のように見える。
そこから放たれる威圧感。それが出現しただけで、真九郎君の纏う
雰囲気、あらゆる竜のように踊り狂う。

(これが 崩月の【角】か)

凄まじい。

殺し名や呪い名を相手にしたような、ピリピリした気配だ。

「……へえ。じゃあ、さっさと片付けちまいますか。お姫様が待つ
てる事だしね」

「うん、そっちは頼むね　さあ、来いよ【鉄腕】」

「小僧……!!」

そのアロハシャツの眩きに、侮蔑の感情は無かった。武人たるあいつも悟ったのだらう。真九郎君が、僕や自分と同じステージに上がってきた事を。

「俺は悪宇商會所属、【鉄腕】ダニエル・ブランチャード！　名乗れ、小僧！」

叫ぶように、アロハシャツは叫ぶ。真九郎君は呼吸を整える。沸き上がるエネルギーを押さえつけ、声を張り上げた。僕もまた、自らの行為を口にする。

それが開戦の合図だった。

「崩月流一種第二級戦鬼、紅真九郎！」

「それでは一曲　零崎を奏でよう」

演奏開始。

「突然で悪いけど、ここでいきなり二組の男女の違いについて考察してみよう」

僕は動く方の腕で深淵夢想を持ち、出し抜けな口調で言う。

誰に言うでもなく、しかし独白でもない。

言うなれば、イジワルで悪趣味な世界とやらに、さながら宣言のように語りかける。

「さて、この男女。外面的には中々どうして似ている。

男の方は世の中という有り体に疎く、『自分』という存在を忌み嫌い、本来の自分を隠し、常に傍観者であろうとする。まさに立派な『戯言遣い』だ。

片や、女の方は実に純真無垢であるといえるだろう。信じて疑わず、何者にも染まりうる。身分はどちらも雲の上の存在であり、『見た目』だけなら歳も変わらない」

ハイキックを決め、鎌の柄で周囲を薙ぎ払う。

「この両組には、何らかの形で『愛』が存在している。それは間違いないと定義しておこう。元来、男女という関係は少なからず、そういったファクターが存在する。ならば、この両組の決定的な違いとは何だろうか？」

殴りかかってきた男の鳩尾に、カウンターでボディブローを決める。

「これはあくまでも僕の見解だが、その違いとは『バランス』では無いだろうか」

真九郎君とアロハシャツの右腕が、凄まじい風切り音と共に激突。竜士は悲鳴を挙げ、紫ちゃんは目を大きく見開く。

「一組の共に過ごした時間は短い。身分の違いも、この場合は壁になっただろう。」

しかし、お互いがお互いに、自分には無いものを見つけ出した。

男は女の真っ直ぐな心に。女は男の中に秘められた強さに。それぞれ惹かれていった。

結果、男は自分の弱さに、女は自分の運命に立ち向かう強さを得た。互いが互いを支え合う統一されたバランス。これは戯言抜きに素晴らしく、この世で最も称賛されるべき行為だろう」

つばぜり合いは真九郎君の勝利だった。アロハシャツの義手についたヒビが、ヤツの敗北を物語っていた。

「対して　もう一組の男女の関係はかなり特異な物だ。

最初の出会いは男の『復讐』から始まり、女から男に与えられた『敗北』によって終わった。

それから二人は浪費とも言える時間をだらだらと過ごした。あっさりとして、その時間は破局を迎えた。

その時、男は確かに女を助けようとしていた。彼女の為なら、死ぬことすら厭わなかったはずだ。

しかし、彼は逃げた。逃げてしまった」

糸で全ての相手を拘束する。有効範囲にいたのは幸いだった。

「その時点で　ボタンは掛け違えられたと言えるだろう。

いや　それ以前に二人の『愛』は歪と呼ぶのも烏滸がましい程に捻れている。

女が『完璧』であるからして、男に介在する『欠点』を求めた。いわば、リミッター。鞘の役割になる。

普通なら　男の女に対する感情は、多分もう一組の男女よりも純粹な『愛』であつたはずだ。

だが女の男に対する感情は『愛』というよりも『独占欲』に値する。彼女には彼しかおらず、誰にも、世界にも譲れなかった。

だから彼女は縛った。呪いの言葉で、彼を縛った。悲しいかな。これが二人の『関係』である。

いや、本当ならそれさえも一つの『愛』のカタチとして捉えるべきなのかも知れない。その愛情を阻害するのは、『停滞』」

いつの間にか相手は一人になっていた。ここまで来れば終了も同然。

「『停滞』は何も動かない。

動かず、流れず、消えず、揺るがず、回らず、崩れず、溶けず、壊れず、錆びず、乾かず、取れず、曲がらず、折れず、切れず、霧散せず、朽ちず、砕けず、破れず、 変わらない。

変わらないが、『バランス』は崩れない。

ただでさえ歪なその関係は、変化を加えれば忽ち消え去る脆い物だ。その恐怖が二人 真に怖がっているのは女なのだろうが とにかく」

それが、二人の間に絶対的な溝を作る。

「奇妙で、実に滑稽だ。

男女の関係とは、人間という種において、生来的に非常に重要なものであるはず。

ここまで個々の条件が似ていながら、ここまで絶対的に違ってしまう。

人ではない鬼である僕から見ても この違いが生じる原因はまるでわからない。

『男女関係は複雑』などと甘い言葉で終わらす気は無いが その思考を放棄している人間が大多数なのが現状だ」

敵の後頭部を深淵夢想でフルスイングし、気絶させながら僕は言う。

「 実に戯言にして傑作だよ」

いや 或いは、『矛盾』か。

「 以上。Q.E.D.」

観察対象。

戯言遣いと青色サヴァン。裏十三家と表御三家。

向こうを見ると、あっちも決着したようだった。

真九郎君の一撃がアロハシャツの巨体を打ち抜いたのだ。

アロハシャツは窓ガラスを突き破りながら下へと落下していく。アイツもプロだし死にはしないだろうけど。

ま、とにかくだ。

「やるじゃん。真九郎君」

実力差を気迫で完璧に埋めた。

真九郎君は柔らかな笑みを浮かべた後、また険しい顔になり、竜士の方を見た。

「ば、化け物！」

ベットから降りて扉に走る竜士の足を、真九郎君が投げたガラスの破片が貫き、転倒した身体に糸が絡み付き、その動きを奪う。

そこに真九郎君が、強烈なアッパーカットを決めた。

口から砕けた歯を撒き散らせながら悶える竜士を、真九郎君が冷たい瞳で見つめる。

「殴られるのは初めてか？」

「き、貴様、もう終わりだ、バーカ！ 九鳳院に逆らった奴は、死刑だ！」

「……ねえ真九郎君。こいつその窓から放り投げちゃだめかな？」

「駄目」

「じゃあ足元から一センチ置きにガラス刺して……」

「だから駄目だって。……こんなヤツでも、紫の兄貴だ」

「 甘いねえ、真九郎君は。甘々だよ」

やれやれと首を振って、糸をほどく。

「『あなたの意図はここで切れます』とか言えたら場も締まったの
にね」

まあいいか。真九郎君の成長も見れたし、これ以上の贅沢は望むま
い。

（しかし、竜士の言った通り、結構マズイ事しちゃったよな）

財力の世界VS暴力の世界なんてシャレにならない事態にはならな
いだろうが、真九郎君の身の上はかなり悪くなった。

（うーん。困った時の哀川さん、ってのもなあ）

と言っか最近、情報処理において僕のものび太君化が進んでいる気が
する。

ドラえもんくん、みたいな。

僕があれこれ策を練っている傍ら、紫ちゃんは感極まったような目で真九郎君を見つめていた。
しかし、お互いに掛ける言葉が在りすぎるらしく、話し出せていない。

「ほら」

軽く真九郎君の肩を叩く。

「抱き締めてあげるなりしたら？ お姫様を助けた騎士様の特権でしょ」

「そ、そういう意味で見合ってたわけじゃないよ！」

少し意地悪く促し、真九郎君と紫ちゃんは言葉を口にしようとした。だが突然、割れた窓から強烈な光と音が乱入してきた。

すわ何事か、と窓を見ると、駆動音を唸らせ、一台のヘリコプターがホバリングしていた。

（増援、じゃあないね）

僕がぼんやりしていると、ヘリから人影が飛び出し、こちらに跳躍してきた。その距離十メートル以上。

その影は着地と同時に、刀の切っ先を僕と真九郎君に向けてきた。

「動くな」

それは長い三つ編みが目立つ、若い女だった。

鋭い目付きが、射殺するような眼光を放っている。

「へえ。アンタが近衛隊の幹部クラスってヤツ？」

「余計な口を開くな。首を飛ばされたいのなら話しは別だが」

「面白え、やってみやがれ！」

まあ後半のセリフは嘘だが、正直な所、今の状態でも、この剣士と互角の戦いは出来るだろう。

しかし、戦いの前に真九郎君が斬られる事は目に見えていたので、僕は黙って静観していた。

彼女は残るもう一本の刀も抜き、それを竜士に向ける。

「そちらも同様に」

「リン・チェンシン！ 近衛のくせに、俺に刃を向けるか！」

(人間試験不合格確実な奴が何を言ってるんだか)

近衛の方、できればその刀をもう二メートルほど前に突き出して戴きたい。

「御前が参ります。お静かに」

御前？ 九鳳院本家の人間が来るのか？

屋上のヘリポートを利用し、誰かが降りてきた。扉が重々しく開かれ、入ってきたのは壮年の男。

(こいつが九鳳院蓮丈……か)

和服、下駄、片手の杖に口と顎に蓄えた髭。

一介の権力者や貴族が持ち得ぬ独特な存在感を漂わせている。部屋のほとんどの人間が畏縮する中、僕は案外冷静さを保っていた。

いや、何と言うか。

こんなに身分と雰囲気合致する人間は、久しぶりだったからだろうか。

まあ、くなぎーが知り合いにいるわけだし、同然かも知れない。

あんなにハチャメチャなご令嬢、他にいないし。

「帰国早々に、これか。下らん」

感情の欠落したような瞳で辺りを見回す。
その瞳が、僕は何故か気に入らなかった。

「お、親父、これは……」

「事情は知った。弁解は聞かぬ」

そう言つて蓮丈が杖で床を叩いた途端、部屋が静まり返った。

「竜士は家で謹慎。紫は奥ノ院へ移送。以上だ」

……つておい、それだけかよ。
苛々が募った。

『家族』の不祥事にそれかよ、アゴヒゲ。

真九郎君も似たり寄つたりの気分らしく、歯ぎしりしているのが分かる。

「待て！ あんた、紫の父親だろ！」

「自分の娘の状況すら把握出来てないのか？ とことん墮ちたな、九鳳院も」

「黙れ下郎共、口を開くな！」

リン・チエンシンの双刀が首に浅く刺さった。だが、そんなものはどうでもいい。

真九郎君と僕の気迫に多少感化されたのか、蓮丈は初めて僕達を見た。

凄まじい眼光。

しかし僕にとっては何の事は無い。

哀川さん、出夢さん、兄さん達に比べれば格段にマシだ。

……少し、瞳が紫ちゃんに似ていたのが気になったが。

「貴様、その腕の角、【崩月】の小鬼か」

「俺は……」

「名乗るな。耳が穢れる」

真九郎君を一蹴し、今度は僕を見た。

「貴様も、只の俗物では無いようだな」

「零崎だ」

リン・チェンシン、竜士が目を見開く。
蓮丈は逆に、蔑むような目で見てきた。

「僕はアンタに名乗る名前は無いからな」

「言うではないか。血塗れの殺人狂共が」

怒りのあまり、頭が冷めた。
唇を噛み、それを必死に押し留める。

やめる。真九郎君や紫ちゃんも巻き込んでしまつ。
僕から目を放した蓮丈は、再び杖をつく。

「貴様らは主犯ではない。だが、九鳳院家に害を及ぼした罪は重いぞ」

杖で床を指し、命令口調のまま続ける。

「詫びろ。そこに手をつき、詫びろ。それで、命だけは助けてやる」

真九郎君も僕も、互いに退く気は無かった。真九郎君は、紫ちゃんの前では強者であり続けるために。そして僕自身も、かなり頭にきていた。

『家族』を守らない人間などに、屈伏なんて生まれ変わっても御免だ。

「俺が、あんたに詫げる理由はない。何もない」

「その片栗粉混ぜたみたいな思考回路、ミキサーにでもかけてもらった方がいいね」

「下郎！」

リン・チェンシンの双刀が煌めいた。

僕は深淵夢想で剣筋を反らしたが、真九郎君はかわし切れず、肩の肉を薄くスライスされ、脇腹を深く抉られる。

さらに悪いことに、追撃は真九郎君の方に向かった。

彼は天蓋を投げつけて時間を稼ぎ、蓮丈の前ですっかり畏縮してしまった紫ちゃんを抱き寄せた。

リン・チェンシンは紫ちゃんを人質にとったとでも思ったのか、手を出さない。

今の内に彼女を止めたい所だが、言葉での操作は時間が掛かるし、糸もさつき見たら切れてしまっていた。やっぱり手入れしてなかったのが不味かったか。

「九鳳院家当主、九鳳院蓮丈殿に申し上げます！」

真九郎君は紫ちゃんを強く抱いたまま、声を張り上げる。

「ご息女、九鳳院紫の願い、どうかお聞き頂きたい！」

小声で真九郎君は紫ちゃんに促した。

「言ってやれ。お前はどうしたいのか」

「で、でも……」

「大丈夫」

「安心しなよ。君は真九郎君が守ってくれるし、真九郎君は僕が守ってあげる」

二人で背中を叩くと、紫ちゃんは頷いた。

「お、お父様……」

蓮丈に威圧されているのは明瞭だったが、それでも紫ちゃんは、恐らく初めて、父親の前で願いを言った。

「わ、私は、私は……奥ノ院から出たい……です……」

「考慮する価値無し」

(即答かよコンチクショウ)

本当に堅物だなこの親父は。昭和の人間じゃあるまいし。紫ちゃんは期待など最初から無かったように、乾いた笑みを浮かべた。

「たいしたことないな」

真九郎君が突然、嘲るような笑みを蓮丈に向けた。思い切り、馬鹿にしたような口振りだ。

「結局九鳳院蓮丈も、家柄だけが自慢の、小物じゃないか」

突然、僕は笑いの発作に襲われた。真九郎君がまさか、こんな大物

に啖呵を切るとは思わなかったから。
しかも、その表現が小気味いいくらいに正鵠を射ている。

「下郎、その首切り落としてくれる!」

「少し待て」

リン・チェンシンを蓮丈が手で制した。

「《崩月》の小鬼よ。今、何と言った？」

「小物、と言った」

「それは、私が誰か知った上での言葉だろうか？」

室内の空気が薄まるような息苦しさ。
侮辱は決して許さない。そんな殺伐とした状況下。

しかし。

「九鳳院当主、彼は十分に的を射た表現をしたと思うけど?」

笑いを噛み殺しながら、僕は言う。

「血濡れの殺人鬼が何をほざくか」

「だってそうだろ？ 曲がりなりに、表御三家の一角の当主ってんだからどんなヤツかと思えば、なんてザマだよ。たった一つの願い事も叶えられない無能者じゃないか。家族の問題にも目を向けず、無関心。これなら妹マニアの兄貴の方がまだ何倍もマシってもんさ」

「貴様……！」

「九鳳院蓮丈」

真九郎君の低い声が割って入る。

「あんたが九鳳院家の当主だというなら、この国の支配者の一人だというなら、この子のワガママくらい余裕で受け入れて見せる！ そのくらいの器を見せる！ 真の権力者ってのは、そういうことができる奴のことだ！」

「九鳳院家の女が奥ノ院で生きるのは、宿命。そのシステムは不変である」

それに対する返答に対し、真九郎君と僕の意見は同じだった。

「なら滅びる(なよ)」

「何？」

「そんなふざけたシステムがなければ存続できないなら、九鳳院なんか滅びてしまえ」

「お宅のシステムの前に、零崎の出生システムを見てみれば？ お宅らのシステムなんかランク外に見えてくるぜ？ そんなチャチい決まりもねじ曲げられないなんて、とことんダメだね、アンタ」

「小童共が……」

「あんたが本当に大物ならな、さすが九鳳院蓮丈だと、俺を感服させるようなところを見せやがれってんだ！」

「保守的な考えは進歩の無さを公表してるようなもんだぜ？ アンタも少しは一端の強者って貫禄を見せつけてみなよ。じゃなければアンタは【もう終わってる】」

「……なかなか吼えるな。【崩月】の小鬼と血濡れの殺人鬼風情が」

あ、ようやく感情らしい感情が浮かんだ。

思いっきり怒ってるけど。

「貴様らごときが、この九鳳院蓮丈を試そうというのか!」

豪雷を思わせる怒声に、竜士と紫ちゃんは震え上がったが、真九郎君と僕はまるで動じなかった。
こんな奴から、目を逸らしてたまるか。その感情が、僕らを踏み留まらせている。

「お、間に合ったな　ちょうど終盤戦か」

颯爽と、入り口から現れたのは、紅香さん。

(……ああ、やっぱりそっくりだわ。哀川さんと)

このいい意味でのKYさとか。

「お久しぶりです。九鳳院の大将」

「……やはり、貴様の仕業だったか」

「お見通しですか」

そりゃわかるだろう。九鳳院を敵に回すリスクを考えれば、奥ノ院から女を拐う人間なんていないし。実行するとするならば、哀川さんや紅香さんのような、この世の全てに許されるような、【規格外】の人々だ。

「柔沢紅香。貴様の目的は何だ？」

「約束です」

「約束？」

「蒼樹との、約束です」

「……下らん」

「……おい」

耐え兼ねて、僕は口を挟んだ。

「アンタ、家族を愛していないのか？」

家族を持つ人間として、聞きたい事だった。

「……………」

蓮丈は答えない。

相変わらず感情の読めない表情を浮かべている。

さらに問いたただそうとしたが、紅香さんに手で制される。

「言いたい事はわかるがな。聞かないでやれ」

「……………」

小声で、紅香さんはそう言った。

それは……………どういう意味なのだろう。

意味深な笑みを浮かべ、紅香さんはタバコを吹かす。

「今回の件、主犯は私で、裏方は夕介です。ところが主役は私でも夕介でもない。その二人だ」

裏方……………か。まあ妥当な配役だね。

この【物語】。主役は確かに、紅真九郎と九鳳院紫だ。

「さあ大将、どんな決定を下します？」

「そんな茶番に、私が付き合おうと思うか？」

「ケツの穴の小さいこと言わんで下さいよ。昔のあなたは魅力的だったのに」

「御前、この無礼者を切り捨てます」

主への侮辱に、リン・チェンシンの刃が煌めき、紅香さんへと迫った。

しかし、それはまたしても突然現れた弥生さんの手裏剣に受け止められる。

「くっ、柔沢の犬め！」

「犬です」

僕に会った時も言った台詞。

紅香さんの犬、つまり部下であるのに、不満は一片も持っていないのだろうか。

殺気を散らす二人を見ようとせず、紅香さんと蓮丈は睨み合ったままだ。

「あの【崩月】の小鬼と零崎の殺人鬼。貴様の弟子か？」

「崩月の方はそんなようなもんですが、零崎は違いますよ。哀川潤のです」

哀川さんのつて言つな。いらん誤解を招きそつだ。

「哀川潤……、成る程。どちらもよく似ておるわ。あの生意気な物言いがな」

「それは失礼、後で潤のヤツにも言つときますよ」

どうしても良さげに、そつぽを向く紅香さん。

「……感傷か、下らん」

その様子を一瞥し、蓮丈は口元をほんの少しだけ綻ばせた、ように見えた。

「私は忙しい身だ。こんな瑣末な件に、いつまでも付き合つ暇はない。決定を下す　紫」

杖で床を叩くと、凜とした声で娘に呼び掛ける。

「は、はい！」

「お前を奥ノ院から出す。以上だ」

「お、親父、そんな……！」

「決定である。お前も少しは鍛えろ。未熟者が」

竜士の反論を一蹴し、蓮丈は背を向けた。

リン・チェンシンも刃を引き、紫ちゃんに未練がましい目線を向ける竜士を刀の柄で昏倒させ、肩に担ぐ。

（近衛の方、グレイト）

そう僕が思ったのは言わずもがなだ。

「えらく引き際がいいですね」

紅香さんが怪訝そうに顔をしかめた。

「前例がないわけではない。その結果も知れている」

素っ気なく返し、蓮丈達は部屋を後にした。

「……最後までいけ好かない奴」

「ああ見えて人間味はあるよ。それを精神力を総動員して抑えてるだけさ」

確かに、感情が皆無なわけではなさそうだった。

蒼樹さんの名を出した時の表情に、冷徹さは無かった気がする。

けれど。

「やっぱり気に食わないです。紫ちゃんに一言でもかけていけばいいのに」

「ははは。お前も案外頑固だな」

「放つといてください」

ふう、と同じく満身創痍の真九郎君の隣にへたりこんだ。

さすがに疲れたわ。

蓮丈の気迫による精神的疲労に加え、絶奈さんの戦いがやはり後を引いている。

明日は学校休み決定だな。

ま、何はともあれ。

「 終わったね。お疲れ様、真九郎君。かつこよかったよ」

「 ……うん。ありがとう、夕介君。最後まで手伝ってくれて」

「 ははは。何だよ、そんな最終回みたいなセリフはいて。大
体、僕は君が動かないなら、手伝うつもりなんか無かったよ」

「 それでも、凄く支えにはなってくれたよ。一緒になって、蓮丈に
怒ってくれたじゃん」

「 あれは僕も思うところがあっただけさ。それに、君の一番の励み
は 」

「 真九郎！」

紫ちゃんが真九郎君の首に抱きつき、頬をすり寄せた。

その行為に驚きながらも、真九郎君は満更でもなさそうだった。

「 この子、だろ？」

紫ちゃんの頭をポンポンと叩くと、紫ちゃんは明るく、心が軽くな
るような笑みを浮かべる。

「 夕介も来てくれたのだな！ ありがとう……むぐっ」

何事か、恐らく礼を言おうとした紫ちゃんのを塞ぎ、指を口に当てた。

「まず最初にそれを言うべきなのは真九郎君でしょ？ 紫ちゃん」

「うん！」

その表情に、僕も疲れた顔で懸命に笑みを返した。子供は本当に切り替えが早いよね。さっきまで絶望的な状態の反動か？

（なんて）

理由ははっきりしてるけどさ。彼が、助けてくれたから。

「……………何笑ってんだよ」

「すごいすごい！ 真九郎はお父様に勝ったのだ！」

「あれは勝ったわけじゃ……………」

「謙遜するな、真九郎君。君は勝ってたよ」

しつかりフォローを入れる僕。
裏方と言われても仕方ないね。

「なあ、真九郎。お前、私の事が心配だったか？」

「どうでもいいなら、ここまで来ないよ」

「ちゃんと答えろ！ 私の事が心配だったか？」

「心配だった」

「私が大事か？」

「大事だ」

そこで紫ちゃんは会心の笑みを浮かべた。
長い間探し続けて、ようやく見つけた宝物。その肩に身を預けながら。

「喜べ、真九郎！」

興奮と喜び、今まで噛み締めていた幸せの感情を、一気に爆発させながら、紫ちゃんはそれを言の葉に乗せる。

「私達は相思相愛だ！」

単純に、これはハッピーエンドなのだろう。しかし、物語は終わらない。

あの【狐】がこの世の終わらせ方を見つけていない以上、彼らの物語もまた、果てしなく続いていくのだろう。

まあ、戯言なんだろうけどな。

そして尊き日常へ

「 てなわけです」

『そりゃなんとも、はっちゃけた出来事だわな』

「本当ですよ……、在り来たりですけど、今朝起きた時も夢才ちゃんじゃないかと思いましたもん」

学校の屋上で、僕は携帯越しに、哀川さんへの報告を済ませていた。

あれから既に一週間が経ち、真九郎君も全快とまではいかないが、学校に登校できるまでには回復し、今日も僕と一緒に登校したばかり。

紫ちゃんはというと、あれからすぐに、真九郎君が気を失ってしまい、別れの言葉もなく九鳳院に引き取られた。

それを聞いて真九郎君は「仕方無いよ」と言っていたが、それが強がりなのは明白だった。

確かに仕方の無い事ではあったのだろう。

だがせめて、お別れくらいはさせてあげたかったな、と僕は柄にもなく後悔したが、直ぐに考えるのを止めた。

所詮僕は、物語の読み手に過ぎない。そこまでの都合は、どう考えても高望みだ。

『しつかしなあ……。あの当主がそんなあつさり決断下すなんざ、想像もつかんわ。やっぱり大物なんだな。紅君は』

「まあ、意外ではありませんたよね。真九郎君も蓮丈も。……って、潤さん。やっぱり蓮丈の事、知ってるんですか？」

『おいおい、夕ちゃん。あたしを誰だと思ってんだよ』

「人類最強の請負人」

『わかってんじゃん』

愉快そうに笑う声が、電話口から聞こえてきた。

『娘を自由に、か。あのオッサンも、少しは素直になったのかね』

「素直も何も、あれが地の性格じゃないんですか？」

『いや、あのオッサンにも色々事情があんだよ。同情するわけじゃないが、根っこから嫌いにもなれないんだよな。紅香から何か聞いてないか？』

そう言えば、それとなく蓮丈への詰問を止めたりしてたな。理由を教えてくれなかったから、ただの気まぐれかと思っていたが、違うのだろうか？

「……分からないですね。あの旧世代が服着て歩いてるような人に、素直だった時代があったって言うんですか？」

『え、あつたよ？』

「……………」

マジですか。

「マジですか？」

地の文のセリフが口から出てしまう。

『マジだ。ああ見えて人間味のある奴だよ。不器用なだけだな』

紅香さんも、似たような事を言っていた。
何故そんな風に思うんだろう。

『紅香が奥ノ院で仕事してたのは知ってるよな？』

「ええ、本人から聞きました」

『あたしもそこにいたんだよ。まあ紅香と違ってド短期の仕事だったけどな』

「初耳ですね」

『初めて話したからな』

いや、それは当然だけどさ。

「依頼内容知らない風だったくせに。全部知ってたって事ですか」

『全部ってわけじゃないさ。お前が話した紅香の約束に関しては知らなかったしな。でも蒼樹には会ったことあるぜ。いい女だったよ。あたしが惚れてしまいそうなくらい』

「……………」

引いた。

『いや、冗談だぞ？ いい女だったのは本当だけどな』

冗談でなければ、僕の哀川さんに対する見解が百八十度変わるとこ

るだった。

しかし、哀川さんと紅香さん。

この二人を唸らせる蒼樹さんってどんな人だったんだろ。

会ってみたかったな。

『でだ。まあ、奥ノ院なんて九鳳院のトップシークレットに関わってたわけだから、九鳳院蓮丈にも会った事があるわけさ。確かに、お前の言う通り鉄面皮だったよ。でもな。蒼樹という時の蓮丈は少なくとも、楽しそうだったぜ』

「……………?」

『まさに相思相愛だったよ』

蓮丈は、蒼樹さんを愛していた……………のか？

いや、ならば蒼樹さんの忘れ形見であるはずの紫ちゃんに、無関心であるはずがないんじゃないか……………。

『だーから、アイツは不器用ななさ、根本的に。紫ちゃんの事もちゃんと愛してたんだろっよ。』

それを表に出せないのさ。九鳳院の男は、子供を産ませる妻の他に、正妻を迎える。その正妻が曲者だったのさ』

「正妻って言うと、九鳳院和子ですか？ 竜士の親の」

紫ちゃんにとっては、腹違いの母か。

『そいつが嫉妬深い女でな。蓮丈から愛を受けてる蒼樹を疎ましく思ってたわけだ。そんな奴が、蒼樹の娘である紫ちゃんを快く思うわけがないだろ？ 蒼樹の死後、蓮丈のヤツも、本妻である和子に遠慮しちまつてるんだよ。しかも、奥ノ院の決まりだって、『家族』を守る当主である以上、破るわけにはいかない。紫ちゃんに愛情を注ぐには ちいーと厳しい状況だよな』

「『家族』を 守る」

『これはあたしの想像も入ってるけど、間違いないと思うぜ。掟や家に縛られてたのは、紫ちゃんだけじゃなかったんじゃないか？』

あくまで、【かも】だ。

確証はまるで無い。

だが、僕はそれが本当だと、何故か自然に思えた。

「蓮丈に」

僕は言う。

「真九郎君みたいなのがあれば、紫ちゃんは泣かなくてすんだんですかね？」

『さあな。でも夕ちゃん、言いたくねえセリフだけだよ』

「ええ。そうですね」

それはもう、【終わった事】だ。

そして、どうせ同じこと。

「ありがとうございます、潤さん。話してくれて。で、話変わりますけど……」

『そっちに残ってたいってんだろ？ 別にいいぜ。誰でもすぐ気に入っちゃうんだもん。夕ちゃんは』

「いいんですか？」

『ああ、これ以後もあたしの仕事をちゃんと手伝ってくれんならな』

……本当、敵わないよ、哀川さんには。

「わかりました　じゃあ何か用があれば呼んでください」

『ああ、達者でやりたまえ』

「潤さん、らぶー」

『らぶー』

ぶっん。

携帯をしまって、ぼんやりと空を見た。

「　さあて、これから面白くなるのかな？」

真九郎君と紫ちゃんの物語は、まだ続くはずだ。

ここで終わるには　あまりに【あっさり】し過ぎている。その物語に、僕の物語が関わるのかはわからない。　だが、少なくとも退屈はしないだろう。

それに　。

「【狐】を探すなら、何処にいても同じだよな」

僕とアイツの縁は　まだ切れていないのだから。
しばらくは、真九郎君の物語に居座り続けよう。

「つくづく……悪趣味だよなあ」

他人のトラブルに、首突っ込むくせに、あくまで読み手であること
する。

まあ。

「アンタに育てられりゃ、当たり前か」

恨むぜ、おじさん。

「タ介！」

校庭を歩いていたら僕に、小さな影が近づいてきた。

「ありゃ、紫ちゃん？」

何でこんなトコロに。しかも塀をよじ登って。慌てて僕が手を貸し、無事着地。

「ありがとう、夕介！」

「いや、そんなのはいいけど……どうしてここに？」

聞けば、晴れて普通の小学校に一年生として編入したとのこと。しかも、百メートルと放れていない位置。

「そっか。おめでとう、紫ちゃん。で、真九郎君に会いに来たのかな？」

「うむ！ お弁当を届けになー！」

弁当……あの奇抜な創作料理の事だろうか。

「じゃあ……、一緒に探そうか。多分外にいるだろうし」

「そついえば紫ちゃん、あの後蓮丈とは話した？」

「……いや、あれから何度か会う機会があったのだが、用件を済ませるとすぐ立ち去ってしまうのだ」

うーん、やっぱりそつうまくはいかないか。
人間同士の溝なんて、そうそう埋まらない。

「少し……、期待はしていたのだ」

俯き加減に紫ちゃんは言う。

「今回の事で、お父様が真九郎のように接してくれるのではないかと。……でも、安っぽい期待だったな」

最初から期待はしていないというような口調だったが、やはりその声には落胆の色が濃い。

「我俥だというのは分かっている。竜士兄様のことや、奥ノ院のことから解放されただけでも、すごく幸運な事だ。その上まだ何かを望むなんて……虫が良すぎる」

「そう言うけど紫ちゃん。君から蓮丈に話し掛けたりはしたの？」

「え？」

予想外といった風に、僕の方を見る紫ちゃん。

「蓮丈のアクション待ちじゃなくて、君から何か話しかけたりしてみたい？」

しばらくして、紫ちゃんは首を横に振る。

「根本的に、蓮丈は不器用なんだ。自分から話しかけるのがきまり悪いのさ。だから、君の方から話しかけてあげなよ。五月雨荘のみんなの事でも、学校の事でも、何でもいいからさ。『人を知りたければ、とにかく話す』。コミュニケーションって、そういうものだと思うよ」

これ、双兄にもよく言われたっけな。

最初聞いたときには何をほざくとか思ってたけど、存外馬鹿に出来

ない。

蓮丈とよく話そうとせず、さっきのさっきまで誤解しっぱなしだったわけだし。

だからこれは、僕なりの謝罪だ。

娘との交流のチャンス。

それを蓮丈がどう受け止めるかはわからないが。

「夕介は、凄いな」

ややあつて、紫ちゃんが口を開く。

「真九郎君ほどじゃないよ」

「いや、それでも凄い。真九郎とは違う凄さだ。いつもみんなの事を考えて、みんなが幸せになれるようにしてくれる」

「それはいくらなんでも買いかぶりだよ。僕はそんな大層な人間じゃないさ」

どこるか 人ですらない。鬼だ。

「ただハッピーエンド以外を認めたくないだけだよ。……笑っちゃうよね。大した力も無いくせに、他人の問題に手を出して、引つ掻

き回していく。そんな悪趣味な奴なんだよ、僕は」

「悪趣味？　夕介のどこが悪趣味なのだ？」

「どこがって……」

からかつてるのかと思ったが、紫ちゃんは心底訳がわからないという顔だ。

「他人を幸せにする事の何が悪いのだ？　夕介はみんなを幸せにしたいのだから？　はっぴーえんどとは、そういう事ではないのか？」

「いや、それは……」

そう　なのか？

少なくとも紫ちゃんの言葉に、間違いは一つも無かった。

「確かに、世の中は良いことばかりじゃない。中には、幸せに恵まれない人だっている。

そういう時に、誰かを助けて、幸せにできる人間は本当に凄い人間なのだ」

真九郎のようにな。

紫ちゃんは微笑んだ。

「だから、誰かを幸せにできる夕介は凄いぞ。

前に電車で、私と真九郎を助けてくれた。

真九郎が戦っている時に、夕介も一緒に戦ってくれた。

お父様に、本気になって怒ってくれた。

自分には関係無い事なのに、だ。

それは夕介の良いところなんだから、欠点なんかじゃない」

私が保証する。

胸を張る紫ちゃんに、僕は不覚にも驚かされっぱなしだった。

こんなの 考えた事も無かった。

僕は【零崎】であって、この性格は人間の残り滓だとしか思わなかった。

出来損ないで、半端者の証だと。

だけどこの子は それを長所だと言った。

何の憂いも、哀れみもない笑顔で。

僕は黙って、紫ちゃんの頭を撫でた。

紫ちゃんは戸惑うように顔を紅潮させたが、抗おうとはしなかった。

「……本当にいい子だね、紫ちゃんは」

こんなに小さいのに 僕よりずっと大きな人間だ。

例えその言葉が、真九郎君と同じで、僕本来の姿を知らないだけでも。

その言葉は僕の心に染み渡った。

「紫ちゃん、一つ約束してくれない？」

「約束？」

「その素直な気持ち、絶対無くさないで」

まだこの子にはわからないかも知れない。けれど、それでもいい。

「それを忘れなければ、君はきっと幸せになれるよ。保証する」

殺人鬼の保証なんて、信頼するべきでは無いのかも知れないけど。

「よく分かんが……それはちゃんといい子でいるという事か？」

「そう思ってくれていいよ」

「じゃあ、いい子でいれば、真九郎とずっと一緒にいられるのだな」

「それが 紫ちゃんの幸せなんだね」

「もちろんだ！」

「 ああ。きっとそうなれるよ」

この子が純粹な心を失わない限り、どんな運命も彼女に味方するだろう。

それこそ 人類最強よろしく。

「 あ」

ふと紫ちゃんの後ろに目をやると、校舎裏の隅、そこに真九郎君が見えた。

紫ちゃんも、ほぼ同時に気付く。

「じゃ 行ってきな。君の幸せの元に」

「うむ！ 案内御苦労様だ、夕介！」

「いえいえ、恐悦至極」

冗談めかしく返した僕にもう一度微笑んで、紫ちゃんは真九郎君の元へと駆けていく。

その元気な姿を見送って、僕は二人に背を向けた。

別に何も変わっていない。

僕は相も変わらず、人と鬼を行ったり来たりしているし、問題も山積みだ。

【狐】にしる 蝕織の事にしる。

だが、今くらいはこの気分の良さを噛み締めよう。
後ろ向きな生き筋にも、面白い事の二つや三つ、あってもいいはずだ。

人間生活なんて、そんなもんだろ？

「さて……久々に作曲でもしますか」

今日は名盤が創れそうだ。

「ただいま、夕介！」

「おお、お帰りなさい、紫ちゃん。真九郎もお帰り。遅かったね」

「うん。ただいま、夕介君。銀子に色々と報告してたら、時間喰っちゃってさ。あれ、何してるの？」

「作曲だよ。今ちょうど終わったんだけど。聞いてみる？」

「おお！ 夕介の作った曲か、聞いてみたいぞ！ 真九郎！」

「……そうだな。夕介君の音楽って、まだちゃんと聞いたことなかったし」

「ははは……。二人が聞いたのは『戦うための曲』だったからね」

「ほら真九郎！ 膝を貸してくれ！」

「うわ！ む、紫！」

「ラブラブだねえ、ご兩人」

「ラブラブどころではないぞ、私と真九郎は結婚の約束を……」

「え、何。もうそこまで話が？」

「ち、違う違う！ 紫、夕介君にまで何言ってるんだよ！」

「やや、その口振りは、もう既に夕乃さんや銀子ちゃんあたりに知られたな？ 付け加えるなら、銀子ちゃんにはやらしいと言われた」

「って夕介君見てたの!？」

「教室の窓から見えたし聞こえた」

「そ、それって……!」

「いや、多分クラスの人は気付いてないさ。さて、んじゃそろそろ、演奏を始めよう」

「ふう、ご鑑賞、ありがとうございました」

「凄いね……、笛ってこんな音も出せるんだ」

「うむ、すごく綺麗な音色だったぞ!」

「そっか、よかった。二人に気に入って貰えてさ」

「そう言えば、これってなんて曲名なの？」

「んー？ それはね」

作曲 零崎夕識。

作品NO・99

【紅クレナイの二人】。

(第一楽章 了)

そして尊き日常へ（後書き）

はい。零崎夕識の人間生活。これにて紅一巻のストーリーはフィニッシュです。

これは元々モバゲータウンに掲載されていたストーリーであり、第三部まで書いていたのですが、諸々の事情により、こちらのサイトで執筆を続行することになりました。

第三部、つまりネコソギラジカル&紅三巻のストーリーまでを予定している作品ですので、夕識の物語はヒトクイマジカル&紅二巻のストーリーに続きます。

第二部は、兄と妹のかなり迷惑な兄妹喧嘩がメインとなります。戯言キャラと紅キャラの絡みも増えていきますので、またお楽しみに。

では次回更新にて（＾Ｏ＾）

プロローグ2

「家族や兄弟は、結局のところ他人でしかないと思うのです」
某道某市の歓楽街。

現代社会において珍しくもなくなったビル群　それが社会全体において良いことなのかはわからないが　とにかく、その一棟の地下二階に、一軒のバーが店を構えている。

【クラツシユクラシック】。

殺し名三位、【零崎】の三天王が一人、零崎曲識の経営するピアノバーである。

その店内、綺麗に清掃されたフロア。

ボルトで固定された椅子に座りながら、クリーム色の髪を一纏めにした小柄な少女、零崎蝕織は、隣に座る兄、零崎夕識に話し掛けた。

二人は未成年。

このような場所にはいささか似つかわしくないが、この二人がここに居候している以上、それは仕方の無い話だ。

「家族や兄弟は　同じ屋根の下に居るだけで、お互いにどう生活してると思えますか？」

【家族】　最も身近な社会集団。

一緒に笑って、一緒に悲しんで、一緒に怒って、一緒に楽しんで。

それって【友達】のように、世間一般でいう【他人】と何が違うんでしょうか？」

「まあ、血の繋がりがあっても、それは容姿、歳、性格、考え方、何もかも絶対的に違うわけだしな」

夕織は愛器、【深淵夢想】の調整をしつつも、妹と会話をする気はあるらしかった。

「私達みたいなのは、常識的な家族とは違いますけど、そういう意味では、普通の家族よりも、繋がりは薄いのでしょっね」

血では無く、流血によってのみ繋がる殺人鬼。

それが零崎一賊なのだから。

「お前、零崎に成りたくなかったなんて言わないよな」

「そんなわけ無いでしょう。」

ただ、もし私達がみんな 双兄さんも、軋兄さんも、曲兄さんも、人兄さんも、夕織お兄様も、みんなみんな普通の家族だったらどうなってたのかなって」

「下らない、下らないよ、蝕織。お前らしくもない。」

零崎でなければ 零崎にならなければ、僕達はそもそも逢っていないんだよ？」

「でも」

蝕織は夕識を見て言う。

「私とお兄様は、絶対に出逢います」

「ま、そうだろうけどさ」

深淵夢想の手入れを終え、所在無さげに、天井の照明を見る夕識。

「お前がいなければ僕はいないし、僕がいなければお前はいないもんな」

少し虚ろな表情で、夕識は言う。

「お前の言う【家族間の繋がり】ってやつも、僕とお前との間では強い方なんだろうさ」

零崎の中ではって話だけどな。

そう夕識は続ける。

「だからどうあっても、僕とお前は一緒にいたんだろうよ。そう考えれば、一蓮托生だよな。」

僕が殺人鬼になったから、お前は殺人鬼になったんだし」

「私は後悔していません」

蝕織は断固といった口調を返す。

「私はお兄様と一緒にいて、後悔した事は一度もありません。お兄様がお兄様で、本当によかったと思っています。」

「これからも、それは変わりません」

「……あらかじめ言うておくが、僕に妹萌えの属性は無いからな」

「もしそうだったら、後悔したかもしれないね」

ややあつて、夕識と蝕織はどちらからともなく笑い合った。

「お兄様は、私といて後悔していますか？」

夕識は虚を突かれたというように、蝕織を見る。

昔から、この妹は直線的な性格の癖に、肝心な事になると、まるで感情が読めなくなる。

事実、今の蝕織は心がかき消えたように無表情であり、その瞳は月蝕を思わせる程に暗く、深い。

「そうだな。うんざりくらいはしてるかも知れない」

戯言は無駄だと悟り、夕識はきっぱりと言い放つ。

「ただ 後悔したことは一度も無いよ」

落胆したように顔を伏せていた蝕織は、一転して明るい笑顔を向ける。

「まあ、死ぬ時くらいは別々だとありがたいけどな。その時くらいまでは、一緒についてやるぞ」

「……にやはは」

満足そうに笑うと、蝕織は隣に座る兄の肩に、身を預けた。

もはや慣れたことなので、夕識もいちいち突っ込みはいれない。

やがて、隣から静かな寝息が聞こえてくると、ただ一言。

「　　ったく、世話の焼ける妹だよ」

音の反響しやすい店内に、その愚痴はよく通った。

「……………」

帰宅した零崎曲識は、机で寄り添うように寝る二人を見て、無表情のまま立ち尽くしていた。

「悪くない。が、店の中で寝るのは感心しないな」

暫くしてその一言を呟くと、店の奥から引っ張り出した毛布を二人にかけた。

そのままステージの上、黒光りするグランドピアノに、曲識は向かう。

鮮やかな手付きで奏でられる高めのメロディは、子守唄の如く店に響き渡る。

零崎夕識が、紅真九郎と出会う五年前の話。

未成年の深夜外出は非常に危険です

「……………」

緋色夕介は、手に持ったものを見ながら、ただ沈黙していた。

星領高校校舎二階。

彼の（恐らくは）友人であるところの村上銀子が使用している新聞部部屋。

そこには本来いるべきであるはずの、二人の共通の友人である紅真九郎もおらず、沈黙する夕介と、寡黙にノートパソコンを叩き続ける村上銀子しかいなかった。

元来、二人はそんなに仲が悪いわけではない。

夕介がたまに銀子の素直では無い性格をからかいはするものの、基本的に仲違いはしない。

だから、このいかんともし難い沈黙は、この二人の人間関係とはまた違うところにある。

「……………昼休みに弁当も摂らずに何やってんの？」

沈黙に耐えかねたのか、珍しく銀子の方から口火を切る。

「昼休みって、必ず弁当摂らなきゃいけないの？」

「あたしが言いたいのはね、何で弁当を摂るでもなく、所在無さげにここに居座ってるのかってことよ」

「状況にそぐう的確な質問だね、悪くない」

兄の口癖を流用したりしつつも、夕識は手元から視線を外さない。

「理由はシンプル。

部室としてはかなり浮いた存在であるサイレントな新聞部ならば、考え事が綺麗に纏まると思ったからさ」

「何よ、考え事って。あのバカじゃあるまいし、金銭面や人間関係で悩むような夕子でも無いでしょうに」

「手厳しいなあ、銀子ちゃんは」

あのバカ、というのが誰かはもはや明白だったため、夕識も苦笑を返すしかなかった。

「だが、その見解には些か偏見があるね。

確かに、金銭面で僕は殆んど困らない。

人間関係でも……まあ歪な人間関係ではあるのは認めよう。

しかし今でもどうにかやっているよ」

「じゃあ何よ？」

夕識がだらりとした動作で、手元にあった物を銀子に見せると、銀子は「……成る程ね」合点がいったとばかりに頷く。

「有料でいいなら、腕のいい人調べてあげるけど」

「いや、こればかりは造った本人でないと直せないよ。かなり特殊な代物だから」

「その人の所在が分かんないから、悩んでたの？」

「いや、居場所はわかってる。」

いや居場所がわかる人を知っている、と言った方が正しいかな」

「なら、悩む必要無いじゃない」

「だからこそだよ　人間的に、なるべく頼りたくない人なんだ」

深い溜め息を漏らす夕識の手には、柄の部分で真っ二つに両断された彼の愛器、【深淵夢想】の残骸があった。

事の次第は昨日の深夜に遡る。

哀川さんの命を受けて、僕は近場で請負人代行としての仕事を済ませ、帰宅する途中だった。

まあ深夜、ともなれば人なんてほとんどいないわけで、僕は昼とは違う顔を見せる都内をぶらぶらと、五月雨荘に向かって歩いていた

わけだ。

「うわ、もう0時回ってんじゃない……。」

あーもう、最近仕事多すぎだよなあ。

真九郎君もよくこんな生活できるもんだ」

殺人鬼として生きていく方が大変だとは思っけどさ。

「しっかしなあ……。哀川さんがこんなにも僕を使うなんて珍しいよね……。」

相当忙しいんだな。

請負業は基本的に一人でやりたがる人だし。

笹が全滅するくらいの商売繁盛、とか言っていたが。

明け透けなフラグだ。

昨今のラブコメでも、もう少し伏線は隠すだろう。

「嵐 いや、東海地震クラスの静けさか」

シヤレになんねえな。

愛知じゃあ、今この瞬間にも、大地震が来るとか言われてるご時世なのに。

だが何にせよ、僕に選択肢は存在しない。

哀川さんに、僕の存在を隠蔽して貰っている限り、拒否権の公使は

全面的に却下されるのだ。

「僕に安息の日はないのであった　と」

一昔前の主人公みたいなセリフを言ってみたりしながら、僕は足を進めていき、とある交差点に差し掛かった。

深夜というだけあって、朝は通勤ラッシュで沸くこの場所にも、人影は見えない。

「　いや、訂正」

人影見えた。

視力は人並み（これも考えようによっては、なんと滑稽なことか）の僕だが、暗い夜道の中でも、僕の瞳はその姿を正確にとらえた。

かなり小柄な印象を受ける。だがあれは、路面のタイルに俯せになっている……のか？

「今時、ホームレスでもあんな寝方しないよね……」

それだったら新聞紙を使うだろう。

いや、バカにするようだけど、あれって本当に布団代わりにはなるよ？

熱があまり逃げないし。

そんな豆知識を披露しつつ、僕は信号も待たずにその人影に歩み寄

った。

車なんて、全然通ってないし。

「大丈夫ですかー？」

……………。

反応無し。

「お客さん、終電だよ」

趣向を変えてみるも反応無し。

改めて見てみると、僕と歳は変わらなく見える。

ロングヘアーに、眼鏡。

闇色マントに身を包んいて……………。

「……………あれ？」

デジャビュ発生。

つい数週間前にも似たような事無かったか？

不審に思い、その行き倒れちゃんの顔をもう一度見てみる。

匂宮理澄ちゃんだった。

「……………」

また行き倒れてるし！

繰り返しギャグは三回までだが、これは一回で止めて貰いたかった。

て言うか、まだこの街にいたのかよ…………。

いくらなんでも、こんな街に人兄が来る確率なんて殆んど無いだろうに。

僕の助言は何だったんだろう…………。

「うわぁ、寝息まで立ててやがる……………」

よかった、よかったよ。僕が第一発見者で。

一度状況を見知った僕じゃなかったら、そこらへんの人間ならフリーズ確実だ。

「…………放つとくわけにもいかんか」

玉藻ちゃんに比べりゃ、格段に接し易いしな。

環さん辺りには……米でも渡して黙らせればいいか。

そう思い、人差し指で頬をついてみようとしたりとところで、

ばっ。

と、ヒラヒラしたマントの風切り音がし、理澄ちゃんが跳ね起きた。
僕の手を回避するかの如く、元いた位置から数瞬で移動する。

「……………」

「……………あれ？」

理澄ちゃん、こんなに運動神経が良かったのか？

少なくとも、この前そんな印象は受けなかった。

よく見ると、あの澄んだ瞳も今は大きく見開かれ、瞳孔さえも開いている。

「え……………？　ち、ちょっと待ってよ？　僕は別に何もしてな……………」

釈明のセリフを吐こうとする。

が、

びゅんっ！

「……………」

「……………なッ！？」

気が付いた時には、理澄ちゃんは僕の目の前にいた。

あり得ない、僕がまるで反応出来なかった。

こんな動き、理澄ちゃんにできるわけ　。

(……………理澄ちゃんに?)

違和感が生まれた。

頭の歯車が回り、思考のベクトルが集束する。

そつだ、何故気が付かなかつた！

この子は。

いや、【彼】は。

足を動かそうにも、神経の伝達速度はそうスムーズにはいかない。

その間にも、理澄ちゃんは、拘束衣で動かせない腕を晒し、口を大きく開いて僕の首に噛みつきつこうとしていた。

「……う、あ

掠れ声を漏らし、半ば倒れるにして、それを回避した。

ひやり、と日本刀で斬りつけられたような鋭気が、僕の頬を掠める。

「ぎゃははっ！　ぎゃはははははははははは！」

彼女　いや、彼は大声で笑つ。

哄笑とも違つ、いわば狂笑とも言える笑い方。

「う……………あ

僕は身体ごと倒れた状態だ。

次は　かわせない。

くるり、と彼は此方を向き、少しずつ近づいてくる。

幸か不幸か、その脅威によって僕は硬直から解放され、言葉を発する事が出来た。

「ち、ちよっとストップ！　出夢さんっ！」

「　　なあんだ」

ようやく、彼は人間の言葉を話す。

「お前、零崎夕識じゃん」

そうして彼は、嫌らしく笑う。

「おいおい、なんてザマだよ。
会って早々足ガクガクじゃねーか。」

うさぎの物真似デスカー？

どうせやるなら犬の真似しろよ。

そしたら遊んだだけでもいいぜ？　ぎゃはははっ！

「……貴方の『遊ぶ』がどついう意味かは分かりかねますけど、やめときます」

「なんでえ、つまんねー奴だな。お前は相変わらずよ。

にしても、久しぶりだなあ、夕識君よ。あれ？　夕介君と呼ばれる方がよかつたか？

ぎゃはははっ！

でもそれじゃあ、発音のイントネーションで『幽々白書』の主人公と被っちまうな！

普通に夕識君って呼ぶぜ？

何故なら僕は空気を読む良い子だから！

「お好きなように。

……でもよく僕を覚えてましたね。

数回しか会ってないのに」

「そりゃあお前、宇宙広しと言えど、僕の事を『さん』付けする奴なんてお前くらいだからさ！

でもさ？　ですます口調がきつちりしてたって、今時の女の子にはモテねえぜ！？

ぎゃはははっ！

それだつたらその白髪を真っ黒けにする方がよっぽど現実的ってもんだぜ！？　以上、出夢先生のモテ講座でしたあ！

素晴らしきハイテンション。

くなぎーや巫女子ちゃんとは違う種類のものだ。

強いてあげるなら、ブレーキの壊れたマツ八号。

まるで変わってないな。

「まあ何にせよ、久しぶりですね。
匂宮出夢さん。」

最後に会ったのは、どっかの遊園地でしたっけ？」

僕の言葉に、『殺し名』序列一位、殺戮技術団【匂宮雑技団】の最終兵器にして、【人喰い】（マンイーター）、理澄ちゃんの兄、匂宮出夢さんは、意地悪そうに、にやりと笑った。

「そーいや、理澄助けてくれたんだってな。礼言つとくか？」
「いいりませんよ。」

……まあ、強いてあげるなら、あの日無意味に食卓を蒼然とさせたのは謝って欲しいかも知れません」

「ぎゃはははっ！」

ナニナニ、理澄の仲間かれるのがそんなに嫌だったか！
だが残念、ウチの可愛い妹は誰にもあげませんヨ？」

貰う気もねえつつの。

存在隐したい僕が、なんでそんなどつばに填まるような真似をしな
きゃならん。

「しっかし、改めて聞くけどよ。

お前あんなボロい住まいで何がしたいんだよ。

言っちゃあ何だが、あんまし立地条件がいいとは言えねえぜ？

住むなら近場にデパート、娯楽施設は基本だろうが」

「意外に俗な基準も持ってるんですね……。いや、デパートは無い
ですけど、スーパーマーケットはありますし、探せばゲーセンくら
いなら……。って違いますよ」

ピシッとノリツッコミ。

話すべき論点から綺麗に逸脱している。

「僕よりもまず、何で出夢さんがここにいるんですか。
京都いったんじゃあ……」

「それこそ、僕の勝手だつっの。

何だかんだで僕ら根なし草だからさ！

「ぎゃはははっ、旅カラス万歳！」

僕ら、か。

ならば理澄ちゃんも来ているのだな。

「一応京都には行つたぜ？」

いやいや、お前の言う通り、面白そーなやつ満載だったなあ！

お前の言つてたトラブルメーカーにも会えたしな！

けどまあ、僕らにだって『人探し』以外にも仕事があるわけよ。だからこうしてリターンズとなつたわけ」

「他の仕事ですか」

「探索は理澄中心だからな。

僕は付き添いみてーなもんなんだけどさ。

……ああ、そうそう」

隣を歩いていたら出夢さんは、くるりと僕に目線を合わせる。

「こーいのは領分違うから柄に合わねーんだけどさ。

まあ、妹を助けるつもりで聞いてくれや。

お前よ、まじで零つちの居場所知らないわけ？」

「知りませんってば。数ヶ月前に京都で会つて、それっきりですよ」

むしろ人兄には、あまり深入りしたくないのだ。

「ふーん、そかそか。ならいいんだ」

「まだ人兄見つからないんですか？」

「ん、いや？ 見つけたぜ」

「じゃあ何でそんなこと聞くんですか？」

「色々あんのさ、僕にもな」

むう、はぐらかされた。

気にはなるが、深追いは禁物。

見た目は十代後半の少女でも、中身は少年だし、強さにしる僕の数段階上をいつている。

その代わりに僕は違うことを聞いた。

「出夢さん」

「んー？」

「貴方に、いや、この場合は理澄ちゃんですか。」

まあとにかく、あなた達に人兄を探す依頼をしたのは 『狐』で
すか？」

「そーだけど？」

「……………」

口が軽い……………相変わらず。

一応デスノートレベルの頭脳戦まで予期していたが、余計な心配だった。

絶対にこの人とだけは、約束をしてはならない。

「おっと、インパクトのあまり口滑らせちゃった。

まあいいか。どっちでも同じだしな。

で、何でお前狐さん知ってたよ。

あの人、零崎と何か接点あったのか？」

「狐『さん』……ねえ。

まあ、あの人って基本ダメなくせしてカリスマ性あるからな。

『さん』とかは付いちゃうか」

「少ない文章であの人のキャラクターを語るのは大変スバラシイ技術だけどな。

僕の質問には答えられてねえぜ」

「そう言われても……。

知り合い うん、知り合いではあるんですけど、あの人にと

っては、僕は『もう終わったこと』ですからねえ。

知らないとも取れますよ。

それに、これ『狐』と繋がりある人には言いたくないんです」

しかも、よりによってさっき約束はしないと誓った人物に。

「別に構わねーさ。多分だが、これから僕は狐さんには関わらないだろうし」

関わらない。

会わないじゃなくて 関わらない？

「あー、言い方が悪かったかもな。

僕はもう、『物語には関わらない』ってことさ」

「 物語に」

「狐さん知ってんなら、この意味はわかるだろう？」

悪っぽい笑みを浮かべる出夢さん。

知っている。

嫌っちゅーほど。

でもなあ。

出夢さんいい加減だからなあ。

それに、こんな人が『物語』から外れるとは思えない。

外れるとしても、絶対奇跡のリ・ボーンとか遂げそうだ。

(……………まあいいか)

よくよく考えれば、隠していてメリットもデメリットもないし。

僕も、存外口が軽い。

「じゃあ、そんなに言うなら……。
えっとですね。」

僕は×××の××だった××××の××なんですよ。
ちなみに僕の××は×××です」

「地の文的には伏せ字になった気がするの、僕の気のせいかな？」

「気のせいです」

「そうか。」

しかし、成る程ねそーゆー事なんだ」

「一応言つときますけど、他言無用ですから」

「おいおい、僕を誰だと思ってんだ？」

お口に鎖国政策、匂宮出夢君だぜ！」

「名前負けも甚だしいですね……」

二世紀どころか二日と持たなさそうな気がする。

「……つと、じゃあ出夢さん。そろそろ僕は行きますね。」

明日も学校なんで」

「やれやれ、殺し名が勤勉なこつたな。」

なんやかんやで、お前も零つちの弟つて事なのかね」

「いえいえ。人兄と違って、僕は案外楽しんでますよ。」

興味ぶかい友達もいますしね」

「あーあー、お前も垢抜けがさらに酷くなってんな。
どっどん裏世界から遠ざかっているの、わかってんのかよ」

「垢抜けですか……。確かに、最近よく思うことはありませんな」

真九郎君や紫ちゃんに会ってからには特に。

僕はシニカルに笑い返した。

「血濡れの刃物が切るのをやめりゃあ、錆るのを待つだけだ。
お前、僕の見立てじゃかなり浸食されてんぜ」

「それもまた一興ですな。」

せつかく鬼と人間を行き来してるわけですから、出来損ないは出来
損ないらしく、自墮落に生きていきますよ。
ま、単純に飽きただけかも知れませんがね。
貴方もそうでしょう、出夢さん？」

「……ぎやはは、違いねえな。」

んじゃ、精々気楽に半端者ライフを楽しめよ。

あの崩月のヤツと、九鳳院の嬢ちゃんにもよろしく」

マントを棚引かせ、匂宮出夢は夜の闇に溶け込んでいった。

「……うーん、やっぱり出夢さんは誤魔化せなかったか」

理澄ちゃんはずまく誤魔化したんだがなあ。

さすがに、真九郎君に出夢さんがちょっかいを出すことはないだろ

うが、それでもあまり良いものでもない。

「……しゃーないよね。こればかりは出夢さんが勝手に気付いた事だし」

僕に罪は御座いません。

言い訳を一つして、僕は再び帰路についた。

騒がしい出夢さんがいなくなった分、余計に静かに感じる。

眠気に目を擦りながら、僕は帰宅ルートにある土手を歩く。

以前、時宮の『人形』とやり合った場所だ。

あの後、『人形』がどうなったかは知らないが、それは僕の預り知らぬところである。

「……………」

月光差し込む川を見ながら、僕は立ち止まった。

一歩進んでは止まり、また一歩進んでは止まりを繰り返す、さながら双六のような行為を数回行った。

その間、まるで薄まることなく、僕の嗅覚に向けられるのは、『血の匂い』。

「……………ってマジですか」

おいおい、どうなってんだよ今夜は。

出夢さんに会ったと思ったら。

溜め息混じりに、僕は河原に降り、鉄橋の影に入った。

ここなら、万が一にも人には見られまい。

あー、そっぴやいー兄が人兄と会ったのも橋の下って言ってたな。

変な符合だが、今回の場合、アイツに言わせればただの【偶然】だろっ。

最も、それは僕の希望的観測かも知れないが。

じゃり、と砂を踏みしめて立ち止まる。

深淵夢想は組み立て済み。

既に臨戦態勢。

後ろを振り向けばすぐ目の前に。

それはもう分かりきっている事だ。

「新月　会うにはちっと出来すぎたシチュエーションだな。
実に矛盾だらけの世の中だよ」

「矛盾も何もありません。ただの偶然です」

僕と同じように、一纏めにされたクリーム色の髪。

鈍く、深い煌めきを放つ瞳。

実年齢より幼く見える顔立ちには、下弦の月を思わせる妖艶な笑み。

手には 黒塗りの曲刀。

本当に こいつは。

「全くもって、変わんないな。 蝕織」

「貴方は 変わったのですか、お兄様？」

そう言って ダイクサイドインフェル 漆黒残響、零崎蝕織もまた、この物語への参戦を表
明した。

「害悪細菌にはお会いになられたのですよね？」

「ああ、あの毒を含んだ手紙も見た。

お前は伏線を裏切らないよな。

自ら通り魔としてご登場とは。

だが、いまいちインパクトに欠けるな。

人兄じゃあるまいし、何だったら鉄橋切り裂いたりすりゃあ、サマになるのにさ」

「それは私にも人兄さんにも失礼だと思います。

私はお兄様のように、無意味な脚色は好みませんもの」

「地味に、質素に。最終目標がモブキャラであるこの僕になんて酷い事を。

常に僕は、周りから僕を看破されぬよう、たゆまぬ努力をしているぞ」

「死色の真紅の力を借りて　　ですよね？」

蝕織の眼に危険そうな光が走った。

顔には出さないが、素直に怖い。

これに怯えない人間は、多分哀川さんくらいだ。

双兄も、これにはさすがに引いていたのを覚えている。

「　　ったく、たまったもんじゃねえよなあ、実際。」

過去10年弱言い続けた事でもはやマンネリと化したセリフだが敢えて言わしてもらおうと蝕織、僕の交友関係に口を挟むな」

「私との交友を一方的に遮断していたお兄様に、そんなセリフを言う資格があるとお思いですか？」

手に持った黒刀、漆黒残響【ダークサイドインフェルノ】の切っ先を僕に向ける蝕織。

半端じゃない威圧感が周囲を支配する。

が、僕も退くわけにはいかない。

「あんな、蝕織。僕には僕なりの事情があって哀川さんと一緒にいるんだ。」

零崎以外のために動いてるとか思ってるかも知れないけど、そいつは違うぜ。」

僕は　　

「ええ、知っていますよ」

くすり、と意味深に笑う蝕織。

「【狐】を探すため　　でしょう？」

「……誰に聞いた」

「聞かずともわかりますよ。
だってお兄様の事ですもの。
お兄様の事は私が一番知っていると自負しています」

「……………」

怖い、怖いよ蝕織さん。

そのセリフ、聞きようによってはかなりの危険発言だ。

このヤンデレ娘が。

僕の心境そっちのけで、蝕織は、それにしてもと続ける。

「まさか 【狐】 が生きていたとは思いませんでした。
本当に迂闊でした。

それをお兄様よりも早く知れば お兄様が死色の真紅に出会う
前に止められましたのに」

「あの人が懲りない人間だったのは、お前もよく知ってるだろうが。
つーかさ、分かっているなら尚更じゃないか？
僕は【狐】がいつか起こす出来事から、家族を守らなきゃならない
んだよ」

確かに、あまり褒められたやり方じゃないが、事によっては零崎存
続に関わる。

そのためなら、鬼の門だろうがなんだろうが入ってやる。

いや、別に哀川さんが嫌いなわけじゃなけどさ。

「……………まあ、そう言うわけなので、僕は哀川さんから離れないし、お前に着いていく気もない。

だからとつとと帰れ。何なら、くなぎー手伝ってればいいだろうが。

【踊る月影】。

欠【フォーマルアウト】、緋色美織「

「……………いつつもそう」

僕の言い分に、蝕織は感情を押し殺すようにしながらそう呟く。

「いえ。でも、分かりきってた事ですものね……………、うん。

お兄様は やっぱり【そう】なんですね」

「……………?」

独り言とも独白とも違う、蝕織の言葉に、僕は疑問符を浮かべた。

いつも僕が何だって？

僕、なんかやってたか？ あいつに。

だが、その疑問に答えを出す間も無く、蝕織は漆黒残響を構え直していた。

「口で分からないなら、骨を折ってでも連れていきます。

お兄様をこれ以上、【狐】とは関わらせません」

「 やっぱし、ことうなるか」

やれやれ。

とことん猪突猛進だよ、この妹は。

深淵夢想を横向きに構え、演奏体型をとった。

「喧嘩は 結構久しぶりだな」

「その度に私が勝ってましたけれどね」

「二、三回は勝ってただろう」

「私が風邪引いて、絶不調の時だけです」

「あれはお前からふっかけて来たんだから言い訳にならないぜ。」「嫌です！ 薬なんて飲みたくありません！（声帯模写）」「とかほざいてたな」

黙らせるのにどんだけ苦労したか（音楽操作×3曲、実力行使、あと少し曲兄の協力）。

懐かしいもんだな。

「来いよ。全力で手抜きしながら勝ってやる」

「やっでご覧なさい、全力で叩き潰してあげます」

それぞれの愛器を構え、僕らは同時に言う。

「
それでは一曲」

「零崎を奏でよう」

「零崎を御見せしましょう」

演奏開始。

真面目な話、僕は殺人鬼としては、蝕織の足元にも及ばない。

いや、実力的に弱い、という意味とは違う。

単純に【相性】の問題だ。

「やっぱり、ダメダメですわね」

「うる……せえよ、クソガキ」

事実、演奏開始三分にして、僕はバテバテだった。

片や、蝕織は黒刀を構えて余裕の表情。

一度でいいから、コイツがバテる所が見てみたいもんだ。

「分かった事でしょう？ 百回やるのが、貴方が勝つ事は有り得ません」

「……ばか。百回に一回起きる事は、一回目で起きんだよ」

「不愉快です！」

軸足に力を込め、そのバネで僕との間合いを一気に詰めた。

ひらりとかわし、深淵夢想の音色を奏でる。

作曲 零崎夕識 作品NO・27 【緑の開園】。

神経に作用するまでは【黒の常闇】と同じだが、こちらは相手との【距離感】を狂わせる曲だ。

だが、演奏開始から既に十五分。

蝕織は的確に、攻撃範囲を掴み、僕を斬り付けてくる。

蝕織の斬撃を回避し、尚且つ、著しく酸素を消費する演奏活動を続けているのだ。

バテバテにもなる。

いや　それ以前の問題か。

「演舞　【薔薇】か」

「正解、耳は良くなったみたいですね」

「喧しい」

僕と蝕織は、零崎としての成長家庭の時期を、ほとんど曲兄の元で過ごした。

よって、アイツと僕が音使いになるのは自然な流れ。

だが、アイツと僕の音楽には決定的な差がある。

戦いに特化しているか、否か。

僕はあくまで、音楽を【武器】として使い戦う曲兄に憧れ、音使い

になった。

だが、楽器が突き詰めれば音を出す道具であるのと同じように、使いが奏でる音楽もまた、本来は戦闘能力の無い非力な【音】ではない。

そういう意味では　　アイツと僕の音楽は対局だ。

アイツの音楽は【剣舞】。

舞いも、一種の音楽。

楽器では無く、自らの身体　　足のステップで奏でるリズムだ。

それらがもたらす効果は、【精神高揚】。

曲兄も大戦争の折、人類最強となる前の哀川さんを操った際に、使った事がある。

しかし、それと絶対的に違うのは、曲兄と哀川さんが二人でやったことを、蝕織は一人でやってのけられる点だ。

【アイツは剣を振るいながら、音楽を奏でられる】。

アクションとサポートを並行しながら行えるのだ。

これが、アイツの音楽が【闘うための音楽】たる所以である。

僕の音楽操作が効かないのも、当然の事実。

いや、実際効いてはいるのだ。

アイツが僕の【操作する力】に対し、それよりも強い力　　言わば
【身体を高揚させる力】を働かせているだけの話。

音で操作された身体を、より強い音で操作しかえしている、とも言える。

つまり　僕には最初から、蝕織に勝てる要素は何一つとして無かったのだ。

ただでさえ、【デフォルトの能力】が劣っているのに、技術までも負けていては、勝てる見込みは何一つ無い。

「本当　何がしたかったのですか？
自信たつぷりだったものですから、何かワイルドカードでも持っているかと思っていました」

「あるかよ、そんな都合のいいもん」

あつたらこんな苦勞はしていない。

音の衝撃波は　駄目だ。

今、蝕織の身体能力はかなりハイになっている。

確実な隙を見付けなければ、かわされるのがオチだ。

馴れない耐久戦で、かなり肺活量が減っているのに、これ以上体力を使つて蝕織に効かなかつたら割に合わない。

外したその瞬間、確実にその場でボタンキューだ。

「今なら」

埃を被つた頭を最大限回転させる僕をよそに、汗ひとつかいていない涼しげな表情で、蝕織は言う。

「今ならまだ無傷で済みますよ。」

正直、お兄様を傷物にするのは、嫌いなのです」

「傷物つて　僕がそんな繊細に見えるかよ」

「出来損ないの音使い」

ぞわりと、全身が逆立つように震え、それを見た蝕織がクスクス笑う。

「ほら、お兄様つたらデリケート。」

まだ気にしていらっしゃるのね」

「　　うっさいわッ！」

顔が火照るのを感じながら、深淵夢想を振りかざす。

もはや、僕の勝機は白兵戦でしかあり得なかったのだから、それは

妥当と言えば妥当だ。

しかし、勝てるかどうかは別問題。

「そんな不恰好なモーションで、当たるわけがないでしょう？」

鎌が空を斬り、気が付いた時にはもう、蝕織の身体は空中を舞っていた。

ミニスカートでこういう事をやつてのけるのはどうなのか、と無意味な思考を押し退け、深淵夢想を両手で構え直す。

ガード間に合ったと思った時、蝕織の口が動いた。

「無駄　ですよ」

その吹きと同時に、蝕織の回転を加えた刃が振り降ろされた。

しゃきん、という気味が悪い程、的確な擬音が聞こえ、深淵夢想の柄は二つに別れる。

「　　シット」

僕が言えたのはそれだけだった。

「とんでもねえなお前、同じ罪口製の武器で……」

「造り手が同じなら、あとはその人間の腕次第でしょう？」

「……ったく、どこのバトルマンガだっつーの」

切断された深淵夢想を横に放る。

こうなってしまうえば音は出せないし、鎌としての機能も無い。

もはやこれは、停電時のエアコン並の力しかないだろう。

「やれやれ、本当にお前は規格外だな。

流石は【褪せた赤】ってところか？」

「なんですか、それ？ 自分を皮肉ってるつもりですか？

私が【褪せた赤】とするなら、お兄様はもう褪せ切って、色すら無い 【無色】とでも仰うべきですかね？」

「怖いぐらい的確な例え話だな……」

自分の真っ白な髪を横目に収める。

好きで白髪になったわけじゃねえのによ。

「たまに羨ましくなるぜ、お前の髪」

「慣れない世辞は止めて下さいな。

無駄ですよ、今さら言葉での操作なんか効くわけないでしょう」

ちっ、バレてたか。

やっぱり手の内は知り尽くされている。

それはこっちも同じだが、僕の戦術が穴だらけなのに対し、蝕織の戦術は対抗策が無い。

そういう意味でも、アイツの音楽は戦闘向き。

その辺り、世の中は不公平なもんだ。

「あ、曲弦系も無駄ですよ」

ポケットに手を入れたところで、蝕織からストップがかかる。

「ひめひめ程の方ならともかく、そんな付け焼き刃の曲弦系では、私を捉えられません」

ひめひめ「姫ちゃん。」

念のため。

「そいつはどうか？　いくら僕でも、攻撃範囲が二、三メートルもあれば……」

「でも、それはあくまでストレイトできるだけでしょう？　決め手が無ければ話になりません」

蝕織は空いている指で、僕の利き腕　　以前、絶奈さんに折られた

方を指差した。

「そちらの腕、どうされたのですか？」

「……………」

「僅かに動きが鈍いですね。

利き腕がそんな状態では、曲弦系で相手を捉えられても、切断するだけの力が出せない。例えこの世が力に溢れていたとしても、利き腕じゃ無い方も、また然り。

力は出せても、曲弦系なんて精密動作、利き腕でなければ使えませんよ」

「……………ははは」

手詰まりか。

やっぱり話になりません。

「では　詰み（チェックメイト）ですね」

峰にされた刀が、目の前に迫った。

（いや、いくら峰でもなんでも、このスピードなら死ぬんじゃないか？）

僕は僕で、そんな場違いなことを考えていた。

ガラガラと、鉄橋が崩れてきた。

大小様々なブロックが、硬質な雨となつて、僕と蝕織に降り注ぐ。

完全に諦めて、蝕織の殺意から目を背けていた分、僕の方が若干早く反応できた。

息切れしていた身体に鞭を打つて、深淵夢想を拾い、僕はその落化する脅威から逃れ、安全地帯となる河原へと滑るように倒れ込んだ。それと時を同じくして、かろうじて形を保っていた橋が、ただの鉄塊と化す。

あと一瞬遅かったら、僕もあれと運命を共にしていただろう。

「ぎゃはははっ！ なんだよお前。あんだだけ格好いい前口上しとして、妹に負けてんじゃない。だっせーの！」

つい数分前に聞いていた哄笑が、頭上から浴びせられた。

背中を仰け反らせるような形で後ろを見ると、案の定。

「一応……ありがとうございました。出夢さん」

「べつつにー？ まあ、さっき面白い話聞かせてくれたからな。これくらいはしてやるぞ」

本当に気まぐれだな、この人は。

そしてこの人も規格外だ。

拘束衣が外れているのを見ると、一喰い（イーティングワン）を使つての所業だろう。

鉄橋を腕一本でぶっ壊すんだから、半端ない。

「お前の可愛い妹さんも無事みたいだぜ。さつき、鉄塊ブツた切つて逃げてくの見た」

賢明なヤツだ。

出夢さん見た途端にエスケープかよ。

「しっかし、あれが漆黒残響かー」。

噂通り、中々実力あるヤツみてーだな。

ふん、あの音楽家の兄ちゃんや、お前とは違うタイプの音使いなのか。

ま、お前らよりは殺し名に近いわな」

やれやれと、半ば呆れ調に、いや事実呆れられているのか。

「お前さー、もっと実力の差考えろよ。

五年の間に、勝てねー相手に突っ込んでいく熱血クンになっちゃったわけ？」

「……そんなんじゃないよ。ただ、アイツに関してはこうするしかありませんから」

緊張が切れ、石やらでゴツゴツする地面に大の字になる。

身体が鉛みたいに重い。

しばらく動けそうにないな。

「こーするしかないって、妹のサンドバックになることかよ？ ド
Mじゃねーか」

「兄貴なんて大体そんなもんでしょ」

「色々事情がありますってか？ ぎゃはははっ！ お兄様はツライ
よなー」

「お兄様って言うな」

律儀に突っ込みを入れたところで、これからの事を考える。

さあて、マジどうするかな。

アイツがこんなんで諦めるとは思えないし。

空には朧気な新月が、僕を嘲笑うように浮かんでいた。

鍋は賑やかな方がいいよね

「てなことがあったわけだよ」

「……なんか、現実離れし過ぎてない？ その兄弟喧嘩」

放課後の帰宅路。

そこを歩く二つの影。

殺し名三位【零崎】所属、零崎夕識こと緋色夕介。

裏十三家【崩月】所属、揉め事処理屋、紅真九郎である。

「と言うより、夕介君の妹さん、随分破天荒な人柄なんだね」

「半殺しにされかけたらもうそれは破天荒とは言えない。

ただのグレイジーだ」

がくりと肩を落とす夕介。

片や紅真九郎はあまり実感がわかずにいた。

数週間前、敬愛する柔沢紅香から請け負った九鳳院家令嬢、紫の護衛依頼。

その折に知り合い、現在、ご近所兼クラスメイトとしての関係である緋色夕介。

しかし、彼も自分と同じく裏世界に関わる人間であるのは周知の事実。

彼の實力もまた、真九郎が認めるところであり、自分よりもワンランク上の存在だとさえ考えている。

だからこそ、その緋色夕介が、そこまで一方的に負けたなどと、信じ難い話だった。

「でも夕介君、この前折れた腕って、まだ全快じゃなかったんだろ？」

「仮に治ってたとしても、アイツに勝つ見込みは二割切ってたさ。それでも善戦くらい出来ると思ってただけだね。

あー、参った参った」

「 やっぱり想像出来ないよ。

夕介君が負けるなんて」

「おいおい真九郎君。僕なんて裏世界じゃ、鼻屑目に見ても雀クラスだよ。

鷹 それこそ哀川さんや紅香さんみたいな人からすれば、僕なんて塵芥さ」

「……………その採点基準でいくと、俺ってどの辺りなの？」

「……………トンボ？」

鳥類ですらなかった。

しかもどちらかと言えば捕食される側。

「戦鬼化すれば僕と同じくらいには成れるんじゃないかな。まあ、闘いに必要なのって肉体だけじゃないから、断言は出来ないけど」

「それって、まだ救いがあるって捕らえていいんだよね」

「救いも何も、君の場合、紫ちゃんがいれば強さなんてエンドレスじゃねーの？」

「……………」

言い返せない自分がいた。

片や夕介はけらけらと笑っている。

何度もからかわれた事なのだが、未だに慣れない。

彼女、紫との関係性が特別であるのは、真九郎も自覚している。

しかし、それを恋仲と捉えられるのはどうしたものか。

未だに姉弟子、崩月夕乃と幼なじみ、村上銀子との間にある誤解もとけきっていないのに。

「そーいや今日紫ちゃんいないけど、どしたの？」

「うん、今日は直接、五月雨荘に来るってさ」

あれ以降、紫は家こそ九鳳院家の屋敷に移ったものの、時たま五月雨荘に来ては、真九郎と交友を深めている。

「そーいや最近、紫ちゃんには会ってないなあ。元気でやってるの？」

「うん、学校では普通に友達も出来たみたいだし。九鳳院だからって、仲間外れってことは無いみたい」

「げに素晴らしきは、子供の適応力の高さだよな」

身分の隔てりをまるで感じない純粹さ。

自分達には薄れてしまったものだ。

人間、一人では生きられない。

まれに夕介の兄、人識のような人物もいるが、あれは例外。

「今の内に紫ちゃん、困った時、頼れる人間を一人でも多く作って欲しいよね」

「うん。俺じゃあ、いつか助けてあげられない日が来るだろうから」

「さて、そいつはどうかかな？」

夕介の意味深な言葉に、真九郎は首を傾げたが、夕介はそれ以上何も言わなかった。

「あ、そうそう。」

真九郎君、話変わるけどさ。
僕しばらくしたら、北海道行ってくるんで

「北海道？　なんでまた急に……」

「深淵夢想、直してもらわないといけないからね。
蝕織がまたいつ来るかわかんないし」

「その直せる人が、北海道にいるってこと？」

「さあね、あの人の住所なんて知らないし、正直深入りしたくない。
ただ、その人の連絡先を知ってる人間が、北海道にいるのだよ。

頭巾の爺さんは、もう武器なんて作ってられないだろうし」

最後の呟きは、真九郎には聞こえなかった。

「どついう人なの？」

その　武器職人さんって」

「罪口積雪」

「罪口……って」

「お、覚えてたか。

その通り、『呪い名』序列二位・罪口。
平たく言えば、武器職人集団の一員さ」

「殺し名と呪い名って、仲悪いんじゃないの？」

「家単位ではね。個人単位じゃあ、利害さえ一致すればそんなに仲が悪い訳じゃないさ。」

積雪さんは、良くも悪くも武器を作る事しか考えないからね」

だからこそ 会いたくないという見方もできるが。

いや、それ以上に会いたくないのは、どちらかと言えば、彼の居場所を知ってる人間の方だ。

零崎曲識。

「 ってなわけで、僕がない日があるのは知っというて」

「 え、何でさ? 」

「 忘れたの? 君はこの前の一件で、悪宇商会も敵に回したんだよ。あっちの仕事の邪魔をしたわけなんだから、いつ報復やらが来ても可笑しくないんだ。そこは警戒しないと」

「 ……成る程、納得しました」

「 ……なんつーかさ、危機感無いよな、真九郎君って」

夕介は少し呆れながら言う。

「 危機感が無いくせに、危機に直面すると震える。それって最悪の組み合わせだぜ? 」

危機感が無く、危機に直面していく。

それは勇気や慢心ですら無く、ただの無謀。

虚ろに、ただ本能のまま行動する獣と同じだ。

「それが大切って時もあるけどね。

ただ、本能に頼ってばかりは危険だよ」

講義する夕介に対し、真九郎もまた思うところがあった。

九鳳院での一件。

がむしゃらに、ただ紫を助けたいと願った。

結果的にうまくはいった。

しかし、九鳳院党首を相手取り、対峙したことを思うと、未だに総毛立つ。

もし、あの時うまくいっていなかったら。

自分の無鉄砲さで、あの場にいた人間全てを、危険にさらしていた。

自分が、柔沢紅香を目指すというのなら、その状況に応じ、冷静な判断をしなければならぬ。

無茶をして、何もかもが片付くとは限らないのだ。

「うん、気を付けるよ。夕介君」

「重畳、悪くない」

真九郎がそう言って、夕介は頷く。

掛け合いは一旦、そこで途切れた。

二人の住まい、五月雨荘。

その困いが見えたからだ。

【不戦の約定】が結ばれた、都内屈指の安全地帯。

しかし、アーチをくぐったところで、二人の足取りが止まる。

二人の目の先には、三つの人影。

一人は双方よく知る少女、九鳳院紫。

物珍しそうな目をしながら、何かに夢中になっている。

しかし、残る二人は真九郎が知らぬ人間だった。

男女の二人組、どちらもせいぜい、紫以上、真九郎以下の年代。

紫を除けば、真九郎と夕介より年下の人間は、五月雨荘には住んでいない。

少年の方は、黒い長髪に緑の作業服。

身長は高め、整った体格に、端正な顔をしている。

片や少女の方は、まるで人形のように、透き通るような肌をしており、唇が妙に赤く見える。

髪はおかつぱで、白いワンピースを着ていた。

紫は彼女の手元を見ているらしく、どうやら少女があやとりを披露しているらしい。

「紫」

「おお、真九郎！」

真九郎が呼び掛けると、紫は嬉しそうに駆け寄ってきた。

「おかえり！」

「うん、ただいま。」

紫、あの子達は……」

「夕介のお客様なのだ！」

「夕介君の？」

夕介の方を見ると、驚いたように目をしばたかせている。

「久しぶりですね、夕兄さん」

「御無沙汰しています、夕兄」

「……崩子ちゃん、萌太君」

夕介を出迎えたのは、彼の旧住まい、骨董アパートに住む家出兄妹。闇口崩子と、石風萌太だった。

「何やってんのさ、二人とも。近畿から関東まで」

「遊びに来ました」

崩子ちゃんの端的な答えに、僕も沈黙せざるを得ない。

「すみません夕兄、いー兄が夕兄に会いに行くというので、僕らも連れてきてもらったんです」

「いー兄が？ 何でまた」

「さあ、それは教えて貰えませんでした。今、夕兄の部屋に、姉と一緒にいると思いますよ」

「姫ちゃんも来てるのか。」

「五月雨荘の魔窟化、更に進行中。」

「でも僕、部屋に鍵閉めてたんはずなんだけど」

「いえ、何かジャージを着た女性が、合鍵使って扉開けちゃってましたよ」

犯人は環さんか。

てか、いつの間に合鍵なんか作りやがった。

犯罪だぞ思いつ切り。

「夕兄さん、そちらの人は？」

「ん、ああ。僕のご近所さんだよ、紅真九郎君」

「真九郎、この二人は崩子と萌太だ！ 二人ともいい奴だぞ！」

「えっと、初めまして。崩子、ちゃん？」

「初めまして、紅さん」

「初めまして」

ぺこりとお辞儀をして、自己紹介をする崩子ちゃんと、軽く頭を下げる萌太君。

「崩子はすごいのだぞ、あんな細い糸で蟹や橋を作れるのだ！」

それはただ単にあやとりのテクニックではなかるうか。

崩子ちゃんは恐らく、姫ちゃんにでも教わったのだらう。

「二人に遊んでもらってたの？ 紫ちゃん」

「うむ」

「そっか、ありがとね。崩子ちゃん、萌太君」

「いいえ、構いません。私も楽しかったですから」

感情が出づらい崩子ちゃんにしては珍しく、本当に楽しそうだった。

まあ、それはそっか。

崩子ちゃんより、年下な子って、骨董アパートにはいなかったもんな。

妹みたいに思えるのかも知れない。

崩子ちゃんに軽く笑い返して、僕は自分の部屋に向かう。

途中、萌太君に耳打ち。

「真九郎君の前では、名字名乗らないで」

「どうしてですか？」

「真九郎君は崩月だからね。知らない誤解を生みそうだから」

「……分かりました。崩子にも言っておきます」
頼むよ、と返す。

ちらりと後ろを向くと、「真九郎も遊ぼう!」と言う紫ちゃんに、真九郎君がつかまっていた。

その様子に少し笑って、僕は自分の部屋に向かう。

「そっかあ、じゃああたしらよりも、夕介君との付き合いは長いわけだ」

「はい、といっても二年くらいですけれど」

「二年か、そっぴや夕介君が越してきてまだ数週間なのねえ」

それこそ二年くらい経った気がするわ、と呟き、ジャージ姿の女性（武藤環さんと言うらしい）は、恐らくは夕介君の物であると推察される清涼飲料水を、何の躊躇もなく飲み干した。

「……あの、環、さん？」

「ん、なーに？ いっちゃん」

「……………」

また新しいパターンだった。

音引きを変えるだけで、人間の愛称とはここまで変化するのか。

「いや、ぼくもある意味不法侵入みたいな立場ですから、あまり文句は言えないんですけど、いいんですか？

勝手に夕介君の私物飲んじゃって」

「イーのイーの、お米やらも貸してもらってるし、今更飲み物なんて問題ナシナシ」

……やっぱり苦手だ。こういう破天荒な人。

しかも、この環さん、さつきから春日井さんの面影がちらつく。

まさか国家の中心地たる東京にまで来て、春日井さんワールドを体験する羽目になるとは思わなかった。

世の中、似た人間が三人はいるというが、あながち間違いではないらしい。

本当に奇妙な住まいである。

この人といい、さつき擦れ違った魔女みたいな人といい（素直に引いた）。

一瞬、骨董アパートに来たような既視感さえ覚える。

いや、玖渚の言葉を借りるなら、案外これもジャメヴと呼べるのかも知れない。

いや、これも戯言ではあるのだが。

「ししよー……、姫ちゃん寝ちゃってもいいですかあ……？」

隣で船を漕ぐ姫ちゃん。

時間の都合上、朝早かったせいだろう。

机に頭を預けて爆睡するのは、もはや時間の問題だった。

「もうちよい、我慢して。」

姫ちゃんだって、夕介君に会いたいって言ってたじゃないか」

「じゃあ、夕介君が来たら起こして下さい……くー」

本当に寝やがった。

しかも倒れ込まず、背筋をピンと伸ばしたまま。

この分だと、あの立ったまま寝るといふ高等テクを披露する日も近いかも知れない。

「しょーがないな……」

「布団使っちゃえば？」

「……止めときます」

理澄ちゃんの時の生き地獄を、もう一度体験するなど御免だ。

女子高生が一人ベッドの上、さらには大学生くらいの男女が二人。

色々と問題がありそうなシチュエーションだ。

それならまだ形だけでも正座してくれていた方が、言い訳も効く。

結局、姫ちゃんは保留とする。

と、それを見計らったかのように、扉が鈍い音を立てて開け放たれた。

「環さんっ!」

そう言いながら入ってきたのは夕介君だった。

数週間の期間でも、彼の容姿は変わらなかった。

焰を思わせるオレンジの瞳、女性と見間違っほどの白髪は、後ろで一纏めにされている。

唯一目新しいところと言えば、高校生らしい制服を着ているという点か。

「おー、夕介君。おかえりーん」

「おかえりーん、じゃありませんっ! 他人の部屋に不法侵入しないで下さいよ!」

てか、いつの間に合鍵なんて作ったんですか!」

「女には秘密が色々あるのよ」

「僕の女性に対する見解を下落させないで下さい!」

「大体、今さら他人なんて水くさいじゃないの。」

二人で過ごした熱い夜を忘れたの?」

「帰れ、それも今すぐ、即刻」

珍しく低い声を出しながら、夕介君は環さんをぐいぐいと押しつけていく。

「……君も大変だったみたいだね、色々」

「ははは、気にしないで下さいな」

環さんを追い出し、苦笑いを浮かべる夕介君を、ぼくは心の底から労る。

同属愛というのは嫌いなはずなのだが、こればかりは同情の念を禁じ得なかった。

ぼくの春日井さんに対する苦労と似たものを、夕介君もしていたのだろう。

「何にせよ、久し振りだね、戯言遣い」

僕の鏡たる人間の弟、緋色夕介　零崎夕識は、フツと笑みを浮かべる。

「姫ちゃん器用だね、正座したまま爆睡か」

「夕介君、姫ちゃん知ってたの？」

「ん、まあね。姫ちゃんがまだ澄百合にいた頃にちっと」

姫ちゃんの頬をつついて起こそうとするも、中々起きない。

朝が早かったのだろうか。

「んで、何の用かな、いー兄。わざわざ関東くんたりまで来て」

「哀川さんからの頼まれ事だよ。」

夕介君の様子を見てきて欲しいって」

むう、別に大丈夫なのに。

わざわざいー兄を使いつ走りになくても。

「本当にそんだけなの？」

「まず崩子ちゃん、萌太くん、姫ちゃんが、夕介君に会いたがってたのが一つ。」

あとは、僕からの頼み事かな」

「頼み事？」

いー兄の頼み事は、とある研究機関の実験に、僕も付き添いで参加して貰えないか、という話。

いー兄はそういう話とは無縁だと思っていたが、姫ちゃんの学費やらを考えるとそれも言ってられないらしいのだ。

「金くらいなら貸すよ？」

「いいよ、僕にもそれくらいのプライドはある」

ふむ、それはそうか。

真九郎君だって、買い物時、紫ちゃんがカードで支払おうとした場合、は止めてるしな。

なんかかんや言っても、いー兄は僕より年上だし。

……いかん、リアルな話になった。

「で、その研究ってどんな研究なわけ？」

「死なない研究　だってさ」

「……………」

思考処理回路ショート。

どこの錬金術師だそれは。

「死なないって　それは」

もはや研究するまでもない。

不可能だ。

いかなる意味合いにせよ、『死なない』なんてのは物理的に無理。

いずれ、朽ち果てる事には変わりない。

身体にしろ、精神にしろ、記憶にしろだ。

「ぼくもそう思うんだけどさ……。」

でも聞いている限り、ふざけてる風じゃなかったよ。

出会い頭に『運命を信じますか』なんて言われちゃ、その信用度も疑わしいけど」

「誰だよ、その神に挑もうって錬金術師は」

二つ名が『鋼』なんて事は無いだろうが。

「木賀峰約、巫女子ちゃん曰く、その筋じゃ有名な生物学者らしいんだけど」

「……木賀峰？」

あれ、何だ？

何か今、重大な事閃きかけなかったか？

再検索を試みるも、かなり埋没した記憶らしく、思考の海では『木賀峰約』なる検索ワードが、再び引っ掛かる事は無かった。

「きがみね、きがみねやく……変だな。

絶対どつかで聞いたのに」

「……哀川さんもそんな感じだったんだけど、そんな有名な人なの？ 木賀峰教授は」

「哀川さんも？」

可笑しいな、あの人と『縁』が合う事なんて、そう多くない筈
なんだけど」

「『縁』か」

いー兄が、その単語だけをぼつりと呟く。

どうかしたんだろうか。

「根本的な話するけどさ、何でしがない大学生である所のいー兄に、
そんな世界の理に挑むような実験が舞い込んだの？」

「教授の眼鏡に適ったんだってさ。」

後は、私と何らかの関わりを持って欲しい とかなんとか」

「……引くなあ、それ」

「うん、ぼくも少し引いた」

「まあしかし、大体分かったよ。その実験の付き添いにチヨイスす
る三人、つまるところ信頼の置ける友達の少ないいー兄は、てる子
さん & a m p ; 七々見さんに見事断られ、結果、藁にもすがる思い
で僕んとここに来たよ」

「……うぐっ」

いー兄を心のナイフ突き刺した後、僕は数瞬沈黙する。

うー、出来れば行きたいんだけどな。

高校生って立場からすると、そうも言ってもらえない。

ただでさえ、北海道行きが決まっているのに。

「悪いけどいー兄、行けそうにないや。高校生って身分からすると、そう暇でも無いんだ」

「そっか、そうだよな」

いー兄もあまり期待はしていなかったのか、あっさりしている。

「何だったら、人兄とか呼んでみたら？」

「夕介君ってたまに恐ろしく奇抜なアイデア出すよね……」

僕の意見を丁寧に断るいー兄。

でも人兄と違って、案外面倒見いいからなあ。

呼べば案外来ちゃうんじゃないだろうか。

「でも、いー兄。

この依頼断った方が良くない？

その教授の人間性を差し引いても、結構ヤバげなアルバイトな気がするんだけど。何なら哀川さんにも仕事紹介してもらえばいいじゃん」

「もうそれはお断りしたよ。

人類最強の依頼と、不思議教授のアルバイト。
この二択で夕介は、哀川さんの依頼を取る？」

「……………」

取らねえよなあ。

「そうゆう事だよ。それに、七日で三十五万じゃあね」

「現実主義め」

「何とでも」

「……………ほんつとに、いー兄と言い、真九郎君といい。危機感無さすぎだよ」

「真九郎君？」

「ん、僕の友達兼ご近所さん。何なら会ってくれば？ 下で崩子ちゃんとかと萌太くんと遊んでるはずだし」

淡々と返し、僕は頬をかく。

(しっかし、『死なない研究』ね……………)

死なない。

それは終わらないということ。

終わらず、朽ちず、世界が終焉を迎えるまで、消えない。

……【狐】の好きそうな話題だな。

「ねえ、夕介君。実際のところどう思う?」

「どっつて?」

「『死なない』なんて方法、あると思う?」

「珍しいね、いー兄がこんな荒唐無稽な事を討論しようなんて」

「……最近、荒唐無稽を絵にしたような人間と会ってさ」

それは 理澄ちゃんと出夢さんのことだろうか?

「ふむ、『死なない』ね……」

「やっぱり、無理だと思う?」

「んー」

普通考えて無理なんだい、間違った、無理難題だよなあ。

それこそファンタジー。

ドラゴンボールを集めるか、賢者の石を作るか、マテリアルゴーストにでもならない限り不可能だ。

「感情的な話では、人は人の心に生き続けるとかよく聞くけど、現実的な意味で言うなら、やっぱり死なないってのは有り得ないよな」

「やっぱりそう思うよね……」

重苦しい、というか

端から見ればかなり痛々しい会話だ。

部屋に籠もり、不老不死について語る。

……うん、危ない人だ。

「ふわ〜」

不毛な会話は、姫ちゃんの欠伸によってさえぎられた。

「ふわぁー、おはようです。

はれ……、ししよー髪が真っ白ですよ？

年を取るまでもなく、失職しちゃったですか？」

「姫ちゃん、そっち師匠と違うから。

あと不景気な世の中を煽るような間違いはしないように」

きつちりと間違いを正すいー兄。

ちなみに、正しくは脱色。

「わわっ！

いつの間にか夕介君が目の前につ！

師匠、何で起こしてくれなかったですか！」

「いや、何かあそこまで見事な体勢で寝られると、起こすのが憚られるというか」

起床して早々、いー兄に乱打を浴びせる姫ちゃん。

ああ、変わってない。

「ういつす、久しぶり、姫ちゃん」

「久しぶりですよー」

姫ちゃんのいー兄に対する制裁（？）が一段落したところで、互いに挨拶。

「びつくりしちゃったですよ、師匠が夕介君って子に会いに行く、なんて言い出すもんですから。」

師匠と夕介君は知り合いだったですか」

「まあね。でも考えらんなくは無いだろ。」

いー兄は哀川さんの手伝いで、澄百合に行ったわけだし」

「あれ、話したっけ？ ぼくが澄百合に行ったのって」

「そりゃ知ってるよ。だって僕が引越した当日いー兄が……」

言いかけてやめた。

多分、いー兄は自分が哀川さんに拉致られて澄百合に行った事に気付いてない。

ここで口を滑らせれば、後々になって問題が発生する気がする（主に哀川さんの）。

「い、いやいや。哀川さんから事前に聞いててさあー、姫ちゃん預かってることは、いー兄からの連絡で知ってたし」

思いつきり焦りながら誤魔化す。

いー兄は以外に鈍いから、これで騙せるはず。

案の定、というか何というか、いー兄はそれ以上追及して来なかった。

「じゃあぼくは、崩子ちゃんと萌太くん呼んでくるから、姫ちゃんは待ってて」

「いー兄、みんなはどのくらいまで居られるの?」

「うーん、八時くらいまでかな。日帰りのつもりで来ちゃったし」

「そっか、じゃあ夜ご飯くらいは皆で食べようよ。僕と姫ちゃんは近くで何かしら材料買ってくるから、ここで待ってて」

「わかった。じゃあ、三人で待ってるから」

そう言って、いー兄は部屋から出ていく。

「じゃあ姫ちゃん、一緒に行きますか」

「はいですよ！」

騒がしくなりそうだなあ、僕の部屋。

「うう、重いですお」

「大分妥協したつもりなんだけど……、てか姫ちゃん。君一応僕より年上だろうに」

結局、あの後環さん、闇絵さん、紫ちゃん、それらに巻き込まれる形で真九郎君の参加が決まり、総勢9人の鍋大会が決まった。

当然、九人分の材料となると、僕 & amp; 姫ちゃんでは腕が足りず、真九郎君と紫ちゃんの第二材料調達班を編成し、残る全員が下準備に走るようになったのだ。

「年上とか年下とか以前に、夕介君男の子じゃないですか。女の子の細腕にこんな重いもの持たせて、プライドとかは無いですか？」

「僕は男女共同参画社会の理念に深く共感している」

「なんですか、正当っぽいことを言いつつ意地悪ですか。第二の師匠を目指すつもりですか」

「いや、いー兄とかみたいなのは成ろうと思って成れるもんじゃ……」

って苛められてるのかよ。

まあ、姫ちゃん騙されやすそうだからな。

いー兄からすればついっぴいからかいたくなるんだろう。

姫ちゃん、ちこつとくなぎーに似てるし。

「はあ、夕介君はなんとというか、普通の人と変わらないですねー。未だに夕介君が零崎だなんて信じられません」

「失礼な、僕は変わり者だけど零崎だぞ」

「じゃあこれくらいの荷物、一人の力で持てるくらいのイリュージョンを見せてください」

「零崎がマジック集団だとは初めて知ったな」

「能ある鷹は羽目を外すですよ」

「隠せてないじゃん」

爪を隠す、な。

「なんか、安心したよ」

「？ 何ですか、藪からスティックに」

「……………」

流行りに乗ったつもりなのだろうか。だとしたら姫ちゃん、もはやそれは流行りかどうかが微妙なネタだ。

間違っではないが、間違ってる。

……まあ、訂正はいー兄に任せよう。

「いや、僕が最後に会った時の姫ちゃんの姿って、すっごく一人ぼつちなイメージだったからさ。

ほら、僕あその後、哀川さんの仕事があつて京都から離れちゃっただろ。

結構心配してたんだよ」

京都に戻つてからも、絶海の孤島行ったり、人兄の起こした事件調べたりで忙しかったし。

「だから安心したんだよ。いー兄達と楽しくやってるみたいでさ」

「……そう、ですかね」

姫ちゃんは急に声を落とす。

「……確かに、初めは慣れないかもしれないけどさ。

見てみなよ、僕みたいな殺人鬼でも『こつち』で生きられてるんだぜ？ 姫ちゃんが出来ないわけじゃないじゃんか」

棚上げも甚だしい話かもしれないけれど、この子はどうにか幸せになつて貰いたい。

いー兄も多分、同じように思っているはずだ。

姫ちゃんはまだしばらく暗い表情だったが、やがてきこちなく、でも確かに笑みを浮かべる。

「そう、ですね。こうやって、みんなと普通に暮らせるのって楽しいですよ。」

澄百合じゃ、出来ない事でしたから」

「あん時は色々あったよねえ」

哀川さんに遊馬だけだとなんか不安だから、歳の近いお前が姫っちの様子見に行け、とか言われて。

あの頃に曲弦系教わったんだよなあ。

「夕介君、しよっちゅう澄百合に忍び込んでましたよね」

「そうそう、姫ちゃん探すまでが大変だったな」

おかげで十回中二回くらいしか姫ちゃんに会えなかった。

「あの神がかかったセキユリテイもさることながら、子菰さんのトランプ& amp・策にはまり、玉藻ちゃんには見つかる度に追い回されて……」

「……なんだか、姫ちゃんの記憶と連結した様々なトラウマがあるよじですね」

「本当によく生きてたよ、僕」

その経験が現在まで生きていたりするのが皮肉な話だが。

「そう言えば夕介君。あの子はどうしたのですか？」

「あの子？」

「ほら、ずいぶん前に、一度だけ夕介君が連れてきた妹さんですよ」

「……………」

「姫ちゃん、なぜさらにトラウマを抉ろうとする！」

以前、僕が蝕織の前から行方を眩ました頃、僕が澄百合に頻繁に入りしているという目撃情報が流れ、蝕織が着いてきた事が一度だけあった。

その後僕は、哀川さんとの繋がりを隠すべく、一時期日本中を逃げ回る羽目になったのだ。

あの時の壮絶な鬼ごっこは、僕のトラウマベスト3には入る。

「会ったのはあの日一回だけですけど、よく覚えてるですよ。凄く楽しい子でしたよね。今は、一緒にいないですか？」

「……………いや、今ちよっと喧嘩してさ」

「ははは、と力無く笑う僕。」

乾いた笑いつてのはこういうのを言っただろうな……。

「えー、兄妹喧嘩ですか？ いけないですよ、どうせ夕介君が悪いんでしょうから、ちゃっちゃんと謝るべきですよ」

「どうせって……」

「兄と妹の喧嘩は、兄が悪いと相場は決まってるです」

「嫌な偏見だね……。いや、今回は本当に分かんないんだよ。アイツがなんで怒ってるのか」

「おやつ取ったとか？」

その程度で殺されかけたんじゃないや割に合わん。

「姫ちゃんにはあいにくと兄弟はいませんが、やっぱり兄弟というのは互いに理解しやすいものではないですか？」

「うーん、かもね」

零崎は気配で家族の居場所が分かっちゃったりするし。

「だから、夕介君が必死に妹さんを理解しようと思えば、喧嘩の原因も見えてくるはずですよ」

むづ、さっきから姫ちゃんの言うことが正鵠を得まくっている。

普段がああだから、どうにも釈然としないが、言ってることは正しい。

アイツを理解しろ、か……。

「善処してみるよ、取り敢えず」

「頂上です」

「重畳ね」

地の文だけならわからないのになあ。

そんな楽し気なやり取りをしながら、僕らは五月雨荘を目指していた。

一方、真九郎と紫は、夕介組よりも早く、五月雨荘に着いていた。

既に準備は終わり、環は酒類を買いに。

紫は崩子、萌太との遊びに戻り、闇絵はダビデと共に、子供組の遊ぶ様子を木々の上から眺めていた。

「純粋なものだな、子供というのは」

独白のように呟いた闇絵に、木の下で同じく三人の様子を見守る真九郎が反応する。

「夕介君も同じようなこと言ってました」

「そうか、まあ彼は君と同年にしては中々悟いからな」

さりげなく、自分が悟かないと非難されている気分になったが、被害妄想だろうか。

「子供は純粹だ。

何にでもなれる可能性を持っている。

だがそれは、言い換えれば正にも負にも染まり得るといふ事なんだよ、少年。

人間は子供の頃にほぼ、人格形成を終えるから、それを修正するのは困難だ。

子供の頃に抱いた夢が、その人間の人生に光明をもたらすこともある。逆に暗闇をもたらすこともある。

子供の頃に受けたトラウマが、その人間の人生に響くという事例も、珍しくない」

「　　そうですね」

それは　　よくわかる話だった。

自分、紅真九郎もまた、つい最近までその傷に苦しんでいたのだから。

でも、その傷が癒える事だって、ある。

死んだ家族の事を忘れたわけではない。

あの悲劇は現実であり、その記憶は多分、これから真九郎が一生付き合っていかなければならないだろう。

だが少なくとも　あの地獄を夢に見ることは、無くなった。

それは紛れもなく　紫のおかげだった。

闇絵の言う、純粋な少女のおかげだった。

もし紫と会わなかったなら　自分は永遠にあの悪夢から抜け出せなかったとさえ、思う。

「　子供は素朴で、道に迷いやすく、傷つきやすい。だから常に側にいて、道を示す。

私のように、人間に悪影響しか与えないような奴ではなく、君のような人間がね」

自虐的に笑い、闇絵は帽子を深く被り直す。

闇絵にしては珍しく、あまり脈絡の無い話だった。

いや、自分が気付いていないだけで、今後に関係あることなのだろうか。

真九郎が、これの意味に気付くのは、もう少し先。

少年と少女の関係を揺らがせる『ギロチン』に纏わる事件の話だ。

「真九郎くん、なんかいつちゃんが、鍋が見当たらないってさー！」

玄関口から、帰宅していた環の声が聞こえた。

「いつちゃん、という固有名刺が誰か判断するのに、真九郎は時間を要したが、ようやくそれが夕介の知り合いだという青年であるのに気付く。」

「わかりました、すぐ行きます！」

真九郎は玄関口に向かい、夕介の部屋を目指す。

真九郎の部屋と比べ、若干ではあるが夕介の部屋の方が広い。

鍋はそこで執り行われる事になっていた。

（夕介君の部屋あまり散らかってないから、見つかり安いと思うんだけどなあ……。それにしてもあの人か……）

正直苦手だと思う。

今回の訪問者の中で、一際不思議に思うのが、あの青年なのだ。

理由の一つとしては、名前。

誰一人として、彼を名前で呼んでいないのだ。

夕介と萌太はいー兄、環はいつちゃん、崩子はお兄さん、一姫は師

匠。

どう考えてもあだ名だ。

そしてもう一つ。

こちらの方が本命の理由かも知れない。

夕介が出かける際、夕介が真九郎にこう耳打ちしたのだ。

『真九郎、僕が帰るまで、いー兄にはあんまし近づかない方がいい
よ』

『え？』

『あの人は怖いからね、あまり【縁】を持ちすぎちゃうと、破滅す
るよ』

『あの人も、裏世界の人ってこと？』

『違う、むしろあの人は超普通さ。戦闘能力なんて皆無だよ。
僕の方が確実に上だね　ただ、唯ね。』

それより先に僕が殺される』

夕介は冗談でなく、かなり真剣な口調だった。

『まあ、君はいー兄にちょっと似てるからね……。
逆に気付きにくいかもしれないけど、言ってしまうえば、君はいー兄

の劣化品だしね。
問答有用に消されるよ』

『だから、なんで』

『だってあの人、とんでもねえバケモンだもん』

(俺と似てるって、言われてもなあ)

あの青年を、真九郎は一度だけちらりと見たのだが、歳はあっちが上のようなだし、顔立ちも似ていないと思うのだが。

そんな事を考えながら、真九郎は夕介の部屋に入る。

必然的に、中にいた住人と目が合う。

まず真九郎を捉えたのは、瞳。

決して虚ろな目ではない。

しかし、そこに含まれるものに、真九郎は素直に畏怖と既視感を覚える。

酷く空っぽで、酷く淀んでいて、酷く暗くて、酷く崩壊していて、酷く霞んでいて、酷く捻れていて、酷く狂っていて、酷く濁っていて、酷く褪せていて、酷く曲がっていて、酷く揺らいでいて、酷く歪で、酷く渴いていて、酷く燻っていて、酷く見苦しくて、酷く欠けていて、酷く冷たくて、酷く枯れていて、酷く果てていて。

酷く逸脱していた。

さながら、強さを持ちすぎたが故に、生物の定義から外れてしまった、人間失格の殺人鬼のように。

さながら、弱さを他人に適用したが故に、生物としての活動を阻害されてしまった、人間不信の欠陥製品のように。

ああ、そういうことか。

彼を真正面から見て初めて

紅真九郎は唐突に理解する。

彼女、紫には決して見せない心の暗い部分が、全てを理解させる。

「　　戯言だよ」

「　　かも知れませんか」

お互いに、笑わなかった。

何だ、似てるって、こういう意味か。

この人は　この人は。

「　見つかりました？　鍋」

「まだ。夕介君が帰って来る前に、探さないとね」

紫と出会う前の自分に、似てるんだ。

「俺は、紅真九郎です。貴方は？」

彼は、そう名乗った。

どこか、彼はぼくと似ていた。

姫ちゃんや零崎とは違った理由　いや、むしろ零崎の理由に近い
かも知れない。

「名乗れと聞かれて、名乗る名前は無いよ。……ああ、ごめんね。
別に君がどうこうってわけじゃないんだ。
ぼくはね、今まで他人に本名を教えたことが一度しかないのを誇り
に思っているからね」

「じゃあ、なんて呼べばいいんですか？」

「好きに呼べばいいよ、真九郎君。
ちなみにニックネームの例を挙げると、師匠、いーたん、いつくん、
いの字、いー兄、いーの、いのすけ、いつきー、戯言遣い、詐欺師。
欠陥製品と呼ばれたりもしたね、けどこれはもう特許が取られてる
から、呼ぶにはあまりオススメしない」

「ニックネームに特許なんてないですよ」

真九郎君は少し呆れるように言うと、思案気に首を傾げ、再び口を開く。

「……じゃあ、戯言遣いさん、でいいですか？」

「意外に平凡なので来たね。まあ、それでいいよ、よろしく。真九郎君」

「で、話してみてもうだった？」

帰ってきた後、ニヤニヤ笑いながら、真九郎君に訪ねる。

「……バレた？」

「真九郎のことだし、話すなって言っても、話しちゃうだろーと思っ
つてね」

「いー兄 & amp ; 真九郎君、トラブルメーカー同士の相乗効果だな。

「何て言うか、雲と話してる気分だったよ。掴み所が無いっていう
か、凄く話してて虚しくなる感じ」

「うん、妥当な分析だね」

真九郎君にしては、妙に思慮深い。

彼からすれば、自分と対話する気分なのだろう。

人兄ほどでは、無いだろうが。

「でも、何となくわかったよ」

「何がさ？」

「夕介君の言ってた、近付き過ぎると、破滅するっていうやつ。

確かに、あの人はあまり話したくない」

「御理解感謝」

「それで、何なのあの人？」

「親愛なる戯言遣いにして、世に関わる物語の語り部、とでもいう

のかな。実はさ、僕もイマイチあの人の事はわからないんだ」

これは本心だ。

と言うより、深入りしたくないというのが正しいか。

恐らく、あの人を理解するなんてこと、一生無いだろう。

「……一応もう一度言っとく。近付き過ぎんなよ。

話す分にはまだいいけど、いー兄の物語に関わるのだけは辞めとけ」

ただでさえ、真九郎君の生き筋は波瀾万丈だろうし。

僕が一息つくと、僕の部屋から紫ちゃんと崩子ちゃんが顔を出した。

「真九郎、みんなが揃えば、直ぐにでも始められるようだよ」

「紅さんと夕兄さんは、みんなを呼んできて下さい」

「うん、わかった」

「りょーかい」

まあ何にせよ、今は盛り上がるとしようか。

いや、このメンツで騒がない方が異常だな。

パーティー風景。

「いやー、なんとも大規模なパーティーになったわねえ」

「というか、人間九人が僕の部屋に入りきった事が一番吃驚ですけどね」

「真九郎、この前のように細かく切り損なったピーマンが入っていたりはしないか？」

「さすがに鍋にピーマンは無いだろ……あ、崩子ちゃんは肉はいらないんだっけ」

「はい、なるべく、野菜だけで」

「いつちゃんは酒飲めんの？」

「一応は」

「でもいー兄、前にウォッカいき飲みして、急性アルコール中毒になったとか言ってますでしたか？」

「いや、あの時は歓喜に満ちた状況だったし、周りに流されたというか……」

「萌太くんの言う通りですよ。師匠の悪酔いは何だか危険っぽいですし。大体、もし師匠が眠っちゃったら、帰りの電車で誰が私達を起こしてくれるんですか」

「揃いも揃って他力砲丸かい」

「本願ですよ」

「ぐあつ、姫ちゃんに訂正されてしまったあ！」

「『姫ちゃんに』ってどういう意味ですか！」

「若いな、君たちは」

「闇絵さん、はい。おかわりのビール」

「ん、すまん。環」

「闇絵、またダビデに豆腐をあげてもいいか？」

「ああ、頼むよ」

「はい、紫ちゃん。お豆腐」

「ありがとう、崩子！ 崩子もダビデに豆腐をあげてみないか？」

「うわあ、可愛いネコさんですね」

「ちゃんと冷ましてからあげるのだ、ダビデは熱いものが苦手だからな」

「あつ、いー兄。肉の独占は卑怯だぞ」

「師匠、姫ちゃん、まだあまり食べてないですよ！」

「勝てば官軍、負ければ賊軍」

「おのれ、肉は渡さんぞ！ 姫ちゃん、共同戦線だっ」

「りょーかいです、鍋富豪は私です！」

「姉姉、微妙に格が下がってます」

「鍋奉行が正解だな」

「なべぶぎょー？」

「つて、何ですか？」

「ふふふ、それはだね……」

「ストップ環さん！ 今何か紫と崩子ちゃんに嘘情報流そうとしたでしょ！」

「やあくねえ、真九郎君、被害妄想よ」

「いいえ、目が本気でした！」

「紫ちゃん、崩子。鍋奉行ってというのは、簡単にいうと鍋を支配する人間ですよ」

「鍋を支配？」

「食卓の覇者だな」

「いや、闇絵さん。そう言っちゃつと、拡張高いというか……」

「夕介君っ！ そんな解説をしている場合ではありませんです！
そういうしてる内に、師匠が着々と肉を！」

「なあにいいい！ 姫ちゃん、全力で阻止しろー！」

「らじゃですー！」

「……戯言だよ」

「いやいや、ただの食卓だよ。いっちゃん」

と、そんな楽しい（カオスとも言う）食卓の後。

七時頃、最寄り駅のベンチにて。

座って電車を待つ男子三人と、すやすや眠る女子二人。

「あそこまでハジケるとは思わなかった……」

「同感。環さんが潰れるまで続いたもんねえ。いー兄、次は負けねーぞ」

「夕兄と姉姉のタッグはかなり統制が取れてましたね。それでも勝てないところは、さすがいー兄というところですか」

「誉めてる？ それとも貶してる？」

「誉めてるに決まってるじゃないですか」

僕は憔悴したように話すいー兄と、煙草をくわえながらそれに答える萌太君を、横目で見ていた。

「それより悪かったね、夕介君。わざわざ送ってもらって」

「いいさ、別に。姫ちゃん軽かったし」

あの後、崩子ちゃん & amp ; 姫ちゃんはスイッチが切れたように眠ってしまい、一応の保護者であるいー兄を疲れさせるのはいけない、という事で、萌太君が崩子ちゃんを、僕が姫ちゃんをおんぶしてきたのである。

事実、僕の隣には姫ちゃんが「むにゃむにゃ、もう滑らないですー」と言いながら眠っている。

(てか、寝言でまで間違ってるし)

滑られないってなんだよ。スキーか何かですか？

ちなみに、真九郎君は同じく眠った紫ちゃんを、九鳳院の迎えの人(騎場さんだったかな?)へ送り届け、環さんは潰れ、闇絵さんとダビデはいつの間にかいなくなっていた。

「……………う〜」

「おっと」

崩子ちゃんが寝言で唸り、萌太君が即座に煙草を消す（崩子ちゃんは煙草のケムリが嫌いなのだ）。

それとほぼ同時に、電車がホームにやってきた。

「ほれ、姫ちゃん。起きたまえ」

「……ふわ〜、わかりましたです……」

倦怠感溢れる動きで、姫ちゃんは一欠伸する。

「ほら、崩子も。寝るなら電車でも出来るから」

「……むー」

「……やれやれ」

萌太君は溜め息混じりに崩子ちゃんを再び背負う。

いいお兄ちゃんだな。

「僕とは大違いだ」

「？ 夕介君、何か言いましたか？」

「いんや、何でもない」

少し微笑みながら言って、いー兄達に視線を向ける。

「じゃあみんな、今日はありがと。またいつでも来て」

「うん、じゃあまたね」

「夕兄こそ、たまにはこっちに来て下さいね」

「紫ちゃん達に……よろしく願いします」

寝惚け眼で話す崩子ちゃんを背負った萌太君と、いー兄が電車に乗り込み、残るは姫ちゃんのみ。

「じゃ、姫ちゃんも元気でね」

「はい。久しぶりに夕介君とお話出来て、楽しかったですよ」

「いつでも来なよ、そしたらまた話せる」

「その時は、蝕織ちゃんも呼んで下さいね」

「……うん、一応聞いてはおく」

「一応ではダメです。約束ですよ　では」

姫ちゃんはにこりと笑って言う。

「さよなら」

バシッ。

反射的に、僕は姬ちゃんの腕を掴んでいた。

「……………」

「あ、あれ？」

顔を見ずともわかる。

姬ちゃんはかなり驚いた顔をしているだろう。

だが、僕はもつと驚いた顔をしているはずだ。

僕も訳が分からない。

ただ、姫ちゃんが別れの言葉を呟いた時、強烈な喪失感に襲われたのである。

まるで、これが姫ちゃんとの、今生の別れかのように。

「……………」

「い、いえ。別に大丈夫ですけど」

「……………」それじゃあ、またね。姫ちゃん」

「はい。またねですよ」

そうして姫ちゃんは慌てた足取りで、電車に乗り込んだ。

最後、お互いに手を振り合ったのを最後に、電車のドアが閉まり、その細長い車両が動き出した。

その姿が線路に消えたのを見て、僕はようやく一息つく。

「……………」虫の知らせってヤツか？」

縁起でもない。

殺人鬼の予感なんて、当たっても『死』しか生まないのだから。

「……………大丈夫」

姬ちゃんの周りにいる人間は、頼れる人ばかりだから。

きっと、姬ちゃんは『普通』でいられる。

「　　ははは、普通でいるのって、本当に難しいみたいだな。双
兄」

そう呟いて、僕はプラットホームを後にする。

本当、後悔は先に立たないよな。

転校生にワクワクするのは小学生まで

特別な行事に限らず、何か大きな出来事があった日には、テンションが下がるもの。

僕もまた、昨日の鍋パーティーの影響か、かなりローテンションの状態での登校となった。

真九郎君も同じなようで、普段からあまり目立たない彼の存在感が、さらに稀薄になっている。

聞けばあの後、紫ちゃんばかりか、寝惚けて暴れる環さんまで運んだらしく、眠るのが遅くなったそうなの、合掌。

朝のHRまでの空き時間が例えようもなく退屈で、暇潰しに口笛を吹いてたら、周りの女子に絶賛された。たかだか口笛なのに。

そんな浮世離れた気分のまま、ようやくHRが始まった。

僕は窓の外を眺めながら、担任の注意事項をアバウトに聞き流していた。どーせ取るに足らない事だし。

「連絡事項は以上だ。それでは最後に、新しくこのクラスに編入した生徒を紹介する」

事情が変わった（某男爵風に）。

転校生？

僕も人の事は言えないが、また中途な時期に来たなあ。

多少の興味が湧き、外の景色から、担任へと顔を向ける。

クラス中の目線が、前方に集中したところで、担任が合図し、教室のドアが開かれた。

途端、僕は凍りついた。

ドアから入ってきたそいつは、男子から羨望の眼差しを、女子からそれに加え、半ば嫉妬混じりの目線を向けられながら、教壇へと足を進める。

担任が黒板に、癖の入った字で名前を書いていく。

(いいよ、書かなくて)

だって、そいつの名前知ってるもん。

「 えー、今日からこのクラスに加わる事になった 」

「 緋色美織です、よろしくお願いします 」

つやのあるクリーム色の髪を靡かせて、緋色美織、零崎蝕織は、にこやかな笑みを、教室に振り撒く。

緋色、その符号に気付いた何人か（ほぼ全員だが）が僕の方を見た。真九郎君も、銀子ちゃんもやや驚きを含んだ視線を向けている。

「じゃあ、その緋色夕介の前に座ってくれ」

我がクラスの席順は名簿並び。

テストの際の移動が無いため楽なのだが、今日ばかりは、そのシステムを恨まざるを得なかった。

そうか、僕の前に席が追加されてたのは、こういうことか。

未だに注目を浴びながら、僕に近づいてくる蝕織。

そして、自分の席の隣に立つ。

互いににらみあっていたが、やがて蝕織から口を開いた。

「これから、よろしくお願ひしますね。お兄様？」

「……………」

逃げてもいいでしょうか。

「~~~~」

「……………夕介君」

「……………ああ、わかつてる。わかつてるから何も言わないで」

楽しくない。

そそくさと部屋に行ってしまった銀子ちゃんを除く、三人での昼休み。

だが、未だかつて、ここまで気まずい昼食があっただろうか。目の前に座る真九郎君ですら引いている。

「はみ……………美織。メシは自分の席で食べよ」

「何故ですか？ 昼食には席の制限などありませんわ」

「……………KY」

「中途半端な現代語は止めて下さいな。何が言いたいのです？」

「美織よ。僕だって本当はお前が何処で食おうがどうでもいいんだ。僕の近くで昼食を取るのも……………まあ万歩譲って許そう。だが！」

だかの『が』のイントネーションを強くする。

「僕の膝の上で食うのは止める！」

夕識は激怒した。

必ずかの傍若無人な妹の奇行を止めねばならぬと決意した。

「にやはは、何を今更。一緒にお風呂まで入っておきながら、今更お膝元を借りるくらいで照れるなど」

「誤解を招く言い方は止める！ ガキの頃の話だろうが！」

いや、十歳過ぎたあたりからも何度かあったが、それはさすがに不味いという事で、僕が全力を持って拒否していた。

「器が小さいですね、お兄様は。潤さんを見習ったらどうですか。私が問い詰めたら、すぐにお兄様の住まいを教えて下さいましたよ？」

「あの人もグルか！」

どつりで発覚が早かったはずだ。

軋兄から連絡があった日付から、時間はあまり経っていない。

いかにこいつが『チーム』の人間とは言え、ちいくん程の探索能力は無いのだ。

だが、まさかこんな身近から密告者が出るとは。

てか、何を考えてるんだ哀川さんは！

サプライズイベントじゃ済まされん。

「あのさ、緋色さん」

完全に蚊帳の外だった真九郎君がおずおずと聞く。

ちなみに、僕と蝕織が兄妹だというのは、HR明けの空き時間間に、クラス中に知れ渡っている。

美織自らバラすものだから、僕まで質問攻めにあってしまった。

「美織、で構いませんよ。真九郎さん」

にこり、と屈託無く笑う蝕織。

「あれ？俺、名前言った？」

「潤さんから聞いていたのです。兄と一緒にいる揉め事処理屋の方がいるって。その節は兄がお世話になったようです」

「い、いや。そんな畏まらなくても。むしろ、俺の方が世話になったくらいだし」

頭を下げる蝕織に、慌てながら受け答える。

蝕織は誰に対しても、礼を仕損じない。

それ故に、昔からこいつは人との接し方がうまかった。

こいつがですます口調を外す時は、ほとんど無い。

外すとしても、大抵は家族の間だけだ。

「それで、どうなさったのですか？」

「うん。夕介君の兄弟ってことは、美織ちゃんも」

「ええ勿論。殺し名三位『零崎』です」

隠し立てする事でも無いと言わんばかりに、堂々と名乗る。

「お前、周りにも注意払えよ。零崎ってワードを易々口にするな」

「大丈夫です。お兄様がちゃんと音を遮断して下さったじゃありませんか」

くっ、このガキ。

僕の行動を先読みしやがった。

「改めて名乗らせて頂きますね。緋色美織。零崎名、零崎蝕織。通り名は漆黒残響です」

「じゃあ」

「ああ、真九郎さんの仰りたいことはわかります。私が零崎の衝動で、誰かを殺してしまわないかと危惧されているのでしょうか？」

お兄様は零崎を抑えられますからね、と美織。

「安心なさって下さい。私もお兄様程ではありませんが、突発的な殺人を抑えるくらいならできます。少なくとも、あなたの身近にいる人間に手出しはしません」

猟奇的なんだかなんなんだかわからない台詞を、蝕織は微笑をたくわえつつ言う。

しかし、真九郎君はそれに安心したらしく、少し息をついた。

「それに、私のやりたいことは別にありますので」

そう言っつて、蝕織は一瞬だけ僕を見た後、ようやく僕の膝の上からどいた。

「何処いくんだ？」

「周辺を散策してきます。しばらくはここに通いますから、土地勘を持ちたいのですよ」

とととて、と足音を鳴らしながら、蝕織は教室から出ていった。

「大事な話がありますから、今日は一人で帰らないで下さいね」と言い残して。

「はあ」

蝕織が消え、僕はようやく肩の荷が下りたように思えた。

「本当にあんな子が、夕介君を負かしたの？」

「裏世界で、見た目は判断材料にならないよ。君だって知ってるだろっ?」

紫ちゃんとかだって、あんなナリでも表御三家なんだし。

絶奈さんだって、十代前半なのに悪宇商会の中核にいるし。

「にしても　　ったく、あのヤンデレムスメ。まるで性格直ってねえな」

「夕介君、美織ちゃんの前だと別人みたいだよね」

「……そうかな?」

「うん、何か自然体って感じだよ」

「特に意識はしてないんだけどね……」

だが確かに、あいつとは付き合いが長いせいか、どうしてもあんな会話になる。

「あの双識って人が来たときもそうだったけど、やっぱり夕介君、そっちが地の性格なんだ」

「うーん。地っていうか、単純な切り替えかな。家族の前では、あいう性格になっちゃうんだよ」

それを地の性格と言うのかもしれないけど。

「でもそれって、気兼ね無く話せるって事だろ？　そういう家族がいるのは、良いことだよ」

何だか、真九郎君が言うつと説得力がある。

天涯孤独の身である彼からすれば、どんな形にせよ、家族がいるのは幸福なことなのかも知れない。

「流血によって繋がる、とか言われてたから、どんな家族なのかなって思ってたけど、やっぱり家族は家族なんだね」

「人殺しであるのを除けば　ね」

そこが唯一の違いであり、絶対的な違いだ。

「それにさ、双兄はともかくとして、蝕織と僕の関係は普通の零崎と違うからね」

「違う？」

おっと、口が滑ったか。

余計な混乱を生みそうだから、黙っているつもりだったのに。

ま、いいか。

別に話してどうこうなるものでもない。

「零崎は、血縁ではなく、流血によってのみ繋がる殺人鬼の家族。これは前、夕乃さん家で話したよね」

真九郎君が「うん」と頷く。

「だが、僕とあいつはそうじゃない。僕らを繋ぐのは、流血だけじゃないんだ」

「どっぴいっ事？」

「あいつと僕は、本当の双子なのさ」

「……双子？」

「だから、僕とあいつは血縁においても、流血においても、本当の兄妹なんだよ。」

二人同時に、零崎へ覚醒したんだ」

始まりは、些細な出来事。

『大戦争』の折、天涯孤独の身となった、当時六歳の兄妹。

親戚に引き取られこそしたが、一ヶ月と持たない内に、僕らは家を飛び出した。

僕らを『実験動物』としか見ないなら、二人だけの方がいい。
自然な発想だろう？

自慢じゃないが、僕らはその歳にしては出来すぎなくらいに、物が考えられた。

だから、全国を放浪するのも案外簡単だった。

むしろ大変だったのは、追手を巻く事だっただろう。

交通機関にまで手回ししてくる以上、追い掛けっこは熾烈を極めた。

しかもそれを約三年間。

九歳になった事など、気にする余裕もない。

気が狂うような逃亡劇の末に
日本の北端まで来たところで、追いつめられてしまった。

周りにあったのは、大人達の冷たい目と、妹の怯えるような啜り泣き。

ああ、僕らはここまでなんだな。

妙にあっさりと、僕は自分の死に際を決めていた。

広い廃屋で、動けなくなるまで痛め付けられ、僕を引き取った義父が、自ら止めを刺そうと、下品な笑みを浮かべながら、僕らの首を絞めてくる。

これで　死ぬ。

そう思った時だった。

妹の顔が見えたのだ。

恐らく妹にも、僕の顔が見えただろう。

そして同時に、思った。

自分はどくなってもいい。

でも。

片割れに 自分の鏡に手を出すのは 許さない。

気が付けば、義父も、義父の部下も、皆死んでいた。

僕らの片手には、義父の部下から奪ったのであろう、血にまみれたナイフ。

ぞくぞくと、全身の血流が沸騰するような感覚に襲われる。

圧倒的なまでの躍動感。

魂を焦がす衝動。

人間としての自分を否定する、鬼の心。

それがあの時、僕らが得たもの。

「……悪くない」

ほどなくして、一人の男性が入ってきた。

軽くウェーブのかかった黒髪に、端正な顔立ちをしており、その有り体には、燕尾服が驚くほどよく似合っていた。

……まあ、燕尾服という服は、似合う似合わないの問題ではないのだけれど。

「『家族』の匂いがしたから、てっきりレンかアスカかと思ったのだが 成る程、こういう事が、悪くない」

と、燕尾服のお兄さんは言う。

「やれやれ。こういうのは僕では無く、レンの仕事なのだが……。そこのお前達、名前は？」

妹は、びくつと肩を震わせ、僕の後ろに隠れる。

今でこそそうでもないが、この頃の妹は、かなり人見知りの激しい性格だったのである。

互いに名乗らず、沈黙が続く。

この兄さんが信用出来なかったわけではない。

むしろ、昔から知っていたかのような親近感を覚えていた。

名を言わなかったのは、その名がもはや、僕達のものではないように思えてしまったから。

「名乗りたくないか？ それも悪くないが、それでは呼ぶ時に困る。もし僕を警戒しているのなら、少なからず、悲観の念を覚えてしまおうな」

……言いたい。

自分の格好を見たことがあるんですか、と。

その燕尾服のまま、人目につく場所に出ようものならば、周囲に引かれる事は必死だ。

まあ、この人は世間体を気にするような人柄では無さそうなのだけだ。

初対面のくせに、僕はそんなことを考えていた。

「……呼び方なんて、何だって構いません。それより何なんですかあなたは、いきなり現れて。僕らは早く行かないといけないんです」

「行く？ 何処にだ？」

「何処って……」

何処だろう？

逃げる必要はもう無くなった。

最初から、行く宛の無い逃亡劇だったのだから、ゴールなどありはしない。

これから、僕らは何処へ行けばいいんだろうか。

「行く宛も無いか　まあ僕も、帰る場所など有りはしないからな。それも悪くない」

「それは　悪いと思いますけど」

随分とマイペースな会話の進め方だ。

いやに話しづらい。

「では僕は年長者らしく、お前達に一つ提案をしましょうか」

「提案？」

「僕の家族にならないか？」

「……？」

家族に、なる？

どついう意味だろうか。

「僕の家族は、お前達のような人間ばかりが集まっている。

大袈裟かと思われるかも知れないが、世界に誇れる家族だ」

僅かに、感情らしきものを滲ませて、お兄さんは言う。

「ちょっと待ってください。お前達みたいな人間って……」

「殺人鬼となった人間だ」

何の感慨もなく呟かれた言葉に、僕は少し身じろいた。

「殺人鬼って、僕らは……」

「今、人を殺したのは正当防衛だった。

確かに、そうだろうな。途中から見えていたが、お前達に非はない。こいつらは、レンの言葉を借りるならば、確実に『不合格』だろう。

だがそれでも、お前達が殺人鬼である事は変わりの無い事実だ」

殺人鬼。

ひどい言い草と思った。

けれど同時に、理屈抜きに納得してしまう単語でもある。

もし僕らがそうでないのなら、この廃屋は血の海になっていないだろう。

「……妹も」

「？」

「妹も、その家族に入れてくれるんですか？」

「僕は最初から、複数形で話していたぞ」

確かに。

「彼女は、お前の妹なのか？」

「はい。双子ですけど」

「血脈で繋がれた零崎か……。人識とは違った意味での『異例』だな」

僕が肯定すると、お兄さんは閉じ気味の目をさらに細める。

「……まあ、構わないか。異例だろうがなんだろうが、レンやアスがどうとでもしてくれるだろう。」

それで？」

「……」

ちらりと妹を見ると、震えこそ止まっているが、未だに服の袖にしがみついていた。

その首が、ほんの少し縦に振られたのを確認して、僕はお兄さんに
向き直る。

「……わかりました。僕らを、家族に入れて下さい」

「悪くない」

感情が欠落したように無表情だったお兄さんが、その時だけ笑った
ように見えた。

確認する間もなく、元の表情に戻ってしまったのだが。

「取り敢えず、行くとしようか。」

後始末は　まあ、誰かを頼ればいいだろう」

……そんなアバウトでいいのかな？

一応は刑事事件なのだが。

「　あの、貴方は……」

「貴方、というのは壁のある言い方だな。レンのように兄と呼ばれ
たいわけではないが、いい気分にはならない」

「えっと、じゃあお兄さんは何て言う名前なんですか？」

「曲識、零崎曲識だ。僕も名乗ったのだから、お前達も名乗って貰
えるとありがたい」

「……なら」

これから、これが僕の本当の名前。

「僕は、零崎夕識です」

「零崎……… 蝕織です」

妹も、今までの名前は使わなかった。

僕と同じく、それを本当の名前だと思えなかったのだろう。

「夕識に蝕織、か。」

いい名だな、悪くない。

ではこれから、そう呼ばせて貰うとしよう。これからよろしく。夕識、蝕織」

それが、僕達が本当の家族を手に入れた瞬間だった。

「わたし、明日から五月雨荘に住みますから」

「……… お前、人の回想無視すんなよな」

その日の帰り道。

約束通りというか、半強制的にというか、僕と蝕織は二人並んで帰宅路についていた。

本日の放課後の予定は、真九郎君と一緒に銀子ちゃんの実家が経営するラーメン屋に行くつもりだった。

しかし、蝕織の「二人だけで話したい」という強引なネゴシエイトにより、真九郎君と僕は別々のルートを通り、ラーメン屋にて待ち合わせるという形に相成った。

「どうでもいい話だけどさ、お前猫舌じゃなかったか？」

「ラーメン屋なら炒飯や餃子くらいあるでしょう」

そりゃあるでしょうよ。

だがラーメン屋入ってラーメン食わずに、炒飯や餃子を頼むのはかなり勇気がいる。

ましてや、店員が銀子ちゃんなら尚更だ。

そうしたが最後、万華鏡写輪眼ばりの眼光を向けられる気がする。

「……知らんからな、どうなっても。」

それで、何の話だったか……ああ、そうそう。お前が五月雨荘に来るって話だったな」

「はい。お兄様の部屋に」

「爆弾発言投下っ!？」

言葉の端々にサプライズを含むのは止めて戴きたい。

「ルームシェアですよ、ルームシェア」

「あの五月雨荘に、そんな世俗的なサービスがあったのか……？」

哀川さんからは聞かされなかったけれど。

「あのだな、蝕織」

「何ですか。先に断っておきますが、部屋を変える気はありませんよ」

「いや、そのへんはもう諦めたよ……」

本当は諦めちゃいけないんだろうけどな。

兄妹とはいえ、16歳の男女が一つ屋根の下に二人きりってのは不味いだろう。

「俺が言いたいのはな……」

「帰りませんよ」

仁辺もなく、蝕織は切り捨てる。

「蝕織。我が儘言ってる場合じゃ……」

「わたしは、家族の中で一番お兄様を理解しています」

「それは一昨日聞いた」

「『狐』 人類最悪のことを知っているのも、家族内ではわたしだけです」

まあ、そりゃそうだろうけどさ。

軋兄も知ってるっちゃあ知ってるが、軋兄が知ってるのは『沙漠のデザートフォックス』としての『人類最悪』だ。

『人類最悪』そのものを知っているわけじゃない。

「知ってるならわかるだろ、僕は帰れない。『狐』の禍根を絶たない限りはな。

だからお前帰れ。これはお前に関係ある話かも知れないが、進んで関わる必要性はまるでない」

「本当に、変わりませんね。お兄様は」

安心したとも、呆れたともとれる口調だった。

「 私は最初、お兄様を連れて帰る気はありませんでした」

「 え？」

「 意外でしたか？
でも当然でしょう。」

お兄様のしていることは、家族全員を思っていることですからね。そこまでお兄様の自由を縛るつもりはありません」

「 だったら 」

「ですが、一昨日のやり取りで気が変わりました。やっぱりお兄様は連れて帰らせて戴きます」

つり上がった眉を見れば、蝕織が僕に少なからずの怒りを抱いているのは明白だった。

だが、わからない。

何故こいつがこんなにも怒っているのか、僕にはまるで心当たりがなかったのだ。

少なくとも、姫ちゃんの言うような、おやつをとったとかいうような、日常サイズの原因では無いらしい。

「一ヶ月、猶予をあげます」

苦々し気に、蝕織は呟く。

「本当なら今すぐにでも連れて帰りたいたいのですけれどね。潤さんがお兄様の居場所を教える代わりに、条件を出してきたんです」

「条件？」

「『もし夕ちゃんが【ある一言】を言った場合、期限までに、蝕ちゃんの怒っている理由に気付けなければ、連れて帰ってこい』とのことです」

……哀川さんめ。

本当に何を考えてるんだ。

こっちに残っていいって言ったのは哀川さんじゃないか。

なんでわざわざ事態をややこしくするんだ。

「……よく考えて下さいね。まあ、今のお兄様じゃ、気付くとは思えませんが」

期待していない。

そう蝕織の瞳は語っていた。

「【ある一言】ってなんだよ」

「それを言ったら意味が無くなります。ご自分の埃を被った頭でじっくりと考えなさい」

そう言っつて蝕織は、フーンとそっぽを向いてしまっつ。

ああ、これは相当ご機嫌斜めだな。

このまま不機嫌さ丸出しの妹とラーメン屋に行くのも嫌だし、これから長くも短くも、共同生活をする相手なのだから、その辺に支障が出るのもつまらない。

妹に話の主導権を握られるのもまた、いい気分では無かった。

なので、少しリベンジ決行。

「蝕織」

周りの人間、家族も含んだ全員には決して出さない、蝕織にしか使ったことがない口調。

自分でも引くくらいに甘ったるい声を、顔を背ける蝕織の背中にぶつける。

ぴくり、と蝕織の肩が震えたのを、僕は見逃さなかった。

すかさず肩に腕を回し、耳元で囁く。

「僕の事……そんなにキライ？」

「……………うあ」

聞こえたのは掠れ声。

後ろからでもわかるくらいに、蝕織は動揺していた。

頬は紅潮し、表情は羞恥に歪んでいる。

妹とか抜きにして、素直に可愛いと思う。

本当　僕なんか構わず、普通にしていればモテそうなのにな、こいつ。

「ねえ、どうなの？」

「す……、好きとか、きき、嫌いとか、そついつのじゃ……」

言語にまで情緒不安定の兆しが出た。

よし、トドメ。

ペロ。

蝕織の頬を軽く舐めた。

「~~~~~！　にゃっ!?!」

ショックによって硬直が解けたのか、蝕織は無我夢中で僕を振り払った。

その際、がむしゃらに振るわれた拳が、僕の顎にクリティカルヒット、少し浮いた僕の身体は、数秒のタイムラグを経て地面に落下。

「お、お兄様！　な、なな、何するんですかぁ！」

「何って、頬舐めただけだろ。お前の膝乗りよか、よっぽど常識的な男女感のコミュニケーションだと思っけどな」
まったく、押しに強いのか弱いのか。

顎をさすりつつ立ち上がり、蝕織の猛抗議を聞く。

「こ、こんなことしたって、さっきの条件は取り消しませんよ!」

「別にそんなの期待してないよ。ただ久しぶりに、兄妹の距離感の確認をしようかと」

「……お兄様が双兄さんに見えます」

「それは全力で否定させてもらおう」

あの変態と同列に扱われるのだけは御免だ。

「いつも意地悪ですよ……。お兄様は」

「ふむ、それは否定しない。ほら、行くぞ」

「はい」

まだまだ興奮冷め遣らぬといった顔で、蝕織は髪を揺らしながら、僕の後ろにつく。

こいつが怒ってる理由、か。

やっぱり思い浮かばない。

こういつ時、自分は駄目だと思つ。

一番身近な妹が考えてることさえ、理解してやれない。

本当に 萌太くんとは雲泥の差だ。

あの子の方が、よっぽどしっかりしている。

気づいて、やりたいんだけどなあ。

心の中で生まれた切なる願いは、誰に聞かれる事もなく、記憶の海に沈んでいった。

「へい、らっしやい！」

場所は変わって老舗のラーメン屋『風味亭』。

暖簾を潜ると、カウンター越しの厨房から、銀子ちゃんのお父さん、銀正さんが景気の良い挨拶で出迎えてくれた。

真九郎君と一緒に何度も訪れているため、既に僕とは顔馴染み。

「こんにちは、おじさん」

「おう、夕ちゃんじゃねえか！ 久しぶりだな。ん？ そっちの嬢ちゃんは彼女かい？ 夕ちゃんも隅に置けねえなあ」

「かつ」

「蝕織は再び、耳元まで顔を赤らめる。」

「何を動揺してるんだお前は……。違いますよおじさん。僕の妹の美織です。今日こつちに越してきたんですよ」

「おー、そうだったのか」

「えと、初めまして。緋色美織です」

「ぺこりと頭を下げる美織。」

「何人かの客が、それを微笑まし気に見る。」

「お父さん、無駄話なんかしてないで。ネギラーメン二つ追加」

「エプロン姿の銀子ちゃんが、カウンターにトレイを置く。」

「おいつす銀子ちゃん。君は家でも不機嫌そうなのう」

「放つといて。注文するならする、しないならしない」

「怖いなあ、スマイル0円の花は無いの？」

「そんな安上がりで上辺だけのキャッチコピーはいらない」

「あ、銀子ちゃん。今の一言で全国のファーストフード店の従業員を敵に回したぞ」

そんなやり取りの後、銀子ちゃんは僕の後ろにいる蝕織に気が付く。蝕織もまた、きよとんとした表情で銀子ちゃんを見返した。

「夕介君、その子」

「ああ、僕の妹だよ。真九郎君と待ち合わせてたし、ついでに連れてきた」

ついでとか言わないで下さい、という抗議が隣から聞こえたが、これは無視。

「改めて紹介する。緋色美織、僕の双子の妹だ」

「初めまして！」

「……初めまして。村上銀子よ」

「じゃあ、銀子さんで良いですね！ よろしく願います！」

「え、ええ。こちらこそ」

屈託無く笑う蝕織に対し、少し戸惑いながらも銀子ちゃんは自己紹介を済ませる。

正反対だもんな。こいつと銀子ちゃんの性格。

「 注文」

気を紛らわすためか、銀子ちゃんはぶっきらぼうに言う。

「醤油ラーメン」

「炒飯で！」

うわっ、本当に頼みやがったよこいつは……。

「悪いね銀子ちゃん。こいつ極度の猫舌なんだ」

怪訝そうに首を捻る銀子ちゃんにフォローを入れて、僕と蝕織はテーブル席へ。

「いい店ですねえ、風情があつて。昔ながらの雰囲気を保つてるといふのでしょうか」

そんな老人じみた事を言う蝕織。

コイツのノリは分かりづらい。

他愛無く話しながら、注文を待つも、盛況な店内の影響か、中々品物はこない。

注文から約四十分弱。

未だ注文が来ぬまま、真九郎君が店に入ってきた。

「ごめん、遅れちゃって」

「おっそい。カカシ先生か君は」

「もう、いいじゃないですかお兄様。まだ注文来てないんですし」

蝕織に促され、真九郎君が席に腰を下ろした。

銀子ちゃんが水入りのコップを置く。

その表情には、僕の時と同じく愛想は無かったが、僕の時よりも幾分か冷淡さが籠っている。

「ロリコン」

「……それが客に対する態度か？」

「夕介君にも似たような事言ったけど、薄っぺらな笑顔が欲しいなら、そこらのファーストフード店にでも行けば？」

「お前な……」

「真九郎さんは少女趣味なのですか？」

「その言い方は曲冗を彷彿してしまうから止めろ」

あの人の少女趣味はそういう意味じゃない。

「さっさと注文して。こっちは忙しいのよ、ロリコン」

「……もやしラーメン大盛り」

疲れたように呟く真九郎君を、憤然とした様子で見やり、銀子ちゃんは別のテーブルへと向かう。

「まだ紫ちゃんの誤解解けてないのか」

「残念ながら。昔からあいつの軌道修正は難しいよ」

そりゃあ、『結婚しよう』発言なんて聞かされちゃあね。

「紫ちゃん？」

「ん、ああ。お前は知らなかったな」

蝕織に簡単な紫ちゃんのプロフィールを説明する。

具体的には、表御三家であることや、数週間前に起こった九鳳院とのいざこざ等。

「それはまた面白そうな子ですね」

「明日越して来るんだろ。すぐにでも会えるさ」

「でも曲兄さんには会わせられませんね」

「それは僕も思った」

ああ、やっぱり双子なんだな。

考える事が一緒だ。

「そっぴや真九郎君。遅くなった理由聞いてなかったな」

「いや、それがさ」

以後の話を纏めるところだ。

最近この街で話題になっていた少女ばかりを狙った誘拐事件。

偶然にも、その犯行の現場に真九郎君が出くわし、それを解決。事件後の事情聴取に時間を割かれていたのだという。

「ふわー。凄いですね、真九郎さんは。私なんかとは大違いです」

「そんな事ないよ。俺なんかまだまだ駆け出しだからさ。今日のと違って、ほとんど偶然だし」

「にははは、謙遜なさらないで下さい。人の命を救う行為を否定しちゃ駄目ですよ。私が言うのもどうかと思いますけどね」

どうやら本気で感心しているらしい。

思い込みが激しく、マイペースな部分は曲兄ゆずりなのである。

というかなんだ。

この変な青春ムードは。

真九郎君は真九郎君で、変に緊張してるし。

「おまちごじつね」

ガタンと乱暴な音がして、もやしラーメン、醤油ラーメン、炒飯の乗ったトレイが置かれる。

「……随分急に来たね」

「ちょうど同じ時間に来ただけよ。ちゃんと味わって食べなさいよ、ロリコン」

「……慎んで、食べさせていただきます」

真九郎は萎縮したように、箸を割って食べ始める。

そこで僕はふと、立ち去ろうとする銀子ちゃんに尋ねる。

「銀子ちゃん」

「何？」

「……美織に嫉妬？」

途端、伝票のボードが気円斬ばりの破壊力を持って僕の額に直撃。

「つてえ！」

「馬鹿な事言っていないでさっさと食べる」

銀子ちゃんの語気には、殺し名ばりの威圧感が含まれていた。

「忍者ですか、銀子さんは……」

机に落ちた伝票を見ながら、蝕織がかなり引き気味に言う。

もちろん銀子ちゃんに対して。

いや、蝕織。忍者より怖いよ。銀子ちゃんは。

ちなみに言うなら、忍者とは弥生さんのような人を言う。

やれやれと溜め息をつき、ラーメンに手をつける。

あっさりとした風味が、口内に広まる。

蝕織の顔を見ると、幸せそうに顔を綻ばせている。

この味は気に入ったようだ。

と、二口目を口に入れようとした所で、軽快な電子音が聞こえてきた。

発信源は真九郎君のケータイ。

当然、決して小さくないその音に、銀子ちゃんが気付かないわけはなく。

「店内でのケータイの使用は、ご遠慮ください。他のお客様に迷惑です」

「銀子」

「何よ？」

「エプロン、良く似合ってるな」

「うるさいバカ！」

やれやれ。好意的な言葉は素直に受けとればいいものを。

「わかりやすいデレ方ですねえ」

お盆で叩かれる真九郎君を見ながら、ひそひそ声で蝕織が言う。

「あの子は会った時からあんな感じた」

次の瞬間、真九郎君を叩いていたはずのお盆が僕に飛んできた。

なすすべもなく、衝撃とダメージで机に突っ伏す。

「学習しましょうよ。お兄様」

横目で見ると、蝕織は何食わぬ顔で茶を啜っていた。

『我関せず』というオーラが漂っている。

淡泊な妹に青筋を浮かべながら、痛みに悶えていた僕だったが、それも真九郎君の電話内容が聞こえてきた時までだった。

「もしもし」

真九郎君に出ると、彼は僅かに顔を強張らせた。

『紅真九郎さん、ですね』

電話特有のくぐもった声、それでも僕の聴覚なら聞こえないことはない。

問題はその電話相手だった。

真九郎君がそうですが、と肯定すると、電話相手は丁寧な口調でこう言った。

『わたし、悪宇商会のルーシー・メイと申します』

『悪宇商会』。

そう聞いて思い出すのは、あのアロハシャツ。

九鳳院の一件で真九郎君が倒した戦闘屋『鉄腕』。

僕はどちらかといえば、絶奈さんの方が印象に残っているのだけ。

『突然のお電話、申し訳ありません。お会いして話したい事があるのですが、よろしいでしょうか』

「話したい事？ 一体何ですか」

『それはまたお会いした時に。三日後の午後2時、桜霧公園の噴水前に来てください。それでは』

一方的に電話は切れた。

真九郎君は電話を閉じ、神妙な顔をする。

「誰から？」

「ん、いや。仕事関係」

銀子ちゃんの質問に軽く受け答える。

嘘をついたのは、銀子ちゃんに余計な心配をさせたくないからか。

「聞こえてたから言うけどさ。結構ヤバいんじゃない？」

銀子ちゃんが立ち去ったのを見計らい、僕は言う。

「夕介君もそう思う？」

「報復とかって線もあるし、無視しちゃったら？」

「……いや、行ってみる。相手の意図は、まだ完全には分かんないし」

「ふーん、まあ真九郎君が言うならいいけどさ」

ラーメンの残りを食べつつ、僕は思う。

（物語が、動いたね）

数日後の午後二時。桜霧公園にて、制服姿の男女が、公園の端々を

困う茂みに隠れていた。

「いいですか、お兄様。ホシが動いたらすぐに取り押さえるのです」

「了解です。おやつさん（超棒読み）」

僕は先程蝕織に仕込まれたセリフを反復する。

全く、どこの刑事ドラマだよ。

この物語は僕の人間生活を描くもの以外の何者でもなく、実在の人物団体とは一切関係ありません。

「蝕織、何に影響されたか知らんが、別に犯罪の現場を押さえるわけじゃないんだぞ」

「ふっ、この謎はもう、私の舌の上だ」

聞いちゃいねえ。

そしてドラマじゃなく漫画からの流用か。

「いいか。僕らはあくまで、真九郎君が悪宇商会に何かされた時のためのストッパーなんだ。そこは忘れちゃ駄目だ」

草木の隙間からは、真九郎君が噴水前に立ち尽くす様子が伺える。

この位置ならいつでもアクションを起こせる。

「てか蝕織。素朴な疑問を一つ。何でお前がいるんだ？」

真九郎君とこの約束をした際、蝕織はいなかったのだが。

「お兄様の行動は全部まるっとお見通しです」

「ドラマからの影響もあつたか……」

確かにT ICKは神のごとき作品だけだ。

だが、今現在僕がリアルタイムで見ているドラマは、仮面ライダーWのみ。

……いや、何の話をしてるんだ。

「蝕織、いたいならいてもいいが、悪宇商会の奴を殺すのは止めとけよ」

「わかってます。お兄様は心配性ですね」

心配にもなるよ。

再会してすぐ殺されかけりゃあな。

しかし、深淵夢想が無い今、こいつのスキルが必要なのも確かだ。

嫌なジレンマである。

「さてさて どうなるやら」

危惧する事が多くなる一方で、無情にも時計は二時を指そうとしていた。

果たしていかなる魑魅魍魎が来るのやら。

一抹の好奇心を抱きながら、更に待つこと五分。

「星領学園一年一組の紅真九郎さん！ いらっしやいますかー？
いらっしやるなら、返事をしてくださいーい！」

『いや、遠足で迷子になった子と呼ぶ先生か！』

僕と蝕織は、条件反射に近いスピードで突っ込む。

「紅真九郎さん！」

いらっしやらないんですか？」

「こつちです！ ここにいます」

羞恥に顔を引きつらせる真九郎君に、一人の二十代後半の女性が近づいてきた。

どうやらこの女性が、二人の零崎にダブルツッコミをさせた強者らしい。

厚手のコートに、大きな眼鏡。頭にはニット帽。

女性だというのも判断しがたい地味な印象だ。

「どうも初めまして。紅さん。いやあ、合図や目印を決めるのをすっかり忘れていたもので。これで会えなかったらどうしようって、ちよっと焦りましたよ」

「……あの、悪宇商会の方ですよね」

「はい。悪宇商会から参りました。ルーシー・メイと申します」
意外に礼儀正しかった。

刺客を潜ませている可能性もあったが、それもない。

「お会いできて嬉しいです、紅さん」

「はあ……」

「で、早速で申し訳ないのですが、一つお願いしてもよろしいでしょうか」

「何です？」

おお、いきなりだな。

「お金、貸してください」

「えっ？」

真九郎君、僕、蝕織が同時にすっとんきような声を上げる。

「わたし、財布を忘れてしまいました……」

真九郎君はツツコミたそうな顔をしつつも金を貸し、ルーシーは公園前のコンビニへと消えていく。

「またおかしな奴が来たな……」

見た感じ、戦う人間という印象は受けない。

だが、それイコール驚異にならないとは言い切れない。

理澄ちゃんがいい例だ。

「むう。あの女性、気に入りません」

「気に入らない？ 何がだよ。あー、スタイルが？」

殴られた。

「お兄様は私の体格がスレンダーだと言いたいのですか？」

「いやいや別に。誰もお前が以前、哀川さんのスタイルを羨ましがってたなんて言っていないぞ」

いつ出したのか、漆黒残響が目の前まで迫った。

白刃取りで対応。

「おいおい、殺す気かよ」

「殺す気でした！」

「あまり騒ぐな。向こうに気付かれる」

「誰のせいだと思ってるんですか！」

「さて誰だろうな、可愛い妹にそんな残酷な事実を突き付けるのは」
その後、狂犬の如く襲い掛かる蝕織を宥め、最初の疑問に立ち戻る。

「で、何が気に入らないんだ？」

「……あの女性の方。嘘ばっかりです」

「嘘ばっかり？」

「はい。外見も性格も雰囲気も、何もかも虚構で塗り固められたよ
うな人間です」

「つまり、ただの勘か」

「『女』の勘です」

「変わんねえよ」

「馬鹿にしないで下さい。卑弥呼然り、古来より女の勘ほど、的中
率の高いものではありません」

「いや、卑弥呼を例えに出すのはおかしい」

まあ、女の勘云々はともかくとして、蝕織には人を見る目がある。

もちろんあくまで勘なので、必ずしも期待はできないが、無視も出
来ない。

「あいつもやつぱり、真つ当な社員つてわけじゃなさそうだな」

疑心を更に強め、おにぎりと飲み物を買って戻ってきたルーシーと真九郎君の会話を聞く。

「本当にすみません。必ず返しますので。あ、半分飲みます?」

「結構です。……あの、もう一度確認しますが、本当に悪宇商会の方ですよね」

「はい、そうですよ」

半信半疑な（当たり前か）真九郎君を見て、ルーシーはポケットに手を入れて、紙切れのようなものを差し出す。

さすがにここからは見えないが名刺らしい。

名刺はさておいて、彼女が悪宇商会の人間なのは、この時点ではほぼ確定事項だ。

悪宇商会は裏社会では大手。

その肩書きを偽るうものなら、会社の人間が隠蔽工作をするだろう。

「せっかくの休日なのに、こちらの都合で急がせてしまったことも、すみません。デートのお約束とか、ありましたよね?」

「……恋愛ド音痴の真九郎君にそんな予定は立ち得ない」

「うわっ、お兄様ひどっ」

つい口から出た野次に、蝕織は顔を引きつらせる。

いやいや蝕織。

真九郎君との出会いが浅いお前にはわからないだろうが、僕、銀子ちゃん、夕乃さんあたりからすれば、それは周知の事実なのだよ。

「……前置きはいいですから、早く本題に入ってください」

真九郎君は僅かに疲労の色を濃くする。

この手の人間を相手にするのは、真九郎君には苦手分野だ。

彼の周りにいる女性は、大抵がこんな一癖も二癖もあるキャラ。

「はい、それでは。」

あなたが欲しいのです、紅さん」

「……えっ？」

またしても三人の声がユニゾン。

色んな意味にとれる言葉だが。

戸惑う僕らをよそに、ルーシーは真九郎君に繰り返す。

「あなたが欲しいのです、紅さん。我が社に、悪宇商会に来ませんか」

(……ああ、なるほどね)

そう来たか。

ルーシーの要件は単純明快。

『鉄腕』ダニエル・ブランチャードに勝利した真九郎君の強さを悪
宇商会は高く評価し、是非とも彼を迎え入れたいとのこと。

端的に言えば、勧誘だ。

言い方を変えれば、仕事の邪魔をした真九郎君をも勧誘しようとは、
良く言えば寛大。悪く言えば節操が無い。

で、当の真九郎君はというと、意外にも迷っているらしかった。

最初こそ気乗りはしていなかったものの、ルーシーの乗せ方が絶妙
だったのである。

真九郎君の優柔不断な性格も災いしてか、その話術はかなりの効果を
上げた。

真九郎君の才気。揉め事処理屋の競争率。将来性への不安等々。

組織に加わることのメリットも含みながら、真九郎君を上手くのせ
ていた。

ここまで言われれば、真九郎君も断るに断れなくなる。

「……あーゆーのって、勧誘の常套手段ですよね」

「しかも全部嘘じゃ無いってのがミソだな。真九郎君、結局何て返事したんだ？」

「少し考えさせてくれ、とだけ」

帰り道、僕らは三者三様に意見を述べる。

「でも、そんなに長い時間、向こうも待たないだろ？ どうすんだよ」

「うーん……、夕介君と美織ちゃんはどう思う？」

「んなもん、僕らが言ったって、最終的には真九郎君が決めんだから参考にはならないよ」

そう返すが、僕は一応の考えを言う。

「まあ、組織に参加するのは別に悪くないんじゃない？ どんなベテランだって最初は、誰かの下にいて経験を積むもんだし」

紅香さんにしろ、哀川さんにしろだ。

哀川さんの場合は……違うかも知れないけれど。

狐との間柄はそんな関係では無かっただろうし。

「でもねー。真九郎君は案外フリーの方がいいかも知れないな」

「? どうして?」

「人、殺したくないでしょ?」

さらりと言い放った言葉に、真九郎君は固まる。

「さっきのルーシーとかいう人も言ってた。依頼があれば悪宇商会は、善行にも悪行にも手を貸すつて。

それって聞こえは良いけどさ、悪宇商会はあくまで裏社会の企業なんだよ。

裏社会に『暴力』はつきもの。悪行こそすれ、善行をするにしても、人を傷つけ、殺すという手段をとる場合もある。裏の組織に入れば、否応なしにそういう汚れ仕事はやるよ」

善行で人を殺す時、殺される人間は、生きるべきでない人間。

そんな所業をやるのは石皿だけで十分だ。

「だからさ、結局は真九郎君次第なんだよ。でも僕としては、君は止めておいた方がいいと思う」

「同意見ですね。」

でも真九郎さん、仮に人を殺すことになっても、私達みたいにはならないようにして下さい」

一人二人なら、まだ間に合いますから。

妖艶に笑う蝕織に、真九郎君は顔をひきつらせた。

このブラックスマイルと、あの人懐っこい笑みとのギャップはあまりにも大きいからな。

「……なんて、真九郎さんはそんな心配いらないでしょうけどね」

一緒に普段の蝕織にキャラチェンジ。

本当にこいつは怖い。色んな意味で。

(……さてさて)

果たしてどうなるやら。

ギロチンはギロチンを開発した人の名前から取ったんだって

人間誰しも、人生の転換期というやつが存在する。

僕と蝕織の場合、それは零崎に覚醒したことだし、真九郎君の場合は紅香さんに出会ったことだ。

そして再び、僕は人生の転換期を迎えようとしているのであった。

なんて。

「戯言だよな」

「何か言った、夕介君？」

「いや、なんも」

悪宇商会の勧誘から数日経った。

その間、蝕織の引越して一悶着あったりもしたのだが、それはまた別の話だ。

当の蝕織は、僕の隣で先ほど購入したラムネを飲んでいる。

「あれから連絡あった？」

「いや、一回もないよ」

そう言いつつ、蝕織と同じく真九郎君もラムネを飲みほし、近くのゴミ箱に放る。

「うゝ、舌が痺れますゝ」

「慣れない炭酸飲料なんか飲むからだ」

「じゃあお兄様、あと飲んで下さいよ」

「どこをどうしたら間接キスという結論に行き着くんだ？ お前が買ったんだから責任もってお前が飲め」

「鬼ゝ、悪魔ゝ」という蝕織の力無い抗議が聞こえてくる。

しかし、これに関しては確実にこいつの自業自得だ。

「真九郎君、時間は？」

「そろそろだよ。昨日美織ちゃんの事話したら『夕介の妹に会ってみたい！』って叫んでたし、教室からここまで寄り道はしてこないだろうからね」

現在、僕らは星領学園の近くにある、小学校の正門前にいる。

周囲には、僕らと同じ目的の父母の方々。

蝕織はようやく飲み終えたらしいラムネの瓶を捨てながら、にゃはは、と笑う。

「楽しみです、ようやく噂の紫ちゃん会えるんですからね。ああ、

どんな子なんでしょう。女王クイーンみたいに可愛いんですかねえ……」
うっとり顔を綻ばせる蝕織。

（くなぎーと比べるのはどうかと思うがな）

いや、事実紫ちゃんは可愛いけど。

蝕織も僕と同じく、子供は好きな方なのだが、こいつはどちらかと言えば可愛いもの好き、といった方が正しい。

例えて言うなら、キュートなぬいぐるみを見た瞬間、「お、お持ち帰りい〜」みたいな感じ。

期待のあまり、マイワールドに突入中の妹を目の端に収めた直後、校舎から校舎まで歩いてくる小学生達の中に、特徴ある人影が見える。

ボーイッシュな服に赤ランドセル。

長い髪、そこから一本だけ立っている癖毛。

紫ちゃんだ。

「おい、紫」

「真九郎！」

真九郎君が手を挙げ、その姿に気付くと、紫ちゃんは俊敏な足取りで、僕達のところまで駆けてくる。

「出迎えごくるっ！」

「どういたしまして」

「こんにちは、紫ちゃん」

「おお、夕介！ こんにちはだ！」

屈託の無い表情。

この辺りは九鳳院を出る前と変わらない。

そこで紫ちゃんは、僕の後ろにいる蝕織を発見した。

「そいつが夕介の妹か？」

僕が肯定すると、蝕織が紫ちゃんに近づぐ。

「初めまして、紫ちゃん。緋色美織です」

「うむ、私は九鳳院紫だ。初めまして！」

微笑ましい雰囲気を開にし、二人は互いに自己紹介を終える。

だが、その雰囲気が消えても、紫ちゃんは美織をじっと凝視したままだった。

「？　どうかしましたか？」

「あ、大したことではないのだ。ただ、本当に兄妹なのだなと思っ
て」

「え？」

「美織は夕介そっくりだな。夕介と同じで、優しそうな眼だ」

美織はきよとんとした表情になる。

紫ちゃんの聡明さは、初対面の人間にとっては驚くことが多いのだ
ろう。

数瞬のフリーズの後、蝕織はしゃがみこんで、紫ちゃんと同じ位置
に立つ。

「　　か」

「？」

蝕織以外の僕を含む三人が疑問符を浮かべる。

その原因となった蝕織は　　。

「可愛いーーーーっ！」

「わっ!?!」

紫ちゃんに抱き付き、頬擦りをし出す。ああ、スイッチが入ったっぼいな。

「もうもっつ、可愛過ぎです! 女王クイーンと同じステージに立つ子がいるなんてっ!」

「わわっ! 美織、は、放してくれ! 苦しい苦しい!」

「み、美織ちゃん! とりあえず紫放して!」

周囲の奇異の眼差しをもともせず、蝕織は紫ちゃんに一方的な抱擁をし続ける。

たまに、こいつと同じ血が流れている事に対し、一抹の虚しさを感じるよ。

ただでさえ流血の繋がりにおいても、零崎双識という名の変態がいるのに。

溜め息について、僕も真九郎君と共に、蝕織を引き剥がしにかかった。

「すみません……。ついつい取り乱してしまいました。
ごめんなさい、紫ちゃん」

「全くだ。僕はともかくとして、知らない人間は驚くだろうが。ごめんね紫ちゃん。僕からも謝るよ、だから許してやって」

「ううん、気にするな。ちょっとびっくりしたが、抱き付くというのは、その相手が好きということなのだろう？ 美織は別に悪いことをしたわけではあるまい」

商店街を四人で歩きながら、紫ちゃんは真九郎が買ってあげたタコヤキを頬張った。

が、予想以上に辛かったらしく、途端に顔をしかめる。

激辛なぞ頼むからだ。

蝕織といい、自分の身の丈を越える食べ物を食べてはいけません。

「俺のと交換するか？」

真九郎君が自分の甘口仕様のタコヤキを差し出す。

紫ちゃんは辛さに耐えているのか、口を開かずにただ頷く。

缶ジュースで辛さを相殺した後、紫ちゃんはタコヤキを口に入れた。

「おお！」と声を漏らしたのを見ると、気に入ったらしい。

「真九郎君、激辛の方プリーズ」

「でもこれ、俺でもかなり辛いよ。それに夕介君って、どっちかと言えば甘党じゃなかった？」

「甘いのが好きってだけで、辛いのが嫌いなわけじゃないよ」

「兄のように、ご飯抜きキムチ丼（もはやただのキムチ盛り合わせ）を食べるような真似はさすがにしないが。」

それこそ身の丈に合っていない。

「良いものだな、帰り道の買い食いというのは……。なぜ学校が禁止するのか、わからん」

「んー。小さい内は、お金の無駄遣いをしやすいから、ですかねえ」

「じゃあ美織。今日、先生から言われたのだが、暗くなったら外には出るな。というのは何故だ？」

「夜に子供が出歩いていると、悪い奴が、酷いことをしようとするからだよ」

真九郎君が一般的な見解を口にする。

紫ちゃんは、怪訝そうに彼の顔を見上げた。

「それは、何か、変ではないか？」

「変？」

「だって、悪い奴らのために、私達の自由が制限されているのだから？ 悪い奴らは自由にやっつてるのに、私達はそれに遠慮しなければならんとは、何か変だぞ。それではまるで、この世界は悪の方が強

「いみたいだ」

ふむ、久々に紫ちゃんのフリの難しい質問だな。

悪の方が強い……か。

恐らく、そうなのだろう。

表でぬくぬくしている人間に、裏の熾烈を極めた世界で生き抜いてきた人間の差は、サハラ砂漠よりも広い。

「紫ちゃん、悪い奴等だって、自由はそんなに無いよ。自由を手に入れられるか否か、それはその人間が決めることなのだよ」

我ながら、曖昧かつ不安定な答えだ。

しかし善悪とか、自由のある無しは、昔から人間の中で問われてきたこと。

こんな数秒のトークタイムで結論が出るなら、『自分探しの旅』なんて言葉は生まれなかつただろうに。

「紫。それは誰にも答えがわからない問題なんだよ」

「？ 答えがわからない？」

「夕介君の話みたく、人間一人一人で、答えが違っちゃってことさ。

ほら、口のところが汚れてるぞ」

口のまわりをティッシュで拭いてもらい、「ありがとう」と笑顔を

浮かべる紫ちゃん。

「こつこつ子が少ないから、世の中が荒むのかね。」

「そう言えば紫ちゃんはあれから九鳳院の家にいるんだよね。何か困った事とかある?」

「……ある」

おや意外。

別に以前のような待遇ではないと思っていたが。

見ると、真九郎君は少しだけ顔を強ばらせている。

もし紫ちゃんが不当な扱いを受けていようものなら、そのまま九鳳院の屋敷に乗り込みそうな勢い。

その様子に気付かずに、紫ちゃんはぼつぼつと語る。

「屋敷は快適だ。使用人たちは、みんな優しい。でも一つだけ、困ったことがある」

「何がさ?」

「みんなが、いてくれない」

「……………?」

「あそこには、みんながいてくれない。環も、闇絵も、夕介も、それに」

つい、と紫ちゃんは真九郎を見上げる。

「真九郎がいてくれないのが、一番困る。

真九郎が側にいてくれない。わたしが困っているのは、それだけだ」

(うわっ……)

必殺発言。

真九郎君は元より、蝕織も言葉を失っている。

でもな、蝕織。

この純粹さこそが、紫ちゃんの紫ちゃんたる所以なんだよ。

「でもそれは、仕方のないことだからな……。こうして真九郎が、夕介と一緒に迎えに来てくれるだけでも、わたしは嬉しい。こうして会えるだけでも、わたしは満足だ」

真九郎君の手を握りながら紫ちゃんは、僕があっても言えないような台詞を淡々と saying のける。

「もちろん美織だって、迎えに来てくれて感謝しているぞ。これからもまた、迎えに来てくれると嬉しい」

「……あ、はい。いつだって、来ちゃいますよ」

途切れ途切れに、美織がそう答える。

仲良く手を繋ぐ二人の後ろで、美織は僕にしか聞こえないくらい小さな声で呟く。

「すごくいい子ですね、紫ちゃん。お兄様が気に入るの、わかります」

「だろう？ 何より、真九郎君を支える子だしな」

「確かに、真九郎さんみたいな人には、ああいう子かも知れませんか 必要な人、ですか」

「？ 何か言ったか、蝕織」

「いいえ、別に」と、蝕織は何かを含んだような笑みを向けるだけだった。

「お帰りなさい。お嬢様」

「うむ、待たせたな」

みんなで話しながら、駅前まで辿り着くと、黒塗りの高級車がいつもの位置に止まっていた。

その側に立つ、左目に眼帯をした、がっしりした体格の初老の男性が、ゆったりと紫ちゃんに対応する。

「ちょっと寄り道してました。遅れてすいません」

真九郎君が頭を下げると、男性は渋味のある声で答える。

「いえ、自分、これが仕事ですから」

「こんにちは、騎場さん」

「はい。　　おや、そちらの方は？」

「警戒しなくても構いませんよ。僕の妹なんで」

警戒を怠らないのは流石だな。

この人は騎場大作さん。

九鳳院近衛隊幹部。紫ちゃんの護衛さん。

見た目は完璧にヤクザだが、中身は僕なんかよりよっぽど人間の出てくる御仁。

僕が零崎と知っていないながらも、普通に接してくれている。一度それに関して聞いてみたら「お嬢様がお側にいるのを許している以上、心配など御座いませんよ」とのこと。

色々と学ぶべきところの多そうな人なのだ。

車のドアが開き、紫ちゃんが乗り込めば、今日はお別れだ。

「じゃあな、紫」

「みんなも乗れ」

「えっ？」

三人分の疑問符。

「五月雨荘まで送ってやる。乗れ」

「いや、俺達は電車で……」

「そうです。そんなのそちらに悪いですよ」

蝕織も気が引けるらしい。

しかし、紫ちゃんはお構い無し。

「騎場！ 途中で五月雨荘に寄り、みんなを降ろす。よいな？」

騎場さんが恭しく黙礼。

うーん、プロだこの人。

真九郎君が乗り込み、蝕織が気後れしながら、後ろに座る。

「ほら、夕介も早く乗るのだ」

「えっと、ごめん。紫ちゃん。僕さ、この後用事があったぞ」

「用事？」

「うん、だから行けないんだ。真九郎君、今日は確か崩月の家に行くんだよね？」

「うん。夕乃さんと約束しててさ」

紫ちゃんが一瞬顔を曇らせたが、とりあえずここは何も言わないでおく。

「じゃあ、そこで落ち合おう。蝕織も、そこで待たせてもらえ」

「はい、わかりました。お兄様」

ひゅんと、蝕織は僕に何かを投げつける。

分かりづらいが、バタフライナイフのようだ。

「お気をつけて」

「……ああ、じゃあ、ここで紫ちゃんとはお別れか。そいじゃまたね」

「うむ、またな！」

紫ちゃんの言葉を最後に、車の扉は閉じ、帰宅ラッシュの車道へと消えていった。

「さて、と」

車の後ろ姿を見送って、手にしたバタフライナイフを見る。

「アイツにはバレバレか。ま、しょーがないけど」

そう、哀川さんの仕事があるのである。

幸いにもこの近所だが、武器無しで、楽器なしの音と曲弦系ではキツイ仕事。

殺さない制約が無ければ 楽勝なのだけれど。

パチンと音を立てて、バタフライナイフの刀身を開く。

日差しに反射して輝く銀色の刃。

手入れはしてあるのだろうが、所詮バタフライナイフはバタフライナイフ。

大して尖らないし、殺さない戦いをするには十分。

「 っと、こんなこと考えちゃ、崩子ちゃんに怒られるな」

あの子、バタフライナイフ好きだし。

もう一度、乾いた音を鳴らしながらナイフをしまった。

「んじゃま、いっちょう気合いを入れて」

間奏曲を奏でますか。

で、一時間後。

「あー、ダルい」

血にまみれたナイフを、ハンカチで磨きながら、僕は倦怠感を丸出しにする。

殺しこそしなかったものの、相手を無傷で殺すなんて器用な真似は出来ず、ナイフも真っ赤。

蝕織には洗って返さないと、このままだと錆びちまうし。

「でも、思ったより楽でよかった。あとは崩月の家に行くだけだ」

そう言いながら路地を出て、人通りの多い商店街に出る。

帰宅途中のサラリーマン。買い物中のお母さん連中。ガチャガチャを回す小学生。

活気に溢れるのはいいことなのだが、僕にはいささか耳障り。

「……………不静」
しずかでない

いや、どこの右衛門左衛門だよ。

意味不明な自分ツツコミを入れながら、僕は商店街を潜り抜けていく。

人一倍耳がいい僕としては、雑踏さえにも煩わしさを感じてしまう。

早くここから出たい一心からか、足を早く動かす。

だから、横路から出てきた人影にも気付けなかった。

どん。

「うわっ！」

完全に注意を怠っていた僕は、横路から出てきた人と衝突してしまった。

「い、ごめん！ 大丈夫？」

「……………」

人影は無言で立ち上がり、パンパンと体の埃を払う。

ぶつかった相手は、十代前半らしき少女。

スタジャンにホットパンツ。

マフラーで口元を覆い、髪には黒いリボン。

服の背中にはドクロマークと、『FUCK OFF!』という喧嘩を売っていると思えない文字。

「……えっと、ケガとかしてない？」

「どんとうおーりい」

「……？」

ああ、Don't worryか。

滅茶苦茶棒読みな英語だな……。

普通に『心配しないで』でいいだろうに。

あ、もしかして外人か？ 髪は茶髪っぽいが。

「……あなたこそ、大丈夫でしたか？」

違っただけだった。

ナチュラルに話せるなら、不馴れな英語など使わないで頂きたい。

一瞬どこの国の言葉かと思っちゃったよ。

「うん、大丈夫。本当ごめんね。周りよく見てなくて」

「……周りは、見ないと駄目です。車とかに跳ねられてしまいます」

「……はあ」

要領を得ない会話だ。

なんとというかこの子、浮世離れした印象を受ける。

関わるのは、あまりよくないかも知れない。

「ケガとかしてないなら、僕はこれで」

「……あ、ちょっと待ってください」

立ち去りかけた僕を、女の子が呼び止める。

「……すみませんが、道をお尋ねしてもよろしいでしょうか」

「道？」

何だ、迷子か？

（関わりたくないのになあ）

しかしこの場合、僕に非があるのもまた事実。

いくら殺人鬼とはいえ、倫理観だけは保持したい。

「いいよ。どこに行きたいの？」

「……はい。ここです」

差し出されたのは、一枚のメモ用紙。

雑な字で、近場にある高級バーまでの道のりが書かれている。

「……あの、キミ。未成年だよな」

「……はい」

「バーっていうのはちょっとダメなんじゃない？」

「……ですが、そこで待ち合わせなんです」

妙に頑なな態度だった。

バーねえ……。待ち合わせと言うのは、親兄弟とだろうか。

だとしたら、何て冒険させやがる。

最悪摘まみ出されるぞ。

「わかった。そこまで送るよ」

「……いえ、そこまでしなくても構いません。道を教えてくれれば、大体わかりますから」

「でもこの先、結構入り組んでるから、迷い安いよ。ぶつかっちゃったのはこっちだから、道を教えるだけってのはね」

個人的には、こんな子供に無茶振りをさせた待ち合わせ相手に、文句を言いたいというのもあるけれど。

「……じゃあ、お願いしてもいいでしょうか？」

「もちろん」

「……ありがとうございます」

小さな手で、その子は僕を指差す。

「ゆーあーないすがい」

「Thank you」

ツッコミを入れるな。この子なりに感謝してるんだ。

「じゃあ、行こうか。えっと……キミ名前は？」

「……まいねーむいずキリシマキリト」

「えっ……？」

【斬島】、切彦？

「……くしゅんっ」

「風邪？」

「……いいえ、寒いのが、苦手なんです。暑いのも嫌ですし、花粉症とかにも弱くって。」

……地球はわたしの敵です」

「じゃあせめて、ホットパンツは止めた方がいいんじゃない？」

「……この格好、気に入ってるんです」

「……左様ですか」

まあ、こだわりってのは誰にでもあるからな。

双兄は背広、軋兄は牧歌スタイル、曲兄は燕尾服みたいに。

「……夕介さんは、この辺りに住んでるんですか？」

「ん？ ああ、そうだよ。切彦ちゃんは違うよね。何処から来たの？」

「……切彦、ちゃん？」

「あ、嫌だった？ ごめんね。年下か同年代の女の子には、大抵ち

「やん付けだからさ」

「……………いえ」

切彦ちゃんは意外そうに、顔を僕の方に向ける。

「……………それで、構いません」

(……………うーん)

見た目だけ見るなら、普通の女の子なんだが。

僅かな笑みに対し、曖昧な笑顔を作りながら、

腹の中で僕はまるで違う心境だった。

キリシマって、やっぱり【斬島】だよなあ……………。裏十三家の。

しかも【切彦】を名乗っている。

だとすれば。

(……………面倒なことになりそうだ)

裏十三家の一角、【斬島】。

今尚血筋が断絶していない家系であり、僕が真九郎君と出会う前、
唯一面識のあった裏十三家だ。

その時は仕事関連での共同戦線だったのだが、戦闘技術は群を抜い

ていたのを覚えている。

そして、一番奇抜だったのが、斬島の【特異体質】。

真九郎君の【崩月の角】と同様に、斬島にも特質した能力がある。

もし、もしこの切彦ちゃんが、本当に斬島の人間であるならば、ポケットに手を入れ、バタフライナイフがあるのを確かめようとして やめる。

駄目だ。刃物など、こと斬島の前には置いては無意味に等しい。

まだ曲弦系や音の方が使える。

(とにかく、この子に刃物は持たせちゃいけないな)

持たせた瞬間、惨劇の幕が上がる。

一応の警戒心は残しつつ、目的地に着くまでの間、隣に着いてくる切彦ちゃんと雑談することにした。

切彦ちゃんはわけあって、つい最近まで海外にいたらしく、まだ帰国したばかり。

知り合いに呼ばれてここまで来たものの、複雑な地形に迷ってしまい、ふらふらしているところに僕がぶつかってきたのだそうだ。

「海外か。女の子一人で大変だね」

「……でも、結構楽しかったです。私、英語は得意なので、不自由

もなかつたです」

「……………」

そんな片言の英語が通じる世の中なら、翻訳者という職業は成立しない。

この話題に関しては、掘り下げれば掘り下げるほど、ツッコミ所が増える気がするため、話の矛先を反らすことにする。

「そう言えば、待ち合わせとか話してたけど、親御さんが誰か？」

「……………いいえ。仕事の上司にあたる人です」

「仕事？」

「……………はい。帰国の報告と、次の仕事の打ち合わせがあるんです。だから、遅れると少し困ります」

「ふーん」

仕事、ねえ。

【斬島】で【切彦】を名乗る時点で、職業は決まっているようなものだが、ここは黙っておく。

できれば、斬島は敵に回したくない。

「……………」と、ここだな

張りつめた警戒心のせいで、通りすぎてしまつところだった。

電飾の付けられた店の看板。

その近くには、地下へと続く階段。

本来ならここで帰っても構わなかったのだが、ここまで来ておいて帰るといふのも決まりが悪い。

結局僕は、切彦ちゃんが何も嫌がる素振りを見せないのを確認した後、彼女を連れて、下に降り、木造のドアを開ける。

軋んだ音を立てた扉の先は、バー特有のしんみりさと、地下という立地条件特有の如何わしさが綿密に絡み合っていた。

それなりに広いスペースが確保されており、ブルーライトで照らされた店内は幻想的ですからある。

……少々、客と思わしき人間が、ヤクザ系の匂いを漂わせているのがマイナスポイントだが。

(やっぱりバーはクラッシュクラシックみたいなのがいいよなあ)

その辺りの曲兄のセンスは、かなり評価できる。

「 お客様、こちらは未成年の方の出入りは禁じられています 」

入り口近くにいた従業員の人が、テンプレートな対応をしてくる。

「すみません。この子が待ち合わせをしているらしくて」

「待ち合わせ？ 失礼ですが、その方のお名前は？」

「えっと……」

後ろにいる切彦ちゃんに、目で問いかける。

僕の意図を正確に理解し、切彦ちゃんは答える。

思考停止。

今、この子は誰と言った？

「失礼しました。絶奈様のお知り合いでしたか。今、確認致して参ります」

従業員はカウンターまで小走りで歩き、席に座る一人の女性に何言か呟く。

しばらくして、くると椅子を回し、こちらを振り向いた女性の目が、驚きに見開かれた。

「ありゃ？ 夕識くん？」

「……どうも、絶奈さん」

そこには誰である。悪宇商会最高顧問、修理したらしい義手を煌めかせ、星嚙絶奈さんが鎮座していた。

「キミも、ついてないわね」

酒を煽りながら、絶奈さんはニヤリと笑う。

「……ええ。実に戯言にして傑作ですよ」

本ツ当についてないよ。

「……夕介さんは、絶奈さんと知り合いだったんですね」

「うん。物凄く面倒な経緯があつて」

「む。何やら含みのある言い方ね。キスまでした相手をそんな邪険に扱うなんて、夕識くんも冷たいわ」

「このタイミングでその話を蒸し返すんじゃないわねえ！」

よじやく僕も忘れてきたところだったのに！

「……きすっ」

絶奈さんのオーダーで出された料理を食べる手を一旦止め、切彦ちゃんに僕をいぶかし気に見てくる。

「……夕介さんと絶奈さんは恋仲なんですか？」

「違う。僕の全存在を賭けて否定する」

「うわー、そこまで否定されちゃうとお姉さん悲しいなー」

「あんたは頼むから黙っててくれ」

「夕識くんの鬼畜」とかいう声も聞こえたがこれはシカト。

「……あの、絶奈さん。何故夕介さんをユウシキくんと呼ぶんですか？」

「ん？ 何でって、そりゃあ……」

絶奈さんが目で問いかけてくる。

零崎を名乗っていないのか、と。

僕が無言で頷くと、絶奈さんは「あー」とわざとらしく声を上げる。

「違う違う。夕識っていうのはわたしが勝手に呼んでるあだ名よ」

「……そうなんですか？」

「そうなのだ」

かなり継ぎ接ぎの嘘だったが、他に取る手段が無かったので、僕もそれにのる。

幸いにも、切彦ちゃんは少し首を傾げただけで、それ以上言及してこなかった。

「……そうだ、絶奈さん。仕事は滞りありませんでした」

「ご苦労様、さすがね。切彦くんは」

「……いいえ、『斬る』のは得意ですから」

「『斬る』って……。やっぱり切彦ちゃん、殺し屋なんだ」

無言で肯定する切彦ちゃん。

「あら、知ってたんだ。切彦ちゃんの素性」

「はい。斬島とは前に、仕事の都合で協力をしましたから。【切彦】の名前だって、【暴力の世界】じゃ有名でしょう」

【斬島】の家系では、殺し屋家業を継いだ者が、代々【切彦】の名を襲名する。

僕が出会った【切彦】は六十五代目。

かなり歳は食ってたから、僕が知らない間に世代交代したんだろう。

だから、切彦ちゃんは六十六代目。

「斬島も凄い家だったよなあ……。」

あ、切彦ちゃん。

雪姫ちゃんってコ知ってる？」

「……ええ、知ってます」

斬島に僕が関わっていたのに驚いたらしく、無表情に若干の戸惑いが浮かぶ。

「あれつきり会ってないけど、雪姫ちゃん元気かな？」

「……はい。わたしも近頃は会っていませんけれど、あの子はいつも元気ですから」

「そっか。そりゃ何よりだ」

斬島にあまりいい思い出は無いが、雪姫ちゃんと話すのは楽しかった。

殺し屋の名を継いでいなかったのに加え、歳の割に、アニメや漫画に通じていたのが一番の理由だろう。

「あ、すみません、絶奈さん。話の主旨脱線しちゃって。僕に構わず仕事の打ち合わせして下さい」

「わたしを空気扱いしておいての言い草……」

絶奈さんは柄にもなく少しいじけたらしかった。

「はあ、まあいいわ。夕介くん、一応言っておくけど、これから話す内容はオフレコで頼むわよ」

「ええ、お口にホッチキスですね」

てか、頼まれたって他言するものですか。

哀川さん曰く、『ある意味イーたん以上のトラブルメーカー』であるところの僕が、そんなヤバイ系の仕事に、わざわざ深入りなどしたくない。

それでも、なんやかんやで深入りしちゃうのが僕の悲しいサガなのだが。

「仕事内容は単純よ。ある人間の殺人依頼。ターゲットはこの子」

絶奈さんが写真を切彦ちゃんに渡し、後ろから僕もそれを覗き込む。

写っているのは十代後半の少女。

写真の下にはペン書きで『志具原理津』と名前が書いてあった。

「……この人を、斬ればいいんですか？」

「そうよ、今回はフランクのヤツと一緒に仕事だからあしからず。何か質問は？」

「……あの、絶奈さん。わたしが行く意味はあるんでしょうか？
一人くらいの暗殺なら、フランクだけでも十分な気がします」

「うん、妥当な質問ね」

言いながら、酒をボトルごと飲み干す絶奈さん。

酒豪だな、未成年のくせして。

「最初はね、この仕事フランクだけでやる予定だったの。けど面倒な連中に嗅ぎ付けられちゃってねー。フランクだけじゃ荷が重くなっちゃったのよ。だから切彦さんに助っ人を頼んだわけ」

「……面倒な連中、ですか？」

「ええ、九鳳院の近衛隊よ」

近衛隊？

「何で九鳳院が出てくるんですか？」

つい疑問を口に出す。

部外者である僕だが、絶奈さんはさほど気にした様子もなく、それに答える。

「この志具原って子。どうも九鳳院の遠縁だったらしくてねー。本家の方も、無下には扱えないでしょう」

はあ、あの蓮杖がねえ……。

当主の立場上、周囲の体裁は守らなければならぬと思っての行動だろうが、それでも驚きの念は禁じえなかった。

正直、あの爺さんにそこまでの配慮が出来るとは思わなかったし。

「とにかく、決行日は追々連絡するから。フランクとも打ち合わせできるように手配しとくわ」

「……フランクに、打ち合わせなんて出来るんですか？」

「……あー、そこは気合いでどうにかして」

切彦ちゃんは小さくため息をつく。

どうやらそのフランクとかいう同僚は、話を通じる人間ではないらしい。

ましてや、絶奈さんの杜撰な管理体制もあれば、尚更か。

諦めたように食事に戻る切彦ちゃんに同情しつつ、カウンターに置かれた写真をつまみ上げるように見る。

「志具原理津、か。普通の人ですよね」

「ええ、経歴は洗ってないけど、多分一般人よ」

「いいんですか？ 目標のパーソナルデータ調べなくて」

仕事する上では、かなりのウェイトを締める要素だと思うが。

「んー。ただの調査依頼ならやるんだけどね。今回は目標の始末だからさ。そんなのは関係ないのよ。」

ただ依頼だから殺す。

夕識くんだって、そうじゃないの?」

「頼まれて殺すのは【勾宮】ですよ」

「かもね。でも、なんの理由も挟まないのなら、それはあなた達と同じじゃないの?」

「
ああ」

そうかもしれないな。

零崎は理由なく殺す。

だから殺人鬼。

絶奈さん達、悪宇商会は何も悪の秘密結社というわけじゃない。

ただ頼まれたことをするだけ。

善行もするし、悪行だってする。

そこに私情はなく、依頼人の意思のみが存在する。

ならばそれは、理由なく殺すことなのではと、絶奈さんは言いたいのだろう。

成る程、一理ある。

でも。

「 絶奈さん」

僕は自虐的に笑う。

「【理由無く殺す】ってというのはね。 案外難しいんですよ」

理由をつけて殺す殺人鬼である僕が、言えた義理ではないが。

「人が死ぬ時に、そこには何らかの【悪】が必然である、【悪】に類する存在が必然である。

これは兄の受け売りですけどね。

世の中には【悪】というものの、【悪】に表現しうる存在に満ちているって意味なんです」

「面白いお兄さんね」

「どうも。 で、僕が思うのはですね。 【悪】という存在事態が、既に殺す理由なんだと定義するわけです」

横を見ると、切彦ちゃんはただ黙々とランチタイム。

とことんマイペース。

「頼まれて殺すにしても、特定の他人のために殺すにしても、理由なく殺すにしても、正義のために殺すにしても、みんなのために殺すにしても、綺麗にするために殺すにしても、生きていくべきでない人間を殺すにしても、【殺す】という行為はどう鼻屑目に見ても、

絶対的に【悪】なんですよ。

だから、理由が違えど、人を殺す以上、確実に付きまとう【悪意】こそが、人類共通の【殺す理由】なんです。

【悪意があるから殺す】。

僕にしてみれば、理由なく殺すなんてこと、本当は誰にも出来ないんですよ。

どんな人間にせよね」

僕の殺す理由にしてもそうだ。

大切な人を傷つけようとした人間しか殺さない。

聞こえはいいが、結局それも、突き詰めれば【悪意】の域を出ない。

いー兄に言わせれば、他人のため、誰かのためという免罪符を振りかざしてるだけなのだろう。

所詮は、他人を傷つけられた憤怒を盾に、殺意を撒き散らしているに過ぎないのだ。

カツとなって殺った、という在り来たりの理由となんら変わりない。

「絶奈さんは、どうなんですか？ 殺すって行為は、貴女にとって何ですか？」

「うーん、改めて聞かれると返答に困るわね。極論で言えば仕事の一手間だけ……、そうね。起爆剤って感じかな」

「起爆剤？」

「これは殺しに限ることじゃないけどね。

殺し合いみたいなスリリングな状況は、私にとって脳や感覚を揺さぶるモノなのよ。

あんまりつまらないとダメだけど、骨のある状況なら、ガンガン頭が回るし、身体が動くの」

「要は娯楽みたいなもんですか」

「うん、纏めるとそうなるかな」

「くっくだらねえ！」

突然、乱入してきた声。

それは隣から聞こえてきた。

とすれば、当然笑い声の主は、切彦ちゃん。

だが、外観はまるで別人だった。

三白眼のお手本のような目は好戦的につり上がり、口元はニヤニヤ

と不愉快な笑みに歪められている。

「絶奈が一目置いてるみてえだから、どんな奴かって黙ってみてりやあ、くだらねえ禅問答振りかざす白髪野郎じゃねえか！」

……キャラチェンジにも程があるだろ。

イマジンにでも憑依されたか？

いや、理由はわかってんだけどさ。

うんざりしながら彼女の右手を見る。

そこには店内のブルーライトに照らされた、未だに肉の肉汁で滴るステーキナイフ。

「……一応聞いていてやる。君は、誰だ？」

絶奈さんの「あーあ、切彦くん、スイッチ入っちゃったか」という台詞を聞きつつ、僕は聞く。

「オレは、斬島切彦」

「
そうか」

コップの水を飲み干して、僕は言う。

偽名ではない、自分の名を。

「僕は零崎夕識だ」

バーの無意味な静けさが、さらに深まるのを感じた。

困った時の解説編。

斬島の間人が持つ特異体質。

それは、刃物を持つと性格が変容する。

刃物に限らず、ガラスの破片などの、切り裂く事を連想させるものであれば、何でも構わない。

出夢さんや、理澄ちゃんを思い起こすキャラ立ちだが、こちらは双子ではなく、正真正銘の多重人格者。

先刻話した雪姫ちゃんは、刃物を持つと、天真爛漫な性格から、冷静沈着でクールな性格に変わる。

そして、切彦ちゃんの場合は、ローテンションからハイテンションへのキャラチェンジか。

刃を持ち、それを振るう事に対する精神高揚や快楽。専門用語でブレードハッピーとか言ったかな。

ある意味、殺し屋は天職と言えよう。

斬るという快樂を得るのに、事欠かない職業なのだから。

「……成る程ねえ。カタギの人間じゃねえとは思ってたが、てめえ殺し名だったのか」

嫌みな笑みのまま、切彦ちゃんは言う。

「殺し名三位 【零崎】。ふん、そうか。祖父さんから零崎と組んだ事があるとは聞いてたが、まさかアンタだったとはね。

しかし、噂とは随分違うな」

「信憑性の無い噂ごときで、僕の家族を語らないで貰いたいね。で？ 僕の何が下らないって？」

「あんたのふざけた精神論だよ」

切彦ちゃん是不機嫌そうに呟き、ステーキナイフを弄ぶ。

「ほう。おかしいな、双兄にも同意を得た概念なんだけどね」

「そいつがズレてただけだ」

むかつ。

「そもそもアンタ、根本的なこと間違ってたんだよ。

いいか、人を殺す上で理由なんてのはな、どーだっていいんだ」

「どーだっていい？」

「少なくとも俺は興味ないし、関係もねえ」

そう言っつて欠伸までしゃがった。

人と会話をする上で、間違いなく最低ランクに位置する態度だ。

「殺す理由なんて考える意味なんてねーんだよ。

殺すから殺すんだ。

アンタ、【悪意】が理由だとか言っつてたけど、そんな考え、脳のキヤパシテイの無駄遣いだ。

そんなもん気にしたつて、結局人は死ぬときにゃ死ぬんだ。

だったら、考える意味だつてあるわけない」

「……………あ」

そうかそうか。

この裏切彦ちゃん。ただ殺せりゃいいんです、とか考えてるクチか。

うんうん、成る程成る程。

「一番キライなタイプだな」

「あ？」

「うん。だからキミみたいに、節操や区別の付かない人間は大嫌い
つて言っつてるの」

多分僕は今、切彦ちゃんに満面の笑みを向けていることだろう。

顔と心情が噛み合わないほど、切彦ちゃんの理念には共感しかねた。

「……はッ。話にならねえな」

明らかに苛々している。

嘲りは消えず、むしろその感情は増したらしい。

「殺し名の中で最も忌避される存在とか言われて、蓋を開けりゃあ、こんな甘ちゃんかよ。」

これじゃ、他の奴もたかが知れてるな」

ブチッ。

ガタリ、と席を立ち上がる。

落ち着きなど欠片もなく、代わりに身体を突き動かすのは、憤怒。

反面、脳から送られてくる電気信号は、冷静に一つの指令を下し続ける。

少々、世の中の荒波を教えてやるっ。

「……言うね。殺人鬼にも成りきれない、駆け出しの殺し屋が」
不快感を剥き出しにして、相手に焦点を合わせる。

「んじゃ、試してみる？ その甘ちゃんをキミの刃で殺せるか」

「ふん、面白ええ！」

僕と同じく切彦ちゃんも立ち上がる。

「来いよ。きつちりバラバラにしてやるぜ」

「ああ。ただしその頃、キミは八つ裂きになってるだろうけどね」
と、どこかで聞いたようなセリフを言ってみたり。

「やれやれ、血の気の多いこと多いこと」

「あれ？ 絶奈さんローテンションですね」

「……うん、頭がガンガン鳴って……。正直座ってるのもツライ」
当たり前だ。

さっきまで絶奈さんが飲んだ酒は純度90%。

身体が義肢だらけの絶奈さんだからこそ飲めるものであり、元来人が摂取するものじゃない。

「ここ悪宇商会の経営店だから、暴れても大丈夫よ……。ただ、あんまり大きな音は出さないでね……」

……絶奈さん。

僕の戦い方の都合上、それはフェルマーの最終定理クラスの無理難題です。

「努力します」とだけ答え、切彦ちゃんに向き直る。

ナイフを構えるその姿から発される威圧感は、蝕織の漆黒残響と比べれば微々たるものだが、斬島の間人が刃物を使えば、それらは全て断頭台キロチンに相当する。

バタフライナイフを使うなど論外。かといって丸腰でやるのは自殺行為。

「ねえ、あれ借りるよ」

カウンターの従業員にそう断り、店内奥のステージに向かう。

そこにはピアノ、ドラムベース、クラリネット、多種多様な楽器があった。

店の催しとして、ミュージシャンを呼ぶ際につかう場所だろう。

その中から、重量感のある木管楽器を選び出す。

コントラファゴットである。

ストラップに首を通し、一音二音軽く吹く。

音はズレていない。チューニングは成されているようだ。

準備完了。

「待たせたね、斬島切彦」

切彦ちゃん、とは呼ばない。

眼前にあるは、ただの敵。

「けっ、お前音使いかよ？ そんなもん、そうだとわかつちまえば、手の内は知れたようなもんだぜ？」

「知った風な口を聞くな。音楽は素晴らしい力だ、キミ程度が語ってはならないほどに」
ね

そう吹き、ボーカルに差し込まれたリードに口を持っていく。

「まあいいさ、てめえを殺して仕舞いなのは変わらねえよ」

「ああ、来い。斬島。

それでは一曲。

零崎を奏でよう」

演奏開始。

苛々はしていた。それは認めよう。

だがそれとは裏腹に、僕は冷静な判断力を持ち続けることが出来た。

「そらっ、よ！」

斬島切彦が空中で器用にナイフを振るう。

その動きは、達人というにはあまりに拙い。

素人同然の動き。

斬島は基本的に、剣術が得意ではない。

ただ【刃物を使うのが上手いだけ】なのだ。

【斬る】という一点にのみ、特化した戦闘技能と言ってもいい。

事実、彼女が刃物を這わせる度に、辺りの物が次々二つに分かれていく。

グラス、椅子、テーブル、食器、飾りで置かれたブロンズ像。

周りの客が、戦闘開始と同時に逃げ出したのはせめてもの幸いか（ちなみに、従業員の人は逃げてない。見上げたプロ精神だ）。

「はははっ！ どうしたよ、零崎！ 身体捻ってるだけじゃ勝てねえぜ！」

「知ってるさ」

【逃げ】を得意とする人間を師匠にもってるからな。

確かに、彼女の刃物の扱いはすさまじい。

人兄と同等、あるいはそれ以上。

しかし避けせないほどじゃあない。

技術は凄いが、身体能力は僕の方が上なのだ。

ならばなぜ、僕がファゴットを持つ手を動かさないか。

その答えは単純明快。

あまりに、つまらない勝負だからだ。

「……もういいや、キミはやっぱりこの程度」

「ああ？」

攻撃の押収を繰り返しながら、言葉を交わす。

「まあ単純に、相性の問題なんだろうけどね。だがそれにしたって、出来損ないの殺人鬼に負けるようじゃ、君は井の中の蛙だ」

「てめえ、ついに頭イカれたかよ？ 今は頑張って避けてるみてえだが、そうそう見切り続けられるもんじゃないぜ！」

ひゅんつ、と、ナイフが空を斬り、僕の頬から鮮血が溢れる。

「分かってないなあ。もう見切るまでもないよ」

もはやこれ以上は時間の無駄だろうと判断し、僕はよつやくといった動きで、ファゴットのリードをくわえる。

「作曲 零崎曲識」

刃が近づく。

だが、惜しいな。僕の方が早い。

「作品NO・6 『滑り台』」

ファゴットの重厚な音。

それは地下の閉鎖空間によって増長され、周囲を音が満たす。

「がっ………！？」

斬島の刃が、僕の首元数センチのところまで止まる。

いや、刃だけではない。

斬島の身体本体も、ゲームで言うなら、ポーズボタンを押したかのようになっている。

「うつ、ぐ……あ、て、てめえっ！ な、にしやがつ、た！」

「まだ喋れるのか、悪くない」

演奏を終え、ファゴットを口元から放す。

「精神操作をされている身で、それだけ話せるなら上出来だよ」

「せ……精神操作だと……！？ こ、こんな、一瞬で……！？」

「そう。幾らか前言は撤回させてもらっよ、斬島切彦。

刃物の技術もさることながら、精神操作に僅かでも抗える精神。僕なんかよりも、よっぽど見込みがある。

ただ、経験が足りないけどね」

「ふ、ふざけんなよ……っ！ こんな縛り、すぐに解いて……っ！」

「無理するなよ。飛行機のタービンを手動で回すようなもんだよ？」

そう言いながら、ファゴットを手入れする。

借り物である以上、返す時には万全の状態でなくては。

「なん、でだっ……！ こんな短時間で、身体を……不随にするだけの精神……操作なんて、出来る、はず、ねえっ！」

「短時間じゃあない。君に会った時から、ずっと操作してたよ」

「会った、時だと……？ あっ！」

「気付いたか。その通り。会話をする中、声で君をくくったのさ」
通りからこのバーまで、時間は十分過ぎるほどあった。

「僕は臆病なヤツでね。初対面の人間には大抵、言葉での操作をかけている。
ましてや、君は斬島を名乗っていたからね。早めに手を打って正解だったよ」

「戦う前から……っ、仕込んでたつての……!?」

「イグザクトリイ。」

僕のような凡人は、君みたいな生まれながらの天才に比べると圧倒的にスペックが劣るからね。
だからまともに競争したら負けちゃうんだ。
でも勝てないわけじゃない。

なら、相手がギアを上げ切る前に倒せばいい。

先手必勝、実に素晴らしい言葉だと思わないかい？」

そうこうしている内に、手入れを終え、ファゴットを壇上に戻した。
本来音使いの種明かしは危険だが、多分この子は言いふらしはしない。
い。

そうするくらいなら、自分でリベンジを目論むだろう。

それは、歯ぎしりする様子からも伺える。

……ただ、相性の関係上、僕が負けることはないだろうが。

「じゃ、そーゆーことで。僕はそろそろ帰らせてもらっつよ。人を待たせてるんでね。」

操作は30分も有れば解けるから」

硬直している彼にそう言っつて、カウンターに座る絶奈さんにも別れを言っつ。

しかし、聞こえてきたのは呻き声。

「うゝ、夕識くんのバカゝ。大きな音鳴らさないでっつていったのにゝゝゝ」

「努力するとしか言っつてませんよ。僕は」

頭を抱えて身悶えする、憐れな絶奈さんに、無慈悲な宣告をする。

「むゝゝ、夕識くんの言葉に労りがまるで感じられない……」

「労っつてませんからね」

「ひどっつ！ もう少し誠意を持っつて詫びろ！」

急に大声を出したせいか、再び絶奈さんが机に突っ伏す。

「……やれやれ」

本当に気分の人だな。

悪宇商会の人選に不信感を覚えつつ、僕は絶奈さんのポケットをあさって、ケータイを引っ張り出し、そこに自分の番号を入れた。

カウンターにそれを置き、絶奈さんに言う。

「僕の情報を流さない。僕のキラいな依頼は出さない。この条件を呑めるなら、一回だけ、貴女方の仕事を手伝ってあげます。中々ありませんよ。僕が他人に携帯の番号教えるのって」

「……いいの？ 思いつきり私得しちゃったけど」

「誠意を持って詫びろって言ったの貴女でしょうが……。別に構いませんよ。」

どうせ『狐』が見つかるまではする事ないし」

「え？」

「いえ、何でもありません。」

「じゃあ、僕はおいとまさせて貰います」

絶奈さんに背を向け、そそくさとバーの扉に手を掛けた。

その直後、後ろから未だに途切れ気味の声で、斬島切彦の声が聞こえてきた。

「て、めえ……！絶対殺してやるからな……！ いつか、絶対につ……！」

「……ふむ」

『いつか』と入れたのは妥当な判断だ。

僕との差が明確に分かっている。

相性がある限り、僕に負けは無い。

だからこそ、その相性以外の点なら、僕は確実に、彼女より下なのだ。

だからこそ、僕はこう言った。

この子が、僕のような出来損ないを見続けられないように。

「なら、殺してみなよ。それでも世界は何も動かないから」

突き放すように、僕はバーの扉を閉めた。

そんなこんなで情景移動。

バーから出ると、空は日が沈みかけていた。

冷たい外気に晒されながら、崩月の屋敷に辿り着く頃には、辺りは完全にブラックアウトしていた。さてさて、蝕織が大人しくしてればいいが。

「ごめんくださいーい」

僕が玄関口で、屋敷の奥行きに向かって挨拶すると、居間の扉からひよこつと小さな影がのぞき、軽い足音を鳴らしながら近づいてきた。

「……いらっしやいませ。夕介お兄ちゃん」

出てきたのは夕乃さんの妹、散鶴ちゃん。

「おいつす、ちーちゃん。冥理さんは留守？」

「お母さんは、お買い物」

「そっか。夕乃さんは？」

靴を脱ぎつつ、散鶴ちゃんに質問。

「お姉ちゃんは、お兄ちゃんと道場にいるよ。……あと、知らないお姉ちゃんも一緒に」

「そいつ、僕の妹なんだよ」

「うん、さっき教えてくれた……。いきなり抱きしめられて、びっくりしちゃった」

ここでもか。

あの可愛いもの好き、兄としていつかは直すべきだろう。

下手すれば双兄二号が誕生する。

廊下を歩く僕の足音に続き、ちーちゃんのとてくてくという軽やかな音がする。

ここは広い屋敷だが、こと道場を探すのに関しては困らない。

一段と激しい音のする部屋、そこが道場だ。

「こんにちは、夕乃さーん。夕介で……ゴフッ！」

道場の扉を開けた時、僕の視界を暗い影が支配した。

完全に油断していた僕は、必然的にその影に押し潰され、受け身も取れぬまま床に叩きつけられた。

後ろにちーちゃんがいなかったのが幸いか。

（てか、前にも似たようなことがあった気が……）

あの時との差異は、倒れてきた相手が真九郎君ではなく、蝕織だったことだけである。

「うー、やられちゃいました……」

蝕織は僕に気付いていないのか、よろよとした仕草で上半身を起こした。

と、道場の扉から、若干披露の色を濃くした夕乃さんが出てくる。

「いえいえ、中々筋がいいですよ。わたしも少し危なかったですから」

「……にはは、今ので『少し』ですか。敵いませんねえ」

年相応の笑みを交換し合う夕乃さんと蝕織。

だが僕に、それを微笑ましく見ている暇など無かった。

「それはそうと、蝕織さん。先ほどから貴女の下で、夕介君が呼吸混乱に陥りそうなのですが……」

言いつらそうに、夕乃さんが蝕織の視線を僕に向けさせる。

夕乃さんの指摘通り、現在蝕織は、僕の胸部に思いつきり鎮座している状況であり、結果、僕の起動はお世辞にも正常とは言えなかったのだ。

「わ、わわっ！ す、すみませんお兄様！」

慌てながら、蝕織はようやく僕の上から退いた。

「あのさ、お前が道場内から吹き飛んでくる時点で、状況が全く呑み込めないんだが……」

呼吸を整えながら、蝕織に聞く。

「状況も何も、真九郎さんと夕乃さんの稽古を見てたら、私も少し身体を動かしたくなりましたから、夕乃さんと組手をしていただきます」

夕乃さんの方を見ると、肯定の意を込めて頷いていた。

「可愛い妹さんですね、夕介君」

「……はあ、どうも」

あれ？　ここって礼を言う場面か？

「にははは、夕乃さんったら、可愛いだなんて〜」

照れ笑いを浮かべる蝕織。

顔に出やすいな、こいつも。

「夕介くんも来ましたし、お茶にしましょうか。真九郎さん、井戸水で身体を洗ったら、居間に来なさいな」

「……はい」

道場の奥から、真九郎くんの憔悴仕切った声が聞こえてきた。

蝕織と夕乃さんを先に行かせ、がらんどうの道場を覗き込む。

部屋の隅に、真九郎くんが汗だくで寄りかかっていた。
かなり絞られたらしいな。

「まーた夕乃さんの機嫌損ねたでしょ」

「……うん、多分」

真九郎くんの話を聞く限り、多分夕乃さんの怒った原因は、蝕織と紫ちゃんだろう。

ただでさえ犬猿の仲である紫ちゃんに、真九郎くんを送り届けてもらった上、知らない女子を連れだって来れば、ご機嫌斜めにもなるだろう。

夕乃さんは恋愛に置いては、見掛けによらず好戦的だし。

「ツイてないね、君もさ」

「自覚してるよ。今に始まったことじゃないし」

苦笑にシニカルな笑いを返し、真九郎くんに手を差し出した。

「真九郎さん、何か悩み事ですか？」

茶の間にて、夕乃さんがズバリ切り出す。

指摘する点は悪くない。

悪宇商会の件で、悩んでいるのは事実だ。

「いや、まだまだ未熟だなんて、そんなことをちよつとね」

これに関しては、真九郎くんの永遠の課題だろう。

強くなりたいたと、真九郎くんは常に渴望している。

「最近、会う人会う人凄い人ばかりだからさ。何て言うか、自分がちよつぽけだつて思い知らされた気がして」

「真九郎さん、最初っから強い人なんていないですよ。わたしもお兄様も、色々苦労して今のステージにいるのです」

ミカンをハムスターのように啄みつつ、蝕織が言う。

「大体、わたしだつて全然強くなんかないですよ。さっきだつて夕乃さんに負けちゃつたの見てたでしょう」

「……………」

それはお前に負けた僕への当て付けかコラ。

大体お前、丸腰じゃなければ夕乃さんにだつて負けないだろうが。

「蝕織ちゃんの言うとおりですよ。人間は誰だってスタート地点は一緒何です。そこからどうい道歩むか、それが大切なんですよ？真九郎さんはまだ道を歩いている途中なんですから、その先にあるものの可能性を否定しちゃダメです」

「最強タッグ、夕乃さん&蝕織」

ボソツと呟いた言葉は、誰の耳にも入らなかった。

幸いにも、最強タッグの論述はそこで途切れ、あとはこたつでまったりと過ごす。

「はい、夕介お兄ちゃん」

真九郎くんの手の上にいたちーちゃんが、皮の剥かれたミカンを差し出してくれた。

「ありがとう、ちーちゃん」

小さな頭を軽く撫でてやると、ちーちゃんはくすぐったそうに顔を綻ばす。

「あー！ ずるいですお兄様！ 私も撫でて下さい！」

「いや、ずるいも何も無いだろう……」

そして蝕織、お前の嫉妬の炎はちーちゃんにまで飛び火するのか。

その様子を見ながら、夕乃さんがクスクス笑う。

「本当に仲がいいんですね。二人とも」

「はいっ！」

「……肩に寄りそう妹の頭を撫でる兄ってどうなんですか」

事情を知らない人間が見れば、ただの変態じゃねえか。

「あら、いいじゃないですか。それだけ心を許してるってことなんですから。お二人共お似合いですよ」

「にやはは、もうタ乃さんってば」

仲良くなっただけじゃねえ。

僕のいない内に何があったんだ。

「その全貌はディレクターズカット版に」

「そんなもん作る予定ねえよ！ 何だその局地的なドキュメンタリー作品は！」

「ちつつち、そんな見る人間が限定される映像ではありません。私とお兄様の半生を描くロードムービーです」

「素直にノンフィクションって言えや！ そして僕とお前が主役って時点で局地的なことに気付け！」

第一、僕とお前の人生がどれだけ内容の濃いものだったかと思ってるんだ。

お前と夕乃さんの出会いを語るまでにどれだけの時間を要するか。

「全くお兄様は贅沢ですね。世の中にはディレクターズカット版を出す気力も無いほど全力を出し尽くしたにもかかわらず、人気を勝ち得なかった作品もありますのに。」

関係ない話ですけど、BEST版になったゲームは、ディレクターズカット版のような追加要素も無いのに、価格だけつり下げて購入し安さをアピールしているだけだと思いませんか？」

「本当に関係ない話だな！」

気がつくのと、真九郎くと夕乃さんが、顔を俯かせていた。

笑っている。

確実に笑っている。

肩が小刻みに震えているのがいい証拠だ。

「……あの、真九郎くん？ 夕乃さん？」

「あつ、はは、ゴメンゴメン。」

だって夕介くんが美織ちゃんの前で取る態度がいつもと違い過ぎるからさ。それが可笑しくって可笑しくって……」

「もう聞き飽きたよ、そのフレーズ……」

「そう言わずに。事実夕介くん、凄く生き生きしてます」

「夕乃さんまでそう言いますか」

成る程、妹のポケにツッコむ時が、僕が快活に見える瞬間なのか……。

嫌だなあ。

「本当に変わらないんですね……。零崎の方達も、普通の家族と」

「そりゃそうですね。家族はどうなるかと家族ですもん」

そこは譲れない点。

血濡れの殺人鬼集団だなんだと言われようとも、僕達は家族。

僕らの中での不偏の心理だ。

「……」

「ん？ 蝕織、どうした？」

肩に寄りかかっていた蝕織が、急に僕の肩から頭を退けた。

「お兄様。私も、家族でしょうか？」

「はあ？ 何言ってるんだよ、当たり前じゃなか。」

むしろ僕とお前ほど、繋がりが強い零崎はいないだろ？」

本当の兄妹なんだから。

蝕織は未だに少し沈んだ顔ではあったが、「……ですよね」とだけ言い、再び肩に寄りかかっ来た。

顔はまだ、僅かに暗い。

その態度の変化に違和感こそ覚えたが、その疑念は真九郎くんの声によって遮られた。

「あ、そうだ。夕乃さん。それで思い出したんだけどさ」

真九郎くんが、部屋の隅に片付けられた鞆から、一枚のB4サイズの紙を引っ張り出す。

「授業参観？」

机に広げられた紙は、学校で配られるプリントらしい。

今時珍しく、手書きなのが好印象。

「これ、紫ちゃんの学校のですよね」

「うん。実はさ」

真九郎くんは僕と別れた後、車の中でこれを紫ちゃんから渡されたらしい。

本来、クラス中に配られるそれだが、紫ちゃんに気を使ったのか、先生が気を使ったのか、彼女だけ別に渡されたのだという。

理由はシンプル。

九鳳院の人間、つまり紫ちゃんの両親が来るかどうかは全く持って不明だったからだ。

「賢明だね、紫ちゃんの先生」

「確かにそうですね。九鳳院の方々が学校に来るとは思えませんし」

「表御三家だって面子がありますから、そんな学校行事に参加するのだって嫌がると思います」

「やっぱりそうだろうね」

僕、夕乃さん、蝕織の三者三様の意見に、真九郎くんもまた同意している。

当の紫ちゃんも「両親は来ません」ときっぱり言い切ったらしい。まあ、蓮丈の人柄からして、それは妥当な判断だろう。

あのじいさんが学校で娘を激励するような事があれば、この世の終わりだ。

【狐】が終わらせるまでもなく。

「それにしても、小学校の授業参観とは懐かしいですねえ……。あ

の頃の真九郎さん、とっても可愛かったし、授業参観では、必ず活躍してましたよね」

「あれは、まあ……」

真九郎くんが複雑そうに言葉を濁す。

後から聞いた話だが、真九郎くんが授業で活躍しなくてはならなかった原因は、授業参観に来てくれた夕乃さんに「真九郎さん、ファイト！」との激励を受け、黙るに黙れなくなってしまったためだとか。

「授業参観、か」

「ゆ、夕介くん。顔が凄く暗いんだけど……」

僕が急に悟ったような顔を浮かべたのを見て、真九郎くんが素直に引く。

「いや、ごめん。ちょっとしたトラウマがあっただけ……」

授業参観。

思い出されるのは、あの変態兄貴、零崎双識。

僕がどれだけ来ると言おうが、授業参観には必ず出席し、そのウザイまでのハイテンションさを惜しげもなく振り撒く。

そのせいで僕が周囲から、何度奇異の目を向けられたことが。

「ふふふ、懐かしいなあ……。授業参観、かあ。あははは」

「お、お兄様！？ 大丈夫ですか……。つてつわっ！ ちょっと！
目が色々イヤバい方向に向いていますよ！」

「夕介くん、表情がどんどん虚ろになってるよ！ 現実に戻ってきて！」

余計なトラウマから帰還するため、五分経過。

「……危なかった、自分を見失いかけた」

トラウマスイッチという言葉の恐ろしさを知る僕であった。

「そういえば、美織さんはどうだったんですか？ 授業参観」

暗い雰囲気払拭のため、夕乃さんが話題転換をする。

「わたしですか？ うーん、ここに来るまでまで、学校なんて行ってませんでしたからね……」

「え？ じゃあ勉強とかどうしてたの？」

「というか、わたしはそういう義務教育みたいなのでなく……」

「そいつ、ER3にいたんだよ」

僕がさらりと言った言葉に、夕乃さんは目を見開き、真九郎くんはみかんを喉に詰まらせた。

「……えつと、本当に？」

「こんなことで嘘なんかつきませんよ。まあ、いたのは一年か二年くらいでしたけどね」

そうなのである。

僕が蝕織の前から姿を消していた五年の間、E R 3に行っていたらしいのだ。

その頃には、蝕織は既に《チーム》に加入済みであり、自らの女王であるくなぎーが御執心の《イーちゃん》が、どんな人間なのか確かめたかった。という理由からの行動である。

だから、イー兄との付き合いはこいつの方が長かったりする。

骨董アパートに引っ越して来た時、「キミ、もしかして美織ちゃんのお兄さん？」といー兄に聞かれた時には驚いたもんだ。

「……まあ、そんなわけで。わたしは授業参観というものを経験したことがないのです。小学校には事情があつて行けませんでしたが、中学生になる頃にはE R 3にいましたから」

「うわっ……。凄いんだね。美織ちゃんは」

「本当、E R 3に飛び級なんて」

「にははは、二人共止めて下さいよお。照れちゃうじゃないですか」

思わぬ賛辞に、紅潮する蝕織。

「さて、話戻すけど真九郎くん。結局行くの？ 紫ちゃんの授業参観」

「うん、紫と約束しちゃったしね」

一瞬、夕乃さんが不満そうに顔を曇らせたが「まあ、ここは意見を控えましょう」と珍しく折れた。

膝の上にいたちーちゃんを肩車しながら、真九郎くんは何か考えついていたような表情をする。

「あ、そうだ。夕乃さん、もし暇だったらでいいんだけどさ。夕乃さんも来てくれない？」

「何にですか？」

「授業参観。まだ詳しい日時は聞いてないんだけど、一緒に来てくれたら心強いし」

「わたし、ですか？」

……真九郎くん。

またキミは無意識の内に、口説き文句を言いやがりましたね。

夕乃さんにそんな事を言えば、水を得た魚じゃ済まないぞ。

「えーと、ちょっと待ってください。それってつまり……」。

真九郎さんが紫ちゃんのお父さん役で、わたしがお母さん役、ということですか？」

夕乃さんは乙女スイッチが入ったようです。

「そんな感じかな」

「わたしと真九郎さんで、夫婦をやるわけですね？」

「うん、まあ」

「それは素晴らしいアイデアです！」

似合わないガッツポーズをしつつ、夕乃さんは満面の笑み。

「ぜひ、やりましょう！ 将来の予行練習にも成りますし！」

「将来？」

「それに、これは紫ちゃんへの言い牽制にもなります！」

「牽制？」

「ああでも、周りの人から『奥さん』と呼ばれたら、どうしましょう……っ」

呼ばれねえよ。

「……また一つ、波乱フラグ発生」

「何か言いましたか？ お兄様」

「いや、何も」

溜め息混じりに、手元にあつた茶を啜る。

「夫婦役ですか……羨ましいです。夕乃さん」

「？ 美織さんも来れば良いじゃないですか。夕介くんと一緒に」

「げふっ！」

茶が気管に入った。

「ゲホッ、ゲホッ！ ……な、なな…、何言ってるんですか夕乃さん！」

「何って、そのままの意味ですよ？」

「んな事はわかりますよ！ 何でそういう結論に至るかってことが聞きたいんです！ 納得のいく説明を要求します！」

むせながらの猛抗議。

勝負する時は今である。

「説明も何も、無いじゃないですか。夕介くんと美織さんが、夫婦役で来ればいいんです。」

真九郎さん、別に保護者を呼んで下さいというだけで、人数規定は

ありませんよね？」

「えっと、確かに人数規定は無いと思いますけど……いいんでしょ
うか？」

「いいんです。紫ちゃんだって喜ぶと思いますよ」

良くねえ。

僕の全存在を懸けて良くねえ。

「あのですね、夕乃さ」

「いいい」

更なる抗議は、蝕織の呟きに遮られた。

「いいです！ やりたいです！」

「待て美織！ そんな勝手に……」

だが驚喜状態の蝕織にセーフティは効かない。

「良いじゃないですか！ 夫婦！ お兄様はこの素晴らしいポジシ
ョニングに、何の不満があるんです？」

「全部にだ！」

「まあ、お兄様ったら何てことを！ 来世までの幸福全てを使って
も、こんなラッキーチャンスはあり得ません！」

「そんなローカルな願いと等価なくらい、薄幸な人生なのか！？
僕の行く末と来世は！」

結局その後、夕乃さん & amp・蝕織というゴールデンタッグ
の説得（ニアイコール脅迫）により、僕は結局首を縦に振ること
になった。

「やりましたね」

「やりました！」

ハイタッチ。

……君たちは本当に初対面か？ 前世は義経と弁慶か？

「ではお二方。授業参観日はしつかりとして下さいね。特に真九郎
さん！ 当日はわたしと真九郎さんで、立派に夫婦役を努めましょ
う！ 紫ちゃんの度肝を抜くつもりで！」

「……まあ、よろしくお願いします」

「お兄様も同じですよ！ 来なかったりしたら、一ヶ月と待たずに
連れて帰りますからね！」

「……らじやりました」

……いせ。

わかってる。わかってるから、一つだけ言わせてくれ。

戯言だあああああ！

北の国から、ただし娘は完食済み、みたいなっ！

「で、結局承諾したのか。悪宇商会の勧誘」

「うん。悩んでても仕方ないしさ。昨日の夜電話した」

数日後、真九郎くんの部屋にある台所にて。

僕らに加え、蝕織と紫ちゃんと夕食を摂る運びとなったため、僕は包丁&エプロン姿で、食事作りに勤しんでいる。

何が楽しくて野郎二人でクッキングなぞしているのかと聞かれれば、理由としては料理が出来る人間が僕らしかいないからだ。

紫ちゃんの料理のポテンシャルは、以前のアート料理にて実証済み。

蝕織もそれと似たり寄つたりの腕なのだ。

あいつの料理はもはやポイズンクッキングの領域にまで達している。

よって、夕食が出来るまで、蝕織と紫は外で一緒に遊んでいる。もとい、遊ばせている。

『男子厨房に入らず』とは誰が言ったのだろうか。

僕は今、そいつを猛烈にぶちのめしたい。

「まあ、真九郎くんがそうするって言うなら止める理由は無いけどな……」

どうなんだろう、実際。

真九郎くんはあんまり、組織に属したりするのは向かない気がするんだけどなあ。

「俺も色々考えたんだけど、こんなにしょっちゅう悩んでたって、意味ない気がして来たんだ。組織に入るかどうかでビクビクしてたら、いつまで経っても前に進めない。だから、さ」

いい加減、腹据えなきゃ。

そう締めくくり、真九郎くんは野菜類を鍋に放り込む。

「……ふーん。ま、いいんじゃない」

「軽いね」

「そりゃ他人事だし？」

しれっと言い放つ僕。

真九郎くんのことには確かに気に入っているが、人生の選択にまで口を出す気はない。

「ま、何かあったら手助けくらいはしてあげるよ。ただし僕と蝕織、明日から二日か三日くらい出掛けるから、そのつもりで」

「ああ、例の北海道旅行の話？」

「そ。本当なら一人で行こうって思ってたんだけどね。蝕織に話したら、着いてくるって聞かなくてさ」

僕の逃亡を防ぐ意味もあるんだろうが、あいつはどちらかと言えば、曲兄に会いたいんだろう。

そう考えると、わざわざ深淵夢想を壊したのはこのためだったのだろうか。

だとしたら、何と手の込んだ大義名分作りか。

本当に考えていそうだから、怖いんだけど。

「とにかく、悪宇商会に入るなら、警戒は怠らないこと。僕に言えるのはそれだけだ」

「うん、わかってる。夕介さんの迷惑にはならないようにするよ」

「よろしい。健闘を祈ります」

そう答え、ジャガイモに包丁を振り下ろす。

ストーン、と小気味のいい音が響いた。

「……………はあ」

零崎蝕織は、自分の中に虚脱感を覚えていた。

元来、自分はポジティブな人間だと自負している。

しかしそれと同じく、一度悩み出すと、とことん悩み続ける人間だとも考えていた。

完璧な答えが出るまで、ずっと。

そして今悩んでいるのは、自分が最も依存する存在、零崎夕識。

「美織、どうしたのだ？」

その幼い声に、思考の海をさ迷っていた意識が覚醒する。

首をやや傾けると、自分を上目遣いでみる女の子。

兄が気に入入り、自分もまた気に入りにかけている子 九鳳院紫。

壁に寄りかかったまま、つい物思いにふけてしまっていたらしい。

しかも、あや取りをしていた彼女を放置したまま。

「あ、ごめんなさい紫ちゃん。ちょっと、ボーツとしちゃいました」

「大丈夫か？」

「ふふ、優しいですね。紫ちゃんは。

大丈夫ですよ、心配ありません」

「嘘だな」

「えっ？」

「美織は今、とても苦しそうだったぞ？」

いつも通りの笑顔を向けたにも関わらず、紫の一言にその虚像は碎かれた。

「……な、何言ってるんですか。嫌ですねえ、紫ちゃんは。そんなこと……」

「美織」

紫はじっと、美織を見つめる。

彼女の瞳に宿る眼光。

その力強い輝きに、美織は一瞬怯んだ。

殺し名三位、実力ならば夕織を凌駕する零崎蝕織が、である。

「今の美織の笑顔は、出逢った頃の真九郎が浮かべていた笑顔と同じだな。」

喜びの感情が無い笑顔だ」

金縛りにあったかのように、棒立ちになる美織を真つ直ぐに見据え、紫は語る。

「美織。つらい事を心の中に溜め込め続けては、いつかその重さに押し潰されてしまうぞ。」

心の中に溜め込んだ思いのせいで、美織が笑えないなんて、わたし

は嫌だ。

美織。人は嬉しいから、楽しいから笑うのだぞ。つらいのに笑うなんておかしいではないか」

紫は、美織と同じように壁にもたれかかり、日溜まりのように温かく笑う。

「わたしは聞くぞ。真九郎がつかった時も、わたしはこうして話を聞いた。美織だって、きっと元気になれるはずだ」

「……………」

凄い、と思った。

世辞などではなく、心の底から。

この子の言うことを、甘い戯言と聞く人間もいるだろう。

子供の言った事だと罵る人間もいるだろう。

けれど、蝕織はそう思わなかった。

これが、綺麗事だから、子供だから、という理由では片付けられない、この子自身が持つ本質。

そしてそれこそが、紅真九郎や零崎夕識が、この子に惹かれた理由なのだ。

「……………」本当に良い子ですね。紫ちゃんは」

感服。

そう表現する以外に、この感情をどう表現できようか。

奇しくもそれは、夕識と同じ評価だったのだが、それは蝕織が預り知らぬことである。

「紫ちゃん。大切な人が、自分のことをわかってくれなかったら、どうしますか？」

蝕織は唐突に、自分が抱くわだかまりを言葉に乗せる。

今まで、あの人類最強以外、誰にも言わなかったわだかまり。

七歳の少女がどこまで理解出来るのかはわからない。

だが、彼女は聞くと言ってくれた。

だから話した。蝕織にとっては、ただそれだけ。

「大切なんです、この世界と等価にかけられるくらい、一緒にいたい人なんですよ。」

でも、あの人はまるでわかってくれない。

いえ、『気付けて』いないんです。

わたしがわかって欲しいのは、あの人自身のことなのに。

自分がそうある事で、どんなにわたしを苦しめるのか、全然気付いていないんです」

久しぶりに会った兄は、変わっていないかった。

それが、自分にとってはとても嫌だった。

それどころか、会った側から自分の事を誤解していた。

自分が何故、兄を『狐』や人類最強から引き離そうとするのか。

多分あの人は、自分が自分のために、彼を連れていこうとしていると考えているのだろう。

その理由も、間違いじゃない。

けれど、それでは正解率は三割。

自分のためではなく、【あの人】自身のためだ。

(あの戯れ言遣いは、滑稽だと思うのでしょね……)

他人のためなどという言葉は、本来口にしてはならない禁句。

だがそれでも、蝕織は構わなかった。

「気付かせようと思ったら、簡単なんですよ。

二言三言で済みます。

でもこれは、あの人が自分で気付かないといけないんです。

そうしないとあの人は、また繰り返してしまう。

けど、わたしが言わなきゃ、あの人は一生気付いてくれない気がするんです。

そう思うと、なんだか凄く虚しくなってしまうて……」

自分から言わなければ気が付かないほど、自分達の繋がりは儂いものだったのかと、自覚してしまうから。

崩月の家に行った時もそうだった。

零崎蝕織は彼の家族なのだろうかと聞いた時、彼は肯定した。

そう、ただの『家族』。

他人の延長線。

ただそれだけの繋がり。

「自分でもおかしいとは思うんですけどね。

自分の事をわかってもらえない。

たったそれだけの事が例えようもなく苦しいんです。

ああ、結局その程度の繋がりがりだったんだって。

……そう考えれば考えるほど、その痛みが増していつてしまうから」

「その大切な人とは、夕介のことか？」

蝕織は紫の質問には答えず、ただ頭を俯かせるばかり。

その仕草でそれが正解だと気が付いた紫は、「そうか」とだけ言うてそれ以上追求はしなかった。

「でも美織、夕介と美織の繋がりには、薄くなんかないと思うぞ」

「え？」

きよとんとした表情で、蝕織は紫を見る。

「わたしは、美織と夕介と一緒にいるのを、そう何度も見ているわけではないが、少なくとも夕介は、美織といる時とても楽しそうだった。

わたしや真九郎の前では、見せたことの無い表情を浮かべていたぞ。それは、美織が夕介にとって、大切な人だからなのか？」

「わたしが 大切？」

「うむ。」

夕介は、美織が大切な人だからこそ、それ以外のことが見えづらくなっているのだろう。

だが少なくとも、美織のことなんかどうでもいいとか、そんなことは絶対に思っていない。

夕介がそんな奴じゃないのは、わたしよりも美織の方が知っているだろう」

「はい」

「夕介が美織の何をわかっていないのかは分からん。

けど夕介なら、美織が言わなくても、いつか絶対に美織のことをわかってくれる。

だから」

紫は蝕織の正面に回り込み、蝕織の頬をぐにと、押し上げる。

「辛い顔をする事なんか無いぞ。美織は笑顔が一番似合うからな」

屈託無く笑う紫に、美織はただ圧倒されるだけだった。

自分が、血濡れの殺人鬼であることを 忘れるくらいに。

(……本当に、戯言ですよ)

自分のような人間が、こんな子に出逢えるなど、滑稽以外の何物でもない。

だから、美織が言えるのは、一言だけ。

「 ありがとう。紫ちゃん」

その暖かさに答え、美織も笑う。

その笑顔を見て、紫も満足気に頷いた。

(真九郎さん、あなたは幸せ者ですよ?)

こんないい子の笑顔を一人占めできるんですから。

「おい、夕飯出来たよご兩人」

さっきまでの雰囲気を全く読まない声が、玄関口から聞こえてくる。

おたまとエプロン姿の夕介が、そこに立っていた。

「あ、はい。今行きます！」

玄関口ですれ違う際に、蝕織は夕介を変に感情のこもった目で見つめた。

夕介が「どうしたか？」と聞くと蝕織は、「いいえ、別に」と、何処かご機嫌そうに、五月雨荘の中へと消えていった。

夕介は小首を傾げ、同じく部屋へ向かおうとする紫を呼び止めた。

「紫ちゃん、あいつと何話してたんだ？」

「ん？ 気になるか」

「まあ……、多少は」

煮え切らない口調でそう言うと、紫は少しだけ悪戯っぽく笑った。

「女同士の秘密だ！」

そう言って走り去った紫。

あとには、更に疑問符を浮かべた夕介だけが佇んでいた。

「はっはっは。中々楽しませてくれんじゃないか。零崎夕識」

肩で息をし、身体感覚が無いまでに疲労困憊の僕に対し、あくまでも余裕綽々の『赤色』。

正直、有り得ないと思った。

いかに僕が出来損ないとは言え、ここまでの完全試合が成立するものなのか、と。

いや、そう考えることさえも、烏澁がましいのだろう。

これが 死色の真紅。赤き征裁。オーバーキルドレッド

そして、人類最強の請負人。

哀川潤。

「傑作、だよ」

そう呟いて、深淵夢想を地面に放った。

「ん？ 何だよ。もう諦めちゃうのか。安西監督も言ってただろうが。諦めたら、そこで試合終了だぜ？」

「スラムダンクは流し読みしたんで、セリフはあんまり覚えてません」

それに、諦めるのだって仕方あるまい。

白兵戦と音。

これが封殺されるのは、僕にとってゲームセットと同義なのだ。

「やれやれ、お前もまたヘンテコな野郎だな。音使いに会うなんて大戦争の時以来だから、ちっとテンション上がったけど、一気にクールダウンしちまったぜ」

勝手に戦いをけしかけておいて、酷い言い種だった。

学校帰りに拉致られて、人気の無い河原に連れ込まれたと思ったら、

いきなりバトル開始だもんな。

「……で、最初にすべきだった質問をさせてもらいますけど、僕に何か御用ですか？」

もはや抵抗する気など毛頭無いので、淡々とした口調になる。

「んー、用って言われるとそんな大したもんでもねーんだけどな」

頭をかき上げながら、人類最強は優美に言葉を返す。

「××××」

「！」

「この××××って、お前の本名ってことでいいんだよな。 零崎夕識」

「何で、それを、知ってる？」

その名を知ること事態は、簡単だ。

だがそれを、イコール零崎夕識に結び付けるのは容易ではない。

人類最強はシニカルな笑みを浮かべる。

「おいおい、あたしを誰だと思ってるんだよ。

ある意味、お前の妹さんと同じくらい結び付きが強いこのあたしが、お前を見つけられねーはずが無えだろ？」

ま、こうして会うのは初めてだな」

至極当たりまえ、とでも言いかねない口調だった。

だが、それならば尚更。

「……今更、僕に何の用なんですか。『完成品』さん？」

「つつかかるねえ」

そういう奴は嫌いじゃねえけどな。

そう返す人類最強からは、この状況に対する重圧は無かった。

「西東天」

「……」

「知ってるよな。てか、知らないわけないよな？」

知らないわけがない。

というか、忘れるわけがない。

かろうじて僕は「知ってますよ」とだけ答えた。

「それが何か？」

「うん。あんまり期待はしてねーんだけどさ。もしかしてもしかしたら、あのクソ親父の居場所知ってたりしない？」

は？

「いやー、昔から雲隠れのつまい奴だからさ。でもひょっとしたらお前の方には顔出してるかと思って……」

「ち、ちよつと待て！」

慌ててストップをかける僕。

「あいつ……、生きてるんですか？」

「死んでると思ってたのか？」

それこそ意外、という風に、人類最強は目を細める。

「あいつがしつこい上に懲りない、さらには何にも考えてないという、まさに最悪のアビリティを持ってんのはわかってんだろ？ そんな憎まれっ子キャラがそう簡単にくたばるか」

本当にまさかの事態だった。

あいつが生きている。

そんなの考えもしなかった。

いやむしろ、考え無かった自分が堪らなく愚かしい。

傑作にして、滑稽もいいところだ。

(もし、またあいつが何かやらかせば)
考えるまでもない。

下手をすれば第二次大戦争が勃発する。

必然的に、零崎一賊も巻き込まれる。

僕の、『家族』が。

「その様子じゃ、知るわけもねーな。
あーあ、日本の最北端まで来て無駄骨か。
ま、生キヤラメルでも食って帰りゃあいいか。
邪魔しちまったな、零崎夕識」

人類最強はそんな観光客じみた事を言って、立ち去ろうとする。

「待て！」

慌てて、それを呼び止めた。

「んー？ どした」

人類最強は立ち止まり、僕を怪訝そうに見る。

「僕も、手伝わせてくれませんか。
あいつを探すの」

五年前のこの出会いは、確実に、僕の人生のターニングポイントだっただろう。

ガタリ、と世界が揺れた。

「……おおっ」

無論、世界が揺れようはずもなく、揺れたのはブレーキを掛けた折、慣性の法則に従ったバスの方。

「ああ、お兄様。ちょうどお目覚めですか」

「ああ。……なんか、懐かしい夢見たな」

北海道に行こうとした瞬間に、北海道を離れた時の夢か。

単純だな、僕も。

「夢の余韻に浸るのは結構ですが、それよりも荷物を運ぶのが先です」

「ああ、もう着いちゃったか」

未だに覚醒しない頭も、外に出た瞬間吹き飛んだ。

やはり東京と比べると、どの時期に来ても北海道は寒いな。

バックやらの荷物を受け取り、目を擦りながら、昼間で賑わう歓楽街を歩く。

向こうを出たのが深夜で、それ以後は寝っぱなしだったから、軽く時差ボケを起こしている気にさえなる。

「深夜バスつても考えものだな」

「いいじゃないですか。景色が変わりながらの旅は楽しいですよ」

あの長時間の中で、蝕織は自分の楽しみを見つけていたらしい。

「お前の観光客気分はさておいてだ。

これからどうする？ クラッシュクラッシュが開くのは夜だし。ホテル取る時間含めても、かなり暇だよな」

「じゃあ、お土産屋さん回りませんか？ 私、紫ちゃんにお土産買っ
つていきたいんです」

「……わかったよ」

観光気分だ。

こいつ完全に観光客気分だ。

だがそう思いながらも、他にすることが無いのも事実。

結局僕らは、格安のビジネスホテルにチェックインして荷物を預けた後、歓楽街を巡ることにした。

最後に見た時とは結構街並みが変わっていて、退屈こそしなかったが、蝕織のテンションについていくのが問題だった。

「ほらお兄様、本場の『白い恋人』！」

「チョコクッキーは溶ける。帰る日にした方がいい」

会話もこんな感じ。

蝕織よ。一応お前も地元の人間だったのだから、そこまでテンションを上げる必要性は無いだろうが。

そんな妹に呆れながらも、こいつに付き合ってしまう僕は何なのだろう。

自己嫌悪に襲われそうになりながらも、蝕織と並んで時間を潰す。

と、そんな時だった。

僕のやや後方を歩いていた蝕織が、急に足を止めたのである。

その目線の先には、一軒のオープンカフェ。

客も多く、規模的には中々。

「どうした、蝕織？ 疲れたのか？」

「……あの、お兄様。あそこに座ってるの、人兄さんじゃありません？」

「はあ？ 何言ってるんだよ。こんな日本の最北端に人兄がいる、わけ、が……？」

反論の声は段々と小さくなり、呆れの感情は驚きに変わっていく。

確かに蝕織の見つめる先、オープンカフェの一角に、見覚えのある姿があった。

顔面の刺青。

まだらに染められた髪の毛。

右耳には三連ピアス、左耳には携帯用のストラップ。

ハーフパンツにタクティカルベストまで、最後に京都で会った時と同じ服装。

こんな奇抜な容姿をした奴は日本、いや世界広しと言えど一人しか
いない。

一人いれば十分だ。

零崎人識。

零崎の異端児にして、僕の兄。

本人はそう思っていないだろうけど。

「…………マジで人兄だな。何やってんだろう、こんなトコで」

放浪癖のある人兄だから、どこにいても不思議でないとはいえない。

しかし、僕が来たときに理由もなく偶然ここにいた、というのは出
来すぎだ。

「確かに、それはあまりにも都合過ぎますね…………。」

あ、もしかしたら」

「なんか心当たりあるのか、蝕織？」

僕の質問には答えず、蝕織はさっさと人兄の座るテーブルに近づいていた。

僕としては、人兄のような何考えてるのかわからない人間（なにせいー兄の鏡だ）に関わるのは、あまり好ましくないのだが、かといって、蝕織を放っておくわけにもいかず、必然的に僕も蝕織の後をついていく形になる。

一方、当の蝕織は、人兄まで7メートル、6メートル。

4……。

2……。

1.5。

イチ。

「ひーとーにーいーさんっ！」

「ぶほっ！」

ゼロ。

コーヒーを啜っていた人兄を、蝕織が後ろから軽く押した。

結果、バランスが崩れたコーヒーが、人兄の顔面に直撃。

「あちつ！ てめつ、なにしやが……あ？」

顔にかかったコーヒーの熱さに身悶えしつつも、人兄は僕達の存在に気が付いた。

「……随分と過激かつアグレッシブな挨拶だな、蝕織」

「それは積極的って意味ですか？」

「いや、どちらかと言えば攻撃的と取って貰いたいね」

人兄は笑いながらも、顔がひきつっていた。

「そしてだ。その後方3メートル付近で立ち止まっている零崎夕識くん。君は確実に蝕織ちゃんの行動に気付ける立場にあった。にもかわらず止めようとしな……っておいちょっと待て逃げんなコラ」

僕に火の粉が飛ぶ逃走を計ろうとするも失敗した。

『逃げの曲識』よろしくとはいかない。

「……僕にその猪娘が止められるわけないでしょうよ。無駄な怪我するのヤダし」

「だーれが猪娘ですか誰が！」と蝕織の抗議が聞こえた気もしたが、これはスルー！

「無駄な怪我したくない、ねえ……。そんな消極的な理由で、俺のコーヒータイムが邪魔されたと思うと腹立だしいな」

「よく言つよ甘党が。そのコーヒーにだって砂糖何本入れてることやら」

「お前も甘党だろうが。俺の約二十年の人生の中で、ひつまぶしのお湯に砂糖湯を使ったのはお前だけだ」

「子供の頃の話だよ。今ではそんなマネはしないさ。せいぜいマンガージュースのマンガージュース割りを飲む程度だ」

「それはただのマンガージュースだ。成人病まっしぐらじゃねえか。ま、なにせよ」

そう言つて人兄はコップ内に残つたコーヒーを飲み干す。

「とりあえず久しぶりだな、夕織」

「いやはや、俺がいる時を見計らつたかのようなこの偶然。全くもつて傑作だぜ」

「いやいや、戯言かな、かな？」

「何で疑問形なんだよ。」

「しかもそこで思い出したかのようにひぐらしネタをふるな。対応とツツコミに困る」

「そこは家族間のコミュニケーション能力で」

「ボケとツツコミが家族間のコミュニケーションに適應されるとは初めて知つたな。それと夕織。俺は兄貴以外を家族だなんて思ったことはねえ」

「おやおや、身長が小さいのに比例して器も小さいね」

「……死に急ぎたいなら手を貸すぜ？」

殺人鬼が言うと冗談に聞こえない。

いや、半分は冗談じゃないんだろーけど。

「まあ、フリートークはこの辺にして」

フリートークをふっかけた張本人のセリフである。

「何やってんの人兄。シロクマでも見たくなかった？」

「お前は北海道に来ることが、旭山動物園のシロクマを見に行くのと同義なのか……」

「見に行きたくないヤツがいるの？」

「……そのへんはお前の為にツッコまないでおいてやるよ。」

最初の質問に答えると、俺は特に北海道に来たいわけじゃ無かったと言っておこう

「じゃあ何で？」

「伊織ちゃんのための用事ですよね？」

蝕織が聞き慣れない固有名詞を使う。人兄は「まあ、そんなトコだとだけ言う。」

片や僕は理解不能状態だ。

「伊織？ 誰のことだよ」

「何ってお兄様。 双兄さんから連絡が来なかったのですか？」

「双兄から？」

ますますわけがわからん。

「本当に知らねえのか？ 馬鹿兄貴のことだから、真っ先に自慢してるもんかと思ってたんだが」

「あ、そつか。 お兄様は、伊織さんの零崎名しか知らないんですね」

「だから一体全体何のことを……」

「あーっ！ 人識くん！」

背後から無意味にハイテンションな声が聞こえてきた。

振り向くと、見知らぬ女の子が立っていた。

年は僕や伊織と同じくらい。

女子高生らしいプリーツスカートにスクールシューズ。

ジャージのサイズが合っていないのか、腕の袖は僅かに余っている。

そして頭には目深に被ったニット帽。

「やっと見つけましたよう！ 酷いじゃないですか、お土産屋を見てたちよつとの隙にいなくなつて！」

「人聞きの悪い事言つな。あんたが勝手にふらふらとお土産につられていったんだろうが」

「情緒が無いですね、人識くんは。旅行先での醍醐味ですよ」

「まず始めに、それが迷子フラグだと気付くべきだ」

やれやれと首を振る人兄。

この謎の女の子と知り合いではあるようだ。

「こんにちは、伊織ちゃん！」

「わわっ、蝕織ちゃんじゃないですか！」

女の子、伊織ちゃんと蝕織は、お久しぶりですー、と気軽に挨拶を交わす。

「しかしどうしたんですか？ 確かあの赤い人に会いに行つて言つてたのに」

「にはやは、ご心配には及びません。哀川さんにはもう会いましたし、その目的も果たしました」

「おお、それは何よりです。

おや？ こっちのお兄さんは誰ですか？」

それはこっちのセリフなのだが。

「あ、伊織ちゃんは会ったの初めてでしたね。前に話した、私のお兄様ですよ」

「やや、では貴方が零崎夕識くんですね！」

「そーだけど……、誰なのさ、君は」

「うふふ。初めましてですね、まいねーむいず無桐伊織。零崎名は舞織です。よろしくです！」

まいおり、マイオリ、舞織……。

あ！

「あーあーあー！ そっかそっか！ 思い出した、君が双兄が話してた舞織ちゃんか！」

零崎舞織。

五月雨荘に越してきてすぐの頃、双兄が話していた新しく覚醒した零崎。

双兄の持つ大剣、マインドレンデル自殺志願を受け継いだ殺人鬼。

「なるほど。君が舞織ちゃんだったんだ。

んじゃま、初めまして。零崎夕織。緋色夕介って呼ばれたりもするけど、家族だし、夕織でいいよ。よろしく」

「うふふ、こちらこそよろしくですー！」

うーん、蝕織にも当てはまることだけど、やっぱり零崎にゃ見えないよな。

「てか、伊織ちゃんって呼ばれてたけど、本名捨ててないんだ」

「はい、だから舞織でも伊織でも構いませんよ」

「ふーん、じゃあ伊織ちゃんでもいいかな」

4文字より3文字の方が呼びやすい。

改めて握手をしようとし、手を差し出す。

しかし、伊織ちゃんはだらりと丈の合わない袖を出してくる。

そこでようやく、僕は気が付いた。

(11の子……)

両手が無い。

手首よりやや上の部分で斬られている。

「……えっと」

「？ ああ、これですか」

示すように、伊織ちゃんはパタパタと袖を振り回す。

「零崎になった時に、ちょっとしたいざござに巻き込まれちゃいまして。その時にぼーんて斬られちゃいまして。いやー、それから日常生活に支障がうまくりで。参っちゃいますよう」

人兄の「巻き込まれたのは俺だっつもの」というぼやきが聞こえた。

「大体、支障出まくりつつつても、俺に全部生活面の問題は任せつきりだろうが」

「あ、それもそうですね。では夕識くん、さっきの『参っちゃいますよう』の前に人識くんを入れておいて下さい」

「主語が抜けてるとかそういう事を言ってるんじゃないかねえ」

人兄のツッコミを聞きつつ、僕は伊織ちゃんの両手からさりげなく目を反らした。

(前言撤回。やっぱり零崎だな、この子)

いきなり暴力の世界に放り込まれて、両手持ってかれて、こんなあつげらんとしていた時点で、何かが違うっている。

「……うん、いやしかし、なるほどね」

話題を切り替えるように、僕は手を打つ。

「人兄がここに来たのはそういうわけか。曲兄に会いに来たんだろ？」

「ああ、その口振りだと、お前らもか」

「まあね。」

しかし、よく来る気になったね。

クラッシュクラッシュの場所は双兄か軋兄に聞けば一発だけど。確か人兄、曲兄嫌いじゃなかった？」

「嫌いつつーか、苦手なんだよ、曲識の兄ちゃんは……。」

そりゃ、出来れば来たくは無かったけどよ。かといって手放しにも出来ない問題だろ」

伊織ちゃんの両手を指差し、頷く人兄。

（ やれやれ ）

嫌なタイミングだ。

こんな辺鄙な土地で、まさかの零崎五人集合か。

「……本当、よく出来た偶然だよね」

「ああ、全くもって傑作だ」

人兄は笑って、僕も苦々しく笑った。

「伊織ちゃんとは、前に人兄が一度帰ってきた時に会ったんですよ」
未だに人だかりの多い町を三人の男女　夕識、人識、蝕織は歩いて
いた。

その後、格安ホテル　ちなみにその間、二組の泊まるホテルが同じであることや、部屋が隣であることが発覚したりもしたのだが
まあ、とにかくホテルにチェックインし、三人はクラッシュシユクラ
シツクに向かっていた。

伊織も来たいと駄々をこねていたが、三人の説得により、今はホテルで留守番をしている。

素性の知れている蝕織はともかくとして、これから会いに行く兄
曲識の定めた『殺す条件』を、恐らく伊織は満たしている。

当然、家族であることを説明すれば済む話ではあるかも知れない。
だがそれを抜きにしても、無桐伊織に対し、零崎曲識の零崎が行わ
れないという保証にはならない。

その一点において、三人の見解は一致していたのである。

「別に帰ろうと思ったわけじゃねえけどな」

「……そっぴやそっぴだっ たね」

突如、夕識が人識に手刀を振る。

それを受け止め、人識は言う。

「いきなり何すんだよ」

「余計なことを言った兄への、愛の金属バットだよ」

「愛の鞭な。愛があってもフルスイングだったら死ぬぞそれ」

律儀に対応する人識に対し、夕識は気が晴れないらしかった。

そもそも、人識が家に帰ってきた時、蝕織に夕識が哀川潤の元にいることを話してしまったことが、今回の事態の発端である。

『余計なことを言いやがって』と怒りを覚えるのも当然と言えば当然。

「こいつが来ることになったのも人兄のせいなんだから、一発くらいいいでしょ」

「む。人兄さんに罪はありませんよ。隠していたお兄様が悪いんです」

「そーだそーだ、言ってやれ蝕織」と、人識も悪のり。

「真面目な話殺すよ?」

「おいおい、お前がそれを言っちゃうかよ。そういうセリフは、最低限俺くらいの技術を身に付けてからにしろ」

「なんだよ、さりげに自分を高ランクに位置付けて。人兄だって、そんな強いわけじゃないくせに。よし、じゃあ一つ予言をしよう。人兄は近い将来、ブログを更新をしながら戦う人に、負けることになるだろう」

「そんなナメた野郎に負けるつもりはねえし、大体どんな状況だよ！ ブログを更新しながら戦うヤツと勝負する状況って！」
吠える人識。

しかし残念ながら、この予言は数ヶ月後、的中することになる。

人類最強の請負人によって。

「まったく……、お前は相変わらず、曲識の兄ちゃん並に何考えてるのかわかんねえや」

「そんなに底が深いわけでも無いよ。零崎が抑えられる分、どうも僕の実感で薄っぺらだから。」

僕が深い事を考えているから、何を考えてるのかわからないんじゃない、僕があまりに普通過ぎる事を考えているから、逆にわからないだけさ」

「『普通』、か。」

「……お前に一番似合わない言葉だな」

「何を言う。」

ここまで社交的な零崎なんてそうはいないよ。

「一番『普通の世界』に近い零崎だと自負しています」

「そんなもん、普通の内に入んねえよ。」

人を殺している時点で、俺らは皆等しく、同じ立ち位置にいるんだ。誰が普通に一番近いとか、誰が一番猟奇的呢なんてのは、比べる意味も価値も無い。

それにな、夕識。お前は自分が一番普通に近い零崎と言うが、俺は一賊内でお前が一番ヤバい奴だと思ってるんだぜ？」

「はあ？ 何言ってるのさ。人兄らしくもない。僕みたいな出来損ないに、ヤバい要素なんて一つも無いよ」

「力関係の事を言ってるじゃねえよ。俺はお前が欠陥と罵る『出来損ない』という要素に危機感を覚えているんだ」

「……………？ 話が読めないよ。出来損ないは欠陥以外の何者でも無いだろ？」

「『欠陥製品』を知った上でそういうセリフが吐けるって時点ですげえと思うがな……………。まあいいや」

人識が気だるそうに言い放つ。

「俺はさ、お前の欠陥　お前が持つ『優しさ』が怖いんだよ」

「……………」

無意識に、表情が強張った。

「俺達にとって『優しさ』は、お前の言う通り、確かに欠陥以外の何者でもないだろうさ。」

本来、俺達にあり得てはいけないもの、と言い換えれる、が」

お前には何故か、その『優しさ』がある。

信号があつたので、三人は立ち止まった。

夕識は言い知れない不快感が、脳内を満たしていくのを感じていた。頭に登るはずだった血液は行き場を無くし、所在無さげに、体内をつつき回る。

それでも、人識の口は閉じない。

「殺すという行為は本来、何の慈悲もあつてはならない。俺達の場合は特にな。殺すから殺す。」

当たり前のように殺す。

それが零崎一賊だ。

でもお前は、『大切な人を傷つけた人間しか殺さない』というリミッターをつけている」

「……あれは哀川さんとの約束だからだよ」

「俺の記憶では、人類最強と出会う前から、お前は無駄な殺しはしないヤツだったな」

誤魔化せなかつた。

夕識は、人を殺している。

しかし零崎一賊全体から見れば、その数は圧倒的に少ないのだ。

『少女以外は殺さない』。そんなルールを掲げている菜食主義者の曲識にさえ、負けるほどに。

「優しさを他人に適応したって意味じゃあ　お前は『あいつ』と変わらない。

その『大切な人を傷つけた人間しか殺さない』という信条が、お前の生命活動を阻害しているというのは揺るぎない事実だ。

わずかでも『あいつ』と同じ素養があるだけでも救いようが無い上に、お前には何とびっくり。

俺と同じく、『優しくない』という素養も兼ね備えている。

優しさを他人に適応したのなら、『あいつ』と同じく、お前には責任があつてはならない。

しかし、お前は人を殺す時、お世辞にも優しくは無い。

さっきも言ったように、人を殺すという行為に慈悲は一片たりとも無いんだからな。

お前には確実に、殺したヤツの死に対する責任がある。

わかるか？

お前は鏡合わせである俺達二人、その『どちらの素養も併せ持っている』。

『欠陥製品』と『人間失格』。

弱さと強さを兼ね備えた、本来有り得ないヤツなんだよ。お前は「

「……………」

この人は。

本当にこの人は。

「……………買い、かぶりだよ。そんなの」

絞り出したせめてもの抵抗は、あまりにも無様で、儂いものだった。

「結局は……………、どっちにも成れないってだけの話だろ？ 所詮は、殺人鬼の紛い物、それだけさ」

『零崎を抑えられる』この体質が素晴らしいと思ったことは一度も無い。

これは、人間と鬼の狭間にいるという証。

何度、完璧な殺人鬼であつたならと願つただろう。

何度、ただの人間であつたならと願つただろう。

何度、

真九郎や紫が、自分を拒絶するのを恐れただろう。

「……ふうん。まあ、お前がそう言うなら、俺は何にも言わねえけどな。

けどよ、敢えて言わせてもらうが面倒じゃねえか？

対極をフラフラしてさ。

『どっちか選んだ方が、よっぽど楽だぜ』？」

計らずも　それは数週間前、兎吊木垓輔が言ったことと同じだった。

そう言い捨てた人識は、信号が変わつたのを見て、軽い足取りのまま歩き出す。

「お兄様」

とん、と夕識の肩を叩く蝕織。

フリーズしていた夕識の思考回路が、ようやく正常な機能を取り戻す。

「大丈夫ですか？」

「……ああ、大丈夫………だと思っ」

そう口に出しては見るが、かなり怪しい話だった。

脳に酸素が回っていないかのようにクラクラする上、無意味に身体が熱を持っている。

「……わたしは」

ようやく二人は歩き出して、蝕織が口を開く。

「お兄様がどちらを選んでも、構いません」

さっきの人識の意見に対し、彼女なりの答えを提出しているらしい。

「けど私は、お兄様の人間である部分が大嫌いです」

「………」

「もしそちらを選ぶなら、私はお兄様を絶対に許しません」

地の果てまでも追いかけて、お兄様を殺すでしょう。

そう言い切って、蝕織は夕識の隣から離れ、人識の近くまで走っていった。

なぜ、夕識の人間部分が嫌いなのかは、言わないまま。

「……なーんで、こうなるかなあ？」

若干冷静さを取り戻したらしい夕識は、皮肉めいた笑みを浮かべ、意味もなく頭をガリガリと引っ掻いた。

「『弱さ』と『強さ』ねえ……。キツカケとしちゃあ、やっぱり哀川さんなんだろうな」

あの規格外な人物は、否応なしに周囲のものを変革させていく。

その完全無欠の姿と立ち振舞い。

自らについて見直さざるを得ない圧倒的な存在感が、そこにはある。

どうしたって、何かに何らかの影響を与えてしまう。

零崎夕識もまた、例外では無い。

始めはよかった。

この体質だって、別に気にならなかったし、家族以外に知り合いを作るうとは思っていなかった。

だが、あの絶対的な赤色と知り合って。

自分を狂わせた『人類最悪』の生存を知って。

彼女の仕事を手伝って。

たくさんの人間と出会った。

自分の中の鬼を隠しながら、暮らしていく日常。

案外、それは悪くなかった。

だから僕は恐れる。

人である時には鬼が。

鬼である時には人が。

それぞれ互いを憎み、忌避する。

（哀川さんに会う前だったら、僕は真九郎くんらに知られても、何とも思わなかっただろうな）

その頃はまだ、殺すのが不愉快なだけで、今よりは零崎をしていた気がする。

もしかしたら、真九郎が紫を助けるのを手伝わなかったかも知れない。

十分に有り得る話だ。

どころか、崩月だとわかった瞬間殺していたかも。

「……………は」

下らない。

下らない上につまらない考え。

純度100%の戯言だ。

真九郎達と出会ったことは、もはや変えられない。

変えられないことを悔やんで、何になる。

後ろに何がある？ 思い出はアルバムだとも思え。

そうかつて、自分は真九郎に言っていたではないか。

前言撤回にも撤回していいことと悪いことがある。

これは確実に後者。

「……………今更、だな」

今更、こんな事を気にしてどうするんだ。

人と鬼との狭間。

出来損ないの音使い。

マガイモノの殺人鬼。

そんな肩書き、もう背負いなれている。

「悩めばいいんだ」

死ぬまでずっと、そうやって我慢し続けねばいいんだよ、零崎夕識。

歓楽街の一角。

息苦しささえ感じる程、乱立するビル群。

その筈よろしく聳え立つビル群の中の一棟。

その地下二階。

【Piano Bar】

【Crash Classic】

そう書かれた扉の前で僕は立ち尽くしていた。

「来ちゃったな」

「ああ、来たな」

「来ちゃいましたね」

「……曲兄、留守だといいなあ」

「そこでそのパ口を持ってくる意味がわからん」

「それ以前に、当初の目的から著しく矛盾していますね」

後方二人からのダブルツツコミ。

「いや、僕たちは人兄さんと違って、事前に連絡してないし、日を改めて」

「……例を見ない見苦しさだぞ、今のお前」

人兄は付き合いきれんと言わんばかりに、何の躊躇も無く、蝕織と共に店内に入っていく。

悲痛な叫びも虚しく、観念して僕も店内へ。

五年前となんら変わらない。

それが僕の抱いた感想。

綺麗に清掃された床。

ボルトで固定された5つの机。

わざと薄暗くされた店内。

そして ステージにセットされたグランドピアノ。

「……曲識のにーちゃん」

「曲兄さん」

人兄と蝕織が、グランドピアノの前で深々と椅子に腰掛け、天井を眺めている男性に声をかけた。

「人識、それに蝕織か」

黒い燕尾服。

ややウェーブのかかった黒髪もそのまま。

ただ 髪だけが床につく程長い。

その点だけが、僕の知る曲兄と違う点。

「夕識も一緒だな」

目敏く、部屋の隅に移動しようとしていた僕を見つける。

「……久しぶり、曲兄」

「ああ、確かに久しぶりだ。悪くない」

【少女趣味】
ホルトキーブ
そう言った。

零崎曲識は、相変わらず感情の読めない表情で、

アメリカのヒーローで好きなのは、オプティマスプライムです（前書き）

戯言以外の西尾先生作品キャラが登場。

又、奈須きこの先生作品のキャラが、名前のみ登場します。

読む上での支障はありませんので、小ネタのようなものだと思って
いてください。

アメリカのヒーローで好きなのは、オプティマスプライムです

いや、逢いたくなかったわけじゃない。

しかしながら、家出同然で飛び出した身の上としては、色々話すには気まずいわけで。

「悪くない」

平淡な口調で曲兄は言う。

「人識、お前が来るとは聞いていたが、夕識と蝕織を連れてくるとは思わなかった。

蝕織はともかく、風来坊なお前と、行方知れずの夕識とはもう逢うことは無いと、そんな覚悟を決めていた。それなのに、お前達のほうからこうして僕を訪ねてくるとは、まったくもって、悪くない」

ああ、そっか、僕の動向を知ってるの、家賊内では双兄、軋兄、人兄、蝕織だけだもんな。

行方知れずと思われてても、当たり前か。僕にしたって、知られたくはなかったけど。

「……無駄話に花を咲かせるつもりはねーよ、曲識のにーちゃん。

それに、俺だつて来たくて来たわけじゃねえ」

「家出したも同然で飛び出した人間が、今更どんな顔して来ればいいのさ。深淵夢想さえ壊れなきゃ来ようとなんか……」

人兄が悪態をついて、僕が愚痴るような呟きをした。

「相変わらず　　礼儀がなつてないな、お前達は」

曲兄は気だるそうにため息をついた。

少なくとも、僕にはそう見えた。

「ぐっ！　あ、が……っ、ぐ……」

「がっ！　……い、痛っ……っ」

突如、僕と人兄の膝が落ちた。

予測不可能な事態に、僕らの身体は無様に床へと崩れ落ち、身体の筋肉運動から考えて、手と足が有り得ない方向に曲がり、さながら某恐怖映画のような姿になる。

「人識はともかく　　お前は僕的能力を忘れてはいないだろうな、

夕識 僕は音使い。音によって他人の心理や行動を操ることができる。心身操作こそが、零崎曲識の真骨頂だ」

「いやっ……て、あんた、今は音なんて出してなかっただろうが」

「そ、そうだよ！ いくら曲兄でも、一瞬でここまで身体支配が出来るわけ……」

「お前達は変わらないようだが」

曲兄はただ言葉を発す。

「僕は年月が経てば成長する いつまでも昔のままの僕ではない」

「は、はあ？」

人兄がわけがわからない、といった声を出すのに対し、僕は奇怪な体制のまま考える。

音は確かにしなかった。

どこるか、曲兄は動いてすらない。

音に音をぶつけて、音を消すにしても、操作するための音を消しては意味がない。

音が聞こえないなら尚更。

(……音が、聞こえない?)

「あ!」と僕は声を上げる。

「……ち、超音波」

「その通り。人の聴覚では知覚できない領域の音を、この店内では常時流し続けている。壁の内側に埋め込んであるスピーカーでな。お前が出ていった後、蝕織と共に考え出したものだ。」

「瞬とは言わないが、数分も滞在すれば、その身体の指揮権は僕へと移る。」

729

目線だけ蝕織に向けると、このガキはやっぱり口笛を吹き、超音波による音を遮断していた。

「残念でしたね、お二方。」

嫌みつたらしく笑みまで浮かべられた。

マジで最悪。

人兄が曲兎を睨み付けたところで、ようやく身体の支配権が戻ってくる。

（まさかこの歳になってまで、地べた這いつくばらされるとはね）

ここにいた頃は、何かやるとすぐ精神操作されてたっけな。

なーんも成長してないや、僕。

「随分とまあ、僕のいない間にここも変わったもんだね」

「変化の無いものなど有りはしないさ。その変化までの時間が、遅いか早いかだけだ。ただまあ、このバーでピアノを弾く役だけは、変わらせるつもりはないが」

「へえ、そりやまたどうして」

人兄が茶化すように聞く。

「僕が音楽家だからだ」

僕にとっては、もはや分かりきった答え。

「貴方は、やっぱり変わらないよ。曲兄」

「悪くない」

そう言って、曲兄はピアノの鍵盤を叩き出す。

複雑なメロディが、周囲の空間を支配する。

僕は壁に寄り掛かって、その精錬された音の流れに身を任した。蝕織は顔を綻ばせながら耳を傾け、人兄も真面目に聞いているわけでは無さそうだったが、一応は観客としての役割を果たしている。

そう　この音楽だ。

かつて、自分が愚かにも目指した孤高の音色。

イカロスよろしくと言うわけではないが、究極の音楽を目標としたが故に、僕は半端な音使いへと身を落とした。

それは誰のせいでもない。

自分が、自分で望んだ結果だ。

最後の和音を聞き取って、僕、蝕織、人兄が思い思いに拍手した。

「　変わらぬお手並みで」

「綺麗な音色でした。私が少し成長したつもりでも、曲兄さんの音楽は、未だに言葉で言い表すことは出来ません」

「傑作だぜ　よくまあ、そうも複雑に指が動くものだ。俺にや

クラシック音楽の良し悪しはよくわかんねーけど、音楽家のその繊細さだけにゃ感心させられるものがある」

「悪くない　お前達からの拍手も、悪くない　だがまあ、僕の望んでいる拍手とは違うな」

僕らが首を傾げると、曲兄は「何でもないさ」と答えを濁した。その後しばらくは、人兄と曲兄がとりとめのない会話を続け、その間僕は椅子に腰掛けていた。

感傷か、くだらん。

以前九鳳院蓮丈が、蒼樹さんを思い出して呟いた独り言。成る程、確かに感傷というのは下らないな。

あの時は、蓮丈のこの態度が気に食わなかったが、案外否定すべきでは無いのかも知れない。

(自分で出ていっておきながら　)

この場所が例えようもなく尊いと思う、なんてさ。

「夕識」

よく通る声がして、僕はようやく曲兄に話し掛けられたのに気が付いた。

「どうした。人識が珍しく饒舌だというのに、お前が反比例して黙りとは」

「人兄は元々饒舌キャラだ」

「勝手に俺のキャラを設定すんじゃないよ」

人兄のぼやきが聞こえたが、否定しないのを見ると、多少自覚はあるのかも知れない。

「……まあいいさ。それで？ 何の話だったかな 義手、だったか？」

話の脈絡がまるで無い。

人との対話が苦手なもの、曲兄の変わっていない点。

「人識は義手。ではお前達はどうした？ まさか気まぐれ、というわけでもないだろう」

「……」

僕は無言で、蝕織に向かって顎をしゃくる。

お前が話せ、という合図だ。

蝕織は一瞬不満そうに顔をしかめたが、やがて口を開いた。

「お兄様の鎌、というか笛の 『深淵夢想』 の修理です」

「修理？」

曲兄は表情こそ変えなかったが、声に僅かな疑念を含ませた。

「チューニング調律ではなく、修理か？」

「はい」

「そうか。確かに、積雪さんが向こう20年調律はいらないと
言っていた以上、その理由で訪れる可能性は無いな。修理というと、
戦いに使って破損したという事か？」

「……はい」

破損させた本人が、少しばつが悪そうに答える。

「えっと、柄の部分で、真っ二つに……」

「ほう。あれを真っ二つにするとは、大した奴もいるものだ。楽器を狙つての攻撃、というのはいささか頂けないがな」

「……うぐっ」

蝕織が、罪悪感から漏らした声を、僕は聞き逃さなかった。

僕ほどでないにせよ、曲兄もまた、蝕織にとっては嫌われたくない人物、ということか。
ざまあ。

「まあ、お前達の目的はわかった。しかし人識、お前の目的にはいささか、僕も疑問を覚えるな。見たところ、お前の両手は健在だ。それなのにお前が義手を欲する理由が僕にはわからない」

「俺じゃなくて、俺の……」

人兄は数瞬迷い、口を開く。

「恋人」

「ん？」

「恋人、恋人　恋人だ」

「ぶほっ！」

椅子から滑り落ちた。

恋人！ 言うに事欠いて恋人ですか人兄！

いいだろう、そこは別に友達とかで！

蝕織は蝕織で「え、え！？ 伊織ちゃんとの間でそんな話が！？」

とか言いながら戸惑ってるし！

「実は俺、最近バンド活動を初めてよ その繋がりでも知り合った

女なんだけど、これが妙に趣味が合ってたな」

「……………」

よくあそこまで流暢に嘘がつけるもんだ。

僕が半ば感心、半ば呆れながらそのやり取りを見ていると、突如曲

兄が、ばん！ と、ピアノの鍵盤に十指を叩き付けた。

某ギャグ漫画の「ギターなんか止めてやるよ！」というシーンを
僕が思い出したのは余談。

「悪くない」

ピアノに向かい放しだった曲兄はようやく人兄の方を見て、「おめでとう」と、まるで祝福するかのような、いや事実祝福してるんだろうけど、とにかくそんな言葉を投げ掛けた。

……曲兄、貴方はいい加減人を疑うということを感じるべきだ。

「おめでとうと言わせてもらうぞ、人識　まさかお前に恋人ができるとはな」

「い、いや、彼女くらいなら、これまでにもいたことあるけど」

ああ、出夢さんとな。

と僕は思ったが、どう考えてもこれは蛇足なので言わなかった。

「それに、お前がバンド活動を初めたとは知らなかった。どうだ、人識。音楽は素晴らしいだろう」

「あ、ああ」

あまりにももの食らい付きように、人兄は若干引いているようだった。人間、あまりにも物事が上手く行き過ぎると、こっぴどい事態に陥ります。

人兄が「その女がな、事故で両手を怪我しちまって、切断を余儀なくされた」と理由を纏めると、曲兄は一も二もなく、義手を用意することを約束した。

人兄はさりげなくガッツポーズする。 いい性格してるよ。

「この店の常連客のひとりに、丁度いい人物がいる……『彼』ならば、どのような義手でも用意してくれるだろう。夕識達も、それでいいな」

僕達が頷いて、日取りを明日に設定したところで、人兄が言う。

「まあ、そりゃ願ってもない話だけだな。でも、言いくいんだけど、俺、手持ちがさ」

これだけ色々言っておいて、更には金子の無心に入ろうとする手際が、いー兄と似てるって言われるんだろーな。
戯言遣い 詐欺師という図式が成り立つ。

「心配しなくていい。彼は 金銭を欲しないタイプの人間だ。夕識と蝕織は、知っているだろうがな」

うげ、と僕と蝕織がうめき声を漏らしたのをみて、人兄も何となく

察したらしい。

金銭を欲しない、それは金銭以外の何かを欲するということだ。僕らはそれを嫌というほど知っている。

まあ、僕らが深淵夢想と漆黒残響を手に入れるために支払った代償については、またの席を設けるとして、人兄と曲兄の会話は続く。

「……ちなみに、あんたは？」

「うん？」

「あんたは 紹介料つーか仲介料を、俺や夕識達から取る気はないのか？」

人兄め、余計な台詞を。

「ああ、そうだな……それがあつた。しかし、『親戚の男の子や女の子』にそんなものを要求するというのも大人気ない話か……いや、そうだ、丁度いい」

曲兄は少し離れた場所にあるキャビネットの中から、一冊のノートを取り出して、人兄に手渡した。

「これはな……最近、僕が作曲した曲だ」

「あん？」

「仲介料代わりだ、人識、『彼』から無事に義手を受け取ることができた暁には　この曲を演奏して、僕に聞かせてくれ」

人兄の顔が引きつったのがわかった。

まさかバンド云々の嘘が、ここで響くとは思わなかっただろう。
因果応報、自業自得、プラマイゼロ、むしろマイナス。

「さて、夕識、蝕織。お前達についてだが　時に夕識。ここには
どのくらいいるつもりだ？」

「は？ えっと……分かんないな。明日にでも武器修理が出来るなら、修理期間も含めて、三日か四日ってとこ」

「そうか。ならば夕識、お前はこの後、ここに残れ」

「……はい？」

「そして蝕織、お前は明日、『彼』にあつた後、ここに残れ」

「え？ 構いませんが、何をするんです？」

「なに、大したことじゃないさ。ただ　少し話がしたい。それが
お前達に対する仲介料だ」

「で……何さ、話って」

曲兄に言われるがまま、僕は一人で部屋の中心に立っている。
当の曲兄はというと、蝕織と人兄が帰った後、再びピアノを弾き出
し、今演奏を終えたところ。

天板を閉じ、曲兄は言う。

「久しぶりに、弾いてみるか？」

「いいよ。貴方の耳が穢れるだけだ」

知ってんだろ。と僕は苦笑混じりに言う。

僕は吹奏楽器しか使えない。

それは技術の問題ではなく、特異体質。ピアノなんて精密極まりな
いもの、弾きこなせるわけがない。

鍵盤の上でネコを走らせただけでも、まだ僕より世間の評価は高いだろう。

曲兄は僅かに、本当に僅かに溜め息をついた。

「別に僕はお前に、評価や演奏のセオリーを求めているわけじゃない。ただお前に弾いてみないか、と聞いたただけだ。これも、幾度となく言っただけだがな」

「なら、僕が弾かないのも自由だろ。僕が弾いたところで、一体何が残るんだよ。技術も魂もなく、人の記憶にも、心にも、何も蓄積されはしない。ただ日常に埋没していくだけの音楽なんか、弾いても苦痛なだけだ。曲兄のそれには、遠く及ばないんだよ。だから僕は」

「僕の側にいるのが嫌になった、か？」

ぴたり、と、操作されているわけでも無いのに、僕の身体はその生体活動を鈍らせた。

片や曲兄は、感情の読めない眼差しを向けてくる。

「……ちが、うよ」

乾いた唇を震わせ、僕はどうにか声を絞り出した。

「僕が出ていったのは、やらなきゃいけないことがあったからだ。それが無かったなら……」

「ならば、五年間音沙汰が無かったのは何故だ？ 連絡くらいは、寄越してもよかっただろう」

「寄越す暇なんか無かったさ。何だよ、年賀状でも送って欲しかった？ そんな情緒が、貴方にあるとは思えないけど」

「ああ、僕はまったく構わない。生まれてこのかた、手紙の返事を出した事がないのが、僕の数少ないこだわりだ」

捨てちまえ、そんなこだわり。

「だが 蝕織は泣いていたぞ」

「……」

「年賀状はともかくとして お前が失踪してから数ヶ月の蝕織の様子は、見れたものでは無かった。

『お兄様がいなくなった』とな。

お前は、零崎夕識が零崎蝕織にとって、どんな存在か、十分に理解していた筈だろう。

それを知った上で、何の連絡も寄越さなかったのなら それも悪くないかも知れないが」

曲兄は眼を放さない。

否、僕が眼を放すことを許さないのだ。

静かながらに 鋭い眼光が、そこにあつた。

「随分……、突つ込むもんだな、逃げの曲識。

ホルトキープ
少女趣味」

乾き切つた笑み。

それが僕が出来る、些細な抵抗だつた。

「小さい戦争の折にも、自ら参加しようと思はず、それ以後も家賊の戦いに干渉しようとしなかつた貴方が………どういふ風の吹き回し？」

「いやに棘のある言い回しだな、夕識」

お前らしくもない、と僕の悪態にもどこ吹く風。

いや、本当にそうか？

その表情の出にくさが、僕にとっては逆に怖い。

双兄、軋兄ほどで無いにせよ、僕と曲兄の付き合いは長い方だ。

しかし 未だに曲兄の思考は読みづらい。

果たして、今曲兄は、何を考えているのだろうか？

「 仮にも、僕はお前達を預かっていた身だからな。 気にもなるさ。それが理由にならないか？」

あっさりと、そんなセリフを言っただけ。

僕は瞠目した。

あの曲兄が、誰かとの干渉が極端に少ない曲兄が。こんなことを言うとは思わなかったのだ。

「しかしそれも、お前達が曲がりなりにも独り立ちし、僕の肩の荷も降りたと考えていた。 蝕織のことにせよ、あれはお前と蝕織の問題だ。別に僕が口出しする意味は無い。 だが、今のお前を見て、気が変わった。少し口出しをしよう。」

夕識、三週間前の今日、お前は何をしていた？」

……どきり。

「な、何だよ藪から棒に。三週間前か……、覚えてないや。テレビでも見てたんじゃないかな」

「……三週間前。都内の桜霧市という場所にある鉄橋が、突如崩落するという騒ぎがあった。それだけなら、ただ電車の発着時間が遅れるだけだろう。しかし、僕は気になる噂を聞いたのでな。少し調べてみた」

「……………」

何で知っている！

何で知っている！

「その事件があった日の当日、匂宮雑技団のエースがそこにいたのが目撃されている。鉄橋を壊したのは恐らくそいつだろう。しかし、鉄橋が崩落する少し前、二人の人物がその鉄橋の下に入っていくのも、確認されていた。」

その男女の特徴は、白い長髪の少年に、クリーム色の髪を一纏めにした少女　だそうだ」

「ハ、ハハ、ナナ何ノハ、話デショウカ。何ヲ話ソウトナサツテイルノカ、カカ皆目検討モツキマセンガ」

混乱のあまり、口調がエセ外国人っぽくなった。

「シラを切るな夕織。お前と蝕織だろう、そこで戦っていたのは」

「……あーあーあー、そーだよ、そーですよ。僕と蝕織ですよ」

聞き直すことにした。

「僕が、お前達と話したいと思ったのは、それが理由だ。お前達に何があったのかは知らないし、聞く気も無い。」

「が、決して長くない時間面倒を見た兄妹の関係が悪化したと聞いて、何もしないほど、僕も無関心ではないということだ」

「悪化ったって……、別にそんなに深刻なわけでもないよ。もしそうなら、一緒に住んだり、北海道に来たりなんかしないだろ」

「……………」

曲兄が突如沈黙した。

「…………前から思っていたが、お前は鈍感だな。蝕織の苦勞が伺い知れる」

「はあ？ 言うに事欠いて何を言ってんだ。真九郎くんじゃあるまいし」

「真九郎くん？」

「同級生の超がつく朴念仁の名前」

「類は友を呼ぶ、か」

「僕を鈍感だということ前提で話を進めんな」

「ふむ。確かに、鈍感という言葉は正しくないな。訂正しよう。お前は周りが見えていないんだ」

「もっと評価が下がった気がすんだけど」

周りが見えていないってのは、双兄みたいな人を言う。

「まあ、これに関しては、お前が自分で気付かなければ意味がないだろうからな」

自分で気付かなければ意味がない、ね。

以前、僕も言ったな、真九郎くん。

でも今回ばかりは、検討がつかない。

蝕織や曲兄が、僕に何を気付けと言っているのか。

僕の話は終わりだ、と締めくくり、僕は曲兄に背を向けた。

若干、急ぎ足になったのは否定しない。
長時間の攻め口に等しい話し合いに、身体が虚脱感に満ちていたの
である。
早く休みたいと、扉に手をかけたところで、曲兄が「夕識」と呼び
止めた。

「……んだよ」

少し不機嫌に僕は言う。

「これはお前の為ではなく、蝕織の為に言うが」

「……？」

「蝕織は」

お前が思うより、ずっと繊細だぞ。

「むー、分かりませんねえ」

翌日。

ホテルの一室にて、僕、蝕織、伊織ちゃんは暇を持て余していた。

人兄が先に積雪さんと交渉し、次に僕が交渉という手筈だったので、時間はまだ有り余っている。

こうしてる間にも、積雪さんの非情な料金請求が、人兄に課せられていると思うと、こうしてのほほんとする僕らは結構罪深い。

「分かんないって、何が分かんないですか？ 伊織ちゃん」

「何かも何も、昨日人識くんから貰った楽譜がですよ」

腕が使えないため、口で器用に（口でくわえたペンで捲ればいいのに）、例のノートを捲る伊織ちゃん。

「ああ、昨日曲兄さんから貰ったノートですか……ってうわっ、何ですか、この音符の量」

「作品NO.200『ぎっこんばったん』だそうです。

これだけ聞くと、みんなの歌で流れてそうな簡易曲なんですけどね」

「確かにこれは、子供が弾けるような曲じゃないですね……と言うより」

「ええ。こんなの、大人でも弾けっこありません、てか、どんな人でも不可能です」

「和音は和音でも、人間の指はここまで開けませんし、届いたてし

ても、次の音に繋がませんね」

「ちよい見して」

そう断って、ひょいと楽譜をつまみ上げる。

「うーん。人間の指が十本である以上、そもそも物理的に演奏は不可能か……。」

かと言って曲兄が、弾けないような曲を創ると思えないしな。

……にしても、音符の色の濃さがバラバラだな。
違うシャープンで書いたのか……ん？」

違うシャープン？

濃さの違い？

引っ掛かるものがあつた。

(そついや、ぎつこんばつたんの英訳つて……)

考えついたことに注意し、もう一度楽譜を読み直す。

「……………」

読み終えた時、可笑しさでつい笑ってしまった。

「ぶ、くっ、あはははー！」

「むむつ、夕識くん、その余裕の笑いはもしや……」

「うん。解ったよ」

「えつ、お兄様解ったんですか？」

「ああ。お前も少し頭を捻れば分かるよ。」

「しっかし、あの人も可愛いところあるね。何が仲介料だよ、ただのお祝いじゃん」

「はい？」

「ん、こつちの話」

伊織ちゃんにそう誤魔化して、ふと蝕織を見ると、楽譜の意味が解らないのが相当悔しいらしく、黒く優美な瞳で、ノートをガン見していた。

曲兄はこいつが繊細だと言う。

そりゃあ、小さい時は人見知りだったし、内気で傷つき易いやつだったけどなあ。

今となつちゃ、その欠片も無い。

こいつの泣き顔なんて、もう久しく見ていないし、僕に対しては大抵、怒っているか笑ってるか。

良くも悪くも、真っ直ぐに生きているヤツなのだ。

……まあ、その真っ直ぐな性格のせいで、感情の軌道修正が効かな

いだから、悪いことなのかも知れないけど。

頭の中で話題を広げるのを止め、蝕織から目を放す。

「伊織ちゃんってさ、ここに来るまでその腕不自由じゃなかった？」

「はい？ うーん、確かに一人で靴ヒモが結べないのには困りましたけどねー」

「その程度の困ったなんだ……」

確かにそれも困るだろうけどさ。

「それに、人識くんもいましたからねー。何だが、私と似たような境遇の方と、一緒にいたことがあるらしくて」

「へえ……」

多分、出夢さんのことだろう。

普段から両腕を拘束しているのだから、言われてみれば似たような立ち位置ではあるかもしれない。

「人兄も面倒見がいいね。僕もそういう経験あるから、そういうのが大変だったのはわかるから言うけどさ」

「おや、夕織も経験あるんですね。バイトか何かですか？」

「んー、ド短期のバイトだったんだけどね。両腕と両足がごっそり無くなってヤツを世話したことがある」

「うわー、随分とツライ過去を背負っていきそうな方ですね。

四肢が無いとなれば、苦勞もひとしおだったんじゃないですか？」

「まあね、そいつ引きこもりだったから、外に出ることがなかったのが救いだよ」

そっぴやあれから会ってないなあ。

今頃なにやってんのかね。

迦遼海江は。

「まあ、その苦勞はさておき、人識くんが面倒見がいいって言うのはわかりますね。

『俺は兄貴以外を家族だなんて思ったことはねえ』とか言いながらも、ここまで付き合ってくれてますし」

「嫌じゃないの？ いくら家族だからって、身の回りの世話までやるとかさ」

「家族だから、ですよ」

「……左様ですか」

人兄としちゃ、こっぴう理由なく頑張ってる子とかは我慢出来ないんだろうな。

そう理由づけて、ふと時計を見ると、時間的には丁度いい頃合いだった。

「んじゃ、僕もいきますかね。 蝕織、僕が帰るまでに、楽譜の謎解いてみな。僕からの宿題」

蝕織と伊織ちゃんの「いつてらっしゃーい」を背に浴びながら、僕は部屋を後にした。

「……」

「やあ、久しぶりですね。夕識くん」

……うん、とりあえず状況を説明しますね。

二人の家族に見送られ、クラシッククラシックにたどり着いた僕を待ち受けていたのは、ハルクよろしく身体を紫色に染め、部屋の床に大の字に倒れる人兄と、前にあった時と何ら変わらぬ微笑を浮かべる罪口積雪さんでした。

説明終了。

「……えと」

言い淀んで、人兄へのフォローを探す。

「……ハルクは子供に受け入れられない風潮があるけど、僕は素朴なモンスターヒーローとして親しみを持てるよ？」

「的確かつ腹の立つ意見実に痛み入るよ。

そんな可愛いお前のためにいくら突っ込みを入れるとするならば、まずフォローすべき対象が根本的に間違っていること、そしてハルクは紫色じゃなくて緑色だ」

ごめんね人兄。

全身が紫色で、イメージのいいキャラクターが思い付かなかったんだ。

「随分スプラッタなもん見せてくれるね。積雪さん」

ぐったりな人兄から目を放し、恐らくはこの犯行に使われたと思われるブラックジャックを、丁寧に袋へ入れる積雪さんへと視線を移す。

「ただの代金ですよ。それに、この程度で動揺するキミでもないでしょう」

あっさり犯行を認める犯人さん。

これが殺人事件だったら、警察も探偵もいらない。

どうしても言うなら33分探偵を呼べ。

「確かにそりゃそうだし、そちらさんの経営方針に口出すようなマネはしないけど……」

「それは重畳。

で、確か私の作品の修理でしたね」

「うん」

かたり、と深淵夢想（かつてそう呼ばれていたもの）を机の上に。

「ふむ……。これはまた、派手にやられましたね。作ってから数年が経過しているとはいえ、強度は自信があったのですが……」。

まあしかし、直せないほど破損されていないのは救いですね。これならば修理は可能でしょう。

しかし見事な切り口だ。

失礼ですが、一体誰がこれを？」

「あー、その」

蝕織、と言つのが少し憚られる。

同作者の武器で戦ったとあれば、作ったこの人に申し訳ない気がする。

「……斬島切彦に」

迷い迷つて、彼女の名前を使った。

「斬島……。なるほど、裏十三家ですか。

それも斬島で切彦を名乗る人間とは……。

いやはや、相変わらず波乱万丈な生き方をしているようで」

「ははは、ほつといて下さいな」

人間、表情と感情が一致しないことなんて多々ある。

「こつちだって嫌ですよ、望む望まないに関わらず、変人奇人と関係性ができちゃうんですから」

「その言い種だと、他の家とも繋がりを持ったのでしょよね」

「うん。積雪さんが昔言ってた星嚙にも会った」

「星嚙、ともですか。それはそれは」

積雪さんがあからさまに顔をしかめた。

やっぱり、武器職人同士、仲が悪かったりするんだらうか。

「……まあいいでしょう。修理に關してですが、この程度なら一日で可能です。また明日、ここに來て下さい」

「さんくー」。

で、僕は何を支払えばいい？」

一番の問題に、僕はつつこむ。

床に転がる人兄と、先ほどのブラックジャックからも推察できるように、この人の要求する代価は、専ら他人の身体を使った武器の性能チエック。

かといって、修理を頼む立場としては、逆らうわけにもいかない。

深淵夢想 & 漆黒残響製造時に払った代価と、同じレベルにならない事を祈るだけだ。

「ふむ」と積雪さんは思案顔になる。

「そうですね。今のところ、性能チエックをするべき武器はありませんし……」

「その人兄殴打事件の凶器は？」

「その少年で試したばかりですからね。失敗点や改善点も山積みですし、現段階での性能チエックは意味がありません。

何より、もう一度これを三時間近く振り続けるのは、さすがに疲れ
ます」

「そつちが本音でしょ」

「バレましたか」

てか三時間振り下ろし続けたのか……。

もし人兄が順番先じゃなかったら、餌食になっていたのは僕だったろう。

ぐっじよぶ、人兄。

「しかし、試すべき武器がないのは本当なんです。さて困りましたね。修理する以上、何らかを得なければ」

しばらく積雪さんは唸り、ふと視線を店のステージ上にある、グラウンドピアノに移した。

「夕識くん、キミは曲識くんから、音楽の教えを受けた身ですよね」

「は？ うん、まあ一応は」

弟子と呼べる才覚があるかどうかは別だけど。

「私がここにくる目的を、仕事以外に知っていますよね？」

「曲兄のファンだからでしょ？」

「その通り。平たく言えば、音楽を聴きにきている。」

「……………」

まさかまさかまさかまさかまさかまさかまさか！

僕が心中奇声を発する中、積雪さんは僕にとって、死刑宣告にも等しい代価を請求した。

「夕識くん。私の前でピアノを弾いてみて下さい」

「い……いや、積雪さん」

「なんでしょっ」

「貴方は、僕に、ピアノを、弾けと、おっしゃ、ったの、ですか？」

区切りが微妙に悪くなった。

「はい」

「今どこぞ？」

「当然です。それに聞くところによると、現在貴方の住所は都内らしいではありませんか」

そこまで行って聴くほど、私も暇ではありません、と至極ごもつともな意見。

「でででもさ、僕の音楽、いや音の羅列、いやノイズなんて、聴く価値ないよ？ 時間の無駄だよ？ 人生の浪費だよ？」

「人生に無意味なことはありませんよ。まあ、それがいい結果に繋がるか、悪い結果に繋がるかは別ですが」

「だ、第一さ。あのピアノは曲兄に所有権があるわけで、それを僕が勝手に使った場合、決して少なからず問題が……」

「僕なら構わないぞ、夕識」

いつの間にか部屋の隅に曲兄がいた。

何この人、SHINOBI？

崩子ちゃん？ 弥生さん？

「夕識くんが弾かないというのならば、それは別に構いませんが、さすがにそれでは修理は引き受けられません。」

他の代価の選択をするにしても、現段階で私が夕識くんに提出できる代価はこれしかないのですよ」

う、ぐっ……。

それを言われると、立つ瀬がない。

深淵夢想を直せるのはこの人だけだし。

「なんで曲の二つや三つ出し渋ってんだよ。弾きゃいいじゃねーか」

痛みで床に転がる人兄が、うめくように言う。

わかってない人兄！ 僕の音楽の恐ろしさをあんたは知らない！

「では、どうしますか？」

積雪さんが、腹に一物ありそうな笑みを浮かべる。

……あー、わかりましたよ。

わかりましたよ！

どのみち僕に選択の余地はねーさ！

「やりゃいいんでしょ、やりゃあ！」

完全に逆ギレだった。

躊躇する自分を抑え込んで、グランドピアノの前に腰かけた。

「調律はされているし、楽譜もそこにある。存分に弾け」

「用意が良過ぎだ！」

絶対あんた、積雪さんとグルだろ！

昨日弾かせられなかった音楽を弾かせようとしてるだろ！

罵倒の言葉の奔流を止め、鍵盤を軽く叩く。

確かに調律はされている。

一点の音ズレもない。

そして、僕の逃げ場もまた、何処にもない。

「……はあ」

諦めの溜め息をついて、僕は両の指を動かし始めた。

たん、と最後の鍵盤を叩き終えて、僕はこの拷問に近い演奏を終えた。

恐る恐る、鑑賞者三人の様子を見る。

曲兄。もはや慣れた話なので、表情を変えず、軽く拍手。

積雪さん。同じく無表情。だが、若干困ったような表情をしていた。

人兄、うつ伏せの体勢変わらず。しかしダイイングメッセージでも

書きそうな推参な状態。

「……』なんで曲の一つや二つ出し渋ってんだよ。弾きゃいーじゃねーか』」

「いや、うん。その何て言うか……本当にごめんなさい」

人兄がキャラを壊してまで謝ってきた。

心の中では、数分前の自分に対する文句で一杯だろう。

「どこをどうすりゃそんな曲調に成り得るんだ……。音が軽く衝撃波になってたぞ。音が武器になるっつっても、こりゃただの暴音だろが」

「だから嫌だったんだよ、わかった？ 僕が弾かない理由」

「ああ、十二分にな。にしても痛って……。傷に音の塊がぶつかりまくったぜ」

どうやら、音が傷に染みたのが、グロッキーの原因らしい。

期せずして、人兄にトドメをさしてしまった。

「ゼロ弾きのゴーシユの音楽を聞いたかつこうが、こんな気分だったんだろーな」

「音を聞いて身悶えしたなら、かつこうじゃなくて三毛猫が正解だよ。」

さて、これで代価は払ったよ。積雪さん」

「ええ。存分に鑑賞させて頂きましたよ」

深淵夢想の残骸を受け取った積雪さんが言う。

「実に興味深い曲でした」

「変な慰めならいらない」

「いえいえ、本心です。確かに評論をつけるなら、測定不能としか言いようがありません。」

しかし、特質して評価すべき点があるのも事実です」

「へえ、そいつは是非知りたいね？」

皮肉めいた笑いを浮かべ、積雪さんを軽く睨む。

「向上心、ですよ」

「……………?」

「私や曲識くんのように、何かを極めようと思う人間は、ある一線を越えると、多かれ少なかれ、それへの向上心が薄れるものです。もちろん、私達は向上心が無いとは言いませんが、スタート時点と比べれば、それが薄れているのは否定できません。」

□でああは言っても、夕識くんだって音楽を諦めたわけではないでしょう?」

「……………」

「スタートが零から始まるからこそ、貴方は向上心はずば抜けて高い。」

それは時として、何物にも替えがたい財産になる。

全く、羨ましい限りです」

そう評価を下し、積雪さんはクラシッククラシックを後にした。

「久々のピアノはどうだ」

「最悪の気分だよ」

「ふむ、本心か？」

「本気と書いてマジだ」

大事なのでもう一度、本気と書いてマジだ。

もう恥ずかしくて仕方ない。

この記憶を頭から取り出して、金庫に入れ、それをテープで嚴重に縛り、煮沸処理やレーザー処理諸々を施した後、そのまま地中海にでも沈めてしまいたいくらいに。

「僕は悪くないと思うがな。あの音は、僕でも出すのは至難の技だ」

「イヤミかコノヤロー」

「いや、本気と書いてマジだ」

……。

キャラ壊しはもう止めよう。

「いかに暴音と呼ぶ音楽だとしても、それを誰かが音楽と呼ぶ限り、それは音楽だ。」

世の中には、楽譜に音符が存在しない曲も存在するからな」

「詭弁だよ、そんなもの」

「夕織。自分の実力を分析するのは大切だが、それと自分を卑下し過ぎるといふ行為は全くの別モノだ。」

お前は、自分が思う以上に、実力のあるヤツだよ」

自信を持って。

そうは言われても、僕はいまいちピンとこない。

いつから僕は、曲兄の言葉さえ、心の琴線に響かなくなってしまったのだろうか。

「お前は僕を目指すな。
お前はお前でしかないんだ」

ふと、曲兄がそんなことを言ってきた。

「お前は零崎夕識であり、僕は零崎曲識でしかない。
お前の役割は、お前以外には務まらないんだ。
例えお前が出来損ないであったとしてもな。 それに」

お前 零崎夕識が僕らの家族であることには、変わらない。

「……………っ！」

数秒間の思考停止。

その後に僕がとった行動は、床に倒れる人兄を引っ張って、クラッシュクラシックから出ることだった。

人兄の悲鳴が聞こえた気がしたが、僕の耳にはまるで入らない。

あるのは、曲兄が言ったことを反芻する自分。

やばい。本気で泣くかもしれない。

無我夢中で、クラッシュクラシックの扉を開け、目の前にいたのは
蝕織の顔。

しまった。

蝕織も曲兄と会うことになってたんだ。

「あ……」

蝕織が僕の表情を見て、か細い声を上げる。

今の僕の顔は果たして、どんな感情を表しているのだろう。

「……………見んじゃねえバカ」

本日三回目のキャラ壊しをして、蝕織から逃げるように、僕は地上へと続く階段を駆け上がった。

その後はもう無我夢中だった。

果たして本当にホテルまでの道のりを歩いているのかどうかさえ曖昧で、人兄の姿が一目につくことさえ、省みていなかった。

「……………おい夕織。いい加減放しやがれ」

そう言ったのを聞いて、僕はようやく人兄を解放する。

「まったくめえは……………。今の俺は全身が内出血状態なんだぜ？腕掴まれるだけでもかなり苦痛なんだよ」

「……………、しめん」

これに関しては僕が完全に悪いため、素直に謝罪する。

ちなみに人兄は、あの刹那で、ちゃんと義手の入ったケースを持っ
てきている。

「で、いきなりどうしたよ」

「……わかんない」

正直な気持ちだった。

曲兄の珍しく『家族』宣言に驚いたから？

自分が出来損ないであることを、曲兄が享受してくれたから？

真っ向から、自分の価値観をひっくり返されたから？

わからない。

全くわからない。

自分自身が。

「わからないんだよ……全然」

人兄は「ふーん」と適当な相槌を打つ。

元からあまり興味が無かったのだろう。

「お前が言うなら別にいいけどな。
どのみち、さっさと帰るつもりだったし。
早いトコ戻ろっぜ」

「うん」

思考を一時切り替え、帰り道をシュミレートする。

ホテルからここまでは以外と遠いため、バスやタクシーを利用するのが得なのだが、今の人兄の姿では、確実に奇異の眼差しを向けられる。

かといって歩きでもそれは同じ。

「どうするよ、人兄」

「どうもこうも、ベストも羽織れないんだぜ俺は。どっちだって一緒だろ」

お前が決めると言いたいらしい。

究極の二択だ。

しかも、考えるのすら億劫なタイプの問題。

「ん？ お前夕識か？」

僕がこの世の不条理を絵に描いたような問題に悶々としていた時、背後から聞き覚えのある声があった。

振り向くと、そこにはこの何の特徴もない通りには、およそ不釣り合いな女性がいた。

万人が認める美貌に、ワインレッドのスーツ。

トレードマークたる、肩に羽織ったトレンチコート。

「紅香さん」

そこには誰であろう、超一流の揉め事処理屋、柔沢紅香が立っていたのだ。

「やっぱりお前か。まあお前の場合、後ろ姿でわかるな」

「白髪のこと言ってるんだっいたら怒ります」

「ははは 冗談だよ。で、どうした。旅行かなんかか？」

「そんなもんです。紅香さんこそ、仕事ですか？」

「まあな。最近仕事量がぐっと増えてな。真九郎のヤツに幾つか頼もうかと思っただくらいだ」

「……紅香さんの依頼の場合、どんなものにせよ真九郎くんは命懸けになる気がします」

「一流に成りたいなら、どんなことにも命懸けでやるべきだよ。ん？ そっちの色々面白い格好のヤツは誰だ？」

ようやく紅香さんは、ずっと僕の後ろで渋い顔をしていた人兄に気が付く。

「……おい夕識。このどことなく、俺が不殺を強いられる理由になった請負人を彷彿とさせる女は誰だ？」

ああ、渋い顔をしてるのは哀川さんを思い出したからか。

「揉め事処理屋の柔沢紅香さんだよ。紅香さん、こっちは僕の兄貴の零崎人識です」

「ほう、お前が潤の言ってた零崎の秘蔵っ子か。類にデカイ刺青　なるほど。聞いてた容姿にびったりだ」

「かはは。意外に知られちまってるもんだな、俺も。

こつちも聞いたことあるぜ。あの人類最強と肩を並べる、凄腕の請負人がいるって噂。

あんたがそうだな」

「請負人じゃあない。揉め事処理屋だよ、零崎人識」

紅香さんはそんなやり取りを楽しむかのように、ゆったりと煙草を吹かせている。

「俺をどうこつしたりしないのか？

今の俺、超敏感肌だから、デコピンでもダウンだぜ」

「年下の男虐めて楽しむ趣味はないよ。子供が被害に合っつて事件とかはキライでね」

「子供扱いかよ」

「見たとこ、まだ未成年だろ」

「……傑作だぜ」

ずっと仏頂面だった人兄は、口の端を吊り上げて笑う。

若干引きつった笑みではあったけど。

「……やれやれ。」

それで、紅香さん。これから帰りですか？」

「ああ、粗方片付いたしな。」

ジユウに土産でも買って帰ろうかと思ってる」

あ、そっか。お子さんがいるんだっとな。

まだ会ったことないけど。

「一応ここ地元なんで、土産屋紹介しましょうか？」

「お前にしちや気が利くな。何かわたしに頼みたいことでもあるのか？」

「話が早くて助かります。
あのカスタム車、乗ってきてますよね。
だったら、ホテルまで送って貰えませんか？
人兄がこんな有り体なんで」

結局、紅香さんのカスタム車に乗っかり、僕らはホテルへの帰路につく運びとなった。

人兄は相当しんどらしく、後部座席に乗ったとたん、寝息をかき出した。

それを確認して僕は、ふと思い出したように、運転中の紅香さんに話し掛ける。

「紅香さん。本物って何なんでしょうね」

「ん？」

「いや、前に紅香さん言ってたじゃないですか。
世の中本物　つまり最高や最悪になれる人間はいない。
みんな紛い物で半端者だって」

「ああ、言ったな。そんなことも」

紅香さんは至極どうでも良さげに、煙草を車内の灰皿へ。

「それがどうした？」

「いや、今だから言うことなんですけどね。

その話を聞いた時、何を言ってるんだか。とか思ってたんですよ。

半端者は半端者で、本物は本物、それだけのことだって」

怒られるかと思っただが、紅香さんはさして気にしていないらしく、ただハンドルを切っている。

「……僕が、兄貴の中一番尊敬してる人が、ある分野において、本物だって言える力を持つてるんです。

僕は、あの人を見てきたから、いつかあの人みたいになりたいって、ずっと思ってたんです。

それが間違いだって気付いて、あして、僕はずっと、半端者だ偽物だって思いながら、本物の影から逃げてたんです」

人間にも、音使いにも、殺人鬼にも成りきれず、ただその差異に苦しみ続ける。

そうやって生きていくのだと、思っていた。

「でも 本物であるはずの兄貴に言われたんです。例え僕が出来損ないでも、兄貴は兄貴、僕は僕なんだから、自分を目指したりはするなって」

急に、迷子になった気分だった。

目指すべき場所が突如地図から消えたような感覚。

けれど同時に ほんの少しだけ、すっきりした。

「どうなんでしょうかね。」

これくらいの言葉で揺らいでしまうような僕がズレてるんでしょうか？ それとも、これでいいんでしょうか？」

「ふーん。ま、いいんじゃないか？」

しれっと、一太刀の元に僕の心境をぶった切られた。

「……紅香さん、僕結構真面目な話してると思うんですが」

「ああ、だから真面目に答えているさ。
いーじゃないか。すつきりしたんだったらさ。
そりやお前が、一步前に進んだって意味だ。
気持ちに区切りをつけて、先に行くためのさ。
お前が出来損ないだと思いつぱなしのままなら、お前は真九郎から
何を見たのかわからないだろ」

確かに、真九郎くんは変わった。

過去のしがらみを振り払い、前に進んだ。

僕に出来なかったことを、彼はやってのけたのだ。

その過程を見てきた僕が何の変化もないなら、確かにそれは怠慢と
呼べるのかもしれない。

けど、だからといって。

「……そんなもんですかね」

「そんなもんだよ。」

お前は四の五の考え過ぎなのさ。

わたしだって、理屈に頼る時もある。

けどな、大事な事は直感で選ぶようにしてるよ。そーいづのは、考

えれば考えるほど泥沼に填まるからな」

さくつと決めればいいのさ、とあっさり言っただけのこの人は、やはり哀川さん同様に器が知れない。

その器をもってして、全てを呑み込むような度量の高さ。

「……とんでもない人です、あなたは」

「何だ、今頃気付いたか？」

悪戯っ子のように微笑む姿からは、さっきの雄大さは伺えない。

とんでもない人であると同時に、よくわからない人だ。

「あ。そう言えば紅香さん」

ついでに思い出したことを聞いてみる。

「本物が半端者の話した時に、世の中にはただ一つだけ『本物』と呼べるものがあるって言っていましたよね」

あの時は、答えを教えてくださいなかつたが。

「あー、それが……。」

実のところ、わたし自身もわからないことだから、わたしの持論なんだがな」

「構いませんよ」

紅香さんから受け取った煙草を灰皿に入れ、続きを促す。

「努力する人間だよ」

「え？」

「最高や最悪、つまり本物に成れずとも、それに向かって走り続ける人間だよ。

人生とは生きることであつて、生きた結果ではない。

昔の偉い奴が言ったんだけど、実際その通りだと思うよ。

双六とかと一緒に。あれつてゴールを目指すゲームなのに、むしろ過程を楽しむゲームだろう？

本物に近づいていく過程 絶ゆまぬ努力やそれに向かう精神力。

それだけは誰にも否定できない『本物』だよ」

「その理屈で言うと、本物になるのはつまんないってことですか？」

「さあな。わたしだって『本物』ってわけじゃないだろうし、それこそ潤にしたって完全に『本物』とは言い難いし……。というか、最高や最悪ってのは、気味が悪いだけなんだよ。人間ってのは、欠点があるからこそ人間だからな」

「……なるほど」

努力 向上、か……。

積雪さんも似たようなこと言ってたな。

それが事実かどうかは定かではないが、変に頷けられる理屈だった。

頷けるというだけで、正しいとは言い切れないが。

「……こんな理屈でいいんですかね」

「納得出来ないならとことん悩めよ。他人の理屈に逃げることはい

つでも出来るからな。　　「と」

ブレーキがかかり、車は綺麗な弧を描いて、僕達の泊まるホテル前に停車した。

「着いたぜ、お客さん」

「どーも。人兄、はよ起きれ」

「……安心しろ、今のブレーキで目が覚めた」

ブレーキの反動が堪えたらしく、人兄は礼も言わず、車から降りてふらふらとホテルの扉へと消えていく。

「かなり憔悴してるなあ……」。

それじゃあ紅香さん、これが土産屋までのメモです。息子さんによろしくお願いしますね」

「ああ。お前こそ、五月雨荘の連中によろしくな」

「はい」

車から降りて、人兄の後に続こうとした僕。しかし紅香さんが「夕
識」と、もう一度僕を呼び止めた。

「何ですか？」

「気休めにしかならんと思うが、一応言っておく。

真九郎や紫を助けたお前は、紛い物じゃなかったぞ」

「……ははは」

お心遣いどうも。

「ただいま戻りました」

「ん、おかえり」

紅香さんと別れたあと、蝕織が部屋に戻ってきたのは一時間後だった。ちなみに人兄はというと、隣の部屋で伊織ちゃんに義手を渡したあと、泥のように眠ってしまった。

あそこまで弱った人兄を見たのは久しぶりだ。

「早かったな」

「そうですか？ 普通だと思いますが」

「何を話してたんだ？ 曲兄と」

「黙秘権を行使します」

しれっと言い放つ蝕織。

これ以上追求してもじり貧なのは目に見えていたので、僕は話題を変えた。

「あ、そうだ。あの楽譜の謎は解けたか？ 伊織ちゃんはわかったよ」

「ええ、あの楽譜、連弾用の楽譜なんですよね。指が二十本無ければいけないから、あんなにも音符の数が多い」

「そ。正解だ」

「曲兄さんも存外恥ずかしがりやさんですよ。」

あの楽譜だと、かなり密着して弾かなくてははいけませんし。

こんなのただの前途を祝すプレゼントじゃないですか」

「僕もそう思ったよ。表現力が少ない人だからな、あの人は」

別に人兄はそういうつもりはないだろうけど、まあもしかしたら気が変わるくらいの変化はあるかも知れない。

少なくともまだ、伊織ちゃんからは離れないだろう。

それが良いことなのかどうかは別にして。

「……………」

「……………おい、どした？」

部屋に入ってから、蝕織は一步も動いていなかった。

ただじーっと、僕を凝視しているだけ。

喜怒哀楽のどの感情にも当てはまらない雰囲気。

「お兄様」

「は……、はい。なんでしょう？」

ついつい敬語になってしまっくらいに、蝕織の声は凜として迫力があつた。

「わたし、お兄様を連れて帰ります」

「……………？」

「何故、わたしがお兄様を連れていきたいか、わかりましたか？」

「……いや」

「曲兄さんの話を聞いても？」

「は？」

曲兄の話を聞いても？

「どーという意味だよ」

「わかってらっしゃらないんですね」

「なら、もう望みはありませんか」

蝕織は大仰に溜め息をついて、今度は突き放すような口調で話す。

「約束通り、一ヶ月は待ちましょう」

けどそれは、もう答えを見つける期間ではなく、真九郎さん達に別れを告げる執行猶予です。ゆめゆめ、お忘れなきよう」

「……おいてめえ、真面目な話、曲兄と何を話してきやがった」

「同じ質問を二度と答えるのは嫌いです」

そう言い放って、蝕織はシャワーを浴びに、バスルームへ消える。

「……………つたく、曲兄め」

何を話したか知らないが、これでもう引き返すことは出来なくなっ
た。

さて　いよいよ、考えなくてはならない。

僕が蝕織に連れていかれないためにはどうするか。

(……………考えるまでもなく、結論は出てるな)

しかしそのためには、準備がいる。

「お兄様」

バスルームから声が聞こえた。

倫理的に色々不味いシチュエーションだが、生憎と妹に欲情するほ

ど、僕は人間として終わってない。

「何だ？」

「一緒に入りますか？」

「寝言は寝て言うつから寝言って言うんだよ」

思考の渦を一瞬で消失させた蝕織に、僕はなるだけ冷たく言葉を返す。

で、その日の夜。

僕はホテルから抜け出して、近くの公衆電話に駆け込んだ。

蝕織は眠りが深い方だから、バレることは無いだろうが、それでも早くに済ませなければ。

携帯じゃ、足がつくしな。

だが、最大の問題はそこじゃない。

真に問題なのは、今から電話を掛ける人物にある。

嫌だなー、掛けたくないなー。

というのが僕の心境だ。

いや本当、あいつには滅茶苦茶掛けたくない。

しかし、形振りかまってられないのも事実。

意を決して、僕はもう何年来、ダイヤルしたことのない番号を押して、受話器を取った。

現在およそ11時、運がよければ起きている筈だ。

数秒の待機の後、がちやつ、という音がして回線が繋がった。

「……あー、夜分遅くごめん。緋色夕介って言うってわかる？」

「ああ！」

電話先の声は、嬉々として声を上げた。

「やあやあ！ 元気だったかい、夕介くん？ いやいや、随分久方ぶりの君からの連絡に、僕はもう理性の箍を外しそうな勢いだ！ ふふふ、本当に久しぶりだね夕介くん。君が僕のいた学校に潜入して以来かな？」

「ああ、そうなるね。相も変わらず君のトーク能力には舌をまくよ。くろね子さん」

病院坂黒猫。

哀川さんの仕事の折、潜入した中学校で知り合い、行動を共にした人物。

僕の二つ年上で、変人を絵に描いたような変人。

当時僕が彼女の行動にドン引きしたのは、今でも克明に思い出せる。

「ああ、あの時は充実していたねえ。君があちこちを駆け回たよ。それに比例して、体力皆無の僕がどれだけ走らされたかと思うと僅かながらトラウマに思ってしまうがね」

「僕は君の行動がトラウマになったわ」

倉庫の鍵をハンマーでぶっ叩いた時とか、もう何をとち狂ったのかと思ったぞ。

「それよか、あんまり無駄話も出来ないんだよ。少し、頼み事があるんだ」

「うん？ 何だ、僕と話したいからっていう理由で電話してきた訳じゃないのか。やれやれ、随分と寂しいことをさらりと言ってくれるね夕介くんは。僕は決して一人でいることに耐えられる人間ではないのにさ。あーあ、君がいない間の僕の心境を聞かせてあげたいよ。冗談だよ。そんなわざとらしく沈黙するのは止めてくれ。あれからざつと四年近くは経ったんだよ？ 僕にだって友達くらい出来たさ。それで？ 僕に頼みたいこととは何かかな？」

「今の話でかなり気分が萎えたんだけど　まあ、いいや。それじや手短に言っよ」

要件を伝えると、くろね子さんは「ふうん？」と怪訝そうに呟く。

「それなら用意出来なくもないね、そんなに常識はずれのものじゃないし。しかし疑問は残るね。夕介くん、それくらいのものなら君にも用意出来るんじゃないのかな？」

「ああ、用意するだけならね。でも、あいつが知らなくて僕だけが知ってる人脈って言ったら、くろね子さんしか思いつかなかつただよ」

「ふむふむ。要は足がつくのを恐れたというわけだね。キミが代名詞で呼ぶその『あいつ』という人物に、それを知られては、君にとつて不利益になるのかな？」

「うん。出来れば、くろね子さんに頼むものを使わないのが一番なんだけど、この状況だとそうも言ってもらえないみたいなんだ」

「随分と真剣な口調だね。僕の知っているキミは、深刻な状況下においても、さながら道化のように余裕を保つ人間だったと記憶していたんだが」

道化、ね。

人間と殺人鬼の間をふらふらする滑稽な様は、ある意味道化と呼べるのかも知れない。

「くろね子さんのいうのは、ただの空元気さ。

大体くろね子さん、三日やそこらで、人間の深みにまで踏み込めるほど、人付き合いが上手くもないだろ」

「あはは、違うないね。ではそろそろ、そんな知ったかぶりの僕のために、キミを知る判断材料を提供してくれるとありがたいんだがね」

「？」

「その『あいつ』と呼ぶ人物と何かあったから、僕に頼み事があるというのは自明の理だけれど、『あいつ』との関係性を夕介くんはまだ明かしていないだろう。端的に言えば、あの三日で知り得なかった、キミの人間関係を知ってみたいのさ」

「いや、それは……」

言っているのかな。

くろね子さんは、『病院坂』でも一応は普通の世界にいるわけだし。

「おいおい、まさか夕介くんは、何のバックグラウンドも語らずにいるほど冷たい人間なのかい？ 頼み事をする以上、その理由を話すくらいの誠意は見せてもバチは当たらないよ。それに知ってるだろう？」

くろね子さんが、電話の向こうで口の端をつり上げたように思えた。

「僕は、わからないことが、嫌いだ」

「……さいでしたね」

僕は貴女のそういうところが苦手なんだ、とは言わずに、結局僕はこれまで経緯を語られる羽目になった。

色々と裏世界に関わり過ぎるような点を省いて、それを話し終えた後に、くろね子さんはしばし電話先で沈黙していた。

「……あのー、くろね子さん？」

「……櫃内兄妹二号ここにあり」

「は？」

「ん、いやこっちの話。」

しかし、なるほどね。兄妹喧嘩の後始末というわけか」

その言い方はどうかと思うが、かいつまんで言うところなるな。

「しかし……、これはあの三日間で理解していたことだけど、キミも本当に救いようがないくらい鈍感だね」

「兄貴に散々そう言われた挙句、ついにくるね子さんにまで言われてしまったか。」

僕は何度否定すればいいのかな」

「否定も何も、事実なんだから仕方ないよ。キミの妹さんの言う通り、キミが今のままじゃあ、一生気付くことは出来ないとは思ってどね。」

やれやれ、僕の身近にも色々と問題のあるお兄さんがいるんだけど、彼は少なくとも、妹を軽んじるような真似はしない人間だよ？」

「命懸けの喧嘩が妹を軽んじる行為なら、あれは不可抗力だ」

「だからそうじゃなくてさ……。」

「はあ、もういいや。世の中にここまで説得が難しい人間がいるとは思わなかったよ」

出来の悪い息子を諭すような口調で、くろね子さんはため息。

「だがまあ、キミの要件は承諾したと、ここに約束しておこう。後でメールなりなんなりして、今の住所を送っておいてくれたまえ。……あーあ、この分だと、笛吹に頼まないといけないだろうな」

「すみませんね。いきなり無理言って」

「あはは、気にするな。三日間の付き合いとはいえ、可愛い後輩の頼みだ。キミの近況も聞けたし、それでチャラにしてあげよう。暇があったらまた電話してくれ。妹さんと仲良くね」

「善処しますよ」

「それは重畳。それでは、またいずれ」

「はい。またいつか」

電話機を下ろし、この重厚なイベントを終える。

またいつか、ね。

出来ることなら、そんな機会は無いのがいんだけど。

所詮、くろね子さんは僕にとって、パラレルワールドのような存在なわけだし。

深追いしたところで、《狐》同様、因果から孤立されるだけだ。

緊張による披露で、ふらつく足を叱咤し、僕はホテルに戻った。

扉を開けて、蝕織が起きないかと冷や冷やしたが、当人はこの上なく幸せそうな寝顔を浮かべている。

くそっ、何でこいつは動いてないとこんなに可愛らしいのだからか。

曲兄やくろね子さんからすれば、普段のこいつの態度は、僕が原因らしいのだけねど。

……ああ。本当にどうしようもないな、僕は。

一番身近な家族の気持ちにすら気付けない。

安らかな寝息をたてる蝕織の髪を軽く撫でて、僕はそのまま隣のベッドに横になった。

その日の寝つき 最悪。

静かに響く音色。

薄暗い中、その音は無音の空間を支配する。

「……さすがは積雪さんだね」

一本の形に戻った深淵夢想から口を放し、感嘆の一声を漏らす。

「中々の演奏だ。腕を上げたな、夕織」

「……どーも、話し半分に取り取りましよう」

「まあ、それも悪くないだろう」

軽く手を叩く曲兄に、感情を込めずにそう返す。

1日経って、僕は再びクラツシユクラシックに足を運んでいた。

出来上がった深淵夢想の引き取りのためだ。

ちなみに蝕織は、伊織ちゃんと共に紫ちゃん用の土産巡りをさせている。

その……、保護者役を人兄に押し付けて。

「このままお前達は戻るのか？」

「ん、人兄とは流れ解散だしね」

深淵夢想をケースに戻し、肩に背負う。

久しぶりに感じる心地よい重さだ。

「では、ここでお別れというわけだな」

「そうなるね。」

曲兄、お別れついでに質問するけどさ、昨日蝕織に何言ったんだよ？」

「それを話せば、個別に呼んだ意味がないだろう」

ふむ、そりゃそうか。

まあ、期待はしていない。

あいつが僕を連れていこうとするなら、僕は全力で足掻くだけだ。

「しかし夕識。詳しい事情は聞かなかったが、お前は大人しく蝕織に着いていく、という選択肢を取ろうとは思わなかったのか？」

「……今住んでる場所に来てすぐの時期だったら、それもアリだったかもね」

だが、もうそれは出来ない。

五月雨荘には、深く根を張り過ぎた。

あの二人の結末を見ない限り、五月雨荘からは離れられそうにない。

「僕は、お前を束縛する気も、そうする権利もない」

曲兄はゆったりと席から立ち上がる。

「お前はお前の好きなように生きればいい。だが、その生き方を選んだ責任だけは取るべきだ」

「責任？」

「お前がその生き方を選んだことで何が起ころうとも、お前はそれ全てから逃げることは許されない、ということだ。それだけは忘れるな」

すっ、と曲兄は右手を差し出す。

一瞬何を考えてるのか図りかねたが、それが握手を求めているのだと気づき、慌てその手を取った。

曲兄にしては、とても珍しいことだ。

「またいつでも来い」

「……うん。またね」

手を放し、最後に曲兄を目の端に納めてから、僕は様々な思い出の詰まったバーを後にする。

これからの僕の人生で、一生残る後悔をしたとも気付かずに。

痛み、悼み（前書き）

遅くなつてすみません……。
代わりに今回は長めにしました。

痛み、悼み

帰宅して次の日の四時間目、零崎夕識は保健室に足を運んでいた。

完全に呆れながら。

「キミってヤツはさあ……。何回死の淵に立たされれば気が済むんだ？

死の淵に立って強くなれるのはサイヤ人だけだぞ」

「…………返す言葉も御座いません」

そこには、保健室のベッドに横たわり、殊勝に夕識の愚痴を聞き入れる真九郎の姿があった。

「今朝方の動きが悪かったから何があったかと思えば……。僕のいない間に随分とスピード展開だね」

今クラスは体育。

保健室に人は少なく、銀子も蝕織も、今は体育館にいるため、さりげなく授業を抜け出してきた身の夕識としては、気兼ね無く話ができる。

昨日の夜遅く帰ってきた夕識と蝕織。

今日から学校に復帰したものの、昨日のうちに真九郎と会うことは無かった。

しかし、今日の朝、真九郎に会ってみると、どうにも様子がおかしい。

身体もふらついているし、顔色も悪い。

体育まで休んでいるのだから、揉め事処理屋関連で何かがあったのは明らか。

そこで夕識は、この時間の内に、事情を聞き出そうとし、今に至る。

「悪宇商会と勝負つてどこかな？ ターゲットを守れば勝ち、守れなければ負け、なんてさ」

「いや、そんな雰囲気じゃなかった。あくまで個人単位のゲームみたい。

……人の命を、なんだと思ってるんだ」

真九郎は苦々しく吐き捨てる。

「真九郎くんの話を要約すると、まず悪宇商会の入社試験が『人殺し』の依頼で、キミはそれを断った。

しかしそこにいた社員の一人がそれを許さず、そんなゲーム染みた勝負を挑んできた。

帰り際に君の脇腹をスパッと斬って」

「スパツ、か。本当にそんな感じだったよ。斬られたことも気付かなかったから」

「ふーん、ちょっと見して。その傷」

真九郎は黙ってそれに従い、シャツを捲って脇腹を晒す。綺麗な一文字を描く傷がそこにあった。それを見て、夕識は一言。

「へえ、こいつは面白いね」

「面白い？」

「これさ。帰り道まではなんともなくて、途中いきなり傷が開いたでしょ」

「あ、まあ……」

「ダイコンとかを斬って、あんまり切り口が綺麗だと、ピタッとくっついちゃうって話聞いたことない？」

「うん。でもそれって、見せかけだけじゃないの？」

「その通り。だから途中で傷は開いてしまった。だけどこれは、傷口が完全に開ききってなければ、治療はしやすいって配慮なのさ」

「配慮って、なんでそんなこと」

「さあね。まあ、一般的には警告の意味だろうさ。『オレの実力はこんなにもハイランクだ、兄ちゃん、近づくと火傷するぜ』みたいな」

「その言い方には語弊がある気がするんだけど……」

だが真九郎も、その推測には納得した。

「そういや、キミが守らなきゃいけない子ってのは？」

「この子。名前は志具原理津」

「しぐはら、りつ？」

あれ？ どうかで聞いたな。

その疑問はその写真を見た時に氷解した。

それは、斬島切彦に会った時、絶奈が彼女に見せていた写真と同じだった。

彼女が狙うターゲット。

真九郎を切った犯人も、彼女か。

「……ふーん、真九郎くんも大変だねえ。

んで、これからどうするんだい？」

「やるだけやってみるよ。これは俺の仕事だからさ」

「おや、珍しくポジティブだね」

「ポジティブにもなるよ。今回の相手は、そうでもしなきゃ敵わないくらい、とんでもないヤツっぽいから。

それに、夕介くんに迷惑かけたくないしね」

「キミ、本当に真九郎くんか？ キミのネガティブ思考は、シヨックカーにでも改造されなきゃ直らないと思ってたが」

「……たまに、夕介くんって俺を本気で嫌ってるんじゃないかと思う時があるよ」

「何を言う。僕がキミを嫌いなのかならうて。」

僕はキミとの交友を、周瑜と諸葛亮の関係くらいに思っています」

「嫌ってるんじゃない」

軽口をたたきあって、夕識は保健室をあとにした。

「おや？」

「あら？」

と、ドアを開けてすぐのところ、よく知った顔があった。

「こんにちは、夕介くん。そこから出てきたということは、授業中の怪我ですか？」

「どうも、夕乃さん。いえいえ、ちょっとした野暮用です」

体操着を着ているのを見ると、夕乃も体育だったらしい。その後ろに一人、知らない二年生の女生徒を連れている。聞けば、怪我をしたクラスメートを保健室に連れていく途中だったらしい。

「あなたも学生なんですから、ずる休みは駄目ですよ」

「ずる休みってわけでもないんですがね。でも、反省はしています」

よろしい、にこりと笑う夕乃。
自分の待遇も変わったものだ。

「そつだ、夕乃さん。保健室の一番奥のベッドに、真九郎くんが寝てますよ」

びっくり、と夕乃が反応。

「怪我ですか？」

「仕事関連のね」

「………そうですか」

笑顔を保ったまま、保健室に入っていく夕乃。

……表情と感情が全く一致していなかった気がしたが、これはスルーした方が身のためだろう。

真九郎いじめが最近趣味になりつつある夕識であった。

「さて、夕乃さんにはああいったけど」

授業時間は半分以上経過している上、次は昼放課だ。
今更戻るのも意味がない。

「……サボタージュしちゃいますか」

無駄にカッコ良い言い回しをして、夕識は屋上に足を進める。

扉を開けると心地良い風が、僕の脇を吹き抜けた。
昼寝するには絶好のスポット。

「うーん、いい風だ。深淵夢想持ってくればよかったな」

着替えに使った教室はカギがかかっているだろうし、取りに帰れないのがもどかしい。

仕方なく諦めて、コンクリートの床に寝転がる。

お世辞にも寝心地がいいとは言えないが、周囲が静かなのは大いに結構。

余計なことを考えずに済む。

「……戯言で、矛盾してるけどね」

北海道では色々悩み過ぎた。

頭の中は今もぐちゃぐちゃで、どうすればいいのかわからない。

問題を先伸ばしにしてるだけ　なのかも知れない。

だがいつかは決着はつくこと。僕はここを離れる気は毛頭無いし、

《狐》をさがすのも諦めない。

蝕織には、悪いことをしていると思う。

あいつの出した問題を解かぬまま、僕は強引な解決策を使おうとしている。

くろね子さんへ頼み事をした時点で、レールは定まったのだ。

だがそれでも。

「僕は、何も変えたくない」

僕が虚ろにそう呟いた途端、そのタイミングを見越したかのように、ポケットのケータイが鳴った。

刹那、嫌な予感がした。

その電話に出た瞬間、何かが変わってしまいそうな、直感。迷った拳げ句、僕はケータイを開いた。

着信相手は 。

「……………」

通話ボタンを押した。

「久しぶり。何の用？」

脈絡無く、僕は切り出す。

『用ってというか、報告義務かな。キミ、あの子と仲良かったろ？』

「数回会っただけだけどね」

『でも友達だった』

「当然」

『そつ。』

死んだよ
『』

誰かは 言わなくてもわかった。

「……そつか、残念だ。いい子だったのに」

『ふーん、残念なんだ』

「当たり前でしょう。一応経緯を話してくれないかな？」

『ぼくに付き添って、ぼくのせいで、死んだ』

理由はそれだけで十分 という口調だった。

「……へえ、そいつはご不幸だったね。

で？ どうするのかな？」

『……どういう意味？』

「そのままの意味だよ」

しばらく沈黙があつて、

『どうもしないさ』

という言葉が返ってくる。

それは美しいまでにフラットな声色で、醜悪なまでに冷酷な意味を持つ言葉だった。

「そう、そりゃ重畳」

もちろん全然重畳じゃない。
相手への皮肉だ。

「じゃ、用は済んだね。」

……ねえ、切る前に一つだけ言っていていいかな？」

『何？』

「駄目だね、いー兄」

今自分が出来る限り、感情を込めずに、言葉の弾丸を、相手に撃ち込む。

『……………』

「駄目駄目。本当に駄目。駄目も駄目だし超駄目。駄目もこれ極まり。戯言も傑作も矛盾も偶然も何も無しに、誠心誠意、純度100%で駄目だ」

こんな時、みいさんとかだったらどう言っただろうな。

優しく諭すのかも知れないし、あるいは小刀でいー兄を斬りつけるのかも知れない。

いずれにしろ、僕のようにただ責めたりはしないだろう。けど、僕はみいこさんほど人間出来ちゃいない。人間ではなく 曲がりなりにも鬼だ。

『……そうだよ』

ややあつて、いー兄が言う。

『ぼくは駄目だ。とつくの昔から、駄目になってた』

「そつ。ま、興味ないから聞かないけどね。懺悔を聞いてもらいたいなら、教会にでも駆け込みなよ。それじゃ」

一方的にケータイを切った。
ケータイを金網の外にぶん投げたい衝動と必死に戦いながら、僕は立ち上がった。

「変わらせたくないって、思った途端にこれか」

ふざけてやがる。

神様ってのは、僕が心の中で考えたキーワードまで拾うのか。
暇なことだ。

「うわー、やばい。もの凄くふらふらする」

酸欠？ それとも貧血？

どちらでもいい。

さっきまでいいと思っていた風が、例えようもなく気持ち悪いキモチワルイ気持ち悪いキモチワルイ気持ち悪いキモチワルイ気持ち悪い。

「……………あ、そうか」

僕悲しんでるんだ。

てか僕、まだ悲しめるんだ。

すげー、奇跡の大発見じゃん。

「はは、ははは！ ははははははは！ ……ふう」

一しきり笑って、酸素も何もかも吐き出して、僕は掠れきった声で、その名を口にした。

「……勝手に死ぬんじゃないよ、姫ちゃん」

その声さえも、気持ち悪い風に流される。

世の中は何て理不尽なんだろう。

決して幸多いとは言えない女の子に、更正の機会すら、与えてくれないというのだろうか。

「どうしてだろうね」

どうして、

世の中は『普通』という言葉に残酷なんだろう。

その後はもう陰鬱だった。

授業なんてまともに耳に入らなかったし、昼御飯中、真九郎くんや
蝕織が話していた内容も、覚えていない。

どうやって五月雨荘まで帰ってこれたのかが不思議なくらいだ。現在にしたって、蝕織、真九郎くん、紫ちゃんが僕の後ろにいるけれど、会話に参加しようという気さえ起きない。

「真九郎、ここを教えてくださいませんか？」

「ん？ どれどれ……」

「わ、懐かしいですねー。数学ドリルも表装こそ変わりましたが、問題はわたしの頃と変わってません」

「む。美織の頃から進歩が無いとは、この問題を作ったやつは向上心が足りんな」

「いや、美織ちゃんが小学生だったころって言っても、九年かそこらだからさ。そんなに問題形式ってのは変わらないよ」

「しかし九年というと、わたしの年齢より長いぞ」

「それはですね、紫ちゃん。まだ紫ちゃんの人生が、それくらい少ししか始まってないという事なんです。

そしてそれは、これから先、もっと幸せなことがあるという意味な
んですよ」

「なるほど……美織は物知りだな」

「にははは。わたしなんかまだまだです」

「では真九郎！ わたしと一緒にいれば、幸せは二倍になるな！」

例のごとく、紫ちゃんが真九郎くんを困惑させ、蝕織がそれを見て
くすくす笑う。

（幸せ　ね）

あんなことを聞いた後では、聞きたくない言葉ワースト一位だ。

「僕、ちよつくら散歩してくる」

「え？　でも夕介くん、この後雨だって……」

「構いやしないぞ」

むしろそれくらいが丁度いい。

玄関口に立ったところで、蝕織が後ろまで着いてきた。

「お兄様……何か、ありましたか？」

「何も無いよ、心配するな」

蝕織の髪を軽く撫でる。

姑息な手段だとは思うが、蝕織に動づかれないようにしなければならぬ。

1日とは言え、姫ちゃんとあれだけ仲良くしていたんだ。

こいつは完全な零崎だから、僕ほど引き摺りはしないだろうけど……それでも、知らなくていいなら知らない方がいい。

「じゃ、行ってくる」

「あ、待ってください」

蝕織は自分の鞆から折り畳み傘を持ってきて、僕に手渡した。
ちなみに色は桃。

「使つて下さいな」

「……ありがとうございます」

見てくれはさておき、一応は役に立つものなので、借りていくことにする。

部屋を出て、中庭まで出ると、真九郎くんの言う通り、空はどんよりと曇っていた。

本当、嫌な天気だ。

「それはキミの心境もだろう、夕介？」

「……人のモノローグに割り込んでこないで下さい、闇絵さん」

声のした方を向くと、木の枝の所定スポットに、闇絵さんが鎮座していた。

彼女の膝の上には愛猫ダビデがちょこんと乗っかっている。

「それは失礼した。それで、どうしたんだ？ そんな」

今にも泣きそうな顔をして。

「……そう見えますか」

「ああ、実に酷い顔だよ。写真に残しておきたいくらいだ。まあ、それは冗談だが」

「あなたの冗談は悪質だ」

「魔女だからね」

意味ワカンネ。

「妹さん関連のことではなさそうだな。予想するに弔事か？」

「……ええ。」

前に、黄色いリボンを着けた女の子が来たでしょう？
その子がね……死にました」

そうか、と呟く闇絵さん。

「実に明るい娘だったのにな。また会うことは、もう叶わないか。
なあ夕介。死とは、悲しいだろう？」

「そうですね」

「生きとし生けるもの全てに与えられる運命とはいえ、後に残される者達が、それで納得するわけがない」

「死に関しては、必ず与えられるものとして、僕はもう割り切つてますよ」

「ほう、殊勝なことだ」

「茶化さないで下さい。」

僕が言いたいののは、その死つてやつが、あまりに早く、理不尽な形で訪れた時の話です。

僕みたいに死ぬべき人間が生きて、姫ちゃんみたいな死なないでいるべき人間が死ぬ。

悔しいけど、世界つてのはそういう風に出てくる。

……そんなの、虚し過ぎやしませんか」

「さてね、わたしは哲学者ではないからな。キミの疑問に見合う答えは、生憎と持ち合わせがない。

だが多かれ少なかれ、理不尽な死が存在するのは認めよう。

そして、それはわたし達矮小な人間にとってはどうしようもなく、ましてや、キミがどうにかできることじゃない。

大切なのは、在り来たりではあるが、その死んだ人間を悼み、その人間が生きた証を残すことだよ」

「生きた……証ですか」

姫ちゃんの生きた証って、何だろう？

と、僕の脳を急な衝撃が襲う。

僕の頭に、ダビデが着地し、しがみついたのだ。
器用なヤツだ。

「散歩に行くのなら、ダビデも連れて行ってくれたまえ。最近運動不足らしくてな、ついでに煙草も買ってきてくれるとありがたい」

「……生活破綻者」

「なんとも」

妖しく笑う闇絵さんに見送られながら、僕はダビデと共に五月雨荘を出た。

小一時間ほどあちこちをふらつき回った。ちなみにその間、ダビデ

はずっと頭の上（運動不足じゃねえのかよ）。

最終的に僕が辿り着いたのは、近場の公園。

真九郎くんが、悪宇商会のスカウトマン（いや、女性だからレディ
だろうか）とアポをとった桜霧公園である。

公園に足を踏み入れた瞬間、ダビデがぴょいと頭から飛び降り、
あっという間に姿を消す。

「……………」

あのスピードなら、運動不足は問題無いよ闇絵さん。

幸いにも、ダビデは休憩用の屋根付きベンチに座っていたのを発見
出来た。

何の気なしに、僕もダビデの横に腰を下ろす。

頭を整理するには丁度いい。

闇絵さんにはああ言ったが、僕が人の死を割り切ってるのは、僕が
人に死を与えているからに過ぎない。

確実に、僕は死ぬべき人間に入るだろう。

殺人は、相手の先を奪う醜悪な行為だ。

「ああ、そうか」

だからか。僕がさっきから涙一つ流してないのは。

悲しんでいても、泣くことは出来ない。
今更、僕がどのツラ下げて人の死を悼めというのか。
相応しい罰と言えばそれまでだか、しかし零崎だからということはあるまい。

他の家賊のみんなだつて、泣けるんだ。

ただ、泣くのが難しいってだけ。

だから僕が泣かないのは、姫ちゃんの死が、泣くほどの悲しみでは無いということか。

だとすれば。

「最ッ悪だよ」

いー兄のと言えないや。

「……死んだ人間を忘れず、その人の生きた証を残せ、か」

ならばせめて、姫ちゃんのことを忘れないようにしよう。
泣けないのなら、その分の悲しみを背負っていこう。

「姫ちゃん」

紫木一姫、ゆかりきいちひめ、ユカリキイチヒメ。
いつも馬鹿がつくほど明るくて、黄色いリボンがトレードマークの
女の子。

よく言葉を間違えて、その素直さから、よく騙される。

ジグザグと呼ばれた人の元で、僕と一緒に曲弦糸を学んだ。

その頃からどこか抜けてて、何かする度に僕がフォローしていた。
遊馬さんによく冷やかされたっけな。

その明るさに秘められた過去は良いものとは言えなくて、彼女自身
何人も人を殺めた。

けれど、戯言遣いと請負人に助けられ、他にも色んな人から愛され
て、『普通』の女の子として暮らせるようになった、

僕の、友達。

うん。覚えている。

零崎夕識は、紫木一姫を覚えている。

ちゃんと、姫ちゃんは生きていた。

「……………なあんだ」

こういうことか。

生きた証。

人の心に刻みつけられた、鮮明な印象。

一人一人に存在した、その人の物語。

姬ちゃんの物語は終わってしまったけれど、その物語そのものは、

決して消えていない。

彼女に関わった全ての人々の中に、その物語はある。

彼女が生きた証は、決して失われない。

「……………いー兄が」

いー兄がいなければ、姬ちゃんの物語はもっと早くに終演を迎えていただろう。

いー兄が与えた数ヶ月は、無駄ではなかったはずだ。

……………いー兄だって、本当は悲しいはずなのに、自身に悲しむことを、彼は許していないのだ。

「……………今度、謝ろう」

もしいー兄が、『自分のすべき』ことをしていたらの話だが。

「……帰るか、ダビデ」

一応の折り合いはついた。

姬ちゃんのことはまだ悲しいけど、僕には僕の物語がある。

全てスッキリさせてから、ゆっくり時間をかけて、姬ちゃんを悼もう。

手招きをすると、ダビデはまたしても僕の頭に乗っかり、僕はベンチから立ち上がる。

いつの間にか、結構な量の雨が降っていた。

「蝕織に感謝だな」

折り畳み傘を開き、ダビデが濡れないように気をつけながら、僕は帰路に着く。

はずだった。

「？」

歩いてすぐ、まだ公園の園内。
木の下で、踞る人影があった。
近づいて見てみると、それは小学校低学年くらいの男の子だった。
目を伏せているところを見ると、泣いているらしい。

無性に、話しかけたくなくなった。

姬ちゃんが時折見せていた悲しい顔。
それがダブったのかも知れない。

「その坊っちゃん、どうしたね」

少年はびくりと肩を振るわせた。
僕に気付いていなかったらしい。

「安心しなよ、怪しいもんじゃない」

頭に猫をのせている時点で、もはや変質者とカテゴライズされたよ
うなものだが。

「傘が無いの？」

今日は朝からのくもりだったし、知らないことはないと思うが。

「……ぐすつ、持って、きてた。でも、うっ、どこ、かに隠されちゃった」

ここまでは小雨だったため、走ってこれたらしい。

……あーなるほど、
いじめられてんのか。
蝕織に心の中で謝り、使っていた折り畳み傘を少年に差し出す。

「……？」

「使いな」

「で、でも……お兄ちゃんが濡れちゃうよ」

「いらない遠慮をするな。僕は雨に濡れたい気分なんだよ」

さっきまではね。とは付け加えない。

「それに、キミが無くした傘と、ウチの傘は強度が違う。これを貸してくれたやつが、そういうの好きだな」

これは本当。

蝕織は日用品に、高性能を求める癖がある。

「けど……」

「あーもう、子供は素直に受け取りなさい！ 別に返さなくてもいいから！」

尚も濡る少年の手に、強引に傘の柄を握らせる。

「それとな、少年。いじめられて、決して泣くなとは言わないけど、ずっと泣き続けるのはよくないよ」

傘を渡され、きよとんとする少年が、上目遣いでこちらを見てきた。

「何度泣こうが直ぐ泣き止んで、問題に立ち向かっつてのが正しいカッコいい男だよ。」

何回いじめられても、そんな奴らに負けないようなヤツになれ」

「それでも……ダメだったら？」

「誰かに助けてもらえ。僕は一人で戦えとは言っていない」

「……いない、よ。助けしてくれる人なんて」

味方ナシか。

小学生には少しキツイシチュエーションかもな。

だが、問題は永遠に追いかけてくる。

それに向き合うしかないのは、大人も子供も同じだ。

自分を棚上げしているのは分かっているが、それでも言わなくてはならない。

「それなら、誰かに優しくするんだ」

「……え？」

「キミはハッキリ言って、弱い。

でもだからこそ、自分と同じように、弱い人の気持ちができる。

そういう人がいたなら、手を差し伸べてあげるんだ。

そうすればこれから先、キミが負けそうになっても、その人はきつとキミを助けてくれる。

誰かに優しくしてあげること。

それが孤独からも、いじめからも抜け出す近道だよ」

きつといー兄は、姫ちゃんの気持ち少しわかっていた。だから、手を差しのべた。結果、姫ちゃんは少しの間でも、たくさんの人に囲まれていた。いー兄がそうしなかったのなら、姫ちゃんは孤独のまま『終わって』いただろう。

ひとりぼっちではないということ　それは誰かの中に、存在の証を残すこと。

小学生が理解出来るとは思わないけど、せめて自分と同じ立場の人を救えるようになってほしい。最後に少年の頭をがしがしと撫でて、僕は雨の中に飛び出そうとした。

「……あのー!」

ぎりぎり、少年が僕を呼び止めた。

「何?」

「あ、あの……傘。ありがとうございました……」

「……どういたしまして」

なんだ。

泣くばかりじゃないじゃん。

少年の顔は涙と雨でくしゃくしゃながらも、彼の顔に浮かぶ表情は、確かに笑顔だった。

「ねえキミ。名前、聞いてもいいかな。なんかキミとはまた会いそうだ」

「……ジュウ。じゅつぞわジュウ」

「……ふーん」

柔沢、ね。

「そっか。キミがそうなんだ」

「え？」

「いや、何でもないぞ。」

良い名前だな、ジユウくん。
僕の名前は、緋色夕介だ」

「ひいろ？」

「ああ。カッコいい名前だろ」

にかりと笑って、僕は言う。

「それじゃ 『縁』 が合ったらまた会おう。柔沢ジユウくん」

脱兎のごとく、僕は木の影から、雨の下を駆け出した。
頭に乗つけたダビデと一緒に。

足取りは、大分軽くなっていた。

「で、それがわたしが貸してあげた傘を無くし、そのまま部屋に戻ってきて、ロクに身体も拭かず床につき、風邪をひいた理由というわけですね？」

翌日、部屋には、熱っぽい頭のまま布団に入る僕と、その側に立ち、不機嫌そうに顔をしかめる蝕織の姿があった。

「……だからさ、悪かったって」

頭上から嫌味つたらしく、事細かな経緯を雄弁に語る蝕織。

「まったく、見ず知らずの子供に傘を貸して、自分は濡れて帰ってくるなんて……。」

わたしが何のために傘を貸してあげたと思ってるんですか。しかもあれ、結構お気に入りだったんですからね」

「だから悪かったよ。今度、また似たようなヤツ探してきてやるから」

「お兄様ですか？」

「他に誰がいるよ」

「……むー、絶対ですよ？」

ああ、約束する。と言いかけて、再び咳き込んだ。

「38.4、完璧風邪ですね。」

まあ、北海道旅行もありましたし、疲れが溜まってたせいもあるのでしょうか。」

体温計を見ながら、布団をかけ直す蝕織。

普段なら気恥ずかしさがあるものの、身体中がダルくてそれどころではなかった。

「ゆっくりお休みになって下さい、お兄様。学校にも連絡しておきましたし、今日はわたしが看病して差し上げますよ。」

「……………」

何のギャルゲーイベントですかこれは。

「てかお前は休んでいいのかよ。」

「今更高校で何を学ぶというんですか。」

今蝕織は、世界中の勤勉な学生さん達を敵に回しました。
まあ、《チーム》　こいつに言わせるなら《箱庭》に属していた
以上、正論ではある。
当然、正論が常に正しいとは限らないが。

「大体、話し相手が誰もいない学校なんてお断りです。夕乃さんは他学年ですし、銀子さんはわたしは苦手みたいですし、真九郎さんはサボタージユしちゃったみたいですし」

「え？　真九郎くん休み？」

「はい。昨日お兄様が出掛けた後、わたしは部屋に戻ったんですけど、その後買い物出掛けようと思ったら、玄関口で真九郎さんと鉢合わせたんです。

『もしかしたら、明日休むことになるかも知れないって、夕介くんに伝えておいて』と言われました」

「ふーん、仕事かね」

「恐らくは。紫ちゃんの勉強見ながら、度々資料らしき紙を見てましたし」

十中八九、例の悪宇商会とのいざこざの件だろう。
資料と言うのは、今回の護衛対象である志具原理津のものだろう。
向かった先は、その子のいる場所だろうが……。

大丈夫かなあ。

絶奈さんの話からすると、九鳳院の近衛隊もいそげなんだよなあ。
風邪っぴきの頭でそんな事を考えていると、枕元で充電中だったケータイが、軽快なリズムを奏でた。
取るうとするも、布団から起き上がることさえ出来ず、うつ伏せのまま、布団から這い出る形になる。

「リングのモノマネですか？」

「悪い蝕織、ケータイ取って」

ツッコミを鮮やかにシカトし、蝕織からケータイを受け取る。
発信者は……。

「お。噂をすれば」

通話ボタンを押し、寝ながらの会話。

『タ介くん？』

「もしもし、どうしたね真九郎くん」

『うん、実は……って、夕介くんなんか声変じゃない？』

「ははは、昨日の雨で風邪ひいちゃってさ……。でも明日にや治ると思うから、頼み事なら明日以降にしてくれるとありがたい」

『そっか……。』

出来たら明日、あいつの送り迎えを頼みたかったんだけどさ『

「紫ちゃんの？ 例の仕事、長引きそうなのかい？」

『そう。だからちょっと、行けそうにない』

「左様ですか。わかった、引き受けよう。ただし、ちゃんと紫ちゃんの授業参観には間に合わせなよ」

『……………わかってる』

了解するまでに、変な間があった。

「何かあった？ 紫ちゃんと」

少し気になったので聞いてみた。

『ちよつとね。でも、そんなに大袈裟なことじゃないよ』

「ふーん…？ ならいいけど。

じゃ、仕事頑張って」

『うん。無理言って御免ね』

そんな調子で通話終了。

「真九郎さんからですか？」

「うん」

ケータイを畳み、蝕織に放り投げる。

「なあ蝕織。昨日僕が出掛けた後、真九郎さんと紫ちゃんって、何かあったか？」

「へ？」

突拍子もないことを聞かれた、と言わんばかりに、蝕織は唇に手を当てる。

「　　そう言えば、わたしが部屋に戻ったあと、真九郎さんの部屋が少し騒がしかったですね。
ぼんやり、紫ちゃんの声も混じってた気がします」

下の階からだから、確証はありませんけど。
それら蝕織の証言から導き出される答えは　　。

（確実に何かあったな）

真九郎自身認めていたことで、大したことないとは言っていたが、果たして紫ちゃんもそう思っているかどうかは定かではない。

明日の送り迎えで、紫ちゃん本人に聞いてみるか。

「二人がどうかしたんですか？」

「んー、ちょっと面倒になってる……かも」

僕の返答に、蝕織は渋い顔をする。

「心配ですか？ 真九郎さんと紫ちゃんが」

「まーね。もう顔見知りっただけじゃなくなってきたし」

「お兄様って、昔からそうでしたよね」

「ん？」

蝕織が急に声のトーンを落とす。

「自分よりも、他の誰かを大切にしてる。そういつトコです」

「えー、そうか？」

「そうですよ」

何気なく返したつもりだったが、それは蝕織を更に不満にさせたらしい。

「わたし達が零崎になる前も、あの下衆共から逃げる最中、何度もわたし一人だけを逃がしましたよね。

零崎になったあとも、『小さい戦争』の小競り合いから、何度も何度も」

「そりゃあ当たり前だろ。お前は僕の家族であり、家賊なわけだしさ。双子って言っても一応は兄貴だし、お前は大切な妹だから。あの時は、守ってやらなきゃいけないって思ってたよ」

蝕織は少し顔を紅潮させたが、ふっと顔を綻ばせた。

それは確かに笑みだったが、どこかぎこちない、哀愁が漂う笑みだった。

「大切な妹、ですか」

僕がその違和感に顔をしかめると、蝕織が布団の脇から、布団の上

に移動する。
片膝を立てた、僕を真正面に見下ろす形。

どうした、と聞くより早く、蝕織はそのままゆっくりと、僕の身体にのし掛かってきた。

「っ！」

絶句する僕。

思考が完全にショートし、この事態の理解がまるで出来なくなる。

蝕織は何も言わず、僕の頭の右側に、顔をうずめた。何かアクションを起こそうにも、風邪の身体は完全に不随。

距離的には、僕が首を少し傾ければ、蝕織の頬に唇が当たるレベル。だが強張った身体はそれを許さず、蝕織の表情も確認出来ない。

「は みおり？」

「……………」

またしても無言。

その代わりと言わんばかりに、僕の右頬を湿った生暖かい感触がなぞる。

蝕織の舌だ。

以前、僕も蝕織にした行為ではあるが、成る程、あの時蝕織が赤面して仰け反った気持ちがあった。

熱を帯びた頭はくらくらして、心臓はドラムビートのように高鳴っている。

もはやこの熱さが、風邪によるものなのか、この状況に対する羞恥からなのかどうかもわからない。

「お、い……」

「ねえ、お兄様……」

耳元で言の葉が囁かれる度に、ぞわり、と気味が悪いほど心地よい感覚が、全身を駆け巡った。

「兄妹の境……越えてみませんか？」

再びの思考フリーズ。

何を言った？

今こいつは何を言った？

すつと、右側から気配が消え、蝕織の顔は正面に移動していた。

そこに映る表情は、ほんの少し赤くなっていたが、それでも口元には余裕の笑み。

「にやはは、お兄様顔真つ赤」

蝕織の両手がぴたりと当てられる。

オーバーヒート寸前の僕にとって、とても冷たく感じるそれは、奇妙な快感があった。

「お前……っ、何を、考えて……」

「なーんにも」

そう言つて笑う蝕織の姿は、余りに美しく、余りに妖艶だった。クリーム色の髪の毛は、前髪がぱらぱらと僕の顔に被り、少しはだけた服が、また更に僕の心を騒ぎ立て……。

(いやいやいやいや！)

やばい、思考がマズイ方向に走っている！

落ち着け僕！

こんな環さんや双兄が好きそうなイベントに出くわしたからといって、そのままストーリーの流れに身を任せんじゃねえ！

目の前にいるのは蝕織だぞ！？

どんなに可愛く映ったとしても、こいつは僕の妹、零崎蝕織だぞ！？

なのに何でこんなに頭をかき乱される！

てか、こいつは何で急に僕の煩惱を刺激しようなどと考えている！

「はみ、お……り。これ以上……、は」

「あら。したいんですか？ これ以上のこと」

「ち、っがつ……！ お前、と僕は……」

風邪のせいで声の呂律さえ正常に機能しない。

腕も足も、ダルさで使い物にならない。

というか、蝕織に押さえられているからどのみちアウト。

抵抗さえも許されない状況。

「僕……ぼく、は」

声を出したくなかった。

口を開けば、どんなに荒唐無稽で、どんなに倫理から外れた言葉が
わかり切っていた。

身体が動かないのはむしろ、好都合だったのかもしれない。

もし僕が今動けたら、目の前の妹に何を仕出かすか
考える
だに戦慄が走る。

「……………」

「にははは。沈黙に逃げちゃいましたか。

もう抵抗しないと、そう受け取りますよ?」

蝕織の問いかけに、僕は閉口することになった。

どうせどうにも出来ない。

蝕織の方からしてくれるなら、まだ罪悪感も薄れるというものだ。姑息に逃げへと転じる自分に苛々しながら、蝕織の行動を待った。

蝕織はもう一度僕と目を合わせる。

暗く深い瞳が、今日はさらに奥行きを増し、鈍い光を宿していた。それから僕の手指を絡めたまま、上半身を近づけてくる。

蝕織の顔が近づくにつれて、甘い匂いが鼻をくすぐり、その香りが僕の最後の防波堤を崩した。

あーあ、いつかの紫ちゃんと真九郎くんみたいに、不意打ちっぽいのだったらまだ言い訳も出来たのにな。

いいぞ。

諦めてしまおう。

もうどうだっていいよ。

恥や外聞なんざ知ったことか。なるべくしてこうなったんだ。今更抗う術も無いし、抗う気もない。

僕と蝕織の、唇の距離。

その空間が、世界の全て。

少しずつ、少しずつ、その距離が縮まっていく。

心臓が早鐘のようになる一方で、瞳は蝕織から逸らさない。

距離は更に消え、蝕織の吐息さえ感じられる。
その世界が消えるまで、約五センチ。

四……。

三……。

二……。

一……。

「ばあか」

「ごちん。」

「痛って！」

直前で、至近距離からのヘッドバットを喰らい、痛みで意識が
あつという間に回復する。

それと同時に、頭がさっきとは違う意味で揺れる。
意識がはるか彼方にまで飛んでいたため、ノーガードでの頭突きは
かなり痛い。

「するわけないでしょ、こんなこと」

さっきの淑やかな笑みとは打って変わって、蝕織は無表情のまま、虚ろな瞳を向けていた。

「わたしだって節度は守りますよ。
兄妹でそういうコトが許されるのはフィクションの中だけです。
人兄さんのような異端を生み出すなんて御免ですよ。」

……まあ、お兄様が何か期待していたというなら、わたしにとっては喜ばしいことですけど」

布団から下りて、蝕織は立ち上がる。

「そんなわけありませんからね」

その口調からは、歓喜の念も、悲哀の念も感じ取られず、蝕織はそのまま台所へと消えていく。
作り置きを取りにでもいったのだろう。

「……………ふう」

その様子を目の端に収めて、手を額に当てて目を閉じる。

危なかった。

本当に危なかった。

そう心の中で繰り返すと同時に、激しい自己嫌悪に襲われる。

（僕は、あいつに何をやろうとしていた？）

答えはわかっている。

でも、認めたくない。

自分の感情の奥底に、蝕織とあんなことをしようとする自分がいるなんて。

畜生。

いくら出来損ないだからって、ここまでろくでなしだとは思わなかったよ。零崎夕識。

そんなわけありませんからね？

ははは。

蝕織、お前は僕を美化し過ぎてるよ。

「……期待しないわけあるかよ」

ぽつりと、いや、呟いたかどうかも怪しいくらいに小さな声で、僕は自分の本音を吐き出す。
僕の気分を象徴するかのよう、頭上に吊るされた電灯が朧気な光を放っていた。

「……まだ本調子、とはいかないか」

厚手のセーターの上から、黒いコートを羽織り、僕は部屋のドアを開ける。

蝕織とのびつくりイベントの翌日。

僕は真九郎くんと約束通り、紫ちゃんを迎えに出掛けていた。
ちなみにあんなコトを仕出かした我がシスターはと言うと、僕が治った途端に、何食わぬ顔で学校に行きやがりました。

「……こうしていると、意識してる自分が馬鹿みたいだよ」

「なーにを意識してんのかな？」

階段から滑り落ちかけた。

「た……環さん？」

いつの間にやら、階段下に環さんが立っていた。
腹の立つにやにや笑いを浮かべながら。

「ふふふー、何やら随分と思ひ詰めた顔だよ、青少年」

「……ははは。何を仰っているのか全くさっぱりこれっぽっちもわかりませんが」

「察するに男女関係かな？」

ちっ。鋭い、無駄に。

だが絶対に悟られてはならない。

下ネタ王である環さんに、少しでも気取られるようなことがあれば、文才の無い作者が今まで必死に積み上げてきた僕のキャラクターが、完膚無きまでに粉碎される！

「いやいや。真九郎くんに引き続き、ついに夕識くんにもフラグが立ちましたか。

だよー。若い男子が一人暮らしじゃ色々と溜まってくるもんねー。美織ちゃんという潤いがあったとしてもさ」

どう考えても、午前中にする話じゃねえよ。

「フラグ？ ははは、何を寝惚けた事を！

ギヤルゲーとかならわざ知らず、そこかしこにドラマチックなルートが仕掛けられていると思ったら大間違いですよ環さん！」

「キミの身近に、様々な女性ルートを攻略中の男の子がいる気がするけどねえ」

「アレは別格の存在です、小説で言うなら主人公！ 僕は脇役らしく、適当に処理されるんですよ、エピソードとかで再登場する程度のマイナーキャラでしかありません！」

「成る程。そうして物語の裏に逃げて、隠れたCPキヤラと乳練り合っ作戦？」

「ケータイの文字予測機能にすら入っていないような言葉使ってるじゃねえ！

とにかく！ 僕は妹とフラグ立てるほど人間終わってません！」

「ふんふん、左様で御座いますか。ちなみにあたしは、『妹と』だなんて一言も言っていないよ？」

「！」

しまったあああああああああ！

何故だ！ いー兄とのやり取りで言葉遊びには自信があったのに！
しかもこれ、前に僕が銀子ちゃんに使った尋問法じゃん！
くそう、やっぱり策士は策に溺れてしまっんですか子萩さん！？

「う、あうあうあうあう」

「くっくっく。そうかあ。昨日風邪をひいて大人しくしてるはずのキミの部屋から、妙にたくさん物音がすると思ったら、そーいうこ

トだったわけか」

ぐっ……、まずい。

なまじ全てが誤解でないため、反論出来ない！
以下、見苦しいまでの言い訳タイム。

「ち、違いますよ！

やだなあ環さん！ 部屋に妹と二人きりで、しかも物音がしてたからって、規制に引っ掛かりそうなコトをしてるとは限らないでしょう！

この五月雨荘で真九郎さんと並ぶツッコミ役である僕が、そんな倫理に乏しい真似をするなんて、荒唐無稽もいいところです！
神への冒瀆、アカシックレコードにすら記されてません！
DO YOU UNDERSTAND!？」

「はいはい、了解了解。シチュエーションは美織ちゃんと二人きりのラブラブ状態でしたっ」と

「長台詞の中で拾われた唯一のワードがそれですか！」

最悪のチョイスだよ！

耳にエロワードだけを厳選するフィルターでもついてんのか！

「本当に何もありませんってばあ……信じて下さいよ……」

「……あー、悪かった悪かった。お姉さんが苛めすぎたよ。だからマジ泣きするのは止めなつて」

マジ泣きもしたくなる。

昨日のことは正直トラウマになりつつあるのだ。

「でもさあ、あたしは別に言いと思うけどね。数日様子見てたら、夕介さんと美織ちゃんお似合いじゃん」

「……………怒りますよ?」

「いやいや、あたしにしちや珍しく真面目なハナシだよ。愛に垣根は作れないからね。夕介くんだって、美織ちゃんに関して思い当たることはあるんじゃないの?」

「……………」

零崎蝕織。

踊る月影。

『フォーマルアウト』。漆黒残響。

僕の、双子の妹。

「……さて、ね。あいつはあまりにも身近にいる人間ですから。だから、何かに気付いてないのかも知れませんが」

「そーやっていつまでも問題の先送りはよくないよー」

「ええ、僕もそう思いますよ」

けれど、世の中には解決しない問題もある。
そのまま階段を下り、環さんの脇を通り抜ける。

「あ、じゃあさ。これだけ聞かせてくんないかな？」

環さんの声が、背後から届いた。

「何です？」

「兄妹の恋愛ってアリだと思う？」

「……アリじゃないですかね」

真九郎さんと紫ちゃんの例もあるし。
こと恋愛においては、もはや何でもアリだろう。

「それが何か？」

次に聞かれる質問は、わかっていたけれど。

「ねえ。ぶっちゃけたときさ、夕介くんは美織ちゃんをどう想ってるわけ？」

……あいつは。

僕にとって。

「戯言だ」

つい半刻ほど前、環さんへの質問に対する答えについて、そう結論付ける。

そう、まるで意味が無く、曖昧で不確かな答え。

僕が現段階で出せる言葉など、所詮あの程度というわけだ。

「……真九郎くんのが移ったかな」

最近ネガティブ思考になりがちだ。

曲兄、姫ちゃん、蝕織。

こうも立て続けに重苦しいイベントが続けば、仕方無いんだけど。

「さて、そろそろかな」

小学校の正門前で、子供達の迎えに来ている親に紛れながら、時計を確認する。

正直な話、早く来てくれ紫ちゃん。

さつきから周りの父母の皆さんが、僕の白髪に奇異の眼差しを向け続けているんだ。

しかも今日はブラックコートだから余計に目立つ。

僕が羞恥に負けかけたその時、校舎の向こうから、見慣れた影が歩いてくる。

紫ちゃんだ。

声をかけようとした僕だったが、そこで一つ、悪戯心が働いた。校門の袖に隠れ、紫ちゃんの姿が、学校の敷地を越えた辺りで、僕は口を開いた。

「紫」

ぴくり、と紫ちゃんが顔を上げてこちらを向く。

「しんく……！」

歡喜に満ちたその声は、僕の姿を目に収めて、どんどん小さくなり、やがては紫ちゃんの表情さえも曇らせた。いつも見せる純粋な笑顔は、そこに無かった。代わりにあったのは、深い寂寥。

あ、あれ？

なんだこの暗い雰囲気は。

僕的には、真九郎くんの声帯を真似た軽いドッキリのつもりだったのに。

紫ちゃんの反応だって、少し怒るくらいには想定してたけど、まさかこんな反応をされるなんて。

「あ、あの……紫ちゃん？」

謝罪の言葉を述べようとした僕に、紫ちゃんが急にしがみついてきた。

いや、しがみつくなんて優しいものじゃなく、ほとんどタックルの領域だ。

軽い衝撃。

しかし僕にはそれが、とてつもなく重く思えた。

「紫ちゃん、どうし……！」

言いかけて口をつぐんだ。

「っ……ひっく、うっ、ゆっすけえ……っ」

僕にしがみついているせいで表情はわからないが、僕を呼ぶ声に、嗚咽が混じっている。

(泣い、てる?)

何で？ という疑問が浮かぶ前に、僕の脳内は次にすべきことを判断していた。

(これどう考えても、僕が泣かせてる図じゃん！)

僕のせいと決まったわけではないが、今の状況では確実に言い逃れは出来ない。

僕は泣きじゃくる紫ちゃんの手を引いて、周囲の視線から逃げるように立ち去った。

とりあえず、何処か落ち着けるとを探さないと。

かといって五月雨荘は結構離れてるし、騎場さんにお任せしてハイさようならというのも忍びない。

散々迷った挙げ句、僕が一昨日散歩に来た公園、『桜霧公園』へと足を運ぶ。

どうにも僕はこの場所と『縁』があるなあ、と考えつつ、紫ちゃんをベンチに座らせ、近くの自販機で飲み物を買って戻ってくる。紫ちゃんの味の趣向はわからないため、適当にミルクティーを選んだ。

「はい」

紫ちゃんは無言でそれを受け取りはしたが、口をつけようとはしない。
涙の発作こそ収まったらしいが、顔は涙の跡だらけで、目も僅かに赤い。
いつもの凜とした態度も、今は沈み気味だ。

「……えっと、取り敢えず、ごめんなさい」

あの悪戯が全てというわけでないにせよ、紫ちゃんの涙腺を刺激する引き金になったのは間違いない。
隣に座る紫ちゃんに、僕は頭を下げる。

それに対し、紫ちゃんは静かに首を横に振る。

「……いや、わたしの方こそ迷惑をかけてしまった。
夕介は何も悪くない。わたしが……勝手に泣いてしまっただけだ」

「そう。何か、悲しいことがあったの？」

またしても沈黙。

この子は基本的に饒舌な方だから、こういう姿も珍しい。
そのレアな姿をするに至る理由に関しては、僕にとっては言うまでもなく。

「真九郎くんと、何かあった？」

質問を変えると、紫ちゃんの肩が分かりやすく上下した。

昨日の蝕織からのインフォを聞いた時点で、粗方予想はついてたけど、これはひよっとしたら、想像以上に深刻な問題かも知れない。

紫ちゃんは口を真一文字に結び、また泣きそうになるのを必死にこらえている。

その証拠に、こらえ切れなかった分の涙が頬を伝った。

多分、詳しい事情を聞き出そうとすれば、完全に涙腺が崩壊するだろう。

「紫ちゃんが喋りたくないなら、僕はこれ以上は聞かないよ。

でも、その問題を一人で抱え込んでツライなら、僕に話して欲しいな。

事情も何もわからないんじゃないじゃあ、助けてあげること出来ないよ」

強引な事情の聞き方は好きではないため、僕はそう言うに止めた。

実際、紫ちゃんが助けを必要としないなら、それでも構わなかった。当人が承諾しない以上、それはお節介にしかない。

「……………うっ、ううう」

また涙声。

紫ちゃんは顔を見られたくないのか、ベンチに体操座りして、表情を隠した。

落ち着かせるように、僕はそっと彼女の背中を撫でる。

本来、これは僕がすべきことではない。

どころか、この子の隣に立つべき人間でもない。

代替品など有り得ず、彼女の隣に立つべき人間は、未来永劫ただ一人。

なのに何故、当の彼が、この子を泣かせる原因と成り得るのか。

僕は、それがどうしても納得出来ない。

「……………約束」

顔を埋めたまま、紫はぼつぼつと言葉を紡ぐ。

「うつ、約束、したのに……………っ、ちゃんと、真九郎も来てくれるって……………！」

約束。

その意味を紐解くのに数秒を有した。

何故か。

それはあまりにも、『有り得てはならないこと』だから。

「……………ごめん。こんな質問をして馬鹿にされないかと僕は甚だ心配なんだけど、ひょっとしてひょっとすると、その約束って授業参観のこと?」

無言で、僅かに埋めた頭を上下する紫ちゃん。
すなわち肯定。

「……………仕事の都合で?」

「……………うん」

そう答えた紫ちゃんの姿は、もはや哀れさも不憫さも超越している。世の中の悲哀を全て一点に濃縮した姿、と言ってもなんら遜色が無かった。

「夕介……………っ、わたし……………わたしが、悪かったのか?」

悲しみを絞り出すように、紫ちゃんは言う。

「わたしが……っ、良い子にしてなかったから、真九郎も、約束を守ってくれなかったのか？
夕介が言ってたような、素直な心を、わたしは何処かで無くしてしまったから……わたしがわたしが……！」

「悪くない」

ぴしゃりと、紫ちゃんの言葉を遮断する。

図らずも曲兄と同じセリフを使ったが、曲兄が使う悪くないとは、意味が違う。

「全然悪くない。紫ちゃんは全く悪くないよ」

「で、でも……わたしが……」

「今回のことは、どう考えても真九郎くんが悪い。

キミは咎められるようなことは何もしてないよ」

頭を数回、安心させるようにぼんぼんと叩く。

その実、僕の心中は決して穏やかではなかったが、紫ちゃんが顔を伏せていてくれてよかった。

今の僕の表情はきっと、普段の僕とはかけ離れたものだろうか。

「……紫ちゃん。明日、真九郎くんがキミを迎えに学校に来る」

「え……？」

「その時、真九郎くんが初めに話す言葉が、ごめんなさいの一言だったら、許してあげるんだ。」

でももし、それ以外の言葉だった時は、何も反応するな。知らないふりをしなさい」

きっと紫ちゃんは、僕に言われなくても、真九郎くんをあっさり許す気はないだろう。

かと言って、本気で嫌っているわけでもない。むしろ、彼が大好きだからこそ、今回のことが許せないのだと思える。

ならば、真九郎くんにはその痛みを知ってもらはなくてはならない。自分のことを棚上げしても。

それは気付いて貰わなければならない。

でなければ、僕と蝕織のようになる。
互いに歩みあっている、何処か歪な関係に。
完全に『縁』が切れてしまってもツライ関係に。

そんなもの　この二人には似合わない。

「紫ちゃん。キミが真九郎くんを大好きなのは、凄くわかる。
けど例えば好きな人でも、怒ったりしちゃういけないなんて事は有り得
ない。」

これは僕の意見だけだね。

好きっていうのは、『相手のことを何でも受け入れる』ってことじ
ゃないんだよ。

『相手のことを支える』ってことなんだ。

そのためには、相手に厳しく接しないといけないこともある」

それは互いに苦痛だけれど、そうしなくてはならない。

「人間なんだから、衝突があって当然だ。
だから紫ちゃんが、真九郎くんを怒っても、それは至極妥当だと思
うよ」

話は終わり、とベンチから立ち上がる。
ようやく、表情も落ち着いた。

ムカつきを隠せるくらいには、だが。

「取り敢えず、今日はもう帰ろうか。」

騎場さんも心配するだろうし、紫ちゃんも疲れたる？」

「……うん」

顔を上げて、紫ちゃんもベンチから降りる。

泣き疲れたようだけど、顔は幾分か落ち着いている。

「……夕介」

帰る傍ら、紫ちゃんが顔をこちらに向けた。

「ん？ 何かな」

「……ありがとう、少し、楽になった」

くだびれた表情で、けれど確かに、紫ちゃんは笑った。

「別に。これくらい構わないよ」

礼だっではない。

その笑顔を向けるべき人間は、僕ではなく真九郎くんだろうから。

その後、紫ちゃんを送り届けた際、騎場さんに事情を説明すると、騎場さんにまで礼を言われた。

「昨日からお嬢様の御様子が優れず、我々も力不足を嘆いていたところだったので」

「僕は何もしてませんよ。それより、財力の世界の人間に仕える人が、殺し名に頭下げるなんて、それこそあっちゃいけません」

「それは関わりの無いことで御座います。私めにとって、貴方は殺し名ではなく、お嬢様の大切な御友人なのですから」

瞠目せざるを得ない。

見かけ一番ヤクザなこの人が、実は一番人間出来てそうだから、世の中わからないものだ。

「紫ちゃん、よろしく願いしますね」

「はい。……それを言うべきなのも、本来貴方では無いのでしょうね」

「ええ。同感です」

最後に車に乗り込む紫ちゃんへ手を振って、車が遠ざかるのを見送った。

「……さて、と」

直ぐ様ケータイを開き、コールをかける。

「……あれ？ 哀川さん出ないな」

ケータイを切ってばやく。

やっぱり姫ちゃんのこと調べてるのかな。

次になぎへも電話してみたが、こちらもアウト。

銀子ちゃんに頼むのもいいが、彼女の不安の種を増やしそうなため、却下。

「となれば……」

五月雨荘にとってかえり、パソコンで調べたいことを三分で調査した。

再びケータイを開き、先ほど調べあげた電話番号を早打ちする。しばらくの待機音。

スリーコールで相手は出た。

『はいはい。どちら様でしょうか？』

「こんにちは。絶奈さん」

『……夕識くん？』

電話越しに驚いたような口調が伝わる。

『おやおや、予期せぬお客様ね。てか、あたし電話番号教えた？夕識くんの電話番号は聞いたけど』

「男の子には秘密がいっぱいなんですよ。それより、教えて欲しいことがあるんですが」

『教えて欲しいこと?』

「斬島切彦のターゲットである志具原理津の居場所、それが知りた
いんです」

僕は調査能力は多少のスキルはあれど、基本的には専門外。
名前と顔しか知らない人間となれば、お手上げ。
ならば、それを知る人間に聞くしかない。

『ふーん……? 一応理由聞いてもいいかしら』

「言えません。しかし、貴女会社に不利益になるようなことは
しません」

『あ
』どーだかなあ。夕識くん、初対面でわたしの邪魔しちゃったしな
』

シニカルな笑い声が聞こえてきた。

「まあいいわ。なんか切羽詰まった夕識くんってのも新鮮だし。教
えてあげるわよ」

口ですらすらと伝えられた場所を記憶して、僕は電話を切るつもり。

「……あ、そうだ。代わりに一つ情報をあげましょう」

『情報？』

「ええ。これだと僕だけ得してますしね。

ただし、それを信じるか否かは絶奈さん次第ですが」

『へえ、面白そうね。何かしら』

「柔沢紅香には息子がいる」

早口でそう言って、絶奈さんが何か言う前に電話を切る。

「……言ったの不味かったかな」

少し軽率だったかも知れないと後悔する。

この情報にしる、以前くなぎーに調べてもらってようやく知れた情報なのだから、意外に重要性のあるものだ。

「ま、いつか」

多分信じないだろう。

紅香さんが子供を持っている、なんてハナシ、彼女を少しでも知る人間が聞けば、タチの悪いジョークにしか考えないだろうし。

加えて、情報ソースが零崎ともなれば、信用度などたかが知れている。

さて、と。

地図持った。

深淵夢想持った。曲弦系用の系持った。

支度終了。

「じゃあ、ささっと思いますかね」

「何処へですか？」

見ると、五月雨荘の入り口前に、学校帰りの蝕織が立っていた。その顔には、昨日見せた、喜んでいても悲しんでいるともとれない表情が刻まれていた。

変だな。あれだけ色々意識してたくせに、今はもう何ともないや。

「うん。ちょっとくらおのぼりさんにヤキを入れにいこうかと」

「ちゃらけた態度は止めて下さい。何処へいくのかと聞いているんです」

「安心しろって。お前には関係ないし、迷惑もかけんから」

僕が言ったのはそれだけ、のはずだ。

しかし、蝕織はその言葉が、まるで世界の終わりとも言わんばかりに目を見開き、やがて「そう……ですか」と目を伏せた。

「悪いな。なるべく早く戻るよ」

へにやりと笑い、蝕織の脇を通って、木造のアーチを潜り抜けた。

「お兄様」

蝕織が振り返らず、僕を呼び止めた。

「お兄様、さっき笑いかけてくれましたけれど、とても怒っていますよね」

「ああ」

「それは、何のための怒りですか？」

「決まってる啦」

そのまま去り際に、僕は答える。

「真九郎さんと紫ちゃんのための怒りだよ」

昨日の友は、血濡れの鬼

何かから、取り残された気分だった。

兄が去り際に放った言葉は、蝕織にとって、聞きたくない言葉だった。

「……わたしへの心配なんか、一日で忘れてしまっくんですね」

とつくの昔に解っていて、覚悟もしていたことだけれど、それでも辛い。

中を内側から抉られたように、胸が傷む。

部屋に戻る気にさえならず、普段は闇絵が座る木の根元に腰掛け、顔を膝に埋めた。

いやです。

もう辛すぎます。

頭がぐるぐる回ります。

この痛みを止めるには、壊すしかありません。

自分か、あの人を。

ぴりりりり。

突然の着信音。
身体を鞭打ち、ポケットからケータイを取り出す。

「……………はい」

『やあやあ蝕織ちゃん！ うふふ、元気かな？』

「……………」

通話終了ボタンを押す気にもなれなかった。

今のコンディションで、この兄と会話するのは拷問に等しい。

ケータイごとぶん投げてしまいたいくらいだ。

それでも蝕織は、一応形式ばった挨拶はしなければと思っただらしい。

「何か……………御用ですか、双兄さん」

『何って、可愛い妹に電話するのに理由があるかい？』

「そうですね。では家族間通話は有料なので、このまま会話を打ち切るのが互いにとってベストだとわたしは判断しているのですが」

『……さつきからどうにもテンションが低いねえ。
無意味な明るさがキミのアイデンティティーだと私は記憶している
のだけれど。

もしかして、夕識くんと何かあったのかい？』

……その鋭さをどうしてもっと別な所に活かさないのだろうか。

いや、活かしているからこそその、普段の行き過ぎた家族愛なのか。
しかし、普段ならただうざいだけの態度に、今日は何故だか甘えて
しまいたい気分だった。

末期だな。と自嘲しながら、蝕織は口を開く。

「……そうですね。双兄さん。

せっかくかけてくれたんですから、妹の愚痴でも聞いてくれませんか？」

『おいおい蝕織ちゃん、私を誰だと思っているんだい？

この零崎双識、妹の愚痴を聞く耳くらい、いくらでも持っているぞ』

「……にやはは、そうですね」

疲れきった顔でくすりと笑い、蝕織は淡々と、変わり者だけれど頼
れる兄に、心のわだかたまりを打ち明けた。

西里総合病院。

絶奈さんから告げられた場所は、都心から幾分離れた場所だった。なんとも寂しい街並みに一際大きく聳え立つそれは、鳩の群れに紛れるカラス並みに目立っている。もう夕方になりつつあるため、正門こそ閉じられていないが、面会時間はとっくに過ぎているだろう。

「面会時間でもアウトだろーけど」

絶奈さんの話じゃ、九鳳院の近衛隊が配備されているのだ。僕なんて、真っ白な髪の毛だけで警戒されるだろう。

「ま、関係ないけどね」

よし、精神武装終わり。

どちらにせよ、僕はここに用があるんだし、進むしかないんだ。

と言うわけで、正面から堂々と入っていくことにした。

案の定、院内の出入口には、明らかに堅気ではない黒服の男が二人。

「貴様、少し止ま……がッ！」

質問しようとした二人を糸で拘束して黙らせ、院内に足を踏み入れた。

その後も、命知らずに向かってくる謎の黒服達AとかBとかCを、時に音を使って、時に糸で拘束して、時に深淵夢想の柄でタコ殴りにしたりしながら、下の受付で聞いた病室を指す。

半ば八つ当たりにも等しかった。または軽いウォーミングアップといったところか。

ちなみに一般の方々に迷惑をかけぬよう、倒した黒服は空き部屋とか職員用のロッカーとかに叩き込みました。

それでもなお向かってくる黒服ズ。労働者の虚しさか。

そんなこんなでしばらく行くと、曲がり道の角で首にひやりとする殺気を感じた。

次の瞬間、僕は体を右に傾ける。

ついさっきまで僕の首があった部分を横薙ぎの刀が掠めた。

「うおっとお？」

追撃を深淵夢想で受け止めたり、かわしたりしながら、僕は徐々に距離を取り、謎の襲撃者の姿を捉える。

「あらら、貴女は……」

「貴様…、あの時の零崎一賊か！」

そこにいたのは、以前九鳳院蓮丈が護衛として連れてきた三つ編みの女双剣士だった。

「リン・チエンシンさん、だっけ？ 死神の目とかは持ってないから間違えてなきやいいんだけどさ。

んで、どうして貴女がここにいるのデシヨウ？」

「それはこちらのセリフだ！ 目的を言え！ 殺し名が一体何の用だ！」

「用……、用ねえ。まあ大した用じゃないんだけど」

双剣を構えっ放しの彼女を警戒しながら、僕は答える。

「ちよつくらウチのご近所さんに物申すことがあってね。そちらさん、揉め事処理屋雇ったりしてない？」

「……あの小僧に用だと？ まさかお前とヤツ、斬島と通じているのではないだろうな？」

「おいおいおい。零崎と斬島が手を組んで何のメリットがあるのかな？ それに、真九郎くんは今回途方もなく愚かな真似をしたけど、スパイなんて陰湿な仕事をするほどの能力も悪意も無いよ」

「ふん、まあいい。どちらにせよ、貴様は近衛隊に牙を剥いた。その咎、貴様の命を持って償え」

「……やれやれ、こんなトコでもたついている暇は無いんだけどね。いいよいいよわかったよ。それじゃ、零崎を奏でよう」

深淵夢想を口元に持っていく。が、それよりも早く、リン・チエンシンの刃が猛攻をかけてきた。

「貴様の戦い方は報告で割れている！ 音使いとは珍しいが、タネが割れてしまえば恐れるに足らん！」

「音楽を馬鹿にしないでもらいたいですね。高尚で素晴らしい力で

すよ」

双剣の間合いを潜り抜け、深淵夢想を薙いで刃からの距離をなるべく遠くに取らせる。

「解せんな。それだけ強がりながら、間合いを取って逃げ回るだけとは」

「えー、だって日本刀なんて怖いじゃないデスカ。殺傷力も強度もナイフなんかとは比べものにならないし、貴女の間合いに入ったらさすがに斬られちゃいますし」

お世辞抜きに、彼女の實力はかなりのものだ。

剣術の力のみなら、蝕織にだってひけをとらないだろう。

「成る程、ただの逃げ腰というわけではないか。

しかし、このまま回避を続けられたとしても、持久戦になれば貴様に勝機は無いぞ」

「だから諦めて斬られろって？ 冗談キツイですよ。いくら斬島とやり合う前に、僕なんかと遊んでる暇が無いからってさ」

九鳳院の事情なんぞ知ったことか。

僕はやりたいうようにやっているだけだ。

「まあ確かに、早期決着という提案には僕も賛成です。
てなわけで、これでお仕舞いにしましょう」

「何を言っ ッ！」

双剣の斬撃が止まり、リン・チェンシンの身体もまた、刀を振り上げた体勢のまま緊急停止した。

「な、にっ!?!」

「ふう、やっぱり、このやり方じゃあ操作に時間はかかるか」

「操作だと……ば、馬鹿な、 貴様……一体どうやって……!」

「ははは、疑問点を述べるのは、悪くないですね。
にしても、さすがは積雪さん、バージョンアップしてくれてる。
ちよっと風に当てただけで、思い通りの音が出るな」

「か、風に当てる、だと?」

「プレス部分にさえ風が当たれば、音は出るんですよ。ちやんと微量ながら、曲は流れてたんです。貴女は動き回り過ぎてたから、そんな微細な音には気付かなかったかもしれないがね」

「だ、だから、鎌を振り回して……！」

「ご名答。あんだけ振り回せば、音は意のままに出てくれます。

ま、貴女が案外話し相手になってくれたのも大きいですが」

言葉の操作しやすかったしね。

止まりっぱなしの彼女の脇をすり抜け、僕は再び足を進め出す。

「ま、待て！ 貴様、何故わたしを」

「めんどいからですよ」

殺さない、と続けるはずだったであろう台詞に、僕は言葉を被せる。横目で、リン・チェンシンの瞳に驚きの色が浮かぶのが見えた。

「一応貴女は殺す条件に入ってますし 流血沙汰も真九郎くん
がいい顔しないでしょうしね」

そう言っただけ、鎌の柄で彼女を昏倒させた。

「さすがにみんな数時間すりゃ起きるだろうけど……」

その間に斬島切彦が来ちやうと後味悪いなあ。

「全員が起きるまで、ここにいてるべきか……と、ここだな」

通り過ぎかけた病室の前で立ち止まり、ノックもなしにドアを開けた。

「やあやあこんにちは」

中にいた二人の人間が、驚いたように目をこちらに向ける。

「あれ、夕介くん？」

一人はご存知紅真九郎くん。
もう一人は十代後半と思わしき少女で、ベッドに横たわり、上半身だけをこちらに向けていた。

「？ 真九郎くんの知り合い？」

少女が小首を傾げた。

「いや、はい。知り合いというか、ご近所さんというか」

「通りすがりの殺人鬼です、覚えなくていいですよ」

「殺人鬼？」

僕のセリフパロディはさすがにスルーされ、少女はきょとんと、どこか抜けた表情を向けてきた。

「あなたが、わたしを狙ってる殺し屋さんかしら？」

「いいえ、残念ながら違います。

貴女が志具原理津さんですね」

「ええそうよ。殺し屋さんじゃないなら、貴方は誰？」

「名前は緋色夕介。真九郎くんのクラスメート兼ご近所さんです」

「ふーん。夕介くん、ね。」

それで、その夕介くんはわたしに何の御用？」

「いえ。ぶつちやけ貴女に用は無いです。ちょっと真九郎くんに用があります」

「真九郎くん？」

理津さんは真九郎くんと顔を見合わせた。

「時間はなるべくかけません。」

護衛がいなくなるのは危険だと思いますけど、少し我慢して貰えませんか？」

「ふむ、まあそれくらいはいいけど」

あっさり許可は降りた。もう少し渋られる気がしたのだが。

「ありがとうございます。真九郎くん、下で話そうか」

「あの、夕介くん、ここじゃあ駄目かな？
今はあまり理津さんから離れない方が……」

「わたしなら大丈夫だって。リンさんもいるしさ、少しくらいなら
暇もあるわよ」

理津さんに促されながら、真九郎くんはようやく僕の後ろについて
病室を出た。

下の大広間を通り過ぎ、院内の外にある広い庭へと場所を移す。

「でも夕介くん。よくあそこまで来れたね。リンさんとか、近衛隊
の人とかがいたのに」

「ああ。そりゃ僕が全員倒しちゃったからね」

「は!?!?」

しれっと放たれた爆弾発言に、真九郎くんの顔が引きつった。

「あ、心配しないで。昏倒させただけだから数時間すれば起きるし、
後遺症も残らないよ」

「いや違う！　そういう問題じゃない！」

不意を突かれた事による声を張り上げたツツコミ。
真九郎くんにしてはレア。

「じゃあ尚更理津さんが危ないじゃないか！　今理津さんを守ってる人は誰もいないってことでしょ！？」

「ノープロブレム。ここは外庭だし、僕なら何処から敵がきても対処出来るさ」

一応迷惑かけた分の働きはしないとね。

「でもここを狙ってる奴らは……」

「知ってる。【ギロチン】の斬島切彦と……なんつったっけ。フラインクだったか？」

周知の事実のため、隠す意味もない。

「タ介くんも、知ってたんだ」

「ちよいと劇的な出会いをしましてね。まあ、僕でも勝てる相手だし、来たら迎撃はするぞ。」

僕がいる間に来たら、の話だけどね」

それ以外は君の領分だ、と暗に念押しする僕。
真九郎くんも、それは察せられたようだ。

「さて、と」

ぱんぱん、と手を打ち、真九郎くんを真正面から見つめる。

「僕の用事なんだけどね」

「うん」

「戦鬼化しな」

「は？」

予想外の要求に、真九郎くんは目を見張った。

戦闘でもないのに、崩月の角を出せと言っているのだから、当然か。だがそれでも僕は繰り返す。

「だから、戦鬼化しろって言ってるの」

「戦鬼化って……何だよ。戦いでもないのに。て言うか今は、夕乃さんからストップがかかってるから……」

「いいからいいから　てか、そうしないと」

僕は感情を消して、冷笑する。

「死ぬよ？」

何が起きたのか、真九郎は理解出来なかった。気が付けば、自分の身体は地を這い、目の前には深淵夢想を振りか

ざした夕介がいた。

「おや、さすがに反応したか」

そう呟いて、夕介はさらに追撃を加える。

「くっ！」

真九郎は直ぐ様起き上がり、スイングされた鎌を受け止める。

「だーかーらーさ。戦鬼化しなっつてば。そうしないと音を使わなかつたっつてお釣りが来る」

「ゆ、夕介くん、何するんだよ！」

訳がわからない！

何故いきなり、夕介に斬りつけられなければならないのだ！

「何をするって……。あー、そうだね。簡単に言っちゃつと、零崎をしちゃおうかなーと」

何気なく言い渡された言葉。

零崎を始める。

その意味は、夕介との今までの付き合いから知っていた。

「兎にも角にもさ。正直なところ今の僕は結構頭に来てるわけだよ。だから加減出来るかどうかはかなり微妙なわけ」

真九郎の腹部を衝撃が襲う。

鎌に気をとられて、回し蹴りをガード出来なかった真九郎は、数メートル先の場所まで吹っ飛ばされた。

「ぐっ、あ……」

「本当呆れるくらい頑丈だね君は。けど、これ以上は身体が持たないよ？」

『今の君が、戦鬼化しないで僕に勝てるかどうか試してみるのも面白いかも知れないけどね』

くるくると鎌を手で遊びながら、夕介は真九郎に近づいていく。その姿を見て、真九郎は戦慄を覚える。

『人間』である緋色夕介は、確かに彼の友人であるだろう。

しかし、『殺人鬼』である零崎夕識にとっては、彼もまた、家族以外の誰かに過ぎない。

そう、今まで自分に向けられることの無かった、深淵夢想、殺し名三位、零崎夕識の持つ、絶対的な『殺意』。それを真正面から感じたのは、これが初めてだった。

「しかしまあ、君が戦鬼化しようがしまいが、僕は負けねーけどさ。あー、ここまで勝つ自信のある勝負も珍しいね」

「ち、ちょっと待って!」

「んじゃま、そういうわけなので」

「ゆっ……」

「零崎を奏でよう」

演奏開始。

『そうか………つらかったね。蝕織ちゃん』

事のあらましを聞いた双識は心の底から労るように、そう言った。

「別に……昔からですから」

『それにしても、夕識くんには困ったものだな』

これはやはり、人識に【わざと】居場所をばらさせたのは荒療治過ぎたか。

しかし、反省していても仕方ない。

それはもう今更というやつだ。

『わたしは家族を試験にかけるような真似はしないけど………もし仮に彼を試験にかけたのなら、間違いなく我々の中で最も【合格】に近い存在だろう 【不合格】には違いないがね。でも今の話を聞く限りじゃ、兄としては確実に【不合格】だ』

一辺の感慨もなく、双識は呟く。
それほど呆れているのだ。

『ただまあ、まるで【合格】の見込みが無いわけじゃ無いのが救いか……。』

蝕織ちゃん、彼と戦った時、彼は【零崎を奏でよう】と言っていたかい？

それとも【間奏曲を奏でよう】？』

「へ？ あ、えっと……確か【零崎を奏でよう】と言っていました」

妙なことを聞かれ、蝕織は一瞬戸惑う。

『やっぱりか』

「やっぱり？」

『蝕織ちゃん。彼にとっての【零崎を始める】という行為はね、誰かのため、本気で相手と戦う】という意味なんだよ』

淡々と、双識は説明していく。

『【大切な人を傷つけた人間しか殺さない】という制約は、トキのような信条では無く、抑制装置、リミッターなんだ。もっとも、彼自身それには気付いていないようだがね』

「それじゃあ、お兄様は普段、自分の力を押し殺しているということですか？」

『当たらずとも遠からず。押し殺しているというより、彼は自身自身の考え方ゆえに、本来の力を出せない。と言った方が正しいね』

「考え方？」

『夕識くんは自分を出来損ないだと思ってる。』

自身を過小評価することは、自分の力に見切りをつけるということなんだよ。

だからこそ、彼は自分のために戦う時、その力が出せない。

自分のために、ならね』

意味深なその口調に、蝕織もようやく、双識の意図するところがわかった。

「だから 他人のために戦う」

大切な人を傷つけた人間しか殺さない。
それは、大切な人のために戦うということ。
自分ではなく、誰かのために。

「そう　彼は自分を過小評価する故に、他人を過大評価する。

自分ようになって欲しくない、という気持ち強いのだろうね。
だから自分を省みず、他人に重きを置く　その時、彼は本来の力
が出せるのだよ。

彼が【間奏曲を奏でる】と言った時はね、大概が自分のために戦う
時なんだ。

片や、【零崎を奏でる】と言った時、彼は自分のリミッターを外し、
相手に挑む。

わたしの知る限り、彼が【零崎を奏でる】と言って、相手に負けた
ことはないはずだよ。殺す殺さないは別にしてだがね。

彼自身、戦っているうちに【本気で戦う】という気持ちが薄れるん
だろう。

戦いに勝っても、相手を殺すまでの力が残らないのさ」

双識の言う通り、こちらに来てから、【零崎を奏でる】と言った時
の夕識は早蕨　星嚙　斬島。それら全てを下している。

早蕨を殺したのは、軋識が近くにいたためだろう。

自分が殺そうが殺すまいが、軋識は早蕨を殺すだろうし、それなら
ば。と思っただ結果。

大切な人間の手を煩わせることを良しとしなかったのだ。

昔、一度だけ夕識が【零崎を奏でる】と言って負けたことがあるにはあったが、その相手が哀川潤では、誰も双識の理論を否定しようとは思うまい。
彼女は別格だ。

「でも」

と、蝕織は異論を述べる。

「わたしと戦った時、お兄様は【零崎を奏でる】と言いましたけど、正直わたしよりずっと弱かったです。本気になんて……」

『いやいや蝕織ちゃん。それこそまさに、彼が完全なる不合格でない証じゃないか！』

変に声のトーンを上げる双識。

『妹相手に、本気で刃を向ける兄が何処にいるんだい？』

ぴたりと、電話機を持つ手が強張った。
蝕織が沈黙したことから、双識はまた溜め息をついた。

（私からすりゃモロバレなんだけどねえ）

夕識が何を思ってそうしたのか。
恐らく、軋識や曲識も気付いているだろう。

（知らぬは互いのみ、か。まあ、お互いに意識し合っているから
そなのか）

本当に似ている、血脈と流血で繋がるだけのことはある。
本来有り得ない異端。
双子の零崎。

『……まあ色々と理屈を並べたりはしたけどね。別に彼は蝕織ちゃんを大切にしていけないわけじゃないよ。
ただそれが、蝕織ちゃんの望むやり方じゃないだけさ』

「……………」

そうだ。

自分を大切にしてくれる。

それは確かに嬉しい。

でもそうじゃない。

自分があの子に求めるのは、そういうことじゃないのだ。

「……わたしは、どうすればいいんでしょうか？」

『今まで通りでいいんじゃないかな』

あまりにあっさりとした口調で、双識は言う。
電話越しに蝕織は瞠目する。

『夕識くんが間違っているのなら、キミが正してあげるしかないだろう。』

家族の間違いを正してやれるのもまた、家族しかいないからね。

それに、蝕織ちゃんにとって、夕識くんは誰よりも大切なんだろう？
なら尚更、迷う必要はないさ』

軽く発せられた言葉。

いつもと変わらない兄のトーン。

しかしそれは、蝕織の中に沈殿したわだかまりを、静かに溶かしていく。

「双兄さん」

『ん？』

「……ありがとうございました」

『うふふ、気にしないでくれ。』

『これくらいお安い御用だ』

「それでも、ありがとうございました。」

「……では、またいずれ。結果は連絡します」

『ああ、頑張りなさい。夕識くんにもよろしく』

通話を切り、蝕織は木の幹から立ち上がる。

「わたしの前じゃ本気になれない、ですか」

大した感慨も無さそうに、蝕織は呟く。

「今頃あなたは、紫ちゃんのために本気になってるんじゃないよね」

圧倒的。

そう表現するのに、何の見劣りがあるだろう。

「はははは！ どうしたあ？ 遅い遅い遅い遅い！」

普段からは考えられないようなハイテンションの夕介は、暴風雨の如く鎌を振り回す。
風切り音が軽く突風になるほどに。

「くっ！」

片や真九郎は、それをかわし、時には鎌本体を受け止め、どうにかラッシュを防御していく。
しかし、防御できるだけだ。攻撃に転じることはおろか、体勢を立て直す暇すら与えられない。

間違っことなく劣勢。

ただでさえ、いきなりの襲撃に戸惑っていて、平静さを欠いている

のだ。

むしろあの鎌が、自分を貫いていないことの方が奇跡に近い。

「考え事は、よくないねっ！」

ふっと、夕介が真九郎の視界から消えた。

何処に。という疑問を感じるより早く、真九郎の身体は仰向けに倒れる。

倒れながら、ようやく夕介がかがみこんでの足払いをしたことに気付く。

同時に、真九郎は自分の危機も理解した。

「そらっよー！」

素早く夕介は立ち上がり、鎌を縦に振り下ろす。

回避は出来ない。

こんなバランス皆無な状況下では尚のこと。

「くそっ！」

真九郎は反射的に、右腕を迫り来る鎌の前に出す。

勢いをつけた深淵夢想の刃は、それすらも切り裂く筈だった。

しかし、それはガキン、という鈍い金属音により阻まれる。

「……ようやくか」

咳く夕介の前には、右腕で深淵夢想を受け止める真九郎がいた。その肘からは、鋭利に輝く刃のような角が出現している。

崩月の角。

真九郎が受け継いだ戦鬼の証。

真九郎は力任せに、夕介の鎌を振り払う。

「おっと」

危うくバランスを崩しかけたが、夕介は身体を後ろに引いて、それを回避する。

「うんうん。どうやらやる気になってくれたようで」

「はあ、はあっ。

夕介くん、何でこんなことを……!」

「んー。まああれだ。キミがいかなる愚行を犯したか気付かせてあげようと思ひましてね」

戦鬼化に動じることなく、あっけらかんと夕介は答える。

「キミは気付いてないだろうけどさ。僕に勝ったら教えたいよん」

深淵夢想を構え直し、夕介は距離を詰めてスイングする。身体能力が上がっている真九郎にとって、容易に対処出来る力。角でそれをガードし、そのまま深淵夢想の刃部分を掴む。

(このまま、これを砕けば！)

夕介には悪いが、今はこの場を治めなければならない。真九郎は右腕に力を込める。

「残念ながら、直したばかりの鎌を壊されるのはイヤだな」

深淵夢想の刃を持つ手を蹴り上げ、がら空きになった脇腹に鎌の柄をぶつける。

「がっ！」

肺から吸い損なった空気が吐き出される。
それでも夕介は止まらない。

「崩月の戦鬼化は確かに強い。純粹な力は時にいかなる物も凌駕する。殺し名や呪い名にも通じるだろう。
だがしかし」

しゅるりと、ポケットから細い糸を引き出し、指で操り出す夕介。
放たれた曲弦糸は、確実に標的である真九郎を拘束する。

「う、ぐ……」

「それが発揮される前に潰せば、ノープロブレム」

ぎしりと、剛腕の右腕すら拘束する糸。

真九郎が力を入れてみても、糸は少しも干切れない。

「無駄だよ。人兄のが殺人向きなら、僕のは拘束向きなんだ。
ま、別に攻撃性が無いわけじゃないけどね」

意外に人体は切りづらいからね、と言って、夕介はあっさりと糸を

解き、真九郎を解放する。

身体を支えていた力が消え、真九郎はそのまま地面に落下。それと同時に、右腕の角も身体の中へ消えた。

「やれやれ。もつと粘れるかと思いきやこんなもんか。

音を使うことも無かったね。

でもイライラは八割方発散出来たし、良しとしますか」

そのまま夕介は興味を無くした、と言わんばかりに、地面に附す真九郎の脇を歩き去っていく。

「戦鬼化したのが……三分と少しか。

それくらいなら明日にゃ全快してるでしょう。良かったね」

「待つてよ夕介くん！ 納得いかない、なんで理由もなくこんなことをしたんだ！」

「理由がない、ね。まあ、僕零崎だし、間違っちゃいないわな。

でもね。真九郎くん」

夕介はくるりと真九郎を振り替える。

「本当に理由もなく、だと思っかい？」

そう言った夕介の目は、異彩を放っていた。

「……明日、紫ちゃんに会いに行け。

そうすれば全部わかる」

「紫、に？」

「そう、紫ちゃんに。じゃ、仕事中に邪魔したね」

それ以外に言うことはない。

真九郎が見送る夕介の後ろ姿は、それをありありと語っていた。

「……あー、かつたるい」

零崎VS崩月という、今にして思えば意外に歴史的なバトルを終えた僕は、五月雨荘に戻るなりそう愚痴った。

本当に嫌になる。

自分のことを棚上げしての説教が、こんなにも自己嫌悪を沸き立たせるものだとは思わなかった。

「僕にしたって、誰かの気持ちができるわけでもあるまいに」

しかもよりによって一番身近な人の気持ちが。

あのあと、五月雨荘に蝕織の姿は無かった。
当たり前か。

出かける時、あいつの態度は明らかに可笑しかった。

多分、また僕が何かしてしまったのだろう。

僕自身が、自覚していないところで。

何もわからない僕だが、これだけははっきりしている。

次にあいつと会えば、その時は　　。

「やれやれ、くろね子さんも、空気を読んでいるのかいないのか」

部屋の床に寝転がりながら、先ほど届いた、くろね子さんに頼んでおいた『モノ』を見る。

ここまでタイミングがぴったりだと出来レースだな。

仕方が、ないのだろうか。
あいつが僕の前から消えた時、もう後戻りは出来なくなっていたのだ。

後戻り出来ないほどに、僕とあいつの関係はイビツになっていた。

「……畜生め」

何でだろう。

間違わないようにしてきたつもりだったのに。
どこかで確実に綻びが生まれてしまう。

真九郎くんにしたって、間違っただつてもりは無かつただろう。
でも、相手の受けとり方なんてわかるわけがない。
相手がどう思うかなんてわかるわけがない。
紅真九郎は九鳳院紫ではなく、零崎夕識もまた零崎蝕織では無いのだから。

けれど、それは言い訳にならない。

人間関係において、『他人のことがわからない』はタブーだ。

そこに逃げることは許されず、絶対にその報いを受ける。

僕も、真九郎くんも。

「さて、真九郎くん。」

果たして僕とキミは、互いに報いを受け入れられるでしょうか？」

思考を放棄して、僕は目を閉じた。

知らずに後悔、知っても後悔。あなたはどっち？（前書き）

紅の漫画版はついに二巻のストーリーですね……。原作と違って、サムライなあの人がちやんと生き残ってくれるといいんですが。

知らずに後悔、知っても後悔。あなたはどっち？

最近いやにケータイを使うことが多い気がする。
いや、現代社会人のデフォルト装備に成りつつある万能ツールだから、別に珍しくもなんともないのだけれど。

まあ、そんな近況はさておき、僕が電話をかけているのは、前住まいの骨董アパートである。
が、掛きたい相手である当のイー兄は電源を切っているらしく、代わりにみいこさんの自宅電話をダイヤルした。

『もしもし』

「お久しぶりです。みいこさん」

『ん？ おお、夕介か』

一瞬誰だかわからなかったらしい。
まあ、そろそろ四ヶ月くらい経つしな。

『久しぶり。この前は崩子達が邪魔したらしいな。騒がしくなった
るっ』

「ええ。今の僕の住まいは、ただでさえそつちと同じくらいに奇抜な同居人ばかりでしてね。
もはやあの場が魔窟と化しました」

『あはは。お前が住んでるところだな。それくらい騒がしくて丁度いいんじゃないか？』

「ですかね」

実際どうなのだろう。
波乱万丈な人生を送っているのは認めるが。

『ま、元気そうなんで安心したよ。
それで、どうした？ いきなり掛けてきて』

「いえ、大した用じゃないんですけど。
いー兄って、そつちにいますか？ ケータイ掛けても繋がらなくつて」

『そつだな。留守中だ』

「ほっ」

口元が少しニヤつくのがわかった。

「何処へ？」

『さあな。ただ、やらなきゃならんことがあるんだそつだ』

そして。とみいこさんは言う。

『私はあいつの帰りを待っている』

「……そつですか。それは」

もうダメだ。ニヤつきが止まらない。

「悪くないですね」

『そつだな。全くもって悪くない』

互いに同意して、どちちらともなく笑つ。

『その口振りだと、粗方事情は知ってるみたいだな。いの字から聞いたが、姫とも知り合いだったんだろっ』

「はい。 姫ちゃんの場合は、僕も残念です」

『……ああ。私も残念だ』

「いー兄が立ち直ってくれたのが、唯一の救いですね。

姫ちゃんだって、自分のせいでいー兄が押し潰されちゃうのはいやでしょうから。

みいさんが何かしたんですか？」

『いや、私は何もしてないさ。あいつが勝手に立ち直ったんだ』

「怒りました？」

『少し、ね』

茶目っ気のある返事を返すみいさん。
僕もつられて笑い声を洩らす。

「それじゃあ、みいこさん。いー兄が帰ってきたら、連絡寄越すよ
うに伝えてくれますか？」

『ああ、伝えておこう。お前もたまにはこっちに顔を出せよ。こっ
も、お前の家なんだからな』

「はい！」

はつきりとそう返事をして、ケータイをたたむ。

「ははは。そっかあ、いー兄が立ち直ってくれたか」

良かった。

素直にそう思う。

もし本当にあのままだったら、どうしようかと思った。

きつといー兄は、自分に出来ることをやっているんだろう。

惨めったらしく足掻きながら、それでも何かをしようとしている。

少し遅れたけれど、いー兄も真九郎くんのように、前へ進んだのだ。

「さて、と」

何にせよ心配事の種が一つ消えた。

いー兄が頑張ってるんだ。

僕が頑張らないわけにはいかないでしょ。

「それじゃあー丁気合いを入れてますか」

精神武装を終え、僕もまた自分に出来ることをする。

「こんにちは理津さん。……って、真九郎くんは？」

「こんにちは夕介くん。真九郎くんなら残念だけとお出かけちゅー」

昨日に引き続き、僕が理津さんの病室着いたのが午後4時あたり。会ったばかりの僕を、理津さんはベッドの上から何食わぬ対応をする。

「お出かけちゅーですか」

「ええ。何か特別な奴に会いに行くって」

特別な奴、ね。

多分紫ちゃんだろう。

時間帯的にも、今は小学校の下校時刻だし。

僕の助言を聞き入れたという安心感と合わせ、不安感もまた沸き立
った。

（真九郎くんの紫ちゃんへの対応次第なんだよな、状況が悪化する
か否かは）

僕としては後者が望ましいのだけれど、多分前者になる気がする。
元々真九郎くん、今回の紫ちゃんとの喧嘩を軽視してたっぽいし。

そんなままでは、紫ちゃんの望む態度が取れようはずもない。
やれやれ。いー兄がどうにかなったと思っただらこれだもんな。

「そう言えば夕介くん」

考えに耽っていた僕を、理津さんの声が引き戻す。

「昨日も思っただけけど、よくここまで来れたわね。リンさんや護

衛の人達がいたのに」

「前は強行突破でしたからね。今回は合法的にここまで来ました」

「合法的？」

「ええ。少し音楽を奏でただけです」

理津さんの頭にクエスチヨンマークが浮かぶ。

「えっとですね。要は、音で相手の知覚を操作して、自分の存在を希薄にしたんですよ」

ちなみに曲名は【赤の蜉蝣】だという補足も入れたが、理津さんはそれでもイマイチ理解出来なかつたらしく、「とにかく、面白ギミックを使って入ってきたわけね」と滅茶苦茶な納得をしていた。

「なんか緊張感ありませんね。理津さんって。真九郎くんから聞きましたけど、どこの誰かに命狙われてんですよ？ デッドオアライブなんですよね？」

「ええそうよ。緊張感が無いっていうのは……、そうね。リンさん

達もいるし、真九郎くんもいる。

精一杯の【生きる努力】はしてるからかな」

他力本願ではあるけどね、と笑う理津さん。

【生きる努力】。

その言葉に僕は違和感を覚えた。

どうにも理津さんは、この状況にあっさりし過ぎている。
なので、少し探りを入れる。

「ついさつき看護婦さんの話を小耳に挟んじやったんですが
も
う長くないそうですね」

「うん。これを見れば一目瞭然でしょ？」

身体に繋がれたチューブを無造作に見せてくる。

「それと夕介くん。今は看護婦じゃなくて、看護師が正解よ」

どうでもええわ。

「 そんな中、あなたに止めを刺そうとするような人って、誰なんでしょうね」

「 さあ？ でも、依頼人はともかくとして、私を殺しに来るヤツは、確実に悪党でしょうね。どんな理由にせよ、人殺しは罪だし」

「 ……目の前にその悪党がいちゃったりするんですが、それについては？」

「 あら、私を殺すつもりなのかしら」

「 まさか。真九郎くんの営業妨害になるじゃありませんか」

「 ならいいんじゃない」

「 いいのか？ 色々と見逃せない発言があったと思うが。」

「 ……」

じいっと、理津さんを凝視する僕。

理津さんは小首を傾げた。

「何？ いきなり見つめてきたりして。照れちゃうわ」

「いえ別に。ただ」

「ただ？」

「理津さんの目って、死にたがりの目ですよね」

理津さんの動きが固まる。

「……………どうしてそう思うの？」

「知り合いに一人、あなたとは比べ物にならないレベルの死にたがりを知ってるんで」

誰のことかは言わずもがな。

ま、次に会う時には、多少はマシな顔になってるかも知れないけどね。みいこさんの話を聞く限りは。

「さっき【生きる努力】がどうとか言っていましたね。でもそれ、嘘

じゃないでしょうけど、丸つきり本当でも無いでしょう。むしろ、死ぬ前提条件に【生きる努力】が含まれてる感じですかね」

別にこれは明言しなくてもいいことなのだが、何故だか言いたくな
った。

つい最近まで、いー兄の態度に苛々していたからかも知れない。

「理由は知りませんが、あなたはどうかやら、『病気で死ぬ』のでは
なく、『悪党に殺されて死にたい』ようですね」

「……すごいわね、キミ」

理津さんは本気で感心しているらしかった。

「今まで誰にも指摘されなかったのにな。そんなにも私って分かり
やすい？」

「いえ。ただ僕が殺す立場　悪党の人間だったからってだけの話
でしょう」

「ふーん、そうは全然見えないけど」

「おや、見る目がありませんねえ」

互いに皮肉めいた笑いを浮かべ、僕は話を続ける。

「今までの話を総合すると、悪宇商会に、志具原理津を殺すように依頼したのは」

「ええ、お察しの通り。私自身よ」

「意外にあっさりですね」

「分かってたんなら、隠す意味も無いでしょう」

「一応、理由をお聞きしても？」

「それを何故知りたいかによるわね」

「ぶっちゃけただの暇潰し」

「あらそう、なら話してもいいか。他言しなさそうだしね」

どうやら他言はしてほしくないらしい。

理由はどうあれ死にたいなら、それは妥当な判断か。

世の中、偽善者ぶって死ぬのを止めようとするヤツはたくさんいるからな。

そういう意味じゃ、真九郎くんにはもっと教えるべきではない。

彼は多分、形振り構わず、本気で人が死ぬのを止めようとするだろうから。

ある意味、偽善者より厄介だ。

「私が入院してる理由は知ってるかしら？」

「ええ、ここに来るまでに、一応は調べさせてもらいましたからね。確か、何時だったかのテロに巻き込まれたんですか？」

「話が早くて助かるわ。」

その通り。八年前にアメリカで起きた空港爆発テロ」

「八年前ですか……」

「あら？ そのテロについては調べてないの？」

「はい、詳しくは。時間が無かったもので」

「ふーん」

理津さんが面白い玩具でも見つけたかのような顔をする。

「じゃあこれは知ってる？ 私だけじゃなく、真九郎くんもそこにいたのよ」

「えっ？」

これには本気で驚いた。

真九郎くんがいた？

もしかして、真九郎くんの家族が死ぬ原因となった爆発テロのことか？

あの事件については紅香さんづてに聞いただけだったから、この理津さんの合ったテロとそれが一致しているとは分からなかった。

「ふふふ」

僕の驚いた顔を見て、したり顔をする理津さん。

「なんですか」

「あ、ごめんね。なんかキミ、会った時から何もかも悟ったような顔してたから。」

驚いた顔が見れたのが愉快だね」

そんなわけがない。

何もかも悟っているなら、蝕織との関係がここまで拗れたりはいしな
いだえおう。

「買いかぶりですよ」

「そう？ まあいいけど。」

でね。私もそのテロに巻き込まれて、瓦礫の下に埋もれながら
ずっと思ってたのよ。

助かりたい、死にたくないって。何度も、何度も祈ったの」

「普通じゃないですか」

誰でも死にたくはない。

生命の危機が迫れば、そう考えるのは至極当たり前だ。
しかし僕の返答に、理津さんは自嘲めいた表情になる。

「私が祈ったのはね。『私だけ』が助かりますようにって」

「……………」

それは。

それが意味するのは。

「親御さんがいたんですね」

こくりと理津さんは頷く。

「そして、その親御さんは助からず、あなただけが生き残った」

また頷く。今度はとても頼り無く。

「自分が嫌になったわ。
きつと、お父様とお母様は、私を助けてくれるように祈ってたはず
なの。」

だから私は生き残った。でも、私が考えてたのは自分のこと。そこ

で気付いたの。
そんな自分勝手な思いが、私の本性だって」

自嘲の笑みさえも消え、理津さんの顔には苦渋が滲み出ていた。

「でもそれは、仕方ないんじゃないですか？ 極限状態に陥れば誰だってそうなります。まして、あなたは幼かったんですし、テロに合ってそんな冷静になれるわけがないでしょう」

「言い訳よ、そんなの。私はお父様とお母様が大好きだった。この気持ちは今も昔も変わらない。
でも、違った。」

私は、ただ愛しているフリをしてただけ」

自分の事しか考えられなかったから、か。

紅香さんから知った話だが、そのテロの主犯は見つかっていないらしい。

組織のメンバーは何人が捕まったらしいが、未だに首謀者はこの世界でのうのうと息を吸っている。

紅香さんにも捕まえられずにいる。

哀川さんがその犯人を追っているかどうかは知らないが、捕まえたのなら、紅香さんが知っているはずだ。

世の中にはいる。

いかなる力を持ってしても、しつこく生き延びるドブネズミのようなヤツが。

だからこそ、理津さんは【その犯人が悪い】という事実には逃げられなかった。

自分を責めるしかなかった。

「だから貴方は、『悪党』に殺されたいんですね」

「そう。私は謝りたいの。お父様とお母様に。でも今のままじゃ、同じところにはいけないもの」

人間はその死因によって死後、逝く場所が変わる。そんな考えがある。と聞いたことがある。

殺人事件にしる、動機や状況やらで千差万別だ。

でも、

「気持ち悪いですよ。あなた」

自然と口から言葉が出た。

「人の死に、しかも自分の死をそこまでレイアウトするなんてイカれてますよ。家族のためだからって、そこまでするなんて、僕にや理解出来ません」

零崎は家族の報復はする。でも、死ににいくわけじゃない。家族のために、死を選ぶこともある。けど、その選択をしないに越したことはないのだ。

皆でいるのが、家族なんだから。

「気持ち悪い、か。確かにあなたからすれば、そうなんでしょうね。でもこれは、私にとってはそうじゃないのよ」

「わかってますよ。僕は僕の感覚上、気持ち悪いと思っただけです。口に出すのも嫌なんで、他言はしませんよ。真九郎くんにも、あのリン・チェンシンにもね」

「あはは、ありがとう」

「その代わり、一つ質問しても？」

「どござ」

「僕に殺されるという選択肢は、ありますか？」

僕の問いに、理津さんは首を捻る。

「無いわね。夕介くん、人は殺してるみたいだけど、悪党って感じじゃないもん。少なくとも、あのテロを起こしたクソツタレには遠く及ばないわ」

「おや、手厳しい」

「大体あなた、私が頼んでも殺してなんかくれないでしょ？」

「はい」

一瞬の迷いもなく、僕は首肯した。

「あなたは僕の殺す条件満たしてませんし、ましてや、自分から死にたがってる人間なんて知ったこっちゃありません。勝手に死ぬね」

「あなたも大概手厳しいわね」

言われなくてもそのつもりだけど。

そう理津さんは微笑む。

「その代わり、あなたを殺す人間は、中々の人材ですよ。まだ技術には甘さがありますが、殺しの腕は一流ですから」

そう言い捨てて、僕は理津さんに背を向ける。

「あら、お帰りかしら？」

「いいえ、ちょっと息抜きをね。真九郎くんが戻ってきた頃にまたお邪魔します。では後ほど」

「ええ、待ってるわ。あなたと話すの、中々楽しいし」

「止めてください。誉めても何も出ませんよ？」

振り返って舌を出す冗談めかしい仕草をし、僕は死にたがりの少女が居座る病室を後にした。

近衛隊に気付かれぬように病院を出て、そこでまた首を捻る。

安く見積って、真九郎くんが戻るまで一時間以上。

かといって、この近隣は民家と僅かな商店が立ち並ぶだけの寂しい場所。

娯楽施設などあるはずもない。

結局僕は宛もなく、がらんどくと表現しても、なんら遜色の無い街をさ迷い歩く運びとなった。

「呑気なもんだよな」

時たますれ違う人々を見て、つくづくそう思う。

殺し名やら裏十三家とは無縁の人々。

今すれ違った人間が殺人鬼だとさえ思わない間の抜けた世界。

そんな世界に、かつては僕もいたというのだから、考えさせられるものがあるのだけれど。

「戯言か」

退屈だと普段はどうでもいいことに思考が傾く。
我ながら、退屈の嫌いなこと。

「こんなだったらいっぺん帰りや良かったかなあ……」

モロ後の祭りなのだが。

ふと、数歩先にぼつんと立つコンビニが見えた。

なまじ周りに建物が少ないため、電飾が意外に目立っている。
暇潰し用の雑誌でも買うかな。

そんな安直な打開案を実行すべく、コンビニへと足を進める。

「……………あ」

自動扉が開き、中に入ろうとした僕の足が急停止する。
原因は、扉が開いた先にいた人物。

「……………あなたは」

そこにはコンビニ袋を下げ（中身は菓子類、推定三百円）、意外そ

うに目を丸める斬島切彦が立っていた。

「……なんで着いてくる？」

「……こちらに用があるんです」

「仕事？」

「……はい」

「……」

か、会話が続かねえ……！

隣で無表情のままアメを舐める少女を見ながら、僕は内心で冷や汗を流す。

この子とは前回、あんな別れ方しちゃったもんだから、話すのが気まずい。

(……いや、僕の自業自得だよ!? わかってますよそんなことは
!)

とまあ、誰に逆ギレしてるのかもわからないくらいに、僕は散々に
心乱れているわけで。

せめてもの救いは、彼女も僕と同じく気まずそうにしていることだ
……少なくとも『今』の彼女は、だけど。

このまま話していてもジリ貧っぱいので、僕からボールを投げるこ
とにする。

「あの、切彦、ちゃん？」

びくり、と彼女の瞳が僕を見上げた。

「……まだ、そう呼んでくれるんですか」

「いや、本当は呼び捨のままだと思うってたんだけどね。こっちの方
が呼びやすいから」

そもそも、僕が呼び捨てにする人間は希少である。例、蝕織。

「まあその……、なんというか」

気まずさから所帯無く頬をかく。

「この間はゴメンね。色々言い過ぎたし、やり過ぎた」

「……え？」

切彦ちゃんはきよとんと目をしばたかせた。

「いやあ、そりゃ家族馬鹿にされたのは此方としてもムカついたり
はしたんだけどさ。

でも後々考えてみれば、切彦ちゃんにしろ殺し名を敵視するのは当然だし、あの時は僕が余裕のある対応すればよかったなってコト。
それに」

「……それに？」

「こんな可愛い子に零崎をするのもどうかなーと」

「……！」

瞬間、切彦ちゃんの頬がみるみるうちに赤く染まった。

「あの……切彦ちゃん？」

「……い、いえ、こちらこそ、ごめんなさい」

切彦ちゃんは慌てた様子で、マフラーで顔半分を隠し、頭を下げた。よくわからないが、互いにわだかまりが抜けたようなので、良しとしよう。

「ううん、こっちこそ。……と、そうだ。切彦ちゃん、ちょっと右手出してくれない？」

「……？」

少し不思議がりながらも、差し出された切彦ちゃんの右手。

「っっっ」

僕はその手のひらに、蝕織から借りっぱなしだったバタフライナイフを置く。

途端、空気が張り詰め、切彦ちゃんの目が細まった。

「……なんの真似だよ」

「いやいや、仲直りのお詫びってとこ。『殺し屋』モードの君に一つアドバイスをと思ってね」

人格チェンジした切彦ちゃんに臆さず、バタフライナイフから手を放す。

「いらねーよ、アドバイスなんざ。言つとくが、身の程を知れってアドバイスなら聞かぬぜ。それくらいオレにも理解はある。……今のオレじゃあんたに勝てねーのだってわかるしな」

癩だけだよ。と口を尖らせる切彦ちゃんに苦笑しながら、僕は首を横に振る。

「違うよ。キミがそんなに無謀じゃないのはわかる。でもね。その刃を振るべきでない相手は、何も自分より強い相手だけじゃないってことぞ」

「あ？ いきなりわけわかんねーこと言うなよ」

「殺す相手は選べって言うてるのさ。キミ、多分ターゲット以外の人間も邪魔をすれば殺しちゃうクチでしょう」

「……それがなんだってんだよ。邪魔するから斬るんだ。当たり前だろ」

「そうかも知れない。けれど、それじゃあプロとは呼べんぞ」

「なに？」

少し琴線に触れたのか、不機嫌そうに僕を見上げてくる。

「キミは確かに技術は一流だ。でもね。それだけじゃ駄目なんだよ。何事にもメリハリをつけなきゃね。世の中渡っていけるのは良いことも悪いこともしてる人間なんだからさ」

「零崎にんな事言われるたあ、オレも予想しなかったぜ」

ごもつとも。

しかし、誰が言おうとその事実は変わらない。

「まあいいさ。僕はこのままなし崩しに和解するのが不快だっただけだから。どうするかは、キミの自由だ」

「……変わってるなアンタ」

「よく言われる」

「零崎の異常さはオレもじいさんから聞いた事があったが、アンタは全然違う。なんか、アンタの姿が霞んでるよ。まるで掴み所が無い」

「それもよく言われる……けど、零崎の見解に対しては異常のままの方がいい。僕は異端だからね。僕以外の零崎は、こんな風に裏千家と話したりしないさ」

「はっ、じゃあ殺し名と駄弁ってるオレも異端ってわけ？」

「かもね」

どちらともなくにやりと口端を吊り上げる。

「面白れーなアンタ。実に切り刻みがいがありそうだ」

「あはは、出来るかな？ キミに」

「さあな。ま、何時になるかはわかんねーけど、何時かはそうしたいね」

「そう。確かに、切り刻めるかどうかはさておいて、キミと遊ぶのは意外に早くなるかもね」

「うん？ そーいやアンタ、わざわざオレの仕事場で何してたんだ？オレの仕事の妨害か？」

「だったら今の時点で戦ってるよ。一身の都合ってやつさ。戦うかどうかは……キミの出方次第かな」

「ふーん。……オレとしちゃ、現段階での戦いは避けてーけんだけどな」

苦々し気に、バタフライナイフを僕に返す。
途端、切彦ちゃんから鋭気が消える。

「では、私はここで」

「あれ、このまま病院に乗り込むわけじゃないの？ 病院もつ目の前だけど」

「はい。今日は下見です」

「下見？ ああ、仕事前に相手の状況を知つとくため？」

「……いえ。事前に来ておかないと、道に迷ってしまうので」

近衛隊の方々が聞けば卒倒するか憤慨するセリフをさらっと仰りました。

彼女の腕からすれば、それくらいの余裕は当たり前かも知れないが。

「またいずれ……、ああ、すぐになるんでしょうか？ ……とにかく、またいずれお会いしましょう」

「うん。『縁』が合ったら、ね」

このまま行けば、確実に合うけど。
切彦ちゃんの後ろ姿を見送りながら、僕は確信していた。

病院に足を踏み入れた先にある玄関ロビー。

そこに設置されたソファで真九郎くんは眠っていた。

「……………」

帰ってきてたのか、という疑問が浮かぶよりも早く、僕はつかつかと真九郎くんの側まで近づいていき、軽く頬を叩いた。

「風邪引くよ」

「……………あ、れ？」

ぼんやりとした様子で、真九郎くんは起き上がる。
寝ていたにも関わらず、その顔はいくらか憔悴しているように見えた。

「おはよう」

「……おは、よう」

目をやや強めに擦り、虚ろな眼差しをこちらに向けてくる。
真九郎くんの一連の流れから、紫ちゃんとの間で何があったかは、
もはや語るに及ばない。

「くっくっくっ」

僕は、普段と違う声で笑う。

それがさながら、とある『狐』の笑い方だったと気付いたのは、
ずっと後の話だ。

「随分酷い顔だねえ。女にでもフラれたかい？」

「……わかってるくせに」

ぼつりと、真九郎くんはなけなしの反撃を見せる。
半ば八つ当たりらしいが、ここは流しておくとしよう。

「くつくつくつ、それは悪かった」

隣に腰掛け、真九郎くんを見やる。

「ねえ夕介くん」

「んー？」

「これって現実……だよな」

「……ちえりおー」

アッパーカット気味に真九郎くんの頭部に鉄拳をヒットさせた。
手加減なしだったが、真九郎くんはソファに手をつけてそれに耐える。

「痛みは？」

「……ある」

「なら現実だね」

しれっと言い放ち、手近にあった待ち合い用の新聞を手を取った。

「どんだけ自分が馬鹿馬鹿しいことしたか、わかつたる?」

隣からは何の返事も返ってこない。
それを肯定と受け止め、僕は続ける。

「慰めにはならんかも知れんがね。間違いに気付かないよりも気付く方がよっぽどいいと思うよ。気付かなきゃ、それを直すことも出来ないし」

「正すのが、遅すぎることもあるよ」

「確かにね。僕がそうだ」

決着を迫られた妹とのことを思い出し、自嘲する。

「まあ、僕が何を言っても無駄かもな。僕も、美織にキミと似たようなことしてるんだし」

「……美織ちゃんに？」

「いや、こつちの話。ある意味僕は、キミより質が悪いのかもね。未だに気付いてないから」

自分の間違いに。

新聞を片付け、後ろのソファーに振り返る。

「キミと紫ちゃんの関係は、まだ修復不可ってわけじゃなさそうだし……もう少し足掻いてみたら？」

「どうか……。夕介くんと同じで、もう無理かも知れないけど」

「ふーん？ ま、諦めるなら諦めるでそれもアリだ。キミにとつちや、友達が一人減っただけの話だし」

「そう、かもね」

言いつつも、真九郎くんの目は揺らぎ続けていた。

「悩むのは勝手だけどさ。仕事があるのも忘れないようにね。悪いけど、僕は今回キミの手伝いする気、さらさらないから」

紫ちゃんのように見知った顔ならいざ知らず、見ず知らずの自殺志願者を守るなど願い下げだ。

真九郎くんは聞いているのかどうかも怪しかったが、一応は首肯していた。

（やれやれ、物事はこじれたら一度完膚無きまでに壊して修復した方がいいんだけど……）

この場合少し逆効果だったと、今さらながらに自分の行動を反省する。

多分、今の真九郎くんと同じくらい、紫ちゃんも傷ついてるんだろ

う。
九分九厘真九郎くんが悪いけど、僕が紫ちゃんに『真九郎くんに謝罪の誠意が無ければ無視しろ』なんて言ったのにも少し責任がある気がしないでもない。

「あー、もっつー！」

一体全体僕は何がしたいんだ。

ただでさえ蝕織の問題で手一杯な分際で。

他人の人間関係を引つ掻き回した挙げ句、今は後悔している。なんとという身勝手さだ。

自分の身の上も考えず、誰かのためになることなど出来るはずが。

「……………あ」

金縛りにでもあったかのように、ぴたりと僕の足が止まった。

始めに沸いたのは小さな違和感。

しかしそれは直ぐに肥大化し、僕の心を覆う。

多分今、僕の表情は比喻抜きに真っ青だろう。

身体が気味の悪い浮遊感に支配され、体内の血が逆流しているかのようだ。

「あああああああぁあぁっ！」

恥も外聞も無く、盛大にシャウト。
周りの人間が気味悪そうな目線を投げ掛けてくるが関係ない。
気味が悪いのは僕もだ。

気付けなかった、気付こうとしてなかった、わからなかった、わ
りたくもなかった、知らなかった、知りたくもなかった、理解しな
かった、理解したくもなかった、考えなかった、考えたくもなかつ
た、確信しなかった、確信したくもなかった。

けど、唐突に理解してしまった。
苦しくも、自分と同じ立場にある少年のせいだ。

「……………わかったよ、蝕織」

僕が、何をしたのか。

でも気付いたところで　。

人生に道など無い。踏みしめた土が道となる

「今更、なんだよなあ……………」

病院はもう面会時間どころか、消灯時間さえも過ぎている時間。僕の居座るロビーの周囲に明かりはなく、それらしいものと言えば、火災報知器のランプくらい。辺りが真っ暗なせいか、気分まで真っ暗闇になっていく。

「……………何もかも、今更なんですよ」

そう。今更気が付いたところで、何になるといつのだろうか。これまでの長い間、それこそ哀川さんと出会い、協力をし始めた時からしてきた致命的な失敗。

いや、失敗じゃないな。

愚行だ。どうしようもない愚行。

そして僕は、救いようのない大馬鹿鹿野郎。

「本ツ当にダメだな。僕は……………。気付くチャンスはいくらでもあったのにさ……………」

曲兄でさえ、遠回しながらも教えてくれていたのに。
くろね子さんにしても、それは同じこと。

そして蝕織。

あいつの取った行動や言動に至っては、答えを言っているようなもの
のだ。

でも僕は気付かなかった。

当たり前だろう。

僕が、『他人』しか見ていなかったから。

あいつの、『僕自身』を思っていてくれた行為が、僕に届くはず
もない。

「お手上げ、なのかな」

例え蝕織を力でねじ伏せても、誰も幸せになれない。

かといって、蝕織を力以外でねじ伏せるなど、不可能。

八方塞がり。

「…………くつくつくつ、足掻いても結果が見えてるんじゃないよあ、それは足掻くとは言わないんだよね」

思考が自虐的になるのを止められない。

ふと、ポケットに入れていたくろね子さんへの頼み物が指に触れる。今は無用の長物。

「捨てちまおうかな……………」

くろね子さんには悪いけど、この先使いようの無いものだし。

手前勝手なことを考えていると、ふと病棟の暗闇から、軽快な、しかし間隔の短い音がする。

察するに、誰かの足音のようだ。

何事かと身構えたが、相手の姿を見て肩を落とす。

「なんだ、あなたですか」

「なっ……………貴様！」

現れたのはリン・チェンシンだった。

僕の所まで足早にやってくるのと、僕の胸ぐらを掴む。

「何すんですか」

「何するんだも何も無い！ 大人しく言え！」

「何の話です？」

「しらばっくれるな！ お前なんだろう、理津様をさらったのは！」

「さらったって……要は裏をかかれたってことですよね。何やっ
てんですか。仕事しなさいよ」

今にも義務を放り出そうとしていた僕が言えた義理じゃないが。

「まあ冗談はさておき……、理津さんならさつき真九郎くんと出て
いくのを見ましたよ」

「紅とだと？」

「はい。見た感じ、理津さんが真九郎くんを誘ってたみたいですね。
死ぬ前の思い出作りってとこじゃありませんか？」

「……偽りは、無さそうだな」

僕から手を離しながら、彼女は言う。

「だが、それならば何故貴様がここにいる？」

「むしろそれは最初にすべき質問でしたね。別に理由はありませんよ。ただなんとなく、ここにいた方が、物語に関われそうだったもので」

「目的も無い。ただ何となく、か。零崎らしい理由だな」

吐き捨てるようにリンさんは言う。

「どちらにせよ、何もする気がないなら去れ。この場 いや、全てにおいて、貴様らの存在は害悪だ」

「嫌ですよめんどくさい。大体、何もする気がないってわけじゃありません」

「それは偽りだな」

リンさんは妙にきっぱりと断言する。
逆に僕は軽く瞠目した。

「まったく、紅といい貴様といい。世の中には無能でありながら、それを変えようともせず、停滞し続ける者ばかりだな。反吐が出る」

変わらないのっつけんどんな態度。

しかしその一言には、更なる苛々が込められていた。

「貴様の表情は諦めた人間の顔だ。大方、自分の責務が余りにも重く、それを背負うのが面倒にでもなったのだろう。自らの責務に押し潰された人間などに、何が出来る？ 何も出来はしない」

「それは……」

それはあまりにも、僕の心情をピンポイントで突いていた。

言い返せない。言い訳も出来ない。

まさしくその通りだったからだ。

諦めた人間　それが今の零崎夕識なら。

何と無様。人間としても、出来損ないじゃないか。

「……妙な奴だな、お前は。零崎に限らず、殺し名は常軌を逸した者共だが」

本気で訳がわからないという風に、リンさんは顔をしかめた。

「貴様はただの腑抜けだよ」

すれ違い様に吐かれた言葉は、僕を精神をざっくりと抉る。揺れる頭で、刀だけじゃなく、心のナイフの扱いも手慣れているなと、僕は場違いな分析をしていた。

「リンさん」

去ろうとする彼女に、ぼつりと聞く。

「貴女にとっての責務ってなんです?」

「言っまでも無い」

答えるのも億劫。という口調だった。

「蓮丈様の命ず事、それだけだ」

あまりにも短絡で、しかしハッキリした答え。大した精神だ。

「……けっ」

少し悪ぶってみたところで、この言い知れない敗北感が拭えるわけでもなかったが、それでも口に出さなければやっていられない。

もうガタガタだ。

今ここで、零崎夕識はリン・チェンシンに敗北したのである。力で勝って、精神で負けた。

確固たる信念を持つ彼女。片や 僕には何もない。

僕は出来損ないで、全てが紛い物。自分のモノなど存在していない。

ああそうか。だからこそ僕は、誰かを助けていたんだ。

だとすれば、それはなんて。
。

「くっだらない……」

いつかの切彦ちゃんよろしく、出てくるのは自虐的な口調。
リンさんがいなくなって、再び静かになったロビーを覆う間。
まさにそれは、僕の心の現状だった。

その日は朝から曇り空だった。
天気には好き嫌いは無いが、本日はかりは空を怨みがましく睨み付け、
僕は足を進める。

あの後、真九郎くんサイドは色々大変らしかった。

リンさんは無断外出にぶちギレルし、真九郎くんが弁明しようとした矢先に理津さんは嘔吐してぶっ倒れるし。彼女が無線で定時連絡をしていた時を見計らったの行動だったらしく、ワーカーホリックのあの人にしては珍しいミスだったようだ。

多分今頃、真九郎くんはリンさんに叱責を受け、理津さんは緊急治療中だろう。

で、僕はというと、病院を抜け出して近くの土手にしゃがみこんでいる。

落ち込んだ時のシチュエーションにはあまりにベタベタだが、決して狙ってやっているわけではないと断っておく。

こんな絶不調の中でまで、ギャグパートを盛り上げる気は無い。

今の僕は、まさに最悪だった。つい先日の真九郎くんばりのネガティブ具合。

ここまで来ると、真九郎くんから何かしら呪いのモノを移されたのではと、血迷った考えまで浮かんでくる。

蝕織には、大人しくついて行こうとさえ 思っていた。

と、ネガティブまっしぐらの僕のポケットから、小刻みな振動が伝わってきた。

携帯の着信。

とても電話に出る気分ではなかったが、ディスプレイされた名前を見た途端、そんな考えは消し飛んだ。

「もしもし」

『やっほー！　夕ちゃん元気元気？』

「……何の罰ゲームです？　哀川さん」

『む。何だよ、いつになく釣れねーな』

あと名字で呼ぶな。と哀川さん。

何を思ったのかわくなぎーの声帯で電話してきた人類最強の請負人に
対し、僕は余りにも淡泊に話を進める。

『あーあ、酷いなー、冷たいなー。キャラの登場頻度の不平等さを
解消しようと思ってした行為を、夕ちゃんはそっやって頭ごなしに
否定してく気なんだねー』

「メタ発言は止めてください」

話をこじらせるなよ。

ただでさえ作者の移行で物語が混じったりしてるんだからさ。

「それで、何の御用なんですか」

『んー、御用ってわけじゃないんだけどな。ちょっとくら連絡って下
』』

「連絡？」

『うん。あたし、しばらく姿眩ますから』

「えっ……」

眩ます？

なんだろう。長期の仕事でも入ったのか。

いや、それならばわざわざ僕に連絡を入れるほどのことでもあるまい。

その質問をぶつけると、哀川さんが電話越しにニヤリと笑ったのが解った。

『実はな、クソ親父の居所がわかるかも知れねーんだよ』

「……………」

びっくり。思考フリーズ。再起動してもう一度。

「えっと…………まじですか？」

『うん。まじ』

「確かな情報から？」

『ああ、確かだ。つっても得られた情報は少なかったけどな』

「その情報ソースは？」

『夕ちゃんが知ってるかどうかは知らねーけど、匂宮出夢から』

「出夢さんから？」

確かに、『狐』については知ってる口振りだったが、そこまで親密な仲だったのか？
シット。あの時粘って聞き出しておけば良かった。

「でも何だってあいか……潤さんが出夢さんと会ったりしたんです？」

『避けられない事情……てか、請負の仕事でちょっとな。詳しい事情はめんどいから割愛するが、どうしてもってんなら……たんに聞いてみな』

やっぱ……兄絡みかよ。

あの人、知らないところでトラブル連れてくるもんなあ。

『まあそんなわけで、足取りを残すと不都合になりそうなんだな。何つーの？ 隠密活動？ ゲリラ戦？ ブルースワット？』

「ブルースワットは違う」

僕の世代で、1990年代の特撮ヒーローを知っている人間が何人いるというのか。
ただ、とりあえず。

「了解しました。何か気になることがあれば、僕から一方的に連絡しますんで」

『ああ。そんな感じで頼むわ。』

ここからがむしろ本題、という口調だった。

『タちゃん、蝕織ちゃんとはどーなったよ?』

「.....」

聞かれることだとは思っていたけれど、こづもストレートに言われると気後れしてしまふ。

「どづもこづも.....多分潤さんが考えてらっしゃる通りだと思いますが」

『おておて、なんのことでしょうか?』

.....どづいやら意地でも僕から直接聞き出すつもりらしい。

だが別段、隠したところで何でもない。
僕の失敗談など、それこそヒマラヤ山の如く積み上がっている。
それを一つ話すだけだ。

大体のあらましを話し終わると哀川さんは『ふーん』とさした反応も見せなかった。

『やれやれ。夕ちゃんは色々鈍感だね』

「そのフレーズはもう聞き飽きましたよ」

『繰り返しても文句言えねーだろ。蝕織ちゃんの言動や行動からそれだけヒント貰っといてさ。ぶっちゃけ蝕織ちゃん不憫過ぎ。そして夕ちゃん愚鈍過ぎ』

「別に僕だって好きでしたわけじゃ……はいすみません僕は愚鈍です返す言葉も御座いません」

言い訳をしようとした瞬間、電話越しに感じる哀川さんの威圧感が膨れ上がった。

それはもうスーパーサイヤ人の如く。

『ま、起こっちゃったことは仕方ないけどな。で？ どうするんだ

よ夕ちゃんは』

図らずも、それは僕がいー兄にした質問だった。

僕がああ時のいー兄と同じ立場に立とうとは、予想さえもしていなかった。

「……………わかりません」

正直な気持ちを吐露する。

本当に　ここまで自分が出れることは少なかったのかと思うくらいにわからない。

「蝕織の　いや、潤さんの出した条件の真意に気付いたのだった、つい昨日なんですよ。」

わかりますか？　僕があいつの場所から離れてからずっと昨日まで　いえ、それこそ今だって、僕があいつを苦しめてたんです。

今更気付いても、それが全部精算されるなんてご都合、ありません。それだけのことを、僕があいつにしちゃったんですよ。」

一番　傷つけちゃいけない人を。

「どんなに上手くやったって、もう結果は見えています。結果が見えてるなら、足掻いたってなんの意味も」

『ああ？』

それまで黙ったまま話を聞いていた哀川さんが、初めて言葉を割り込ませた。

『何をすつとんきょうな事を言っているんデスカキミは？ 黙って聞いてりゃわからないわからないわからない。どこのぼのぼのだったの』

「……………」

シリアス場面なので突っ込まない。

知らないよ？ やたら哲学的な悩みを持つ青ラッコなんて。

『つたくよお……………。いーたんがカッコよくキメたかと思いきやすぐこれだ。』

浜の砂子は尽きるとも、世に揉め事の種は尽きまじ、か』

「……………なんですかそれ」

『紅香がよく言ったことだよ。ふん、あいつも上手いこといったもんだぜ』

そこで言葉を切り、哀川さんは話続ける。

『なあ夕ちゃん。実際どうしたいんだよ』

「何がですか」

『蝕織ちゃんを、だ』

「……別に。ここまで来たらどうも」

『言つとくが、どうもしないとか言つんじゃねえぞ』

そんな風に、哀川さんは僕の逃げ道を封殺した。

『お前がそう思っちまうのはさ。お前が自分を過小評価してるからだ。だから自分には何も出来ないし何もわからない。何も成就しないのが当たり前。今のお前はさぞ、見てて苛々する顔をしてるんだろーな』

容赦なく、僕の精神力は真つ正面から根こそぎ削り取られていく。今は土手に座っているはずなのに、とんでもなく地面が不安定に感じる。

しかしそれでも、人類最強は止まらない。

『んな固定観念さつさと捨てちまえ。

それにあたしは可能か不可能かの話をしてるんじゃない。

理屈抜きに、全ての常識も越えて、お前が望むエンディングのビジョンの話をしてるんだ。

もう一度聞け。お前は蝕織ちゃんをどうしたいんだよ』

「僕、は」

声が掠れた。

フルボリウムで歌った後のように、脳内に行き着くはずの酸素は枯渇し、行き場の無い感情が渦を巻く。

「……………たいですよ」

『あ？ 聞こえねーよ』

「……仲直り、したいですよ。あいつと……」

偽らざる本音。

本当は、あいつと言いつ争ったりしたくない。

あいつと喧嘩なんかしたくない。

あいつに深淵夢想を向けたくない。

あいつを　　苦しませたくない。

『……ふうん。結構なエンディングじゃんか』

「でも、どうしろってんですか。今更、あいつに僕が気付けたことを伝えたって、何にも意味無いですよ。これまで僕が、どれだけあいつを苦しめてきたと思ってるんですか。都合良すぎですよ」

例え上手くいっても、僕があいつを苦しめた時間が、それを阻害する。

こんなの、理想像だ。

しかし哀川さんは、

『あーあーあーあー！ いちいちうじうじすんじゃねえよ！ そんなにあたしをイラつかせたいか！』

きつぱりと、電話を挟んでいるとは思えないくらいの大声を張り上げる。

『そこまでわかってんなら、どうすりゃいいのかもわかってるはずだろ！ お前はただその失敗を怖がってるだけだろが！ 自分が出来損ない？ 自分が駄目なヤツ？ んなもんだの言い訳だつてこと、あたしに言われるまでもねーだろ！』

「……………」

『そうやって何年も結論先伸ばして来たんだろ？ 逃げられる内ならそれもいい。けどな、もう逃げらんねーならいい加減腹くくれ！ 結果がわからないから足掻くんじゃねーんだよ！ んなもんつまんねーだろが！ 結果がわかってんならむしろもつと足掻くべきなんだよ、それを自分が望むようにねじ曲げてみせやがれ！』

「……………」

反論する暇すら与えられなかった。

雷のようにまくし立てられたそれらの言葉は、機能停止に陥りかけ

ていた僕の脳内を駆け巡り、縦横無尽にそれらを刺激する。

実際、僕は何をしていた？ 何かしたのか？ 何もしていない。ただその問題を引き延ばしていただけ。

そうしたところで 何もなかったらただらうに。

ああそうさ。この状況を生み出した僕だ。

他の誰でもない。緋色夕介にして零崎夕識だ。

でも、だからこそ。

「……ははは」

いつの間にか戻っていた笑い声で、力無く声を出す。
憑き物落としかって、案外軽いもんなのかも。

「潤さん。僕は、友達は大好きですけど、自分は大嫌いです」

『……ああ、知ってる』

「そのせいで、何度も何度も、間違えました」

『それも知ってる』

「罪状も溜まりに溜まっていますから、もう何をしたらって取り返せな
いかも知れません。」

けど、せめて 「

この一回くらいは、間違えないようにしてみようと思います。

『……うん。いいじゃんか。変なところで後ろ向きな夕ちゃんにしち
やあ、良い答えだ』

「恐縮です」

『いえいえ。ま、それがお前の結論だつてんなら、頑張らなきゃな。途中で投げ出さずにさ』

「成功するかどうかは、わかりません。未だにノープランですし。けど、もう投げ出したりはしません」

『はっはっは、結構結構。さっきよりは随分マシだ。でもさあ、自分で言つといて何だけど、もし成功しても、お前一生、蝕織ちゃんに頭上がんねーな』

「ですね。まあ、どうにかしますよ。東京は娯楽にや事欠きませんし」

『おっ、なになに、デートプラン？』

「さあ？ そう思ってくれても構いませんが」

デートねえ。

そっぴやあいつと出掛けるのも、かなり間が空いてるな。こっちに来てからも、何処かに行く時は大抵誰かがいて、二人っき

りなんてことも無かったし。

『いやはや、青春だね』

「妹と。つてのがどうかと思いますがね」

『そんなら今は今時萌えジャンルのひとつだよ。普通普通』

さらりと問題発言しなかったか？ この人。
いや、この人だから許されているのだろうか。

『ま。頑張りたまえ、少年。結果は報告しろよ』

「しばらく姿眩ますんでしょーが」

『安心しな。クソ親父が出てきた以上、否応なしに関わるだろうか
』
』
』

近い内にな。……自分でもそれには同意するしかないのが、微妙な
ところだけねど。

「了解です。色々ありがとうございました」

『ははは、気にすんな。んじゃ、グッドでラック』

怪しい英語を残して会話終了。

携帯をしまい、目の前を流れる川を眺める。

悩んでた時と変わらぬ風景。

だが、僕の気分は大分軽くなっている。しかし、その余韻に浸る間はあまりない。

埃を被った頭を最大限稼働させる。

さて、どうしようかな。哀川さんにあんだけ言ったんだから、成功させないと寝覚めが悪い。

いや、違う違う。蝕織とこれからも仲良くしていくために、だ。

考えに考え、たまに川に石をぶん投げたりしたりする。

結局、僕が考えを纏め上げ、土手から立ち上がったのは、一時間も経ったあとだった。

「おや？」

「……あんたかよ」

病院への帰り道。

菓子類を買いに立ち寄った小さなスーパーの日用品売り場。
包丁の棚で刃物を吟味している切彦ちゃんに遭遇した。

「なーんか、よく逢うよな」

「全くだね。……会つべくして出会う、か」

「あん？」

「いや、独り言だよ。で、キミは何してんのぞ」

「見てわかんね？ 今日の獲物を選んでんだよ」

ひらひらと慣れた手付きで、包丁を軽く振り回す切彦ちゃん。

「……剣士と違って、愛着のある武器を使つってよく聞くけど」

「俺は剣士じゃねーからな。ぶつちゃけ、切れりゃあ何でもいいんだよ」

成る程。案外この子、人兄や玉藻ちゃんと気があったりするのかも知れない。

「獲物を選ぶってことは……今日決行？」

「ああ。なんならここでバトッてもいいけど？」

「んー。やめとくわ。それも悪くないけど、買い出し中の奥方騒がすのもね」

「はっ、偽善者ぶりやがって」

「何とでも」

別に偽善ぶったわけじゃなく、単純にこの子と戦うのが面倒だっただけだ。

僕は別に彼女が嫌いじゃないし。

多分、普段と殺人時のギャップのせいだろう。

理澄ちゃん&出夢さんみたく、あくまで普段と殺人時の切彦ちゃんは同一人物なので、余計に質が悪い。それもまた、ギロチンの恐ろしさか。

とりとめのない考えを終え、結局僕は菓子類と切彦ちゃんの選んだ包丁を一緒に買い上げる。
ステーキナイフ

切彦ちゃんには「ガキ扱いすんな」と言われた。他人に貸しを作るのはあまり好きではないらしい。しかしこれも何かの縁だ。

菓子類は約500円。ステーキナイフは1600円。この1600円で何人も命が消えると考えると、僕も随分と罪深い人間だ。

まあ、今更なのだけだ。

「で、あんたは結局どうすんだよ。オレの邪魔すんのか？」

帰りの道中、ステーキナイフを弄びながら切彦ちゃんが聞いてきた。このまま病院に直行かと思いきや、今回の仕事仲間と合流しなければならぬらしい。

「うーん。今のところ予定は無いかな。」

前回キミの出方次第とは言ったけど、正直なところ、あの時からキ

「ミの邪魔をする気は無かったしね。
キミのターゲットを殺すという目的に関しては、僕は邪魔を絶対にしないよ」

今回の件に関しては、理津さんの意思を尊重すべきだろう。

「それ以外なら、邪魔するってことかよ」

「揚げ足取るなよ。邪魔するにしても、キミとは戦わないから安心しな」

そんなやり取りをしていると、いつの間にか切彦ちゃんの目的地

仕事仲間との待ち合わせ場所に辿り着く。

そこはどこにでもある自販機の前で、そこには体長2メートルを優に越す巨漢が威風堂々と鎮座していた。裸足に粗野な印象は、無理やり人間の真似をさせられているゴリラ、という印象だ。

「ようフランク。待たせたな」

「キ、キリヒコー！」

切彦ちゃんに気が付いたフランク、と呼ばれた男は、地面を僅かに陥没させて立ち上がる。

「は、はやく行こう！ しぐはらいつ、しるじにいくんだろ！」

「お前の仕事に対する情熱は十分に伝わったから、喋る度に唾を飛ばすな気色悪い」

切彦ちゃんが本気でうざそうに言う。

前に切彦ちゃんが、バーで仕事の打ち合わせをしていた時、「フランクに話し合いが出来るのか」と言っていたが……。

成る程、こういう意味ね。

これは確かに、言葉が通じるような知性があるとは思えない。

滑舌悪いし、もはやオンドウル語だ。

「？ キ、キリヒコ！そいつは？ じろじでもいいのか？」

ようやく僕に気付いたらしいフランクは、こちらに向かってくぐもった声を発する。

「……やってもいいが、オススメはしないとだけ行っておく」

「ギャハ！」

切彦ちゃんの曖昧な表現を、迷わず肯定と取ったらしいフランクは、その巨腕を僕に向かって降り下ろす。

「……………うぜえ」

くるりとそれをかわし、フランクの背後に回り込む。

拳のヒットした地面に蜘蛛の巣状のヒビが入ったところを見ると、見た目通り力はあるらしい。

だが、それだけだ。これだけなら、切彦ちゃんにさえ遠く及ばない。瞬時に深淵夢想を組み立て、背後から鎌の刃をフランクの首筋に当てる。

「お、おまえ……………」

「動けば刈るよ」

動物的本能からか、身体を強張らせるフランクに対し、僕は冷たく言い放った。

「分かったらフランク。こいつはお前がどつどつできる相手じゃねーんだ」

あんたもそんなくねーにしといてくれよ。

切彦ちゃんがそう言っつて、僕は鎌を放す。フランクは怯えながらも、ゆっくりと僕から離れた。

「悪いね。少しやりすぎたかな？」

「いいさ。こいつにゃいい薬だ」

苦笑する切彦ちゃん。

彼女としても、こいつとコンビを組まされるのは気の進む話ではないようだ。

……誰だっつて嫌かも知れないけど。

「……………?」

突如、僕の隣にいた切彦ちゃんが後ろを振り返った。

一瞬の内にナイフを構え、臨戦体勢を取る。

「切彦ちゃん？　どうかした？」

「……いや、何でもねえよ」

気のせいか。と呟きながら、ナイフを下ろす。

「じゃ、オレはそろそろ行かせてもらっせ。さすがにそろそろ片付けちまわねーとな」

「うん。引き留めて悪かったね」

「別に構わねーよ。オレとしちゃ、無駄話なんて珍しいことだったからな。たまには良いだろ」

「そう。それじゃ無駄話ついでに、一つ予言をしよう」

「予言？」

去りかけた切彦ちゃんが立ち止まる。

「今回の仕事。キミは成功するけど失敗する」

「……ふん。やっぱあんた、わけわかんねーよ」

悪態をつき、切彦ちゃんはフランクを連れ、その場から姿を消した。別に意味深な予言じゃない。

真九郎くんが関わるなら、そうなる確率が高いというだけだ。

真九郎くんもいー兄ほどでないにせよ 他人に影響を与えやすい人物なのだから。

これを機に、切彦ちゃんの何かが変われば良いのだが。

「……まあ、戯言ではあるんですけどね」

所詮そちらは、真九郎くんのフィールドだ。

僕は今回、出る幕は無い。

彼に頑張ってもらおうしかないわけだ。

「さて、と」

切彦ちゃん達の後ろ姿を見送り、菓子を摘まみながら閑静な通りを歩く。着いたのは、先ほどまで僕が黄昏ていた川原。

誰もいない。

別にここまで移動する必要は無いが、念には念を入れておくべきだろう。

いかに人気の少ない街とはいえ、これから起こる出来事は、かなり派手になりそうだから。

「ここらでいいだろ？」

菓子類を入れた袋を地面に置いて、僕は後ろを振り向いた。

「こんにちは、お兄様」

そこには予想通り、零崎蝕織が、漆黒残響を携え立っていた。

人生に道など無い。踏みしめた土が道となる（後書き）

緋色兄妹の決着は次回でつける予定です。

紅漫画版……フランクの容姿がえらいことになってて吹いたww

月夜に抱かれ、踊れ罪人（前書き）

すみません。去年から時間が止まってました・:では、緋色兄妹の結末をどうぞ。

月夜に抱かれ、踊れ罪人

「ははは、一ヶ月にやあ、まだ早いな」

「今更、猶予を与えて、何になるんです？」

僕が平静に対応するのに対し、蝕織はただフラットな口調で話す。

「もう猶予は無い。これから先は、お別れを言うための時間だと、わたしは確かに言ったはずですが」

「お前の一方的な要求なんて知るか」

努めて【冷淡】に、僕は言葉を選ぶ。
蝕織の眼が僅かに見開かれたが、次の瞬間にはその動揺は消えていた。

「先ほどの女の子　　斬島ですね」

「ああ。ちよいとプライベートで知り合ってたな」

そうですね。と自分で尋ねておきながら、随分と興味無さそうな返答だった。

「お兄様のお節介焼きにも、いよいよもって拍車がかかってきましたね」

「ふん、そんなもん今更さ」

大袈裟に手を上げて、僕は言う。

「僕は駄目なヤツだからな。どーやっても他人が自分以上の存在に見えちまうんだよね」

蝕織の表情は変わらない。
だが僅かに、漆黒残響を握る手に力を込めたように思えた。

「だから、助けるんですか」

「ああ。こいつは僕の本質なんだね」

「なるほど。ならば」

黒い刀身がゆらりと、こちらに向けられた。

「お兄様は、『気付けなかった』のですね」

浮かぶ冷たい殺意。漆黒の瞳に映るのは虚無。
これこそが、『漆黒残響』。

緋色美織ではなく、零崎蝕織。

ただ冷酷に、人間を蝕む　　さながら月蝕のように朧な殺人鬼。

「殺人鬼の本質が、お人好し？　笑わせないで下さい。そんなもの、わたし達の中ありません。わたし達の行き着く先は、笑って死ぬこと。その畦道に散らばっているのは屍だけです。わたし達の本質は、どうしようもなく殺人鬼であり、それ以外の何者でもありません」

口調は冷淡なまま蝕織はただ口を動かす。

それは僕に言っているように見えて、さながら独白のようだった。

「お兄様の優しさは　否定しませんよ。わたしだって、真九郎さんや紫ちゃんに何の思いも無いわけじゃありません。ええ。わたし

達は確かに何かしらの『優しさ』を持っているんでしょう。

双兄さんも、軋兄さんも、曲兄さんも、伊織ちゃんも　それこそ人兄さんもね。

けどそれは『殺人鬼』としての優しさです」

「……………」

それをその五人に聞いたならば、五者五様に「そんなものあるわけがない」と答えるだろう。

所詮優しさなんて、受けとる側が判断すること。

人兄が京都で図らずもいー兄を助けた時、人兄はいー兄を助けたと思っていないだろうし、いー兄にしてもそれは同じだ。

二人からしてみれば「ただなんとなく行動してたら結果的に助けちゃった」と「ただなんとなく為すがままにしてたら結果的に助けられた」くらいの意識しかあるまい。

「わたし達は異常です。醜悪と呼ばれても仕方ないくらいに、螺曲がっています。あくまでも、周囲の人間からすればですがね。わたし達からすれば、あまりにも混沌とした景色を包括しているからわたし達は世界が異常とする異常を『正常』と定義している。異常がデフォルトなんです。

お兄様やわたしの優しさだって、異常の中からそれに類似した感情を掘り起こしているまがい物です」

「まがい物、ね」

かも知れない。僕は『殺せる』。
殺したくないことはあっても、『殺せる』。
殺人者に優しさがあっても、殺人鬼に優しさは無い。

殺人者は所詮人間で、殺人鬼は鬼　異物だ。
異物なのだから、異常で当たり前。

「そんなまがい物にすがつて、何が楽しいんですか？　理解に苦しみます。まがい物の優しさなんて損するだけでしょう？　あの戯言遣いにでもなりたいんですか？　優しさを隠して、総てに無関心な傍観者になりたいんですか？」

「彼処まで行き過ぎる気はないよ」

あんな損な役回り御免だ。大体今のいー兄なら、それは主人公ポジションじゃないか。

「僕はね、蝕織。苦しくもあの『狐』と同じ立場でいたいのだ。ただ物語を見るだけの存在。戯言に満ちた世界から、紅のように赤い世界を見る存在。傍観者なんて大それたもんじゃない、あくまで一人の読者。もしくは語り部代行　ははは、でもそれはちょっと虫

が良すぎるかな、うん。なんやかんやで、僕は真九郎くんの物語に干渉し過ぎてるからねえ」

「……分らず屋ですね。お兄様は」

初めて 蝕織があからさまな怒気を言葉に含む。

「だから、そうしてしまうのは、お兄様のまがい物の優しさなんです。自分勝手な善意を押し付けて、自分が気に食わない物語をねじ曲げて、どうあってもハッピーエンドを見たい。」

馬鹿馬鹿しいです。そんなものために、九鳳院や切島と関わるなんて。だからわたしは

「僕に優しさは要らない、か」

蝕織の言葉に自分のセリフを被せ、彼女の感情の波を止める。

「ああ、その通り。僕は無意味に優しくあってしまう。自殺志願者でもない限り、僕はどんな立場の人間でも助ける。助けるためなら例え自分が朽ちても助けるだろうさ。僕は自分がぜーんぜん好きじゃないからな。朽ちるのはどうだっていい。大変なのは、命を払う以上に苦痛を払わなければならぬことがある時だろう。そういうことに、何度も直面してきた。何度も、物語を書き換えてきた」

そして、今もまた、書き換えている。

「認めるよ、蝕織。」

実にまだるっこしい、最悪で苦痛で退屈で辛辣で碎身で排他で醜悪で異端で特殊で滑稽で煩雑で臃気で孤独で傲慢で薄幸で不快で怠惰で粗雑で卑怯で愚鈍で不変で独善で浅薄で幻想で混沌で狂乱で多忙で無謀で淡泊で過密で傑作で戯言な生き方さ」

でもな、蝕織。

「それがどうした？」

「なっ……!!」

「そんな生き方をして、何が悪い？」

口調は変えず、あくまでフラットに。

少し前だったら、何度だって言えた言葉が、今はとてもつらい。一度だけで精一杯だ。

正直な話、一度言えただけで、精神力を使い果たす勢이었다。

すべて解っているからこそ。

自覚しているからこそ。

この言葉がどれだけこいつを傷付けるか解っていたからだ。でも、僕に言わないという選択肢はもはや有り得ない。

それらはすべて、僕の責任。

溜まりに溜まったツケを精算しなくてはならない。

だから僕は言う。それが「それがどうした」と。

こいつが僕に対して、言わなきゃいけないものを、受け止めるために。

揺らぐことなく、こいつと真っ向から向き合ったために。

「僕達が辿り着く先は、確かに笑って死ぬことだよ。でもそこに辿り着く道まで、決定されてるとは思わない。これからもこの生き方を変えるつもりはないし、後悔もしない。僕は誰かを助けて、その果てに笑って死んでやる」

曲兄が言っていたように　その生き方の責任を取る覚悟はもう出てくるから。

蝕織の顔は、蒼白を通りこして灰色にも近い表情だった。漆黒残響を握る手はかたかたと震え、その様子はあまりにも儚かった。

焦っていた。

いや、恐怖している。

僕が言わんとすることを。

「お兄、様。それはっ…それはっ！」

「自分で決めたことだから、誰に指図されたわけでもないから、僕を止める権利は誰にもない」

「止めて下さいお兄様！　わたしはそんなことをして欲しいんじゃないありません！」

「双兄にも軋兄にも曲兄にも人兄にも伊織ちゃんにもいー兄にも哀

川さんにも真九郎くんにも紫ちゃんにも。
そして当然」

「お兄……！」

「お前にも、その権利は無い」

がきいん、と嫌な金属音。

僕が深淵夢想で受け止めるものは、漆黒残響の黒光りする刃。その
持ち手たる蝕織は、それほど動いたわけでもないのに息を切らし、
眼は激しい殺意に煌めいている。

激情。

そう呼ぶに相応しい姿だった。刃を蝕織ごと弾き、自嘲する。
ふと空を見上げれば、もう夕暮れが近い。
向こうの空はうっすら闇が差し、月も見えない。 はずなのだが見えない。

新月か。

「……出来すぎてるなあ」

夕暮れと蝕まれた月。 零崎夕識、 零崎蝕織。

さしずめ、月夜の二重奏か。

戯言で傑作で、矛盾だらけの笑えねえ偶然だ。

「さて、一応の自己主張も終わったところで、本題に移りますか」

深淵夢想をくるくると回し、蝕織に向ける。

「来いよ蝕織。お前が何か思うことがあるなら、それを手加減なしに全部ぶつけてこい。僕を止める権利が無いのなら、それを完封なきままでに踏みにじってみろ。言っとくが、僕は情け容赦するぜ。完

封なきまでに手加減して勝ってやんよ」

「……………いつつも、そうだ」

そう呟いたのを最後に、蝕織も漆黒残響を構える。 そうだ、それ
それでいい。

『 それでは一曲』

『零崎を 』

「奏でよう」

「御見せしましゅう」

曲名『月夜の二重奏』演奏開始。

さて、どうするか。

と、僕はキメ顔でそう言っ……てないしキメ顔でもないけど思った。鎌を振る手も、言葉でくくる動作も休めていない。

しかし、蝕織はそんなものでは止まらない。

何度も言うようだが、僕は弱い。もう滅茶苦茶弱い。

こっちに来て以降、さりげなく白星を稼いでいるからお忘れかもしれないが、本来僕の技量は蝕織に遠く及ばないのだ。

鎌は剣で受け止められる。

音の操作は舞いで相殺される。

しかも、僕は斬撃と操作を分割して行い、蝕織はそれを一手でやる。

これだけの要素を提出すれば、勝負の結末は明らか。

あんな素敵に啖呵を切った後で申し訳ないが、現実はそのうだ。

記憶に新しい、いー兄VS人兄の結末にしろ、あれはあくまで二人が鏡合わせだったからこそそのドロ―。

実力差というヤツは絶対なのだ。

気合いや感情論など、無意味もこれ極まり。

そう。実力差を考えない勝負。

僕はそんなフザけた行為をしているのだ。

ちなみに、僕と蝕織のバトルとほぼ同時刻。

京都では今まさに、とある戯言使いがそんなフザけた行為をしているたりする。

よりによって【人喰い】に対して。

僕がそれを知るのは、もう少し先なのだけれど。

閑話休題。

今は目の前の問題を片付けよう。

「ははは。強い強い。僕なんかじゃ、やっぱ勝てねえよなあ。何時の世も、兄は越えられるものとしてあるんだねえ」

「……………」

蝕織は答えない。

張り摘めたその空気は、戦いにしか集中していない。

(そう　それでいい)

そうでなければ。

全力でなければ。

【お前に勝つ意味】が無くなってしまふ。

(けど、僕が負けても意味は無いんだよな)

泣き言ばかりも言ってもらえない。僕は勝たなくてはならないのだ。

それも、【圧倒的且つ絶対的】に。

さながら、《死色の真紅》の如く。

最悪、対面上だけでも。

正しさは、圧倒的且つ絶対的な力によってのみ証明される。

(そのためには)

どんな手でも使う。

僕は元来、そういう人間なのだ。

「んじゃ、ここいらで一発新曲聞かせてやるよ。蝕織」

深淵夢想を口元に持っていくと、蝕織もまた身構える。

「喜べ。こいつは『あの二人』以外に聞かせるつもりは無かったが、特別公演だ」

僕は静かに息を吹き込む。

「作曲 零崎夕識。作品NO・99 『クレナイ紅の二人』」

『紅の二人』。

九鳳院とのゴタゴタが終わった後、真九郎さんと紫ちゃんのために作った曲だ。

以前二人に聞かせた時には、まだ精神操作の概念を入れていない未完成品だったが、今回弾くのはその完成品だ。

蝕織にはああ言ったが、元より僕に『ただの音楽』として奏でる『紅の二人』を、真九郎さんと紫ちゃん以外に聞かせる気はさらさら無いのである。

さておき、『紅の二人』だ。

これも当然ながら、相手を操作する曲。相手の脳に『静止せよ』という指令を出し続ける。

曲兄のレパトリーと違って、それだけの単純な指令しか下せないが、その分、操作までにかかるスピードは速い。

加えて、蝕織はこれを聞くのは初めてだ。舞で相殺するにせよ、その曲調やリズムを理解しなければ、それは不可能。事実、蝕織の身体はストップが掛けられ出している。

問題は、どちらが先か。

僕は普段なら確実にあるはずの『言葉による操作』のアドバンテージを得ていない。

曲兄にしろ、ほぼ一瞬で相手の心を絡めとることが出来るのは、この動作がかなりのウェイトを占めている。

しかし、蝕織もまた音使いだ。

言葉による操作を警戒し、あらかじめ舞の中に、『言葉による操作』を相殺するリズムを入れている。

つまり、僕が蝕織の心を絡めとるのが先か、あいつが『紅の二人』の曲調を理解するのが先かという話だ。

明らかに有利なのは僕だろう。初めて聞く曲を、しかも終奏するまでに理解しなくてはならない。

僕だって出来損ないとはいえ、この曲にはかなり熱を込めていた。

だが、そこはそれ。

兄の上をいく蝕織だ。

「甘い」

蝕織が舞を変えた。その次の瞬間には、刃が僕の首筋を掠めていた。

「お兄様の曲は 戦うための音楽と言いながら、芸術として、音楽としての曲調を捨てきれしていない。

そんなものなら、次にどんなリズムが来るのかなど、予想出来る」

「ご明察。」

僕は最初、戦うために音楽を学んだわけじゃない。

曲兄の姿に憧れて始めたことなのだ。

だから、曲を作る時、どうしても曲としての価値を求めてしまう。

少なくとも、音使いには突けるほどの隙を作り出すくらいには。

「やるね。自信作だったんだがな。けど、それならそれで、いくらでも手はあるよ。こっちはパーフェクトな組み立てを考えて来てる

「からな」

だがそれでも、僕は威風堂々と、動き続ける。
哀川さんほどじゃなくてもいい。

『出来損なっても』、『まがい物でも』、ただ『圧勝』であればいいんだ。

深淵夢想を振り回し、蝕織との距離を取る。前回のように、深淵夢想の強度面についての不安は無い。

一撃の破壊力ならば、確実に漆黒残響の方が上だろう。
日本刀に代表されるように、刀や剣というヤツは、速度や力を上乘せることで、信じられない威力を誇る。斬鉄剣はもはや、某怪盗マンガの中だけの存在では無いのだ。

しかし、攻撃範囲においては、鎌の方が勝っている。
ならば、このリーチを生かさない手は無い。

ただ円を描くように振るだけでも、それは優れた全体防御となるのだ。

絶対に。

ただの一撃さえも、喰らうな。

それなら『形だけ』でも『圧勝』に見えるだろう。

もちろん、この防御策では勝てない。
基本スペックで劣る僕では、持久戦に持ち込んだところで勝敗は見えている。

刀を持つ蝕織の手よりも先に、僕の鎌を持つ手が参ってしまう。

だから、

「次曲」

蝕織と距離を取り、再び深淵夢想を口に当てる。

「作品NO. 2 . 3 . 1 4 . 2 7 . 3 2 . 6 5 . 9 9
曲『虹の七式』」 『混成組

「が　ぐっ!？」

蝕織の動きが、目に見えて鈍った。

周りには曲　と呼べるのかどうかも疑わしい。

形容し難い音楽が流れている。
弾けるようにハイテンポなりズムが流れたかと思えば、緩やかに心を癒すような低調な音が響く。
全く噛み合わない曲調が奇妙に噛み合いながら、カオスな空間を作り出していた。

『混成組曲』 『虹の七式』。

『紫の死念』から始まり、『青の涼風』、『空の蹂躪』、『緑の開園』、『黄の御光』、『橙の刹那』、『紅の二人』を一部分ずつ混成接続し、そのサイクルを延々と繰り返す。

簡単に言えばメドレーだ。

しかし、実の話はそんな生易しいものじゃない。
一つの曲で相手を操作、その曲の効果が消える前に、新たな曲に切り替える。その新たな曲の効果が消える前に、また新たな曲へ。

元々この七曲は、組曲にするつもりで作った曲だ。故に、互いの操作効果を高め合ってくれる。
つまり、七曲のサイクルが繰り返される度に、その効果は『相乗』されていく。

音使いにも、防御はほぼ不可能だ。
これを防ぐには、リズムの違う七曲全てに曲調を合わせなければならぬ。

蝕織は『紅の二人』を含め、僕の曲全ての曲調を知っているだろうが、知っていることと、実行出来るかどうかというのは別の話だ。

「ぐっ……あ、うっ……！」

『紅の二人』を聞かせてた時よりも、確実に効いていた。

支配率は もう半分ほど僕に移っている。

しかし、蝕織を舐めてはならない。

それに慢心せず、休むことなく、支配の音を叩き込み続ける。七種類の旋律が、少しずつ、確実に蝕織の身体を蝕んでいく。

予想通り いや、ある意味予想外の展開ではあった。

しかし まだ終わらない。

精神の支配率が八割を切ったあたりで、事は起きた。

殆んどの支配権を失っているにも関わらず、蝕織は小さく、強引に口を動かした。

「小賢しい真似を……！」

じやり、と蝕織の足が僅かに動く。

「するなあっ！」

一気に支配権を持っていかれた。

全てとは言わないが 五分五分、いや、七分は蝕織にあるだろう。

今度は、僕が動揺する番だった。顔にこそ微塵も出さなかったが、さすがに驚愕する。

蝕織が僕の曲調を全て知っているように 僕もあいつの持つ舞のリズムは全て知っている。

しかし今、この瞬間にあいつが生み出している舞、それは僕が見たことのないものだ。

いや、その表現はある種間違いだ。

『知ってはいる』。

僕の操作を振り払った曲は 『虹の七式』と同じく、あいつの持つ七つの舞を接続した混成組曲だ。

(ほとほと嫌になるな……)

あいつと似ていることに不満は無いつもりだが、いくらなんでもこの状況で似てしまうのは勘弁して貰いたい。『虹の七式』の演奏は続けているが、支配率はそれほど変動していない。

取り戻された支配率の回復には至らず、比率としては、7：3と6：4を行ったり来たり。

あいつが舞を止めた瞬間、僕はあいつを操作出来るし、僕が演奏を止めた瞬間、あいつは僕を操作出来る。

膠着状態だ。

「作品番号・式・肆・漆拾壹・参拾伍・陸拾捌・玖拾玖　『混成組曲』　『花朝月夕』」

僕の曲に合わせ、蝕織が舞うのは端からみれば、実に仲睦まじい兄妹の姿であっただろうが、実際はそんな親睦さとは無縁な状況下だった。

混成組曲。

考えていたのは僕だけでは無かったのだ。
蝕織もまた、それを考えていた。

しかも、僕と同じく、混成組曲にする前提で作り出した七曲を接続した曲を。

その七曲で 僕の七曲を全て掻き消した。

七つの曲に個々の対処をしているわけじゃ無さそうだから 未だに支配権の三割は僕の元にある。

どうにかあいつの足を鳴らす音を聞かないようにしたいところだが、両手で扱う楽器である横笛を使う以上、耳を塞ぐことは不可能だ。塞げても、僕の肌が空気の波でそれを感じとってしまう。

差の二割を埋めているのは、一重に僕精神力。けれどそれは、操作を遅らせているだけ。

膠着状態になれば負けるのは僕だということは、前述の通り。

(『虹の七式』 解いて……僕の身体が操られるまで、五秒弱か)

十分。

ふっと、唐突に僕は『虹の七式』を停止する。

瞬時に身体を気味の悪い感覚が襲う。

自分自身の支配を逃れようとする自分自身の身体。

が、関係ない。

「 『雲梯』 」

僕の口の動きを読み取った蝕織は、目を緊迫に見開き、舞を止めた。音の衝撃波が爆音と共に蝕織を襲う。不意を打ったにも関わらず、蝕織はそれを飛び上がったかわした。

多少の衝撃は受けただろうが、致命傷には至るまい。けれど、空中で体勢は崩れている。

ほとんど余裕が無い状態だっただろうから、冷静な判断力も削がれているだろう。

期を逃さず、足に力を込めて駆け出す。

「 残念だな蝕織、僕を操っていいのは 曲兄だけだよ! 」

「 くっ ！? 」

ほぼ、がむしゃらに飛び上った蝕織の頭上から、深淵夢想の柄を思いつき振り被る。

突如、僕の体勢が崩れた。

「うおっと……!？」

いや、体勢が崩れたんじゃない、視点を換えられたんだ。

気が付けば僕の身体は、先ほどの位置より一メートルほど上を飛んでいた。

状況理解はすぐについた。

深淵夢想の先端　笛部分の先が、僕の腹に直撃し、僕の目線下では、蝕織が白い脚を僕に向けて振り上げていたからだ。

あのヤロウ。ギリギリで漆黒残響を地面に突き刺し、それを軸にして深淵夢想ごと僕を蹴り上げやがった。

(だから　女子がスカートで脚を振り上げんかったの)

前回の闘いでもした危惧を　あまりにも状況にそぐわない余計な心配を心の中で呟く。

腹の痛みもさることながら、空中でバランスを崩されている僕は、受け身の体勢を取ることさえ出来なかった。

刹那、優しさも一片の慈悲もない、蝕織の本気の蹴りが、落下する

僕の脇腹にクリーンヒットした。

「！」

声無き悲鳴。

こんな状況でも、表情筋を動かさなかったのに関しては僕は立派だ
と思う。

蹴られて顔色一つ変えないというのも あまり楽じゃない（楽だ
ったらそいつは天性のマゾヒストだろう）。

落下速度を上乗せしたその蹴りは、あまりにも綺麗に決まり、僕の
身体はぐらりと揺れ、地面に伏した。

からんと乾いた音を立てて、深淵夢想が手元から離れた。起き上が
れはしないが、手を伸ばせば届く距離。無駄と解ってはいたが、一
応は手を伸ばす。

だが案の定それより早く、蝕織の足が僕の腕を踏みつけた。ぼきり。
と嫌な音が身体を伝う。

「……、骨折って、元に戻るとは限らないんだぜ？ 一生野球でき
ないかもしれないぜ？」

いつだったか、人兄がこんなことを口走っていた。うんざりしながら、頭上を見上げると、そこには無表情の蝕織の姿。大の字に横たわる僕に対してのし掛かり、漆黒残響の切っ先を僕の首に向けている。

「ははは。一ヶ月そこらの間に、妹から二回も押し倒される兄ってどうなんだろうな」

どうなんだろうなも何も。

倫理観の欠片もない。

僕は口を閉じ、蝕織もまた、刀を当てたまま喋らずに、時間だけが過ぎていく。

夕日はもうほとんど沈み、空はもう辛うじて濃い青色を残すのみ。

そう言えば、真九郎さんと切彦ちゃんはどうなっただろうか。

真九郎くんは悪運強そうだから大丈夫だろうけど、今は紫ちゃんがいないからなあ。

助けに行こうにも、切彦ちゃんに、僕は手を出さないって約束しちゃったし。

約束してなくても、この状況じゃあね。

「……何故ですか」

僕が真九郎くん達の方へ思考を向けていると、ようやく蝕織が口を開いた。

「こうなることなんて、わかっていたでしょう?」

喋りながらも、切っ先は一ミリも動かない。

「わたしに勝てないことなんて、わかっていたでしょう? そこまで、わたしのことを解っていないわけじゃないでしょう?」

「解っていないも何も、ここまで来れば、戦うしかないだろうよ。僕はお前と一緒に行きたくないんだから」

「なら、逃げればよかったでしょう?」

蝕織は続ける。

「潤さんに、ここを離れたくないと言ったらいいですね。でもそれなら、お兄様は京都を離れる時にも、同じことを言はずです。」

五月雨荘の方々が大事でも　骨董アパートの人達だって、同じくらい大切な筈です」

(……………おっとお?)

中々鋭い。

予想しなかったわけじゃないが、その一点を指摘されるとは思わなかった。

……………こいつも、何も考えずにここへ来たわけではないというワケか。

「お兄様は、大切な人をみーんな守りたいんですね。」

お兄様は　みんなのお兄様ですからね」

あの戯言遣いと同じで、みんなに優しいから。

苦虫を噛み潰したような口調。

投げやりな態度とも取れた。

「でも骨董アパートにいた時は、五月雨荘の方々を知らなかったんでしょ？」

いくらお兄様でも、見たことも聞いたことも無い人を守ろうなんてしないはずです。

ねえ。どうしてですか？

今までの五年　逃げ続けてきたお兄様が」

お兄様は、本当は、みんなのことが嫌いなんですか？

蝕織の真摯な質問を、僕は心底意地悪な笑みで返す。

本当は、解ってる。

蝕織。お前は実に愉快的な勘違いをしてくれる。

(今更、みんなを嫌いになんてなれるかよ)

答えは、お前が考えているよりずっとシンプルだ。

その理由は、もう知ってしまったから。

お前が僕に何を望んでいるのか、知ってしまったから。

だから、僕は蝕織から逃げない。

逃げずに　嘘を、戯言を重ね続けている。

「くつくつく　さあねえ？」

ただ気まぐれなだけかも？

僕はお前や哀川さんと違って、紛い物なわけだし。

確固たる信条も無く、大したプログラムもないまま、機械的に行動してるだけって見方も出来るよね」

「つまらない言い逃れは止めて下さい。

《本気で戦う時でさえ殺さない》なんて器用な真似が出来る人間が

何を言ってるんですか」

「ちょっと待てい。それ誰から聞いた」

「双兄さんから、です」

畜生、バカ兄貴め。

余計なこと言いやがって。

僕の《解決策》が狂わされたらどう責任とるつもりだ。

「
もしかして」

「言つとくが、『お前に引け目を感じたから、はじめのために残りました』なんて生ぬるい真相なんかじゃないぜ？」

一片の暖かみも無く、蝕織の質問を封殺する。

びくりと蝕織が肩を震わせた。

もしかしたらその質問は、蝕織の願いのようなものだったのかも知れない。

けれど、今の質問に正直に答えては、また同じことが繰り返されるだろう。

その質問は、僕達が話す上で邪魔なのだ。

「まあ、といっても、お前のためって点では合ってるかもな。
……僕はね、蝕織。

お前の思う《僕》をブツ壊してやろうかと思ったんだよ」

「……何を」

「一つ聞くけどさあ、お前の思う僕ってなんなんだ？」

「だから何を」

「緋色夕介としての僕？ 音楽家の僕？ 殺し名三位『零崎』殺人

鬼としての僕？ 優しい兄としての僕？ 他人を助ける甘い僕？
まあ、どれでも構わないんだけどさ。
今までのことを鑑みるに、それなりなプラスイメージがあったこと
は確かなんだろうね。
でも」

今日の僕に、お前の思い描く僕はいたのか？

刀を持つ手が、震える。

「何を、言って」

「本日の僕は実に優しくないよねえ。
もう全開も全開。ありとあらゆる力を使ってお前と戦った。

まだ曲弦系使ってなかったけど、些細な話さ。『虹の七式』は、
曲弦系以上のものだからね。

で、よりによって相手が実の妹。

うん。これは確実に間違いな行為だな。

妹と本気でバトロウとかどんな兄貴だよ。必然的に、零崎としても

《最悪》だ。
ははは。前に双兄が、『夕識くんが一番合格に近い』とか言ってたけど、この分じゃお話にもならないよな」

刀は僕の首筋で止まったまま。

蝕織は狂乱する心を抑えているらしいが、そこまでの精神負荷を持つてして尚、漆黒残響を『振り下ろさない』。

けど、時間の問題だ。

そんな薄い防護壁、今の僕にとっては何でもない。

「なあ蝕織。どう思うよ？

いー兄ほどでないにせよ、僕は実に混沌としている。

人にも成り切れず、鬼にも成り切れない。

そして次は《最悪》な人間の真似事さ。

お前の提示してきた『お前が何故怒っているのか』という問題さえもわからないまま、力でそれを押さえ付け、何食わぬ顔のまま、真九郎くんや紫ちゃんと話す僕の姿。

しかも驚いたことに、これらは全て僕が選んでやっているんだな。

……蝕織、お前が連れていきたいっていう零崎夕識の姿は、こんなぐちゃぐちなもんなのか？」

「……………う、あう。あ……………あ……………」

「……………はっきり言っちゃうとね。

うんざりしてきたところだったんだよ。

お前が僕を兄として慕ってくれるのは構わない。

けどお前の思う姿に、お前の願う姿に、僕が僕自身を合わせるのは御免だよ。

僕は今の僕を意外と気に入ってるのさ。変えられるのは我慢ならない」

お前の理想を、僕に押し付けるな。

その言葉で僕は、蝕織の《鎖》を破壊した。

蝕織は形容出来ない絶叫を上げながら、僕に刀を振り下ろす。

もはやそれはがむしゃらな動きで　　臃気だった両目には行き場の
無い感情が、澱んで渦を巻いている。

呆気ない。

人間の理性など、所詮こんなものか。

いや、当たり前か。

理性は脆いもの。

様々な感情を抑圧するそれは、いつ決壊しても可笑しくない脆弱な代物だ。

昔から抑圧されてきた感情なら、尚更。

「ははは 残念だな。蝕織」

恐れも不安さえも見せず、ただそうあることが当然であるかのよう
に、僕は呟く。

次に口から出てきた言葉は、
「図らずも、とある少女の言葉だっ
た。」

いや、正確にはその少女の言葉ではないかもしれない。

でも、きっとそれは。

少女が切に、一途に願ったことであっただろう。

その少女のことは、全てが終わってから、考えることにしていた。

だから僕がその少女の言葉を使ったのは。

これで すべて終わるから。

「僕とお前の意図は 二二じゃあ切れないよ」

蝕織の刀が 止まった。

「……………えっ？」

次に蝕織が上げた声は、そんな可愛らしい疑問符だった。

わけがわからない。

何が起こった。

衝撃と疑念をふんだんに盛り込んだ表情。

余りにも場違いなのはわかっていたが、それでも僕は心の何処かで爽快感を味わっていただろう。

「どうした、動かないのか？ ならば僕は、お先に取りに行かせてもらおうとしようかな。『僕を解放し、僕から離れる』」

区切りのよい発音でそう言うと、蝕織は僕の腹部から退き、僕から少し離れた所まで移動する。

「な んで」

自分の身体が自分の言うことを聞かない恐怖心。

それは紛れもなく、僕が蝕織の身体を操作している証だった。

折れた腕でバランスを取りながら立ち上がり、深淵夢想を捨つ。

「やれやれ。感情に流されるってのは、本当に油断の始まりだよな、蝕織。」

成る程、曲兄のあの性格は、戦いには向いているわけだ」

「ゆ、油断　？」

「ん？　ああそうか。その向きだと話づらいな。

『僕の方を向く』」

蝕織の立ち位置を変え、僕は続ける。

「種明かしをする前にだ　僕の能力を忘れてはいないだろうな、蝕織　僕は音使い。音によって他人の心理や行動を操ることができる。心身操作こそが、零崎夕識の真骨頂だ」

「お、音なんて　そんなもの全て相殺していた！
曲も、声も、深淵夢想が振られた時に響く音も！
見落としたものなんて　っ！」

そこでようやく、蝕織は気付いたらしかった。

そう。この会話は、つい数週前に、僕、人兄、曲兄の間で交わされた会話と全く同じであることに。

「ま、……さかっ！」

「正解」

ニタリと笑い、コートのポケットから、『くろね子さんに頼んでおいたもの』を取り出す。

小型ラジオのような機械だったが、スピーカー部分が奇妙に凹んだ形をしている。

「本当に迂闊だったね、蝕織。冷静に考えてみれば、お前を操作出来る方法なんて、これくらいしかなかったろうにさ」

しかも、この攻略法のヒントをくれたのは苦しくも曲兄と蝕織自身だ。

まあ　こいつが激情に流されるように仕組んだのも僕だけぞ。

「超音波」

短く、そんな言葉を口にする。

「人の聴覚では知覚できない領域の音を常時流し続ける　けど、それを小型スピーカーで流すとなると、威力も落ちるみたいでな。さすがに一瞬とはいかないが　あれだけの時間があれば十分だ」

クラッシュクラッシュで曲兄が使っていたトリックと同じもの。

北海道でこれからのことを見越し、思い付いた取って置きの方策。

まあ、こいつを手に入れたことを蝕織が知る確率はほぼ0%だったわけだし、気付かなくて当然かも知れない。

くろね子さん。あなたとの変わらぬ友情に感謝します。

「い、今までの『曲』は全部　これを隠すため　っ！」

「おいおい蝕織。草食動物の僕がお前を黙らせるのに、これっぽっちの策しか用意してないと思うのか？　何個も用意していた策の一

つが成功した　ただそれだけの話さ」

嘘だ。

もうこれ以上策のストックは無い。

というか、僕の判断としては『虹の七式』で確実にケリがつくとさへ思っていた。

今の戯言はただの脚色。

腕が折れ、策を使いきり、息もとつくに切れている零崎夕識を【圧倒的な勝者】に見せるため。

蝕織に『零崎夕識には勝てない』と思わせるための措置。

蝕織の心を完膚無きまでに破壊する、最後の仕上げ。

虚言に虚言を重ね、力を持って正論を叩き潰し、蝕織の余裕　蝕織の仮面を剥がすこと。

それが僕にとっての勝利条件だ。

「こうでもしなければ、あいつは抑圧されていた感情を表に出すことは、絶対に無いだろうから。」

「頑張った方だよ、お前は。ただ、お前はまだ、僕を理解仕切れていなかった」

「　　っ？」

僕は 誰かのために自分の力を使う。

前回はそれが真九郎さんと紫ちゃん

今回はそれがお前だっただけの話だ。

「……まあ、戯言ではあるんだけどな」

なんで。

どうして。

喉が枯れているわけじゃない。

けれど、声が出ない。

身体の支配権は、全て兄の手にある。

でもそれは些細なことのように思えた。

この人は気付いてくれなかった。

わたしは自分がそれを教えることを禁じていたけれど、それでも気付けて欲しかった。

けれど、この人は気付かない。

振り向いてくれない。

だから、もう傷付け合うしかないと決意して、ここまで来た。

たくさんいる家族の一人から言われた『自分自身で兄の間違いを正せ』という言葉に後押しされて。

だから、負けるつもりは無かったし、負ける要素も無かった。

だけど、負けた。

いや、それだけならどんなに良かったか。

兄は自分にとって、最も醜悪で、最も残酷なやり方で勝った。

自分の内面をぐちゃぐちゃにかき乱し、惑わした。

音の操作じゃない。言葉による操作とも違う。

あの戯言遣いのように 戯言でわたしを操った。

ただ、わかっていることは一つ。

もうわたしは、兄を連れ戻すことは出来ない。

ぶっっっ。

やり場の無い感情が踊り狂っていた。

どうしてこんなやり方を選んだんですか？

そんなにわたしに勝ちたかつたんですか？

そんなにこの場所を離れたくなかつたんですか？

そんなに　　。

わたしとの《縁》を断ち切りたかつたんですか？

「んじゃ、操作は解けないと思うけど、一応気絶はしてもらっせ。早いとこ、真九郎さんと切彦ちゃんの様子を確認したいんでね」

また、他の誰かを気にしている。

妹の苦悶など気にもかけず、兄は戦いの終了を告げる。

ただ冷淡に、この傷付け合いにピリオドを打とうと、口を開く。

「けるな」

「　　なんか言ったか？」

何かが外れた音を　　。

その兄妹は確かに聞いた。

「ふざけるな！」

「そんな そんな考え方をしているようなヤツに、誰かを助けていく資格なんか無い！」

「……………」

僕は無言のまま、少しだけ眉をひそめる。

この先蝕織に何を言われたとしても、僕に反論する権利は無い。

僕にあるのは、ただ黙って『僕がそれに気付かないフリ』をしてま

で吐き出させた、蝕織がその身に溜めていたことを、全て享受することだけだ。

「貴方はいつもそうだ！

いつもいつもいつもいつもいつも 誰かのことばかり考えてる！
自分が出来損ないだとか、失敗作だとかそれらしい理由をつけて、
ずっとあなたは誰かを助けて、自分自身をスタスタに切り裂いて生きてる！

何度ボロボロになっても、他の誰かが無事ならそれでいい！ 自分は大ッ嫌いだから、他のみんなが大好きだから、自分が傷ついて、誰かを助けられるなら、それでいいと思ってるんだ！
はっ、滑稽過ぎて反吐が出る！
そんなエゴイステイックな理由で他人を助けるなんて！」

「……………」

僕は答えない。

「わたしが貴方を怒る理由が分からないと言ってたよね？」

「そうよね、自分勝手な貴方なんか、最初から分かるわけ無かったんだ！」

「ハッキリ言っただけよ！」

「貴方が自分のことを全然考えないからだよ！」

「貴方が、自分が傷つければ、誰かが傷つくなんて当たり前前のことを、全然分かってないからだよ！」

「ずっと、それこそ『大戦争』の時から、貴方は誰かを守ってた！何の迷いもなく、あなたよりも『完成品』に近かったはずのわたしを、あなたはずっと守ってた！」

「さぞかし気分が良かったんでしょうね！」
「褪せた赤」であるわたしを、
「無色」の貴方が守っていたんだから！」

「……………」

「僕は答えない。」

「でも、わたしが、わたしがどれだけ苦しかったかわかる？
どれだけ悔しかったかわかる？」

「わたしには貴方を助けられる筈の力があるのに、その使い方が分からなくて、力が無かった貴方が、傷付くのを横から見ています。」

かなくて 零崎になって、力の使い方が分かってても、貴方はわたしを守り続けて わたしが、どれだけ、どれだけ強くなるうとしても それはっ、それは、変わらなくて……っ!!」

「……………」

僕は答えない。

「わたしだけじゃない……!! 貴方が今まで出会った人達の中にも、『貴方が助けたから』こそ、傷付いてきた人は絶対にいる! 貴方は、迷惑な救済を勝手に押し付けてるだけなんだ! どうして そんな生き方が出来るんだ! どうしてそれが間違ってるってわからないんだ! どうしてっ……っ、どうして!!」

貴方だけが、誰かを助けなくちゃいけないんだ！

「……………」

僕は……… 答えない。

「助けてくれる人は、いるでしょう!？
双兄さんも、軋兄さんも、曲兄さんも、伊織ちゃんも、家賊の貴方
を助けない筈が無い。

真九郎さんも、紫ちゃんも、夕乃さんも、銀子さんも、環さんも、
闇絵さんも、貴方を大切な友人だと思ってる！

あの戯言遣いも、人兄さんも、女王^{クイーン}も、潤さんも、貴方を気に入っ

てくれる！

みんな、貴方が「助けてくれ」と言えば、助けてくれるでしょう？

貴方がそうしないだけで、貴方が自分を変えることは、いつでも出来た！

なのに何で　その手を、取ろうとしなかったんだ……っ！

「……………」

僕は答えない。

「貴方は、ずるいよ……」。

一人だけが傷付いて、誰かを助けて、そのせいで自分自身が傷付いても、全然気にしない。

その傷を、誰かに癒してもらおうとさえしない……！

誰かの心配を、決して享受しようとしな……！

そんなの、虚しすぎるじゃないですか……っ！

わたしは…貴方を、ずっと見てきたんだよ？

貴方のその本質を、誰よりも……理解してたつもりだったんだよ？

誰よりも、貴方が大切だったんだよ？

なのに　わたしでも、貴方を支えられないの……？」

「……………」

僕は、答え、ない。

「…………一人で……っ、背負いこまなくてもいいでしょう！？」

一人でカッコつけなくて何の意味があるんですか！？

貴方はみんなに助けてもらえばよかったんだよ！

誰でもいいから、誰かの手を一つでも取って、一緒に助けて合えれ

ば、それでよかつたんだ！

わたしだってそうだよ！

わたしは……っ、いつでも貴方と一緒にいるから！

例えば貴方が、人間不信の欠陥製品でも、人間失格の殺人鬼でも、失敗作の『無色』でも、緋色夕介でも零崎夕識でも！

たとえば、貴方がどんな人だったとしても、絶対に離れたりしないから……っ！

貴方が負う傷を、わたしもっ…一緒に受けるから……っ！

「だから、お願い……っ！」

「わたしに……っ、貴方を、助けさせてよお……夕織い……」

「……………」

僕は答えず、泣きじゃくる蝕織に近づいた。
深淵夢想を奏で、蝕織の操作を解く。

蝕織の身体は、糸が切れた人形の如く、がくりと崩れる。
顔を伏せ、聞こえるのは泣き声だけ。

「……………蝕織」

蝕織の前にかがむ。
口を開きかけて、少しためらう。

しつかりしろ、僕。

今更、逃げ道なんかあるわけねえだろ。

「……何を言っても、言い訳になるだろうけど、少し聞いてくれ」

顔を上げない蝕織を見たまま、僕は続ける。

「お前の言う通りだったよ。僕は何も気が付けてなかった。助けることは、僕にとってはもう当たり前のことで、それはどんな紆余曲折があっても、きつと幸福に繋がることだと信じてた。僕は自分のことがなにもかもダメなヤツだったから、誰かを助けることくらいしか、僕には出来なかった。」

……けど違ったな。

ただ指摘されなかっただけで、僕は勝手な好意を押し付け続けてた」
それが全て傷痕を付ける結果に終わったとまでは、言わない。

真九郎さんと紫ちゃんを助けたことを否定する気には どうしてもなれなかった。

でもそれを考えなかったとしても、確かに僕が助けることで、傷つけた人はいる。

少なくとも。

「お前を、ずっと傷つけてた」
一番大切だったはずの人を。

「お前がどう思ってくれても、僕は文句は言えない。
僕は、それだけのことを、お前にしてきたからな。
だから、僕がどうすべきかは、お前の意思に従うしかない。

でも 敢えて言うよ。
僕が嫌いになったなら、僕の前から消えて欲しい」

僕はもう、自分の生き方を変えられないから。

「これからも多分、僕は誰かを助け続けるだろう。

自分だけを傷つけ、誰が何と思っても、身勝手な好意を誰かに押し付け続ける。

だから、僕の姿をお前が見たくないなら、お前と僕は離れるべきだろう。

お前が僕を殺してくれるなら、話は別だがな」

僕にお前は殺せない。

ならば、その選択もありだろう。

「でも、お前がまだ、こんな僕を見捨てないでくれるなら」

蝕織の髪に触れ、撫でた。

嫌がられるかと思ったけれど、僕の意に反し、蝕織は涙で濡らした瞳を僕に向けた。

「お前が、僕を止めてくれ」

蝕織は、目を見開いた。

型を僅かに震わして、口は言葉が見つからないのか中途半端に開か
れている。

今僕が言ったことが信じられない。

そんな表情。

「僕が生き方を変えられないことで、お前が苦しむなら、お前が僕
を止めてくれ。僕の助けが行き過ぎているなら、お前が僕を正して
くれ。」

僕が抵抗することもあるだろうけど、お前なら大丈夫だろ。

ただ 欲を言えば、真九郎くんや紫ちゃんみたいな人を助ける時
には、目を瞑って欲しいけどさ」

「ゆっ、しき……。そ、ねは……」

「ん？ ああ、お前にはこつ言った方が良かったかな」

僕を、助けて下さい。

「あ……………う、う……………」

蝕織は、今度こそ完全に涙腺が決壊したらしかった。

加減などまるで知らず、僕の服にしがみつき、子供のように泣き喚いでいる。

どんなに長い間、見ていなかっただろうか。

こいつが、蝕織がこんなに泣いた時なんて。

本当にご無沙汰だった蝕織の泣き声。

僕が音をぶつけて泣き声は遮断しているが、それでも人が来るかどうか心配するくらいのポリウムと言えば、まず遜色はあるまい。

そしてそれは紛れもなく 蝕織が押し止めてきた感情の奔流だった。

ああ、綺麗だな。

不謹慎だと知りながらも、僕はそう思った。

「……………お兄様は、ばかです」

結局、僕の服を涙で濡らし尽くしたところで、蝕織はようやく落ち着いた。

目は赤く、その下には涙の跡が残っている。

「何だよ。もう『お兄様』か。

久しぶりだし、もっと呼んでくれたりはしないワケ？」

「……ふんだ。」

『気付いてないふり』をするような人なんて、お兄様で十分です」

……バレてたか。

「言っても許しちゃくれないだろ」

「だからって、黙っていていい理由にはなりません。」

本当に意地悪ですよ、お兄様は。

意地悪で、嘘つきで、貧弱で、ダメダメです」

「そこまで言うか……」

「当前ですよ。」

全く、本ツ当にダメなお兄様です。

……だから、わたしがしっかり見てないとダメですね」

泣き終わったにも関わらず、蝕織はまた僕の服に顔を埋めた。

「……付き合っ
てあげますよ、わたしも」

端からちらりと見える蝕織類は、赤らんでいた。

それが少し可笑しくて、僕は笑みを浮かべながら、蝕織の背中に腕を回した。

「ありがとう、蝕織。」

それから、今まで「ごめんな」

「……遅いんですよ、お兄様は。
本当　ダメダメです」

「行くんですね」

「ああ、さすがにそろそろ見に行つてやらないと。

それよか、さつき頼んだことは、ちゃんとやっつけてくれよ。
ことによつちや、真九郎くんの命運を分けるからな」

「わかつてますよ。

それよりも、お兄様」

「大丈夫だよ。無理はしない。

紫ちゃんの授業参観だつてあるしな。
ちゃんと帰つてくるよ、約束する」

「……うん。それだけ言うなら、大丈夫ですね」

「おお。信頼されてんな」

「にやはは。兄妹の約束ですから」

「……だな。
それじゃあ、またな」

「ええ、また」

同時刻。

二人の殺人鬼が、こんな独り言を言っていた。

「本当　あいつには敵わないよな」

「本当　あの人には敵いませんね」

「まったく、兄妹じゃなかったら惚れている」

死後の世界？死んでもまだ苦しみ足りないの？

「おーおー、派手におっ始めてやがるねえ」

病院の前。

非常用シャッターの降りた入り口を前にしての僕の感想。
とは言うものの、シャッターには深い切り込みが入れられており、
もはや防護の意味を為さない。

「切彦ちゃん、だろっな」

随分とリアルな斬鉄剣を披露してくれる。
耳をすませばシャッターの奥から、悲鳴と銃声も聞こえてくるし。
うーん、真九郎くん無事だといいいんだけど……。

まあ大丈夫だよな。

いー兄と同じで悪運は強い人だしね。
やれやれと首を振って、シャッターから中に入る。

「……………っえー」

途端、地獄が広がった。

血によって周囲の床と壁はレイアウトされ、老若男女問わない死体

がオブジェクトの役目を果たしている。

死体の種類は二つ。

首が切断されたものと、物凄い力でぐちゃぐちゃにされたもの。前者は切彦ちゃん。後者はあのフランクとか言うヤツか。

「まったく、僕が言うのも何だけど、スマートじゃないよなあ」

気分悪い。

理由なく殺しているわけでもないのに、ここまでの惨劇を生み出せるということに、不快感を覚える。

殺し屋なら殺し屋らしく、プロ意識を持ってもらいたい。

その点、切彦ちゃんは出夢さんを見習うべきだ。

「そこが切彦の唯一の欠点なんだけどねえ。出夢さんと違って、理澄ちゃんみたいな頭脳労働者がいないから、当然かもしれないけど」

だがそれでも、いつかは学ばなくてはならないことだ。

ただ殺すという行為だけで生き残れるほど、《暴力の世界》は甘くないのだから。

「真九郎から、それを知れりゃあ万々歳なんだけど……、前提として真九郎くんが切彦ちゃんに勝たんといかんからな」

紫ちゃんがいない彼にそれが出来るかどうか。

カツ、コツと廊下に足音を響かせながら、病院の奥へ。首の無い死体の中には、近衛隊のモノもあった。
南無阿弥陀仏。

「お」

廊下を曲がると、広い玄関ロビーに切彦ちゃんが見えた。
フランクの巨体も見える。

「切彦ちゃん見つけ。……ん？」

見ると、切彦ちゃんは誰かと戦っていた。
目を凝すと、黒スーツに目立つ三つ編み。手には煌めく双刀。
リン・チェンシンだ。

「うわ、馬鹿だな。斬島に刃物で挑もうなんて……」

どうしようかなー。僕あの人苦手なんだけどなー。
助けたら助けたで恨まれそうな気がする。

「……って、言ってる場合じゃないか」

切彦ちゃんに手を出さないとは言ったけど……。

いつか、別に。

なにも、理津さん殺すのを邪魔するわけじゃないし。

そう理論付けて、二人に気付かれぬよう、こっそり進む。

「どうしたサムライ？ もう終わりか？」

切彦ちゃんが挑発的に笑うのが見えた。

その手には、先ほど僕が買い、今は血塗れのステーキナイフ。

ああ、これ僕共犯になるかも。

片やリンさんは息を切らし、夥しい汗をかいている。余裕はなさそうだ。

と、リンさんが右足に力を込め、突撃の体勢を取った。

「勝負！」

リンさんが神速とも言える速度で、切彦ちゃんに刃を走らせる。それとほぼ同時に、僕も二人へ向かって駆け出した。

あのリンさんのスピードは評価出来る。

しかし、刃に愛された斬島の前でそれは無意味。

案の定、切彦ちゃんはその突撃を面倒くさそうにかわしてみせる。

「なっ!?!」

「刃物の勝負なら、剣豪も、剣王も、剣聖も、オレの敵じゃねえよ」

瞬間、鈍く煌めくナイフ　さながら無慈悲な処刑道具キロチンの如きそれが、リンさんへ襲いかかった。荒々しい技術で振り下ろされたそれは、リンさんの左腕を難なく切り落とした。

そのまま返す刃で、右腕も切断しようとする。

「ハイストップ」

深淵夢想のリーチを活かし、ナイフを受け止めた。

「……アンタ、何の真似だよ。手は出さねーって言ってなかったか?」

「理津さんを殺すことにおいては、ね。それ以外については、少し手を出させて貰っよ」

「貴様、何を言っ……ぐっ！」

切断された腕を抑えながら、リンさんは言う。

「あんま動かない方がいいよ。切彦ちゃん。僕が手を出すのはこれで最後だから安心なさい。」

キミを止める役目を持つ人間は、他にいるからさ」

僕はにやりと笑い、深淵夢想でナイフを弾いた。

切彦ちゃんが気をとられた隙に、リンさんの残った方の腕を引つ張り、ガラス張りの窓を音の衝撃波でブチ破り、庭園まで転げ出た。庭園の端まで移動したが、切彦ちゃんが追ってくる気配は無い。

「大丈夫でしたか、リンさん」

「だ、まれ……っ。貴様に心配される謂れは無い！」

「だから騒がない。失血死しますよ」

直ぐ様糸を取り出し、曲弦糸で血を強制的に塞ぎ止めた。

「これでしばらくは安心ですよ」

「……お前」

巻かれた糸を見て、リンさんは訳が分からないといった表情を浮かべた。

「疑問を浮かべるのは後にして下さい。リンさん。携帯電話持っています?」

「……いや、先程ロビーで落としたらしい。紅の携帯電話も預かっていたが、それもだ」

「分かりました。じゃあ、僕の貸しますんで、騎場さんに連絡取って下さい」

「副隊長に?」

「傷口は止めてありますが、適切な処置は必要でしょうからね。騎場さんならそれくらいはしてくれるでしょう。あとついでに、警察やら病院やらの連絡もして下さいな。僕はまだ、物語を見ないといけないので」

「ま、待て！ 私も行く！ 理津様をお守りするのが…」

「私の使命、ですか？ 片腹痛い。今の貴女に何が出来るんですか。貴女じゃ、切彦ちゃんには勝てない。現実を見据えるべきですよ」

「しかしっ！」

「……負けた人間は負けた人間のやることをして下さい。それに、彼女を止めるのはリンさんじゃありませんよ。真九郎くんです」

「紅が、だと？」

「そ。真九郎くんです」

僕はリンさんに背を向けて、元来た道を戻り始める。

「……おい零崎、一つ聞かせろ」

「はい？」

「何故、私を助ける。私は《財力の世界》の人間だぞ」

「……ん」

しばらく考えて、僕は答える。

「この前、『お前は腑抜けだ』とか言われたから、ですかね」

「は？」

きよとんと呆けるような顔をするリンさん。
この人でもこんな顔をするのか。

「さすがに腑抜けとか言われたらね。格好いいところ見せないで、示しが付かないでしょう？」

悪戯っぽく笑い、僕は振り返らずに駆け出した。

「さて、どうなってるかなって……」

裏口から二階へと忍び込み、下のロビーの様子を見る。
吹き抜けで、ここからなら一階の様子は丸分かりだ。
切彦ちゃん、フランクは未だにロビーにいた。

違うのは、

「ようやくご登場か。真九郎くん」

真九郎くんがいたこと。

しかし、決してそれは話が好転しているわけでは無かった。

「キリヒコ！ こいつ、まだ、し、しなねえ！」

「頭だ。そういう頑丈な奴は、頭をやれ」

「い、いっつか」

ほぼリンチの領域だ。

元来臆病な真九郎くんが、戦いを挑んだことに関しては評価するが、いかんせん絶不調に変わりはない。

九鳳院の時と同じだ。今彼は、最も大切な支えを失っているのだから。

「全く、世話の焼ける」

そう呟いて、スペアの携帯電話を開く。

ツーコールで携帯は繋がった。

『はい』

「よう蝕織。五月雨荘には着いたか？」

『勿論。全く、たかだか30分かそこらで五月雨荘まで戻れー。なんて無茶にも程がありますよ』

大変だったんですからね。という蝕織の声は若干息切れしている。多分、電車に乗っていない時は、常に全力疾走していたのだろう。

「ははは、悪かった悪かった。埋め合わせはするから、お姫様に代わってくれないか？」

ほどなくして、声の主が変わる。

『……………夕介？』

「やあやあ紫ちゃん」

『どうしたのだ？ 美織が急に訪ねて来たと思ったら、今度は夕介が……………』

「あー、ちょっとそこらへん説明してる暇はないかな。 紫ちゃん、真九郎くんは謝ったかい？」

電話向こうで、紫ちゃんが萎縮したのが分かった。

『……………うん。言わな、かった』

「……………そっか」

うん。まあ、予想通りか。あまり予想通りになって欲しく無かったけど。

『なあ夕介、やっぱり、わたしが…っ、悪かったのかな…』

「だから違っつてば。今回はさすがに真九郎くんの方が…」

『でも、わたしがわがままを言ったのも本当だ』

声に、涙声が混じった。

『真九郎が約束を破った時、わたしは怒った。わたしにとって、すごく大切な約束だったんだ…。でも、真九郎だって、それがすごく大切な仕事だったかも知れないじゃないか』

僕は何故か、否定する気になれなかった。

あまりにも弱々しい声に、逆に気圧されたのかも知れない。

『きつと、真九郎も凄く怒ったんだ…。っ。わ、わたしにつ、愛想を尽かして、何処かに行ってしまった…。迎えにも、来てくれない。電話にも、出てくれない。ここにも、帰ってこない…。！』

わたしは、会いたいののに…。…会って、謝りたいのに…。…っ！もう、謝ることも、出来ない…。…！』

あまりに悲壮な叫び。

とうとう、電話越しからは泣きじゃくる声しか聞こえなくなった。蝕織が慰める声が、微かに聞こえてくる。

(本ツ当に真九郎くんは……)

僕も他人のことは言えないが、ここは自分を棚上げしてでも、そう思わずにはいられなかった。こんな小さな子泣かすなつての。

「じゃあ、聞いてみるかい？ 真九郎が、本当に怒ってるかどうか」

『……………えっ？』

僕はちらりと、下のロビーを見る。

リンさんが落としたという真九郎くんの携帯電話は、切彦ちゃんが立つ直ぐ近くに転がっていた。

あの距離ならば、誰かが気付くだろう。

「今電話を掛ければ、真九郎くんが届く。やるかやらないかは、キミ次第だ、紫ちゃん」

紫ちゃんの返事を待たず、僕は電話を切った。
さてさて、どうなるかな。

下では相変わらず、フランクの真九郎くんに対する一方的な攻撃が続いている。真九郎くんの頑丈な肉体でも、そろそろヤバいかな。フランクが真九郎くんの頭を掴み、更なる暴力を浴びせようとした時だった。

電話が鳴った。

殴打の音しか聞こえなかったロビーに、それはいやに響いた。
出所は、リンさんの落とした真九郎くんのケータイ。

「これ、あんたの？」

近くにいた切彦ちゃんがそれを拾い、真九郎くんに問う。
微細な反応から、それが肯定だと分かっただらしい切彦ちゃんは、真九郎くんにそれを放り投げる。
床を滑って、地に伏す真九郎くんの目の前へ。

「フランク、ちょっと待て。これから殺されるところに、電話が来る。面白い偶然だよな。出ていいぜ。遺言でも泣き言でも、好きなことを話せばいい。それが終わったら、フランクがあんたを殺す」

くだらない情け。

真九郎くんはそう思ったかもしれない。

だが、真九郎。それは大間違い。

キミの沈んだ気持ちを反転させる、僕からのプレゼントだ。

真九郎くんは電話を掴み、通話ボタンを押して、それを耳に当てた。

途端、真九郎くんの表情が一転した。

今まで死の淵にいた人間の表情だったそれは、時間が経つにつれ、生気を取り戻していく。

虚ろだった瞳に、光が灯る。

丁度、九鳳院の一件で、『鉄腕』を粉碎した時の如く。

紫ちゃんを 助けようとした時のように。

ここからでは、いくら僕でも、あの子が真九郎くんに話す内容は聞こえない。

ただ 何故かこの言葉だけは聞こえた。

僕の幻聴か。はたまた、あの子の真摯な願いが、そうさせたのかは、わからないけれど。

『……真九郎に……会いたい……』

真九郎くんは目を閉じ、電話を強く握り締めた。
途端、フランクの巨大な拳が、真九郎くんの頭上を襲う。
顔面から、床に激突した。

だが 直ぐに立ち上がる。
地を踏みしめ、歯を食いしばって。

「紫」

真九郎が呟く。

「ごめんな、紫。ちょっと待ってくれ。五分……いや、一分でいい。待てるか？」

真九郎くんはそう電話越しに言う。

紫ちゃんも納得したらしく、真九郎くんはケータイを畳み、立ち上がった。

「うん。ようやく本調子かな」

やれやれ。勿体つけるね。

真九郎くんの右腕から、輝く刃のような物体　崩月の角が現れた。荒れ狂う戦意を纏い、真九郎くんはフランクに向かっていく。

「ギャハ！」

剛腕を再び振りかざすフランク。

しかし、今の真九郎くんには無意味。難なく真九郎くんはそれを受け止める。

「おい、フランク。お前はマナーを知らないな」

驚愕するフランクに真九郎くんは右足を引いた。

「俺は電話中だ、バカ野郎！」

はね上がった右足は、フランクのガードをぶち抜き、その巨体を5メートル先まで吹き飛ばす。

そのまま真九郎くんは追撃し、フランクの頭を数回地面に叩きつけ、その意識を沈黙させた。

勝利。圧倒的な勝利。

直ぐ様真九郎くんは通話再開。

「待たせて悪かったな、紫　ああ、大したことないよ。今、仕事は半分片付いたし、残り半分は、これからやる」

切彦ちゃんも、さすがに啞然としていた。

今まで狩られるだけの存在だった人間が、いきなり獅子に化けたのだから。

「紫、授業参観はいつだったけ　いいから、言ってみる。いつだ？」

お、ちゃんと思いついてたか真九郎くん。
確か今日は木曜で、授業参観は日曜日だったかな。
傷は 真九郎くんの回復力なら間に合う。

「わかった。行くよ授業参観 大丈夫。今度は、絶対に約束する。せつかく見に行くんだから、おまえ、活躍しろよ。たくさん手を上げて、しっかり目立てよな」

日曜日に会おう、と言って、真九郎くんは電話を切った。

「さあ《ギロチン》、決着をつけようか」

「……なるほどねえ、あんた、《崩月》の戦鬼だったのか」

切彦ちゃんは、さっきの侮蔑とは違う、本気表情を浮かべていた。

「ふん、大体わかったぜ。あいつの言ってた《オレを止めるヤツ》ってのはアンタのことみたいだな」

「……あいつ?」

「んー、いやいや。こっちの話さ」

切彦ちゃんは満足そうに笑う。相応しき敵と会えた高揚から来る笑みだ。

「今日はいいい日だ！ すっげーワクワクするぜ！ ……あー、でもこの包丁じゃダメだな。せつかく口八で貰ったもんだが、《崩月》の戦鬼を殺すには、これじゃ足りない。殺し切れない」

切彦ちゃんは、さつき切断したリンさんの腕が握りっぱなしだった刀を拾い、血まみれのナイフを捨てた。

「いや……せつかく買ったもんだから、せめて僕の前で捨てないで欲しいなあ」

資源は大切に。僕の嘆きは当然届かず、切彦ちゃんは日本刀を指で撫でる。

「……備前長船か。さっすが優遇されてんなあ。九鳳院の犬は」

ほう。備前長船ね。

人兄や玉藻ちゃんあたりが好きそうだな。

僕は、下の戦場を眺め見る。

真九郎さんと切彦ちゃん。もはや互いの間にあるのは、戦意だけ。裏十三家同士の一騎討ち。

「崩月流甲一種第二級戦鬼、紅真九郎」

「《斬島》第六十六代目切彦！」

二人の名乗りがロビーに響く。

戦意が渦を巻き、二人が同時に動く 瞬間であった。

「……良かった。間に合ったのね」

第三者の声。

その声の主に気が付くと、二人は同時に、その人へ駆け出す。一方はその人を守るため、他方はその人を殺すため。

「理津さん？」

僕も声の主の正体に気が付いた。
しかし、僕が行動を起こす間もなく、
気絶していたフランクがむく
りと起き上がった。

「ギャハ！」

轟音。爆風。

耳をつんざく音が、周囲を支配する。

「うわっ、自爆かよ！」

迷惑なヤローだな！

僕は二階にいたため、余波はあまり無かったものの、
辺りには粉塵が舞い、視界が全く効かない。

くそっ、三人はどうなった…？

二階のテラスから一階に降り、三人を探す。

フランクは……確認するまでもないか。

あれだけの爆発、恐らく軍用爆弾だろう。完璧即死だ。

切彦ちゃんはあるの小柄な身体だ。無事ではあるだろうが、
外まで吹っ飛ばされただろう。

となると残るは……。

「理津さん！」

真九郎くんの声がした。
感覚を頼りに急いでそこに向かう。

「おい、大丈夫か？」

「タ介くん！」

「良かった。無事みたいだね」

「俺のことはいいよ！ それよりも理津さんが……」

見れば、真九郎くんの近くに横たわる理津さんの腹部には、ステンドグラスの破片が突き刺さっていた。

「早く治療しないと！ 避難した人達の中にも、医者はいるはずだから」

「いや、無駄だよ。こりゃ手遅れだ」

「そんなこと分かんないだろ！ 早くしないと本当に手遅れになっちゃうよー！」

「僕の言ってるのは、傷が治せるかどうかじゃないさ。傷を治す意味がないって言ってるんだよ」

真九郎くんをよそに、僕は理津さんを見た。

「あら…夕介くん」

「結果的に、貴女の望み通りになりましたね。どうですか？ 今の気分は」

「あはは…まあ、なかなか理想的だわ」

「そうですね。貴女がそう思うなら　そうなんでしょうね」

僕は突き放すように、理津さんから眼を背けた。

「理津さん、大丈夫です。ここは病院だし、何とか……」

「もういいのよ」

「いって……」

そうして理津さんは、前、僕に語ったこと全てを真九郎くんに打ち明けた。

自分は死んで、父と母に謝りたいということ。

父と母と同じところに行くためには、悪党に殺されなければならぬということ。

だから、悪宇商会に依頼を出したこと。

全てを話し終えても、真九郎くんは何も言わなかった。

「君、怒らないの？　こんなつままない女の、面倒なことに巻き込まれたのに？」

「……気持ち、少しだけ、わかりますから」

（……同じ事故で家族を無くした真九郎くんだけが、言える言葉だ

な)

しかし、真九郎さんと理津さんには決定的な違いがある。

真九郎くんは、前に進むことを選んだ。

理津さんは、進まないことを選んだ。

どちらが正しいかはわからない。

紅香さんも言っていた。

選択は、後から正しくするものだから。

「ねえ、真九郎くん。君も一緒に行かない？ 君の魂も、わたしが導いてあげる」

理津さんは真九郎さんに問うた。

家族が死んで寂しいかと。

真九郎くんは寂しいと言った。

夜、一人で泣いたりするかと。

真九郎くんは泣くと言った。

その悲しみは、ずっと続くことを知っているかと。
真九郎くんは知っていると言った。

これから先も、一人で生きていけるかと。
真九郎くんはわからないと言った。

だが、それでも。

「俺、約束したんです」

「……約束？」

「俺、あいつのこと傷つけて、泣かせたのに、あいつ、俺を許してくれて、また約束したんです。今度は、絶対に守りたい」

「……そっか。恋人さんと、仲直りできたんだ。じゃあ、死ねないよね」

理津さんの手が、だらりと落ちる。

「理津さん!」

「そんな、大きな声出さないですよ……。わたしには、やることがあるの。やらないといけないことが、あるの……。向こうにいった、ちゃんと、謝らなきゃ……。ごめんなさいって……。言わなきゃ……。」

理津さんは、僕達をもう一度見た。

僕は溜め息混じりに言う。まったく、不器用さもこれ極まりだ。

貴女にはもう少し、楽な生き方もあったらうに。

「輪廻転生を僕は信じません　が、せいぜい来世では楽に生きてください。願わくは、良い死出の旅を送れますよう」

「あ、はは。ありがとう。二人とも、迷惑かけて、ごめんなさいね。側にいてくれて、ありがとう。君達がいるから、そんなに怖くないわ。……。ねえ。最後に……。真九郎くん、頼みが……。あるの……。」

口から血の泡が溢れながらも、彼女は力を振り絞る。

「いつか、もしも、犯人を見つけたら、クソツたれな犯人を見つけたら、ぶっ飛ばしてやってね。わたしの分も……。」

そして、理津さんは目を閉じた。
あまりに不器用で、悲運な少女が、この世を去った。

「……………」

「慰めにはならぬだろうけど、真九郎くんはよくやったよ。少なくとも死ぬ瞬間に君がいたから、理津さんは安らかに逝けたと思う」

「夕介くんだって、いただろ」

「殺人鬼がいて、何の安らぎになるんだよ」

シニカルに僕が笑うと、半ば壊れたシャッターを切断して、切彦ちゃんに戻ってきた。
僕らと理津さんの遺体を見て、切彦ちゃんは拗ねるように言う。

「何だよ、もう死んじまったのかよ……………」

「やあ切彦ちゃん。遅いお着きで」

「ああ。まったく聞いてくれよ、フランクの野郎！ 俺を巻き添えに

しやがったんだぜ？ あんたの事だから、どっかから見てたんだろ
うけどさ」

僕にそう愚痴って、切彦ちゃんは刀を肩に担ぎ、真九郎くんを見た。

「まあ、標的は死んでも、あんたは無事なんだ。続きをやるうぜ。
《崩月》と《斬島》の決闘は、《暴力の世界》の歴史でもそうそう
あるもんじゃ……」

「手伝え」

「……はあ？」

予想外の一言に、切彦ちゃんは顔をしかめた。

「この建物は、さっきの爆発でもう危ない。残ってる人たちを避難
させる。夕介くんも、手伝ってくれ」

「了解」

「勝手に話を進めんな。手伝って……オレが？」

「そうだ」

「おいおい……てめえ、ふざけんじゃ……」

「ふざけてるのはお前だ！」

真九郎くんが、切彦ちゃんの胸倉を掴む。

真九郎くんの行動に衝撃を受けたのか、切彦ちゃんの顔から笑みが消えた。

「お前、それだけの腕があるなら、無抵抗の病人なんか殺すな！
もっと思えろ！」

「うるせえ！ オレは殺し屋だぞ！」

「なら仕事を選べ！」

「てめえに言われる筋合いは……」

「少しは考えろ！ 腕は超一流でも、お前の頭は三流だ！」

「……オレが、三流？」

「お前のやってることは、そこらの殺人鬼と同じじゃないか！」

……耳が痛いな。

「オレは……」

「考える！ ちゃんと考えてから動け！」

「……てめえ、このっ、くそっ……」

「お前が、今すべきことは何だ？ 俺との勝負か？ そんなもの、あとでいくらでもやってやる！ いつでも相手をしてやる！ だから今は、手伝え！」

「……」

「手伝え、斬島切彦！」

切彦ちゃんは混乱したのか、助けを求めるように僕を見た。

「諦めな」

僕は肩をすくめる。

「「ごうごうヤツなんだよ」

「ごうごう事だったのか？」

隣に座る切彦ちゃんが問いかける。

三人がかりの救命活動を終え、僕達は今、病院近くの小さな商店にいた。

真九郎くんは現在、商店の中で何か飲み物を買っているため、今は僕ら二人だけだ。

さっきから目の前では、消防車や救急車がひっきりなしに通っている。

リンさんはちゃんと僕の頼みを聞いてくれたらしい。

取り敢えずは彼女の無事がわかり、ほっとした。

「ほら、あんた言っただろ。オレは今回の仕事、成功するけど失敗するって」

「あー、まあね。確証は無かったけど、真九郎くんに関われば、キミに何かしらの変化はあるだろうとは思ってたよ」

「……やっぱ、あんたワケわかんねーや。なあ、真面目な話あんた何なんだよ」

「ただの零崎一賊。そして、この物語の読み手さ」

「さいで。ふん、ひねくれた読者様もいたもんだな」

「それも悪くない」

互いに苦笑いすると、真九郎くんが戻ってきた。

「二人とも、これ」

二本の缶コーヒーを僕達に投げる。

「サンキュー」

「……ホットかよ」

僕は嬉々として、切彦ちゃんは不満そうにそれを受けとる。

「あんた、さっき言ったよな？ いつでも相手をするって」

「言ったよ」

「じゃあ、今でもいいな」

缶コーヒーを転がし、切彦ちゃんは言う。

「これを飲み終わったら、始めようぜ。殺してやるよ。その首、落としてやる」

そう言って、コーヒーに口をつけた。

「……あひゆい」

つい、真九郎くんと一緒に吹き出してしまった。
猫舌って。

今のバトルモードで猫舌って。
切彦ちゃんは僅かに顔を赤らめて「うっせーな、ちくしょう」「とぼやいた。

「……本ツ当に変な奴らだよ、あんたら。なんか調子狂うっていか、興が削がれるっていうか、とにかく変だよ。話に聞いてた《崩月》の戦鬼と《零崎》の殺人鬼とは、大分違う」

「そうかもね」

「僕は変わり種だからさ」

「ま、いいか。楽しみは、あとにとっておくさ……」

溜め息混じりにそう呟いて、切彦ちゃんは近くのゴミ箱に空き缶と一緒に、日本刀を突っ込んだ。

……哀れリンさんの刀。
そうした途端に、切彦ちゃんの気迫は消え失せる。

「……………今日は、疲れたです」

鼻水をすすって、切彦ちゃんは眠そうに目をこする。

「……………それじゃあ、いずれ、どこかで」

『ありがとう、切彦ちゃん』

僕らはまた二人同時に、そう言った。

切彦ちゃんはかなり驚いた様子で僕らを見つめていたが、やがて微笑んだ。

「……………まだ、わたしを、そう呼んでくれるんですね」

真九郎くんは僕らを指差す。

「ゆーあーないすがいず」

《ギロチン》斬島切彦は、病院とは反対方向に消えていった。

後には、二人の鬼が残った。

「……真九郎くん」

「なに？」

真九郎くんが顔を向ける。

「ごめんね。この前は言い過ぎたよ」

「……ずるいなあ、夕介くんは」

真九郎くんは苦笑する。

「そう？」

「うん、ずるい。俺が謝らなきゃいけないのにさ。先に謝られたら、凄く謝りにくいじゃんか」

「ずるい、ね。美織にも言われたよ、それ」

「あ。美織ちゃんと、仲直りできたんだ」

「そっちも、紫ちゃんと仲直りできたみたいだな」

お互いに傷ついた。傷つけ合った。

そして、ほどけた絆は再び結ばれ、更に強く結び直された。結果オーライとは、言い難いかも知れない。

でも、二人とも いや、四人とも無事。それで良しとしよう。

だから取り敢えずは 。

「お疲れ様、真九郎くん」

「お疲れ様、夕介くん」

ぱし、ぱし、ぱし、と。

無事を祝って僕らは三回、手の甲を打ち合わせた。

死後の世界？死んでもまだ苦しみ足りないの？（後書き）

ジャンプSQを見ました、が……………。

リンさんだけでなく切彦まで巻き込むってどんな神経してんだアアアアア！！（血涙）

最近じゃグロいものばかり見てたから（例・もう何も怖くない）、ハッピーエンドに期待してたのに！！　生きてるんだよな！？
二人とも実は生きてるんだよなあ！？

……………すみません。取り乱しました。まあ取り敢えず、二次創作の中だけでも、リンさんを生存させてみました。

皆様にとって気に入ったエンドなら幸いです（^O^）

終わりの始まり

「おはようございます。お兄様」

僕が振り向くと、蝕織がこちらまで歩いてくるところだった。

「よう蝕織」

軽く挨拶して、蝕織の服装を見つめる。

カジュアルなスーツ姿にヒール。

あまりこいつが着ない服装だ。

「変ですか？」

「いや、似合ってる。てかお前は何を着ても似合っよ」

「ありがとうございます。」

……なんか、お兄様がスーツ着ると、曲兄さんっぽいですね」

「誉め言葉なのかどうなのか微妙だな、それ」

苦笑して、二人でぼんやりと、真九郎くん達を待つ。

「授業参観ですか……少し緊張しますね」

「《殺し名》が《表御三家》の授業参観に付き合っつても、笑える話だよな。真九郎くんはそういうのは気にしないだろうけどさ」

「それを言っちゃえばわたし達も、ですよ。」

あ。そう言えば、真九郎さんと紫ちゃんは、仲直り出来たんですか？

「そりゃ勿論」

くすりと微笑んで、僕はあのことの事を思い出す。

あの病院での出来事は、単なる管理ミスで片付けられた。

九鳳院の圧力か。悪宇商会の情報操作か。

それは分からなかったが、とにかくあの惨劇が表沙汰になることは無かった。

真九郎くんは結局、再び来た悪宇商会のスカウトを蹴った。

フランクを倒したことで、入社条件は揃ったらしいが、まあ、当たり前の決断だろう。

あのルーシー・メイとかいうスカウトマンとも一悶着があったが、それも難なく解決した。

その場に居合わせた紫ちゃんのお蔭で。

それから、今まで真九郎くんがいなかった寂しさの反動から、紫ちゃんが大哭きしちやったりもしたのだけれど、それはまた別の話だ。

「本当に、波乱万丈な一ヶ月だったよ」

「あら、それに見合った成果は得られたんじゃないですか？ わたしとまた一緒にいられるんですし」

「お前の自意識過剰には感服の至りだが、僕はそれ以上に疲弊しているんだよ」

「じゃはー」

冗談めかしく笑う蝕織。

ああ。平和だ。

この余裕がこの一ヶ月の成果だと言うなら　確かに、案外悪くないかもね。

「……ま、一つよろしく頼むよ。これからもな」

「はい　お任せ下さいな」

腹が立つくらい澄みきった青空の下。

様々な人間模様が渦巻く世界で、二人の殺人鬼の人間関係は、こんな感じ。

「しかし、夕乃さんも可哀想だね。都合で来れなくなっちゃうとは」

「何よ夕介くん。何か文句でもあるのかしら」

「いや別に。ただいっつもツンデレ状態の銀子ちゃんがアクションを起こすとは珍しいと思っ」

言い終わらない内に、銀子ちゃんの鉄拳が鳩尾にヒット。

銀子ちゃんは体育会系ではないが、さすがに痛い。

「容赦ないね……」

「馬鹿なコト言うからよ。全く、美織ちゃんの苦勞をお察しするわ」

現在、僕らは既に紫ちゃんの小学校内。

しかし紫ちゃんは、僕らが来るやいなや、真九郎くんと蝕織を何処

かに連れて行ってしまった。

大方察しはつく。

ここ最近、今回の一件以来元気の無かった真九郎くんには、慰めの言葉を送るため。

蝕織にも、似たような言葉を送るだろう。

今回、僕達兄妹に関することで、蝕織は紫ちゃんに相談をしていたらしいし、その結果も聞きたいのだろう。

だから、今僕と銀子ちゃんは教室前で待機と言っわけだ。

「あ、そう言えば銀子ちゃん。二人きりの時に、ちょっと謝りたいことがあったんだけど」

「何？ 別に謝られるようなことはされてないと思うけど」

「いや、真九郎くんを、更に《暴力の世界》に巻き込んだこと」と

「……………」

銀子ちゃんは押し黙る。

「僕が《零崎》ってことは、さすがにもう知ってるよね」

銀子ちゃんが頷いたのを見て、僕は続ける。

「白々しい話だけど、僕と知り合っちゃった以上、真九郎くんは否応なしにこつちの世界へ巻き込まれてくと思う。だから、幼馴染みの銀子ちゃんからすれば、あまり僕は歓迎されないのになって、思ったんだけど」

別に、この質問自体にあまり意味は無い。

ただ、少し人間関係の捻れを見直したくなっただけだ。

蝕織の一件は、僕の人間関係から起こった出来事。

もう今までのように、曖昧な関係を持ちたくはない。

つまり、仲良くするなら仲良く。嫌うならハッキリ嫌って欲しいのだ。

銀子ちゃんと僕は無言で睨み合っていたが、やがて銀子ちゃんは深く溜め息をついて、

「今更よ」

と言った。

「え？」

「今更だって言ったの。

あいつが《暴力の世界》に関わったのを嫌悪するのは、何も今に始まったことじゃないわ。

崩月先輩と　いいえ、柔沢紅香とあいつが会ったときから、私はそれが嫌だった。

だから、別に夕介くんが謝ったところで、何にもならないわよ」

「けど、それでも彼に振りかかる危険は減るよ？」

「……それはね。確かにそう思う。たださえあのバカは、厄介なトラブルばかり抱え込んでくるし」

でもね。と銀子ちゃんは言う。

「あなた達とは、できれば私も友達でいたいしね」

驚きに目を剥く。

まさか銀子ちゃんからそんな言葉が出るとは思わなかった。

「あなた達がヤバい人間だっていうのは頭で十分わかってるつもり。けど、柔沢紅香と違って、夕介くんや美織ちゃんと過ごすことは、あまり嫌いじゃないのよ」

眼鏡の位置を直して、銀子ちゃんは僕から眼を反らした。

いつもの様に不機嫌そうな横顔を浮かべながら。

「自分でもワケわかんない感情とは思っわ。」

いえ。案外そこがあなた達のヤバいとこなのかも知れないけど。

ま。とにかく、私としては、あなた達とはなるべく友達ではない
たいトコね」

「……そう。それじゃ、蝕織共々、未永くよろしく」

「いちちらこそ」

お互い、冗談めかしく笑う。

内心　ありがたい。

僕らとしても、キミ達とはなるべく、友人でいたいトコだから。

「……っと、そっぴゃあの三人遅いな」

「そっね。時間気付いてないのかも」

「ふむ。では迎えに行きますか」

父母の皆さんでこつた返す廊下を抜けて、階段を上がり屋上へ。

硬質なドアを開けると、心地よい風が僕らの脇をすり抜ける。

そのまま僕と銀子ちゃんは、屋上の景色の先を見る。

『……………』

二人同時に沈黙した。

幸いにも、三人は直ぐ見つかった。

ただ……、真九郎くんは紫ちゃんに膝枕をしてもらい、蝕織は紫ちゃんに頭を撫でられていたり。

『あ……………』

真九郎くんと蝕織も、僕らに気が付く。

真九郎くんは少し青ざめて、蝕織は羞恥に顔を染めている。

「……やらしい」

銀子ちゃんが哀川さんもびっくりな険しい表情をしながら呟く。

「なーにやってんだか」

「お、お兄様。えっと、これは、その……」

蝕織でもさすがに、小学生に頭を撫でられるのは恥ずかしさがあるらしい。

「ああ、夕介に銀子。これはお母様が教えてくれたことでな、これで二人は癒されたと言ってくれたぞ」

紫ちゃんの屈託のない笑顔。

皆さんもは何も言えない。

本当に 日常。

真九郎さんと蝕織は慌てふためき、紫ちゃんは二人にじゃれつき、銀子ちゃんは怒って、僕は苦笑い。

これが、今の僕が送る日々。

授業参観が滞りなく終わり、僕らは近くの商店街の駄菓子屋にたむろしていた。

未だに続く真九郎さんと銀子ちゃんのいさかいをバックミュージックに、僕は電話中。

「そっか。そちらも大変だったんだね。いー兄」

『今までが怠け過ぎてたからね。その反動かな。聞く限り、そっちも忙しかったみたいだけど』

電話相手はいー兄だ。

開口一番、この前の詫びを入れられた時にはどうしようかと思ったが、互いに謝ることで、ここは妥協。

…… 姫ちゃんの場合は、ちゃんと気持ちの整理をつけたから。

謝罪ついでに、いー兄は自分の身に起きた出来事を教えてくれた。

僕に頼む筈だったバイトの最中、起きた事件の真相。

姫ちゃんの直接的な死因は（いー兄から言わせれば、姫ちゃん自身の問題でもあったらしいが）、そのバイトに調査で居合わせた出夢さんとのバトルであっただけらしい。

その戦いの際に死亡した理澄ちゃんの話報に関しては、当然驚き、考えさせられるものがあったが、それよりもまず、出夢さんといー兄が戦ったことに驚かされる。

何考えてんだ。

一番力オスだった中学時代の人兄でも全然勝てなかった出夢さん相手に、極めて平均的なスペックのいー兄がバトるなんて。

いー兄としては、理屈じゃない心境だったんだろうけど。

だろっけど。

「何考えてんだよいー兄。出夢さん vs 哀川さんの前の中ボスのつもり？ コクツパだってもうちよつと強いだろ」

『否定する言葉はないよ。てか、出夢くんにも似たようなこと言われた』

「ふーん。で、戦って何か収穫はあったのかな？」

『……さあね』

はぐらかされた。

聞き出そうとしても無駄だろう。

聞き出せたとしても、いー兄の考えることなんて、僕には理解出来ない。

諦めたように溜め息をつき、僕は続ける。

「まあ、いいけどね。んじゃそろそろ本題に入らない？ まさか本気で謝罪のために連絡したわけじゃないだろ」

『失礼な。謝ろうとしたのは本当だよ。』

ただ確かに、それだけじゃないけどさ』

「やっぱりね。一体何よ？」

『少し調べてることがあってね。夕介くんは少し、質問したいんだ』

「質問？」

『狐の面をつけた男について』

何か知らない？』

刹那、世界が閉じた。

「……いー兄。すまない、また連絡する」

返事を待たずに電話を切る。

その通話終了音が、いやに辺りへ響く。

音が無い。

いや、人さえもない。

時刻はまだ昼。

まだまだ商店街は賑わう時間。

しかし、誰も見当たらない。

さっきまで後ろにいたはずの四人もいない。

「時宮か…？ いや、違う。

時宮なら、『時宮がやった』と判断させるような余韻を対象者に残すわけがない……」

とすれば、おのずと選択肢は限られる。

「空間製作か」

なら説明がつく。

しかし、誰が。

一体何のために、こんな大掛かりな技術を使うのだ。

「夕介くん！」

十字路の角から、真九郎くんが走ってきていた。

「真九郎くん、どこ行ってたんだ？」

「銀子に頼まれて缶ジュース買いに行ってたんだよ。夕介くんにも声かけたけど、電話中だったから」

「そうか。でも無事で良かった」

「無事って状況じゃないよ。」

さっきまであんなに賑わってたのに、人っ子一人いなかったし。

……それに、紫と銀子だって」

「心配するな。僕達が二人を認知出来てないだけで、紫ちゃんと銀子ちゃんは無事だ」

「認知出来てない　よく分からないな。夕介くん、一体何がどうなってるの？」

「『空間製作』……。簡単に言えば、意識のベクトルを一点に集中させた際に、境界を張り巡らせる技術だよ。時宮に比べればすげーローカルスキルなんだけど……。まさか使えるヤツがいたとはね」

僕にしる、以前子菰さんに聞いただけで　その子菰さんですら、
人づてに聞いたただけだと言う。

なんでも、澄百合高校退学者に使い手がいたとかで　。

「……まあ、そこはこの際問題じゃないよ。問題になるのは、どうして僕ら二人だけを閉じ込めたか、だ」

「もしかして、悪宇商会かな」

「可能性は捨てきれない。けど、空間製作者なんて人材は、いくら悪宇商会でも用意出来ないと思う」

「なら、誰がこんなことを？」

「それがわかれば苦労はしない。とにかく、辺りを警戒しよう。

念のため、《崩月の角》を出せるようにしといてね」

「……わかった。」

確かにこれは、病み上がりとか言ってられなさそうだ」

そうして僕らが、互いに頷きあつた時だった。

「よお」

背筋が、凍った。

覚えている。

覚えていないはずがない、この声。

一瞬で、声のした方を振り向く。

そこには、

「初めまして、紅真九郎。零崎夕識」

白装束に、狐面を被った男　《人類最悪》が立っていた。

真九郎はかつてないほど動揺していた。

奇怪としか思えない現象。

そこにいきなり現れた、狐面の男。

冷静になれる夕介がどうかしているとさえ思った。

だが今はとにかく、目の前のことに注意を払おう。

「あ　あなたは」

真九郎は慎重に言葉を選びながら、狐面の男に話しかける。

「誰、ですか」

「『あなたは誰ですか』。ふん、月並みな挨拶だな。紅真九郎。誰ですか、と聞かれて名乗る名前は無いな。俺はもう因果律から追放され、死んだ人間だ」

淡々と話す狐面の男。

その様子に、武芸のたしなみは見られない。

自分は未熟だ。

けれど、それを踏まえて考えたとしても、隙だらけだ。

《崩月の角》を解放すれば、一瞬で勝負はつく。

しかし何故だ。

動けない。

この男を倒していいのか　そんな気がする。

隣を見ると、夕介もまた、深淵夢想を取り出してこそいるものの、全く動こうとしない。

「まあ、そんなどうでもいい質問は止めておこうぜ。

俺が名乗ろうが名乗るまいが、それはどうせ同じことだからな。単刀直入に言わせて貰おう」

二人を順番に指差し、狐面の頭は言う。

「紅真九郎。零崎夕識。お前ら、俺とつるめよ」

「　　っ！」

ぞくりと、心が震えた。

歓喜とも憎悪とも悲哀とも快樂とも違う。奇妙な感覚が身体中を駆け巡る。

自分の内が今の、たった一言で蹂躪されていく。

違う。

真九郎は理解する。

この人間は、今まで出会ってきた人間とは全く違う。

人間なのかどうかさえ、分からない。

ステージがまるで違う。

柔沢紅香と同等　　あるいはそれ以上の存在。

それが、この狐面の男。

「お前ら二人とも、噂は聞いてるぜ」

『……………』

「紅真九郎。お前、あの九鳳院とやり合ったらしいじゃねえか。

俺も自分が度を越えた馬鹿だって自負はあるが　くっくっく、お

前もかなりのもんだぜ？

まさか女一人のために、《暴力の世界》と《財力の世界》のバランスをブツ壊そうとするとはな。

前例もあるにはあるが　誇っていいぜ、紅真九郎。

無名の揉め事処理屋から、そこまでやったヤツは初めてだろう」

何故、知っている。

あの出来事は、紅香と九鳳院が全力で揉み消していたはずだ。

誰かに話してないとは言わないが、それは銀子や夕乃のように、信頼出来る人物のみ。

しかも、そこまで詳しく話してはいない。

夕介も、それは同じだろう。

「で、零崎夕識。

お前もその一件には一枚噛んでいるらしいな。

それに、お前の《縁》は実に面白い。いや、素直に羨ましいもんだ。《裏十三家》、《表御三家》、《殺し名》、《呪い名》、《玖渚機関》。更には《病院坂》。

《零崎》にいながら、どうすりゃそこまで物語に関われるのかご教授願いたいね。

極めつけは《零崎》でありながら、《人を殺さない》という特性くつくつく。

実に愉快的な立ち位置だよ」

お前ら、ものの見事に狂ってやがる。

「俺は なんとというか、お前らみたいな変な奴を集めてる。

《十三階段》 つつてな。中々センスのいい名前だろ？」

その名の通り、一応定員は13人と決めてんだがな。まあ、正直何段階でもいい。そんなものは同じことだ。まだメンバーはようやく半分を越えたあたりだ。予定じゃもう少しじっくり集めるつもりだったんだが　　そうも言ってもらえなくなっ
てな。

俺の敵が現れた以上、ちんたらはしてられない」

そこで初めて、空虚だった男の声に、嬉々としたものが混じった。

「俺は、世界を終わらせたい」

「せ、世界？」

なんだそれは。

世界大戦でも起こそうというのか。

「んなわけあるか。

そんなつまらんエンディング、こっちから願い下げだ。
履き違えるな、紅真九郎。

俺は世界という《物語》を終わらせたいんだよ。

んで、お前らはその物語の登場人物になる資格がある。

代替役の難しそうな　　そうそう代替役のきかなさそうな役割が与

えられている可能性が高い。

お前らは変な奴だ。だからお前らは 面白い」

「……………」

世界の終わり。

そう言われて思い浮かぶのは、あの爆弾テロ。

紅真九郎が全てを失った、あの忌むべき記憶。

暗闇に閉ざされ、全てが絶望に包まれる。

あれこそまさに 世界の終わりだと思つ。

だが、この男の考えていることは違つ。

そんな個人単位に収まる話ではなく、もはや形容するのもおおこがましい。

本当の、世界という物語の終焉。

予想不可能なエンディング。

「お前らはこんなところやそんなところで 誰かを助けたり、誰かの代わりにやっているとすべき男ではない。

《零崎》にしる《崩月》にしる、所詮は誰かの続きに過ぎない。揉め事処理屋など、論外だ。

そんなものに従ってどうする。

人が従うべきは 『運命』だけ。

お前の役割は お前の運命は俺が決めてやる。

さあ お前ら、選べよ」

俺と来たら 気持ちいいぜ。

「やめとけ」

黙りきりだった夕介が、真九郎を制した。

「気持ちは分かるけどね。やめとけ」

我に返ると、いつの間にか、自分の足が狐面の男に向けて、一歩踏み出していたことに気が付く。

そんな真九郎を諭すでも蔑むでもなく、夕介は狐面の男に向き直る。

「ふん。まさか、真九郎くんまで因果に巻き込まうとするとはね。認めよう。予測してなかったよ。《西東天》」

最後に紡がれた言葉に、狐面の男が僅かに反応する。

「『認めよう。予測してなかったよ。西東天』。ふん、おかしいな。『死んだ』名前とはいえ 初対面の相手が、その名前と俺を結び付けられるはずがないんだがね。」

それとも　俺とお前、どこかで会ってたか？
だとしたら、それは実に惜しい話だが」

「そうか。そいつは残念だね。

どちらにせよ、あなたが僕と会うことはなかったぞ。

僕とあなたは、もう絶対に会う筈はなかったよ。

僕とあなたの《縁》は十年前に　もう完膚無きまでに切れてたんだ。

あなたの娘さんと同じように。

ねえ、天おじさん？」

今度は、明らかだった。

明らかに、仮面の下から感じる威圧感が、別のものになった。

心なしか、その体軀を震わせているようにも見える　そんな激しい反応。

こんな　　こんな《縁》の始発駅みたいなヤローを見逃すなんてな
！」

突然の狂笑を真九郎はただ立ち尽くしながら見ていた。

足が、小刻みに震える。

得体の知れない恐怖が、自分を支配した。

夕介はそれに臆することなく、にやりと笑って狐面の男を睨み付ける。

「では改めまして。久しぶりだね、人類最悪」

「久しぶりだね、人類最悪」。ふん。確かにな。
しかし　くつくつく。

本当に笑い話以外の何者でもないな。

まさか、ほとんど俺と同じ存在のお前が　俺との《縁》が完全に
切れていたはずのお前が　もう一度オレの因果の中に登場する
は。

因果から追放された俺の、あつてないような《縁》だが　まだま
だ捨てたもんじゃないらしい』

ひとしきり哄笑した男と、夕介は視線を交錯する。

「出来れば二度と会いたくはなかったけどね。

けど、こうして再会してしまったんだ。

僕も、あなたとの《縁》に従わなくちゃならないらしい。

大方、あなたの敵ってのは、いー兄だろ？」

「なんだ。俺の敵とも出会ってやがったか。

くっくっく。つくづく面白い奴だな、お前は。

本気で惜しく思うよ。お前との《縁》を一度でも切っちゃまったことはな」

狐面の男はそのまま、夕介と真九郎に向かって歩みを進め、二人の中間を通り過ぎていく。

「お前らの勧誘は止めておこう。

どちらにせよ、お前らとはまた会うことになるだろうからな。

一つ宣言しておこうか。

近い内、この上無く楽しいことが起きるぜ　その時には、お前らも招待してやるよ。『俺の敵』クラスとまではいかないが　お前らは俺と相対する方が面白くなりそうだからな。

それと、紅真九郎」

突然話の矛先を変えられ戸惑う真九郎をよそに、狐面の男は続ける。

「十三階段　その中にお前と《縁》があるヤツがいる」

「俺、と？」

「そう。お前にだ。」

ヤツの話を聞く限り、お前はヤツを知らんだろうが　ヤツはお前
の話を聞いて会いたがっていたぞ。

せいぜい楽しみにしておくがいいさ。

じゃあお二人さん」

嫌が応でも、また会おう。

そう言い残し、狐面の男は去っていった。

「 夕介、くん」

「……あいつのことなら、君は知らなくてもいいことだよ。
今の時点ではね」

そう言って夕介は、真九郎に聞こえないくらい小さく呟いた。

「ごめん銀子ちゃん。」

キミの幼なじみを、更に巻き込むことになった。

(第二章 了)

終わりの始まり（後書き）

ギロチン編フィニッシュ！

いや、漫画版の紅と同時期にギロチン編が終わるといっても、なかなか感慨深いですね。

てか良かったよ漫画版……切彦もリンさんも生きてて良かったよ……。

さて、次回は番外編。次々回より完結編がスタートします。夕識の物語がいかにして帰結するのか、お楽しみに！

登場人物紹介

零崎夕識（ぜろざき・ゆうしき）

殺人鬼

零崎蝕織（ぜろざき・はみおり）

殺人鬼

紅真九郎（くれない・しんくろう）

揉め事処理屋

九鳳院紫（くほういん・むらさき）

九鳳院家令嬢

いーちゃん（ぼく）

戯言遣い

玖渚友（くなぎさ・とも）

青色

哀川潤（あいかわ・じゅん）

赤色

零崎人識（ぜろざき・ひとしき）

殺人鬼

西東天（さいとう・たかし）

最悪

想影真心（おもかげ・まごころ）
橙なる種

柔沢紅香（じゅうさわ・べにか）
揉め事処理屋

星嚙絶奈（ほしがみ・ぜな）
孤人要塞

灰色一色（しきじき・いちしき）
人類最怨

零崎曲識（ぜろざき・まがしき）
殺人鬼

零崎双識（ぜろざき・そうしき）
殺人鬼

零崎軋識（ぜろざき・きししき）
殺人鬼

無桐伊織（むとう・いおり）
殺人鬼

崩月夕乃（ほうづき・ゆうの）
崩月

村上銀子（むらかみ・ぎんこ）

情報屋

武藤環（むとう・たまき）

空手家

闇絵（やみえ）

魔女

九鳳院蓮杖（くほういん・れんじょう）

九鳳院家党首

騎場大作（きば・だいさく）

近衛隊副隊長

リン・チェンシン（りん・ちえんしん）

近衛隊幹部

斬島切彦（きりしま・きりひこ）

ギロチン

浅野みいこ（あさの・みいこ）

剣客

闇口崩子（やみぐち・ほうこ）

少女

石風萌太（いしなぎ・もえた）

死神

匂宮出夢（におうのみや・いずむ）

殺し屋

紫木一姫（ゆかりき・いちひめ）

ジグザグ

架城明楽（かじょう・あきら）

セカンド

一里塚木の実（いちりづか・このみ）

空間製作者

絵本園木（えもと・そのき）

ドクター

宴九段（うたげ・くだん）

架空兵器

古槍頭巾（ふるやり・ずきん）

刀鍛冶

時宮時刻（ときのみや・じこく）

操想術師

右下るれる（みぎした・るれる）

人形師

闇口濡衣（やみぐち・ぬれぎぬ）

暗殺者

澁標深空（みおつくし・みそら）

殺し屋

澁標高海（みおつくし・たかみ）

殺し屋

ノイズ（のいず）

不協和音

奇野頼知（きの・らいち）

病毒遣い

零崎星織（ぜろざき・ほしおり）

殺人鬼

柔沢ジュウ（じゅうさわ・じゅう）

高校生

堕花雨（おちばな・あめ）

高校生

斬島雪姫（きりしま・ゆきひめ）

高校生

円堂円（えんどう・まどか）

高校生

間違い間違い

「紫織ちゃん」

放課後。

その日、珍しく急いでいたわたしは、急いで鞆に教科書を叩き込んでいた。

だが、鞆を肩にかけ、教室を出よう時になって、雨ちゃんに呼び止められる。

「何か用？ 雨ちゃん」

「はい。もし急いでいるなら、無理に引き止めはしませんが」

「急いでるっちゃんあ急いでるけど、話聞くくらいなら大丈夫だよ」

「そうですね。ああでも、その口振りですと、これから直ぐに御用があるんですよね」

わたしが頷くと、雨ちゃんは残念そうに俯く。

「もしよかったら、この後一緒にお茶をしようかと思ったのですけれど」

「お茶？」

「美味しい珈琲を出してくれる喫茶店があるらしくて。雪姫と円と一緒に行く約束をしていたんです」

「ふーん。あ、もしかして雨ちゃんのご主人様も行くのかな」

「はい、ジユウ様ならお昼にお誘いしました」

「ぐっ……、かなり、凄く、非常に魅力的な提案だけど、今日はちょっとマズいかな」

「こんちきしょー、タイミング悪すぎだ！」

ジユウくんが雨ちゃん、雪姫ちゃん、円ちゃんに囲まれて居心地悪そうにする様を見られないとは……っ！

けど、

「今日はどうしても、行かなきゃいけないんだ。大事な人と会う約束があるの」

「大事な人、ですか？」

「うん。」

わたしの、とつても大切な人なんだ」

雨ちゃんと別れて、わたしは待ち合わせ場所まで走る。

駅前の時計塔。

シチュエーションとしてはベタベタなそれだけど、わたしは全然構わない。

世の中王道で行きゃいいんだよBY人類最強の請負人。

その人は、人混みで溢れ変える広場で、一際異彩を放っていた。

時計塔を所帯無さげに見上げる顔は、無表情だけど、とても涼やかな印象を受ける。

黒い燕尾服に、左手に下げているバイオリンケース。

そして、後ろで纏められた雪のように綺麗な白い髪。

わたしが知ってる姿と 全く変わらぬ姿。

「おとーさんっ!」

後ろから抱き付くと、その人は少し吃驚したけれど、直ぐに笑みを浮かべてくれた。

「うん、久しぶりだな、星織。元気だったか?」

「うん、元気元気!」

「そうか、悪くない」

頭を軽く撫でられる。

子供扱いされるのはイヤだけど、でもこの人なら全然大丈夫。

わたしの、大切な家族だから！

「だが星織、『お父さん』は、こういう場では止めて欲しいんだが」

「えー、何で？ お母さんは何にも言わないし、お父さんだってそうでしょ？」

「周囲の目を気にしろと言ってるんだ。蝕織は、あまり気にしないのだから」

「むう。年がら年中TPOわきまえなくて、燕尾服着てるようなお父さんに言われたくありません！」

「……まあ、反論は出来ないがな」

苦笑いをしながらわたしを引き剥がす。

……普段からそういう風に表情動かしてれば、舞織お姉ちゃんや、
軋識お兄ちゃんに『三白眼』なんて言われぬのになあ。

「それじゃあ、せつかくだし、何処か食べにいくか？」

「やった！ じゃあ、近くにあるラーメン屋さん行かない？」

「ラーメン屋？」

「うん！ ラーメンもちろん美味しいんだけど、わたしが通つて
る高校の村上先生って人が看板娘なの！ すごく綺麗で優しい人
だから、お父さんにも紹介したいんだ！」

「へえ、それはいい。じゃあ、昼は『楓味亭』に決まりだな」

「へ？ お父さん、何で店の名前知って……あ。ま、待ってよー！」

それには答えないまま、足を進め出すお父さんを、わたしは慌てて
追いかけた。

やれやれ。

時の流れも、存外馬鹿に出来ない。

後ろから追いかけてくる紫織　かつて僕がいた役割を担う少女を
見ながら、僕は思った。

まあ　悪くはないのだがな。

人々は、誰しも物語を持っている。

それらは得てして、『世界』という一つの本に包括された、言わば

短編のようなもの。

全ての物語が複雑に絡み合い、一つの本、『世界』を作り出す。

当然、本と言う以上、『世界』もまた無数に存在する。

例えば 戯れた狂言回しの世界。

例えば 目も覚めるような紅の世界。

例えば 不気味で素朴で困われた者達のための壊れた世界。

例えば 奇々怪々な出来事に見魅られた者が語る、化物だらけの世界。

あの『狐』は、これらの『世界』を観賞する読者でありたいらしいけれど。

まあ、僕にとっては預かり知らぬことである。

さて、僕の語るべき物語も、遂にこれが最後となってしまった。

奇妙に混じった二つの世界。

その結末を大団円と呼べるのかどうかはわからない。

感想なんて、読む人間で千差万別だ。

いや、語り部代行である僕にしるそうだ。

語り部が変わるだけで、世界はがらりと変わってしまうのだから。

戯言遣いの青年であったり 揉め事処理屋の少年だったり、視点
が変われば、捉え方も変わる。

同じ物語でさえも、無限に存在するのだ。

だから、僕は僕の物語を語ろう。

僕から見た、戯れた狂言回しの世界を。

僕から見た、目も覚めるような紅き世界を。

では皆様、もうしばらくのお付き合いを。

願わくは、皆様にとって、幸福な結末であれば幸いです。

間違い間違い（後書き）

最終章とか言いつつもこの更新速度です；

今回は序章ということとどうかひとつ（汗）

このエピソードが果たしていつの時代になるのかは、最終章のラストで語る予定でございます。

休息の傷跡・SIDE・SAMIDARE・SOU

平和だ。

気味が悪いほど平和だ。そう、紅真九郎は思うわけである。

「なに？　クジラは魚では無いのか？」

「はい。私たち人間と同じ哺乳類なのです」

「ふむ。同じ種族であるにも関わらず、あそこまで巨大になるとは、奴らも相当な艱難辛苦を乗り越えて成長してきたのだな」

いや、紫。井戸端会議のノリでそこまで壮大なスケールで語るのはいや、紫。
……。

そうツツコミかけたのを、真九郎は自制する。
何も間違った知識を教えているわけではない　その辺、美織は環よりも信用出来る女性だ。

あの斬島切彦の一件から、結構な日数が流れていた。
学校も滞りなく終わり（真九郎を迎えに来た紫が校長室にまで乗り込んでいたこと以外は……だが）、真九郎は四人で五月雨荘への帰路についていた。

自分、紫、美織、そして。

「お兄様、聞いてるんですか！」

「……ん、ああ、うん。聞いてる聞いてる」

「じゃあ今した質問に答えてみて下さい」

「ああ、いろはにはほへとの起源だっけか？ お前、アレは紫ちゃんには刺激が強すぎるよ。かなり暗いエピソードの元、あの歌は作られてだな」

言い終わるよりも早く、美織のコークスクリューブローが夕介を撃ち抜いた。

「聞いてないなら聞いてないで、もう少しマシな嘘をつけて下さい！ 何でお昼時にそんなスプラッターな話題を語らなくちゃいけないんですか！」

「？ 夕介、別にいろはにはほへとは怖いものでは無いぞ。平仮名を覚えるためにとても便利な歌でな」

「甘いね紫ちゃん。ほのぼのエピソードの奥には、得てして恐ろしい秘密があるのだよ。ちなみにいろは歌の由来とはね」

「ストップ夕介くん！ さりげなく語らないで！」

夜が未だに苦手な紫に、あんな黒歴史を聞かせたら、確実に泣く。

「七歳に聞かせる話として、どう考えてもチヨイスミスだよ」

「失礼。噛みました」

「違う。わざとだ……」

「かみまひた」

「わざとじゃないっ!?!」

「斬りました」

「確かにいるは歌の作者はそうなったけど!」

「昨今、夕介との付き合いから、ツッコミが上達しつつある真九郎だった。」

「ははは。まあ、悪いことじゃなからうて。真九郎さんの立ち位置は会った時からそうだったろう」

「夕介さんの俺に対する第一印象がツッコミ役だとは知らなかったよ……」

普通に嫌な話だ。

もう一年近い付き合いだ、未だに真九郎は、緋色夕介という少年がよく解らない。

いや、知っていることでさえ、曖昧なものが多い。

自分が所属する裏十三家《崩月》。

そして彼は、裏十三家と世界を同じくする殺し名三位《零崎》。

本名、零崎夕織。妹の美織。本名零崎蝕織とは、血の繋がった兄妹でありながら、流血によっても繋がる存在。

表面の情報以外で知っていることと言っても、このくらい。

紅真九郎は、緋色夕介を知らない。無理に知らなくていいとさえ考えていた。

つい、少し前。あの《狐面の男》と出逢うまでは。

あの不吉な男。

自分を《十三階段》とやらに勧誘してきたあの男。それがここ最近、心の奥底で真九郎の不安要素となっていた。

夕介と同じく。自分はこの狐面の男のことを何も知らない。しかし、これだけは言える。

『アレは、関わってはいけないモノ』だと。

直感で踏み出すことの愚かさを、真九郎は切彦の一件で学んでいたつもりだったが、この直感には従っていいと思っている。

何故なら あんな怪しく心を揺さぶられたのは初めてだったからだ。

あの狐面の男に 凄まじい興味が湧いていた。
悪宇商会に誘われた時とは比べものにならないほど 自分の中の
何かが揺らいだ。

夕介が止めてくれなかったら、危険だった。

しかし あの男は、必ず何かを引き起こす。自分達を巻き込んで。

『近い内、この上無く楽しいことが起きるぜ その時には、お前
らも招待してやろう。』俺の敵『クラスとまではいかないが お
前らは俺と相対する方が面白くなりそうだからな』

あの男は、確かにそう言った。言った以上は その通りになるだ
ろう。

故に、真九郎は夕介のことが知りたい。

『では改めまして。久しぶりだね、人類最悪』

『「久しぶりだね、人類最悪」。ふん。確かにな。しかし　くつくく。本当に笑い話以外の何者でもないな。まさか、ほとんど俺と同じ存在のお前が　俺との《縁》が完全に切れていたはずのお前が　もう一度オレの因果の中に登場するとは』

あそこまでの敵意を見せる夕介。

夕介を知る口振りの、狐面の男。何か関わりがあるのは明らかだ。

知りたい。知らなくてはならないように思えるのだ。

知っているのと知らないのでは、まるで違う。具体的にどうすればいいのかわからない。

夕介からそれを聞かせえすれば、何かわかるような気がするのだ。

だが、真九郎は聞けずにいた。あれから何日も経ったのに、だ。

あれから夕介は、自分たちに仕切りを敷いたように見えた。

上の空になることも多い。

話しかければ、遅れながらも答えてくれるし、今のような馬鹿っぽい掛け合いにも応じてくれる。

けれど、何か違う。何処か、ぴりぴりしている。

端的に言って余裕が無いのだ。

狐面の男についても、自発的に語ろうとはしない。

「何も聞くな」。そう暗に示された気分だった。

それが、齒痒い。

自分が何を相手にするべきなのかわからない状況が、もどかしい

「真九郎？」

現実には引き戻される。

見ると、紫が自分を気遣わしげに、自分の顔を覗き込んでいた。

「どうした？ どこか痛いのか？」

「……あ。いや、別にそういうわけじゃないよ」

「もう、しっかりして下さいよ。お兄様だけじゃなくて、真九郎さんまで上の空になったら、誰がボケを処理してくれるんですか」

『俺（僕）は自分がツツコミだと言った覚えは一度もない（よ）』

セリフが夕介と綺麗にシンクロした。

一瞬で四人が顔を見合せ、同時に笑った。

「楽しいな」

紫が、唐突に言った。

「紫？」

「私は本当に幸せだと思う。真九郎に会えた、夕介に会えた、美織に会えた、みんなに会えた。凄い偶然で、奇跡のような出逢いかも知れないけど、それでも構わない。会う理由が不確かなものだったとしても、《今》の私たちは、きっと確かなものだから」

みんなと逢えて、良かった。

「ずっとこの時間が、続けばいいな」

紫以外は全員、呆気にとられていたが、直ぐに柔らかな笑みを浮かべる。

「にやはは、紫ちゃんったら、嬉しいこと言ってくれるじゃないですか〜」

「ははは、全くだよ。　　そうだね」

夕介は言う。

「ずっと一緒にいられば、いいね」

夕介は、ちらりと真九郎を見た。

恐らく、同じことを考えていただろうから。

ずっと一緒。多分それは無理だ。

自分たちは、みんながみんな、立場が全く違う。

こうしていられるのは、紫の言う通り、奇跡に近い。

いつか、別れは必ず来る。だから、せめて。

紫に頬擦りする美織を落ち着かせ、紫の小さな手をそっと取る。

「行くっか」

「うむー」

夕介と美織を見ると、夕介は口元がニヤけ、蝕織は手を口に当て、頬を染めている。

二人の仕草の意味はわからなかったけど、悪いものじゃない。

別れは来る。

それまでは　この時間を大切にしよう。

《人類最怨》は、《それ》を無表情で見つめていた。

「フツ、《狐》と繋がる者と呼ばれるだけはあるそうだな。おまけに零崎一賊でもある、か。興味深い」

笑い声らしき声を出しはしたものの、彼の表情に感情らしい感情は浮かんでいなかった。

くわえていたタバコを地面に捨て、《人類最怨》はくるりと背を向ける。

「しかし　フツ、まさか、本当に《あのガキ》まで一緒とはな。成る程、《狐》の言う因果、中々楽しませてくれそうだ」

相変わらず感情の伺いしれない表情のまま、《人類最怨》は去っていく。

「先ずは《奇野》。さて、どう出るかな」

永遠に続くものなどない。

物語が閉じる瞬間は、

あまりに呆気なく訪れるのだ。

それからの五月雨荘までの帰路は、至って普通なものであった。

サンタクロースを知らない紫ちゃんに、真九郎くんが夢のある説明をしたりしてた。

サンタクロースね……。
曲兄は変にサンタクロースを信じてたなあ、と僕はとりとめのないことを思い出していた。

クリスマス。

世界中の人間が、キリスト個人の誕生日を祝うのはどうなのだろうと思わないでも無いのだが、それはいくらなんでも情緒が無いだろう。少なくとも蝕織には必ず殴られる。

（ 平和、だよな ）

怖いくらい平和だ。

《狐》が現れたというのに。

しかも、真九郎くんを自分の仲間に勧誘しようとしてまでしゃがった。

これは非常にマズイ事態だ。

場合によっては真九郎くん、いや、周りのみんなが全員巻き込まれる。

目を光らせてこそいるが、今まで通り、《狐》に目立った動きはない。今のところは。

紫ちゃんにはああ言ったが、もうあまり時間は無いだろう。

僕、真九郎くん、蝕織の間で、みんなを呼んでのクリスマスパーティーを計画していたりもするのだが　果たしてそれが実行に移せるかどうか。

「お兄様」

いつの間にか、蝕織が隣に寄り添っていた。

「大丈夫ですよ」

言って、手まで握ってきた。紫ちゃんが羨ましかったのか？

一ヶ月ほど前、真九郎くんが切彦ちゃんの一件を片付けていたその裏側、僕もまた、自分自身の問題を片付けていた。

我が愛すべき妹　零崎蝕織との、五年越しの確執を精算した。

いや、確執と言えど、全面的に僕が悪かったのだけれど、とにかく、一応のケリはついた。

だが五年の確執はあまりにも大きく、二人ともかなり遠慮がちになっていた……ということは全然全くこれっぽっちも無く、むしろ蝕織は、思いつき僕に甘え出した。

うん。思いつきりデレた。それはもうロストした時間を埋めるかのように。

僕は僕で、蝕織に対する隔たりが無くなった分、「ああ。こういう日常も悪くないかもな」という恐ろしい気分になることさえある。

つまりは理性と本能がせめぎあっている状態。

しかも、最近リアルに理性の枷が弱まりつつある。

くそう、墮落するなよ僕。

「潤さんも《狐》を追っているでしょうし、何かあれば直ぐにわかりますよ。真九郎さんや紫ちゃんが巻き込まれる前に、わたし達が動けばいいだけの話です。」

それに　わたしもいますから」

何の迷いも無く、真っ直ぐに僕を見つめる蝕織。

「頑張りましょう。お兄様がしてきたことが、無駄にならないように」

「……ん」

そつだ、弱気になってどうなる。

ここで頑張らなかつたら、《狐》に目を光らせていた意味が無い。どころかこれまでの、蝕織を傷付けてきた時間さえも無駄になる。

僕は　もう二度と、誰かをないがしろにしたくない。

「蝕織」

「なんです？」

「お前が妹でよかったよ」

兄妹じゃなければ真剣に惚れている　とまでは続けられなかった。さすがに恥ずかし過ぎる。

いや、先月言っちゃったけどさ。

「？　えっと、ありがとうございます？」

意図を測りかねているらしい蝕織は、首を傾げながら、僕の顔を覗き込んだ。

止める、小動物みたいな目で僕を見るな！

その後の「ゆうすけー、みおりー。置いていってしまっぞー」という紫ちゃん呼び声に、僕がどれだけ感謝したか、それは文章では書き表し切れない。

今度、アイスクリームでも奢ってあげよう。とかなんとか、馬鹿馬鹿しい思考をしたりしつつ、僕らはようやく五月雨荘にまで辿り着いた。

僕らを出迎えたのは、こんな声。

「残念だけどねー。真九郎くんも夕介くんも蝕織ちゃんもまだ帰ってきて無いわけよ」

「おいおい、そりゃないぜ。こちらたかがお使いのために日本の中心都市にまで来たつてのによお。」

何だっつてんだ。このシール入りチョコに手違いでシールが入ってなかったみたいなの喪失感……」

一人は環さんの声。

もう一人は知らない男の声だった。

「あら、皆さんお帰りーん」

「ただいまです、環さん。あの、僕と真九郎くんに何か用ですか」

ぴたりとその男は動きを止め、恐る恐る僕達を振り向いた。

「えっ？ なに、もしかして、俺の登場シーン、今のかつちよいくも何ともない愚痴から始まっちゃった!？」

がくり。

効果音が後ろに実体化するくらい、男は落ち込んだ。

「不覚、一生の不覚！ 気を緩めては殺られるというこの世の心理を忘れたか俺！」

「…あのー、なんていうか、すみません」

「真九郎？ 何故謝るのだ」

「紫ちゃん。世の中には『空気を読む』という重要且つ大切なルールがあるのです」

「ああ、覚えておきなお嬢ちゃん。世の中渡っていく上で、疎かにすれば即座に破滅しかねないルールだ……」

男はようやくショックから回復し、よろよると立ち上がった。

「えっと、だ。もはや最初の失敗をやり直せるとは思えねえけど、一応テイク2を試みるぜ」

ズレたグラサンの位置を直し、ハーフパンツに掛けられたチェーンをじやらりと鳴らして、男は口を開く。

「俺の名は奇野頼知」

『はっ?』

僕、蝕織、真九郎くんは、同時に驚愕する。

奇野? 奇野だと?

しかし、サプライズはまだ終わらない。

「《十三階段》の十二段目。

ありったけの親しみを込めて、キノラッチって、呼んでくれ」

《十三階段》。

その単語が、僕らの周囲を支配した。

「《奇野》 呪い名か」

「正解。《呪い名》序列三位、ま、数字の記号で呼んでくれるなら、十二段目つつーのが気に入ってただけだな」

紫ちゃんと環さんを除く僕ら三人が身を強張らす中、奇野頼知を名乗る男は、僕らをざっと見比べる。

「うーん、なんかちぐはぐなんだよな」

「……？ 何がだ」

僕が尋ね返すと奇野は「あー、悪い悪い」と軽い調子で言う。

「いやな。アンタらって《零崎》と《崩月》なんだよな」

素性が知られていることに関しては驚かない。《狐》も周知の事実だからな。

「《崩月》はともかくとして 《零崎》って言やあ、俺が聞く限り『絶対に関わるな』と勧告され続けてる殺し名だろ？ けどお前は、この突然の邂逅に驚いてる。

一応は普通の世界にいる『いーちゃん』は俺との邂逅に驚かず、お前ら暴力の世界の人間が驚くつても、中々面白い話だと思わねえか？ 零崎夕識に紅真九郎」

「いーちゃん あの戯言遣いにも、貴方は接触しているのですね、奇野頼知」

「そう言うアンタは、零崎蝕織だな？ アンタのことも聞いてるぜ。ちなみに質問に答えとくと、イエスだ。もう『いーちゃん』にパーティーの招待状は届けてある」

「アンタは 何が目的だ」

真九郎くんが声音を低くしながら聞くと、奇野は面白そうに笑う。

「へっへっへ……《狐》さんから聞いてんだろ？ 紅真九郎。アンタらはこれから、この上なく面白いことに巻き込まれるんだ。『いーちゃん』への用事と同じさ。アンタらへ招待状を届けに来たんだ」
「お」

奇野は白い封筒をひらひらと見せる。

「ま、俺としちゃあ、ここで一暴れしていくのもやぶさかじゃあねえんだけどな」

その一言に、警戒心を更に強める。

「夕介、美織、真九郎。何なんだこの男は…？」

「紫、下がってる」

「紫ちゃん、わたしの後ろにいて下さい」

真九郎くんが紫ちゃんを手で制し、紫ちゃんは蝕織の後ろに隠れるようにする。

「わたしから離れちゃ駄目ですよ」

「おいおいおい、勘弁してくれよ。俺に信用がねえのはわかるが、いくら一暴れするからって、んなちびつこにまで手を出す気はねえっつもの」

「どうだかね。いや、それ以前にこの五月雨荘は、《不戦の約定》が結ばれた土地だ。この敷地内で暴れることは許されないぞ。奇野頼知」

「あー、そついやそつだったな。……って納得してハイサヨウナラ

になると思つか？」

奇野はサングラスの位置を直し　少し腰を落とす。

来るか。僕ら三人も、迎え撃つために身構えた。

「ねーねー。話の腰を折っちゃって悪いんだけどさー」

奇野の丁度背後にいた環さんが頭を掻きながら、僕らに聞く。

「なんか少年誌にありがちなバトルする気満々みたいだけど、そのの、えーっと、奇野さん？　あなたはそこの青少年少女達をどうする気なのかな」

「あん？　そりやお姉さん、聞くだけ野暮ってもんじゃねえかい？　こうしてピリピリした雰囲気全開で向かい合ってたんだ」

奇野はより一層邪悪な笑みを浮かべる。

「殺し合い以外に、やることがあるわけ　！」

「なるほど、だいたいわかったわ」

環さんの動作は一瞬だった。
奇野との距離を強烈な踏み込みで一気に詰め、

「なっ!？」

「とりゃ」

足払いを掛けた。
中々に勢いもあつたらしく、奇野の身体は少し離れた場所に倒れた。

頭から落ちたため、身悶えしている。

「た、環さん……」

「関係ない、とかは言わせないよん。真九郎くん」

僕と蝕織も、開いた口がふさがらなかった。

何を考えてるんだこの人は。

全く状況を理解していない段階から、直ぐ様コブシに訴えるって…。

「ちょっと環さん！ 勝手なことしないで下さい！ これは僕達の問題なんです！ 五月雨荘の規約忘れたんですか！」

互いの内情には無干渉。それが五月雨荘の基本ルールだ。

「やれやれ、冷たいね真九郎くんも夕介くんも。今更他人行儀になるもんでもないっしょ。二人で過ごした熱い夜をあたしは決して忘れてないわよ？」

『勝手な過去を捏造すんじゃないやねえ！』

本日二回目のWツッコミ。

シリアスなムードが崩壊した。

「ま、それは冗談として 君達三人さあ、この前からやけにピリピリしてるよね」

……気付いてたのか。

「こいつ、ってかこいつの後ろにいる奴が原因じゃないの？」

「だったらなんですか。環さんには」

「だーからー、関係ないとか言わない。あたしも結構修羅場くぐってるからさ。こいつがヤバい奴ってのは、最初からわかってたよ。君達が何か、このヤバい奴に関わるようなでかいゴタゴタに巻き込まれてるのもね。だから　　そのでかいゴタゴタをここに持ち込まれたくないんだ」

「……………」

「あ。勘違いしないでね。別に出てけなんて言っていないっしょ。あたしが言ってるのは、共同生活なんだから、無関係とは言えないってこと」

「環さん　　」

「てかぶっちゃけ面白そうだし、あたしにも一枚噛ませろ」

オチをつけやがった。

ただでさえシリアスさに欠ける人なのに……。

いや、緊迫した中でこういう雰囲気を出せることが、この人のパーソナリティーと言えなくもないけどさあ。

さっきのセリフを少しでもカッコいいと感じてしまった自分を恥じる結果となってしまった。

真九郎さんと蝕織も、似たような心境らしく、溜め息を漏らしている。

「ま、あたしのキャラじゃないかもしれないけどさ。ここは任せなさいな」

からからと笑って、立ち上がった奇野と向かい合う。

「さあつてと、一丁やりますかね。おたくは武器使ってもいいですよ。あたしは空手家なんで」

「……へっへっへっ」

奇野は、ベルトのチェーンを外し、腕に巻き付けた。

「ねえ夕介くん。あいつ　奇野って、どんな家系なの？」

この場での勝負を危ぶんだのか、真九郎くんがそんなことを聞いてきた。

「そりゃ、環さんは強いよ。オレよりずっと強い。でも《呪い名》とかだったら、話は別だ。この状況、かなりマズイよ」

「全くもって同意見だね」

忘れがちだが、環さんの戦闘能力は滅茶苦茶凄い。

単純な身体能力でいけば、真九郎くんのみならず、僕や蝕織、夕乃さんだって敵わないのだ。

だが、相手が悪い。

《殺し名》が相手ならまだ分からなかったが 《呪い名》となれば話は別だ。

止めたいところだが、それだけの力が僕には無いし、深淵夢想は調律のため現在部屋の中。真九郎くんもまだ先月の傷が癒えてないから《角》は出せないし、蝕織は紫ちゃんをガードしてる。

手助けは期待できない。

いや、違うな。

勝つだけなら簡単だ。

少なくとも 対面上は。

「んじゃ、行つきますか！」

環さんは腰を落とし、一瞬で奇野との距離を詰める。

「正しい拳と書いて 正拳！」

ギリギリまで引かれた右ストレートが、奇野に襲い掛かる。

「う、うおおおっ！」

それに対する奇野の対応は、僕からみても随分とお粗末だった。もう防御とかそういうのじゃなく、無様に逃げ惑うのみ。チエーンさえも放り出した。

しかし 改めて見ると凄いな、環さんは。

拳が空を切る音だけでわかる。効果音にするなら「ビュオッ！」とかそういうレベルじゃなく、「ザンッ！」て感じ。

「お、おいおい！ なんなんだよこりゃあ！ あんたのそれ、本当に拳かよ！？ もはやハンマーリングしてんのも同じじゃねえか！」

逃げ惑う奇野の至極正当な意見。
しかし今までのキャラ立てから推察すると間違ってる。

「えー、失礼しちゃうなあ。ただの拳だよう。あー、でも確かに、ハンマーって例えはあってるかもね。この前寝返り打ったら、下の床陥没しちゃったし」

「一昨日の夜妙にデカい音がしたのはそれが！」

バトル中にも使命を忘れない僕である。

「ひ、ひいいいいい！」

悲鳴を上げながら、あちこちを避けるや逃げるやの大逃走。
真九郎くんは、奇野を最初に見た時とは違う意味で驚いているらしい。

「…………弱ッ！」

「弱いね」

「弱いですね」

「弱いな」

上から真九郎くん、僕、蝕織、紫ちゃん。

てか、紫ちゃんにまで肯定される弱さってどんだけだよ。いくら『呪い名』が『そういう強さ』とは無縁とはいえ、鍛えなすぎ。

「お、おい！ その仲良し四人組！ 黙って見てないで、何か言ってくれよ！」

「何か言えったって……」

「正直なところ、言葉を無くしているのが現状ですね」

「言葉を無くす！？ この状況で使う言葉といえば『このお姉さんに静止するよう説得』だろ！」

「いや、でもあなた……《十三階段》ってやつなんですよ？ 流れる的に、俺たち敵を助けることになっちゃうんですが」

「困ってる人を助けるのに敵も味方もあるか！ てかマジで死ぬから！ 早く助けてくれ！ あ、いや助けてください！」

ついに敬語になった。

……人類最悪。いくら変な奴を集めてるからって、もう少しくらい人格者を求めてもよいのでは？

「……なあ夕介。事情はわからんが、あいつもああ言ってることだし、もう許してあげるべきではないか？」

「そう！ それを待ってたんだよお嬢ちゃん！ 救世主！ まさに天使！」

「あんたほんとに何しにきたんだよ」

この場にいー兄がいたら確実にするであろうツッコミをする僕。
語り部代行としての義務だ。

「こ、これをあんたら二人へ届けに……来ただけなんだ」

奇野は懐から白い封筒を取り出して、僕に投げる。

「いや、ついでにちょっとかいかけてもいいって言われてたから、ちよっぴり調子こいちまったんだけど……い、いや、それは謝る！ マジでごめんなさい！ 二人だけじゃなく、お姉さんにも、そのお姉さんとお嬢ちゃんにもご迷惑をお掛けしました！」

完全なる平謝り。

環さんも、取り敢えず拳を降ろしている。

「なーんだ。それならさっさと封筒渡しちゃえば、あたしも動かなかったのに」

「す、すみません！　そこは説明不足でした！」

「あー、いいわいいわ。双方ケガ無かったわけだし。ほら、用は済んだっしょ？　とつとつ行きなさいな」

「な、なんと心のお広い！　そ、それでは不肖私、奇野頼知はお言葉に甘えさせていただきまして、ここから速やかに立ち退かせて頂きます！」

かなりの早足で奇野は環さんから離れ、僕らに一人ずつ頭を深々と下げて、五月雨荘の敷地から出ようとす。

「《呪い》は済んだか？　奇野頼知」

すれ違ふ最中、真九郎くん達に気付かれなくらいの小さな声で、奇野にそう呟く。

「戦わずして勝つ。全く見事な手際だよ」

「……へっへっへ、流石にやるね。《零崎》は」

僕にしか見えないように笑い、奇野は五月雨荘を後にした。

「何だっただんたろう。あの人。本当に封筒を届けに来ただけなのかな。その封筒、何が入ってる？」

「さてね。ろくでもないものなのは確かだな」

そのまま僕は、封筒を折り畳んでポケットへ。

「中身見ないの？」

「貰ったのは僕だ」

「いやそれ、夕介さんと俺宛なんじゃ……」

「僕が貰ったものを、僕がどうしようとして勝手」

見せたら見せたで、真九郎くんはまた首を突っ込まなきゃいけないからな。

その後、蝕織、真九郎くん、紫ちゃんを先に部屋へ入らせ、僕は環さんに向き直る。

「一応、ありがとうございました。環さん」

「なーに、大したことじゃないよん」

「ところで……何か身体に違和感はありませんか？」

「？ いや、何も無いけど」

「そうですか。ならいいんです」

「あはは、なにになに？ タ介くんあたしを心配してくれたんだ。でも駄目だよー、蝕織ちゃんが妬いちゃうじゃない」

「あいつの名前を出すんじゃないよ」

本当、こっちが気を利かせてるつてのに。

環さんが去るまでの十分間冷やかされ続けた僕は、静寂に包まれた庭で大きく溜め息をついた。

「まったく、面倒くさくなってきやがった」

「お兄様。《狐》からの封筒には、何が入ってたんですか？」

部屋に戻った僕を、蝕織が待ち構えていた。

「顔が近い。あと腕を掴むな。地味に痛いぞ」

蝕織は「……すみません」と意外にもあっさり身を引いた。

「お兄様を信用してないわけじゃ、ないんですけど」

「……わかってるよ」

五年　いや十年か。

その間のことを思えば、こいつの対応はなんら不自然ではない。僕が蝕織をないがしろにしてきた時間は、それだけ重いのだ。

「それじゃ、開けるとするかね」

ポケットから封筒を取り出そうとする。
しかし、そのタイミングを見計らったかのように、同じくポケットに入っていたケータイが鳴った。

迷ったが、結局蝕織を「少し待ってる」と制し、ケータイを開く。
ディスプレイされた名前　零崎双識。

零崎一賊の長男。

「双兄？」

何だろう。変なノロケ話とかじゃなければいいが。身構えながらも、通話ボタンを押す。

ある意味で意に反し、それは面白い会話ではなかった。

程なくして、通話を打ち切る。

「何の用だったんですか？　双兄さんは」

「……ん。いや、一賊の一人が殺されたらしい」

「あら。報復のお誘いですか」

「似たようなもんだ。……けど、僕たちにとつちや、ちよいと今までとは違うらしい」

「と言つと？」

「その零崎を殺したつてヤツがさ。狐の面を被つてたらしいんだよ」

重苦しい沈黙が、部屋の中に降りた。

「《狐》……ではありませんよね。彼に零崎を殺す実力があるとは思えません」

「ああ。だが、今回零崎を殺したヤツが、人類最悪に関わっている可能性は高い」

だが 問題は理由だ。

いつか零崎一賊に、人類最悪が害を及ぼす。そう考え、僕は人類最悪を追ってきた。

僕がいる以上、あいつには少なからず、零崎と《縁》があるのだから。

だが、もしヤツが零崎一賊を襲うとしたら、その目的は何なのだろう。僕を引つ張り出すためには、事がデカ過ぎる。

……ま、今は考えなくていいか。

重要なのは、ヤツが零崎一賊に危害を加えたということだけだ。

「行くぞ蝕織。そいつに会えば、人類最悪の目的がわかるかもしれない」

「待つてくださいよ。狐のお面だけじゃまだ断定は出来ません。その一賊殺し、他に特徴とかないんですか？」

「それこそ知っても知らなくても同じことだろうが。まったく、面倒くさいな……。えーっと、仮面の他に浴衣を着て……。ああそうそう」

橙色の髪をしてるんだってさ。

蝕織の顔が、さっと青ざめた。
感情らしい感情は全て、恐怖に塗り替えられている。

「お、おい蝕織。どうした？」

「……MS-2」

「は？」

蝕織は口元に手を当て、早口で単語の羅列を呟き出す。

「西東天、ER3プログラム、引き継ぎ、戯言遣い、哀川潤、代替
なる朱、橙なる種………」

「な、なんだよ蝕織。どうしたんだよ！」

「まさか、いや、それなら説明がつく……《狐》の敵、それが戯言
遣いなら、全部噛み合う。《縁》が足りないどころの話じゃない。
こんなの『出来すぎてる』じゃないか……！ けど、零崎一賊を襲
う理由なんて、他にあり得ない。でも、まさか本当に《真心ちゃん
》を……っ？」

「おい蝕織！」

僕が叫ぶと、蝕織はようやく呟きの嵐を止めた。

「どうしたんだよ蝕織。お前今……」

「……お兄様」

蝕織はきつと僕を見上げる。

「今すぐ双兄さん達を止めてください！」

「は、はぁ？」

何を言ってる。そう言い返そうとして、口を閉じる。
蝕織の目は、明らかなる焦燥に駆られていた。
冷静さも何もなく、ただ目の前の危機を恐怖してる。

「このままだと、みんな終わる！ 殲滅される！ 駆逐される！
みんないなくなってしまう！」

真心ちゃん 《人類最終》に！

人類最終。

その名の意味を痛感するのは、僅か一週間後。

けどその頃には、物語はもう手がつけられないまでに加速していた。

今にして思えば、僕の中の何かが変わってしまったのもまた、この時だったのだろう。

休息の傷跡・SIDE・SAMIDARE・SOU (後書き)

遂に来訪する最終。

戯言シリーズのストーリーももう佳境ですね。

ちなみに今回、紅・kure-nai側のストーリーは少々変わります。

しかし、星奈さんもちゃんと出ますし、真九郎ともバトるのでご安心を。

次回は兄妹VS最強の音使い……お楽しみに。

さよなら

『零崎一賊は、ほぼ殲滅された』

あれから一週間。

双兄の報告を聞いた時、僕は不甲斐なさから、ケータイを握り潰しかけた。

『夕識くん いや、蝕織ちゃんの警告を聞いてから、何人かに当たってはみたんだが、完全に止めることが出来たのはリルだけだった。』

……すまない。長男として情けない限りだよ』

「双兄が、謝ることじゃないよ」

くそつ、僕は何をしてたんだ！ 僕がしてきたことは、一体何だったんだよ！

やり場のない怒りを、手近な電柱にぶっつけかける。

しかしそれは、蝕織の両手で止められた。

「……蝕織」

「お兄様」

そのまま手を包むようにして、

「今は、今できることを」

と言った。

「……ああ、すまない。取り乱した」

しっかりしやがれ、僕。

今すべきことは、八つ当たりじゃない。

哀川さんと連絡が取れない以上、僕らだけで片付けるしかない。

それにもし、今零崎を殲滅せんとする相手が、蝕織ちゃんの言う』

真心ちゃん』なら、近い内に哀川さんとも出会っはずだ。

橙なる種 想影真心。

哀川潤の、後継機。

僕も、橙なる種という通り名だけは聞いたことがある。

蝕織が彼女と出会ったのは、僕が行方を眩ました空白の五年間の中らしい。

蝕織は自らの女王たる、くなぎーが御執心の『いーちゃん』がどれほどの人間か確かめるべく、蝕織がERプログラムに参加していたのは、僕も既に聞いた。

その際に蝕織が、いー兄と同じく出会った『友達』が、想影真心だったそうだ。

記録的にはもう死んだ人間らしい。

蝕織曰く、いー兄の性格が螺曲がった原因の一つ。

人類最悪が何故、そんなロストテクノロジーを引っ張り出してきたかは、いー兄との『縁』を確定的にするためだろう。

零崎一賊を襲う理由についても、理解済みだ。

様子を聞く限り、想影真心は何者かに（恐らくは時宮の誰かか、あの奇野頼知だろう）操作されている。

だが哀川潤クラスの人間を強引に操るとなれば、生半可な技術では足りない。

つまりは、起動テストだ。

零崎は家族を殺せば殺すだけ寄ってくる。

これだけ都合のいい相手はいまい。

だから今、僕らは双兄の力を借り、真九郎君たちから離れて行動している。

みんなを、零崎を存続させるため。

「双兄は大丈夫なの？」

『私は公式的には、早蕨との戦いで死んだことになってるらしいからね。今のところは音沙汰無しだ』

「そうか。引き続き警戒はしてて。

それで 残った零崎は？」

『うん。私にリル、夕識さんと蝕織ちゃん。

人識と伊織ちゃんについては、最近連絡があった。この二人なら、わざわざ敵に向かっていくような真似はしない筈だ。

トキは連絡が無いけれど、恐らく無事だろう。彼はこういう戦いに最も縁がない零崎だからね』

「大分……削られちゃったね。

軋兄も、か」

『アスは連絡が途絶えてから日が浅い。

ひよっとするとまだ生きているかもしれないが 可能性は低いだろっね』

苦虫を噛み潰したような声。

双兄にしては珍しい。

それだけ、切迫した状況ということだ。

「わかった。

曲兄に釘を刺したら、軋兄を探してみるよ。少しでも可能性があるなら、捨ててはおけない」

『ああ、頼む。こちらも急ぎ、他の家族の生死を確認するよ』

どちらからともなくケータイを切る。

「やじと」

僕と蝕織の足が止まる。

僕らの眼前には、我が家と言っても過言ではない場所 『ピアノ
バー・クラッシュククラシック』のあるビルが鎮座していた。

「……本当に、曲兄さんが動くとお考えで？」

「いや、正直言って、あまり考えてない。あくまで念のためさ」

ここまで事態が絶望的な中で、曲兄が動く可能性はほぼ皆無だろう。

いや、動いたとしても意味がない。

最初こそすれ、今更曲兄が何をしようと、事態はまるで変わらないのだ。

だが　あの人の行動はまるで読めない。

万が一を考えて、釘を刺して置くのが今回の目的。

曲兄は、これからの零崎に必要な人だから。

意を決し、蝕織と二人でビル　正確には棟内にあるクラッシュク
ラッシュクへと入ろうとする。

だが、その必要はなくなった。

「ん？ 夕識に蝕織か」

僕らが行くまでもなく、曲兄がビルから出てきたのだ。

軽く出鼻を挫かれた僕らは、驚きに目を見開いて、曲兄を見る。

曲兄はそんな二人分の視線を意に返さず、

「どうやら、お前らのわだかたまりは解けたらしいな。悪くない」と言った。

「まったく、前にも言ったが、来るなら連絡くらいは入れろ。お前達はいつも気紛れ過ぎる」

「……あんたにや言われたくないよ。曲兄」

正味な話。

「それで、今日はどうした。『橙色の暴力』の件なら、もう僕も認知しているところだが」

「ああ、知ってるなら話は早い。曲兄には関係が薄いだろうけど……」

言いかけて、僕は曲兄が右手に持つトランクに気が付いた。

ちょうど、ハンディな楽器一つが収まりそうなくらいの大きさだ。

「……曲兄」

身に纏うコートの中、深淵夢想の位置を確かめる。

「何処へ、行くつもりだ？」

僕の質問に、曲兄は相変わらず、感情が推察出来ない顔のまま、起伏の無い声で答える。

「なに　　少しばかり、零崎を始めるのも悪くないと思ってな」

「ダメです！」

その意味するところを察したのか、蝕織は叫ぶ。

「真心ちゃん……いえ、《人類最終》はもう誰かが勝てるなんて存在じゃありません！」

ただ全てを終わらせる、物語を閉じるだけの存在なんです！　いくら曲兄さんだからって、敵うようなものじゃありません！」

「だからどうした。相手が強い、ということが、僕の止まる理由になるのか？」

曲兄の淡々とした言い回しに、蝕織は怯んだ。

それを見て僕は、声の調子を低くして言った。

「……《橙色の暴力》の力はわかってんだよな」

「実際に見てはいないがな。だが、ほとんどの零崎が殺されてしまったのは知っている」

「なら尚更だ。あなたが今さら出て行って、何の意味がある。双兄でさえ、報復でなく、一賊を守るために動いてるんだぞ」

「アスが」

僕の言葉を遮り、曲兄が言う。

「僕のところに連絡を寄越してきた。

『俺はこれから死に行く。お前は零崎の名を捨てる』だそうだ。馬鹿馬鹿しい話だとは思わないか？

僕が 零崎曲識が、家族がこんな事態に陥ってまで、動かないとも思っただろうかな」

やはり抜けているよ、アスは。

そう呟く曲兄の表情はいつもと同じように淡白で、だがしかし、いつもの表情とは確実に何かが変わっていた。

「軋兄さんを助けに行く気ですか」

「言つに及ばずだろう、僕は零崎だ」

「……随分と、曲兄さんらしくありませんね。『逃げの曲識』の異名が泣きますよ」

「僕らしさというのは、家族の危機にまるで動じず、暢気にピアノを弾き続けていることだろうか？」

暗に示された覚悟に、今度は蝕織だけでなく、僕もたじろいた。

「だったら、そんな僕らしさはいらない。らしくないことを、してやるまでさ」

「……………」

愕然とした、と思う。

あの曲兄が、他の誰でもない曲兄が、こんなことを言うなんて。

その普段にはない威圧感、それを犇々と感じる。

例え変わり者と言われようが、菜食主義者と言われようが。

この人、零崎曲識はどうしたところで 間違いなく零崎一賊、殺人鬼なのだ。

「……ダメだよ」

だがそれでも、僕は食い下がる。

食い下がらなくてはならない。

この人を、止めなくてはならない。

「あなたに死に行く気がないのはわかってる。

あなたが生きるために、軋兄と『橙色の暴力』のところに行く気なもの、わかってる。

でも、それとこれとは話が違う。

まだ避けられる死に、むざむざ飛び込んでいくあなたを、行かせるわけにはいかないよ、曲兄」

「ならばどうする気だ。僕に、アスをこのまま見捨てると言っのか。だとすれば夕識に蝕織。

いくらお前達と言えども、僕は憤怒を覚えるざるを得ない」

「軋兄を見捨てるなんて言ってない。

ただ、それは僕達の役目だと言ってるんだ」

「……何？」

「私達が行くと言っただんです、曲兄さん。あなたが死地に赴くことではない。私達が軋兄さんを助けに行けば、全て事足ります」

「……正気か。事情はわからないが、『橙色の暴力』の危険性を一番わかっていたのはお前達なのだろう？」

何故お前達が、僕の代わりになるというんだ。

自分を誇張するのは好きじゃないが、お前達の力は例え二人がかりだとしても、僕には及ばない。

そんな代替に意味は無い。むしろ逆効果だ」

「上等。僕らより、あなたの方が価値があるって意味だろ、それは」

その言葉に、曲兄は僅かばかり眉をひそめた気がしたが、構わず僕

らは続ける。

「あなたは、これからの零崎に必要な人です。もし軋兄さんを助けられなくて、私とお兄様が死んだとしても……」

「曲兄に双兄、ペリルポイント、伊織ちゃん、人兄……は協力してくれないかも知れないけど。」

これだけいれば、零崎は大丈夫だ。

だから曲兄は

「

「黙ってお前達以外の家族を守れ、か？」

曲兄は蝕織の言葉を遮り、静かに目を伏せる。

「変わったな二人とも。」

夕識は数週間前に会ったばかりだが、あの時の脆さが微塵も無い。蝕織も幾分かアンバランスな面があったが、それも消えた。

若さは力だな。見ない内にころころと変動し、磨きがかかっていく。

だが

曲兄は一瞬でトランクを開き、中から黒光りするリズム楽器
対のマラカスを取り出した。

「あまり図に乗るものじゃない」

じゃらん！ じゃらん！

と小気味のいい音が、マラカスが振られる度に鳴り響く。

『 つー！ 』

僕と蝕織は深淵夢想と漆黒残響を構え、即座にその音を相殺した。

「曲兄さん………！」

「お前達の言い分はわかった。
しかし止めたいのなら、お前達で止めてみるんだな」

突き放すような言い方から、僕らは悟る。

曲兄は止まらない。

僕らが何を言ったとしても、僕らがどれだけ正しかったとしても。

唯一の方法は、曲兄の言った手段しかない。

「……………」

「……………」

無言で、僕は深淵夢想を口元に触れさせ、蝕織は漆黒残響を上段に掲げ、舞いの体制を取る。

「ちってちるよ」

「やっつてあげますよ」

絶対に負けられない　　なんて、月並みな話だけれど。

でもそれ以外に、何の理由があつたと言つのだらうか。

曲兄を、行かせてはならない。

だから、僕らが止める。

ただその一心で、僕らは曲兄と相對する。

「……貴方がこんなに分からず屋だとは知らなかつたよ」

「奇遇だな。僕もお前達がここまで身の程知らずとは知らなかつたよ」

「口で言つてもわからないなら、私達の音で無理にでもわからせてあげます！」

「悪くない。僕の心をお前達が縛れるか否か、試してみるがいい」

それでは一曲。

「零崎を奏でよう」

「零崎を御見せしましょう」

演奏 開始。

音使いの武器はあくまでも『音』のみであり、僕や蝕織のような楽器は物理武器という考え方もまた、『音』で戦うという前提のもと、生み出されたものに過ぎない。

操るか、操られないか。

一定クラス以上の音使いになれば、勝利条件はそれに尽きる。

音による衝撃波、という手段もあるが、今回に限っては無理だ。

僕ら三人はあまりに互いを知りすぎている。

いかなる状況下で使われようと、回避出来る自信と経験がある。

よって、僕らの勝利条件は『曲兄を操る』。

曲兄の勝利条件は『僕らを操る』。

有利なのは確実に僕と蝕織だろう。

音楽は元来、かなりの精密動作だ。

一人ならいざ知らず、二人同時ともなれば話は別。

逆に僕らは、全く違う音楽を二方面から曲兄に浴びせることができるのだ。

大丈夫 分の悪い勝負じゃない。

「作品NO . 2 . 3 . 1 4 . 2 7 . 3 2 . 6 5 . 9 9
曲』 『虹の七色』」 『混成組

「作品番号 . 式 . 肆 . 漆拾壹 . 参拾伍 . 陸拾捌 . 玖拾玖
組曲』 『花朝月夕』」 『混成

出し惜しみはしない。

僕らがそれぞれ持つ『混成組曲』 それら二つを使い、同時に曲
兄を操りにかかる。

「ふむ。本当に腕を上げたものだな。二人とも」

じゃらん！ じゃらん！ と手元のマラカスを鳴らしながら、曲兄は言う。

相変わらずのポーカーフェイスだが、それでも曲兄からすればつらいはずだ。

支配権は、こちらが六割といったところか。

悪くない。このままいけば、押し切れる。

まして、曲兄が使っている楽器はリズム楽器であるマラカス。

恐らく、音楽と自分の体力の持続性を重視したのだろうが、精密な音楽を使うのであれば、笛や舞のステップが勝っている。

あの手の楽器は、どうあってもリズムが単調になりがちだ。

それでも僕らのリズムに合わせてくる曲兄はさすがと言わざるを得ないが、時間の問題だろう。

と思っていた。

「まあ　　発展途上段階での話だが」

『なっ！？』

マラカスの音色の勢いが僅かに上がると、支配率が変動する。

力関係が一気に五分五分まで引き戻されたのだ。

（僕と蝕織の二人がかりでもこれか……）

（流石は曲兄さんですね……、滅茶苦茶です）

しかもいつもと変わらない涼しい顔で。

感情が表に出ていないだけ　　ではないだろう。

単純な実力の差。

僕らが相手をしているのは、僕らの師にして本物の音使い
《少女趣味》 零崎曲識。

『……………』

このまま続けられれば、押しきられる。

長いもので100時間以上の演奏時間を誇る曲兄のレパトリー。

それを奏で切るのに余りある体力を曲兄は備えている。

僕はもちろんのこと、蝕織でも着いていけるものではないだろう。

ならば、

ほぼ一瞬で互いの意思を疎通し、次の瞬間、既に僕達は動いていた。

僕はそのまま演奏を続ける　　が、そのスピードを約三倍に引き上げ、操作速度を早める。

蝕織は逆に演奏を止め、踏み込みから、曲兄との距離を詰めた。

「！」

曲兄はさすがに目を見開く。

だがそれこそ狙い通りだ。

僕と蝕織の操作能力は、二人合わせてやっと曲兄と互角かそれよりやや下。

そして僕と蝕織の操作能力は互角。

蝕織が演奏を止めれば、即座に僕ら二人は操作される。

だがそれは『直ぐに』ではない。

少なくとも、数秒のタイムラグはある。

ペース配分を考えないのなら、数秒間だけ音を相殺するだけでいいのなら、僕にもできる。

演奏で勝てないなら、演奏と白兵戦の両方で攻めればいい。

蝕織の攻撃が決まれば、いかに曲兄と言えどダウンせざるを得まい。

例え蝕織の操作が間に合ったとしても、その瞬間に僕が動けばいい。

蝕織の操作を僕へと切り替えることは、いくら曲兄でも瞬時には出
来ない。

大丈夫だ、止められる。

「見事だな」

曲兄が、ぼつりと呟いた。

小さく、だが曲兄に似つかわしくない、感情の籠った声で。

曲兄は片手のマラカスを、飛び掛かる蝕織に向けた。

「……………がつ!?」

空気が歪み、振動の弾丸が蝕織を撃ち抜いた。

(音の衝撃波!?)

曲兄が使ったのは、確かに音の衝撃波。

しかし、僕の操作は相殺されたままだ。

よく見ると、1対のマラカスが、全く違う動きをしているのがわかった。

愕然とする。

曲兄は『操作』を右手で、『衝撃波』を左手で使い分けたのだ。

しかも片手でありながら、精度をまるで落とさぬままに。

「……う、ぐっ!!」

そんな僕の心の揺らぎを見逃さず筈がなく、曲兄は僕の身体を一気に支配した。

操作された僕の身体が、奇妙な体勢でアスファルトに叩きつけられる。

「　　っ!!」

悔しさに歯を碎かん勢いで噛みしめる僕の、声にならない叫びが、演奏終了を告げた。

「やれやれ……、もう何度言ったかわからないが、本当に腕を上げたものだな。二人とも」

地を這う僕らの頭上から、曲兄の声が聞こえてくる。

「『少女趣味』が無ければ、もしかしくとも負けていたのは僕だっただろう」

「『少女……趣味』？」

あのマラカスのことなのだろうか。

だとすれば、まずそこからして、曲兄の決意が現れている。

曲兄は双兄や軋兄のように、武器に名前をつけない。

楽器はあくまで楽器である　というのが曲兄の基本姿勢だからだ。

恐らく、積雪さんにも頼んだのだろう。

今までの戦いを鑑みるに、相当クオリティが高く作られている。

もはや小さいピアノフォルテだ。

……そして、それほどの楽器を求めるほどに、自分のポリシーを捨

てるほどに、曲兄は本気だったのだ。

本気で 此度の戦いに臨むつもりだったのだ。

「さて、お前らには悪いが、念のため気絶してもらおうぞ。また相対されては、さすがに分が悪くなる」

地を這う僕らの耳に、曲兄の足音が近づいてくる。

「曲、兄……！！ アンタ、本当に、行く気なのか……っ！？ 僅かな生存の可能性に賭けて、死ぬ、しかない戦いに、行く気なのか……？」

「僕は同じことを何度も言うのは好きじゃない。それに、死に行くつもりは毛頭ないさ。

僕は生きるために、そこへ行くんだ」

だから、と曲兄は続ける。

「お前達はもう僕に構うな。

お前達は僕と違って、友とする者は大勢いるだろう。

今の演奏 率直に言わせて貰えば、素晴らしかったぞ。

僕に及びこそしなかったが、僕には決して作り出せない、様々な思

いが積み上げられた音楽だ。
その才気を風化させるな。
お前達の音楽は」

僕に使うためのものじゃない。
僕よりもっと価値のある誰かに聞かせるものだ。

曲兄のその一言が、僕と蝕織の心を奮立たせた。

「　　っ!!!」

手を床に付き、硬直した身体を揺り動かす。

操作は確かに続いている。その証拠に、身体を動かす度、激痛が全身を駆け巡っていた。

僕は現在、感覚神経から全てを支配されている。
感覚の全てがダイレクトに集中する脳に負担がかかっているのだ。

蝕織も同じだろう。

額に汗を浮かばせながら、痛みに耐えている。

だが、僕は倒れなかった。

音による操作を、強い感情で無理矢理押さえ付けた。

強い感情　それは、怒りだった。

「……………」

曲兄は、今度こそ誰から見ても分かるくらいに、驚いていた。

見開かれた瞳には、不恰好ながらも立ち上がる、僕らの姿があった。

『 っけんな』

音の代わりに、気の遠くなるような激痛が感覚を支配する中、僕と蝕織は同時に声を張り上げ、叫んだ。

『 ぶざけんなよ、てめえ!!』

実際に、そこまでの大声は出なかったかも知れない。

だがそれでも、操作されている状態からは、考えられないトーンのシャウトだった。

「もつと、大切な人に使え？ その才気を風化させるな？ どの口が言いやがるんですか！」

「戯言ぬかすな！ 死ぬ前の手向けのつもりだか何だか知らねえが、んなもん嬉しくも何ともねえ、不愉快にしかならねえんだよ！！」

不愉快だよ。

たまらなく不愉快だ。

ああ蝕織、身を持ってようやく理解したよ。

多分、僕が今曲兄に抱く気持ちは、お前が僕に抱いていたものと同じだ。

成る程、こいつは腹が立つ感情だな。

大切な人に、蔑ろにされる気分ってのは。

「私たちだつて、馬鹿じゃありません……っ！ 曲兄さんが、中途半端な気持ちでそこに行くんじゃないつてことも、無駄死にを望むわけじゃないつてことも、わかってます……！」

「……なら」

「だが、それは『貴方』の事情だ！ 『僕ら』が貴方を止めることには、何の関係もない……！」

曲兄の言葉を遮つて、僕らは吠えた。

自分を省みず、ただ曲兄を繋ぎ止めることに必死だつた。

「曲兄、確かに僕には、仲良しな人がたくさんいる。守りたいつて思う人も、たくさんいる。」

殺人鬼がこんなことを思うのが間違いだつて分かつてても、これが『僕』だ。

大切な人を傷つけたヤツだけを殺す。

エゴイスティックと言われようが、僕は大切な人を守り続けたい」

「……私はお兄様ほど、普通の世界にはいられません。ただ私は、お兄様と同じ道を歩きたい。」

お兄様が、大切な人を守りたいと言つのなら、私もそうします。

けど私だつて、お兄様の意思に関わらず、守りたいと思う人く

「らしいます」

痛みを和らげようと、拳をきつく握り締める。

曲兄はまた無表情だったが、その実は困惑しているのだと思う。

何故か、そう感じた。

「何で、曲兄さんは……、わかってくれないんですか？ もっと大切な人の、ために使えなんて、私たちにとってはこの上ない侮蔑なんですよ……っ!？」

「貴方は『死に行く気』はない……。でもそれと同じくらいに、心の何処かで『死にたい』と思ってる。

「僕は、それが我慢出来ない……っ!」

「何が言いたい」

『……っ、まだわかんないのかよ!』

何処までも検討外れな曲兄の問いに、僕はまた声を揃え、答えた。

『僕（私）たちは、大切な人を守りたいんだ！！ 守りたいんだよ！！ それはその内一人でもこぼれ落としてしまったら、もうそれに意味はないんだ！！』

なんで、何で貴方は、自分をそんなに無価値だと思えるんだよ！！ 僕（私）たちを、拾って、家賊をくれて、音楽を教えてくれてた貴方を、僕（私）たちが気にかけないわけないだろ！！』

ありつたけの感情を吐き出し、曲兄にぶつける。

曲兄と出会ってから今まで、思わなかった日はなかったくらいに、ずっと思い続けていた言葉を。

『貴方 零崎曲識だって、私たちの大切な人なんだよ！！』

僕は憤怒を、蝕織は涙を浮かべ、曲兄を怒鳴りつけた。

操作に逆らった代償に、拒絶反応でぐらぐらする頭を奮い立たせながら。

「……………」

曲兄は、今となつては腹が立つ無表情を刻んだまま、僕らに近づいてきた。

近付いて、両手で僕らを抱き締めた。

『 …… っ！ 』

多分、僕達がこれ以上に驚くことは、もう二度とあるまい。

あの、曲兄が。

一賊の中でも変わり種で、人兄をして『あの人の行動に歩み寄りの要素はまるでない』とまで言わしめる曲兄が。

不器用で、ぎこちない動きながらも、誰かを抱き締めようなどと。

許容不可の衝撃にみまわれた僕と蝕織に、曲兄は、

「ありがとう」

と行ってすぐ、

「すまないな」

僕と蝕織の頭目掛けて、あのマラカスを降り下ろした。

頭蓋が奏でた小気味のいい音を聞きながら、僕と蝕織の意識は闇に落ちた。

「一つ、お前らは間違っている。

……夕織、蝕織。お前達のように、先がある奴らこそ、長生きすべきなんだよ。

早死にすべきは、僕のように終わってしまった男なんだ」

結局僕らは、そんな形で、曲兄からの置き土産を押し付けられた。

もっとも、押し付けられたと気付くのですら、何もかもが手遅れになった後だったのだけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4565k/>

零崎夕識の人間生活

2011年10月3日18時37分発行